第四巻
小山内薫全集
春陽堂

1 軽装せる先生

2　自由劇場の「夜の宿」初演

3　自由劇場の「夜の宿」再演

4　築地小劇場の「夜の宿」

5 和服に寛いで

…クス」にて

7　同じく「ヴオクス」にて

8 「子供の為の芝居」見物

9 「子供の爲の芝居」の舞臺で

小山内薰全集 第四卷 目次

寫眞目次

1 **輕裝せる先生。**――昭和二年の夏。

2 **自由劇場の「夜の宿」初演。**――明治四十三年十二月、於有樂座。

3 **自由劇場の「夜の宿」再演。**――大正二年十月、於帝國劇場。

4 **築地小劇場の「夜の宿」**――大正十三年十月以來數回公演。

5 **和服に寛いで。**――大正六七年、市村座時代。

6 **モスクワ「ヴオクス」にて。**――一九二七年十一月、建國十年祭に國賓として招かれて露西亞に再遊し、於對外文化聯絡協會(BOKC)。右より會長カメネワ夫人、米川正夫氏、先生、鳴海氏、秋田雨雀氏、一人措いて尾瀨敬止氏。

7 **同じく「ヴオクス」にて。**――右より鳴海、米川、秋田、先生、アルキン、ノヴアミルスキイの諸氏。

8 **「子供の爲の芝居見物」**――十二月十三日出立の日。見物席、前より四列目右寄りに、先生、秋田、米川、鳴海の諸氏あり。

9 **「子供の爲の芝居」の舞臺で。**――同日歡迎のための紀念撮影」前列より、三人目米川氏、劇場支配人、秋田氏、劇場主宰者ナタリア・サアツ、先生、鳴海氏、イリユウシヤその他。

10 **左團次の部屋。**――大正十年頃。樂屋を訪れた先生。

決闘

一

朝の八時は、土地の軍人や官吏や避暑の旅客が、蒸し暑くて寢苦しい夏の夜の汗を洗ひに、いつも海水浴に來る時刻である。

イワン・アンドレヰッチ・ラアエウスキイといふ、二十八になる、瘦せた、ブロンドの髮の毛を持つた青年が、上靴を穿いて、大藏省の官吏の制帽を冠つて、海水浴に來た時には、もう懇意な連中が大分海岸に集まつてゐた。その中に、日頃親しくする軍醫のサモイレンコオもゐた。

短く刈り込んだ大頭、猪首、赤ら顏、大きな鼻、毛深い眞黑な眉、灰色をした頰髭、恐ろしい肥り方、三軍を叱咤する將軍のやうな聲、これらを以てちよいと見ると、サモイレンコオは、口やかましい、下劣な、成上り者のやうに見える。ところが二度三度と附き合つて見ると、案外この顏が愉快になつて來る、美しくさへ見えて來る。

實際、彼は優しい親切な男である。彼は町の人の誰とも仲が好い。金を貸してやる、診察をしてやる、媒酌の仲人になつてやる、喧嘩の仲裁をしてやる。野遊會を開いては、羊の肉を揚げる、旨い魚のスウプを拵へる。始終人の爲に忙しい、始終人の爲に何か好い事をしてやつてる、さうして始終何か嬉しい事がある。概觀すれば、彼は完全な人間である。ただ彼は二つ缺點がある――一つは、どういふ譯か、親切な風を見せるのを憚つて、わざと傲慢冷酷な態度をする事、一つは「閣下」といふ稱號を、常に部下の看護卒達に眞から要求するといふ缺點。

『サモイレンコ君、ここにかういふ問題があるんだが、君、答へて見れないか。』二人水へ這入ると、ラエフスキイは先づ口を切つた。『假に君が一人の女に惚れるとするね、その女と好い仲になるとする、二年以上その女と同棲して見て、さてその女が厭になつたとする、かういふ場合に君はどうするね。』

『それは簡單な問題だ、「何處へでも出て行け」――それでおしまひさ。』

『そりや口でさういふのはやさしい。が併し、女の行き所が無かつたらどうする。女に親類もなく、金もなく、働く力もないとしたらどうする……』

『よし、さうしたら、女に五百ルウブル叩きつけるか、毎月二十五ルウブル宛遣る事にして追つ拂ふさ。簡單なもんだ。』

『さうだ、五百ルウブル金かあればね、或は又毎月二十五ルウブル宛送ればね。併し、若し女が教育があつて、自尊心に富んでゐるとしたらどうする。それでも君は婦人に金錢を突きつけるやうな事を敢てするかね。若しするなら、如何なる形式を以てするね。』

サモイレンコオが何か答へようとした時、高い浪が寄せて來て、二人の頭の上へ被さつたかと思ふと、岸に碎けて、水音凄まじく、岩を越えて引いて行く。二人は水を出て着物を着始めた。

『厭になつた女と一緒にゐるのは實際辛いものさ。』と、サモイレンコオは長靴の中の砂を振ひ出しながら、『併し、君、それも人道の見地から考へて見んければならんよ。若し僕にさういふ事が起つたら、僕は厭になつたといふ風を素振りにも見せないね、そして死ぬまで女と添ひ遂げるね。』と言つたが、急に自分の言つた事が氣恥かしくなつて、『僕にして見ると、世界に女なんか一人もない方が好い、女なんか滅びてしまへだ。』と言ひ直す。

着物を着てから、二人はカフエエへ行つた。サモイレンコオはカフエエを自分の家のやうにしてゐるので、食器なども自用のが特別に備へてある。毎朝彼の前に出るものは、盆に乘つた一杯の珈琲と、丈の高いコップで氷水が一杯と、小さな盃でコオニヤックが一杯とである。彼は先づコオニヤックを飲む、それから熱い珈琲を飲む、それから氷水を飲む、やがていつものやうに目がとろんこになると、兩手で頬髯を撫でながら、海をぢつと見て『どうも素敵な景色だ。』と言ふ。

長い一夜を布團に輾轉反側したラアエフスキイは、くたびれて眠くなつて來た。海水も、珈琲も、少しも彼の氣を緊張しなかつたのである。

「さつき話した問題に歸るがね、アレクサンデル君。」ラアエフスキイは暫く默つてゐた跡で、又かう言ひ出す。「僕はなんにも君に隱さない、君には親友として總ての事を忌憚なく告白する。僕とナヂェダとの關係は愚劣だ……甚しく愚劣だ。願はくば僕の私事を以て君を惱ます事を許し給へ、僕はこの重荷を負うてをるに堪へんのだから。」

ラアエフスキイの告白の何たるかを推測して、サモイレンコオは目を落とすと、指で卓を叩き初めた。

「僕は二年間あれと一緒に暮らしたんだ、そして、今ではもう少しもあれを愛してをらんのだ。」と、ラアエフスキイは言葉を次いで「いや、寧ろかう言つた方が好い。あれと僕との間には初めから愛が無かつたんだ、それは近頃になつて分かつて來た……この二年間僕は自ら欺いてゐたんだ。」

ラアエフスキイは卓の眞ん中を見詰める、爪を噛む、それからカフスをいぢる、これはいつでも彼が話をする時の癖である。

「この際君が僕を助ける事の出來ないのは、僕よく知つてゐる。併しね、君、僕のやうに失敗ばかりしてゐる無用な人間はね、言語の内に重大の慰藉を見出すものなんだ。僕は僕の犯した行爲を告白し

なけりや氣が濟まんのだ。僕の愚劣な生涯に對する說明や辯解を論文か創作の中に見出さなければ氣が濟まんのだ。例へば、吾人貴族は墮落しつつあり而して云々といつたやうな工合にね。ゆうべも『トルストイの言ふ事は本當だ、どうしても本當だ。』といふやうな事を夜中考へて、それで自分で自分を慰めたよ。これが慰安になるんだ。實際、君、トルストイは大文豪だね。』

　毎日讀まう讀まうと思ひながら、まだ一度もトルストイを讀んだ事のないサモイレンコオは、當惑して、『さう、他の作家は想像で書くが、彼は自然をその儘に寫すね……』

『ああ。』とラアエウスキイは吐息をついて、『吾人は文明に依つて、吾人自らを害なふ事幾何ぞやだ。僕は或人間の妻君に惚れたんだ。女も僕に惚れたんだ……初めの内はキッスだ、蜜のやうな晩だ、誓ひだ、スペンサアだ、理想だ『社會的權利』だ……なんのと言ふが、みんな虛僞さ。現實に於いては、二人で女の亭主を捨てて逃げたんだ。人の亭主を捨てて逃げながら、我と我を欺いて、吾人は人生の空漠から逃げたのだと思ふ。併しながら、人生の空漠は却つてこれから始まつた、それもこれも皆自業自得さ。コオカサスの土地と人間とに馴れるまで、僕は官服を着て職を執らなければならなかつた。やがて、幾らかの土地を買ふ、額に汗して働く、葡萄を植ゑる、地面を耕す、それからまだ色んな事をする筈だつた。君にして若し僕の地位にをるなら、或は君の親友、動物學者フォン・コオレン君にして若し僕の地位にをるなら、恐らくナヂエヂダと三十年は同棲するだらう、さうして立派な葡萄園と

ーキヂミャヂンの王葡萄畑を子孫に遺すだらう、然るに僕は、ここへ着いた第一日に既に失敗して了つた。町は堪らなく暑い、退屈だ、寂しい。野原へ出れば、何處の叢にも、どの石の下にも、蛇や蠍がうようよしてゐる。野原の向うは山か荒地で……もうその先にはなんにも無い。可笑しな土地の人だ、可笑しな自然だ、貧弱な生活だ。毛皮の外套を着て、ナヂェジダと腕を組んで、暖い國を夢見ながら、ネフスキイ通りを散歩するやうな事は、ここではどうしても出來ない。この土地では總ての人が貧困に奮闘しなければならないのだ、然るに僕は戰爭には極めて弱い……憫むべき怠け者だ。僕は、僕が勞働生活や耕地に就いて抱いて來た空想は煙のやうなものだといふ事に直ぐ氣がついた。戀に關しては、スペンサアを讀んで、男の為に世界の果まで來るやうな女と同棲する事は、そんじよそこらのアンフィサやアクリイナと同棲するより、もつと無趣味なものだといふ事を主張しなければならない。火熨斗の匂も同じだ、白粉や化粧水や帶のくつた皺の匂も同じだ。毎朝の捲髪紙も同じだ、そして自ら欺くのも同じだ。」

「けれども一家に火熨斗が無かつたら困るだらう。」と、ラアエウスキイの話の率直なのに顔を赧めながら、サモイレンコが言ふ。「君は一體今日どうかしてゐるのだ。ナヂェジダ・フエドロワさんは、立派な、教育のある婦人だ。君は又多くの男子の内で最も傑出した才人だ。これをしも好配偶と言はずして何が好配偶であらう。成程、君等は正式に結婚はしなかつた」と言つて、あたりを見廻して聲を潜め、

『けれどもそりや君の罪ぢやない……それに又、吾人は古い習慣を退けなければならん、吾人は近代思想と同じ水平線の上に立たなければならん……僕は僕自身として自由結婚を是認する……然り、是認する……併し、一旦婦人と一緒に生活を始めた以上は、最後までその婦人と生活を續けなければならん。』

『愛が無くてもか。』

『まあ僕の言ふ事を聞き給へ。』と、サモイレンコオは遮ぎつて、『八年ばかり前に、この土地に一人の事務官がゐた、老人でね……非常な才子だつた。この人の常に言ふには、「夫婦の間に最も肝要なものは忍耐である」とさ。どうだね、ワアニヤ。愛ではない、忍耐だといふんだぜ……愛は決して永く續くものぢやない。君は二年間愛で生活して來たんだ、ところが今君の家庭は、君の總ての忍耐力を呼び起して、それに平均を取らせて行かなければならん時代に到達したんだ……』

『君はその老事務官を信ずるさ。』と、ラアエウスキイは口を返して、『併し僕はその言葉を以て全くノンセンスだとするね。その老人は僞善を演ずる方法を知つてゐるんだらう、忍耐を實行する方法も知つてゐるんだらう、併し僕はまだそれ程墮落はしてをらんからね。僕にして若し忍耐力が得たいと思へば、鐵亞鈴か荒馬を買ふね、なにも婦人に關係する必要はない。』

サモイレンコオは氷を入れた白葡萄酒を命じた。二人がこれを飲み終ると、ラアエウスキイは突如

として――

『腦軟化症といふのはどんな病氣だね。』

『それは……どう言つたら好いだらうなあ……腦髓の組織が惡くなる病氣さ。』

『直る病氣か。』

『そりや直るさ、手當さへ好ければ。』

『分かつたらう、君……もう迚もあれとは一緒にゐられない事情になつてゐるんだ、もう迚も僕の力には及ばんのだ。かうやつてここに君と一緒にゐる間こそ、哲學を論じて笑つてもゐられるが、家へ歸るが最後、壓しつけられるやうなんだ、そりやあ不見目なもんなんだ。もう一月あれと一緒にゐなければならないといふ事を考へる位なら、寧ろ額へ一發やつて了つた方が遙かに好いと思ふ位なんだ。しかし僕はあれを捨てる事が出來ないんだ……あれはたつた一人だ、爲事の出來ない人間だ、それに二人ともちつとも金が無いんだ。あれはどうなるだらう。あれは何處へ行く事が出來るだらう。僕はもう何も考へる事が出來ん……ああどうしたら好いんだらう。』

サモイレンコオは途方に暮れた。その當惑を隱す爲に、「一體婦人は君を愛してゐるのかい。」と聞いて見る。

『そりや愛してゐる。僕と別れるのは、白粉や捲髮紙と別れる程辛いには違ひない。僕にあれの化粧

室に必要缺くべからざる品物なんだ。』

サモイレンコオは益々まごつく。『今日は君どうかしてるんだ、ソアニア。君は睡眠不足なんだ。』

『成程僕は睡眠不足だ……身體一體に工合が悪い……頭は空つぽだ、心臟は壓しつけられるやうで少しも力が無い……僕はどうしても逃げなければならん。』

『何處へ。』

『北方へさ。松の林へさ、菌へさ、人間世界へさ、思想へさ……僕はモスクワかツウラのやうな所に住めるなら、生命の半ばを擲つても惜しくないね。小川で泳ぐ、涼しくなる、ね、それから馬鹿な學生でも何でも好いから、それを捕まへて散歩の相手にしながら、しやべる、大にしやべる……ああ枯草の匂、覺えてるか、君。夕方庭を歩いてると、ピアノの音が家の中から洩れて來る、汽車がゴロゴロいつて通る……』

ラアエウスキイは嬉しくなつて、覺えず笑ひ出す。涙が眼へ溜まつて來る、それを見せまいと、燐寸を取る風をして、隣りの食卓へ身を延ばす。

『僕は十八年露西亞にゐなかつた。』とサモイレンコオは言ふ。『僕は露西亞といふ所はどんな處だつたか、もう殆ど忘れて了つた。僕はコオカサス程好い所は無いと思つてる。』

『エレスチヤアギンの繪に、死刑の宣告を受けた人間が、非常に深い井戸の底で泣いてる所があつた。

君の所謂美しきコトカナトは殆どその井戸のやうな氣がする。ペテルブルクで烟突掃除になるか、この土地で貴族になるかと言はれたら、僕は寧ろ烟突掃除になるね。サアカシアの女か、何といふ愚劣な動物共だ。」

「まあ、まあ、君。」

ラアエウスキイは考へ込んで了つた。サモイレンコオはラアエウスキイのくるくると曲つた身體から、一寸目をぢつと見つめた眼つきから、血の氣の薄い汗ばんだ顔から、落込んだ胸の顱頂から、嚙潰した爪の先から、ひどく踵の減つた上靴を穿いてゐるので、下手な繕ひやうのしてある靴下がズボンの下から見える所まで見廻して、憐憫の情に堪へられなかつた。サモイレンコオは頼りの無い孤兒を見るやうな氣がして、覺えず「君の阿母さんは生きてるのかい。」と聞く。

「ああ、生きとる。併し、僕等は自分勝手に働いたんだ。もう決して親子の關係は許して呉れまいよ。」

サモイレンコオはその友を愛してゐる。ラアエウスキイは好人物だ、學者だ、親切な男だ、共に笑ひ共に語るに足る人間だと思つてゐる。

併しながら、ラアエウスキイは、量に於いても度數に於いても、酒を飲み過ぎる、骨牌を弄ぶ、自分の職を嫌ふ、收入以上の生活をする、話の中に不體裁な言葉を交へる、上靴で町を歩く、人の前でナヂエダと喧嘩をする。かういふ事は總てサモイレンコオの大嫌ひである。しかもラアエウスキイは言

語學の學者で、二種の大きな雜誌も取つてゐる、時々少數の人にしか分からぬ非常に高尙な話もする、そして教育のある婦人と一緖に暮らしてゐる。サモイレンコォにはこれが分からなかつた、分からぬながらも好きだつた。彼はラアエウスキイを自分の先輩だと思つて、尊敬してゐるのである。

『それに、』とラアエウスキイは首を振つて、『だがこれは僕と君だけの話だよ……ナヂエダにさへまだ內證にしてゐるんだから……實はをととひ、あれの亭主が腦軟化症で死んだといふ手紙を受け取つたんだ。』

『それは氣の毒な。』とサモイレンコォは吐息をついて『それをなぜ又君は內證にしとくのだ。』

『手紙を見せると、お寺で結婚式を擧げなければならん事になる。そんな事の起る前に今までの關係を一掃して了はなければならんのだ。もう迚も一緖にはをられんといふ事をあれに自覺させてから、手紙を見せようと思つてるんだ。さうすると危險が無いからね。』

『ワアニヤ、君は君の爲すべき事を知つてる筈だ。』と言ひかけて、サモイレンコォは何か賴みたいのだが、賴んで斷られたら大變だといふ風で、俄に歎願をするやうな悲しい顏色をして、『結婚をし給へ、ねえ君。』

『何の爲に。』

『あの立派な婦人に對する君の責任を果す爲にさ。あの人の亭主は死んだんだ、攝理が君に君の爲な

ければならん事を教へてゐるんぢやないか。』

『可笑しな男だ、それは出來得べからざる事だといふのが君には分からんのか。愛なくして結婚するのは、信仰なくして禮拜に連なるのと同じく醜劣な事だ。』

『けれども結婚はしなけりやならん。』

『何故結婚しなけりやならんのか。』と、ラアエウスキイは激しく詰め寄る。

『でも君が亭主の手から盗んで遁げたなだらう。』

『けれども僕はさつきから率直な露西亞語で言つとる。僕はあれを愛してをらんのだ。』

『よし、愛さないなら尊敬し給へ……。』

『尊敬しあつて……』と、ラアエウスキイは嘲弄しをして、『尼法師のやうにか……尊敬のみで婦人と同棲が出來ると思つてゐるなら、君は憫むべき神學者だ。』

『まあ、ワアニヤ、ワアニヤ……』と、サモイレンコオは又まごつく。

『君は大きな子供だ、理論家だ。僕は若い年寄だ、實際家だ。迚も合ひはしないよ。もうこの話はやめにしよう……おい、ムスタッファ。』と、ラアエウスキイは給仕を呼んで、『幾らだ。』

『いえや、好いよ……』と、ドクトルはラアエウスキイの腕を捕まへて、『これは僕が拂ふ。僕が命令したんだから。おい、俺の勘定へ附けて置けよ。』と、ムスタッファに言ひつける。

二人は立ち上つて、默つて海岸へ出た。ブウルワアルへ曲る角で立ち止つて、互に手を振つて、別れを告げた。

『君は荒んだね、ええ君。』とサモイレンコオは吐息をついて『運命は君に贈るに、若い、美しい、教育のある婦人を以てした。然るに君はそれを捨てようといふのだ。僕は神の賜物なら、氣立が好くて親切でさへあれば、よたよた歩きの婆さんでも滿足するね、僕はその婆さんと葡萄園に同棲するね、そして……』と言ひかけたが、急に言葉を正して『そして婆あにサモワルを沸かして貰ふ。』

ラアエウスキイと別れてから、サモイレンコオはブウルワアルを歩いた。威めしい顏をして、嚴かな態度で、美しい白い上着に磨き上げた長靴を穿いて、ウラヂミイル勳章に胸を飾つて歩く時、彼はひどく愉快なのである。そして世間の人も自分を見るときつと愉快だらうと思ふのである。

『ラアエウスキイがコオカサスを嫌ふのは可笑しい。』とサモイレンコオは考へる。『非常に可笑しい。』

一隊の兵士が通る、彼に敬禮をする。ブウルワアルの右側の人道を、或官吏の妻君が男の子を連れて遣つて來る。

『お早う、マリア・コンスタンチノウナさん。』と、サモイレンコオは親しげに笑ひながら聲をかける『海水へ御出でしたか。ハ、ハ、ハ……どうかニコヂン君へ宜しく。』

彼は又獨りで嬉しさうににこにこ笑ひながら歩き出す。と、看護卒のビリンが遣つて來る、これを

見ると俄に眉根に皺を寄せて呼び止め――
「悪者が納屋へ来たか。」
「参りません。閣下。」「なに。」
「参りません。閣下。」
「宜しい。行け……」
彼は威風堂々と、レモネエドの立賣の方へ歩いて行く。そこにはジヨオジア人にも擬ふ骨格の逞ましい猶太人の婆さんが賣臺の後に坐つてゐる。彼はこの婆さんに三軍を叱咤するやうな聲で――
「曹達水を一杯。」と命令する。

二

ラアエフスキイがナデエジダ・フエドロウナを嫌ふ主な原因は、女の言ふ事爲す事が悉く嘘に見えるからである。彼が今まで婦人及び戀愛に就いて讀んで來た事は、自分とナヂエダ・フエドロオナとその身上とのみにあり得べき事のやうに適切に感じられたからである。
家へ歸ると、女は既に着物を着換へて、むつかしい顔をして、窓の側に坐つて、珈琲を飲みながら雜誌の頁を繰つてゐた。なぜ珈琲を飲みながら、あんなむつかしい顔をするのであらう。なぜ見せて

喜ばせる人も無いのに、長い間かかつて髪を結ふんだらう。髪を結つてめかすのは綺麗に見せたいからだ、本を讀むのは利口に見せたいからだ、とラアエウスキイは思ふ。

『けふ海水浴をしに行つたら惡いでせうか。』と女が尋ねる。

『行かうと行くまいと御前の勝手さ。それが爲に地震が起る譯でもあるまい……』

『いんえ、御醫者に叱られるといけないから、聞いて見たんです。』

『そんなら醫者のとこへ行つて聞くが好いぢやないか。俺は醫者ぢやない。』

ナヂエダ・フエドロウナのむき出しに出てゐる白い首と、首筋の所に擧れてゐる髮の毛を見て、ラアエウスキイは堪らず厭な氣持になつた。彼はアンナ・カレニナが自分の亭主の厭になつた時に、その耳までが厭になつたといふ事を思ひ出して、（本當だ。實に本當だ。）と思ふ。

氣が滅入つて、ぼんやりして、彼は書齋に這入つたが、やがて長椅子の上に横になつて蠅をよける爲に、ハンカチフで顏を隱した。ぼんやりした考へが、雨催ひの秋の夕暮を繋がつて通る荷車のやうに、頭の中を通り過ぎる。彼は、鈍い、壓しつけられるやうな氣持になつた。

ナヂエダに對し、ナヂエダの夫に對して自分のした事は確かに惡い、ナヂエダの夫の死んだのも全く自分の罪からだとラアエウスキイは思つた。ラアエウスキイに死刑の宣告を下したのは彼自身のライフである。彼は自分のライフを無殘に使つて了つたのである。彼は高尙な思想の世界、知識の世界

勞働の世界を捨てたのである——曾ては自分の力量内にあつた筈の、その驚嘆すべき世界を捨てたのである。確かにさういふ世界はここには無い。腹の減つた土耳古人や怠け者のアビシニア人の中には無い。音樂、演劇、新聞、その他あらゆる精神的活動の盛んな北方でなければ無い——その北方に於いてのみ、彼は正直にも利口にも高尚にも純潔にもなり得るのだ。彼は自分が或理想を抱いてゐないといふ事、人生に對してしつかりした主義を持つてゐないといふ事を恥ぢてゐた、その癖人生が何を意味するのか好く分かつてゐなかつたのである。二年前にナヂェダ・フェドロウナと好い仲になつた時は、女と一緒にコーカサスへ行きさへすれば、空虚な陋劣な人生を逃れる事が出來るのだと思つてゐた。然るに今は又、女を捨ててペテルブルグへ行きさへすれば自分の欲する總てのものが得られると確信してゐるのである。

「逃げよう。」起き直つて、爪を嚙みながら、彼はかう呟いた。「逃げよう。」

彼は、自分が朝飯後、汽船の甲板に出て、婦人達と喃々する有樣を想像して見た。それから、セワストポリで汽車に乘り換へる、汽車は北方へ向ふ……北方へ。自由萬歳。ステエションが一つ又一つと、見えては隱れ、隱れては見えて來る、空氣が段々冷たくなる。段々鋭くなる、白樺の樹が見えて來る、松の樹が見えて來る、クウルスクへ着く、モスクワへ着く……食堂で酸つぱいキャベツジスウプ、肉の附いた羊、鰊、麥酒……一言にしていへば露西亞だ、眞の露西亞だ、決して呪ふべき亞細

亞ぢやない。汽車中の旅客がするのは商賣の話である。近頃評判の歌唄ひの話である、佛露同盟の話である。何處を見てもカルチユアのある智識のある人生だ……早く、早く……終にネウスキイ、ボルチヤアヤ、モルスカアヤ、ここのコフノォ町に彼は學生生活をしてゐたのである。なつかしい灰色の空、霏々と降る雨、しよぼ濡れた馭者……

『イワン・アンドレヰツチ君。』隣の部屋から誰かが呼ぶ。『お内。』

『ゐるよ。』と、ラアエウスキイは答へる。『何だ。』

『調印書類。』

ラアエウスキイは徐かに立ち上つた。頭がぐらぐらする。欠伸をしながら、上靴をばたりばたりと隣の部屋へ這入る。と、明いた窓の側に立つて、往來から覗いてゐるのは、年若な同僚の一人で、見れば公の書類を窓の敷居に廣げてゐる。

『今直ぐ。』と、ラアエウスキイは優しく答へて、インキ壺を取りに行く。やがて又窓へ戻つて來ると、書類は讀まずに、直ぐ署名をして、『暑いね。』

『暑いです。今日は御出勤になりますか。』

『むづかしいね……少し身體の工合が惡いから。飯を食つたら家の方へ行くつて、シエシコウスキイ君に言付をして呉れ給へ。』

官吏は歸つた。

ラエフスキイは長椅子へ戻つて、再び空想に耽る。

「さうだ、俺は色んな事を考へなけりやならん、先づここを去る前に借金の始末を附けなければならない。殆ど二千ルウブルから借りがある。ところで今金は一文も無い……だが、それは勿論、重大な問題ぢやない。どうかして今その一部だけ拂へば、あとはペテルブルクから送つても好い譯だ……一番重大な問題はナデエダ・フョドロウナだ……何より先づ第一に爲すべき事はあれとの關係を絶つ事だ……さうだ。」

ふと、サモイレンコオによく相談してからといふやうな考が浮ぶ。

「併しその必要が何處にある。唯繰り返し俺の婦人論を聽かせるだけの事ぢやないか。もう婦人論を聽かせる必要はない。先づ第一に俺は自分の命を救はなければならない。この呪はれた束縛の内にあつて、俺は身が腐るばかりだ。俺は自殺をしてゐるのだ……こんな生活を續けるのは卑劣だ、苦痛だ。俺のあらゆる物に比較して、確に小さい、確に無意義だ。逃げよう。」と、彼は起き直りながら呟いた。

「逃げよう。」

美しい海岸や、耐へられぬ暑さや、霞こめた淺紫の常に默々たる連山の單調は、彼の氣を減らした、彼の精力を奪つた。彼は自分が天才でなく、純潔でなく、正直でない事を、どうして自ら知らう。

彼はこの恐ろしい土地を逃げる事が出來さへすれば、政治家にも、雄辯家にも、公法學者にも、偉人にもなれぬとは限らぬ。それを誰が否定出來よう。大人物が束縛を逃れたい爲に監獄の塀を破つたり、獄丁を欺いたりするのに、正不正の問題を持ち出すのは愚ではあるまいか。斯やうな境遇の下にある斯やうな人物にとつては、事皆總て正である。

二時にラアエウスキイとナヂエダとは晝飯の座に着いた。女中がトマトの這入つたライス・スウプを持つて來る。

『毎日同じだ。』とラアエウスキイは唸つて、『なぜ稀には酸つぱいキャベツジスウプを出さないんだ。』

『キャベツジが無いんです。』

『それは不思議だ。サモイレンコオだつてキャベツジスウプを喰べてゐる、マリア・コンスタンチノウナだつてキャベツジスウプを喰べてゐる。毎日毎日この甘つたるい泥々した奴を喰べなけりやならんのは俺一人だ。』

食事の際、かういつた物爭ひは今までラアエウスキイとナヂエダとの間に始終起つたものである。併し、女が厭になり始めてから、ラアエウスキイは何でもナヂエダのする儘に任せて置いて見た。彼は努めて優しい丁寧な物の言ひやうをした、女の顔を見てにこにこした、女を『可愛い奴め。』と呼んだ、そして女の額に接吻した。

『このスウプに甘草のやうな味がするね。』と、彼はにこにこしながら言つた。彼に努めて親切に見せようとしてゐたが、如何にも抑へる事が出来ないで、『誰も内を整理する者は無いんだ……御前が實際病氣なら、それとも只本を讀むで忙しいんなら、俺が自分で臺所の事をしよう。』

往ては『あなた、あたしのコツクになつて下さいよ。』と男に冗談口も利いた女が、今は唯恐々男の顔を盗み見て、そして赤くなる。

『どうだね、今日は？』と、男が尋ねる。

『大分好いやうです。唯だ氣が無いだけなの。』

『大事にしなくちやいかん。俺は非常に心配しとる。』

ナヂエジダは此間から加減が悪いのだ。サモイレンコは間歇熱だと言つて、規尼涅を呉れた。ウストヰツチといふ、丈の高い、痩せた、愛嬌のない醫者は、婦人病の一種だといふので、熱い罨布を當てろと言つた。また男が女を愛してゐる時分、女の病氣は常に男の憐憫と心配とを喚び起した、然るに今ラエウスキイは、それをも仮病ぢやないかと疑ふに至つた。女の黄いろい顔と、とろんとした目つきと、無作法な欠伸と、くるくると子供のやうに縮かまつて寢るのが好きな事と、女の部屋の香臭い悪い空氣と、これらは相寄つて男のイルリュウジョンを破つた、そしてこの上關係を密にしてはならぬといふ感じを起させた。

第二に出たのは菠薐草と堅く煮た卵である、併し、ナヂエダだけはミルクプヂングを喰べた。彼女がチウ／＼啜る音を聞いて、彼はむかついて來た。可哀さうな女だと思ひ始めた。情夫が情婦を殺す譯がぼんやり分かつて來た。

『ああ可愛い奴だ。』食事が終るとかう言つて、彼はナヂエダに接吻した。

そして、書齋へ這入ると、往つたり來たりをしながら、『逃げよう、逃げよう。關係を絶つて、逃げよう。』と呟いた。

彼は長椅子へ横になつて、も一度ナヂエダの夫は自分の爲に死んだのだといふ事を考へた。

『惚れたからといつて人を責めるのは愚だ、又、厭になつたからといつて人を責めるのも愚だ。』と彼は自分で自分に説く。『愛と憎みばかりは吾人の自由になるもんぢやない。あれの亭主の死んだ原因の一つは間接に俺であるかも知れない、併し、俺があいつの妻君に惚れ、あいつの妻君が俺に惚れた爲に、俺が責められる道理は無い。』

やがて彼は立ち上ると、帽子を探して同僚シエシコウスキイの所へ出掛ける。シエシコウスキイの宅へは、この町の官吏連が、骨牌をしながら冷たい麥酒を飲みに、毎日寄合ふのである。

『俺の決心の極まらない所はまるでハムレツトだ。』と道々ラアエウスキイは考へる。『シエエクスピアの書いた事は本當だ。ああ如何にも本當だ。』

三

ドクトル・サモイレンコオは公園の食堂を持つてゐた。これはこの町の生活の單調を破る爲である。この土地には一軒も料理屋が無い所から、昔來の客はサモイレンコオ家の食卓に歡迎の椅子を見出すのが常である。

この頃サモイレンコオに賄を托してゐるのは、刺衝水母の發生學を研究しに、毎年夏になると黒海へ來る青年動物學者フオン・コオレンと、近頃の神學校出で、病氣の爲に隱退した老助祭の代りに、この小さな町へ派遣されて來た助祭のポビエドフとである。二人は晝飯と晩飯で月々十二ルウブル拂つた、そしてサモイレンコオは毎日二時きつかりに晝飯を出すといふ約束を二人にした。

いつでも一番先に遣つて來るのはフオン・コオレンである。彼は默つて客間の椅子に腰を掛ける、棚からアルバムをとつて、よいズボンを穿いて高い帽子を冠つた知らない男や、クリノリンを穿いてボンネツトを冠つた女の、色の褪めた寫眞を一枚一枚丁寧に檢査する。アルバムの檢査が終ると、棚からピストルをとつて、左の目を細くして、ヴオロンツオフ親王の肖像を狙ふ。然らずなば、姿見の前へ來て、自分ののどす黒い顏や、大きな額や、縮れた黒い髮の毛を檢査する。これは寫眞よりもピストルよりも精しさうである、彼は自分の顏を見て、綺麗に手入れのしてある自分の小さな髭を見て、健

康と強壯とを證據立てる自分の廣い肩を見て樂むのである。彼は又、自分の意氣な装を見て、花模様を散らしたシャツにうつりの好い自分の襟飾りを見て、それから又、自分の黄いろい半靴を見て樂むのである。

フォン・コオレンがアルバムに夢中になつてゐる頃、サモイレンコオは上着もチヨツキも無しで、胸をあらはに、いらいらして、汗をかいて、廊下と臺所と食卓との間を驅け廻つて、サラダかソオスの準備をしながら、始終恐い目をして手傳ひをする從卒を睨みつけてゐる。

『醋を持つてこい。』と命令が下る。『それは醋ぢやない、阿列布油だ。』と、地團太を踏んで叫る。『何處へ行くんだ、間抜。』

『油を取りに、閣下。』と、從卒はおろおろして情ない聲を出す。

『もつと早くしろ。油なら戸棚にある。それからダアリアにそいつて鹽漬の鑵へ最少し蒔蘿を入れさせとけ。蒔蘿だぞ、分つたか。クリイムに蓋をせんか。馬鹿、蠅がたかるぢやないか。』

家中が彼の叫り聲で震動する計りである。二時十分前か十五分前に助祭が遣つて來る。彼は廿二歳になる、痩せぎすな、髪の毛の長い、顎鬚が無くてちよぼちよぼと見えるか見えない位口髭のある青年だ。客間へ這入ると、彼は、偶像の前で十字を切つて、ニコリとするかと思ふと、フォン・コオレンに手を與れる。

食事は二時になつても用意の出來た事は決して無い。二人は、廊下から臺所へ、又臺所から廊下へ、發子が長靴を引摺つて駈けて歩く音を聞く。またサモイレンコオの叫ぶ聲を聞く。

『それは食卓の上へ置くんだ。何處へ持つてくんだ。まあ先きへそれを洗ふんだ。』

助祭とフォン・コオレンとは、腹が減つて死にさうなので、もう辛抱が出來ぬとばかりに、芝居の二階の見物のやうに、手を叩いたり、踵で床を蹴つたりする。やや暫しすると、戸口が開いて、へとへとになつた從卒が、食事の用意整へる由を報告する。

二人が食堂へ這入ると、サモイレンコオは既に待つてゐる。眞赤な顔をして、臺所の熱氣で汗みどろになつてゐる。何だかぷりぷりしてゐて、二人を睨みつけてゐるばかりで、何を聞いても一向返事をしない。やがて、心配さうな顔をして、スウプの小鉢をもちやげて、みんなの皿についで廻る。二人がそれをがつがつと喰べて、これは氣に入つたといふ風が見えると、やつと安心の吐息をついて、幅の廣い肱掛椅子へ腰を卸す。すると、顔がだるさうになつて來る、油じんで來る……と、徐かにコツプへブランデイを注いで、『吾人青年の健康を祝さう。』と言ふ。

サモイレンコオは、さつきラアエウスキイと話した事を思ひ出して、ひどく沈んでゐる。彼はラアエウスキイを可哀さうだと思つてゐる。どうかして助けて遣りたいと思つてゐる。

スウプを飲む前に、彼はもう一杯ブランデイを引つ掛けながら、溜息をついて——

『僕は今日ワアニヤ・ラアエッスキイに會つた。彼の生活は悲慘だ。彼は何の愉快も無くて生きてゐるのだ。僕はあいつが可哀さうだ。』と言ふ。

『僕にはどうしても可哀さうだと思へない。』と、フォン・コオレンは言ふ。『あいつが若し溺れかかつてゐたら、僕はステッキでなほ突つ込んで遣るね、そして「溺れつちまへ、溺れつちまへ……」と言つて遣るね。』

『それは嘘だ。そんな事をしてはいかん。』

『なぜいかんのだ。』と、動物學者は肩を聳かして、『僕は善を爲すに於いて、決して君に歩を讓る所はない。』

『君はそれを善といふのか――人を溺れさせるのを。』と、助祭は笑つた。

『ラアエウスキイを溺れさせるのをか。さうとも。』

『どうも、このスウプには何か足りんやうだ……』と、サモイレンコオは話題を轉じようとする。

『ラアエウスキイは社會にとつて虎列剌の黴菌程危險な人物だ。』と、フォン・コオレンは語を續ける。

『あいつを溺れさせるのは確かに善だ。』

『隣人の事をそんなに言ふのは、決して君の名譽ぢやないぞ。一體どうしてそんなに彼が憎いのだ。』

『愚劣な事を言ひ給ふな、ドクトル。黴菌を憎んだつて爲方がない、黴菌を輕蔑したつて爲方がない。

僕は唯ラアエウスキイを悪人だと思つてるのだ、僕は自分の思つてる事は決して隠さない。」

「悪人……」と、サモイレンコは眉を顰めながら呟く。「そりや君言ひ過ぎる……」

「でも人間といふものは、その行為に依つて裁判されるものだ。」と、フオン・コオレンは尚言葉を次いで、「可西然君、君自身裁判して見給へ……ラアエウスキイの生活は支那の巻物のやうに君の前に廣がつてゐる、君は始めから終ひまでそれを讀む事が出来るんだ。彼はこの土地へ来てから二年間何をしたと思つてる。まあ指を折つて數へて見給へ、先づ第一に、この町の人に骨牌を教へた。二年前までは、この土地でこの手玩みを知つてる者は一人も無かつた、今日では夜の更けるまで骨牌を遣らん者は一人も無い……女子供までが遣る。第二に彼はこの土地の人に麥酒を飲む事を教へた、これも今までこの土地の人の知らなかつた事だ。また、この町の人は色々な種類のウオツカと黙点になる事の出来たのを彼に感謝しなければならん、彼等はもう眼を塞いでウオツカの種類別けをする事が出来るやうになつた。第三に、この土地の人は今まで人の妻君と一緒に暮らすのを秘密でしてゐた、決して公然はしなかつた、この土地は貞節を以て公開の展覧に不適當なものだと認めて来た。然るにラアエウスキイはこの方面の先驅者として遣つて来た。彼は公然人の妻君と一緒に生活した。第四に……」

フオン・コオレンは急いでスウプを飲んで了つて、皿を從卒に渡す。

「僕は懇意になつたその月から、もうラアエウスキイが分かつて了つた。」と、フオン・コオレンは助

祭の方を向いて語を續ける。

「僕と彼とは同時にここへ來た。彼の如き人間は誰とでも友達になりたがる、交際社會が好きなのだ、それに似た物が好きなのだ、なぜならば、骨牌をするにも、酒を飲むにも、飯を食ふにも、常に相手が無ければ氣が濟まんのだから。それに、自分がおしやべりだから、聽き手が入るのだ。僕と彼とは友達になつた。卽ち彼は毎日のやうに僕を尋ねて來た、僕の爲事を妨げた、そして女の話をした。僕は直ぐと、彼が非常な嘘つきだといふ事に氣がついた。僕は彼が煩さくて堪らなかつた、僕は友人として、彼が酒を飲み過ぎる事、收入以上の生活をして借金を殖す事、なんにも爲ない事、なんにも讀まない事、なんにも知らない事などを攻擊した。總ての僕の攻擊に對して、彼は苦笑をしながら、(僕は不運な、不必要な人間だ……)とか、(君は吾人の如き農奴の屑から何を期待するのか。)とか、(吾人は墮落しつつあるのだ……)とか答へる。然うでなければ、オオネギンだとか、ペチコリンだとか、バイロンのカインだとか、バザロフだとかに就いて出鱈目な話を長々として、これらは肉に於いても靈に於いても吾人の先祖だ、といふやうな事を言ふ。彼は自分で酒を飲んだり、人に酒を飮ませたりして、それが爲に役所の務めを疎かにしながら、それに對して自分が責めを負はうとしない。それは、彼の罪ではないんだ、オオネギンの罪なんだ、ペチコリンの罪なんだ、ツルゲエネフの罪なんだ。こんな不運な不必要な人間を作つたのは彼等なんだ。彼の放埒の原因は彼自身にあるのではない、何處

か外に、遠くにあるんだ……それに……彼ばかりではない、吾々も……(吾々今日の人間)、(吾々、鈍い、その精神薄弱な農奴の子孫――……吾々も亦放埒だ、嘘つきだ、淫猥だと言ふんだ。一言にして言へば、ラアエウスキイの如き偉大な人間は、その墮落に於いても亦偉大だ、といふ事を吾人は認めなければならんのだ。吾人は、彼が時代の犠牲であり、時代思潮の犠牲であり、遺傳の犠牲であり、それから未だ何かの犠牲であるが故に、彼の前に跪いて香を焚かなければならんのだ。總ての婦人は、彼の話に耳を傾けて、いつも(おお)とか(ああ)とか感嘆の聲を洩らした、併し僕には、シニックと話をしてゐるのか、大法螺吹きの野郎と話をしてゐるのか、永い間一向分からなかつた。』

『默り給へ。』と、サモイレンコオが叫る。

『僕は僕の面前で、その尊重すべき人物を罵る事を許さない。』

『まあ待ち給へ、アレクサンドル君。』と、コオン・コオレンは冷かに言ふ。『もう直き結論にするから、ラアエウスキイの組織は至當に簡單である。彼の道德的精神は次の如くだ。朝も、午前は上靴と海水浴と珈琲だ。それから晝飯までは、上靴と運動と饒舌だ。二時になると、上靴と食事と酒だ。それから骨牌と嘘だ。さうして夜の十二時過ぎると、睡眠とラ、ファンムだ。彼の生活は殼の中に這入つてる玉子のやうに、この短かいプログラムの内へ疊み込む事が出來る。彼は歩くにも坐るにも、怒るにも言ふにも、酒と骨牌と上靴と女とに關係してゐるのだ。女は彼の生活に於いて、最も重大な役目をな

してゐる。彼自身の語る所によれば、彼は十三の時にもう戀をした。大學の新入生として、彼は既に或婦人と同棲した、この婦人から彼は有益な感化を得た、彼に音樂の素養があるのはこの婦人のお蔭だ。二年級の時、彼は好からぬ家から女郎を請け出して來て、自分の程度まで引き上げた。則ち、女房にした。この女は六ヶ月彼と一緒にゐたが、再び元の古巣へ舞ひ戻つた。この女に棄てられた事は餘程彼が痛心の種となつたらしい、彼は煩悶の結果、大學を退學して、二年間何もせずに內にゐた。それから彼は或未亡人と仲が好くなつた、この未亡人は、彼に法科を廢めて言語學科に移れと勸めた。彼はその說に從つた。大學を出ると、今の婦人と馴染になつた。何といふ名の婦人だか、兎に角人の妻君だ……さうして、その婦人と一緒に、理想を追つてでも來たやうに、このコオカサスへ駈落をして來たんだ。この女の厭になるのも、もう間のない事だらう、そして又ペテルブルクへ逃げて歸るんだらう……やはり理想を追つてね。』

『どうしてそれが分かる。』と、動物學者を睨みながら、頰を膨らしてサモイレンコオが言ふ。

黃尾魚の煮たのに波蘭ソオスがついて出た。サモイレンコオは二人に黃尾魚を一つ宛取つて、自分の手でソオスを掛けて遣る。

『誰の生活を見ても、婦人は重大な役目をなしてゐるさ。』と、助祭が言ふ。『そりや爲方がない。』

『そりやさうさ、併し、程度があらうぜ。吾人にとつて見れば、婦人たる者は、母である、妹である、

匠である、或は友人である――ラアエッスキイにとつては、婦人はこれらの總てであつて、しかも同時に又みんな情婦である。彼の生活が不愉快な時は――女が悪いのだ。彼の生活に新しい光が見えた時、彼が新しい理想を見出した時は――やはりそこらに女がゐるのだ……本を見ても、繪を見ても、その内に女が書いてなければ、彼の心には何等の感じを與へないのだ……彼の意見によれば、吾人の時代は、戀愛と熱情とのエッスタシイに我を忘れるといふやうな事がないから、非常に悪い時代なのださうだ。彼がもし學者か文學者であつたら、必と「十三世紀の婦人」とか、「古埃及に於ける賣淫」とかいふ論文を公にして、世界の文章を豐富にしたらう。僕は斯くの如き肉感的な人間の頭腦には、一種特別な内臓があるに違ひないと思ふ。交際場裡に於けるラアエッスキイを好く注意して見給へ。或一般的な問題が話題に登つてる間は、彼はいつも隅つこへ引込んで、默つて、ぼんやりして、つまらなさうな顔をしてゐる。併しながら、女の話が始まると、眼が光つて來る、顔が元氣づいて來る。人間が醒めて來る。其の思想は總て、どんな高い事でも、どんな貴い事でも、みんな女から出て來るんだ。」

　助祭は思はず吹き出して、大笑ひに笑つた。サモイレンコオは、顔を顰めて、笑ふまいとするやうに顔を蹙めたが、堪へる事が出來ないで、到頭くッくッと笑ひ出した。

「嘘だ、嘘だ。」と、彼は涙を拭きながら言ふ。「そりやあ嘘だ。」

『あいつは汚ない奴だ、曲つた奴だ。』と、動物學者は尙言葉を續ける。助祭は又可笑しな話が始まるだらうと思つて、ぢつと彼を見詰めて、又笑ひ出す。

『笑ひ給ふな、助祭君。』と、フォン・コオレンは言ふ。『有害でもなく危險でもなければ、誰があんな人間に注意するものか。あいつは女にかけて成功するから危險なのだ、あいつはこの上尙幾多のラアエウスキイを以てこの世界を充たさうとしてゐるから危險なのだ。だからあいつは傳染病毒だと言ふんだ。サアカシアの人間は敎育と文雅といふものを信じてをる。見た所才學のある立派な紳士のする事だから、彼の行爲は總て正しいもの總て宜しきを得たものと認められてゐるのだ。彼等は彼の爲す事は何でも善だと信じてゐるんだ。しかも彼は（不運な、不要な人間）なんだ、時代の犧牲なんだ、といふ意味は、彼は何をしても許されるといふんだ。彼は親切な愛すべき人間だ、だから人間の弱點に對して嚴でない。彼は俠氣を持つてゐる、素直だ、腰が低い、決して横柄ではない。誰とでも酒を飮む、誰とでも猥褻な話をする、誰とでも蔭口を利く……一體宗敎に於いても道德に於いても、神人同形說(アンスロポモオフイズム)に傾いてゐる連中は、自分の弱點と丁度同じやうな弱點を持つてる神を最も多く愛するものだ。さあ、如何に廣い傳染病毒の蔓延區域を彼が有してをるか、君自身で判斷して見て呉れ給へ。しかも彼は立派な役者だ、巧みな僞善者だ、彼はよく商賣を心得てをる。噓だと思ふなら彼の詭辯に注意して見給へ——例へば文明に關する說だ。彼は文明の匂も嗅いだ事のない人間だ、然るに彼は、

「ああ、如何に吾人は文明の害毒を被つたらう。吾人は寧ろ蛮人を羨む、文明の何たるかを知らざる自然児を羨む」などと言ふ。この言葉に依つて見ると、彼は嘗て全精神を文明に捧げた事があるのだ。捧げる間に服事したのだ、奥の奥まで文明を理解したのだ、併しながら文明は、彼を疲らしたのだ。彼の謹を被つたのだ、彼を欺いたのだ。ね、彼はファウストだ、第二のトルストイだ……ショペンハウエルやスペンサアなどに至つては殆ど子供扱ひだ、この人達の背を親父らしくぽんと叩いて、「どうした、兄弟」などと言ふ風なんだ。勿論、彼はスペンサアを一行も読んだ事はないのだ、併し彼が、自分の女の話をして、「あれはスペンサアを読みますよ。」などと、知らずに皮肉を言ふ時は、如何にも可笑しく見える。だからみんなが彼の言ふ事に耳を傾けるんだ、そして、この野師はこんな風にスペンサアの事を話す資格が無い許りでなく、実はスペンサアの靴の底を舐める権利さへ無いんだといふ事を、誰も知る者は無いんだよ。」

「フオン・コオレン君、一体彼は君に対して何をしたんだ。なぜ君はそんなに彼に反対するのか、僕にはちつとも分からん」と、動物学者を苦々しげに見ながら、サモイレンコが言ふ。「彼だつて一個の人間だ。そりや弱点の無い事はない。併しながら、近世思想と同じ水平線に立つてゐる人間だ。政府に勤めてゐる人間だ。国家にとつて有用な人間だ……」

「有用、有用」と、動物学者は遮る「君は彼が政府に勤めてゐると言ふ。併し、彼は果してどういふ

勤め方をしたらう。彼がこの土地へ來てから、法令が改善されたらうか、彼がここへ來てから官吏が綿密になつたらうか、忠實になつたらうか、丁寧になつたらうか。否、却つて彼は、才學ある大學出身者の權威を以て、彼等の放埒を是認し、彼等の不潔に加ふるに自己の不潔の拾ハンドレドウエイト（一ハンドレドウエイトは我が十三貫五百四十八匁）を以てした。彼が正確なのは月給日の廿日だけだ。外の日は、一日だつてなんにもしやしない。ただ上靴をがたがた引摺つて歩いて、自分のコオカサスに住んでゐる事が何か露西亞政府に非常な貢獻でもしてゐるやうな顔附きをしてゐるばかりだ。いんや、アレクサンデル君、彼の肩を持ち給ふな。君は誠實でない。君にして若し眞に彼を愛するならば、眞に彼を友人と思ふのならば、彼の弱點に無頓着なる能はざる筈だ、彼の弱點を許さない筈だ、彼自身の利益の爲に、彼を無害な人間にしなければならん筈だ。』

『然らば。』

『どうして彼を無害な人間にする事が出來ると聞くのか。彼は矯正し難い人物であるから、彼を無害な人間にするには唯一つの方法有るのみだ……』と、フォン・コオレンは指で咽喉を横に切つて、『然らずんば溺死せしめよさ……』と、附け加へる。『萬人の利益の爲に、斯やうな人間は滅ぼさるべきだ。』

『何を君は言ふのだ。』と、サモイレンコは思はず身を起して、動物學者の冷靜な顔に驚きの眼を据ゑながら、早口に言ふ。『君は氣でも違つたか……助祭君、コオレン君は何を言つてるのだらう。』

文明と君の人類とはくだらん物だ。實にくだらん物だ。僕は君に眞理を言つて聞かせよう。君は學問もあり才智もある人物だ、國家の誇りだ。併し獨逸人は確に君を害した、然り、獨逸人。獨逸人。』

　サモイレンコォは、醫術を學んだドルパアトを去つて以來、殆ど獨逸人に會はなかつた、又獨逸の本も決して讀まなかつた。併しながら、彼の意見に依ると、政治及び學問に於ける害毒はみんな獨逸人から出て來るのだ。どうしてこんな意見を起したのか、それは自分でも説明出來ないのだ。が、兎に角、この説を固守して動かないのだ。

『然り、獨逸人。』と、彼は又繰り返す。『さあ、行つて茶を飮まう。』

　三人は、立ち上つて、帽子を冠ると、外へ出て、白楊と梨と栗との樹蔭に腰をかけた。動物學者と助祭とは、小さな卓の前のベンチに腰をかけた、サモイレンコォは、廣い、寄り掛りの斜めな背掛椅子に體を沈めた。從卒が茶とジエリイと、それからシロップを一本持て來る。

『今日茶を飮むのは好い心持だ。』と、サモイレンコォは吐息を深くついて、滿面に笑みを湛へて言ふ。

『全く好い。』

　その日は非常に暑かつた。大氣はそよとだにも動かなかつた。栗の樹から垂れてゐる蜘蛛の巣も動かなかつた。

　助祭は、いつでも卓の側の地面に置いてあるギタアを取り上げて、調子を合せ、好い聲で、『教へ子

は酒亭のけしきに立てりしことを思ひ出した。だが、彼は直ぐと止めた。彼は額の汗を拭いて、燃えるやうな頭を抱いた。

キリイレンコオは居眠りをし始めた、彼は暑さに疲れて眩暈がして来たのだ。彼の手はだらりと下つた、彼の目は閉ぢて了つた、彼の頭は胸に垂れた……彼は悲しさうな顔をしてフォン・コオレンと助祭とを見上げて、そして呟くやうに言つた――

「高尚な諸君……世界の星と教育の光……見給へ、牧師總監が長いハレルヤを唄ふ……吾人はバアテンに謳歌しに行かねばならん……え、なぜ構はない……神よ、我を許し……」

彼は直ぐと鼾をかき始めた……

フォン・コオレンと助祭とは茶を飲み終つて、町へ出かけた。

「君は港へおたまじやくしをとりに行くんか？」と、動物学者に聞く。

「いんや、今日は暑過ぎる。」

「それなら僕の部屋へ来給へ。僕の部屋へ来て、僕の為に片附物をして呉れ給へ、それから何か寫し物をして呉れ給へ、序にどうしたら君が忙しくなるか相談して見よう……助祭君、君は働かなければいかん。こんな風で日を暮らしてはいかん。」

「それは君の言ふ通りだ」と、助祭は言ふ。「併し僕の怠けるのは、現在の境遇の致す所だ。將來の不

安が、非常に冷淡にするといふ事は、君も知つてゐる。僕がこの土地に永く留まるべき人間かどうか、知る者はただ神のみだ。僕は不安にここに暮してゐる。妻は妻の父の所に寂しく暮してゐる。實を言へば、暑さで僕の頭は餘程弱つた。」

「そんな馬鹿な事はない。」と、動物學者は言ふ「暑さには直きに馴れる。妻君のゐないのにも直きに馴れて來る。腐つてはいかん。人間は自分で自分を鞭撻せにやいかん。」

四

或朝、ナチエダ・フエドロウナは海水浴に出掛ける。下女のオルガは水さしと銅の金盥とタオルと海綿とを携へて、後から附いて行く。

白い煙突の汚なく煤びた、見馴れない汽船が二艘、碇泊所にかかつてゐる、確かに外國船だ……白い着物を着た男達が、佛蘭西語で何か大聲に叫りながら、波戸場の近所を行つたり來たりしてゐると、船からも大きな聲で何か答へてゐる……

町の小さな寺の鐘ががんがん鳴つてゐる。

『成程、けふは日曜日だ。』と思ふと、ナチエダは嬉しかつた。

彼女は非常に好い氣分なのだ。何か心嬉しい休み日らしい氣持がしてゐるのだ。新調の白い絹の着

物を着て、大きな麦藁帽子を冠つて、その麦藁帽子の廣い縁が両方の耳の方へ反り曲つて、丁度顔の額縁になつてゐる所は、きつと人が見て美しいに違ひないと、彼女は自分でさう思つてゐる。彼女は考へた、この町にはたつた一人しか、教育のある、美しい、若い女はゐない――それは自分だ。人の氣を引くやうに、趣味のあるやうに、しかも經濟に着物を着る方法を知つてる者も自分ばかりだ。例へば今着てゐるこの着物の如きも、實はたつた八十二カペイカしか掛かつてゐないのだけれども、素張らしく立派に見えるぢやないか。又この町中で人を喜ばせる方法を知つてる者も、自分一人だ、そして、この町には[illegible]があるし、だから、みんなラアエウスキイを羨ましいと思つてゐるに違ひない。

彼女はラアエウスキイが近頃冷淡になつたのを喜んでゐる。一時は彼の態度や、彼の侮辱に對して、泣きもした、怨みもした、もう何處かへ行つて了ひますと嚇かした事もあつた。が、今では唯顔を赤らし、腹立しげに彼を睨む位が關の山で、却つて男の不親切を喜んでゐる。寧ろ、もつと亂暴な取扱ひをして貰ひたくなつてゐる。彼女は夫の理想――ペテルブルグを去つてコオカサスへ來るといふ夫の思想――に同情の念の無いのを、自分と自分で叱つた。そして彼の怒つてる原因はこれだと信じてゐる。この町へ引越して來る道すがらも、彼女は、海岸に居心の好い家を持つて、木蔭のある、鳥の囀る、流れの清らかな心持の好い小さな庭で、草花や野菜を栽培したり、また[illegible]の雛を育てたり、近所の人を招いたり、貧乏な百姓を尋ねて本を頒けて遣つたりしようと計畫して來たが、

來て見るとコオカサスといふ所は、禿山と森と大きな谷ばかりで、せつせと長い間働かなければならない所だつた。御近所の人といふ者が無い、暑さは非常だ。サアカシア人は人から家庭を奪ふものだ。ラアエウスキイは別に忙しくて土地を求めようともしなかつた。これは彼女の喜ぶ所だつた。二人は働いて生活するなどといふ事に就いては、互に一言も言ふまいと、默契してでもゐるやうに見えた。彼は默つて許りゐた。彼女は自分が物を言はないので、それで男が怒つてるのだと思つた。

彼女はラアエウスキイに内證で、この二年の間に、アチユミアノフの金庫から、もう三百ルウブルも借りてゐる。今度は絹、今度は日傘と、僅かなものが積り積つて、つひこんな高になつて了つたのだ。

「けふは何もかもすつかり言つて了はう。」と彼女は決心した。が併し、昨今のやうに不機嫌な所へ、借金の話を持ち出すのは決して得策でないと直ぐ氣がついた。

外にもう一件少なからず彼女を苦しめてゐる問題がある。ラアエウスキイの不在中に、士官のキリリンが二度家へ上げた事だ。ナヂエダはこれを思ひ出すと、さつと顔を赤らめて、下女の方を振り返つた、自分の心を讀まれやしないかと恐れる者のやうに。

永い暑い晝間。美しい蒸暑い夜。自分の若さと美しさとを怠けて夢に見るか考へるかするより外、何も出來ない程倦い時。ラアエウスキイの冷淡——總て之等が力を合せて、女の心中に、嘆美と滿足

『けふはきのふ程暑くおございませんのね。』と言ふ途端に、着物を脱がせてゐた下女が體に一寸手を觸つたので、ナヂエダはびくりつとして、『きのふは暑くて死にさうでございましたわ。』
『ほんとにさうでございましたいね。わたくしなども息が詰まつて死んぢまふかと存じましたわ……まあ、嘘のやうですけれど、わたくしきのふは三度海水を致しましたの……ねえあなた、三度でございますよ。流石のニコヂンも怒りましてね。(マアシヤ、そんなに這入つたら色が黒くなつてしやうがない。)つて、ねえあなた。』
(こんな不器量が又と二人あるものか。)と、ナヂエダはこの女の顔を見ながら心の内でさう思ふ。カアチヤに就いては(でも娘の方が餘つ程好く出來てる。)と思ふ。と、大きな聲を出して『あなたん處のニコヂンさんは本當に可愛くて入らつしやるのね。わたくしほんとに惚れつちまひましたわ。』
『は、は、は。』と、マリアは無理に笑つて、『まあ嬉しい。』
外の婦人はみんな嫌厭の情を以て自分を見てゐるんだ、とナヂエダは感じた。彼等は皆自分を恐がつてゐるのだ、と思ふと、彼女は氣が沈んで來た。そこで自分で自分を尊敬して氣を引き立てようと
『ペテルブルクでは、唯今田園生活が大流行なのですよ。内もわたくしもペテルブルクには知つてる人が大勢ございますの。』と言ふ。
『あなたの何は技師さんで入らつしやいましたね、さうぢやございませんでしたかしら。』と、こはご

いでよう。』

コスチャはおつかさんと妹とに見せびらかす積りか何かで、更に潜つたり泳いだりしたが、やがて草臥れて、急いで歸つて來た。

『ほんとに男の子では泣かされますんですよ、ねえあなた。』と、やつと安心したマリアが言ふ。『いつ何時首根つこを折るか分からないんですもの。嘘のやうですけれど、わたくし共がまだリベックにをりました時分に、或日の事、コスチャは高い樹へ登つて、降りて來る事が出來なくなつて了つたんですよ。それで、百姓に登つて貰つたり何かして、大騷ぎを致した事があるんですの。ほんとにねえ、あなた、母になるのは嬉しいやうなものの又隨分辛いものですのねえ。ちよつとした事にも膽を潰さなければならないんですからねえ。』

ナヂエダ・フエドロウナは麥藁帽子を冠つて、海へ乘り出した。彼女は可なり遠く泳ぎ出たが、やがて又引つ返して來た。水平線まで海が廣々と見える。蒸汽船、海岸の人、町――總てこれらの景色が、暖かい空氣と穩かな波とで彼女の魂を動かした、そして、或者が彼女の耳に囁いて、「生きろ、生きろ……」と言つた。帆を張つた小舟が一艘、舳先で波を突つ切つて、彼女の側を矢のやうに通り過ぎる。舵を取つてる男がちらつと彼女を見た。彼女は見られるのを心嬉しく感じた。

海水浴を終へると、婦人達は着物を着て、一緒に町の方へ歩き出した。

まれてゐる。が、彼女は我を忘れて、猫を袋から逃して了つた。彼女は狼狽の色を隠さうとして、『ですから、あなたも入らつしやいましよ――。』

五

野遊會の目的地は、南の方へ五六哩離れた、黒河と黄河との合する所で、サアカシアの武旗亭に近い場所だつた。

一同は夕方の五時を合圖に出發した。一番初めに來るのは遊歩馬車に乘つたサモイレンコオとラアエウスキイとである、それからマリアとナヂエダ・フエドロウナとカアチヤとコスチヤとが三頭曳きのトロイカで遣つて來る、この馬車に食糧や食器の這入つた籃が積つてゐる。その次の馬車には士官のキリリンと若いアチエミアノフとが乘つてゐる、このアチユミアノフはナヂエダが三百ルウブル借りてゐる商人の息子だ。その向う側に注意深い小男のニコヂン・アレクサンドロホツチが土耳古風に足を組んでゐる。フオン・コオレンと助祭とは行列の一番殿りをして來た、魚を一杯容つた籃が助祭の足下に置いてある。

『みー、みー、右。』と、サモイレンコオは、荷馬車か騎馬に乘つた韃靼人に會ふ度に、聲のある限りを出して叫つた。

『もう二年も經つと、多少生活も樂になるだらうから、僕は探檢に出掛ける積りだ。』とフォン・コーレンは助祭に向つて言ふ。『先づウラヂヴォストックから、海岸に沿いてベェリング海峽へ出て、海峽からエニセイ河の河口へ出るんだ。地圖を書くんだ、フォオナとフロオラとの研究をするんだ、特にその地方の地質學を研究するんだ、人類學的並に人種學的の攻究をしながらね。君も行くんなら一緒に行かんか。』

『そりや出來ん。』と、助祭は言ふ。

『なぜだ。』

『僕は一人ぢやない。家庭の一員だ。』

『それに、君の細君なら出して呉れるよ。妻君が喰べるだけの事は僕等がどうにかしようぢやないか。社會公衆の利益の爲に妻君を寺に入れて了ふ事が出來れば尚結構だ。さうしたら、君は雲水になつて、本當の坊主として探檢に出掛ける事が出來るぢやないか。僕は君の爲に盡力するぜ。』

助祭は默つてゐる。

『君は神學をよく知つてるか。』と、動物學者は尋ねる。

『餘りよくは知つとらんね。』

『ふうむ……さうなるとそんな方面の補助は出來んね、僕は神學に就いては丸で知識が無いんだから。君が

入るだけの本の目錄を書いて僕に呉れ給へ、冬になつたらペテルブルクからきつと送つて上げる。君はいろんな傳道師の旅行記を悉く讀む必要があるね――旅行傳道師の中には隨分好い人種學者がゐるぜ。それを讀んでからだと餘程爲事が樂だ。もう一時も猶豫する時ぢやない、僕の部屋へ來給へ、コンパスとセクスタンドの使ひ方を覺えようぢやないか。君は氣象學を知らなくちや駄目だ。』

『成程……』と、笑ひながら助祭は呟く。『けれども、僕は既に中央露西亞に或地位を求めてゐるのだ、高級牧師たる僕の伯父もその爲には盡力しようと約束してゐるんだ。僕が君と一緒に出掛けて了つたら、伯父の好意を無視する事になるだらう。』

『何を君は躊躇してゐるんだ。世間並の助祭のやうに、安息日ばかり働いて、外の日はいつでも休んでゐるやうな、そんな生活をいつまでも續けて行つたら、十年立つたつて今よりはえらくはならんぜ。そりや今より長い髯は生えるかも知れん。けれども、探檢は君といふ人間をきつと著しくする、君は或事を爲遂げたといふ意識に於いて、必ず富者になる。』

二人は婦人の馬車から聞える恐怖に歡喜を交へた叫び聲で、話の邪魔をされた。馬車は今殆ど垂直な絕壁を通して切り開かれた道を走つてゐる、一枚の釣り棚のやうな道は今にも深い谷底へ眞つ逆さまにみんなを落しさうである。右には海が開けてゐる、左には高いでこぼこした絕壁が蔓のある植物が匍つてゐて、丁度それが赤い血管のやうに見えてゐる。素敵もない景色だ。

『なぜ僕は君等と一緒にこんな所にゐるのだらう。』と、ラアエウスキイは言ふ。『僕は馬鹿だ、卑しい人間だ。僕は今自分自身を救ふ爲に北方へ走り去らなければならん人間でゐながら、かうやつてこの陽氣らしい野遊會に加はつてゐる。』

『まあ見給へ、このパノラマを。』馬が左へ折れて、黄河の谷が、その黄いろい、濁つた、狂奔する小さな流れを以て現れた時に、サモイレンコオはラアエウスキイに向つて、斯う言つた。

『サアシャ、僕は少しも美しいとは思はないね。』と、ラアエウスキイは答へた。『自然を賞美して止まないのは想像力の貧弱な證據だ。僕の空想に比較すれば、總ての川、總ての岩、悉くノンセンスだ——ノンセンスより外のものぢやない。』

馬車は今川の岸に沿うて走つてゐる。高い山の側面と側面とが段々に近寄つて來た。谷が段々に狹くなつて來て、峽へ來たやうな氣がする。馬車の通る直ぐ側の山は、大きな岩が自然に積み重なつて出來てゐるやうに見える。サモイレンコオはこれからの景色を見る度に唸つた、それ程彼には印象が深かつたのである。凄いやうな美しい山は、狹い裂目や峽で所々斷えてゐる。峽を通して外の山々が褐色に、菫色に、また空色に見える、何れも暮日の光を浴びて。

『ああ見ろ、すてき山々よ。』と、ラアエウスキイは溜息をつくやうに言ふ。『もう僕は山に倦んだ。』

黑河が黃河へ流れ込む所、インキのやうな黃いろい水と爭つて黃いろい水を汚す所に、露西亞の國

旗を屋根の上に掲げた貳韃靼人の旗亭がある。店先に出た看板には、チョオクで「歡迎亭」と書いてある。この店はケルバライといふ韃靼人が持つてゐるのだ。垣根で仕切つた小さな庭があつて、その庭に食卓やベンチが据ゑつけてある。深々と生ひ繁るに委せた灌木の中から、唯一本こんもりと美しい糸杉が聳え出てゐる。

氣の利いた小男の韃靼人ケルバライは、青シャツを着て、白の前掛をして、往來へ出てゐて、馬車の一行が通りかかると、両手を腹に當てて低い御辭儀をした。彼が笑つた時白い綺麗な齒が見えた。

『どうした、ケルバライか。』と、サモイレンコオは叫る。「今日は少し先へ行くんだ、貴樣は後から直ぐサモワルと椅子を五六脚持つて來い。直ぐだぞ。』

ケルバライは、短かく刈り込んだ頭で、二三度頷いて、何か言つたが、それは最後の馬車に乘つてゐる人にしか分からなかつた。

『鱒がござります、閣下。』

『持つて來い、持つて來い。』と、フォン・コオレンが叫つた。

馬車は旗亭から殆ど五百ヤアドも來た所で止まつた、サモイレンコオは小さな草原を見つけた、そこには飛び飛びに岩があつて、丁度都合の好い腰掛になつてゐた。嵐で吹き倒された樹が一本、根を出して倒れてゐた、その刺は悉く黄いろく枯れてゐる。粗末な木の橋が小さな流れに懸かつてゐる、

『さうかしら。』と、ラアエウスキイを睨みつけながら、彼は又繰り返して言ふ。『では「ロメオ、エンド、ジュリエット」はどうなのだ。例へばプシキンの「ウクライィンの夜」はどうなのだ。自然はこれらの作の前へ來て、その膝を屈しなけりやならんぢやないか。』

『そりやさうさね。』と、ラアエウスキイは同意した。彼はもう氣が怠けて、考へたり議論したりする勇氣が無くなつて了つたのである。『だが併し。』と、暫く默つてゐた後に、又言葉を續けて、『要するに「ロメオ、エンド、ジュリエット」が何である。美しい、詩的な、神聖な戀愛――即ち腐れを隠した薔薇ぢやないか。ロメオだつて、有らゆる他の人間に同じく、一箇の野獸たるに過ぎないのだ。』

『何の會話をしても、君は直ぐ問題を……』と言ひかけて、フォン・コオレンはカアチャの方を振り向くと、默つて了つた。

『問題を何に轉ずると言ふのだ。』と、ラアエウスキイは尋ねる。

『うむ、或人が君に向つて〈葡萄の房は綺麗なものですね。〉と言ふとするね。すると君はきつとかう言ふだらう、〈成程綺麗です、併しながらちうちう吸はれて胃の腑の中で消化される時は餘り綺麗なものぢやありません。〉て。なぜ君はさういふ議論の爲方をするのだ。少しも新らしい所は無いぢやないか。それに……何れにしても可笑しな論法だ。』

ラアエウスキイはフォン・コオレンが自分を嫌つてゐる事を知つてゐる、そして、それを知つてゐるが

ゐるのだ。
『いんや。二十本持つて來い。』と、キリリンは叫つた。
『構はんさ、好いよ。』と、アチユミアノフはニコヂンに囁く。『僕が拂ふから。』
ナヂエダは陽氣な浮々した氣持であつた。駈け出したい、笑ひたい、大きな聲が出したい、ふざけたい、浮氣がしたいといふやうな氣持だつた。青い星を散らした輕いモスリンの着物を着て、小さな赤い上靴を穿いた所は、可愛く、身輕に活潑で、恰も蝶のやうに見えた。彼女は危ない橋を驅けて通つて、目の廻るまで水を眺めた。それから、笑ひながら、向う岸へ驅けて行つた。彼女はキリリンの大きな聲を耳にして、また醉つぱらつて何か言つてるんだよと、ちよいとの間そんな事を思つたが、直ぐ、なあに誰もあの人を信ずる人は無いから好い、といふやうな事を考へて、安心した。彼女は堂小屋の處まで歩いて行つたが、急に淋しくなつたのに氣いて、橋の所まで、駈け戻つた。この瞬間に、彼女は總ての男子が戀しくなつた。
刻々と迫つて來る闇黒の内に、樹は山に融けて消え、馬は馬車から見分けが附かなくなつて了つた。唯旗亭の窓から小さな明かりが洩れて見える。彼女は石や叢の間を蛇のやうにうねうねしてゐる道を横切つて、山へ登ると、一つの石に腰を掛けた。
下には焚火が燃えてゐる。助祭が袖をからげて、火の近くを立ち廻つてゐるのがよく見える、彼の

樹と――その外にはなんにも無いのだ、しかも何といふ好い景色だ。」

河の向う岸の乾小屋の側に、幾人か見馴れぬ人が現はれた。ちらちらする火の光と煙とで、どういふ人達だか好くは分からぬ。が、時々、毛皮の帽子だの、灰色をした絆だの、青いシャツだの、肩から垂らした襤褸だの、帯に束ねた匕首だの、木炭で書いたやうな黒い眉毛をした錆びた長い顔だのが見えた。何でも十人位の人数に違ひない、なぜといへば地べたに坐つてゐるのがゐて、外に五人乾小屋の中へ這入つて行つたのがあつたから。入口の處に、焚火に背中を向けて一人立つてゐる。話をしてゐるのがよく聞える。サモイレンコーが枯枝を足したので、火がぱッと明るくなると、戸の中から外を覗いてゐる顔が二つ見えた――誰かが話してる物語を、さも面白さうに聴いてゐるといふ顔つきだつた。暫く立つと、靜かな、調子の好い歌が、柔かな聲で聞えて來た。丁度讃美歌を聽くやうである……助祭はこれを聽くと、ふと自分の十年後を考へ出した、自分が探檢から歸つた時の事を考へ出した。彼はきつと本當の傳道師になつてゐるだらう、立派な經歷を持つた有名な著述家になつてゐるだらう。彼は僧院長と崇められるやうになるだらう、それから――僧正になるだらう。彼は黄金の僧冠を戴いて、中央寺院の彌撒を營むだらう。彼は、耶蘇の像を胸に當つて、二つか三つ手の出てゐる燭臺を捧げて、祭壇に進んで、そして、人民に祝福を與へてゐる自分の姿を見た。

(おお天にまします主よ、吾等を護り給へ。願はくは天の葡萄畑を屢々訪ひ見給へ、願はくは、天の

正しき霊魂を以て、この畑に播種させ給へ。)と、自分が言つてゐる。子供達は天使のやうな聲を上げてこれに和する。(仕合せなるかな……)

『助祭君、然し何處に在るんだ。』

サモイレンコの聲は、助祭君の幻想を破つた。

助祭は宅の方へ戻つて来る道すがら、或暑い七月の正午に、ほこりの深い道を通つて来る行列行進を心に描いた。先づ第一に百姓達が旗を持つて通つて来る、それから女や娘達が偶像を捧げて来る。その後から子供の合唱隊と、頬に布を巻いて髪の毛に藁を挿した役僧とが通つて来る。それから順に、自分即ち助祭が、後に坊主を従へて、十字架を捧げて進つて来る。それから、百姓や女や子供の群衆が、その群衆の中に、その坊主の妻君と、それから、頭に布を纏つた自分の妻君とが見える……合唱隊が唄ふ、子供達が叫ぶ、鶉が鳴く、雲雀がけたたましく唄ふ……行列は今歩みをとめて、頭の過ぎる會衆に聖い水を撒きかけた……段々と彼等は進んで行く、跪きながら、雨乞をしながら。それから食事をする、話をする……

(これも矢張しいゝ)と、助祭は考へた。

キリリンとアチュミアノフとは間道を通つて山へ登つた。アチュミアノフが少し遅れてゐると、その間にキリリンはナヂエダの側へ寄つた。
「今晩は……」と、彼は軍隊式の敬禮をしながら言つた。
「今晩は。」
「さうだ……」と、キリリンは空を眺めて考へながら言ふ。「さうだ。」
立派な外套や氣取り切つた威嚴にも關らず、彼は少なからず狼狽してゐる。
「何が……さうなんです。」と、ナヂエダは、アチュミアノフが自分達二人を見てゐるのに目を留めながら言つた。
「どうもさうらしい。」と、士官はゆつくり言つた。「吾々の戀はまだ花の咲かない内に凋んで了つたのですね。どう解釋したら好いんでせう。コケツトリイですかな、婦人の外交手腕ですかな、それとも又……」
「それは間違ひです。どうぞあちらへ入らして下さい。」と、突慳貪に言つて、ナヂエダは彼の顔を胸惡げに眺めた、さうして、どうしてこんな人にこんな事を言はれるやうにしたものだらうと、自分で自分を怪しんだ。
「ほう。」と、彼は暫く黙つて立つてゐたが、やがて又口を開いて、「宜しい、まあ御機嫌の直るまで待

ちませう、御機嫌が直れば、そんなに恐い顔もなさるまい……さうやつて入らつしやれば、まあ段々に直りませう……左樣なら。」

彼は帽子の鍔へ手を上げた。そして叢を分け分け、何處かへ行つて了つた。

暫くすると、今度はアチュミアノフがおづおづと彼女の側へ寄つて來た。

「美しい晩ですなあ。」と、彼は言つた、アルメニアの訛りが少し有る。

彼は見てくれの好い青年である、着附けも意氣な趣味である。併し、ナヂェヂダはこの男の親父に三百ルウブルの借りがあるので、何となくこの男を見ると怨めしくなる。おまけに彼女は、今夜この、居留地のものでない男が、野遊會に招かれてゐるのを、少なからず不快に思つてゐるのだ。

「今日の野遊會は成功でしたな、さうぢやないですか。」と、暫く默つてゐた跡で、彼はかう言つた。

「左樣です。」と、彼女は同じた。さうして、ふと借金の事を思ひ出したといふ風に、陳忽にもかう言つた。「どうぞお店へお歸りなさいましたら、さう仰しやつて下さいまし、一兩日内にはラアェウスキイが三百……でしたか、お幾らでしたか、しつかりした高は覺えてをりませんが……きつとお拂ひに上りますからつて。」

「あなたがわたしの顔を見る度にそれを仰しやつて下さらなけりやあ、もう三百差し上げても宜しいんです。なぜあなたはさう散文的なのです。」

『へえ。あなたは詩がお好きで入らつしやいますの。』
『詩が好きでなければ、こんな、あなたの入らつしやる所へなぞ參りはせんです。』
ナヂエダは思はず吹き出した。と、或妙な考へが彼女の心中に閃いた。これを實行さへすれば、借金も總て濟しにする事が出來ると思つた。彼女は故々彼を引つ張り廻して、その揚句に捨てて了ひたいやうな氣がした。
『わたしは失禮ながらあなたに少々御忠告申し上げたい事があるのです……』と、アチユミアノフは恐る恐る言ひ出した。『わたしはキリリンに敵對してあなたの保護者となりたいのです。あの男はあなたの事に就いて實に怪しからん噂をして歩いてをります。』
『馬鹿が何を言つて歩かうと、あたしは少しも構ひません。』と、ナヂエダは冷やかに言つた。この青年と遊ばうとした一時の考へも、急に何處へか行つて了つた。
『もう降りませう……』と、女は言葉を續けて、『きつと探してゐるでせうよ。』
何れも魚のスウプは旨いと言つた。みんなは互に酒の杯を打ち合せた。この騒ぎに、ナヂエダもキリリンの事はすつかり忘れて了つた。
『喜ばしい野遊會だ、好い晩だ。』と、ほろ醉ひ機嫌のラアエウスキイが言ふ。『けれども、僕はこれらの總てにも增して、冬を取るね。(霜の細末は彼が海獺皮の襟に燦爛たり。)か。』

「それは趣味の問題だ。」と、フォン・コオレンが口を出す。

ライエフスキイは氣持が惡くなつて來た。彼の後からは火の熱が來る、前にはフォン・コオレンの憎惡がある。教育のある、頭の進んだ人間に卑まれる事は、少なからず彼の心を傷つけた。殊にフォン・コオレンの態度に幾分の根據有つて存する事は、彼自身も認めない譯には行かなかつたので、彼は堪へられなかつた。そこで、わざと感傷的な態度を執つて、かう言つた――

「僕は自然を熱愛する。僕は自分の博物學者でないのを悲む。僕は君が羨ましい。」

「あたしにはわかりませんわ。」と、ナヂェジダは口を開いた。「人間自身が苦しんでゐるのに、なぜ人が甲蟲や蚊を捕まへなきやならないんだか、それが分かりませんわ。」

ライエフスキイは女に同意した。併しながら、女の言葉に不注意な所のあるのを見附けたといふ風で、かう答へた。「甲蟲ぢやない。科學だ。」

七

十一時少し前に、馬車は歸りの用意をした。

キリラとアチミアノフとを除いて、總ての者はもう馬車に乘つて了つた。然るにこの二人は、土堤の一隅で、大聲に笑ひながら、追ひ駈けつくらをしてゐる。

『さ、諸君、急ぎませうぜ。』と、サモイレンコオは叫る。

『女に酒を飲ませるんぢやなかつた。』と、物靜かにフオン・コオレンは言ふ。

ラアエウスキイは、疲れて氣を惱みつつ、ナヂエヂダを呼びに行つた。

ナヂエヂダは、男が自分の方へ來るのを見ると、身輕に走り寄つて、その頭を男の胸に靠せかけた。

男は身を離して、突慳貪に『さ、確りしなくちやいかんぢやないか。』

女は男の怒つた顏に惡意を讀みとつた、そして氣が沈んだ。女は自分が餘りに奔放な振舞をした事に直ぐと氣が附いた。と、女の心は憂愁の氣に蔽はれて來た、一部は酒からである、そして一部は精神狀態からである。彼女は自分の前へ來た第一の馬車に乘つた。アチュミアノフも亦これに乘つた。

ラアエウスキイはキリリンと同車した。動物學者はサモイレンコオと一緒に乘つた、そして助祭は婦人達と一緒に。

『どうだ、猿共の言ふ事を聞いたかい……』と、フオン・コオレンは眼を塞いで、外套に身を折みながら口を開いた。『聞いたかい、彼等の言ふ事を。彼女は人間が苦しんでゐるのに、甲蟲の世話は燒きたくないと言ふ。猿共が科學者を批判する形式はいつでもこれだ。これらの動物に自由を與へて見給へ、きつと彼等は自分達の全く知らない事に就いて、或は罵り、或は情に激し、或は批評するだらう。彼等は君と握手して、君のした事業に就いて君に感謝しようなどとは、夢にも思つた事がないんだ。』

『何をそんなに激してゐるんだ？』と、欠伸をしながら、サモイレンコは尋ねる。『あの憫むべき婦人は、單に何か利口さうな事が言ひたかつたんだ、然るに君は今、それから夫れと作られる結論を引き出してゐる。君は一體あの男に就いて怒つてゐたんだ、處が今度はあの男の爲に、あの女に就いてまで怒つて了つた。あれでも、あの女は立派な婦人だよ。』

『もう澤山、澤山。あの女は普通の女さ、ただ腐敗してゐるだけだ、下劣なだけだ。アレクサンデル君、君にしても若し亭主を嫌つてふざけ廻つてる噂の女に出會つたなら、（家へ歸つてお働きなさい。）と、きつと君はさう言ふだらう。なぜ君はこの問題に就いては、いつもの勇氣を出して見れないのだ？』

『一體僕に何の關はりがあるんだ？』と、サモイレンコは怒つて言ふ。『君は僕に彼女を打てと言ふのか？』

『いや常に害毒を黙視し給ふなと言ふのだ。僕は科學者だ、君は醫者だ、社會は吾人を信じてゐる。ナデージダ・イワーノヴナの如き婦人の存在に依つて起るべき危險を社會に指摘して遣るのは吾人の義務だ。』

『フョードロヴナだよ。』と、サモイレンコは誤りを訂正した。『さうして社會はどうすれば好いのだ？』

『それは社會の手腕に在るさ。僕の意見に依ると、最も強い最も確かな手段は暴力だ。先づ彼女を亭主の許へ軍隊の手で歸らせるんだ、若し亭主が彼女を受け取らなかつたら、懲役に遣るか、さもなくば懲治監へ送るんだ。』

『ふう。』と、サモイレンコォは溜息をついた。彼は一寸の間默つてゐたが、やがて物靜かにかう言ふ。
『二三日前に君はラアエウスキイの如き人間は絕やして了はなければいかんと言つたね……若し……政府なり社會なりが、君に彼を滅ぼせと委任したら、君は實際遣る積りか。』
『ああ、僕の腕は決して震へないね。』

八

ラアエウスキイとナヂエダは、自分の家の、暗い、狹い、陰氣な部屋へ這入つた。二人とも默つてゐる。ラアエウスキイは蠟燭を附けた。ナヂエダは帽子も外套も取らずに腰を卸して、悲しげにおどおどした目を上げて、ラアエウスキイを見た。
彼は彼女が說明を求めてゐるのだといふ事を知つてゐる。併しそれを與へるのは面倒でもあり且無益でもある。尤も野遊會の會場に於ける自分の荒い爲打ちに就ては、彼自らも窃かに悔んでゐるのだ。
彼はふと上衣の衣兜に手を突つ込んだ。すると手紙が手に觸つた。ナヂエダの亭主の死を知らせて來た手紙だ。彼はもうそれを見せて了はうと思つた。
『愈々問題を一掃すべき時が來た。』と、彼は考へる。『儘よ、見せて了へ。』
彼は手紙を引つ張り出して、それを女に渡した。

「それをお讀み」と、彼は言ふ。「御前に關係した事だ。」

手紙を女に渡して、彼は自分の書齋へ引つ込んだ、そして長椅子の上へ横になつた。

ナヂェェダは手紙に眼を通した、讀み終ると、天井が落ちて來るやうな氣がした、壁が四方から押し寄せて來るやうな氣がした。

凡ての物が、俄に狹く、暗く、恐ろしくなつた。彼女は忙しく三度十字を切つた、そして聞えるか聞えないか位の聲で念じた、「神よ、彼の靈魂を休らはせ給へ……神よ、彼の靈魂を休らはせ給へ……」

それから泣き出した。

「ワアニャ、」と、女は呼んだ。「イヷン・アンドレイッチ。」

返事が無い。けれども、ラアエウスキイはきつと這入つて來て呼ばれた事と信じて、彼女は子供のやうにしやくり泣きをし始めた。

『なぜあの人が死んだなら死んだで早くさう言つて下さらなかつたの。あたしそれを知つてれば、野遊會になんぞへ行くんぢやなかつた。あたしあんなに騷ぐんぢやなかつた……男の方つたら、みんなあたしに親切な事を仰しやるんですもの。ああ罪だわ、罪だわ。あたしを救つて、ワアニャ、どうぞあたしを救つて……あたしもう死にさうだわ……あたしもう……』

ラアエウスキイは女のしやくり泣きを耳にした、彼は恐ろしい壓迫を感じた、彼の心臟は猛烈に鼓

動した、彼は悲しさうに起き上つて、女の部屋へ這入つて來ると、暫く默つて立つてゐたが、やがて暗闇の内に臂掛椅子を探り當てて、これに腰を卸した。

『この家は牢獄だ……』と、彼は思つた。

『どうしても、もう逃げなけりやならん……もうどうしても……』

背障なしに行くにはもう時間が遲かつた、町の料理屋で起きてる家はもう一軒も無かつた。彼は又横に倒れて、指を耳の穴に突つ込んで、女のしやくり泣きを聞くまいとした。やがてサモイレンコオの處へ行かうと決心した。

ナヂエダの前を通つて又ナヂエダの氣を亂すまでもないと、窓から庭へ飛び降りて、塀を乘り越えて往來へ出た。眞つ暗だ。

汽船が一艘丁度今著いた所だ、明かりに依つて判斷すると、大きな旅客船だ。繰り出される錨鎖の音がよく聞える。小さな赤い明かりが海岸から汽船の方へ向つて動いて行く、それは稅關のボオトだつた。

『船客はみんなキャビンでよく寢てゐるわい……』ラアエウスキイは彼等の安眠を羨んでかう思つた。

サモイレンコオの家の窓は明いてゐた。

ラアエウスキイは覗き込んで見た、眞つ暗だ、そして靜かだ。

『アレクサンデル君、もう寢て了つたか。』と、彼は聲を掛ける。『おい、アレクサンデル君。』

『誰だ。どうしたんだ……』

『僕――ラアエウスキイ。』

直ぐと戸が明いた。柔かなランプの光がぱつと差すと、柄の大きなサモイレンコオが、眞つ白な寢物を着て、寢帽子を頭に載せた儘で出て來た。

『何か急用でも出來たのか。』と、彼はまだすつかり目が覺め切れないので、深い息をしながら、眼をこすりこすり尋ねる。『待ち給へ、今表を明けるから。』

『いや、うつちやつといて呉れ給へ、僕は窓から飛び込むから……』

ラアエウスキイは、窓を登つて中へ這入ると、行きなりサモイレンコオの手を掴んだ。

『アレクサンデル君。』と、彼は震へ聲で泣くやうに言つた。『どうか僕を救つて呉れ給へ、僕は君に懇願する、僕は君に哀願する。この境遇には僕もう一刻も堪へられない。これがこの上少しでも續いたら、僕は首を縊つて了ふ。』

『待ち給へ……君は何の話をしてゐるのだ。』

『まあ蠟燭を附けて呉れ給へ。』

『おお、おお。』と、吐息をつきながらサモイレンコオは蠟燭を附けた。『驚いた……一時だぜ。』

『勘忍して呉れ給へ、僕は自分の家になるに堪へんのだから。』と、ラアエウスキイは言ふ、サモイレンコオが前にゐるのと、明かりが前にあるので、稍氣が落ち著いて來た。『君、アレクサンデル君、君は僕の第一の、僕の唯一の友達だ……僕の總ての希望は君に在る。君の意志の有ると無しとに關はらず、どうしても君は僕を救つて呉れる義務を持つてる。僕はどうしてもこの土地を去らなければならないんだ。金を貸して呉れ給へ。』

『驚いた……』と、サモイレンコオは身體を搔きながら、吐息をついて、『僕は丁度今寢ついたばかりの處を汽船の笛で起されて了つたんだ。すると君が遣つて來たんだ……一體どの位入るんだ。』

『少くとも三百ルウブルは入るね。あれにも百ルウブル位は置いて行かなきやならないし、あとの二百ルウブルは僕の旅費にたつぷり入るからね……君には既にもう四百ルウブルから借りがある、けれどもそれは皆きつと送つて寄越すよ……みんな……』

サモイレンコオは、兩方の頰髭を片手で摑んで、脚を廣げて、何か考へ出した。

『さう……』と、彼は躊躇して口籠つた。『三百……はちよいと手許に無いが……誰かから借りて上げよう。』

『では、お願ひだ、借りて呉れ給へ。』サモイレンコオの顏に、自分の爲に盡す色のあるのを見て取つて、ラアエウスキイはかう言つた。『どうか借りて呉れ給へ、僕きつと君に返すから。ペテルブルグへ著

き次第、直ぐ君の處まで遣らう。それは少しも心配ないよ。サアシヤ。』と、彼は稍氣も晴やかになつて、

『酒を一杯御馳走になりたいね。』

『お安い事だ……』

二人は食堂へ這入つた。

『そしてナヂエダは如何なるんだ？』と、サモイレンコは、葡萄酒を三本に桃を一皿、食卓の上に出しながら尋ねる。『あの人はこの土地に一人殘して置く譯か。』

『いや僕は、總てを解決する、總てを……』と、ラアエウスキイは思ひがけぬ嬉しさに胸を溢れさせて、『歸つたら金を送るのさ、それから僕の處へ來るといふ譯さ……そこで二人は和解するといふ順序さ……

……朋友、君の健康を祝す。』

『待ち給へ』と、サモイレンコに言ふ。

『先づ初めにこれを飲んで見給へ……これは僕の葡萄園で出來たんだ。この瓶はナツラナゼの葡萄園から來たんだ、それから、これはアハツロフの葡萄園から來たんだ……三本を飲み較べて見て、そして君の批評を聞かして呉れ給へ……僕の所のは少し酸味があると思ふが……どうだらう。』

『さう、お蔭で助かつた、アレクサンヂェ君……有難う……僕は新しい人間になつたやうな氣がする。』

『少し酸味があるだらう。』

『いや、僕には分からない。併し君は愛すべき人だ、異常な人物だ。』

その青白い、興奮した、親切らしい顔を眺めて、サモイレンコオは、フォン・コオレンが斯くの如き人間は滅盡して了ふが好いと言つた言葉を思ひ出した、そして、彼にはラアエウスキイが、誰の自由にもなる、弱い、味方の無い子供のやうに見えた。

『ベテルブルクへ行つたら、おつかさんと和睦するんだらうね、さうぢやないか。』と、サモイレンコオは言ふ。『あれは宜しくない事だ。』

二人は暫く言葉が絶えた。

最初の一本を空にして了ふと、サモイレンコオは言つた――

『フォン・コオレンとも和睦しなけりやいかんね。君達二人は人間の内でも最も立派な人間ぢやないか、最も才學に秀でた人間ぢやないか、然るにその立派な人間二人が、狼のやうに睨み合つてゐるといふのは可笑しい。』

『そりや全くだ、彼は人間の内でも最も立派な人間だ、最も才學に秀でた人間だ。』と、ラアエウスキイは同意した、『彼は全て人を褒めたくなつた、總ての人を許したくなつた。』彼は非凡な人間だ、けれども彼と歩調を一つにして行く事はどうしても僕に出來んのだ。彼と僕とは餘りに性格が違つてをる。僕は弱い、人に附く質だ――恐らく弱な時には、彼の爲に僕の手を貸さうとする時さへあるだら

うと思ふ、けれども彼は侮蔑を以て僕の手を斥けるだらう。」

　ラアエウスキイは葡萄酒をちびりちびり飲んだ、部屋をあつちへこつちへと歩いた、そして急に立ち止つた。

「僕はフォン・コオレンをよく知つてゐる。彼はしつかりした、強い、專制的な性質だ。彼が始終、探檢探檢と口癖のやうに言つてるのを君は聞いてるだらう――あれは決して空な言葉ぢやないんだ。彼は實に沙漠を要する人なんだ。月光の夜を要する人なんだ。廣い天空を要する人なんだ。腹が減つた、病氣になつた、疲れた案内者や人夫共が、彼の周圍に眠り倒れてゐる時でも、彼は唯一人、スタンレエのやうに、眼を覺まして、椅子に腰掛けてゐて、自分が沙漠の王にでもなつたやうに感ずる人なんだ、この世界の主人にでもなつたやうに感ずる人なんだ。彼は常にどん／＼どん／＼どん／＼進んでゐるんだ。彼の部下は一人又一人と呻いて斃れる。けれども彼はどんどん突き進んで行くんだ。終ひには彼自身も亦死んで了ふのだらう、しかも尚彼は、君主として、王として、永久に殘るのだらう、彼の墓の上の十字架は、三十哩四十哩の遠くからキャラヴァンの目につくのだらう、而して荒漠たる平野を一人で支配するのだらう。僕はこのやうな人がなぜ軍人にならなかつたかと非常に殘念に思ふ。彼はきつと立派な將軍になり得る人なんだ。彼は自分の騎兵を川へ叩つ込んで、死骸の橋を作る人なんだ……ああ僕は實に、實に、よく彼を知つてゐる。彼は何の爲にこんな所で金を使ふ必要があるの

だ。こんな所で彼は抑も何を求めようとしてゐるのだ。』

『海のフオオナを研究してるのだ。』

『いや、その事なら僕の方がよく知つてゐる。』と、ラアエウスキイは吐息をついて言つた。『僕が汽船の中で會つた或學問の有る紳士は、僕にかういふ事を言つた、黑海には極めてフオオナが少ない、それは硫化水素が過多な爲に、海底で有機的の生活をする事が出來ないからださうだ。總ての動物學者はネエプルスかギラ・フランカの生物學地で研究をしてをる。然るにフオン・コオレンは孤獨だ、頑强だ。彼は誰も黑海で研究する者が無いから、それで自分一人で研究してるのだ。彼が大學の爲事をうつちやつて了つたのも、同窓と一緒に何かするのが厭だからだ。彼は先づ第一に專制君主なんだ、それから第二に動物學者なんだ。僕の言葉を記憶して置き給へ、彼は遠からず一大事業を成し遂げるに相違ない。彼は探檢から歸つたら、大學に一大改革を起さうと夢想してゐるんだ、專制君主の氣性は、戰爭に於ける場合も、科學に於ける場合も、等しく强い。彼がこの小さな汚ない臭い町に二夏を送つたのも、都に於いて第二人者たらんよりは、寧ろ村に於いて第一人者たらんとしたからだ。この土地にゐれば、彼は王だ。鷲だ。總ての住民が一度に彼に吠え掛らうとも、彼にはそれらを威服するだけの力があるんだ。彼は總ての事を自分の一身に背負つて立つて、その上他人の事に干渉するんだ。然るに僕は彼の前足を避けてをる、彼はそれを知つてゐるんだ、だから僕が嫌ひなんだ。僕のやうな

人間は滅ぼして了ふか、監獄へでも送つて了つた方が好いと、君に言ひはしなかつたか。』

『言つたよ。』と、サモイレンコは笑ひながら頷いた。

　ラアエウスキイも續いて笑つた、そして又葡萄酒を飲んだ。

『彼は理想に於いても專制君主だ。』と、彼は桃を一つ取りながら言ふ。『公業の利益の爲に働く普通の人間なら、自分の隣人の事を思ふのが先づ當り前だ。然るにフオン・コオレンにとつては、人間は犬の子だ、人生に於ける彼の目的と交渉があるには、餘りに些細なものだ。彼は永遠に働いてゐる人だ、縱ひ隣人に對する愛が無くとも、この探検を續けてゐる人だ、それが爲に身命を危くしても敢て顧みない人だ。彼は無形の目的の爲にそれを行るのだ、理想の爲にそれを爲るのだ。彼の理想は一般の人類だ……特殊な個々の人間は、悉く自分の奴隷と心得てゐるんだ、荷を負ふ駱駝と心得てゐるんだ、選擇の材料と心得てゐるんだ。彼等を滅ぼすも好い、彼等を懲役に遣るも好い、彼等を使役するも好い……人類全體を好くしようといふ眞實な望みを持つて遣ることなら、何をしても好いといふのだ……しかも、その人類といふのは何んだ。一つの幻影に過ぎないものぢやないか、一の蜃氣樓に過ぎないものぢやないか……專制君主は常に夢想家だ。君、僕は彼をこの位よく知つてをる。僕は決して彼の重要な人物たるを否認するものぢやない。世界は常に斯かる人物に依つて保たれて行くのだ、世界が若し僕等の如き弱い人間に支配されたら、僕等の親切氣と好意とは、きつとこの世界に染みをつけ

て了ふだらう、丁度壁の絵に蝿が染みをつけるやうに。』

ラアエウスキイはサモイレンコオの直ぐ側に腰を掛けた。そして誠實な感動を以てかう言つた。

『僕は、空虚な、値打の無い、失敗した人間だ。僕が呼吸するこの空氣、この酒、戀愛……一言にして言へば、總ての僕のライフ、これを僕は虚僞だの安逸だの卑怯だのといふ高い價を出して買つたのだ。僕は自分を欺いてゐたやうに、人をも欺いてゐた。僕は苦しんだ、併しながら僕の苦痛は安價な下等な苦痛だ。僕はフオン・コオレンの敵意の前に恐懼して頭を下げるね、それは僕が自分を憎むからだ、自分を賤しむからだ。』

彼は立ち上つて、激昂しながら部屋を歩き廻つた。

『僕は自分の缺點を明かに知り且認め得た事を喜ぶ。それは僕を新しい努力に振ひ立たして與れたからだ。君は僕が如何に熱し、如何に渇して自分の復活を望んでゐるかを知つてはゐまい。僕は誓ふ、僕はきつと男になる。きつと成る。酒の勢か、實際の感情か、それは知らぬが、僕は今夜君と共に過ごしたやうな、こんな明るい清い時を過ごした事は、未だ嘗て無かつた。』

『もう君寢る時刻だよ……え、君。』と、サモイレンコオは言ふ。

『さう、さう……失敬した……今直ぐ。』

ラアエウスキイは忙てて帽子を探し出した。

『感謝する……』と、吐息をつきながら口籠つて、『實に感謝する……親切と優しい言葉とは慈善以上だ。君は僕に新生涯を吹き込んで呉れた。』

彼は帽子を見つけると、突つ立つて、恐る恐るサモイレンコオの顏を見た。

『アレクサンデル・ダビドヰツチ君。』と、彼は哀願するやうな聲で言つた。

『何だ。』

『今夜君の所へ泊めて呉れないか。』

『好いとも……なぜ惡い。』

かくてラアエウスキイは長椅子の上へ横になつた。

九

野遊會のあつた日から三日目の立つと、マリア・コンスタンチノウナが不意とナヂエダの處へ遣つて來た。

そして挨拶もせずに、行きなり彼女の兩手を攫んで、自分の胸へ押しつけた。

『まああなた。』と、彼女は深く感動してゐる樣子で、『わたし胸がどきどきしてをりますの。あの可愛い親切な軍醫さんは、あの方がきのふ宅のニコヂンの處へ入らして仰しやるには、あなたの旦那樣が

お亡くなりなすつたつて。さうなんですの、ねえあなた、さうなんでございますの、本當なんでございますの。』

『ええ本當です……宿は亡くなりました。』と、ナヂエダは答へた。

『大變ですわねえ、大變ですわねえ、ねえあなた。けれども惡い事の中には、きつと又好い事がございますわ。あなたの旦那樣はきつと好い方で入らしたんですわね、好い方はこの現世より天國に澤山御用がありなさるんですわ。』

マリアの顏の筋が震へ出したかと思ふと、彼女は（巴旦杏笑ひ）といふのをやつて、『けれども、これであなたも自由の身體におなりなすつたといふもんですわ、ねえあなた。』と、息を切つて熱心に言ふ。『もうこれからは威張つて、頭を持ちやあげて、大つぴらに世間の人達の顏を見て步く事が出來ますわね。神樣も、世間の人も、今ではあなたとラアエウスキイさんが御一緖におなりなさるのを待つてゐるばかりですわ。好い事ねえ。わたくし嬉しくつて、胸がどきどきして、なんにも言へませんの……わたしあなたのお仲人を致しませう、ねえあなた……ニコヂンもわたくしも本當にあなたを愛してゐるんですよ、ですからどうかわたくし共に御法通りの純潔な式をさせて下さいましな。いつ、式はいつになすつて。』

『そんな事ならわたくし少しも考へてをりませんの。』と、ナヂエダはマリアの手を放して言ふ。

『いいえ、あなた、考へて入らつしやらない筈はございませんわ。』

『でも本當に考へてゐないんですもの。』と、ナチエダは笑つた。『なぜわたくし共は結婚しなけりやならないんでせう。わたくし少しもその必要を認めませんわ。今まで通りに遣つて參れば、それで少しも差支へはないと思つてゐますの。』

『何でございますつて。』マリアは恐怖して絶叫した。『まあ、あなたは何をおつしやるのです。』

『結婚をして何の好い結果が得られませう。却て惡くなるばかりですわ……わたくし共の自由といふものが無くなつて了ふ譯ですもの。』

『何をおつしやるんです、あなたは。』と、マリアは後退りをしながら手と手を握り合せて絶叫する。

『まあ氣をお落ちつけ遊ばせ。あなたは激して入らつしやる。』

『何で氣を落ちつけるのでございますの。わたくしは今までにまだ一度も眞の人生といふものを味はつた事はございませんわ。』

ナチエダは考へた、實際自分は今までに、一度も自分の生活といふものを味はつた事はなかつた。高尚な學校を卒業すると、自分の好かない男と結婚した。それから、ラアエウスキイと懇ろになつた、そしてこの陰氣な物寂しい海邊に彼と一緒に居通しで、始終何かを望んでゐる、望んでゐる。これが果して人生といふものだらうか。

『結婚するのが本當かも知れないねえ……』と、彼女は獨語を言つた、併しながらふとキリリンとアチユミアノフとの事を考へ出して、赤くなつた。『いんえ、駄目だわ。ラアエウスキイが跪いて頼んでも、拒絶しなけりやならない。』

マリアは、悲しさうな眞面目な顔をして、空を見詰めながら、長椅子に坐つてゐたが、やがて立ち上ると、

『では左樣なら……』と、冷かに言つた。

『御心配をかけて濟みませんでした……誠に申上げにくい事でございますけど、只今限りわたくしあなたと御交際を絶たなきやなりませんわ。ラアエウスキイさんは、わたくし何處までも御尊敬申し上げます、けれども、あなたを宅へ御入れ申す事はもうどうしても出來ません。』

彼女は自分の調子の眞面目なのに壓されるもののやうに、嚴肅にかう言つた。が、彼女の顔は又震へた。そして優しい同情のある顔附きをした。彼女はびつくりした女に兩手を伸ばして、哀願するやうに言つた。

『ねえあなた、ねえあなた、わたくしあなたのおつかさんになりませう、でなければ姉さんになりませう……少しの間ね。』

ナヂエダは自ら憫むの情に心緒の戰のくを覺えた。自分の本當の母が生き返つて來て、自分の前に

立つたやうな氣がした。彼女は激しくマリアを抱き締めて、頭をその肩に擦りつけた。二人は聲を上げて泣き出した。

　それから二人で長椅子へ腰を卸して、また暫くの間は泣き伏してゐた。互に顔を見ないで、一言も口が利けないで。

『ねえあなた、可愛い方。』と、マリアは漸く口を切つた。『わたくしもう容赦なしに、飾りの無い本當の事を申し上げて了ひませう。』

『どうぞ、どうぞ。』

『かうなんでございますよ、あなた。この町であなたを待遇する女は、わたくしたつた一人だといふ事は、あなた御存じで入らつしやるでせう。あなたが入らしつたその日から、わたくしあなたにはびつくりしてをりますの。けれども外の方のやうにあなたを卑しむ事はどうしてもわたくしに出來ませんでした。わたくしラァエウスキイさんの爲に悲みましたわ、息子の……おつかさんの無い、無經驗な、弱い、外國へ來てゐる青年の……爲にでも悲むやうに、わたくし悲しみました、悲しみましたわ……宿はわたくし共があなたと御交際する事に反對でございました……けれどもわたくし宿に說きましたのよ、そして到頭負かしましたのよ……それから、初めて、わたくし共はラァエウスキイさんを内へお入れ申したんでございます、勿論それと一緒にあなたもね。でございませんと、ラァエウスキイさ

んは侮辱されたとお思ひでせうと存じましてね。わたくしにはそら娘が一人ございませう、息子が一人ございませう……まだ優しい、子供らしい心でございますわ、純潔な心でございますわ、ねえ……あなたを宅へお入れはしたものの、全く子供の爲には懊へましてございますのよ……そりやあなた母に一度なつて御覽なされば、この心配は直ぐお分かりでございますわ……するとわたくしがあなたを内へお入れしたといつて、みんなが驚いたんでございます……御免遊ばせ……みんなが當てこりすを申すんでございますよ……勿論、いろんな噂を致しましたわ、それは御存じで入らつしやるわねえ……わたくしも心の底ではあなたを責めてをりました、けれどもあなたは全く不幸な方でございます、でございますから全く お氣の毒になりますわ……』

『けれどもなぜでございませう、なぜでございませう。』と、ナヂェダは手足を懊はせながら詰め寄つた。『わたくしは誰かに何か惡い事でも致しましたらうか。』

『そりやあなたは罪人ですわ。あなたは祭壇の前であなたの旦那樣になすつた誓ひをお破りなさいました。あなたにさへ逢はなければ、生涯の妻を正式に貰ふ事の出來た立派な青年を、あなたは誘惑なさいました……あなたは男の青春をお破りなさいました。男が惡いんだなんて仰しやつても、そりやわたくし信じませんわ……男といふ者は元々家庭に不注意な者なんでございます、男といふ者は頭で生きてゐるもんでございます、心で生きてゐるものぢやございません。男には分からない事が澤山に

ございます、女には何でも分かります……どんな事でも女を頼りにしないものはございませんわ。いろんな事が女には任されます、いろんな事が女からは要求されます。ねえあなた、女が本當に男より馬鹿で弱かつたら、何で神様が育児の大任を女にお任せなさいませう。だのに、ねえあなた、あなたは遠慮といふものをお忘れなすつたんでございます。これが普通の女なら、あなたと同じ境遇にゐて御覧遊ばせ、閉ぢ籠つて内にばかり引つ込んでゐますわ。そして世間の人は、主なる神の殿堂で黒い着物を着て、泣いてゐる、顔色の青ざめた女を想像して、心から言ふでございませうよ、（おお神よ、罪を犯した天の使は今あなたの御許へ歸りつつあります……）つて。けれども、あなたはさうぢやございませんのね、あなたは大びらね、あなたは御自分の爲すつた事が御自慢のやうね。あなたは平氣でふざけたり笑つたりして入らつしやるのね、だからわたくしあなたを見てゐると恐ろしくて慄へて來ますわ、あなたが宮へ入らつしやると、今にも天から雷が落ちて來て、わたくしの内を潰してしまやしないかと存じまして。いいえ、あなた、何も仰しやつちや厭、なんにも仰しやつちや厭。」ナチエンが何か言はうとするのを見て、急いでマリアは語を續ける。「わたくしの言ふ事を信じて頂戴、わたくしは決してあなたを穢さうなどとは思ひません、わたくしはあなたのお心にある眞理を少しでも隱さうなどとは致しません、聽いて頂戴、ねえあなた……神様は在らゆる罪人に符號をお附け遊ばします、そしてあなたにもお附け遊ばしました。あなたのお着物は目に立ちます。」

自分の着物に就いて常に高尚な意見を抱いてゐるナヂエダは、覺えず泣くのを止めて、びつくりした顏をしてマリアを見た。
『ほんとに門に立ちます。』と、マリアは言葉を續ける。『世間はみんなあなたのお身なりであなたの行ひを判斷してをりますわ。あなたのお姿を見ると、みんな冷笑したり肩を縮めたり致しますわ、そのたんびにわたくしあなたの爲に悲むんでございますよ。それに……御免遊ばせ……あなたは可哀さうにちつともラアエウスキイさんを見てお遣り遊ばさないのねえ。あの方の襟飾りが眞直ぐになつてゐた事は唯の一度もございません、きつとお宅でうつちやり放しにされて入らつしやるんですわね。あの方が時間とお給金を半分お茶屋で使つておしまひなさるのに、ちつとも不思議はございません。まあお宅はどうでございます……あの五味は、あの蠅の死骸は。あなたは卓をお掃除遊ばした事さへないんでせう。ねえあなた、夫たる者がさういふ事を見なければならない道理はございません……何も一家の妻たる者は清潔の天使にならなければなりません。わたくしなどを御覽遊ばせ、毎朝夜の明けない内に起きて、直ぐと冷たい水で顏を洗ひます、そしてニコヂンに少しでも睡さうな顏を見せないやうにしてゐます……』
『けれども、そりやみんな無意味な事ですわ。』と言つて、ナヂエダは又泣き出した。『わたくし幸福でさへあれば……でも、わたくし不幸なんですもの。』

「さう、さう、そりやあなたは全く不幸ですわね。」と、マリアは吐息をつくやうに言つた。思はず貰ひ涙を溢しながら。「そして將來には猶惡い事が待ち構へてをりますのね……寂しい老年、病氣、それから、恐ろしいさばきの庭の前の御勘定……おお、恐ろしい、恐ろしい。ところが今運命の神樣は、あなたに救ひの御手を貸して下すつたんですわね、でございますから、決してそれを拒ね退けてはいけませんよ。御結婚遊ばせ、出來るだけ早く御結婚遊ばせ。」

「さうです、さうです、それが正當です。」と、ナヂェダは言ふ。「けれどもそれは出來ません。」

「なぜ。」

「出來ません。それはあなたの御存じない事なんです。」

ナヂェダは、キリリンに就いて、若いアチユミアノフに就いて、借金の皆濟法に關して考へついた恐ろしい計畫に就いて、マリヤに話がしたかつた。けれども、彼女はすつかり氣が滅入つて了つた。彼女は、甚だしい羞恥の念に襲はれて、しやくりあげて泣き出した、もう一言も口を利く事さへ出來なくなつた。

「わたくしはもう立ちませう。」と、彼女は口の内で言つた。「イワンはここにをれば宜しうございます、わたくしはもう立ちませう。」

「どちらへ。」

『露西亞へでございます。』
『でもあなたは露西亞でどうしてお暮らし遊ばすお積り。なんにも持たないで入らしつて。』
『飜譯でも何でも致しますわ、でなければ……わたくし貸本屋を始めますわ……』
『馬鹿な事をおつしやい、貴方。貸本屋をなさるにもお金は入りますよ。さあ、もうわたくしはお暇致しますから、氣を落ち着けて、わたくしの申し上げた事を跡でよく考へて見て下さいまし。そしてあした、宅へお出で遊ばせな。お待ちしてをりますわ。では、左樣なら、わたくしの可愛い天使さん。さ、キッスさせて頂戴。』
マリアは、ナヂエダの額に接吻をして、十字を切ると、靜かに部屋を出て行つた。
いつの間にかもう暗くなつてゐた。オルガは臺所にランプを附けた。
ナヂエダはまだ泣きながら、寢室へ這入つて、横になつた。熱が出て來たやうだ。彼女は横になりながら着物を脫いだ、脫いだ着物を足の方へ投げつけた、そして毛布の下に身を屈めた。
『わたくしが拂ひます。』とばかり、彼女は譫語の言ひ續けであつた。彼女は、自分が或病氣の婦人の側に坐つてゐて、その婦人が自分自身であるやうな氣がした。
『わたくしが拂ひます。お金の事なんか考へるのは馬鹿です、わたし、……わたし、ここを立つて、ペテルブルクからあの人にお金を送ります。初めに百ルウブル……それから又百ルウブル……そして

それから又、百ルウブル……』

ラアエウスキイは、その晩夜更けて歸つて來た。

『初めに百ルウブル……』と、ナヂエダは彼に向つて又繰り返した。『それから又、百ルウブル……』

『御前は規尼涅を飲むと好い。』と言ひながら、彼は考へてゐる。(明日は水曜で船が出るけれども、俺はそれに乘れない。だから土曜日までここにゐなけりやならん。)

ナヂエダは膝まで起き上つて、「イル、トロツトォレ」の一節を口笛で鳴らし始めた、甚しく調子が外れてゐる。顏を空ざまにして手を垂れた形は、墓石の上の童子か天使のやうに見える。

『また熱が出たんだね。』と、ラアエウスキイは女に向つて言ふ。

『何て仰しやつて。』と、笑ひながら、明かりを避けて眼をつぶりながら、ナヂエダが尋ねる。

『何でもないさ。あすの朝お醫者さんに來て貰はう。今夜はもうお寢。』

彼は枕を取つて、戸口の方へ行つた。

彼は愈々女を捨ててこの土地を去らうと堅く決心してから、ナヂエダの顏を見ると、罪惡の念に交へて憐憫の情が起つて來るやうになつた。彼は女の前にゐると、何だか自分が恥づかしいやうな氣がした。彼は戸口の處で立ち止つて、そして彼女を振り返つて見た。『野遊會の日は僕激してゐたから、何か亂暴な事を言つたかも知れない。勘忍して呉れ給へ。』

かう言つて、彼は書齋へ引込むと、直ぐ横になつた、けれども、餘程暫くの間眠られなかつた。
明くる朝サモイレンコオは、祭日だといふので、正裝で遣つて來て、ナヂエダの脉を見、舌を檢査した。彼が寢室から出ようとすると、敷居の處にラアエウスキイが立つてゐて、氣遣はしげに『心配な事は無いかね。』と尋ねた。
『安心し給へ、少しも危險な事はない。』と、サモイレンコオは言ふ。『なあに普通の熱さ。』
『ナヂエダの事ではないよ。』と、ラアエウスキイは氣を苛立てて、眉を顰めながら言ふ。『金は出來たのか。』
『や、さうか、失敬。』と、サモイレンコオはまごついて囁いた、戸口の方を見返りながら。『どうか勘忍して呉れ給へ。誰も明いてる金を一文も持つてゐないんだ。けれども僕は七處借り八處借りをして……漸くみんなで百十ルウブルだけ拵へた。けふ又誰かに賴む積りだ。少し待つてゐて呉れ給へ。』
『けれども土曜日がぎりぎり結著だぜ。』と、ラアエウスキイは氣を苛立てて、身を慄はせながら囁く。『在らゆる聖徒に誓うて、土曜日より遲るる可からずだよ。土曜日に出發が出來なければ、僕はもう一文も入らない……一文も。醫者に金が無いといふのが、僕には不思議でならん。』
『さうとも、さうとも。』と、サモイレンコオは苦しさうに早口で囁く。『みんな僕の處から借りて行つて了つたんだ。もう七千ルウブルから出てゐるんだ、そして僕自身は借金だらけなんだ。これは果し

て僕の爲だらうか。』
『土曜日にはきつと持つて來ると言ひ給へ。』
『まあ遣つて見よう。』
『僕は君に哀願する、ねえ君、金曜日の朝にはきつと僕の手に金が這入ると誓つて呉れ給へ。』
サモイレンコオは腰を掛けて、處方を書いて、そして歸つて行つた。

十

『猶太にでもやつて來たやうだね。』正裝のサモイレンコオが這入つて來た時に、フォン・コオレンはかう言つた。
『いや、直ぐ門を通つたから、動物學者はどの位進んだか見たいと思つてね。』と言ひながらサモイレンコオは動物學者のお手製に成つた大きな白木の机の側に腰を卸した。
『どうした、探究？』と、窓の側に坐つて、何か寫し物に餘念のない助祭に向つて會釋をする。『僕はちよいとここに坐らして貰つて、それから大急ぎで、内へ行つて晝飯の仕度をしなくちやならん。もう直ぐ時間だ……お邪魔か？』
『いんや決して。』と、動物學者は答へる。細かい字で一杯何か書いてある紙を卓の上に展げながら、

『今筆記で忙しいのさ。』

『いや……それは、それは……』と、サモイレンコオは吐息をつくやうに言つて、徐ろに卓の上から埃だらけな一冊の本を取り上げた、その本の上には乾燥した昆蟲が一つ乘つてゐた。

『この小さな綠の甲蟲が步き廻つてゐる内に、突然君に捕まる運命に會するとするね。僕はその驚きを想像する事が出來る。』

『さう、そりや出來るだらう。』

『自然はこの蟲に何等か自衞の武器を與へてゐるかね。』

『無論さ。自ら守る爲に、そして他を襲ふ爲に。』

『さう、さう、さう……凡そ自然界に存在する物で、何かの役に立たないものは一つも無い、存在の理由を說明する事の出來ないものは一つも無い。』と、サモイレンコオは吐息をつく。『併しながら、茲に一つ何にもならん事がある。君は才人だ、一つこれを說明して吳れ給へ。好いかい、茲に或獸がある、この獸は非常に美しい、しかも鼠より大きくない。處がこいつ非常に害をする。若し一羽の鳥がこの獸の目に這入つたとするね。この獸は直ちにそれを捕まへて、喰つて了ふんだ。それ許りではない。若し、その鳥の巢の中に卵が在るのを見つけたとするね。この獸はもう空腹ではないのだよ、だのに彼はその卵を毀して、足でもつて蹴散らかすんだ。やがて今度は蛙に會ふ、と、これをおもちや

にして、死ぬまで責め惱ますんだ。それから自分の身體を舐め廻して、又出掛けるんだ……そして道にある物は何でも毀して了ふんだ、何でも滅ぼして了ふんだ……狐の穴を荒らす、蟻の塔を毀す、蝸牛を二つに嚙み裂く……鼠と鬪ふ、二十日鼠や蛇を絞め殺す。この獸の全生涯は一の間斷なき虐殺の歴史だ。斯やうな動物の存在にも君は理由を見出だす事が出來るか。何が故に斯かる動物は造られたのか。』

『今君が話した通りの獸が特にゐるかどうか、それは僕は知らん。』と、フオン・コオレンは答へる。『が併し、今の動物のするやうな事をしてならんといふ法は無い。彼は鳥を捕まへた、それは鳥が不注意だつたからだ。彼は卵を毀した、それは鳥が巣を隱すのが拙かつたからだ。蛙はきつとその皮膚の色に缺點が有つたに相違ない、さもなければ見つかる筈が無いんだ。以下總て同じさ。君のいつた獸は、只弱い者、不熟練な者、不注意な者——一言にして言へば、身に缺點の有る者、卽ち自然がその永存を適當と認めない者のみを殺すんだ。利口な者、強い者、注意深い者、發達した者は決して殺されやしないんだ。だから君のいふその動物は、その何者たるかは知らんが、萬物を完全にするといふ大目的の爲に盡してゐるのだ。』

『さうか、分かつた、分かつた。時に……』と、サモイレンコオは不意に言ひ出した。『金を百ルウブル貸して呉れないか。』

『好いとも。君等が害物だと思つてる小さな動物の中には、研究して見ると、隨分面白い物がある。例へば鼹鼠だ。彼は有害な昆蟲を根絶やしにして與れるから有用だといはれてをる。そこでかういふ話がある、或獨逸人がホルヘルム大帝に鼹鼠の皮で作つた外套を獻上した、すると皇帝は斯やうな有用動物をこんなに澤山殺したのは不都合だと言つて、その男を御譴責になつたさうだ。しかも鼹鼠といふ動物は、今君のいつた獸に劣らぬ殘忍な奴なんだ。』

フォン・コオレンは金箱の錠を開けて、百ルウブルの札を出した。

『鼹鼠は蝙蝠と同じに強い胸骨を持つてをる。』と、彼は金箱に錠をかひながら語を續ける。『殊に骨骼と筋とが發達してをる、口の內に一種特別な武器を持つてをる。彼が若し象のやうに大きな動物であつたら、恐らく向ふ所敵の無い動物となるだらう。面白い事に、二疋の鼹鼠が地面の下で出つ會はすと、さも仲の好い同志のやうに、一緒に地面を掘り出す、そして場所を廣くしといて、それから喧嘩を始める。』と、フォン・コオレンは聲を低めて、『さ、ここに百ルウブルある。けれどもこの金には條件があるよ。ラアエウスキイの爲に貸すのなら御免だ。』

『ラアエウスキイの爲ならどうだと言ふんだ。』と、サモイレンコオは吹き出した。『それが君に何の關係が有る。』

『ラアエウスキイに遣るんなら御免だ。君が彼に金を貸してゐる事は、僕知つてをる、君は人殺しの

ケルバライにさへ金を貸さうといふ人だ。けれども……許し給へ……僕はラアエウスキイを助けるのは獸だ。」

「實はラアエウスキイの爲なんだ。」と言ひながら、サモイレンコオは立ち上つて、「然うラアエウスキイの爲なんだ。だが、鬼であらうと惡魔であらうと、僕が僕の金を始末するのに干渉する權利は無いんだ。さうだ、貸して呉れるのか。」

助祭は堪らなくなつて吹き出した。

「まあ、さう激してはいかん。」と、動物學者は言ふ。「僕の意見に依ると、ラアエウスキイに親切を盡すの愚は、いかいばつたを養ふの愚に等しい。」

「僕の意見に依ると、隣人は助けて遣らなければならん。」と、サモイレンコオは叫つた。

「若し果してさうなら、君はたつたそこの塀の後に腹が減つて寢てゐる土耳古人を助けて遣らないのだ。あれは職人だ、君のラアエウスキイよりも、遙かに必要な、遙かに有益な人間だ。彼に百ルウブル遣り給へ。然らずんば探檢の費用として僕に百ルウブル寄附し給へ。」

「君は僕に貸して呉れるのか、呉れないのか。」

「では率直に言ひ給へ。彼は何の爲に金が入るんだ。」

「ああ言ふとも、それは祕密でも何でもない。彼は土曜日にペテルブルクへ立たなければならんのだ。」

『さう。』と、フォン・コオレンはゆつくり言ふ。『あはあ……分かつた。女も一緒に行くんだね。』

『いや、女は暫く跡へ殘る筈だ。ペテルブルクで、自分の用の片附き次第、男から金を送る事になつてをる、それから女が歸る筈になつてをる。』

『巧い。』と、笑ひを抑へて動物學者は言ふ。『巧い。どうも實に巧い。』

彼は急いでサモイレンコオの側へ歩み寄つて、その顏を覗くやうにして、その目の内をぢつと見ると――

『正直に言ひ給へ。彼はもう女を愛してないだらう。さうだね。さうだね。』

『さうだ。』と、サモイレンコオは口の内で言ふ。

『ぺつ。』と、フォン・コオレンはむかつきさうな顏をして言ふ。『アレクサンデル君、君と彼とはぐるになつてゐるのだ、然らずむば、君は阿呆だ。君はあいつの道具にされてゐて、それが自分に分からないのか。彼は女を逃げたいのだ。女をここに置いてきほりにして行きたいのだ、僕にはそれが日光の如く明らかだ。結局女が君の手に殘つて、君が女を自分の金でペテルブルクへ送らなければならん事になるに極まつてをる。君の秀拔なる友人の美德は、斯かる明白な事實が見えなくなるまで、君のの目を盲にして了ふ事が出來たのか。』

『君は唯當て推量をしてゐる許りだ。』と答へながら、サモイレンコオは一度腰を卸した。

『而て拐帯だと。ではなぜ一人で行くんだ。なぜ女と一緒に行かんのだ。實にあいつはずるい奴だ。』

友人に對する不意の疑惑に襲はれて、サモイレンコは一言も答へる事が出來なかつた。彼は調子を低めた、併しながら、その晩ラアエウスキイが來る筈になつてる事を思ひ出して、かう言つた。

『いんや、そりや駄目だ。彼は恐ろしく苦しんでをる。』

『それがどうした。泥坊だつて苦しめば、火取蟲だつて苦しむさ。』

『成程、君の言ふ所は正しからう。』と、サモイレンコは口籠りつつ言ふ。『だが、許し給へ……彼は青年だ、外國へ來てをる學生だ……吾々も等しく學生ぢやないか。彼を助ける者は誰も外に有りやしない。』

『單に君と彼とが同級生であつたといふだけの理由で、君は彼が不潔な事をするのまで助けて遣るといふのか。何といふノンセンスな事だ。』

『待ち給へ……一つ徐ろに考へようぢやないか……どうだい、かうしたら好いだらう。』とサモイレンコは指をいぢりながら言ふ。『僕が彼に金を遣るんだ、けれども先づそれに先だつて、今から一週間以内にきつとナアヂエダを迎へるといふ紳士としての嚴肅な約束を求めるのだ。』

『ああ、その種の誓ひなら喜んでするだらうよ。それ處が、涙まで流して、きつとその約束を守らうと思ふだらうよ。けれども結局彼の言葉に幾何の價がある。彼はきつとそれを守りはせんぜ。若し二

年の後に、新らしい女と腕を摑んでネウスキイを歩いてる彼に君が會ふとすれば、彼は文明に壓服されたのだとか何とか言つて、きつと自分の行爲を辯解するだらう。好いからうつちやつて置き給へ。不潔物の側へ寄り給ふな、不潔物の中へ兩手を突つ込むやうな事をし給ふな。』

サモイイレンコオは暫く考へてゐたが、やがて決然として言ふ。

『何でも好い、僕は彼に金を遣る……僕は猜疑で人を罪する事は出來ない。』

『好からう。行つて彼を抱いて遣るさ。』

『では百ルウブル呉れ給へ。』と、サモイイレンコオはおづおづして言ふ。

『厭だ。』

暫く言葉が絶える。

疲れ果てたサモイイレンコオは、申譯が無いといつた樣な、嘆願する樣な顏附きをした。肩章や勳章で飾られたこの大柄な男が、こんな情ない、子供らしい顏附きをした所を見るのは餘程不思議であつた……

『この土地の僧正は管區を歩くのに馬に乘つて歩く、決して馬車に乘つて歩かない。』と、ペンを置いて助祭が言ふ。『あの人が小さな駒に乘つた姿は、甚だしく人を感動させる。あの人の質樸と謙遜とは聖書の敎へ通りで實に立派なものだ。』

『好人物かね。』と、會話の題目の變るのを喜んで、フォン・コオレンが尋ねる。

『でなくて、どうする。好人物でなかつたら僧正に任ぜられる筈がないさ。』

『僧正の中には全く天賦の好人物がをる。』と、フォン・コオレンは言ふ。『だが惜しい事に、彼等の多數は、自己を政事家だと思ふ弱點を有してをる。政治學と科學とは彼等の職でない。彼等はもつと高僧會議に盡さなければならん。』

『俗人が僧正を裁く事は出來ん。』

『なぜ出來んか、助祭君。僧正と雖も吾人に等しい一箇の人間ぢやないか。』

『そりやさうさ、だが又さうでないて。』と、助祭は又ペンを取り上げながら答へる。『君が若しあの人に等しい人間だつたら、恩福は必ず君が身の上に宿つて、君は僧正の地位を得たに相違ない。君が僧正でないのは、君があの人と違ふ明かな證據だ。』

『廢し給へ、助祭君。』と、サモイレンコは悲しげに言つたが、やがてフォン・コオレンの方を振り向いて、『よし、では百ルウブル僕に貸すのは廢し給へ。その代りね。君は僕の處で冬まで賄ひをする事になつてをる。まだ先三月あるから、それを前金で拂つて呉れ給へ。』

『それも償ふのは厭だ。』

サモイレンコの眼はぎろりと光つた、そして眞つ赤になつた。乾燥した昆虫の乗つてる木を器械

的に取り上げると、それをぢつと見た。やがて、それを元の所へ置くと、立ち上つて帽子を取つた。

フォン・コオレンは氣の毒になつて來た。『好いから勝手にあんな奴と附き合ひ給へ。』と。彼は怒つて紙屑を部屋の隅へ蹴飛ばしながら言ふ。『好いかい、君のは決して親切といふものでもなければ、愛情といふものでもないのだよ、君のは臆病なんだ、軟弱なんだ。君のやうな人間は、その弱き心がある爲に、折角好い頭でした好い事をも傷なつて了ふのだ。僕が學生の時分に腸窒扶斯に罹つた事がある、處が僕の伯母は、親切心から僕に菌ばかり食はした、それが爲に僕は危く死ぬ所だつた。君は丁度僕の伯母と同じ人だ。君の愛情にして若し幾何の價値があるものなら、心臟だの胃だの腑だのに在つてはいかん、ここさ、ここさ。』と言つて、フォン・コオンレンは額を輕く打つた。

それから『さ、持つてき給へ。』と言つて百ルウブルの札を投り出した。

『何も君さう怒る事はないさ。ねえコオリヤ。』と、サモイレンコは百ルウブルの札を疊みながら、卑下するやうに言ふ。『君の言ふ事はようく分かつてゐる。併し……僕の地位にもなつて見給へ。』

『君かい、君は一箇の老婆たるに過ぎない。それだけぢやないか。』

助祭は又吹き出した。

『なあ、アレクサンデル君、僕の最後の願はこれだ。』と、フォン・コオレンは熱心に言ふ。『その金をあの惡人に渡す時に、條件を出してそれに服從させ給へ、女を一緒に連れて行くか、女を先づ初めに

返すか……でなければ、決して金を渡してはいかんよ。あいつを取扱ふのに何も禮儀を重んじる必要はない。好いから、奴にさう言ふさ、若し愈々君がさう言はなければ、誓ひにかけて僕は奴の役所へ行く、そして奴を階子段の下へ叩き落す。そして君とは……もう君とは交際を絶つ。」

『一緒に行かうと、一人先へ逃らうと、それはどつちでも構ふまい。きつとどつちかにさせるから。』と、サモイレンコオは言ふ。『兎に角非常に喜ぶだらう。ぢや、左様なら。』

彼は徐ろに別れを告げて、出て行つた。が、戸を締める前に、も一遍振り返つて、歪め面をして、フオン・コオレンの顔を眺めた――

『君が害したのは獨逸人だ。さうだ。獨逸人だ。』

十二

その翌日、即ち木曜日に、マリアは娘コスチヤの誕生祝ひをした。客は、晝はパイを食べに、夜はチヨコレエトを飲みに招待された。

ラアエウスキイとナヂエダとが、連れ立つて夜遅つて来た時に、動物學者は既に客間でチヨコレエトを飲んでゐた。

『もう話をしたか。』と、彼はサモイレンコオに聞いた。

『いんや、まだ。』

『段取る事はないぜ。ああいふ奴の傲慢といふものは實に度數が知れんからね。奴等一人は自分達の事をこの一家が何と思つてるかよく知つてるんだ、知つてゐながら遣つて來る奴等だ。』

『世間の奴の云ふ事を一々氣にしてゐたら、吾々はみんな始終内にばかり引つ込んでゐなけりやならんさ。』と、サモイレンコオは言ふ。

『君は奴等のやうな關係に對する社會の態度を偏見だといふのか。』

『確に……偏見だ、憎惡だ。』

『して見ると、アンナ・カレニナが汽車の下になつたといふ事實、或未知の理由に依つて君や僕がカアチヤの純潔を讃美するといふ事實、世の中にさういふ愛は無いと知りながら、吾人は常に清淨な愛を欲して止まないといふ事實……これらは總て偏見だね。』

ラアエウスキイは客間へ這入ると、居合はす人々に一々挨拶した。そしてフォン・コオレンの手を握つて、悲しさうに笑つた。それからサモイレンコオに話の出來る機會を待つてゐた。

『失敬、アレクサンデル君、僕一寸君に話がある。』

サモイレンコオは、立ち上つて、彼と一緒にニコヂンの居間へ這入つた。

『あすは金曜だ。』と、ラアエウスキイは爪を噛みながら言ふ。『約束の物は出來たか。』

『ただ一日か二日ぶらりしか出来ん。歸はけふかあすきつと出來る。安心して居給へ。』
『有難い――……』とラアエウスキイは吐息をほッとついた、その手は嬉しさに震へた。『君は僕を救つた。アレクサンデル君、僕は神にかけて、自分の幸福にかけて、君の欲する有らゆる物にかけて誓ふ、ペテルブルグへ着き次第、きつと金は送る、古い借金もその時一緒に片を附ける。』
『處で、ラアエフ……』と、サモイレンコーはラアエウスキイの上着の襟をつかまへて、眞つ赤になつて言ふ『君の家庭に干渉するのを許し給へ……が……なぜ君はナヂェダを一緒に連れて行けんのか。』
『可笑しな男だ、どうして連れて行けるものか。二人の内どつちか一人殘らなからうもんなら、債權者が僕を出すまい。僕は方々の店に少なくとも七百ルウブルから借金がある。僕は先づ彼等に金を送る、煩い奴等を止めさせる。それから頑張つて女にここを立ち退かせようといふのさ。』
『なある……ではなぜ女を先へ返さないんだ。』
『ど、ど、どうして、どうしてそんな事が出來るものか。』と、ラアエウスキイはびつくりした顔をして言ふ『あれはただ一人で先へ行つて何が出来ると思ふ。それこそ無駄な費えだ。』
『成程それも一理ある、……』とサモイレンコーは考へる。が、フォン・コーレンとの會話を思ひ出すと、急に目を落として、悲しさうに、『いんや、僕は君に一致する事は出来ん。女と一緒に行くか、然らずんば先づ最初に女を送り給へ、でなければ……でなければ金を渡す事は出来ん、これが僕の最

後の言葉だ……』

彼は後退りをして行つて、扉を押し開けると、甚だしく激して出て行つた。

『金曜日……金曜日……』と、考へながら、ラァエウスキイは客間へ戻る。『金曜日……』

どうしたのか、彼は〈金曜日〉といふ言葉を、どうしても頭から取り去る事が出來なかつた。彼は暫く外の事はなんにも考へずにゐた。

と、綺麗に髮の毛を梳いた、氣取つた小男の、ニコヂン・アレクサンドロヰツチが、彼の前へひよツこり出て來て、酒を勸める。

マリアはカアチャの通信簿を客に見せてゐる。『どうも學校の課程がむつかし過ぎるやうでございますね。』と、靜かに彼女は言ふ。

『あら、おつかさん。』とカアチャが恥づかしがる。

ラァエウスキイは通信簿を見て、褒めた。課目の名と點數とが彼の目の前で踊り出した、そして彼の心の内で〈金曜日〉といふ字と入り亂れた。ニコヂンの綺麗に梳いた髮の毛だの、カアチャの眞ツ赤な頬ぺただの、言葉だの、點數だの、在らゆるものが、疲勞を以て彼を壓迫して來たので、彼は殆ど泣き出しさうになつて來た。『迚も、迚も立たずにはゐられない。』と、彼は口の内で言つた。

やがて骨牌の卓が二つ並べられた、一同は「郵便局」をしようといふので、席に着いた。ラァエウ

スキイも本席に着いた。

「金曜日……金曜日」と、彼は又考へる、笑ひながら、そして、同時に衣兜から鉛筆を出しながら。

「金曜日……」

彼は自分の境遇を考へようとした、併し、考へるのを恐くも思つた。ドクトルに嘘を見現はされたのは、彼にとつて甚だしい苦痛だつた。將來の事に就いては、彼はもうなんにも考へまいと思つた。汽車に乘つて、そして出發する――現在はそれだけで澤山だ。それから先は考へなくとも好い。併し、平原で見る薄い微かな光のやうに、或思想が時々彼の心中に閃く。ペテルブルクの何處かの横町の或室で、暗い遠い將來に、ナヂェダに別れる爲に、そして借金を拂ふ爲に、どうしても嘘をつかなきやならないやうになるやうな氣がする。併し、彼は一度嘘をついて、そして、それから自分の全部を改革しようと思つてるのだ。それは宜しい、彼は小さな嘘を拂つて大きな眞を買はうとしてるのだ。

併しながら、今ドクトルが彼のとひを拒絶して、彼の行つた虚僞に對して辛く當つた事實を以て見ると、これは將來ばかりでなく、けふも、あすも、それから一月先も、恐らく一生涯嘘をつき通しにしてるなけりやなるまいかと思はれる。實際、兎にも角にもここを去るにはナヂェダに嘘をつかなければならぬ。債權者にも嘘をつかなければならぬ。役所にも嘘をつかなければならぬ。それから又々ペテルブルクで金を拵へる段になると、ナヂェダの事に就いて母にも嘘をつかなければならぬ。所か

母はきつと五百ルウブルより餘計には呉れまい、とすれば、直ぐもう軍營に嘘をついてゐる事になるんだ、直ぐに金を送ると言つといて、それが送れなくなつたんだから。それからナヂエダがペテルブルクへ來ると、どうにかして別れようと思つて、嘘の百萬遍を繰る。それから涙となり、後悔となり、殊に苦々しい前生涯の悔恨となつて、終に何の改革も出來ないんだ……嘘、そして嘘の外にはなんにも無いんだ。嘘の山がラアエウスキイの想像世界に高くなつた。これを遁れるには、ここに留まつてゐる事は出來ぬ、蹶起一番、萬難を排して出發しなけりやならん――よし一文無しでも。併し、それは出來ないと彼は思つた。

『金曜日……金曜日……』と、彼は又思ふ。『金曜日……』

一同は紙に何か文句を書いて、それを丸めて、ニコヂンの古い山の高い帽子の中へ投り込んだ。やがてそれが山の樣になると、コスチヤが郵便脚夫になつて卓の周圍を廻りながら、みんなにその紙を配つて歩く。

助祭とカアチヤとコスチヤとは、この遊びを喜んで、可笑しな手紙の文句に夢中になつた。

(あたしあなたにお話があつてよ。)とナヂエダは自分に宛てて來た手紙を斯う讀んだ。彼女はマリアと眼を見交した、マリアは例の(巴旦杏笑ひ)をして、ナヂエダに頷いて見せた『何だらう。』と、ナヂエダは怪んだ。

家を出る前、ナヂェダはラァエウスキイの襟飾りを結びながら、男の顔に憂の色あるを見た、その苦心した目附きに目をつけた、この頃彼の一體に變つた事に氣が附いた。それらの兆は最後の離別を意味するのではあるまいかと思つた時、女の手は震へた。女の良心は女を責めた、男の顔に手を觸れてゐる間も、女は心の内で、幾度か許しを願ふ祈りを繰り返した……

ナヂェミナノフが卓の丁度向う側に坐つてゐて、可愛らしい黒い目で、ぢつと彼女を見詰めてゐる。と、或大膽な望みが女の心を亂す、そして、女に自分の若さを恥ぢさせる——が、其實も羞もこの心を女から奪ふ事は出來なかつた。彼女は盃ひどれのやうに、毒を嫌ひながら毒を捨てることが出來なかつた。

彼女の生活は、自分の目から見ても不名譽なものであつた、ラァエウスキイを侮辱したものであつた——彼女は逃げなければならぬと思つた、涙を以て男に離別を乞はうと思つた。若し許されなかつたら、そつと逃げて了はうと思つた。併し、自分の不貞な事だけは打ち明けまいと思つた。彼女は終ひまで男には純潔に思はれてゐたいと思つた。

「我れ愛す、我れ愛す、我れ愛す……」と、ナヂェダは讀んだ。これはアチュミヤノフから來た手紙だ。彼女は思つた、兩人ともここは去らう、そして、ラァエウスキイに金を送つて遣らう、誰からといふ事は知らさずに。それから何時も贈物をしよう、さうして彼が老人になるか病氣になるかした時、

初めて歸る事にしよう。彼女が彼の爲に盡した事——彼女が自己を犧牲にした事——はきつと今に分かる時が來るだらう、そこで初めて分かつて、彼は彼女を許すだらう。

（お前さんの鼻は長いことね。）これはきつと助祭か、コスチャから來たものだ。

ナヂエダは離別に際して、自分がラアエウスキイを抱く姿のいぢらしさを想像した、彼女は彼の手に接吻して、一生、一生忘れないといふ事を誓ふだらう。そして、それから自ら罪した追放の人となつて、見も知らぬ人々の間に月日を送る間も、自分には何處かに一人の友達があるといふ事を思はない日はないだらう。その友達といふのは、愛すべき、純潔な、氣高い、高尚な人で、いつまでも彼女に就いて純潔な思ひ出を持つてゐる人だ。

（君若し、今宵小生に誓ひ給はずば、小生は總てをラアエウスキイ君に物語りて、公衆の前に恥辱を與ふべし。）と、これはキリリンから來た文句だ。

ナヂエダは紙を一枚取つて、（そは卑劣なり。）と返事を書いた。

キリリンは卓の側に斜めに向いて坐つて、足を組んでゐた。彼は掌で睡い顔を擦つてゐた。彼は稍もすれば出さうにする欠伸をやつと呑み込みながら、自分に宛てて來た手紙を物憂げに讀んでゐた、そして時々お世辭笑をしてゐた。

ナヂエダの返事を讀むと、俄に聲を高くして——

「淑女及紳士諸君、私は諸君に御注意を煩はしたい事がある。二三日前に、或醜聞沙汰が、神の護らせ給ふこの小都會に起りました。或年若な婦人が或士官と逢引をする約束をしたのです……」

ナヂェヂダはぞつとした。急いで（諾、諾。）と書いて、それを卓を越してキリリンの方へ投つた。

「その士官は約束した村へ行きました、處が女の方はそこで見つかつて、酷く嘲られました……」

「とても好い氣味。」と、マリア・コンスタンチノヴナが言ふ。

「[illegible]身を隱して、そしてあした逢はう。」と、ナヂェヂダは考へる、[illegible]に次いで來た士官に頭を[illegible]てらせてゐる。

十二

ラアエフスキイは手紙を二つ受け取つた。その一つを開けたら、かう書いてあつた。「立つてはいけないよ、好い子だから。」

「誰が書いたのかしら。」と彼は考へる。「勿論サモイレンコではない……が、動物學者でもない。奴は僕の立たうとしてる事を知る筈がない。フォン・コオレンかな。」

動物學者は机に凭り掛つて、ピラミッドの繪をかいてゐた。ラアエフスキイには、彼の目が笑つてゐるやうに見える。

『サモイレンコの奴がきつと洩らしたに違ひない。』と、ラアエウスキイはかう思ふ。も一つの手紙も、同じやうな金釘流で、いやに尻尾を長く、曲りくねつて書いてあつた。曰く（それに誰かが土曜日に行くのを厭がるよ。）

『俺を嘲弄してゐるな。』と、ラアエウスキイは思ふ。『金曜日、金曜日……』

ふと何かが咽喉につかへた。彼は襟を爪探つて、咳をしようとした。が、咳の代りに笑ひが込み上けて来た。

『は、は、は。』と彼は笑ひ出す。『は、は、は。何を笑つてゐるんだ。』と彼は考へる。

『は、は、は。』

彼は手で口を塞いで、自ら抑へようとした。けれども笑ひは胸と咽喉とを塞いで来て、迚も止める事が出来ない。

『何といふ馬鹿な事だ。』彼は又吹き出しながら、かう思ふ。『氣でも狂つたのかしら、でなけりやどうしたんだ。』

彼の笑ひは段々聲が高くなつた、そして小犬の吠えるやうに響いた。

彼は立たうとした、が、立つ力も無かつた。彼の右の手は、心にもなく、卓の上を怪しげに動いた。そして慄へながら紙を摑んだ。

彼は人々の驚異の眼と、サモイレンコオの、眞面目な、びつくりした顏と、動物學者の冷たい嘲弄に充ちた眼光とに氣が附いた。そして自分のヒステリイに罹つた事が分かつた。
「何といふ、恥辱な事だ。」と彼は思ふ、暖い涙の頰に流れるのを覺えながら……「ああ、ああ、何といふ恥辱な事だ。こんな事は今まで決して無かつたのに……」
彼は、誰かに腕を支へられ、誰かに後から頭を押さへられて、何處か外の場所へ連れて來られた。やがてコップが眼の前に閃めいた、カチリと齒に當つた、さうして水が胸の上へこぼれた。彼は今、二つの寢臺がある中に別つて置いてある小さな部屋にゐた。寢臺は綺麗な雪のやうに白い毛布で覆うてある。彼は寢臺の一つに身を投げかけて、しやくり泣きを始めた。
「何でもない……何でもないさ……」と、サモイレンコオは言ふ。「こんな事はよくあるよ……よくある奴さ……」
恐怖に身内も寒く、手足をわななかせて、何か恐ろしい事の起るのを豫知しながら、ナヂェダは寢臺の側に立つてゐる。
「どうなすつたの。」と、女は聞く「お願ひですから、言つて頂戴……」
「キリリンが何か書いて遣つたのぢやないかしら。」と、女は思ふ。
「どうもしやしない……」と、ラアエフスキイは泣き笑ひをしながら言ふ。「あつちへ行つてて呉れ……

…好い子だ。』
男の顔は、憎惡の色をも、侮蔑の色をも現はさなかつた、それが爲に彼はなんにも知らないで了つた。ナヂエダは稍心が落ち著いて、客間へ戻つた。
『落ち著いて入らつしやいましよ。』と、マリア・コンスタンチノウナは、彼女の側へ坐つて、その手を取りながら言ふ『直きに濟んで了ひますわ。男といふ者はわたくし共罪人と同じやうに弱いんですのね……あなた方はお二人共、丁度今むづかしい所をお切り拔け遊ばしたんですわ……そりや直ぐ分かりましてよ。さあ、あなた、わたくし御返事をお待ちしてをりますのよ……その御話をしようぢやございませんか。』
『いんえ、もうお話は御免遊ばせ。』と、ナヂエダはラアエウスキイのしやくり泣きに耳を傾けながら言ふ。『わたくしもう疲れましたわ……歸らして頂きませう。』
『何をおつしやるの。』と、マリアはびつくりして言ふ。『御飯も差し上げない内に、どうしてお返しが出來ませう。何か召し上つて、それから……御隨意に……』
『でもわたくし大層疲れてるんでございますもの……』と、ナヂエダは囁いた。彼女は兩手で椅子の腕をしかと掴んで、倒れさうになる身を支へた。
發作が終ると、ラアエウスキイは起き上つた。『何といふ恥辱な事だ……娘のやうに泣くなんて。』と、

彼はさう思ふ――見てゐて餘程可笑しかつたに相違ない。裏口から歸らう……いや。それは却つて好くない……冗談の積りにして了はう。』

彼は鏡に映る我が姿を見た、暫く坐つてゐた、それから客間へ這入つた。

『どうも失敗だ』と、笑ひながら彼は言ふ。彼は痛く自己を恥ぢてゐるのだ。『時々かういふ事があるんです。』と、坐りながら語を續けて、『こんな風に坐つてると、突然横ッ腹が刺されるやうに痛くなつて來るんです……それが迚も堪へられないんです……僕の神經は迚もそれに堪へられないのです、そして……僕は自分で自分を愚弄します。ああ、吾人の神經過敏時代、吾人は迚もこれに敵し難い……』

食事の時、彼は酒を飲んで、おしやべりをした、そして、まだ痛みが去らぬといふ樣子を見せる爲に、時々眼を閉いた。併しながら、ナチェダの外に、誰もそれを信ずるものはなかつた。それは彼もよく知つてゐた。

十時頃になると、主人も客も家を出て、ブウルヴァルを散歩した。

ナチェダは、キリリンに側へ來られて、話し掛けられては大變だと思つたから、マリアとその子供達に引つ附いて歩いた。彼女は恐怖と疲勞で氣が遠くなつて、屢々歩み惱んだ。彼女は自分の家へ歸らなかつた、家の方へ行けば、キリリンか、アチュミアノフか、或は兩方共、きつと附いて來ると思つたでゐた。

キリリンは、ニコヂンと一緒に、みんなの跡から歩いて來た、そして低い聲で、『われ戯れをゆーるさじ。われ戯れをゆーるさじ……』と唄つた。

ブウルヷアルからみんなはカフエエの方へ曲つた。そして、燐光を發する海の景色を賞しながら海岸を歩いた、この現象に就いてフオン・コオレンの說明するのを聽きながら。

十三

『もう骨牌の時間です……嘸みんなが待つてをりませう。』と、ラアエウスキイは言ふ。『では皆さん、これで御免蒙ります……』

『待つて頂戴、わたくし御一緒に參りますわ。』ナヂエダはかう言つて、男の腕を取つた。

みんなも別れを告げた。

キリリンは、一人一人に別れを告げて、自分も同じ方へ行くのだと言つた、そして二人と一緒になつた。

『どうしたつて、逃げる事は出來やしない……』と、ナヂエダは思つた。

彼女の記憶に貯へられてゐる總ての淺ましい過去が、悉く今その腦髓から歩いて出て來て、暗闇の中を彼女の道連れになつたやうな氣がする。彼女は自分を、インキ壺の中へ落ち込んで、そこら中眞

つ黑にしながら、よろよろと匍ひ廻つてゐる蠅のやうに思つた。
　キリリンの苦しむ所は決して無い、責められるのは自分だけだ、と彼女は思つた。もう男が以前のやうに口を利くべき時ではなかつた。が、時の過ぎたのは彼女が惡いからだ。彼女は、この丈の高い、立派な男を見て、微笑まずにはゐられなかつた、また厭にならずにはゐられなかつた、憎まずにはゐられなかつた。
「僕はここで別れるよ。」と、ラエフスキイは立ち留つて言ふ。「お前はキリリン君が送つて下さるだらう。」
　と、彼はキリリンに頭を下げると、直ぐとブウルヷアルを突つ切つて、シエシユコウスキイの家の方へ歩いて行つた。二人は彼が門の扉を後へばたりと締める音を聞いた。
『貴方は先程「訪問」といふ御返事をなさいましたね……』と、キリリンは口を開く。「さ、どうぞ御自由に。」
　ナヂェヽダの心臟は鼓動を早めた。彼女はなんにも言はなかつた。
「あなた方がわたくしに對する態度の變化を、今までわたくしはコケットリイだと思つてをりました。」
キッスは時を續ける。それが今になつて見ますと、外に……或深い理由があつたんですね。あなたは當然罰に逢はれるやうに、わたくしに逢はれようとなすつたんです……ですから、どうぞ御自由に……」

『わたくし疲れてをりますのよ……』と、ナヂエダは言つた。彼女は靜かに泣き出した、そして涙を隱さうとして脇を向いた。

『そりやわたしも疲れてをります、どうもそりや爲方がありません。』

キリリンは稍暫く默つてゐた。が、軈て、一語一語の間に間を置いて、はつきりとかう言つた。

『奥さん、わたくしは繰り返して申し上げますよ、若しあなたが依然としてわたくしに對する態度をお變へなさらなければ、今夜即刻、あなたはわたくしの情婦だと、わたくしは世間を觸れて歩きますよ。わたくしはあなたに對してラァエウスキィ君と丁度同じ權利を持つてゐるのです。』

『今夜はどうぞもうお歸り下さいまし。』と、ナヂエダは言つた。彼女は辛うじて自分の聲を聞くことが出來た、それ程彼女の聲は悲しく弱く響いた。

『いんや、わたくしはあなたに教へて上げなければならないです……どうか無作法な調子は許して頂きたい……佛蘭西人の言葉によると、調子は音樂を爲すと言ひます。さうです、悲しいかな、わたくしはあなたに教へて上げなければならないんです。けふとあした、と二日間わたくしの言ふ通りにお成りなさい。それから後は、鳥のやうに自由です、何處へでも行きたい處へ入らつしやいまし、誰とでも好きな方と一緒にお暮らしなさいまし。』

二人はナヂエダの家の門まで來た、そして立ち留つた。

『どうかお歸り下さいまし。』と、彼女は囁いた。手足が悉く戰のく、暗闇の内には白いリンネルの上着の外何も見えない……『あなたの仰しやる事にお間違ひはございません、わたくしが悪いのでございます……罪はわたくしにあるのでございます……けれどもどうぞお歸り下さいまし……お願ひでございますから……』彼女は彼の冷たい手に觸つた、そして、ぞッとして身震ひした。『ほんとにお願ひでございますから……』

『ああ』と、キリリンは言ふ『あなたをこの儘返すのは決してわたくしの本意ぢやありません、それに、奥さん、わたくしは元來女といふ者を信じません……』

『わたくし今夜は疲れてをりますの……』

ナヂエジダは海の單調な鼾聲に耳を傾けた、星の輝く空を仰いだ。彼女は萬物の絶滅に對する烈しい欲望を感じた、この生の壓迫と共に、海も、星も、人間も、熱病も、等しく滅びよと乞ひ願つた。

『ではわたくしの内でなくね……』と、彼女は冷かに言ふ『何處かよそへ連れて行つて下さいまし。』

『ちやあミッドフの内へ行きませう……あすこが一番好い。』

『それは何處でございますの。』

『城跡の直ぐ側です。』

急ぎ足で彼女は歩き出した、そして山の手へ行く横町へ曲つた。眞闇だ。敷石道のそここに、窓

から洩れる青白い明かりの矢が差してゐる。彼女はさつき想像した通りになつたやうな氣がした、彼女は一度インキの中へ落ち込んで、又明るみへ匍ひ出したのだ。キリリンは女の少し跡から歩いて來る。何處かで一度躓いて、危なく轉びさうにすると、彼は笑ひ出した。

『醉つてるんだよ。』と、ナヂエダはさう思ふ。『どつちにしても同じ事だ……どつちにしても同じ事だ……もうどうでも好い。』

一方、アチユミアノフは一同に別れを告げて、直ぐとナヂエダの跡を追つた、夜の空氣の中で、彼女と唯二人、暫く遊びをしようと思つてである、女の家まで來ると、彼は垣を透かして中を覗いた。窓が開けつ放げてある、が、明かりの氣は少しも無い。

『ナヂエダ・フエドロヴナさん。』と、彼は呼んで見た。

直ぐと一分時は過ぎた。

彼は又呼んで見た。

『どなた。』これはオルガの聲だつた。

『ナヂエダ・フエドロヴナさんは御在宅で入らつしやるかい。』

『いんえ、まだお歸りになりません。』

『嘘だぞ……嘘だぞ……』と、アチユミアノフは不安になつて来る。『確かに内へ帰つた筈だのに……』

彼はブウルヷアルを歩き廻つた。それから通りの横に突つ切つて、シエシユコウスキイの家の窓を覗き込んだ。ラブエウスキイが、上着を脱いで、卓の側に坐つて、一心に手の内に骨牌を見詰めてゐる。

『嘘だぞ……嘘だぞ。』と、アチユミアノフは呟く。『内にゐないとすると、何処にゐるんだらう。』

彼はスナチエヷの家まで行つて、そして、暗い窓を眺めた。

『嘘だ、嘘だ……』と、彼は思ふ、女が今晩夫と一緒に、舟を漕ぎに出る約束をしたのを思ひ出した。キトリイの家も真つ暗だつた、そして従卒が門の前のベンチに腰を掛けて、主人の帰りを待つてゐた。真さに闇でオオルコミナノフに分かつた。

彼はもう家へ帰らうと決心した、が、も一遍スナチエヷの家の前へ出て、ベンチに腰を卸して、帽子を取つた。彼の頭は帆布で包まれるやうだつた、彼は甚だしく侮辱されたやうな気がした。

町の寺の大時計は二十四時間の内にたつた二回時を打つ——正午と夜中と。その時計が夜の十二時を打つてから間もなく、彼は急ぎ足の近づく音を聞いた。

『おや、あした晩、又ユロドフの所でね』と云ふ声をアチユミアノフは聞いて、そのキヤリンであ

る事に氣が附いた。『八時にな。オオ、ルヴォアル。』

ナヂェダは垣の側に姿を現はした、がベンチに腰を掛けてゐるアチミアノフには氣が附かずに、その前を通り過ぎて、暗闇の方へ行つて了つた、やがて門を明けて、内へ這入つた。

女は蠟燭を附けて、直ぐと着物を脱いだ、が、横にはならなかつた。椅子の前に跪いて、椅子の廻りに兩手を掛けて、頭をシイトの上に載せた……

それから二時間立つて、ラアエウスキイは歸つて來た。

十四

困り抜いた揚句、外に手段が無いので、ラアエウスキイは終にその已むを得ざる手段に膝を屈した、即ち・嘘の演技を必要とした。明くる日の二時に、彼はサモイレンコオの處へ金を貰ひに行つた。彼は土曜日に間違ひなく出發しようと決心してゐた。

ゆうべのヒステリイは彼の決心に封をした——恥辱の念は最早一刻も彼をこの土地に置くまいとしたのである。

ラアエウスキイは考へた、若しサモイレンコオが飽くまで例の條件を主張するやうだつたら、一先づそれに從つて、金を貰つて、そしてあした、愈々出發といふ間際になつて、ナヂェダが一緒に行く

のは厭だと言ひ出したと言はう。一方ナヂエダに向つては、これもみんなお前の爲だと說かう。が、若しサモイレンコオが、何處までもフオン・コオレンの勢力に壓されて、どうしても金を呉れないか、或は苛酷な條件を持ち出すなら、もう構はない、その日に小蒸汽か帆船で、新アトスかノヲロシスクへ立つて了はう、そこから母の所へ哀願の電報を打たう、そして、その返事を待たう。

サモイレンコオの家へ這入ると、フオン・コオレンが客間にゐる。動物學者は丁度食事をしに來た所で、いつもの通りアルバムを展げて、高帽子を冠つた男とボンネットを冠つた女を檢査してゐる。

『晝に話へ來た。』と、ラアエウスキイは思ふ。『又邪魔をするだらう……』それから、聲を出して、『今日は。』

『今日は。』と、フオン・コオレンは顏を上げずに答へる。

『アレクサンデル・ダヰドヰッチ君は内かね。』

『うむ。臺所にゐるよ。』

ラアエウスキイは、臺所の方へ行つたが、明けつ放しになつてる戶口から覗いて見ると、軍醫はまだ忙しさうだから、又客間へ戻つて、腰を掛けた。

彼は動物學者の前にゐると、いつも不愉快に感ずる。今は、ゆうべのヒステリイに就いて何か言はれやしないかと思つて、心配してゐる。

一分間以上が沈默に過ぎた。不意とフオン・コオレンは首を上げて、ラアエウスキイの顏を見て、そして尋ねる――

『その後身體の工合はどうだ。』

『大層好い。』と、ラアエウスキイは赤くなつて答へる。『なあに、元々別に大した事は無かつたんだ……』

『僕はきのふまで、ヒステリイは女に限るものだと思つてゐた、だから初め僕は、舞踏病にでも罹つたのかと思つた。』

ラアエウスキイは苦笑をしながら、さう思ふ。『何といふ不作法な奴だ。人が感情を害するのを知つてゐながらあんな事を言ふんだ。』

『さう、全く可笑しかつたね。』と、ラアエウスキイは、また笑ひながら言ふ。『僕は今朝まで笑ひ通しに笑つてゐた。ヒステリイで妙なことは、自分でそれを可笑しいと思つて、腹の中で笑ひながら、同時に又泣く事だ。吾人の神經過敏時代は吾人を神經の奴隷にした。神經は吾人の主人だ、神經は吾人に向つて勝手な眞似をするんだ。この點に於いて、文明は吾人に向つて實に不思議な任務を果した……』

ラアエウスキイは、フオン・コオレンの眞面目な注意的な態度に氣がつくと、不快になつて來た。動物學者は何か珍奇な標本でも研究するやうに、ぢつとラアエウスキイを見詰めてゐた。ラアエウス

ヤイは、フォン・コオレンに對する憎惡の情に關係なく、どうしても苦笑を留める事が出來ないので困つた。

『君等から言へば、』と、彼は續けて言ふ。『ヒステリイが起したのには直接の原因が隨分あつたんだ、しかも深い原因があつたんだ……この頭腦の健康は著しく損はれてゐる……この疲勞に加へて、しよつちう金の不足だ……其處の趣味を持つてる人のゐない事だ……この境遇は何等の境遇よりも悪い……』

『さうだ。君の地位は苦痛だ。』と、フォン・コオレンは言ふ。

ラアエウスキイは、この落着いた、冷たい、殆ど侮辱的な言葉を聞くと、侮辱されたやうに感じた。彼は動物學者の今の顏を、あの嘲弄と嫌惡とに滿ちた顏を、思ひ出した。彼は暫く默つてゐた。それから聞いた、今度はもう笑はずに。

『どうして君は僕の地位を知つてるんだ。』

『だつて君自身で言つたぢやないか。それに君の友達が、君の身の上に非常な興味を持つて、日がな一日、君の事ばかり話してゐるんだ。』

『友達つて。サモイレンコオの事か。』

『さう、あの人もその一人だ。』

『僕はアレクサンドル君及びその他の友達一般に向つて頼みたい、そんなに僕の事で氣を揉んで吳れ

ゐなつてね。』
『それ、そこへサモイレンコオが來た。賴んだら好いだらう。』
『どうも僕には君の調子が分からん……』と、ラアエウスキイは口籠つた。彼は不意と動物學者が自分を憎んで居、賤しんで居、嘲つてゐる事が、今初めて確かになつたやうに感じた。彼は動物學者を不倶戴天の敵だと思つた。
『そんな調子は誰か外の人の所へ持つてき給へ。』と、彼は低い聲で言つた。
サモイレンコオはシャツ一枚で這入つて來た、息も詰まりさうな臺所の熱さで、汗をかいて、眞つ赤な顏をしながら。
『やあ。』と、彼は言ふ。『よく來た。飯は濟んだか。』
『アレクサンデル君。』と、ラアエウスキイは立ち上りながら、『よし僕は私事に關して君を尋ねた事があつても、それは愼重であるべき君の義務や、僕の祕密を守るべき君の責任を、君に遁れさせに來たのぢやなかつた。』
『それはどういふ意味だ。』と、サモイレンコオは驚いて言ふ。
『若し君に金が無ければ。』と、激して床を蹴りながら、聲を高くしてラアエウスキイは言ひ續ける。
『僕に與れなければ、それで好いぢやないか——斷れば好いぢやないか。なぜ、僕の地位は絕望だな

ども叫び鳴らしてゐくんだ。僕は一錢の事をして、一國の事でもしたやうに吹聽して歩くやうな、そんな親切な諸君は欲しくない。君は勝手に自分の深切を自慢して歩き給へ、併し僕の秘密を洩らして呉れと誰が君に頼んだ。」

「秘密とは何だい」と、サモイレンコォはカッとなつて言ふ。「喧嘩をしに來たんなら、歸つて貰はう。そして又歸つて來て貰はう。」

當は、「喧嘩が起つたら百數へろ」といふ古諺を思ひ出した。そこで直ぐ數へ始めた。

「君はなんにも僕の事で氣を揉む必要は無いんだ。」と、ラアエウスキイは言ひ續ける。「僕はちやんと決して自説を換ふ事はないんだ。僕の生活方法に就いて君が世話を燒く義務がある。自分、僕はこのし身を亡さうとしてゐる。成程、僕には借金がある、僕は酒を飲む、僕は人の妻君と一緒にゐる、僕はとうとう捕られた、僕は賤しい、僕は決して或人達のやうに深い思想家ぢやない、けれども、誰かそれに世話を燒く義務がある。僕の人格を尊重し給へ。」

「まあ勘定し給へ、君……」と、サモイレンコォは恰ど三十五まで數へた所で言ふ「だが……」

「僕の人格を尊重し給へ」と、ラアエウスキイは遮つて、「始終誰かの噂ばかりしてゐるんだ。始終お互ひとか、ああもしか噂ばかり聞してゐるんだ、始終穿鑿ばかりしてゐるんだ、權利ばかりしてゐるんだ、そんな深切な煩悶は……少しも有難くないんだ。近頃、ある男が僕に金を貸さうとして、ゐる、

併しその男は、ごろつきにでも持ち出しさうな條件を、僕に向つて持ち出してゐるんだ。何の事はない、僕は脅迫されてゐるんだ。僕はもうなんにも入らない……』

ラアエウスキイは非常に激して、震へながら叫つた、そして又ヒステリイが起りやしないかと心配した。

『もう土曜日には立つまい。』と、同時に彼はさう思つた。

『もう僕はなんにも入らない。』と、彼は又聲を出して言ふ。『僕は諸君に後見を解いて貰ひたい。僕は子供ぢやないんだ、又氣違ひでもないんだ、僕はもう君に監督を廢して貰ひたい。』

そこへ助祭が這入つて來た。が、ラアエウスキイが青い顔をして、手を振りながら、サロンゾフ親王の肖像に向つて、妙な聲で何か言つてゐるのを見ると、釘附けにでもされたやうに、戸口の所に突つ立つて了つた。

『始終僕の心臓に向つて探海燈を照らしてゐるんだ。』と、ラアエウスキイはまだ言ひ續ける。『そして人間としての僕の威嚴に傷をつけようとしてゐるんだ。僕は熟練な探偵諸君に向つて切に辭職を勸告する。もう澤山だ。』

『何だつて……君は今何を言つた。』と、百まで數へたサモイレンコオは、面に朱を注いで、きつとラアエウスキイに迫つた。

『僕に挑戦する。』と、ラアエウスキィは動物學者の方へ進んで、その眞つ黒な顔と、縺れた髮の毛とを、さも憎さげに見ながら、低い聲ではつきり言ふ。『挑戦、宜しい。僕は君を憎む、君を憎む。』

『僕は大に喜ばしい。明日、早朝、ケルバライの家の附近。自餘の條件は總て君の自由に任せる。さあ、もう歸れ。』

『僕は君を憎む。』と、ラアエウスキィは小さい聲で、息苦しさうに言ふ。『僕は長い間君を憎んでゐた。決鬪、宜しい。』

『つまみ出して吳れ、アレクサンデル君。でなけりや、僕の方で出て行く。』と、フォン・コオレンは言ふ。『今にも嚙みつきさうだ。』

フォン・コオレンの冷靜な調子は軍醫の心を鎭めた。

彼は俄に我に歸つた。で、兩手でラアエウスキィをしつかり捕まへながら、外へ連れ出した、優しい甘へ聲でかう呟きながら——

『友人……親切な好い友人……吾々は少し激し過ぎた……もう澤山だ……澤山だ、友人。』

ラアエウスキィは、この優しい親切な聲を聞くと、何か今までに聞いた事のない驚くべき事が、自分に降りかかつて來たやうな氣がした。彼は汽車に轢かれたやうな氣がした。彼はしやくり泣きを堪へて、泳ぐやうな手つきをして、そして部屋の外へ驅けて出た。

『ああ情ない、自分の憎んでゐる人間の前で、自分の價値を下げるとは、ああ情ない。』と、彼は泣いた。

それから、カフェエへ行つて、腰を卸した。

少量のブランデイと水とは幾らか彼の精神を爽かにした。彼はフォン・コオレンの落ち着いた高慢な面をありありと思ひ浮べた、それからあの人の面付きを、聲を、白い手を。すると、満足を求めて飽く事を知らない、燃えるやうな、深い憎悪で胸が一杯になつた。

彼は自分がフォン・コオレンを地べたへ叩き倒して、それを足で以て踏んづけてゐる所を想像した。彼はつい今起つた事件を隅から隅まで思ひ出した、そして、どうして自分はあんな價値の無い人間に腰を卑くしなければならなかつたのかと、自分で自分を驚いた。彼はこの値の無い町の——その名さへペテルブルグに住んでゐる立派な人には知れてゐない、この町の平凡な無教育な人間達の意見を、何でそんなにも尊重したものかと、それが不思議になつて来た。あした、フォン・コオレンを殺した所で、又生かした所で——それは同じ事だ。どつちにしても無用な事だ。面白からぬ事だ。まあ、足か手でも折つて遣らう——怪我をさして、それから足を一本捥ぎとられた蟲のやうに取り扱つて遣らう、町中を以て彼を無視して遣らう——彼を彼と同じく價値の無い町民の群衆の内に葬つて遣らう。

ラアエフスキイはサモイレンコの所へ行つて、總ての事を話した。そして自分の介添人にな

つて呉れと頼んだ。その約束を濟ますと、二人は郵便局長の所へ行つて、彼を第二の介添に誘つた、そしてここで食事の馳走になつた。食事をしながら、三人は冗談を言つて、笑つた。ラアエウスキイは自分が一向鐵砲の扱ひ方を知らないのを自ら嘲笑つて、自分の事を「キルヘルム・テル」だの、「近衛の綫銃兵」だのと言つた。

『一ついぢめてやらなきやならん……』と、彼は言つた。

食事が濟むと、みんなで骨牌の席に著いた。ラアエウスキイも骨牌をした、酒を飲んだ、決鬪に就いて議論をした。彼はかう考へた、決鬪といふものは馬鹿らしいものだ、可笑しなものだ。爭つてる問題を解決せずに、却つてそれを複雜にするものだ。しかも、無しで濟ます事は不可能なものだ。現在の場合はその好い例だ。彼はフオン・コオレンを裁判所へ引つ張り出した所で、どうも爲方がないんだ。更に又、彼は考へた、この決鬪は彼の出發を一層餘儀なくするだらう、なぜと言へば、決鬪の濟んだ後で、いつまでこの町にゐる事も出來ないだらうから。

太陽が沈んで、あたりが暗くなると、ラアエウスキイは不安になつて來た。それは死に對する恐怖ではなかつた――實際、彼は食事をしてる間も、骨牌をしてる時も、決鬪をした所で、どうなるものかと思つてゐた――それは未知の或物に對する恐怖であつた、あすの朝起るべき或事に對する恐怖であつた、近づいて來る夜に對する恐怖であつた……彼は、夜の長いだらうといふ事をも、寐られない

だらうといふ事なら、自分の心が、フォン・コオレンの事計りでなく、かの嘘の山に就いて、考へるだらうといふ事まで、知つてゐた……と不意に、彼は病氣に襲はれるやうな氣がした。世界にも、周圍の人にも、總て興味が無くなつて來た、そして、そはそはし出して、頻に家へ歸らして呉れと言ひ出した。彼は早く寝床へ横になりたいと思つた、靜かに休みたいと思つた、その晩の内に思想を纏めたいと思つた。

シエシコツフスキイと郵便局長とは、彼を家へ還して、それから、フォン・コオレンの所へ決闘に就いての相談に行つた。

家の前で、ラアエウスキイはアチユミアノフに會つた。この青年は息をはずませて、そして激してゐた。

『僕は君を探してゐたんだ、イワン・アンドレヰツチ君。』と、言ふ。『どうか一緒に來て呉れ給へ。直ぐ來て呉れ給へ。』

『何處へさ。』

『或る人が君に會ひたいと言つてるんだ。何か非常に重大な用事があるらしいんだ。一寸間でも好いから君に來て貰ひたいといふんで、頻に待つてるんだ。君に是非話したい事があるんださうだ……それはその人に取つて生死の問題なんだ……』

アチユミアノフは、激昂の餘り、これらの言葉を強いアルメニア訛りで言つた。
『一體そりや誰だい。』と、ラアエウスキイに尋ねる。
『名は言つて呉れるなと頼まれたんだ。』
『僕は忙しいんだと、さう言つて呉れ給へ。先方の都合さへ好ければ、あした……』
『そりや駄目だ。』と、アチユミアノフはびつくりして言ひ張る『非常に重大な話があるんだもの……非常に重大な……』
『妙だな』アチユミアノフの興奮と、その神祕的な樣子とを、理解する事が出來ないで、ラアエウスキイはかう呟いた。
『妙だな……』と、彼は口籠りつつ又繰り返したが、やがて、ぢや兎に角行かう。どつちにしても同じ事だから。』
アチユミアノフは先に立つた。ラアエウスキイは跡に附いて歩いた。二人は横町へ曲つた。
『中々面倒な道だね。』と、ラアエウスキイは言ふ。
『もう直ぐだ……もうそんなに遠かない。』
城跡に附いて、板圍ひのしてあるあき地と明き地との間の路地を通つて、大きな庭へ這入ると、それから小さな家の方へ曲つた。

『こりやムリドフの内だ、さうぢやないか。』と、ラアエッスキイは尋ねる。

『さうさ。』

『ぢやなぜ裏からなんど来たんだ、分からんな……表から立派に来られるぢやないか。それに道もその方が近い……』

『まあ、そんな事は心配し給ふな……』

ナヂェミアノフはなぜ裏道やなんぞ連れて来たんだらう、そしてそつと歩け、音を立てるな、といふ風に、手を振りなんぞするんだらうと、ラアエッスキイには、それが不思議でならなかつた。

『ここ、ここ……』と言ひながら、ナヂェミアノフはそつと戸を開けて、足を爪立てて、ま闇へ這入つた。『静かに、静かに、お願ひだから……聞えるといけない。』

彼は身を屈めて、一生懸命に息を殺して、そして囁くやうに言つた——

『その戸を開けて、中へ這入り給へ……恐れずに。』

ラアエッスキイは、躊躇しながら戸を開けた、そして、その部屋へ這入つた。天井が低い、窓が窓掛で蔽はれてゐる。卓の上にランプがある。

『誰だ。』と次の部屋から聲がする。『君か、ムリドフか。』

ラアエッスキイは、その部屋をひよいと覗いた、すると、キリリンの姿が見えた、それから、キリリ

ンの側に坐つてゐるナヂエヂダの姿が見えた……

何を言はれたのだか、それは丸で耳に這入らなかつた。唯彼は器械的にそこを退くと、いつの間にか又往來に立つてゐた……フオン・コオレンに對する憎惡も、それから、不安も、總て逃げて行つて了つた……彼は自分の家へ歩いて歸つた。可笑しな風に右の手を振りながら、そしてしつかり歩かうとするもののやうに、注意して足元を見ながら……家へ著いて、書齋へ這入ると、手を揉み出した、上着とシヤツが堅過ぎでもするやうに、肩を動かし始めた、首を窮屈さうにした。部屋を隅から隅へ歩き始めた。それから蠟燭を附けて、卓の側に坐つた……

十五

「君の謂ふ人道主義の教理は、人間が實驗科學と一致した時に於いて、初めて人の心を滿足させる事が出來るんだ。この調和は顯微鏡の尤に發見されるか、新しいハムレツトの獨白の内に見出だされるか、或は新宗敎の内に現はれて來るか、それは僕知らん。僕は唯、さういふ時代の來る前に、地球はも一度氷河時代を經なければならんだらうと信じてをる。總ての人道主義の教理の内で、最も強固なものは確かに基督の教訓だ、併しながら見給へ、この敎理が如何に樣々に理解されてをるかを。或者は敎へて言ふ、吾人は吾人の隣人を愛さなければならん、但し、軍人と罪人と狂人とは例外だ。第一

在してゐるのだ、そして、いつまでも存在してゐるものだらう。僕はそれを顯微鏡の下に置けとは決して言はん、併しながら、それの組織的結合は、既に實證によつて證明されてゐる。卽ち、眞面目な頭腦の苦痛と、總ての所謂「魂の病」とは、先づ道德律の曲說を以て自己の姿を現はす。」

「宜しい。」と、助祭は言ふ。「それは、丁度胃の腑が食物を要求すると同じやうに、道德律が吾人の隣人に對する愛を要求する事を意味してゐる。さうぢやないか。併しながら、吾人の天性は利己主義の爲に良心の聲を退ける、そこで頭の割れるやうなむつかしい問題が涌いて來るんだ。若しこれらの問題を哲學的基礎の上に置いてならんとしたら、どうして吾人は問題の解決に近づく事が出來るんだ」

『實驗科學に依るのさ。事實の實證に賴るのさ。實際、そりや、さういふ實證はさう澤山あるものぢやない、が併し、哲學のやうに曖昧なものぢやない、哲學のやうに不定なものぢやない。例へば道德律は吾人に隣人を愛することを要求するといふ事實を假定する。然らば、どうである。愛といふものの職務は、人に少しでも害を加へたり、少しでも人の安全を脅かしたりする總ての者を除去するにあるのだらう。然るに、吾人の學問と實證とは吾人に敎へて、絕えず人類を害し、人類を脅かす者は、道德並に肉體の不具者だといつてゐる。若し果して然らば、吾人はその不具者に對して宣戰をしなければならんのだ　若し彼等をして其者たらしむるだけの力が吾人に無いとしたならばね。彼等を無害にする唯一の道は、ただ彼等を滅盡するにある。」

『すると負けた弱者に對する強者の勝利だね。』

『勿論さ。』

『けれども、耶蘇を十字架にかけたのは強者だつた。』と、助祭は眞つ赤になつて言ふ。

『そこだ――彼を十字架にかけたのは強者ではない、弱者なんだ。人間の文明は日に増し減退し、生存競爭は日に増し廢されつつある。從つて弱者の繁殖となる、強者に對する弱者の優勢となる。或動物の形式の中に、蜜蜂に人間の思想を吹き込む事が出來たとして見給へ。その結果はどうなるだらう。きつと、最も弱き者の思想が生きて殘つて蜜を喰ひ盡し、他の蜜蜂を餓ゑ死にさせて、これが排斥して了ふだらう――その結果は、強者に對する弱者の優勢となり、延いては強者の衰頽となるだらう。丁度これと同じ事が今人間界に起つてゐるんだ、即ち、弱者が強者を壓服してゐるんだ。まだ文明に接觸しない野蠻人の間では、最も強い者、最も賢い者、最も高い者が頭に立つてゐるんだ。さういふ人が皆の主人なんだ。然るに、吾々文明人は基督を十字架にかけた、そして、今も尚彼を十字架にかけてゐる。これは吾人に或物が缺けてゐるからだ。そこで、吾人はこの「或物」を復全しなければならんのだ、然らずむば吾人の苦惱は終に止む時があるまい。』

『けれども、君が強者と弱者とを區別する標準は一體何なんだ。』

『學問と實驗とさ。肺病患者と瘰癧患者とは病氣で分るだらうぢやないか、惡人と狂人とは行爲で

判斷がつくだらうぢやないか。」
「併し間違ふ場合もあらう。」
「洪水の來ようといふ時、足の濡れる心配をする必要はない。」
「そ、それが即ち哲學だ。」と、助祭は笑ひ出した。
「いんや、決してさうでない。君は坊主學校哲學の害毒に染みてをるから、在らゆる所に霧を見なければ氣が濟まんのだ。君の頭を一杯にしてをる抽象科學なる者は、實證から君の心を抽象するが故に「抽象」と呼ばれてゐるんだ。惡魔の顏を直覺し給へ、そして若しそれが惡魔だつたら、彼は惡魔だと立派に言ひ給へ。決してカントやヘエゲルの所へ、說明を求めに走る必要はない。」

動物學者は一寸默つたが、又直ぐ言葉を續けて――

「二に二を掛ければ四だ、石は石だ。あしたは決鬪をするんだ。吾々は今ここに坐つて、決鬪は愚劣なものだとか、不合理なものだとか、時代遲れなものだとか、居酒屋で見る醉つぱらひの喧嘩に等しいものだとか、樣々な議論をしてをるが、併し、結局決鬪を止める事は出來ないのだ――あしたはどうしても出掛けなければならないのだ。戰はなければならないのだ。して見ると、この宇宙には吾人の理性以上に強い力があるんだ。吾人は常に叫んで、戰爭は追剝ぎだ、野蠻だ、兄弟殺しだと言ふ。吾人は又血を見て氣を失はずにはをられん。しかも、一旦佛蘭西人なり、獨逸人なりが吾人に侮辱を加

て、半月形のサアベルを持つて、アラビアから一寸出て來でもすると——萬物は忽ち根蔕から引つ繰り返つて了ふんだ。全歐羅巴が心臓まで搔き廻されて了ふんだ。』

『成程、そんな事が熊手で空に書いてあつた。』

『勞働の無い信仰は死物だ、併し信仰の無い勞働は更に悪い——それは單に時間の浪費だ、それだけだ。』

丁度その時、ドクトルも地方へ來た、そして助祭と動物學者が一緒にゐるのを見て、自分もその中へ這入つた。

『もう決鬪準備はついた積りだ。』と、彼は息を切つて言ふ。『ゴオロウスキイとボイコオが君の介添人になる事になつた、二人とも何れ時には來る筈だ。』と言つて、彼は空を眺め『馬鹿に暗くなつて來た……雨だな……』

『君も一緒に行くんだらうね。』と、フォン・コオレンが尋ねる。

『いんや、そりや駄目だ。僕は御覧の通り非常に疲れてゐる。僕の代りにウスチモヰッチが行く筈になつとる。もうあの男に話をして置いた。』

時々ゴロゴロと海の上に空で鳴つた。鈍い雷の音が木霊に響いた。

『ひどく蒸すねえ。』と、フォン・コーレンが言ふ、『君は今までラアエウスキイの内で、あいつの胸に聽

つて泣いてゐたんだらう。さうに違ひない。』

『何で僕があいつを尋ねる必要があらう。』と、狼狽しながらもドクトルは答へた。

挑戰のあつた後で、サモイレンコオはブウルヷアルへ出たのだ、そしてラアエウスキイに會はうと思つて町を歩いたのだ。彼は自分の餘りひどく怒つたのを恥ぢたのである。怒つた跡で直ぐ又急に深切にしたのを恥ぢたのである。彼はラアエウスキイに會つて、それを詫まらうと思つた、冗談のやうに言つて詫まらうと思つた、序に異見をして、彼の精神を宥めもし、決鬪は野蠻の遺風だからと言つて思ひ止まらせようともしたものだ。實際、あした、これら二人の秀才が銃丸を交換すれば、お互に好い所が分かつて、却つて親友になるに相違ないのだ。

併し、ドクトルは終にラアエウスキイに會はなかつたのである。

『何で僕があいつを尋ねる必要があらう。』と、サモイレンコオは繰り返す。『僕が奴を侮辱したんぢやない、奴が僕を侮辱したんだ。一體、何だつてあんなに食つて掛かつたもんだらう。僕は奴に對して何か悪い事をしたかしら。客間へ這入るか這入らないに、行きなり人を捕まへて「探偵」呼ばはりをするぢやないか。君は知つてるんだらう。一體初めはどうしたんだ。君は奴に何を言つたんだ。』

『貴樣の地位は絕望だと言つたのさ。さうに違ひないもの。一體困難な境遇から脫け出るには、正直にやるか、悪者になるか、この二つの内一つを取るより外に道は無いんだ。然るに奴は兩方一度に遣

向いて叫つた。

『あしたは天氣が惡さうだね、』

『さうだねえ。でも、爲方がないさ。』

『ぢや、お休み。』

『何。すみだッて。何だか分からない。』

風の音と海の音と雷の音とに隔てられて、人の言葉は聞えなかつた。

『何でもないよ。』と、動物學者は叫つた、そして家へ急いだ。

十六

......En mon esprit, en proie au chagrin,

Se pressent en foule les lourdes pensées :

Le sovenir silencieusement devant moi

Déroule son long ruban :

Et avec dégoût je revois ma vie,

Je tremble et je maudis,

幸な、弱い婦人を、深切に世話してやつて呉れと書いた。この犠牲に依つて、息子の恐ろしい罪悪を幾分たりとも償つて呉れと書いた。さう書いて、彼は母の姿を思ひ浮べた。どつしりと肥つた老婦人が、レエスの帽子を冠つて、狆狗を連れて、朝、母屋から庭へ出て来る、そして號令をかけるやうな大きな聲で、植木屋に何か命令をする。その横柄な高慢な顔を思ひ出すと厭になつて――ラアエウスキイは折角書いた文句に十文字を引いて了つた。

と、稲妻が窓を通して光つた、續いて、長い、夢になりさうな雷の音が聞えて来た、初はごろごろと鈍く、やがてがらがらと烈しく。ラアエウスキイは立ち上つて、窓の所まで歩いて行つて、そして窓硝子にぴつたりと額を押つつけた。外には壮麗な嵐が荒れてゐる。地平線では稲妻が白い鎖の手をして、雲から海へ閃めいてゐる、高い黒い浪を折々ぱつと照らして。

『嵐だ。』と、ラアエウスキイは囁いた。と、彼は無性に祈りたくなつた――嵐に向つて、或は雲に向つて。『あゝ恵み深き嵐よ。』

彼は子供の時の事を思ひ出した。曾て彼は嵐の最中に帽子も冠らず庭へ飛び出した事がある、二人の、青い眼をした、ブロンドの女の子が、彼の後から追つかけて出て来た。彼等は喜んで笑つた。そして、一度ひどい雷が鳴つた時、女の子は二人ともぴつたりと彼に身を寄せた。彼は十字を切つて、『聖なる、聖なる、聖なる……』と口の内で念じた。

想だの、宗教だの、學問だの、勞作だのに對しては、一向無頓着であつた。彼は彼等に向つて一言でも善い事を言はなかつた、一行でも役に立つ事を書かなかつた、一文の價値ある仕事をさへしなかつた。彼は唯彼等の麵麭を喰べた、彼等の葡萄酒を飲んだ、彼等の妻君を連れて逃げた、彼等の思想で生活した、そして、自己の哀れな食客的な生活を、彼等の目にも自分の目にも明るく見せる爲に、絶えず自分は彼等より立ち優つた人間だといふ風をした。

虚僞、虚僞、常に虚僞……

ふとムリドフの家で見た事が、はつきりと細かく思ひ出された。この思ひ出は悲痛と不快とで彼の胸を一杯にした。キリリンとアチュミアノフとは如何にも賤しむべき奴等だ、併し、彼等は彼の爲した事を受け繼いで遣つたに過ぎないのだ――彼等は彼の同類なのだ、弟子なのだ。彼を兄以上に信じた一人の弱い若い女から、彼は亭主を奪つて了つたのだ、彼は女を友達と故鄕からおびき出して、熱病と疲勞とを得させに、こんな所へ連れて來たのだ。日毎に女は、男の戀情と不信と虚僞とを心の鏡に映してゐるのだ、男は女を捨てはしないのだ、併し嘘で女を包まうとしてゐるのだ――嘘で――嘘で……

ラアエウスキイは卓から立つた、窓の方へ歩いて行つた、又坐つた、又立つた。一度燈火を消した、それから又附けた。彼は聲を出して自分を呪つた、絶叫した、號泣した、そして、許しを乞うた。誰

度も彼は机の所へ駈けて行つて「親愛なる母上よ。」と書いた。

母の外に彼の頼るべき親族は世界に一人も無いのだ。併しながら、彼の母はどうして彼を救ふ事が出來よう。彼女は一體何處にゐるのだらう。

彼はナヂェダの所へ駈けて行つて、その足元に跪いて、許しを乞はうとした。併し、彼女は彼の生贄であつた。彼は死骸から飛びのくやうに彼女の側を飛びのいた。

「俺のライフはもう去つて了つたんだ。」と、彼は手を揉みながら、口の内で言ふ。「ああ、それだのになぜ俺はまだ生きてゐるんだらう……」

彼は空から我が運命の星を引いた。その星は沈んだ。そして、夜の暗闇に隠れて了つた。又出る事は終にあるまい。人生は一度より與へられないものだから。彼にして若し過去の月日を呼び返す事が出來るなら、彼は虚偽に代ふるに眞實を以てするだらう、怠惰に代ふるに勞作を以てするだらう、悲痛に代ふるに歡喜を以てするだらう。盗んだ貞淑は還すだらう。再び神と正義とを認めるだらう。併しながら、總てこれは、今落ちた星を再び空に返すよりも困難な事だ。

雨の止んだ時、彼は明いた窓の側に坐つて、靜かに己れの身に起るべき事を考へた。フォン・コーレンはきつと彼を殺すだらう。あの男の、明快な、冷靜な天性は、弱い者、不用な者を滅盡するより外の事を考へてゐないのだ。とは言へ、若し彼が狙ひを外したらどうしよう、或は、自分のやうな賤

しむべき相手方に對して、侮蔑の意を表するが爲に、唯傷をつけるか、空を打つかしたらどうしよう。さうしたら自分は何處へ行かう。

『ペテルブルグへ行かうか。』と、ラアエウスキイは我れと我れに尋ねた。併し、それでは折角今自分の呪つてゐる昔の生活を、又遣り直す事になる。場所の變更に救ひを求めて、しくじらない人は今までに一人も無かつた。世界は何所へ行つても同じ事なのだ。然らば人間に救ひを求めようか。いんや、それも駄目である。サモイレンコオの深切と大量とは助祭の滑稽や、フオン・コオレンの憎み程にも、人を救ふ力を持つてゐなかつた。救ひはこれを自己に求めなければならぬ。求めて自己に見出だす事が出來なければ、死ぬより外はない――自殺するより外爲方が無い。……

　馬車の近づく音が聞こえて來た。夜が明けかかつて來た。馬車は窓の前をゴロ〳〵と通つて、角を曲つた。車輪が濕つた砂を噛んで、キシ〳〵と鳴つた。ラアエウスキイの家の前で留まつたのである。

　馬車の中には男が二人乘つてゐた。

『待つて呉れ給へ、今直ぐに行くから。』とラアエウスキイは窓の中で言ふ。『僕は寢ちやゐないんだ。』

『併し、もう時間か。』

『さうさ、もう四時だ……』

　ラアエウスキイは外套を着た、制帽を冠つた、卷煙草を少し衣兜へ入れた、そして躊躇して佇んだ。

う。あたし待つてゐましたのよ。』と、女は半分口を塞いで言葉を續ける。

『あたしあなたに殺されるか、あの雨風の中へ追ひ出されるだらうと思ひました。けれど、あなたは躊躇なさいましたのね……あなたは躊躇なさいましたのね……』

男は矢庭に女を抱いて、その腕に接吻した、そして女が何か口の内で言つて、ぶる／＼と慄へた時に、女の髮の毛を撫でてやつて、ひたと女の顏を見詰めた。この不幸な、不貞な女も、彼にとつては賭け換への無い、たつた一人の近しい親しい人間だといふ事が、今彼に分かつた……

家を出て、馬車に乘ると、一縷の希望が湧いて來た。彼は生きて又家へ歸りたいと思つた。

十七

助祭は起きると、着物を着て、太い杖を手にして、靜かに家を出た。

外は暗かつた。空には一つも星が無くて、どうやら又雨が降つて來さうだつた。濕つた砂の匂と藻の匂とが大氣に充ち滿ちてゐた。

『成程、大分本式に荒れたんだな。』敷石道に太い杖の當る音を聞いた時に、助祭はこんな事を考へた。

町の外れへ來ると、行く手がほんのり見えた。と、黒い空が切れて、星が一つこは／″＼顏を出した、たつた一つの目で瞬きしながら。

助奈は、前の見えない、高い、當のない、海岸の道を歩いた。足元には海が眠つてゐた、そして目に見えない浪が、低く呻きながら、疲れたやうに、怠けて岸を打つてゐた。浪は少しも見えなかつた。海の眠さうな濁つた音が耳へ這入ると、彼は無限の大空を支配する神を思ひ出した。

彼は後悔の念に襲はれた。不信者と交はつたり、決闘の手傳ひをしたりする爲に、神の刑罰に會ふだらうと思つた。勿論、今日の決闘は失敗に終るだらう、一滴も血は流されまい、餘程面白い觀物に違ひない。併し、その四邊の方がどうであらうとも、結局それが異端的の觀物たるに變りはない、坊主の見るべき物でないに變りはない。彼は立ち留つて、歸らうかと思つた。併かし、猛烈な好奇心は、彼を催促した。彼はまたてく／＼と歩き出した。

「自然、あの人達は不信者だ。併し、みんな好人物だ。いつか救はれる時がある。」と、彼は自分で自分を慰めた。「きつといつか救はれる時がある」と、彼は聲を出して言つた。

そして念佛を唄ひ始めた。

人を正當に裁判するには、どういふ標準で判斷を極めたら好からう。助奈は、昔自分の敵だつた、坊主學校の監督を思ひ出した。この人は神を信じてゐた、決闘をした事などはなかつた、純潔な生活をしてゐた。しかも昔は、一度助奈を罰して、蠅をつけた麪包を喰べさせた。もう一度の時は、千切れさうになるまで耳を引つ張つた。政府の麪包附を盗んで生きてゐる斯樣な狡猾な怠者が、總ての者

に尊敬されて、その健康と安泰とを人に祈られる程、人生といふものが馬鹿々々しく出來てゐるものなら、フオン・コオレンやラアエウスキイの如き人達を、唯信者でないからと言つて、避けるやうな事をするのは果して正當な行ひだらうか。

助祭はこの問題を色々に思ひ廻らした、併し、サモイレンコオの可笑しな恰好を思ひ出すと、思想の流れが方向を轉じた。「今日はまあどんなに可笑しいだらう。」助祭は、自分が藪の蔭に身を潜めて、ぢつと見物してる樣子を思ひ浮べた。そして、晝飯の時、フオン・コオレンが自慢話を始めたら、あべこべに決鬪の有樣をこつちから詳しく話して遣らう。

「どうして君はそんなに詳しく知つてるんだ。」きつとかう動物學者は聞くだらう。

「そこが術だ。」と、こつちが答へる。「僕は内にゐて、ちやんと知つてるんだ。」

それから、決鬪の有樣を、滑稽な文章で、手紙に書いたら嘸面白からう。自分の養父はそれを讀んで、きつと笑ふだらう。養父は滑稽な事が大好きだ。

黄河の谷が見えて來た。その小さな川は雨の爲に水かさを增して、最早小さな聲で呟いてはゐなかつた。大きな聲で吠えてゐた。ほのぐ〱と夜が明け始めた。鈍い灰色の朝、西の空へ千切れて飛ぶ雲、霧に鎖された山々、雫の垂れる樹々――總ての景色が、助祭に、醜惡な、腹の立つやうな感じを與へた。彼は川の水で顔を洗つた、そして朝の祈禱をした。彼は養父の家の食卓で毎朝の例にしてゐた

し得たなら、もう世界に十分あるではないか……
馬車の近づく音が、助祭の默想を破つた。戸の外を覗くと、男の三人乘つてる馬車が見えた――ラアエウスキイとシエシユコウスキイと郵便局長とだ。
「留まれ。」と、シエシユコウスキイが言ふ。
三人は馬車から降りた、そしてお互の顔を見合つた。
「まだ還つて來ないんだな。」と、シエシユコウスキイは服の泥を拂ひながら言ふ。「先づ適當な場所を見つけなければならん。ここは少し狹い。」
人は山に附いて歩き出した。そして直きに見えなくなつた。韃靼人の馭者は馬車の内に腰を掛けた儘、首を肩の方へ曲げて、ぐう／＼眠つてゐた。
十分許りすると、助祭は此小屋から出て來た。黑い帽子を脱いで、身を屈めて、あたりを見廻した。それから、藪を分け分け、進んで行つた。
直ぐと人の聲がして來た、そして人の姿が見えて來た。
ラアエウスキイは、首を垂れて、兩手を衣囊へ突つ込んで、小さな原を早足で行つたり來たりしてゐた。介添人は川の側に立つて、[illegible]な[illegible]いてゐた。
「來たな。」と、助祭は思ふ。彼にはラアエウスキイの姿がはつきり認められなかつたのである。「老人

のやうだ。』
『失敬な人達だ。』と、郵便局長は懐中時計を見ながら言つた。
『教育のある人達にとつては、遅刻して來るのが好い事なのかも知れんが、僕等にとつては不禮な事だ。』
黒い髯の生えてゐる大男の、シエシユコウスキイは、暫く聞き耳を立ててゐたが、やがて言つた――
『來た、來た。』

十八

『實に綺麗だ。』フオン・コオレンは原つぱへ出て來ると、かう言つた、して兩手を東の方へ突出した。
『見給へ、あの緑の光線を。』東の空では、山の後から、日が登りかけてゐた。
『お早う。』と、動物學者はラアエウスキイの介添人に顎で會釋をしながら、言葉を續ける。
『遅かつたか、さうか。』
彼の後から、介添人が附いて來た――二人の青年士官、ボイコオとゴヲロウスキイとである、二人とも白リンネルの上着を着てゐる――それから、痩せた、無口な、醫者のウスチモヰツチが附いて來た。彼は片手に小さな包みを持つてゐる。最一方の手では、いつもの癖で、背中に斜かひに、杖を當

行つたり來たりしてゐたウスチモホッチは、突然ラァエゥスキイの方を振り向くと、彼の顔に息を吹つ掛けながら、のろい調子でかう言つた——

「君はまだ僕の出て來た條件を聞かんだらう。兩方で僕に十五ルウブル宛拂ふんだ、若し片つ方が死ねば、殘つた方が一人で三十ルウブル拂ふんだ」

ラァエゥスキイは前からこの男を知つてゐた、併し、その濁れた眼や、硬い髭や、痩せた、肺病やみのやうな咽喉に氣がついたのは、今が初めてである——どうしても高利貸だ迚も醫者ぢやない、その息は、不快な、牛肉のやうな匂がする。

「世間には變つた人間もゐるものだ」と、ラァエゥスキイは思つた、そして大きな聲で答へた「承知してゐる」

醫者は頭を振つた、そして又散歩を始めた。

みんな、もう始める時分だと思つた、或は、既に始まつてゐる事をお終ひにする時分だと思つた。併し、誰もそれを發議する者は無かつた——みんな、唯歩いたり、突つ立つたり、煙草を吞んだりばかりしてゐた。二人の青年士官は、踊るつもりで舞踏會にでも來た人のやうに、リンネルの上着を丁寧に檢閲したり、手で袖を撫したりなどしてゐた。

と、シエシユコウスキイが二人の所へ來た、そして低い聲で言つた——

シェシュコウスキイは、見えぬ程に跛を引きながら、まだ決斷のつかぬ樣子で、アナン・コオレンの方を向いた。そして、その方へ歩きながら、咽喉をぐつぐつと言はせた。

「君、僕は君に少し話があるんだ。」と、彼は動物學者の着てゐるシャツの模樣を注意して見ながら、口を開く。「これは秘密だがね……僕は決鬪の規則を知らん――そんな物はどうでも好い――知らうとも思はん、僕は今介添人として君に話をするのぢやない、唯一個の人間として話をするんだ……」

「宜しい。それで。」

「たとひ介添人が和解させようとしても、その勸告は用ひられないで、大抵の場合決鬪は行はれて了ふものだ。それはブライドの問題だ。だが、僕は頭を下げて頼む、まあラアエウスキイの體裁を見て遣つて呉れ給へ。けふは奴調子が狂つてゐるんだ、殆ど氣が違ひさうになつてゐるんだ、哀れな態だ。あの男は不幸に遭遇したんだ……僕はおしやべりはしたくない――」シェシュコウスキイは赤くなつて、あたりを見廻した――「が、これは決鬪の前に、一應君にも必要があると思ふ。ゆうべあの男は、自分の妻君がキリリンと一緒にムリドフの家にゐる所を見つけたんだ……」

『堪らん。』と、動物學者は呟いた。彼は青くなつた、顏を蹙めた、そして音をさせて唾をした。『ぷうッ。』

彼の下唇は慄へた。もうその事に就いては何事をも聞くまいとするやうに、シェシュコウスキイの

間が揮れた。彼は何か厭な味のする物を口に入れたやうな氣がして、又音をさせて唾をした。それから憎さしげにラアエウスキイの顔を見た——まだ一度もラアエウスキイの顔を見なかつたのだ。興奮が静まると、彼は頭を振りながら、大きな聲で叫つた——

「諸君、何を君達は待つてゐるのだ。なぜ始めんのだ。」

シエシユコフスキイは二人の士官と眼を見交して、肩を縮めた。

「諸君！」彼は誰に向つてといふ事もなしに、大きな聲で、「兩君、僕等は切に兩君の和解を望む。」

「凡ての形式を盡したのだ。和解の話ももう濟んだのだ。次いで來るべきものは何か。」

「それでも僕等は和解を主張する」とシエシユコフスキイは苦しさうな聲で言つた。又彼は赤くなつて、胸に手を置いた、そして言葉を續けた——

「兩君、僕等は決闘の依つて立つべき何等の正當な理由を認めない。人間が弱い爲に人に對して與へる侮辱と決闘との間には何等の連絡も無い。君等は大學を出た人だ、教育のある人間だ。決闘が野蠻な遺物として時代遅れなものである位の事が分かつてゐらんといふ法はあるまい。僕等でさへさう思つてゐるんだ、でなければ、誰がこんな所まで遣つて來るもんか。僕等は僕等の面前でピストルを放ち合ふ事を許す事が出來んのだ——それだけの話だ。」

シエシユコフスキイは、額の汗を拭いた、そして言葉を續けた——

「兩君、どうかお互に誤解を解いて呉れ給へ、握手をし合つて呉れ給へ、僕等は兩君の友愛の爲に盃を擧げたい。兩君、是非ともさうさせて呉れ給へ。」

フォン・コオレンは默つてゐた。ラアエウスキイは、みんなが自分の方を向いてるのに氣がついて、かう言つた――

「僕はニコライ・ソシリエヰッチ・フォン・コオレン君に對してなんにも惡意は持つてゐない。僕が惡いといふのなら、喜んで僕は謝まる。」

フォン・コオレンは輕蔑されたやうな氣がした。

「諸君。」と、彼は言ふ。「諸君はラアエウスキイ氏を寛俠な武士のやうにして引き取らせようといふんだね。お氣の毒だが、それは許せんね。仲好く酒を飲んだり、物を食つたりする爲めや、決闘に時代遅れな形式だといふやうなお話を承る爲なら、態々朝早く起きて町から十里も離れた所へ出かけて來る必要は無かつたんだ。決闘は決闘だ、それを實價以上に愚劣にしたり、實價以上に虚僞にしたりする必要は少しも無い。僕は何處までも決闘を要求する。」

又言葉が途絶えた。

士官のボイコオは、持つて來た箱からピストルを二挺取り出した。そして一挺を動物學者に、他の一挺をラアエウスキイに渡した。

やがて決闘の道の方に就いて、色々と議論が起つて來た。結局、ここに來てゐる者の中に決闘を目擊した者は一人も無いといふ事が分かつて來た、從つて、決闘をする二人の者を何處に立たせたら好いのか、それから先はどうしたら好いのか、誰も知つてゐる者は無かつた。

ボイコオは言つた、先づ廿歩の間隔をとらなければならん、間隔をとつたら、その兩端にサアベルを突き立てゝ、それから「進め。」といふ號令で、決闘をする二人が兩方から相對して歩き出す、そして互に十歩の距離に來た所で、ピストルを放ち合ふのが式だと。併し、この説明は誰にも一向解らなかつたらしかつた。

「諸君、諸君の中で誰かレルモントフの決闘の描寫を覺えてゐる者はないか。」と、笑ひながら、フォン・コオレンは尋ねる。「ツルゲネフにも、バザロフの決闘する所があつたね……」

「そんな物を覺えてゐる必要が何處にある。」と、ウスチモヸッチは腹立たしげに立ち留つて言ふ。「トホ間隔をとり給へ——さうすりやそれで好いんだ。」

ボイコオは十歩を數へた、連れのゴヲロフスキイはその兩端にサアベルを突き立てた。決闘する二人は、あたりを支配する沈默の内に、各々その位置に就いた。

「[illegible]だ。」と、藪の蔭に隱れてゐる助祭は思つた。

「挑戦をしたのはフォン・コオレン君だ。」と、シェシュコウスキイは言ふ。「よつて第一發は君に權利

がある。』と、ラアエウスキイに向つて言つた。『さうだらう、さうぢやないか。』

『その通り。』と、ボイコオが言ふ。

ラアエウスキイは撃鐵を上げた、そして、冷たい重いピストルを上げて、銃口を上の方に向けた。彼は上着の釦を外す事を忘れた、それが爲めに肩だの腕の下だのが、何んだか窮屈に思はれた。彼は不器用に手を上げた。彼は相手の黒い額や縺れた髮の毛に對して、きのふ感じたやうな憎惡の念を呼び起した。併し彼は、あの時でも、あんなに激してゐた時でも、この男に向つてピストルを放つ事だけは出來なかつたと思つた。

萬が一にも、銃丸がフォン・コオレンを倒すやうな事があつてはならぬと、彼はピストルを一層高く上げた。その時彼は、こんなにしては、餘り自分の大量を見せつけるやうになりはせぬかと思つたが、どうも外にしやうは無かつた。

ラアエウスキイは、初めから相手方の空に打つのを知つてゐるらしいフォン・コオレンの、青白い、嘲けるやうな顏を見て、『有難い、何にせよ、もう直き總ひになる。』と思つた。そしてもう引き金を一寸押せば好い計りになつた……

ピストルが切つて放された時、彼の肩は激しく後へ引けた。と、木靈が山から答へた。

『ヅ――ヅウウン。』

今度はヴァン・コオレンが拳銃を上げた。そして、相變らず手を後へ遣つて、何事が起らうと一向構はずに行つたり來たりしてゐるウスチモヰッチの方を振り向いた。

『ドクトル』と、動物學者は言ふ『どうかさう振子のやうにあつちへ行つたりこつちへ來たりしないで呉れ給へ。目移りがしてしやうがありやしない。』

動物學者は立ち留つた。ヴァン・コオレンはピストルを上げた、そしてラアエウスキイを狙つた。

『もう駄目だ。』と思ふと、ラアエウスキイはかなゐな懐へ出した、身内が寒くなつて來た。飛び退きたいやうな氣がした。叫びたいやうな氣がした、死にたいやうな氣がした。彼がその瞬間に怯えた感覺は、それ相應らしく、それ相當らしいものだつた。

自分の額にまともに向けられたピストルの銃口、ヴァン・コオレンの姿勢や顔形に見える憎悪と侮蔑の表情、自由思想ある人々の前で理性ある人に依つて行はるる殺傷、この沈默、而してラアエウスキイを逃げ得ないで立つてゐさせるこの神秘な力――總てが不可解である、總てが異常である。總てが恐ろしい。

ヴァン・コオレンの狙つてゐる間が、ラアエウスキイには一晩よりも長く思はれた。彼は哀願する者の如く、介添人の顔を覗ひ見た。彼等は少しも動かずにゐた、青くなつてゐた。殺氣と死息があたりを籠めてゐるやうに見えた。

『早く打てば好い。』と、ラアエウスキイは心の内で思つた、そして自分の、青白い、慄へてゐる、哀れな顔色は、尙とフオン・コオレンの憎悪を增すだらうと思つた。

『今直ぐ殺して遣るぞ。』と、相手の額を狙ひ澄まして、引金に指をかけながら、フオン・コオレンは思ふ。『うむ、きつと殺して遣るから……』

『あ、殺す。』と、不意に大きな聲が藪の中から聞こえた……

同時にピストルの音がした……

ラアエウスキイが倒れもせずに、その立つてゐる所に立つてゐるのを見た時、みんなは一齊に、その大きな聲の起つた方角を見た、すると、助祭がゐた。彼は眞つ靑な顏をして、濡れた髮の毛を額や頰ぺたに喰つ附けて、絞るやうに濡れて、泥だらけになつて、畠の向うに立つて、妙に笑ひながら、濡れた帽子を振つてゐた。

シエンユコウスキイは喜んで笑ひ出した、それから、泣き出した。

十九

暫くしてフオン・コオレンと助祭とは橋の上で會つた。助祭は興奮して、息をはずませてゐた。彼は、自分の驚いた顏と、濡れた泥だらけの着物とを恥ぢて、フオン・コオレンの目を避けた。

『僕はきつと殺すだらうと思つた。』と、彼は口の中で言つた。

『だが、どうして君はここへ來たんだ。』と、動物學者は尋ねる。

『それは聞いて吳れ給ふな。』と、助祭は手を振つて、『惡魔が誘惑したのさ……行け、行けつてね、そこで僕は出かけて來たんだ、そして畠の中で見てゐたんだ、實に驚いたよ、僕は死ぬかと思つた……併し、まあ有難い、有難い……僕は非常に滿足だ……伯父貴の「タランツラ」も嘸喜ぶだらう……嬉しい、實に、嬉しい。併し、僕のここへ來た事だけは、どうぞ誰にも言はずに置いて吳れ給へ、でないと、上役が八釜しいからね。きつと「助祭は介添人の一人だつた。」位の事は言ひ出すに違ひないんだ。』

『諸君』と、フォン・コオレンはみんなを見廻して、『助祭君にここで會つた事は、どうか誰にも言はずに置いて吳れ給へ、それは助祭君から諸君にお願ひするさうだ、若し諸君が話されると、助祭君は非常に迷惑するさうだ。』

『實に人間の天性に反した事だ。』と、助祭は溜息をするやうに言つた。『失敬よ、併し、君の顏付きは確かにあの男を殺しさうに見えた。』

『實際、僕はどうかしてあの惡人を殺して遣りたいと思つたんだ。』と、フォン・コオレンは言ふ。『けれども、丁度僕が打たうとした時に君が叫つたんで、狙ひが外れて了つたんだ。君があいつの命を助

けたんだ。僕は總てけふの始末を不快に思ふ。僕は非常に疲れた、助祭君。僕は非常に心細くなつて來た。さあ……一緒に馬車に乘つて歸らう――』

『いや、僕は歩かして呉れ給へ。こんなに濡れてて寒いから、乾かしながら歸りたい。』

『ぢやあ自由にし給へ……』と、動物學者は一人で馬車に乘ると、目をつぶつて、だるさうな聲で言ふ。『自由に……』

助祭を除いて、外の者はみんな馬車へ乘り込んだ。

ケルバライは、往來端へ出て來て、兩手を腹に當てて、背を出しながら、例の低いお辭儀をした。彼は旦那衆が朝の空氣を吸ひながら、茶でも飲みに來たのだらうと思つた、だのにどうして又馬車へ乘るのだらうと、それが分からなかつた。

默り切つて一行は出發した。助祭はたつた一人旗亭の前に殘つた。

『さ、内へ這入つて、茶を拵へて呉れ。』と、彼はケルバライに向つて言ふ。『それに何か喰べたい。バンケエクを作つて呉れ、それからチイスを呉れ。』

『さあ、さあ、坊樣どうぞお這入り下さりませ。』と、ケルバライはお辭儀をしながら言ふ。『何でも差し上げまする……チイスもござりまする……葡萄酒もござりまする……何でもお好みの物を召し上りませ……』

「韃靼語では「神」の事を何と言ふね。」と助祭は旗亭へ這入りながら尋ねた。

「旦那衆の神樣もわしらの神樣も――神樣に變りはござりませぬ。」と、ケルバライは助祭の問がよく分らないで言ふ。「神樣は世界中にたつたお一人でござりまする。違ふのは唯人間計りでござりまする。人間には露西亞人もござりまする、土耳古人もござりまする、英吉利人もござりまする、まだ色々の人種がござりまする――だが神樣はお一人でござりまする。」

「そりや本當だ。だが、果して總ての國民が一人の神を信じてゐるものなら、なぜ君達回々教徒は吾吾基督教徒を俱不戴天の敵かなんぞのやうに思ふんだ。」

「何をお怒りなさいまする。」と、ケルバライは、兩手で腹を摑みながら言ふ。「あなた樣は耶蘇の坊樣で入らつしやりまする、わしは回々教の信徒でござりまする。そのあなた樣が「何か喰べたい」と仰しやれば、わしは何でも差し上げるのでござりまする。……どれがお前の神樣で、どれが俺の神樣だなぞと御議論をなさるは金持衆ばかりでござりまする。わしら貧乏人にとりましては、みんな同じでござりまする。さ、どうぞ、召し上つて下さりませ。」

この哲學上の議論が行はれてゐる間に、ラアエウスキイは家路を急いだ。彼は、その朝馬車で決鬪をしに來た時感じた恐怖を、今又思ひ出した――その時、道だの、岩だの、山だのは、濡れてゐた、暗かつた。測り知れぬ未來は恐ろしい底無し谷の如く、彼の前にぼんやり見えてゐた。然るに今は、

草の葉や、岩の上の雨の雫が、ダイアモンドのやうに日光に輝いてゐる、自然が嬉しさうに微笑してゐる、恐ろしい未來はもう後へ去つて了つた。

ラアエウスキイは、時々シエシユロウスキイの、悲しさうな、涙に汚れた顏を見た、それから前の馬車を見た。前の二臺の馬車には、フオン・コオレンとその介添人と醫者とが乘つてゐた。ラアエウスキイには、總て彼等が、多くの人を苦しめた或許し難い惡人の埋葬を終つて、寺から歸つて行く人達のやうに見えた。

『總てが終つた。』と、彼は自分の過去に就いて考へた、靜かに首を指で叩きながら。襟の側の首の右側にちよいとした膨れが出來てゐた。それが、誰かに首へ熱い燒鏝でも押つ付けられた跡のやうに痛んだ。銃丸が皮膚をかすつたのであつた……

家へ歸ると、その日は長かつた、奇妙だつた、樂しかつた、そして夢のやうにぼんやりしてゐた。監獄から出て來た人か、病院から出て來た人のやうに、自分の長く見馴れてゐた物を珍らしさうに見た、そして、椅子だの、窓だの、卓だの、日光だの、海だのが、彼が長の年月の間に一度も經驗した事のないやうな、明るい、子供らしい歡喜を呼び起す種になつたのを驚いた。

やつれた、青い顏をしたナヂエダ・フエドロウナは、男の優しい聲だの、奇妙な態度だのを、解する事が出來なかつた。女は急いで總ての事を男に話した……

併し、男は聞かないやうな振りをして、聞いてゐた、彼は唯女の顔や髪の毛を撫でた、女の目の内を覗いた、そして、優しい聲でかう言つた――

「御前は俺の妻だ。御前より外に俺に妻は無い。」

それから二人は互に身を擦り寄せて、長い圍壁の側に列んで腰掛けてゐた。二人は大抵默つてゐた、そして唯未來の幸福を夢見てゐた、二人は折々出し拔けに、短い言葉を交すのみであつた。二人には、この晩程長く、この晩程仲好く話をした事はまだ一度も無かつたやうに思はれた。

二十

それから三月經つた。

愈々フオン・コオレンの出發と定めた日が來た。その日は朝早くから、重い冷たい雨が降つた。北東の風が吹いた。海が荒れた。この天氣では迚も汽船は碇泊所へ這入れまいと思はれた。時間表によれば、汽船は朝の十時に着く筈だつた、併しフオン・コオレンは、お晝と午後と、二度も堤防まで出かけて見たが、いつも灰色の浪と雨との外には何んにも見えなかつた。

夕方近く、雨は止んだ、そして、風も凪いだ。フオン・コオレンは、けふはもう立つまいと決心して、サモイレンコオと象棋を指し始めた。たそがれ時になると、從卒が這入つて來た。明かりが遠く

の海に見えると言ふ、狼烟も空に見えたと言ふ。
　フオン・コオレンは俄かに慌て出した。サモイレンコオに接吻する、助祭に接吻する、在らゆる部屋を駈け廻る、料理番や從卒に別れを告げる、それから袋を肩に擔いで往來へ飛び出したが、まだ何か忘れ物があるやうな氣がした。
　往來へ出ると、彼はサモイレンコオと列んで歩いた。二人の後から助祭は箱を一つ持つて、從卒はトランクを二つ持つて附いて來た。
　遠くの海にぼんやりした明かりを見る事が出來たのは、サモイレンコオと從卒とだけだつた。あとの二人は頻に暗闇を見込んだが、なんにも目に這入らなかつた。汽船は海岸から餘程離れた所に碇を卸してゐた。
『早く、早く。』と、フオン・コオレンはみんなを急き立てる。『僕を載せずに出て了ふと大變だ。』
　決闘が濟んで直ぐラアエウスキイが引き移つた三つ窓の小さな家の前を通りかかると、フオン・コオレンは覺えず中を覗き込んだ。ラアエウスキイは、窓の方へ背中を向けて坐つて、卓に押つ被さるやうにしながら、何か頻に書き物をしてゐる。
『驚いた。』と、動物學者は低い聲で言ふ。
『うむ、驚いたらう。』と、サモイレンコオは吐息をつく。『朝から晩まであやつて坐つてゐるんだ。坐

つた僕で爲事をしてるんだ。借金をみんな片附けようとしてるのさ。この頃は乞食よりひどい生活をしてるんだ。」

半分聞言葉は絶えた。動物學者と、醫者と助祭とは、ラアエウスキイの後姿を見ながら窓の側に暫く佇んだ。

「とうとう出發しなかつたんだ、可哀さうに。」と、サモイレンコオは言ふ。「あの男がどんなに苦しんだか君は覺えてゐるか。」

「ゐるとも。」と、フォン・コオレンは答へる。「先づ結婚さ、それから麵包の爲の日々の勞働さ、あの男の顏にも今さつきにも現はれて來た新らしい表情さ。僕は總てこれをどう解釋して好いか、それは知らん。併し、兎に角變つた。」

動物學者はサモイレンコオの袖を捕まへて、情に動かされた聲で言葉を續けた——

「どうか、あの男にも、あの男の妻君にも、僕が二人に對して深い尊敬を拂つてゐる事を傳へて呉れ給へ。僕は出發の際……總ての幸福を二人の爲に祈つて行つた……と、どうか二人に傳へて呉れ給へ。出來る事なら僕を惡く思つて呉れるなと、どうかあの男に頼んで呉れ給へ。あの男はよく僕を知つてゐる、若し僕にあの男の今度の變化を先見するの明があつたなら、僕はあの男の最も親しい友達であつたに相違ないといふ事も、あの男はよく知つてゐる。」

『いつそ寄つて、告別をして行つたら好いだらう。』

『いや、それはよくない……』

『なぜいかんのだ。もういつ又會へるか分からんぜ。』

動物學者は暫く思ひに沈んで、佇んでゐたが、やがて目でも覺めたやうに——

『そりやあ本當だ。』

サモイレンコオは靜かに窓を叩いた。

ラアエウスキイは驚いて飛び上ると、あたりを見廻した。

『ワアニヤ。ニコライ・ワシリエヰッチ君が君に告別をしたいさうだ。』と、サモイレンコオは言ふ。『これから出發する所なんだ。』

ラアエウスキイは卓を離れて、戸を明けに玄關まで出て來た。サモイレンコオと、フォン・コオレンと、助祭とは中へ這入つた。

『ほんの一寸の間だよ。』と、動物學者は玄關でガロッシュを取りながら言つた。彼はもう自分が感情に負けて、呼ばれもしない人の家へ這入つて來たのを後悔してゐるのである。(丸で押し込んだ。)と、彼は思ふ。(馬鹿らしい。)

『邪魔をして濟まん。』と、みんなが部屋へ這入ると、彼は大きな聲で言ふ。『けれども、もう直ぐ行く

んだ。一寸君に告別がしたくなつたんで寄つたんだ。又何處で會へるか分からんからねえ。』

『それは嬉しい……僕は謹しんで君の爲に祈る……』と、ラアエウスキイは言つて、不器用な手つきで帽子を容に納めた。

それから部屋の眞ん中に立つて、手を揉み出した……

『こんな厭な人達は往來に待たしとくんだつた。』と、フォン・コオレンは思つたが、併ししつかりした聲でかう言つた——

『決して僕を惡く思はないで呉れ給へ、イワン。アンドレヰッチ君。そりや過去を忘れる事は不可能だらう——過去は餘りに悲慘だつたからね——併し、僕はここへ謝まりに來たのぢやない、僕に罪は無いなどと言ひに來たのぢやない。僕は自分の思ふ通りを率直に遣つて來たんだ、あの時以後と雖、僕の信ずる所に決して變りは無いんだ……そりや僕が君を誤解してゐたのは事實だ。併し、人間といふものは平坦な道の上でも得て躓くものだ——それが人間の運命なんだ——よし全體に於いては誤まつてゐなくとも、箇々の問題に於いては誤まる事があるものだからね。誰も絶對の眞理を知つてる者は無いさ。』

『さうだ、誰も眞理を知つてる者は無い……』と、ラアエウスキイは言つた。

『ぢやあ、左様なら……隨分御機嫌好う。』

フォン・コオレンはラアエウスキイに手を出した。ラアエウスキイはそれを振つて、腰を曲げてお辭儀をした。

『どうか悪く思はないで呉れ給へ。』と、フォン・コオレンは言ふ。『どうか妻君にも宜しく言つて呉れ給へ、直接お目にかかつて御挨拶をする事が出來ないで、非常に殘念がつてゐたと傳へて呉れ給へ。』

『妻は丁度内にをるよ。』

ラアエウスキイは、戸口の所まで歩いて行つて――

『ナヂエダ。ニコライ・ワシリエヰツチ君がお前にお別れをしに來られたぞ。』

ナヂエダ・フエドロウナが出て來た。彼女は敷居の所に立ち留つて、恐る恐る客の顔を見た。彼女の顔は罪に責められてゐるやうに見えた、おびえてゐるやうに見えた。彼女はその手を叱られた學校の子供のやうにしてゐた。

『ナヂエダ・フエドロウナさん、僕はこれから出發します。』と、フォン・コオレンは言ふ。『それであなたにもお別れに上つた譯です。』

彼女はおどおどしながらフォン・コオレンに手を呉れた、と、ラアエウスキイは又腰を屈めてお辭儀をした。

『二人とも實に哀れな態だ。』と、フォン・コオレンは思ふ。『二人は少なからぬ物を費して、斯かる生

話を買つたんだ。』

それから、聲を大きくして――

『僕はモスクワへもペテルブルクへも行きますが、何か送つて欲しい物はありませんか。』

びつくりして、ナヂエダは夫の目を見交した。

『別になんにもございませんやうですが……』

『さう、なにも無い……』と、ラアエウスキイは手を揉みながら言ふ。『僕の友人總てに宜しく言つて呉れ給へ。』

フオン・コオレンは、もうこの上何を言つたら好いのか分らなかつた。その樓内へ這入る前には、何か懇切な、温かい、勵みをつけるやうな事を言つて遣らうと思つてゐたのだ。彼はもうなんにも言はずにラアエウスキイの手を振つた。それからナヂエダの手を振つた。そして何か壓迫されるやうな心持でそこを出た。

『何といふ人達だ』と、助祭は後に附いて歩きながら、小さな聲で言ふ。『ああ、何といふ人達だ。神の正しき御手はこの葡萄園にもやはり種を蒔かれたのだ。有難い、有難い。一人は千人に勝つた、他の一人は十人の十倍にも勝つた。ニコライ・ワシリエヰッチ君。』と、彼は熱して言ふ。『君は今日人間の敵の内の最も大なる者に勝つたんだ――プライドに勝つたんだ。それを君は知つてるか。』

『止め給へ、助祭君。僕等は果して勝利者だらうか。勝利者なら鷲のやうに見えなければならんね。然るに、あの男はあんな哀れな態をしてをる、あんなにおどおどしてをる、丸で支那の人形かなんぞのやうに、腰を低くしてお辭儀ばかりしてゐた。それに僕は……僕は厭に悲しい。』

足音が後に聞こえた。ラアウエスキイが急いで見送りに遣つて來たのだ。

港には從卒がトランクを二つ持つて立つてゐた、その少し向うに船頭が四人ゐた。

『うう、ひどい風だ。ぶるるるツ。』と、サモイレンコオは言ふ。『この分ぢや海は餘程荒れてるぜ……うう。うう。今出かけるのはよさないか、コオリヤ。』

『僕は船には醉はんよ。』

『それを言ふのぢやない……奴等は途中で君を引つ繰ら返さんとも限らんぜ。さうだ。事務官の船に乘つてくが好い。』

『事務官の船は何處にあるんか。』と、彼は船頭達の方へ向つて叫つた。

『もう出かけて了ひました、閣下。』

『それぢやあ稅關のは。』

『やつぱり出て了ひました。』

『ぢやなぜ早く報告せんのか。』と、サモイレンコオは怒つて言ふ。『馬鹿な奴等だ。』

「同じ事た、まあ終り給ふな。」と、フオン・コオレンは言ふ。「では、左樣なら。御機嫌好う。」

サモイレンコオはフオン・コオレンを抱いた、そして彼の上に三度十字を切つた。

「コオリヤ。忘れちやいかんよ……手紙を……來年の春は又待つてるぞ。」

「左樣なら、助祭君。」と、フオン・コオレンは助祭の手を振りながら言ふ。「君の樂しい同宿と、お蔭で色々有益な話をする事が出來たのを有難く感謝する。探檢の事は尙はよく考へて置き給へ。」

「ああ好いとも。僕は世界の果までも行くよ。」と、助祭は笑ひながら答へる。「僕は一度だつてそれに反對した事があるかい。」

フオン・コオレンはラアエウスキイが暗闇にゐるのを認めて、默つても一度手を呉れた。

船頭は既に乘り込んで、ともすれば杭にぶつかるボオトを押さへてゐた。

フオン・コオレンは梯子を降りて、船に乘り込んだ、そして、舵の方に坐つた。

「手紙を呉れ給へよ。」と、サモイレンコオは叫ぶ。「丈夫でゐて呉れ給へよ。」

「誰も眞實の眞理を知つてゐる者は無い。」と、上着の襟を立てて、兩手を袖に突つ込みながら、ラアエウスキイは考へる。

ボオトは汽船の廻りを二三遍ぐるぐるツと廻つて、それから廣い海へ乘り出した。直ぐと浪に隱れた、かと思ふと、直ぐ又その深い谷から高い山へすうッと上がつて來て、船の中の

人から櫂までがよく見える。

『手紙を呉れ給へよ。』と、サモイレンコォは又叫る『何といふ天氣に出かけたものだらうなあ。』

『さうだ、誰も絶對の眞理を知つてゐる者は無い……』と、悲しさうに、荒れてゐる暗い海を見ながら、ラアエウスキイは考へる。

『ボオトは後へ押される。』と、彼は思ふ『二歩前へ進むかと思ふと、一歩後へ下る。併し船頭は强い、彼等は撓まずに漕ぐ、そして大浪を恐れない。ボオトは段々に進んで行く。もう見えなくなつた。もう三十分もすれば船頭に汽船の明かりが見えて來るだらう。一時間もすればもう汽船の横に著いてゐるだらう。人生も丁度同じ事だ……人が眞理を求めて二歩前へ進むかと思ふと、直ぐ又一歩後へ下かる。生活の苦痛や失敗や疲勞は人を後へ押し返す、けれども、眞理に對する渇望と、意志の頑固な力とは、又前へ前へと人を押す……何處まで行くのか、それは分からない。恐らく、斯くして終に絶對の眞理に到達するのだらう……』

『左様なら、あ―あ―あ。』と、サモイレンコォは叫つた。

『もう見えはせん、聞こえもせん。』と、助祭は言ふ『航海の無事を祈るばかりだ。』

……雨が又ぼつぼつ降つて來た……

夜の宿

人物

ミハイル・イワノヰッチ・コストリヨフ　五十四歳。木賃宿の主人。
ワシリイサ　その妻。二十六歳。
ナタアシヤ　妻の妹。二十歳。
メドヱジエフ　右両人の伯父。巡査。五十歳。
ワシカ・ペペル　二十八歳。
アンドレエ・ミトリッチ・クレシチ　錠前屋。四十歳。
アンナ　その妻。三十歳。
ナスチヤ　娘。二十四歳。
クワシユニヤ　饅頭賣の女。四十歳位。
ブブノフ　帽子屋。四十五歳。

サチン　四十歳位。
役者　四十歳。
男爵　三十二歳。
ルカ　巡禮。六十歳。
アリヨシカ　靴屋。二十歳。
グリチイ・ゾォブ　四十歳位。人足。
韃靼人　四十歳位。人足。
浮浪人數名　名なし。無言。

第一幕

洞穴の如き地下室。厚き丸天井、壁土剝げ去り、煤にて黒くなりゐる。日の光は上手の角窓を通じて、上より下へ、見物席に向ひて、舞臺の上に落つ。上手の隅はペペルの部屋となりをり、薄き羽目にて仕切らる。この部屋の戸口の側にブブノフの寢床あり。下手の隅には大なる露西亞風の暖爐。下手の厚き壁には戸口ありて、クワシニヤ、男爵、ナスチヤの三人が住みなる臺所へ通ず。暖爐と壁の戸口との間に幅廣の寢臺あり、汚なき木綿の垂幕にて蔽ふ。壁といふ壁の側には、必ず寢床を片寄せてあり。下手の壁の方には、萬力と小

こゝに鐵砧を取りつけたる切株あり、その前に又小さき切株ありて、クレシチこれに坐る。かれは古き錠を二つばかり鍵に合ふやうに細工しゐる。足元には色々の鍵を通したる針金の大なる輪二つ、歪みたるブリキのサモワル、金槌、鑢。部屋の中央には大なる机、側に床几二脚、腰掛一脚、總て白木なり、總て汚なし。饅頭賣の女クワシニヤ、机に向ひ、サモワルの世話をなしつつ、女房役を勤めゐる。少し離れて、男爵、黒パンを噛りゐる。ナスチヤは腰掛に腰をかけ、机に肘を突きて、綴ぢ目の切れたる本を讀みゐる。寢臺の上、帷幕のうしろに、アンナ寢ねたり。絶えず咳するが聞こゆ。ブブノフはおのが寢床に腰をかけ、膝の間に帽子の木型を支へて、引きほどきたる古きズボンの布をこれに當て、首かしげつつ、寸法に合せて、帽子の形にこれを切る。側に壊れたる帽子箱あり。これにて帽子の庇をつくる。なほ、油布、布屑など散ばりゐる。サチンは今起きたるばかりにて、寢床の上に横たはり、唸りゐる。暖爐の上には、役者横たはりゐて折々咳の身、闇に蔽はれゐる爲めに見物には見えず。早春の或朝。

男爵。それからどうしたい。

饅頭賣。それでおしまひだよ。もう懲り懲りさ……蝦蟹を百疋持つて來たつて、誰が二度とお嫁なんかに行くものか。（サチン唸る）

帽子屋。（サチンに）何を唸つてやがんだ。

饅頭賣。この氣儘な暮らしを、たつた男一疋の爲に捨てて詰まるものかね。も一度どつかの野郎の腰

中署にならうなんて……そんな事は夢にも思はないね。あたしやこれでも今、人に後指をさされるやうな暮らしをしてゐるんぢやないんだからね。亞米利加から宮樣が迎ひに來たつて……誰が行くものか。

錠前屋。嘘をつけ。

饅頭賣。なんだと。

錠前屋。嘘をつけと言ふのだ。てめえはアブラムカと一緒になるつもりぢやねえか。

男爵。（ナスチヤの本を取り上げ、表題を讀む）『惡縁』か。（笑ふ）

ナスチヤ。（本の方へ手を延ばして）おくれよ……返しておくれつたら。よう……冗談しちやいけないよ。

男爵は女をぢつと見ながら、本を高く振り廻す。

饅頭賣。（錠前屋に）嘘つきとはお前の事ぢやないか……赤山羊め。よくもそんな厚かましい口が利けたもんだ。

男爵。（本にて輕くナスチヤの頭を叩く）おめでたい女だ。

ナスチヤ。（本をひつたくる）お寄越しつたら。

錠前屋。（饅頭賣に）おめえは立派な令夫人樣だよ……だけど、やつぱりアブラムカと一緒になるんぢ

やねえか……それはかりに氣を揉んでやがる。

饅頭賣。當り前さ。それがどうしたい……お前さんは何だ……そこに寢てゐるおかみさんを、半殺しにするまで打ちやがつたぢやないか。

錠前屋。默れ。鬼婆。てめえの知つた事ぢやあねえ。

饅頭賣。はは。ほんとの事を聞きや耳が痛いだらう。

男爵。さあ始まつた。ナスチヤ。おい。

ナスチヤ。(顏をあげずに) なんだよ……煩さいねえ。

錠前屋の妻。(寢床より首を出だし) もう夜が明けた。どうかお願ひだから……そんなに叫らないでおくれよ……喧嘩をしないでねえ。

錠前屋。またぐつぐつ言ひ出したな。

錠前屋の妻。毎日毎日、喧嘩ばかりしてゐるんだねえ……あたしはもう死ぬんだから、せめてその間だけでも靜にしてゐておくれよ。

帽子屋。騷いだつて往生の邪魔にはならあねえ。

饅頭賣。(錠前屋の妻の寢臺に歩み寄る) ねえ、をばさん。よくもあんな悪黨と一緒になつてゐて、辛抱が續いたもんだねえ。

錠前屋の妻。なんにも言はないでおくれよ……なんにも言はないで。

饅頭賣。好いよ。好いよ。可哀さうに。お前さんは貞女だねえ……胸の方はまだちつとも好くならないかい。

男爵。（饅頭賣に）クワシニヤ、もう市場へ行かうぜ。

饅頭賣。すぐ行くよ。（錠前屋の妻に）肉饅頭の暖いのでも食べて見ないかい。

錠前屋の妻。いいえ、澤山……有難いけれど、もう食べたところでしやうがないからねえ。

饅頭賣。まあお食べよ。暖いものを食べると、體に好いんだから……ほんとにさ。ぢやあ、お皿の中へ入れて別にしとくからね……食べたくなつたらお食べよ。（男爵に）御前、さあお供致しませう。

（錠前屋に）ふん。惡魔め。（臺所へ這入る）

錠前屋の妻。（咳す）はあつ、はあつ。

男爵。（ちよいとナスチヤの首を突く）そんな物はうつちやつておしまひよ……馬鹿。

ナスチヤ。（呟く）早く出しお出でつたら……あたしがお前さんの邪魔をしてゐんぢやないぢやないか。

男爵、舌打をして、饅頭賣の後を追ふ。

サチン。（寢床より起き上がり）きのふおれを擲つたなあ誰だつたらう。

帽子屋。誰だつて構はねえぢやねえか。

サチン。さうさ、ただ、なんだつて捕られたんだらう。

帽子屋。骨牌をやつたらう。

サチン。ああ、やつたよ。

帽子屋。だからさういふ事になるんだ。

サチン。ひどい奴等だ。

役者。（寢棚の上より首を延ばし）今に叩き殺されるかも知れねえぜ。

サチン。馬鹿野郎。

役者。馬鹿野郎だと。なぜよ。

サチン。分からねえな。一度叩き殺される奴があるか。

役者。（暫く黙して）分からねえな……なぜだい。

饂飩屋。まあ、降りて來て掃除でも掃け。怠け過ぎるぜ。

役者。てめえの知つた事ぢやねえ。

饂飩屋。どうだか、おかみさんが來れば分かることつた。

役者。喰くらへ。おかみさんが何だい。けふは男爵が掃く日ぢやねえか。あいつの番なんだ……男爵。

男爵。（臺所より入り來る）そんな暇はねえよ……おれはクワシニヤと一緒に市場へ行かなくつちやなら

ねえんだ。

役者。それをおれが知つた事かい……べらぼうな……だが、部屋はおめえが掃かなくつちやいけねえぜ。おめえの番ぢやねえか……おれは人の代りに働くのは厭だよ。

男爵。勝手にしやがれ。ちやあんとナスチェニカが掃いて呉れらあ……な、おい…… 一西線、先生。さあ、立つた、立つた。（ナスチャの本を奪ふ）

ナスチヤ。（立ち上がる）どうしようつて言ふんだよ。お寄越しつたら。図々しい奴だ。紳士が聞いて呆れるよ。

男爵。（本を返して）な。おれの代りに掃き出してくれ、好いだらう。

ナスチヤ。（臺所の方へ退場）厭だよ……馬鹿にしないねえ。

饅頭賣。（臺所の戸口より、男爵に）さあ行かう。お前さんがゐなくなつたつて、掃除は誰かがするよ。

（男爵退場）おい、役者さん。人に物を頼まれたら素直にして遣るもんだよ。肋骨が折れる程の為事でもないぢやないか。

役者。いつだつておれだ……へん……どうもおれには分からねえ。

男爵。（天秤にて籠を二つ臺所より擔ぎ出す。籠の中には腹のふくれたる壺あり。襤褸布にて蔽はる）けふは馬鹿に重いぞ。

サチン。男爵などに生れて來た天罰よ。

韃靼者。(役者に) 掃除をお忘れでないよ。(男爵を先きに立たせて玄關の方へ出で行く)

役者。(寢臺より飛び降りる) おれは左味を喫つちやいけねえんだ……毒なんだとよ。(自分を憐れむやうに) おれのオルガアノン……オルガニイズムはアルコホル中毒なんだとよ。(棄ぎ切つて寢床に坐る)

サチン。オルガアノン……オルガニイズム。

錠前屋の妻。(錠前屋に) お前さん。

錠前屋。なんだい。

錠前屋の妻。あの、クワシュニヤが……あたしに肉饅頭を置いてつてくれた筈だから……行つて食べといでよ。

錠前屋。(寢臺に歩み寄る) おめえ食はねえのか。

錠前屋の妻。食べたかない……食べたつてしやうがないもの。お前さんは稼ぎ人だから……食べなくちやいけないよ。

錠前屋。心配してるな。心配しちやいけねえ……なあに、おきに又好くなるんだから。

錠前屋の妻。食べといでよ。ああ、胸が押しつけられるやうだ……もうすぐこれもお終ひになるんだね。

錠前屋。（女より遠ざかる）なあに……大丈夫……又好くなるよ……もうその験が見えてるんだ。（臺所へ退場）

役者。（急に夢からでも醒めたやうに、聲高く）きのふ病院で醫者がかう言つたんだ。お前のオルガニイズムにはもうすつかりアルコホルの毒が廻つてゐる。

サチン。（笑ひながら）オルガアノンオルガアノンだ。

役者。（强く）オルガアノンぢやねえ。オルガニイズムだ……オルーガーニイーズムーだよ。

サチン。穢多め。

役者。（拒むやうに手を振りて）馬鹿。おりや眞面目で言つてるんだ。好いか……おれのオルガニイズムには毒が廻つてゐる……だから、部屋を掃いて……埃を吸ふのは毒だと言ふんだ。

サチン。マクロビオチイク（長壽法）か……ははは。

帽子屋。今唸つたのは何だ。

サチン。詞よ……まだも一つあるぞ。トランスツエンデンタアル（超自然的）よ。

帽子屋。それは何のこつた。

サチン。知らねえ……忘れたあ。

帽子屋。ぢやあ、なぜそんな事を言ふんだ。

サチン。さうよなあ……おれ達の毎日使つてゐる詞に飽きが來たんだ。どれもこれも千遍宛ぐらゐは聞いてゐるからな。

役者。「詞ぢや、詞ぢや、詞ぢや。」といふ臺詞が「ハムレット」の中にあるね。ハムレットか。實に傑作だなあ……おれはあの芝居で墓掘りを遣つた。

錠前屋。（臺所より出で來る）ところが、けふに幕を持つて芝居をするわけだな。

役者。詰まらねえ事を言ふねえ。（拳にておのが胸を打つ）オフイイリアどの。麻呂が罪も諸共に、祈りくりやれ。

舞臺の背景、遠くの方にて、陰鬱なる物音、叫び聲、巡査の呼笛（よびこ）など聞こゆ。錠前屋、坐りて仕事（しごと）をはじむ。鐘の音聞こゆ。

サチン。おれは、分かりにくい、珍しい詞が大好きで……若い時分にやあ……電信の方を遣つてゐたが……隨分本は讀んだものだぜ。

帽子屋。お前さんのやうな人間でも、電信の技手だつたことがあるのかい。

サチン。さうともよ。（笑ふ）結構な本があつたぜ……面白い詞がどつさりあつた……おれはこれでも教育のある人間だつたんだ。分かつたか。

帽子屋。それは聞いてるよ……もう百遍も聞いてるよ。もと何だつて、それが世間が構ふものか。さ

う言や、おれだつて元は毛皮屋さんだつた……これでも自分の工場を持つてゐたもんだ……おれの腕は、まるで眞つ黄色だつた――皮を染める繪の具でよ――肘んとこまでまるで眞つ黄色なんだ。まあ、この世でそれを洗ひ落すやうなことがあらうとは夢にも思つてゐなかつたね……黄いろい手のまんまで墓へはひることだとばかり思つてゐたんだ……それが今になつて見ると、これだ……汚ねえばかりだ……ほんとによ。

サチン。それがどうした。

帽子屋。それだけよ。

サチン。一體、何を話すつもりだつたんだ。

帽子屋。ただ……言つて見りやあ、そんなものだつてんだ……いくら外からこてこて塗つたところで……ぢきにみんな剝げてしまふものさ……ぢきにみんな剝げてしまはあ……ほんとによ。

サチン。ふむ……いやに骨つぷしが痛むな。

役者。（腰を掛け、膝を抱く）教育なんて無意味なものさ。大切なのは天才だ。おれの知つてゐる役者にかういふのがあつた……やつと自分の書拔が讀めるくらゐな文盲だつたが、さて役をさせて見るといつでも小屋がみしみしいふ騒ぎだ……見物の喝采でよ。

サチン。おい。ブブノフ。おれに五錢くれ。

帽子屋。二錢きやねえよ。

役者。主人公を遣る役者に天才がなくちや駄目だ。ほんとによ。天才……といふのは、自分で自分の力を信じることだ。

サチン。五錢よこせ。そしたら、おめえが天才で、豪傑で、クロコダイルで、おまけに區長様だと思つてやらあ……おい、クレシチ。五錢貸れろよ。

錠前屋。糞くらへ。一度出したら切りがねえや。

サチン。吝嗇にするない。てめえが文無しなことは先刻御承知だ。

錠前屋の妻。お前さん……息が詰まるよ……息が出來ないよ。

錠前屋。どうすりや好いんだ。

帽子屋。表の戸を明けてやんねえ。

錠前屋。うまく言ふぜ。おめえは寢床に坐つてゐるが、おりやあ地べたに坐つてゐるんだ……まあ、お床取換しよ代へて貰つてから、戸を明けて遣らうよ……さもなくてせえ慄へてゐるんだ。

帽子屋。(平靜に) おれはどうだつて好いんだ……おめえの嬶が頼むんぢやねえか。

錠前屋。(陰鬱に) 默つてりや切りがねえや。

サチン。ああ、頭ががんがんしやがる……ええ、人間て奴あ、なぜかうしよつちう頭を擲り合ふんだらう。

帽子屋。頭ばかりぢやねえ。ところ嫌はず擲るんだからたまらねえ。（立ち上がる）どれ、腐鯡でも探して来ようか……今日はまあ亭主の野郎ちつとも顔を見せやがらねえ……くたばりでもしやがつたかな。（退場。錠前屋の妻咳す。サチンは首の下に手を入れて、横になり、ぢつとしてゐる）

役者。（憂鬱にあたりを見廻し、錠前屋の妻の側に歩み寄る）どうだ。やつぱり悪いか。

錠前屋の妻。どうもこの部屋は息苦しくつて。

役者。ぢやあ玄関へ連れてつて遣らうぢやねえか。さあ起きねえ。（寝台の上に起き上がる病人を助けて。古い毛皮をその肩に掛けてやり、女の玄関の方へよろけて行くを支へてやる）さあ、さあ、しつかりしなくちやいけねえ。おいらだつて病人なんだ。アルコホル中毒なんだ。（木賃宿の亭主コスチリョフ入り来る）

亭主。（戸口にて）御散歩か。こりやあお揃ひだ……牝山羊牡山羊といふところだな。

役者。どけ、どけ……御病人のお通りだ。

亭主。さあさあお構ひなく。（讃美歌の節を口ずさみながら、亭主は不安らしく地下室を見廻し、ペエペルの部屋の物音を聴かうとするやうに、首を上手へかしげる。錠前屋はむつとして、鍵をがちやりと言はせ、やけに鑢をそれに掛けながら、陰険なる目つきにて、亭主をぢつと見る）さて、御精が出るかな。

錠前屋。なんだと。

亭主。御精が出ますかと言ふんだ……ええと……おれは今何を言ふつもりだつたかなあ。（小声にて、性急に）嬶は来なかつたか。

錠前屋。見なかつたねえ。

亭主。（そつとその寝床に近寄る）月たつた二両がところで、随分おめえはのさばつてゐるなあ。寝台はおかみさんが使ひ通しだし、おめえはしよつちゆうそこに坐つてゐる……なあ。五両がところは大丈夫あるぜ。ほんのこつた。二分は値上げをしなくちやならねえ。

錠前屋。いつその事おれの首に縄をつけて絞め殺してしまふ方が好いぢやねえか。もう棺桶へ片足突込んでやがるくせに、まだ金を取る気でゐやがる。

亭主。おめえを絞め殺してどうなるもんか、誰の徳にもなりやしねえ。まあ、精々生きてゐて、たんと好いことをするさ……おれは二分値上げをして、それでお燈明の油を買ふんだ……おれの供へた油が、聖像の前で燃えりやあ……おれの罪障も消滅するといふもんだ……おめえはまあ、自分の罪障などといふことは思つても見ねえ方だらうが……ええ、おめえも随分好くねえ男だ。かみさんが病気になつたのも、考へて見りやあ、おめえのお蔭だ……おめえを好く人間は一人もねえ、おめえを敬ふ人間は一人もねえ……第一その仕事が喧しくていけねえ、近所迷惑だ。

錠前屋。（どなる）てめえ、おれを……追ひ出しに來やがつたのか。

サチン、聲高に唸る。

亭主。（身を竦めて）この男は、まあ……どうしたんだ。

役者。（入り來る）やつと玄關まで連れて行つてやつた。可哀さうな女よ……寒いから上手にくるんで來て遣つたよ。

亭主。おめえは親切者だ、感心な男だ……今にきつと報があるぜ。

役者。いつ有るんだ。

亭主。あの世でよ……あの世へ行くと、おれ達のした事に、一々きつと報があるとよ。

役者。どうでえ。いつそのこと、ここでお前さんがおいらの善心にお報い下さるつてことにしちやあ。

亭主。どうすりや好いんだ。

役者。借金を半分負けてくんねえ。

亭主。へ、へ。冗談もんだぜ。いつでも人を馬鹿にしやがる……一體親切なんてものが、金で買へると思つてるのかい。親切といふものは、この世のどんな寶よりも尊いものだ。ところでおめえの借金は……やつぱり借金だ。そりやそれで拂はなけりやならねえ……おれのやうな年寄には、唯で親切を盡すもんだよ。

役者。覺えてゐろ。（臺所へ退場）

　錠前屋も立ち上がりて、玄關の方へ行く。

亭主。（サチンに）誰だな、今出て行つたのは。錠屋さんかい。あいつ餘つ程おれが嫌ひだと見える。へ、へ。

サチン。おめえの好きな奴が何處にあるものか……惡魔でもなけりやあ。

亭主。（冷笑して）さういつたもんでもねえ。おれはこれでもおめえ達が大好きなんだ……宿もねえ、賴るところもねえ、哀れな人間だと思つてるんだ……（急に、口早に）ワシカは内か。

サチン。見て來ねえ。

亭主。（ワシカ・ペペルの部屋の前に行き、戸を叩く）ワシカ。

　役者、臺所の戸口に現る、何かむしやむしや食つてゐる。

ペペル。（内より）誰だ。

亭主。おれだよ。おれだ。ワシカ。

ペペル。（内より）何か用か。

亭主。（退いて）まあ開けてくれ。

サチン。（わざと亭主の方を見ずに）いつもなら、とつくに開けるところだが……一件が中にゐるんでな。

役者、咳拂ひす。

亭主。（不安らしく、小聲にて）へえ。誰か中にゐるつて。なんとか、そんなことを言つたね。

サチン。ふむ。おれに訊くのか。

亭主。なんとか言つたね。

サチン。なんでもねえよ……唯ちよいと……獨言（ひとりごと）を言つたばかりさ。

亭主。氣を附けろ。うつかり冗談を言ふな……好いか。（ひどく戸を叩く）ワシカ。

ペペル。（戸を開く）なんだ。やかましい。

亭主。（ペペルの部屋を覗き込む）おめえにその……あのなあ。

ペペル。錢でも持つて來たのか。

亭主。少しおめえに話があるんだ。

ペペル。錢を持つて來たかよ。

亭主。錢つて……何の。

ペペル。時計の代七兩よ……分かつたらう。

亭主。どの時計のよ……あ、おめえ、何だな。

ペペル。とぼけるない。きのふ、みんなの見てゐる前で、懷中時計を十兩に賣つてやつたぢやねえか

……三兩だけは確に貰つた。あとの七兩を寄越せと言ふのよ。何も文句はねえ筈だ。何をきよろきよろしてやがるんだ。こんなところへはひり込んで來やがつて、みんなの邪魔をしてやがるくせに……肝心なことを忘れてゐやがる。

亭主。しつ。まあ、さう言ふない。だが、あの懷中時計は。

サチン。盗んだものよ。

亭主。(腰掛に)おれは盗んだものなんか買はねえよ……よくもおめえは。

ペペル。(亭主の肩を捕へ)こやい……ぢやあ、何だつておれを起しやがつたんだ……何の用があるんだ。

亭主。な、なんにもありやしねえんだよ……おれはもう歸るよ……そんなに怒るなら。

ペペル。歸れ、歸つて錢を持つて來やがれ。

亭主。(出て行きながら)亂暴な奴だ。ああ、ああ。

役者。好い喜劇だつた。

サチン。ほんとによ。好い氣味だつた。

ペペル。一體、何しに來やがつたんだらう。

サチン。(笑ひながら)分からねえのか。嬶を搜しに來たのよ……おい、ワシカ……なぜ遣つつけちまはなかつたんだ。

ペペル。あんな野郎のお蔭で、大事な一生を棒に振つて溜まるものか。
サチン。無論巧く遣らなくつちやいけねえ。それから、かみさんと一緒になつて……この木賃宿の亭主になるんだ。
ペペル。冗談言ふない。おめえ達でおれの宿屋をすつかり飲んぢまふんだらう。おまけにおれまで飲んぢまはうと言ふんだらう……一體おれは人が好過ぎるんだ……(寢床に腰をかける)老ぼれめ。折角好い氣持に寢てゐるところを、すつかり起してしまやがつた……丁度今素敵な夢を見てゐたんだ。おれが釣をしてゐると、不意と大きな鱒が懸かつたんだ。鱒だぜ……夢でもなけりや、あんな大きな奴は見られねえ……おれは絲が切れるかと思ふ位ぐいぐい引つ張つた、それから手網でしやくはうとすると……駄目だ。
サチン。そりやあ鱒ぢやねえ。ワシリイサだ。
役者。ここのおかみさんなら、もうとうに網の中へへえつてらあ。
ペペル。(腹を立てて)よしやあがれ……又かみさんだ。
錠前屋。(玄關の戸口より入り來る)べらぼうに寒いや。
役者。なぜアンナを連れて來ないんだ。凍えつちまふぜ。
錠前屋。ナタアシユカが臺所へ入れてくれたよ。

役者。親爺がおつぽり出すだらうぜ。

錠前屋。（爲事につく）ナアタシユカがもう直き連れて來てくれるよ。

サチン。ワシカ、五錢くんねえ。

役者。（サチンに）たつた五錢か。ワアシヤ、廿錢くんねえ。

ペペル。早く出さねえと……今に一兩よこせと來るだらう……そらよ。（役者に金を與へる）

サチン。素晴らしいもんだ。世の中に泥坊ぐらゐ豪い人間はねえ。

錠前屋。泥坊はわけなく金を儲ける……泥坊は働かねえ。

サチン。わけなく金を儲ける奴は澤山あるが、わけなく金を使ふ奴は少ねえて。爲事か……爲事が面白けりやあ、おれだつて働かあ……爲事が樂になりやあ……人生は美だ。爲事が義務だと……人生は苦界だ。（役者に）さあ、サルタナバル。行かうぜ。

役者。行かう、ネブカドネザル……たらふく飲まうぜ。

二人退場。

ペペル。（欠伸をする）おめえのかみさんはどうした。

錠前屋。もうお終えらしいや。

稍長き間。

ペペル。おめえのさうやつて働いてゐるのを見るたびにおれはさう思ふぜ、そんなことをしてゐて何になるんだな。

錠前屋。ぢやあどうしたら好いんだ。

ペペル。なんにもするな。

錠前屋。食へねえ。

ペペル。他の人間を見ろ。少しも苦しまねえで生きてらあ。

錠前屋。他の人間。ここにゐる野郎どものことかい。こそこそだの、のらくらだののことかい……成程立派な人間だ……見るのも穢らはしいや……おりやこれでも職人だ……子供の時から働いてゐるんだ。おめえはおれを、もうこれつきりこの五味溜から匍ひ出せねえ人間だと思つてるのか。なあに。きつと出て見せらあ……おれの肌がずたずたに裂けたつて構はねえ。きつと出て見せらあ……それにしても先づ嬶が死んでくれなけりやいけねえ……おれはまだやつと六月しかここにゐねえんだが……もう六年もゐるやうな氣がすらあ。

ペペル。馬鹿なことを言ふな……てめえどこが豪いんだ……ここにゐる奴等に比べて

錠前屋。どこが豪い。ぢやあ、ここにゐる奴等は名譽心を持つてるかい。良心を持つてるかい。

ペペル。(冷靜に)名譽心や良心が何になる。冬寒い時に長靴の代りになるか……名譽心や良心の入る

のに、威勢のある奴等だの權力のある奴等だのばかりだ。

帽子屋。（入り來る）ふう。寒い、寒い。

ペエペル。やい、ブブノフ。てめえ良心を持つてるか。

帽子屋。なにい。良心。

ペエペル。（聞きて）うむ。

帽子屋。良心が何になるい。おいらあ金持ちやねえ。

ペエペル。おれもさう言ふんだ。良心だの名譽心だのの入るのは金持ばかりだ。さうに違えねえや……それだのに、クレシチの野郎、おれに突つ掛かつて來やがつて、おれ達には良心がねえなんどとぬかしやがるんだ。

帽子屋。おれ達から良心を、一つ借りようとでも言ふのか。

ペエペル。あれだけ持つてりやあ澤山だ。

帽子屋。そりやあ賣らうといふんだらう。誰がそんなものを買ふ奴があるもんか。毀れたボオル箱でも持つて來い。さうしたらおれが買つてやるから……だが、それも現金ぢや無だよ。

ペエペル。（韃靼人に向ひ、教訓するやうな調子にて）おめえは隨分おめでたい人間だ。まあ、サチンか男爵に聞いて見ねえ、良心について何と言ふか。

錠前屋。別に聞いて見たかねえ。

ペペル。あいつ等はおめえより餘つ程物の分かりがいいや……飲んだくれぢやあるけれど。

帽子屋。利口でその上酒が飲めりやあ、人間の値打は二層倍だ。

ペペル。サチンに言はせると、人間て奴は側に良心のある奴が一人ゐれば、それでいいんだ……自分に良心があると不便でいけねえとよ……まあそんなものよ。

ナタアシヤ入り來る。その後より巡禮ルカ、杖をつき、背嚢を背負ひ、帶に小さき鍋と藥罐とをつけて入り來る。

巡禮。旦那方、今日は。

ペペル。(髮を引つ張りながら)よう、ナタアシヤ。

帽子屋。(巡禮に)おれ達も昔は旦那なんて言はれた。だが、去年の春からは。

ナタアシヤ。さあ——御新客よ。

巡禮。(帽子屋に)まあ、そんな事を言ひ給ふな。わしはどんな惡黨でも尊敬するんだ。實に決して善惡はない。みんな黑い、みんな跳ねる……さうぢやないか。さて、ねえさん、どこへ陣取らうかな。

ナタアシヤ。(臺所の戸口を指して)あすこへおいでよ……をぢいさん。

巡禮。有難い、どこでもいい……年寄には暖かいとこが何よりだ。(臺所へ退場)

ペペル。面白いぢいさんを連れて来たな。

ナタアシヤ。ぢいさん、お前さんより餘つ程面白い人さ……(錠前屋に) アンドレイさん、お前さんのおかみさんは、あたし達と一緒に臺所にゐるからね……あとで迎ひにおいでよ。

錠前屋。よし、よし、今に行く。

ナタアシヤ。少し親切にしておやりよ……もう長いことはないんぢやないか。

錠前屋。知つてるよ。

ナタアシヤ。そりや知つてるさ…… だけど、知つてるだけぢやいけないよ。死ぬといふことはどういふことだか、よウくお前さん考へて御覧よ……恐ろしいぢやないか。

ペペル。ちつとも恐ろしいこたあねえ。

ナタアシヤ。そりや強い人は別だわ。

帽子屋。(會釋をする) この塵芥はちつとも役に立たねえ。

ペペル。ほんとにおれは悪くねえんだ。死ねと言ふなら、いつでも死んで見せらあ。嘘だと思ふなら、ナイフを持つて来て、この胸へぐつと突通して見ねえ……聲一つ立てねえで見せるから。それどころかい、笑つて死んで見せらあ……おめえの手のやうな……綺麗な手にかかるんなら。

ナタアシヤ。(出て行きながら) 冗談お言ひでないよ。

帽子屋。（あくびをしながら）ほんとにこの麻絲は駄目だ。

ナタアシヤ。（玄關の戸口より、錠前屋に）おかみさんをお忘れでないよ。

錠前屋。いいよ。（ナタアシヤ退場）

ペペル。いい女だ。

帽子屋。點の打ちどこがねえ。

ペペル。なぜあの女は……ああおれに辛く當るんだらう。おれの言ふことはてんで聞かねえんだからな……だが、あの女もここにゐちやあ、墮落するばかりだ。

帽子屋。おめえが墮落させるんぢやねえか。

ペペル。おれが。なぜよ。おれはあの女を可哀さうだと思つてるんだ。

帽子屋。狼が羊を可哀さうだと思ふやうにか。

ペペル。嘘をつけ。ほんとにおれは可哀さうでならねえんだ……こんな所に置いとくのは確によくねえ……おれはさう思ふ。

錠前屋。あの女と話してゐるところを、かみさんに見られたら大變だぜ。

帽子屋。ほんとによ。あの鬼婆中々油斷をしやがらねえからな。

ペペル。（寢床の上に長々と寢て）うらなひ者め、あつちへ行きやがれ。

錠前屋。今に出るよ……わかるから。

巡禮。（臺所にて唄ふ）

　夜は更けわたりぬ、

　行く手は見えず……

錠前屋。（玄關へ出て行く）もう吠え出しやがつた……しやうのねえ奴だ。

ペペル。ああ、いやだ、いやだ……どうしてかう氣が滅入るんだらう。何一つ不足もなく、かうやつて暮らしてるないに……不意に氷にでも閉ぢられたやうな厭な氣持になるんだ。たまらなく氣が沈んで來るんだ。

帽子屋。氣が沈むつて。お前さんがかい。

ペペル。ああ。

巡禮。（臺所にて唄ふ）

　行く手は見えず。

ペペル。やい、ぢぢい。

巡禮。（戸口より覗く）わしのことか。

ペペル。ああ、おめえだ。歌はよしてくれ。

巡禮。（部屋の中へ入り來る）歌は嫌ひかな。

ペペル。うまけりや好きだ。

巡禮。わしのはうまくないかな。

ペペル。まあその邊だ。

巡禮。おや、おや。これでもわしは中々うまいつもりなんだ。だが、まあ大抵さうしたもんさ。誰でも自分のしたことは、自分ではうまく行つたと思つてゐる。ところが、それが世間の氣に入らない。

ペペル。（笑ふ）そりやさうだ。

帽子屋。おや。笑つてるね。それでも氣が滅入つてゐるのかい。

ペペル。なんだと。おいぼれ鴉め。

巡禮。誰だい、氣が滅入るといふのは。

ペペル。おれよ。

男爵入り來る。

巡禮。ぢや、まあお聞き。あすこの臺所で、娘が一人、本を讀んでは泣いてゐる。涙をほろほろこぼしてるんだ……どうしたんだ、え。と聞いて見ると、だつて可哀さうなんだものと言ふ…… 誰が可哀さうなんだ、と聞くと……ほら、この本に書いてある人達がさと言ふ……こんなことで人間一疋

が罪を隱してゐんだ。これも氣の沈むせゐらしいな。
男爵。あいつは馬鹿だ。
ペペル。男爵、茶をやつて來たのか。
男爵。ああ……それがどうしたい。
ペペル。上等のウオツカを一本やりてえからよ。
男爵。わかつた……それがどうしたい。
ペペル。四つん匍ひになつて、犬のやうに吠えろ。
男爵。馬鹿野郎。てめえはブルジョアか、醉ばらひか。
ペペル。さうれ。もう吠え出した。嬉しいな……おめえは紳士だ……おれ達を人間だと思はなかつた時もあるんだ。
男爵。さうよ。それがどうしたい。
ペペル。それがどうしたと。さうよ、今度はおめえを犬のやうに吠えさせるんだ。さあ、吠えるか、どうだ。
男爵。吠えたらどうだと言ふんだ……馬鹿野郎。何が面白いんだ……おれがおめえより上にゐた時分に、四つん匍ひに匍はしでもしたら、そりやあ面白かつたかも知れねえが、今ぢやあ、おれがおめ

えよりおちぶれてゐるんだ。
帽子屋。さうだ。さうだ。
巡禮。わしもさう思ふ。
帽子屋。昔のことは昔のことよ。もうなんにも殘つてゐるものはねえ……ここへ來ちやあ、殿樣も糞も
あるもんか……みんな飾りつ氣のねえ裸百貫だ。
巡禮。四民平等といふ奴だな……ぢやあ、なんだね、お前さんは男爵だつたことがあるんだね。
男爵。なんだ。ぢぢい、てめえは誰だ。
巡禮。(笑ふ)わしは伯爵を一度見たことがある、それから公爵も見たことがある……男爵を見るのは
今が始めてだ。しかもその落ちぶれた奴をな。
ぺペル。(笑ふ)は、は。てめえのお蔭で恥をかかあ。
男爵。馬鹿言ふない。
巡禮。まあ、まあ。かうして見てゐると、お前さん達の生活は……ふうむ。
帽子屋。朝つぱらから吠えてゐるのよ。
男爵。さうよ、もう好いことはみんな昔して來たんだ。たとへば、おれだつて……朝起きると床の中
で珈琲を飲んだもんだ……クリイムのはひつた珈琲をよ……ほんとだ。

巡禮。その昔でも、人間に變りはなかつたんだ。どんなに氣取つて見たつて、どんなに息張つて見たつて……やつぱり人間として生れて來て、人間として死んで行くのさ……人間といふ者は、利口になればなる程眞面目でなくなるものだ……落ちぶれて來れば來る程出世をしたがるものだ……しやうのない者だ。

男爵。ぢいさん……一體おめえはなんだい。どこから來たんだい。

巡禮。だれ。わしかい。

男爵。巡禮かい。

巡禮。地球の上にゐる者はみんな巡禮さ。この地球でさへ宇宙をめぐる巡禮だといふぢやないか。

男爵。（嚴格に）そりやさうだ。だが、お前は……旅行券を持つてるか。

巡禮。（むつとして）お前さんは何だ。探偵か。

ニヽま。（快活に）うまいな。ぢいさん。どうだ、男爵……一本まゐつたらう。

帽子屋。やられたな、御前。

男爵。（悄氣して）なあに。冗談だよ、ぢいさん。實はおれだつて持つてやしねえんだ。

帽子屋。嘘をつけ。

男爵。そりや……書類は持つてるが……なんの役にも立たねえんだ。

巡禮。書附といふものは大概さうだ……大概役に立たないものだ。

ペペル。男爵。どうだい、一杯やりに行くか。

男爵。行くとも。おいさん、又逢はう……おめえ中々悪黨だな。

巡禮。さうかも知れないて。

ペペル。（玄關の戸口にて）さ、早く行かう。（退場、男爵、急いであとを追ふ）

巡禮。あの男はほんとに男爵だつたのかね。

帽子屋。わかるものか。だが、生れが貴族だといふことは確らしいや。今でも「御前」が顔を出すからな。まだ癖が抜けきらねえと見える。

巡禮。貴族になるのは、疱瘡にかかるやうなものだ……濟んでしまつても、跡が殘る。

帽子屋。あの病さへなきや、いい男なんだ……どうも、時時息張るんでいけねえ……さつきのやうに、人の旅行券を諄ねたりなんかしてね。

靴屋アリヨシカ。（手風琴を抱へ、醉つぱらつて入り來る。口笛を吹く）ようう、寢坊め。

帽子屋。何を唸つてやがるんだ。

靴屋。まあ、勘辨してくんねえ……御免よ。僕は溫良な青年だ。

帽子屋。また箍を外しやがつたな。

靴屋。けつして惡いかい。おれは今、署長のメチャキンに分署から突き出されて來たんだ。——もう往來へ出ることはならねえぞ』なあんて言やがつた。なあ、おいらはこれでも人格のある青年だ……署長はおれを侮辱しやがつた……おれは署長なんかに用はねえ……みんな間違つてやがる……あいつは飲んだくれだ……おれはなんにも慾のねえ人間なんだ……なんにも入らねんだ。もう澤山だ。さどこへでも連れてつてくれ……一圓二十錢で買はれて行つてやるから。それでもおれは、なんにも入らねんだ。（ナスチャ臺所より入り來る）百萬圓やらうと言つてもおれは入らねえんだ。おれのやうな立派な人間が、何一つおれより豪くもねえ飲んだくれに、命令なんぞされてたまるかい。厭（いや）なこつた。

ナスチャ、戸口に立留り、靴屋の樣子を見て首を振る。

巡禮。（親切に）若い衆、何を馬鹿なことを言つてるんだ。

帽子屋。馬鹿な奴だ。

靴屋。（床の上に寢ころぶ）さあ、おれを食へ、錢は入らねえんだ。成程、おれは向う見ずだ。だが、おれは人より惡いのか。どこが人より惡いんだ。え。メチャキンの野郎——二度と往來へ出ると鼻面（はなづら）ひんまげるぞ』なんて言やあがつた。畜つ、出てやらあ……往來のまん中へ大の字なりに寢てやらあ。殺すなら、殺しやがれだ。おれはなんにも入らねえんだ。（起き上がる）

ナスチヤ。可哀さうな奴だ……ちいつほけな癖に、あんな大きなことを言つてるよ。

靴屋。(女を見てその前に跪く)レヂイ、フロイライン、マムゼル。パアレ、フランセエ……プリ、クウラント……僕はめちやめちやに醉つてゐます。

ナスチヤ。(聲高に囁く)そら、おかみさんが。

主婦。(急に戸をあけ、靴屋に)また來やがつたな。

靴屋。今日は。どうかまあ、こちらへ。

主婦。なんだ、犬め。二度と來ちやならないつて、あれ程言つといたぢやないか。

部屋の中に入り來る。

靴屋。おかみさん……まあ一つ……僕がお葬ひのマアチを彈くから聞き給へ。

主婦。(靴屋の肩を突く)出て行け。

靴屋。(戸口へ段々に身を引く)何も……そんなにしなくつたつて……まあ、兎も角も、お葬ひのマアチを……まだ習つたばかりなんだ……ほやほやと言ふところさ……まあお待ちよ……そんなにしたつて駄目だよ。

主婦。駄目か、駄目でないか、今に見るがいい……町中觸れて歩いてやるから、この金棒引め……きつとかういふ靑二才が、あたしのことを何の彼のと觸れて歩くんだよ。

錠前屋。（土手に退場）いいよ、ぢやあ行くよ、行きやあ好いんぢやねえか。

主婦。（帽子屋に）もうあんな奴がはひつて來ないやうにしておくれよ。好いかい。

帽子屋。おいらあおめえんとこの門番ぢやねえ。

主婦。お前さんが何だらうが、それをあたしが知つたことかい。だが、お忘れでないよ。お前さんはお情夫でここにゐられるんだよ。一體いくら借金があると思つてるんだ。

帽子屋。（靜に）また勘定して見ねえ。

主婦。お前がしなくたつて、あたしがしずに置くもんか。

錠前屋。（戸をあけて、どなる）やい、ワシリイサ・カルポウナ。おめえなんか、ちつとも恐かねえぞ……恐いものか。（隱れる）

（巡禮出て來る。）

主婦。お前さんは誰だい。

巡禮。旅の者さ……諸國を渡り歩く。

主婦。お泊りかい、滯在かい。

巡禮。それはまあ考へてからだ。

主婦。旅行券は。

巡禮。持つてるよ。
主婦。ぢやあ、お見せ。
巡禮。見せるよ……あとでお前の部屋へ持つて行くよ。
主婦。旅の者か……成程、さうらしいねえ、だが、これからは浮浪人だとお言ひよ……その方が本當らしいから。
巡禮。(溜息をつく)をばさん、お前さんはあんまり親切な人ぢやないね。
主婦、ペペルの部屋の戸口へ行く。
靴屋。(臺所より覗き込み、囁く。)行つちやつたかい。
主婦。(振り向く)まだそんなところにゐるのか。
靴屋、口笛を吹きながら隱れる。ナスチヤと巡禮、笑ふ。
帽子屋。(主婦に)ゐないよ。
主婦。誰が。
帽子屋。ワシカよ。
主婦。あの人のことをあたしが聞いたかい。
帽子屋。だつて、いやにきよろきよろ見廻してるぢやねえか。

主婦。部屋が綺麗になつてゐるかと思つて、見てゐるんだよ。分かつたかい。なぜまだ掃き出さないんだ。綺麗にしとかなくちやいけないつて、何度言つたか知れないぢやないか。

帽子屋。けふは役者の番だ。

主婦。誰の番だらうが、あたしの知つたことぢやない。衛生係に罰金でも取られたら、みんな追ひ出してしまふよ。

帽子屋。（落ちつきて）さうすりや、おめえが食へなくなるばかりだ。

主婦。唾つぱ一つでも殘つてゐたら、承知しないよ。（臺所の戸口へ向ひながら、ナスチャに）おや、お前さん、何だつて郵便箱のやうに突つ立つてゐるんだねえ。何だつて膨れつ面をしてゐるんだねえ。何だつて、そんなに人の顔を眺めるんだよ。さ、早く掃き出しておくれよ。お前さん……ナタアシャを見なかつたかい。ここへ來やしなかつたかい。

ナスチャ。知らない……見なかつた。

主婦。ブブノフ、妹がここへ來やしなかつたかい。

帽子屋。もいさんを連れて來た。

主婦。そして、あの人は……内にゐたのかい。

帽子屋。ゐたか……ゐた……ナタアシャはクレシチと話をしてゐたつけ。

主婦。そんなことを誰が聞いたよ。まあ、どうだらう、この埃は……どこもかも埃だらけぢやないか……まるで豚だねえ。も少し綺麗にしておくれよ……いいかい。（急ぎ退場）

帽子屋。意地の悪い奴だ。

巡禮。ひどい女だね。

ナスチヤ。こんな暮らしをしてりや誰だつてあゝなるさ。おまけにあんな男にくつついてるんぢやないか。

帽子屋。なあに、さうしつかりくつついてるわけでもなからうぜ。

巡禮。しよつちうあんなに嚙みつくのかね。

帽子屋。しよつちうさ……今ここへ來たのはレコを探しに來たんだ……ところがゐないと來た。

巡禮。はゝあ、それでおむづかりになつたといふ譯だな……なある程。この世の中には隨分いろんな奴が采配を振つてゐる……みんな人を押しつけよう押しつけようとしてゐる……そのくせ一人も世間を綺麗にする奴はない。

帽子屋。綺麗にしようと思つても智慧が足りねえんだ……ところで……こつちも持ち出さなくちやならねえ……ナスチヤやつてくれるか。

ナスチヤ。厭だよ。あたしやお前さん達の女中ぢやないんだよ、（暫時沈默）けふは醉つぱらはう……

ぐでぐでに酔つぱらはう。

帽子屋。いい事言つた。

巡礼。娘さん、なんだつて酔つぱらはうなどと思ふんだ。お前さんはつひさつき泣いてたぢやないか、それだのに急に又酔つぱらふなんて。

ナスチヤ。（挑戦的に）酔つぱらつちやつたら、また泣くのさ……分かつたらう。

帽子屋。馬鹿馬鹿しい。

巡礼。だが、どういふ訳でな。どんなものにだつて訳はある。顔にある小さい お腫にだつて訳はある。

ナスチヤ、黙して首を振る。

巡礼。ああ、ああ。人間にみんなこれだ……これから先、人間はまだどうなるんだ。おやあ、まあ、部屋はわしが掃き出してやらう。箒はどこにあるね。

帽子屋。戸棚の戸のうしろだ。

巡礼玄関へ退場。

帽子屋。なあ、ナスチエンカ。

ナスチヤ。うむ。

帽子屋。ワシリイサは、さつきなぜあんなにアリヨシカに突つかかつたんだらう。

ナスチヤ。ワシカはもうおかみさんが厭になつたんだ……ナタアシヤに氣があるんだ、などと言ひ觸らして歩いたからさ……あたしやもうここを出て、どつか他に宿をとらう。

帽子屋。なぜよ。

ナスチヤ。もう厭になつたからさ……あたしやここにゐたつて、餘計者だもの。

帽子屋。どこへ行つたつて餘計者だよ。世界に住んでゐる人間は、みんな餘計者だ。

ナスチヤ頭を振り、立ち上がりて、靜に玄關の方へ出て行く。巡査メドエデフ入り來る。うしろに巡禮、箱を持ちて從ふ。

巡査。（巡禮に）お前は誰だ。わしはお前を知らんが。

巡禮。では、ほかの者ならみんな御存じかな。

巡査。管轄内の者ならみんな知つてゐる筈だ――ところが、お前は知らない。

巡禮。そこで、をぢさん、世界中があなたの管轄でないといふことになる……まだあなたの管轄でないところもあるといふことになる。（臺所へ退場）

巡査（帽子屋の側へ來る）さうさ。勿論わしの管轄は廣くはない……その癖廣い奴よりずつと骨が折れるんだ……今も折角非番になつて歸つて來ようとすると、靴屋のアリヨシカを引致しなけりやなら

んことになつた……あいつ、往來の眞ん中へ仰のけに引つくり返つて、手風琴を鳴らしながら「なんにも入らねえ。なんにも欲しかねえ。」つて、どなつてゐやがるんだ。車は兩方から來るし、一體あすこいらは……混雜するところだ……今にも車に轢かれるかどうかしさうだ……馬鹿な奴つたらない……勿論直ぐ引致したが……あんまり滅茶なことをしやがる。

帽子屋。どうだね、今晩は……一勝負さしに來ないか。

巡査、來よう……うむ……時にワシカはどうした。

帽子屋。どうもしねえ……相變らずだ。

巡査。まだ生きてゐるか。

帽子屋。生きてはくつてよ。あいつは生きてゐる値打のある生活をしてるんだ。

巡査。（訝しげに）ほほう……生きてる値打があるかな。（巡禮、臺所より入り來り、バケツを手にして玄關の方へ退場）ふむ……大分噂がさかんだぞ……ワシカのことでよ……お前、なんにも聞かなかつたか。

帽子屋。なんにも聞かなかつたね。

巡査。ワシリサについて何か。ワシカの奴が……お前、なんにも氣が附かないのか。

帽子屋。何がよ。

巡査。なあに……もう大抵……お前は何もかも知つてるんだ、だが、言ひたくないんだらう……もう知れてゐることなんだ。(強く)嘘をつくなよ。

帽子屋。嘘を言つたつてしやうがねえ。

巡査。そりやさうだな……ええ、犬め、あいつ等はこんなことを言つてやがるんだ。ワシカがワシリイサと……言はば……何もおれの知つたことぢやない、おれはあいつの親爺ぢやないんだ、ただ……伯父といふだけなんだからな……何もおれが馬鹿にされる譯はないんだ。ところが、世間にやあ人を馬鹿にするのを商賣のやうに思つてる奴が澤山ゐるんだ。(饅頭賣の女入り來る)あばずれ……やつて來たな。

饅頭賣。おや、まあ、お巡りさん。ちよいとブブノフさん、あの人つたら、今も又市場で、女房になれなんて言ふんだよ。

帽子屋。なつたら好いぢやねえか。この人はおあしもあるし、ちよいと氣も利いてるし。

巡査。おれがかい。おや、おや。

饅頭賣。なんだい白髪頭め。もうそんな事は厭になつたんだよ。そんな馬鹿な眞似は、一生に一度すりや澤山さ。女から見ると、婚禮といふものは、丁度冬氷の張つた川ん中へ飛び込むやうなものさ……一度それで酷い目にあつたら、一生忘れられやしない。

巡査　でも……亭主といふものが、みんな同じわけのものでもあるまい。

饅頭賣。でも、あたしが始終同じなら爲方がないぢやないか。あたしの先の亭主が――厭な奴だつた――あいつが死んだ時には、あたしはもう嬉しくつて嬉しくつて、一日内の中にぢつとしてゐたよ。ひとりで内の中に坐つてゐると、あんまり嬉しくて、ほんとは思はれなかつたつけ。

巡査。亭主にぶたれて、なぜ默つてゐたんだ。交番へ訴へりやあよかつたのに。

饅頭賣。交番だつて。あたしや神樣に八年も訴へたんだよ……だけど、神樣だつてどうすることも出來なかつたんだ。

巡査。だが、今日では、女房をぶつ事は禁止されてゐる……法律と秩序が立派に敷かれてゐる……誰も人をぶつことは出來ない……法律と秩序の爲なら格別だが。

巡禮。（錠前屋の妻を連れて、入り來る）さあ……やつと來た……可哀さうに……どうして、こんな體をしながら、あんなとこへ行けたもんだ。お前さんの場所はどこだい。

錠前屋の妻。（亭主を指す）有難うよ。おぢいさん。

饅頭賣。そら、そこにお嫁に行つた人が來た……御覽。

巡禮。こんなに弱つてる病人が……たつた一人で玄關を彷ひ廻つてゐるんだ、壁にかぢりついて……しつきりなしに唸つてゐるんだ……どうして一人でなぞ出したんだ。

饅頭賣。氣が附かなかつたんだよ……勘忍しておくれ、おぢいさん。大方、附添のお女中が御散歩にでもお出かけ遊ばしたんだらうよ。

巡禮。冗談ぢやない……一體ひとりの人間を、あんなにほつたらかしといて、好いものと思ふのかいたとへ、どんな人間だらうが……人間としての値打に變りはないのだよ。

巡査。監視は必要だ。急に死なれて見ろ。面倒だぜ、よく見てなくちやいけない。

巡禮。全くだ、署長さん。

巡査。ふむ――さう……まあさう言つてもよからう……わしはまだ署長ぢやないが。

巡禮　本當かな。併し、顏附で見ると――立派な英雄だ。

玄關の方より、騷がしき物音、床を踏む足音、息苦しげなる叫び聲聞え來る。

巡査。また喧嘩だな。

帽子屋。さうらしいな。

饅頭賣。見といで。

巡査。おれも直ぐ行く……厭だが、職務だ。一體喧嘩が始まると、なぜ留めるんだらう。うつちやつときやあ、兩方でひとりでに廢してしまふんだ……擲り合ひに飽きて來てよ……だから、うつちやつといて腹のいえるまで擲り合ひをさせるのが一番いいんだ……さうすりや段々喧嘩が少なくなる

宿だ……一度やると、中々その痛みが忘れられないからな。

帽子屋。（寝床より立ち上がる）それを一つお上へ建議することだね。

亭主。（戸を突きあけて、叫ぶ）アブラム……早く來てくれ……ワシリイサがナタアシヤを殺す……早く……早く。

古着賣の女、巡禮、帽子屋、玄關の方へ駈け出す。巡禮、頭を振りつゝこれを見送る。

錠前屋の妻。ああ……ナタアシヤは可哀さうに。

巡禮。誰が喧嘩をしてるんだい。

錠前屋の妻。ここの宿（やど）の人達だよ……きやうだい二人（ふたり）だよ。

巡禮。（錠前屋の妻に近寄る）どういふ譯（わけ）でね。

錠前屋の妻。あんまり食べ物が十分過ぎるからだよ……丈夫過ぎるからだよ。

巡禮。して、お前さんは……何といふ名だい。

錠前屋の妻。アンナさ……あたし、かうしてお前さんを見てゐると……お父さんに逢つてゐるやうな氣がするよ……ほんとにお前さんは、あたしのお父さんに似てゐるよ……お前さんもあたしのお父さんのやうに、親切で……優しいねえ。

巡禮。あんまり世間の奴にぶたれたんで、それでこんなに優しくなつてしまつたのさ。

第二幕

舞臺面、第一幕に同じ、宵。暖爐の側の寢床の上に、サチン、男爵、人足クリチイ・ゾオブ、韃靼人など座を占め、骨牌をしてゐる。錠前屋と役者、それを見物してゐる。帽子屋は、おのが寢床の上にて、巡査と將棋をさしてゐる。巡禮は錠前屋の寢臺の前なる腰掛に腰をかく。ランプ二つ、一つは骨牌の連中の側の壁に、一つは帽子屋の寢床の側にかかりゐる。

韃靼人。もう一度やらう……それでおれはもう廢す。

帽子屋。ゾオブ。唄へよ。（唄ふ）

夜でも晝でも

人足。（歌に加はる）

牢屋は暗い。

韃靼人。（サチンに）切つてくれ。だが、ちやんと切ろよ。おめえのずるいなあ知つてゐるからな。

帽子屋と人足。（一緒に唄ふ）

いつでも鬼めが、ああ、ああ。

さみしさうに。

錠前屋の妻。病氣になつたり、ぶたれたり……それをみんなあたしは辛抱して來たんだよ……それがあたしの廻り合はせだつたのだよ……今までずうつと。

巡禮。可哀さうに。まあ。さう思ひつめない方がいい。

淫賣。どこへやるんだ。氣をつけ給へ。

帽子屋。ははあ……成程……なある程。

韃靼人。お手前にはサチンが騙すンだぜ。札を隠すんだ……見たぞ……やい。

大男。ほつとけよ、ハッサン。どつちにしても、おれ達を欺す奴なんだ……先を唄へ、ブブノフ。

錠前屋の妻。あたしは一度も物を滿足に食べた覺えがないんだよ……パンを一片一片……いつでも慄へながらびくびくしながら食べた……あたしは、しよつちう慄へてばかりゐた。びくびくしてばかりゐた……自分の分より少しでも餘計に食べやしないかと思つて……あたしは一生襤褸ばかり着しゐた……この長い、みぢめな一生……一體、なぜこんなにならなきやならないんだらう。

巡禮。可哀さうに。寢もしよう。もうぢき好くなるよ。

俳優。一人にジャックを出せ……ジャックを。忌々しい。

男爵。キングがあるぞ。

錠前屋。どんどん勝つなあ。

サチン。どんどん……勝つとも。

巡査。そら女王だよ。

帽子屋。こつちにもある……そら。

錠前屋の妻。あゝ、もうあたしは死ぬ。

錠前屋。（韃靼人に）そうれ――見ろ。うつちやつちまへ、殿下――もう廢せよ。

役者。默つてろ、自分でどうにかすらあ。

男爵。氣をつけろ、錠前屋、追ひ出すぞ。

韃靼人。もう一度やつてくれ……水瓶は割れるまで泉へ通ふとよ……おれもさうだ。（錠前屋、首を振りて帽子屋の側へ行く）

錠前屋の妻。あたしは、しよつちうかう祈るんだよ……主よ……あたしはあの世へ行つても……かういふ苦しみをしなければならないのでせうかつて。

巡禮。いんえ。どうして……決して苦しみなんかありやしない。まあ、氣を落ちつけて寢ておいで……心配しちやいけない……あの世へ行けば、きつと休息が出來る。もう少しの辛抱だ……吾々だつて、みんな辛抱しなきやならないんだ……みんな、てんでに辛抱してゐるんだ。

立ち上がり、急いで臺所の方へ行く。

帽子屋。（唄ふ）

　　覗こと儘よ。

人足。

　　塀は越されず。

二人。（聲を合せて）

　　自由に焦れても、ああ、ああ。

　　鎖は切れぬ。

韃靼人。待て。札を一枚袖の中へ突つ込んだぞ。

男爵。（眞似して）嘘つけ……ぢやあ、今度はてめえの鼻ん中へでも突き込まなきやなるめえ。

役者。（說明するやうに）おめえの間違えだよ、殿下。そんなことはねえよ。

韃靼人。たつて、おれは見たんだ。するだ。おりやもう廢す。

オチン。（骨牌を纏めながら）ぢやあ勝手にするがいい……おれ達がするなことは、おめえ初つから承知

　してるんぢやねえか……ぢやあ、なぜおれ達と骨牌なんぞをしたんだ。

男爵。たつた四圓負けたんだ。それだのに、三兩も負けたやうな騒ぎだ。さあ、も一度來い。

韃靼人。（烈しく）骨牌は正直にやるもんだ。

サチン。なぜよ。

韃靼人。「なぜ」とはなんだ。

サチン。なぜと言つたら……唯なぜよ。

韃靼人。てめえ、それを知らねえのか。

サチン。知らねえな。おめえ知つてるか。

韃靼人、腹を立てて唾を吐く。人々笑ふ。

人足。（機嫌よく）をかしな奴だな、ハッサン。まあ考へて見ろ。正直に暮らしなんぞしたら、三日の内に飢ゑ死んぢまはあ。

韃靼人。それがなんだ。正直に暮らさねえ者は人間ぢやねえ。

人足。いつでも同じことを言つてやがる。おりやそんなことより茶でも飲んで來よう……さあ、始めた、ブブノフ。

帽子屋。

ああこの重たい鐵の鎖よ。

ああ、あの鬼めの、ああ、ああ。休まぬ見張り。

人足。來い。ハッサン（唄ひながら退場）

　　いかにせうとても籠の鳥よ。

　韃靼人、拳にて男爵を脅し、友のあとを追ふ。

サチン。（笑ひながら、男爵に）御前、たうとう又しくじらしてしまつたぜ。教育のある人間は、骨牌の

　ごまかしやうを知らねえから駄目だ。

男爵。（肩を聳やかす）ええ、いめいましい。又しくじつてしまつた。

役者。天才がないからだ……自信がないからだ……これがなければいつまで立つても駄目だ。

巡査。おれの手には女王が一つだ……おめえ二つ持つてるな……ふむ。

帽子屋。うまくやりやあ、一つで澤山だ……さあ、おやり。

錠前屋。やられたね、アブラムさん。

巡査。お前の知つたことぢやない……默つてろ。

サチン。五十三錢勝つた。

役者。その内三錢はおれんだ……だが、三錢で何が買へる。

巡禮。（臺所より入り來る）大分韃靼人をいぢめたね、それで一杯やりに行くのか。え。

男爵。一緒に來い。

サチン。一杯やつたら、どんなになるか。それが見てえ。

巡禮。白面の時よりよくなる筈がない。

役者。おいでよ、ぢいさん……おれが素的なアリアを聞かしてやるから。

巡禮。アリア。なんだね、それは。

役者。韻文さ。わからねえか。

巡禮。韻文……詩だね。そんなものを聞いたつてしやうがない。

役者。をかしいんだよ……かと思ふと、又馬鹿に悲しいんだ。

サチン。さあ行かう。アリア唄ひ。(男爵と共に退場)

役者。今直ぐ追つつくぜ。(巡禮に)例へば、ぢいさん、かういふ歌があるんだ。その初は……ええと、どうだつたかな……すつかり忘れてしまつた。(額をこする)

帽子屋。女王を取つたぞ……さあ、來い。

巡禮。また遣りそこなつたか。畜生め。

役者。おれのオルガニイズムにまだアルコホルの毒が廻らなかつた時分には、おれは記憶がいいので有名なものだつた……ほんとだぜ、ぢいさん。ところが今は……もうすつかり駄目だ……おれがこの歌を唄ふと、きつと大成功でね……いつでも割れるやうな喝采さ。と言つたところで、喝采とい

ふものがどんなものだか、おめえには分かるまい……まあ、なんだね。ウオッカ見たいなものだね……かういふ風に歩いて出るんだ。（姿勢をとる）それから、始めるんだ……それから……（急に黙る）もうちつとも覺えてゐねえ。一言(ひとこと)も……覺えてゐねえ。あの歌は、おれの一番好きな歌だつたんだがなあ……ぢいさん、どうだ、呆れたか。（空を掴む）

巡禮。一番好きなものを忘れちまつちやあ……困るなあ。人の魂は、その人の好きなものにあるのだから。

役者。おれはおれの魂まで飲んぢまつたんだ……おれはもう駄目な人間だ……なぜ駄目だと言ふと、それ、自信がないからだ……おれはもうおしまひだ。

巡禮。なぜ。直したらいいぢやないか。わしの聞いたところによると、今日では、酒飲みの療治が出來るといふ話だ。しかもただで直すといふことぢやないか……大酒飲(おほざけのみ)の病院が立つてゐて……そこで、ただ直してくれるといふぜ……酒飲みだつて人間といふことを段々世間が認めて來たんだな。だから、誰か早く行つて、直してくれと言へば、向うは大層喜ぶんだ。すぐ行つて見ちやどうだい。

役者。（思案して）どこへさ。どこにそんなところがあるんだ。

巡禮。何とかいふ町なんだが……何と言つたつけな。妙な名だつたよ……なあに、今すぐ分かる……まあ、兎に角、支度だけはしとかなくちやいけない。先づ酒を控へるんだ。勇氣を出して、辛いの

をこらへるんだ。そこで……病氣が直る。直つたら、新しい生活を始めるんだ……いいぢやないか。
え。新しい生活だぜ……さあ、決心をした……一、二、三。

役者。（微笑して）新しい生活……初めつから……いいなあ……そんなことが出來るかしら。新しい生活。（笑ふ）やつて見ようかな。ようし、やつて見よう。きつとやつて見る。

巡禮。やつて見ないでどうする。人間といふものは……やらうと思ひさへすれば……なんでも出來るものだ。

役者。（急に、夢からでも醒めたやうに）をかしなぢぢいだ。ぢやあ。ちよいと失敬。（口笛を吹く）また逢はうぜ。（退場）

錠前屋の妻。おぢいさん。

巡禮。なんだい。をばさん。

錠前屋の妻。あたしと少し話をしておくれな。

巡禮。（女の方に近寄る）よし。話をしよう。

錠前屋。（あたりを見廻し、默つて妻の寢臺に歩み寄り、ぢつと女の顏を見て、何か言ひたげなる手振りをする）

巡禮。なんだね。

錠前屋。（何かを恐るるやうに、小聲にて）なんでもねえ。（靜に玄關の戸口へ向ひ、暫く戸口に立寄りゐ、や

がて出てしまふ）

巡禮。（それを見送りて）御亭主は大分苦しんでゐるらしいね。

錠前屋の妻。あたしもう、あの人の事はなんとも思つてやしない。

巡禮。隨分ぶたれたかい。

錠前屋の妻。いくらぶたれたか分かりやあしない……たうとうあたしを……こんなにしてしまつた。

帽子屋。おれの嬶が……男をこさへやがつたことがあつた。そいつ將棋が中々うまかつた。その野郎。

巡禮。ふむ。

錠前屋の妻。おぢいさん……お話をしておくれよ……苦しくつてしやうがないから。

巡禮。なあになんでもないよ。死ぬ前には誰しもさういふ風になるものさ。なんでもないよ。信仰をお持ちね、もうお前さんは死ぬんだ、死ねばきつと休息が出來る……だから、もう、なんにも心配をおしでない……なんにも。もうぢき靜になるよ、平和になるよ……そして、ゆつくり休めるよ。死は總てのものを宥める……死はやさしいものだ……棺へはひつて、始めて休息があると、よく言ふが……あれはほんとだ。どこへ行つたつて、決して他に休息のあるところはない。

（[illegible]入り來る。微醉。髪の毛亂れ、不機嫌なる面持。臺所の戸口の側の寢床に腰をかけ、沈默。不動。）

錠前屋の妻。そして、そこにも……やつぱりこんな苦しいことがあるのかい。

巡禮。苦しいことなんぞは一つもない。ほんとだ、一つもない。ただ休息があるだけだ……その他にはなんにもない。神樣の前に連れて行かれると。きつとかう言はれる。「見よ、主――婢アンナが參りました。」

巡査。（嚴格に）あの世で言ふことがお前には分かるのか。

（ペペルは巡査の聲に驚かされて頭を上げ、傾聽す。）

巡禮。分かるとも、署長さん。

巡査。（やさしく）ふむ――さう。だが、そんなことはおれの知つたことぢやない……ところで……併し、おれは署長ぢやない。

帽子屋。さあ、一度に二つ取つたぞ。

巡査。ええ、ひどいことをしやあがる。

巡禮。そして神樣はお前さんの顏を見て、優しく、「わしはこのアンナを知つてをる。」と言つて下さる。それから又、かうおつしやる。「アンナを天國へ連れて行け。あすこには平和がある……アンナの一生は誠に苦しいものであつたと承知してをる……アンナは大層疲れてをるから……すぐ休ませてやれ。」

錠前屋の妻。おぢいさん……お前さん……ほんとにさうなれるのかい……ほんとにそんなに平和にな

れるのかい……ほんとに少しも苦しまなくつて濟むやうになるのかい。

巡禮。なるとも……少しも苦しまなくつて濟むやうになる。だから信仰をお持ち、心配しないで、おんでお死に……死は赤んぼをあやすお母さんのやうなものだよ。

錠前屋の妻。でも……ことによると……又よくなるかも知れないねえ。

巡禮。（笑む）なんの爲によくなるんだ。又新しく苦しむ爲にかい。

錠前屋の妻。でも、あたしはまだ……もう少し生きてゐたいんだもの……ほんのもう少しで好いんだから……あの世へ行けば、苦しいことがなくなるといふんだから……この世でもう少し苦しんでも好いよ。

巡禮。ああ、あの世へ行けば、少しも苦しいことはない……少しもない。

ペペル。（立ち上がりて）さうかも知れねえ……が、又さうでねえかも知れねえ。

錠前屋の妻。（身を竦めて）ああ。

巡禮。まあ、君。

巡査。誰だ、そこで吠えるのは。

ペペル。（巡査の側へ近寄る）おれだ。どうしたい。

巡査。あんまり大きな聲をするな。靜にしてゐるものだ。

ペペル。馬鹿野郎。成程、おめえはあいつの伯父さんだ……は、は。

巡禮。（ペペルに向ひ、小聲に）おい、君——そんなにどなり給ふな。ここに女が一人死にかけてゐる……もう唇が土氣色になつてるんだ……靜にしてやつてくれ。

ペペル。ぢいさん、おめえがさう言ふなら、よすよ。おめえは中々豪い人間だ。すばらしい嘘をつくね……中々話が面白いや。もつとどしどし遣りねえ……世間にやあ、あんまり面白いことがなさ過ぎるんだから。

帽子屋。ほんとに死ぬのかい。

巡禮。死ぬ人が冗談言つてると思ふのかい。

帽子屋。ぢやあ、たうとうあの咳にもお別れだな……隨分喧しかつたな、あのしつきりなしにする咳は……そら二つ取るぞ。

巡査。ええ……畜生。

ペペル。アプラム。

巡査。お前にアプラムと呼ばれるわけはない。

ペペル。ぢやあ、アプラシユカ——ナタアシヤはまだ寢てるかね。

巡査。寢てようが寢てまいがお前の知つたことぢやない。

ペーペル。聞かしてくれたつて好いぢやねえか。ワシリイサはほんとにあの子を酷くぶつたのかい。

巡査。それもお前の知つたことぢやない……ほんの内輪で出来たことだ……一體お前はなんなんだい。

ペーペル。おれはおれだ——氣が向きやあナタアシヤを攫ひ出すかも知れねえ。さうすりや二度とあの子の顔は見られねえぞ。

巡査。（言葉をやめる）なんだと。誰のことを言つてるんだ。おれの姪を、そんな……この泥坊め。

ペーペル。泥坊よ——まだおめえに捕まらねえ泥坊よ。

巡査。待て。今に捕まへてやる……もうぢき捕まへてやるから。

ペーペル。いつなりとも……その代り、さうなりやあ、この巣は顛覆だぞ。一體おれが検事の前で、なんにも言はねえでゐると思つてるのか。そりやあ飛んだ見違ひだぞ。先づ検事がかう聞かあ。お前を焚きつけて、泥坊をさせたのは誰だ……お前にうまい場所を教へたのは誰だ。ミシュカ・コスチリヨフとその妻君であります。して、贓品を受け取つたのは誰だ。ミシュカ・コスチリヨフとその妻君であります。

巡査。そりやあ嘘だ。誰がほんとにするものか。

ペーペル。ところがほんとにするね……ほんとのことなんだから。それから、おめえも序に抱き込んで

やる。おめえ達みんな抱き込んでやるから。見ろ。

巡査。（不安になる）默れ。默れ。馬鹿なことを言ふな。おれがお前に何を惡いことをした……やま犬め。

ペペル。ぢやあ、どんな好いことをして吳れた。

巡禮。成程な。

巡査。（巡禮に）何を言ふんだ。お前の口を出すところぢやない。內輪のことだ。

帽子屋。（巡禮に）默つといでよ。おれ達の知つたことぢやねえ。

巡禮。（やさしく）もうなんにも言やしないよ。唯わしはかう思つてるんだ。人になんにも好いことをしてやらないのは……惡いことをしてるのだとね。

巡査。（巡禮の詞を解せず）好いか。おれ達はみんな懇意の仲なんだ……だが、お前は――お前はなんだ。

（怒つて、鼻を鳴らしながら、足早に退場）

巡禮。ほう。怒つたな。大將……どうも變だ。ここの內は餘程込み入つてると見える。

ペペル。ワシリイサのところへいひつけに行つたんだ。

帽子屋。もう馬鹿はよせよ。ワシカ。おめえはぢきと勇氣を見せたがる……勇氣は森ん中へ菌をとりに行く時か何かに役に立つものだ……ここぢやあ、そんなものはなんにもならねえ……おめえ、今

にひどい目に會ふぜ。

ペペル。そいつあ面白いや……これでもヤロスラアフの若い者(もん)だ、少し敏(はし)つこいつもりなんだ……さう安々捕(つかま)つてたまるものか……向うで喧嘩をしかけて來りやあ、こつちも喧嘩をするばかりだ。

巡禮。だが君、ここは出て行つた方が好いぜ。

ペペル。ここを出て、どこへ行くんだ。

巡禮。シベリアへ行き給へ。

ペペル。へ。願なこつた。あすこなら、まあ、官費で送られるまで待たうよ。

巡禮。いや、ほんとだ、わしの言ふことを聞いて御覧。シベリアへ行きやあ、きつと好いことがある……お前さんのやうな若い者が足りなくつて、困つてゐるのだから。

ペペル。おれの行く道は、もうちやんと極(き)まつてるんだ。おれの親爺は一生監獄で飯を食つたんだ。その商賣をおれは相續したんだ……おれは小(ちつ)ぽけな時分からみんなに、泥坊だの泥坊の子だのと言はれたんだ。

巡禮。ほんとに好いところだぜ……シベリアは。黄金國(わうごんこく)だ。精力のある、頭の好い人間が、あすこへ行きやあ、すぐに大きくなる──室(むろ)の中の胡瓜のやうに。

ペペル。おい、ぢいさん──なぜさう嘘ばかりつくんだい。

巡禮。ええ。

ペペル。おめえ聾か。なぜ嘘をつくんだと聞いてるんだ。

巡禮。いつわしが嘘をついた。

ペペル。のべつについてるぢやねえか……おめえに言はせりやあ、あすこも好い、ここも好いだ……それが嘘だと言ふのよ。なぜさう嘘をつくのだ。

巡禮。本當だよ。嘘だと思ふなら、行つて見るがいい、分かるから……きつとわしに禮を言ふやうなことになるから……一體お前さんは、なぜこんなところにぐづぐづしてゐるんだい。そして……又なぜそんなに眞實といふことを大事がるんだい。よく考へて御覽。眞實は君のおとし穴だ。

ペペル。おとし穴だつて好い……構ふもんか。

巡禮。君は實に妙な男だ。何も自分から頭を突つ込まずとものことぢやないか。

帽子屋。何をおめえ達はぐづぐづ言つてるんだ。分からねえな……一體眞實のどんなのが入用なんだ。

ワシカ。そんなものが何になるんだ。おめえについての眞實なら……おめえ自分で知つてるぢやねえか……世間様も御承知だあ。

ペペル。默つてろ。があがあ言ふな。先づ、ぢぢいに聞きたいことがある……おい、巡禮……一體、神様といふものは在るのか。

巡禮、笑ひて答へず。

帽子屋。人間といふ奴は川を流れる鉋つ屑のやうなものだ……出來上がつた家はちやんと立つてゐる……だが、鉋つ屑はどんどん流れて行く。

巡禮。（やさしく）お前さんが神樣を信仰すれば――神樣は在る。信仰しなけりや無い……人の信仰するものは……きつと存在する。

ペペルは、默つて驚いたやうに老人の顏を見る。

帽子屋。さあ、茶でもやつて來ようか……一緒に茶店へ行かねえか。え。

巡禮。（ペペルに）何をそんなに見つめてゐるんだ。

ペペル。いやあ……何かい……おめえは……

帽子屋。それでは、一人で出かけるかな。（戸口を出でむとして、入り來る主婦に突き當る）

ペペル。おやあ……おめえは……さういふ。

主婦。（帽子屋に）ナスタアシヤはゐるかい。

帽子屋。ゐねえよ。（退場）

ペペル。ああ……來たな。

主婦。（巡禮のゐる寢臺に歩み寄る）まだ生きてるかい。

巡禮。そつとしといてやれよ。

主婦。まあ。なぜお前さんはここにぐづぐづしてゐるんだい。

巡禮。出て行けと言ふなら……出て行くよ。

主婦。(ペペルの部屋の戸口に近寄る。)ワシカ。お前さんに話があるんだよ。

巡禮、玄關の戸口へ行き、一度戸をあけ、音をさせてそれを閉づ。やがて、靜に寢床の上に登り、そこより暖爐の上にあがる。主婦ペペルの部屋に入る。

主婦。(内より)ワアシヤ、お出でよ。

ペペル。行かねえ……厭だ。

主婦。(又出て來る)どうしたの。なぜそんなに癪を言ふの。

ペペル。氣が滅入(めい)つてたまらねえんだ……もうここにゐる奴等にやあ、みんな飽きてしまつたんだ。

主婦。そして、あたしも……飽きられた一人かえ。

ペペル。さうだ。

主婦、肩に掛けたる布(きれ)を烈しく引張り、腕を胸に押しつける。やがて錠前屋の妻の寢臺に近寄り垂幕のうしろを窺ひ、それからペペルの所へ歸つて來る。

ペペル。さあ……言つてしまへ。

主婦。何を言ふんだよ。無理に可愛がらせようたつて、それは駄目だよ……あたしや可愛がつておくれよつて、泣きつくやうな柄ぢやないんだからね……だけど、ほんとのことをよく言つておくれだつた。

ペペル。ほんとのことを言つたとは。

主婦。あゝ……あたしに飽きたつて言つたらう……それとも、それは嘘かい。

ペペル、黙つて女の顔を見る。

主婦。（男に近寄る）何をそんなに見るの。あたしの顔をお忘れかい。

ペペル。（陰気になつて）おめえは別品だ。（主婦、男の首に腕を巻く。男は肩をゆすつて、女の腕を振り拂ふ）が、おめえの事は、なんとも思つちやゐねえんだ……おれもおめえとは永々一緒に暮らして來たが……實あ、本當におめえが好きになつたことは、一度もねえんだ。

主婦。（小聲に）まあ……へえ。

ペペル。だから、お互にもうなんにも言ふことあねえ……なんにもねえ。さ、出て行つてくれ。

主婦。他に好い人が出來たの。

ペペル。どうだか、おめえの知つたことぢやねえ……若し出來たにしたところで……おめえを仲人にや頼まねえて

主婦。（意味ありげに）どうだか分かるものか……あたしのお蔭で、多分その思ひも叶ふんだらうよ。

ペペル。（疑ひて）一體、誰のことだ。

主婦。誰のことを言つてるか、分かつてる癖に……おとぼけでないよ。あたしは何もかも言つてしまふよ。（小聲に）あたしはこれだけお前さんに言つときたい……お前さんは人を酷い目に逢はしたんだよ……お前さんは平氣な顔をして人をぶつたんだよ。鞭か何かでぶつやうにさ……しよつちう人のことを、可愛い可愛いなんて言つてゐながら……急に。

ペペル。急にだと。何が急になもんか……もうずつと前からさう思つてゐたんだ……おめえには情がねえ……女にやあ情がなければ駄目だ。男は獣よ……おれ達は獣のことより外はなんにも知らねえんだ……だから、おれ達は、女の情で人間らしくして貰はなくちやあならねえんだ……おめえはおれに何をしてくれた。

主婦。濟んだことは濟んだことさ……自分で一度かうと思つたことは、中々抑へられるもんぢやないよ……もうあたしを可愛がつてくれないと言ふんなら——それで好いさ……あたしやちつとも困りやしない。

ペペル。ぢやあ、宜しい。それで話が分かつた。さ、仲よく別れよう……喧嘩をしねえで……心持よく。

主婦。お待ちよ。何もそんなに急がなくたつて好いぢやないか。あたしはお前さんと一緒に暮らすやうになつてからといふもの……きつといつか、この五味溜から、あたしを救ひ出してくれるだらうよ、しよつちうそればかり心待ちに待つてゐたんだよ……内の亭主だの、伯父さんだの……ここの生活だのといふものから、きつとあたしを自由の身にしてくれるだらうと、しよつちうそればかり樂しみにしてゐたんだよ……ことによると、あたしはお前さんに惚れてゐなかつたのかも知れないねえ……きつとお前さんの傷の中にある、自分の望や自分の夢に焦れてゐたんだよ……分かるかい。あたしはお前さんが、いつか連れ出してくれるだらうと、始終さう思つてゐたんだよ。

ペペル。おめえが釘で、おいらが釘拔だといふわけでもあるめえ……おれの方ぢや又おめえがきつとうまく奴をどうにかしてしまふだらうと、さう思つてゐたんだ……おめえ中々悪者だからな。（机の前の腰掛に腰をかける）

主婦。（ペペルに凭れ掛かりて）ワシカ、二人で助けつこをしようぢやないか。

ペペル。どういふ工合によ。

主婦。（小聲に、併し力强く）妹が氣に入つたんだらう。知つてるよ。

ペペル。それでおめえ、あんなにあの子をぶつんだな。もうあの子に指でも觸つたら承知しねえぞ。好いか。

主婦。まあ、お待ちよ。さう直ぐ眞赤になるものぢやないよ。靜に話をしたつて、分かることぢやないか、仲よくさ……妹と一緒におなりよ、いつでもお前の好い時に。かかりはあたしが出して上げようぢやないか……三百兩位。もつとはひつたら、もつと上げる。

ペペル。(腰をかけた儘、體を前後に搖り動かす)待て……どういふわけでよ。何の爲によ。

主婦。その代り、内の亭主から、あたしを自由の身にしておくれよ。あたしの首から、あの繩をとつておくれよ。

ペペル。(小聲に口笛を吹く)よう、こいつあうまいことを考へ出したな……亭主は墓へ叩つ込む、男は懲役に送つてしまふ、そして自分だけ。

主婦。だけどお前さん。どうしてお前さんが懲役などに行かなきやならないの。何も、お前さん、自分でやらなくたつて……仲間にやらせりや好いぢやないか。よし、お前さんが自分でやつたところで――何が知れるものかね。よくお考へよ……ナタアシヤは自分のものになるし……お金は手にはひるし……どこへでも勝手なところへ……逃げて行けるんだよ……さうすりやあ、あたしも自由の身になれるし……妹も自由の體になるんだ。妹だつて、……あたしを離れた方がどんなに仕合せだか知れやしない。あたしはちよいとでもあの子の顏を見ると、腹が立つて、しやうがないんだ……あの子がこんなに憎いのも、みんなお前さんのお蔭だよ……あたしはどうしても自分を抑へること

が出来ないんだもの……あたしは随分妹をぶつたり叩いたりしたねえ、しまひには妹が可哀さうになつて、ぶつてる自分が泣き出すんだよ……それでも——やつぱりぶつんだ。まだこれからもぶつて遣る。

ペペル。けだもの。自分の残酷なことを自慢する奴があるか。

主婦。自慢をしてゐるんぢやない。ほんとのことを言つてるんだ。考へて御覧。お前さんは内の老ぼれのお陰し、もう二度も牢屋へぶちこまれてるんぢやないか……みんな、あいつの慾張りからだ……ほんとに、蟲のやうに人に食ひついてゐやがつて……もう四年からあたしの血を吸つてやがるんだよ……ほんとに、まあ、なんだつてあんな奴を亭主に持つたんだらう。おまけに、ナタアシヤまでいぢめやがるんだ。しよつちうあの子をつかまへちやあ、乞食、乞食なんて言やがつてさ。あいつはバチルスのやうな奴だ。

ペペル。なかなかうまく言ひ廻すな。

主婦。何も言ひ廻しやしないよ……お前さんにはちやんと分かつてる筈だ……これが分からなけりや馬鹿だ。

亭主、そつと入り来り、足音を盗んで前へ進む。

ペペル。（主婦に）好いから……もう行つてくれ。

主婦。よく考へてお置きよ。(亭主に氣がつく)なんだい。また、あたしの跡をつけて來たね。

ペペル、飛び上がり、恐ろしき顏して亭主を見る。

亭主。ああ……おいらだ……おいらだ……お前達二人つきりか。ああ、成程……ちよいと、その、おしやべりをしてゐたといふ譯だね。(突然、足にて床を踏み鳴らし、主婦に向つて聲高にどなる)やい、ばいた……乞食、やくざ野郎。(答ふるものは反響なき沈默のみ。亭主、おのが聲に戰く)ああ、神樣、どうぞお許し下さいまし……ソシリイサ、てめえ又おれに罪を犯させたぞ……おれはてめえを方々探して歩いてゐたんだ。(どなる)もう寢るんだ。てめえ、お燈明に油をつぐのを忘れたな……ええ、乞食、淫賣。(震へる兩の拳を女の顏の前へ突き出す)

主婦は靜に戸口へ進み、そこにてペペルを振り返り見る。

ペペル。(亭主に)やい。畜生。出て行け。

亭主。(どなる)おれはここの主人だ。てめえこそ出て行け。泥坊。

ペペル。(陰氣に)出て行け、ミシユカ。

亭主。出て行かねえな……出て行かなきや……おれが。

ペペル、亭主に飛びつき、喉を捕へて、ゆすぶる。暖爐の上より、けたたましき寢返りの音、あやしく長き欠伸の聲聞こゆ。ペペル、覺えず手を放す。亭主、聲高に叫びながら、戸口の方へ馳せ行き、玄關へ退場。

ペペル。（暖爐の傍の寝床に起き上る）誰だ……暖爐の上にゐるのは誰だ。

巡禮。（音を出す）なんだね。

ペペル。おめえか。

巡禮。（落ちついて）わしさ……わしだよ。

ペペル。（玄關の戸を締め、門を探す。見當らず）ええ、畜生め……おりて来い。おおい。

巡禮。今すぐ……おりるよ。（降りる）

ペペル。（戸口にて）てめえ、なんだつて暖爐などへ上がつたんだ。

巡禮。外(ほか)に行くところがないからさ。

ペペル。なぜ玄關へ行かねえんだ。

巡禮。あすこは寒い……わしは年寄だ。

ペペル。今のを聞いたか。

巡禮。聞いたとも。聞かない筈がないぢやないか。わしは聾ぢやないもの。ああ、君は仕合せ者だ……ほんとに仕合せ者だ。

ペペル。（笑ひて）おれが仕合せ者だと。なぜよ。

巡禮。わしが暖爐へ上がつてゐたからさ……それが、お前さんの仕合せだつたと言ふのだ。

ペペル。なんだつて、あんな聲を出したんだ。

巡禮。熱くなつて來たからさ……それが、お前さんの仕合せだつたんだよ……あの時わしは考へたんだ。若し、君が取りのぼせて……親爺の首でも絞めたら。

ペペル。ああ……絞めたかも知れなかつた……おれはあいつが嫌ひなんだ。

巡禮。そんなことはちつとも珍しかない……そんなことは毎日ある。

ペペル。（笑ふ）ふむ……おめえも遣つたことがあるんぢやねえか。

巡禮。まあ、君、わしの言ふことを聞き給へ。あの女に近づいてはいけないよ。どんなことがあらうとも、決してあの女を近づけちやいけない……默つてゐても、あの女は、もうぢき亭主を片づけてしまふよ。お前さんなぞがやるより、ずつとうまくやらあ。決してあんな惡魔に耳をお貸しでないよ。まあ、わしを御覽、わしの頭はこの通りすつかり禿げてゐる……どうしてかう禿げてしまつたんだらう。みんな女の爲さ……わしは、この頭に生えてゐた髮の毛よりも澤山の女を見た……でもあのワシリイサといふやうな奴はなかつた……あいつペストより恐ろしい奴だ。

ペペル。おれはおめえに、禮を言つて好いのか惡いのか……分からねえ……それともおめえも。

巡禮。もう、なんにも言はないで……わしの言ふ通りにするさ。惚れた娘があるのなら　　それの手をとつて、二人で逃げ出すさ。遠くへ行つてしまふさ、うんと遠くへ。

ナタシャ。(巡禮に) 人間といふものは、誰が好いのだか、誰が惡いのだか、中々分かるもんぢやねえ……

……どうして……とても分かるもんぢやねえ。

巡禮。そんなことはどうでも好い。人間といふ者は、ああなつたり、かうなつたり……氣の向きやうで、色々になるものさ。だから、けふよくても、あす惡くなるまいものでもない。若し心底その娘が好きなのなら――連れて行くことさ、さう極めてしまふさ……でなけりや、ひとりで行くんだ……

……君は若いんだ……女に縛られるのはまだ早い。

ペペル。(戀人の頭をつかまへて)だが、おい――なぜ、おめえはこんな話を、

巡禮。まあ、待て、許してくれ……アンナの、樣子を見て來てやらなきや……大層喉が苦しさうだ。(巡禮は上の寢臺に近寄り、垢塗な被ひのけ、そこに横たはれる者をぢつと見守り、手にてゆすぶり見る。ペペル、沈んで、心配さうに戀人のする事を見てゐる)ああ、全知全能の主エス・クリスト。只今この世を去つた苦勞をした婢アンナの魂を、安らかにおん身の傍へ、召させ給へ。

ペペル。(小聲に)死んだかい。(近寄らず、踵であがりて、アンナの寢臺の方を見る)

巡禮。(小聲に)やつと苦痛が終つたのだ……時に、これの亭主はどこにゐるだらう。

ペペル。酒場さ。

巡禮。知らせてやらなきやなるまい。

ペペル。(身を竦めて) おいらは死人が大嫌ひだ。

巡禮。(戸口へ行く) 死人を好く奴があるものか。愛さなくちやならないのは、生きた人間だ……生きた人間だ。

ペペル。おれも一緒に行かう。

巡禮。恐いのか。

ペペル。おらあ死人は嫌ひだ。(老人と共に急ぎ退場。舞臺暗く空となる。玄關の戸口の外より、陰鬱にして混雜したる怪しき物音聞こえ來る。やがて、役者入り來る)

役者。(戸を締めず、閾の上に立ちゐて、大聲にどなる。兩手はしつかと戸口の柱を掴む) ぢいさん。ルカ。へ。どこへ隱れたんだ。やつと思ひ出したよ……さあ、聞いてくれ。(よろけながら、二歩前へ出て、姿勢を整へ、デクラメエションを始める)

人、聖なる誠に至るの
道を見出ださざれば、
世は擧つて、世の心を捕へむとする
うつけ者の夢を稱へん。

ナタアシヤ、役者のうしろの戸口にあらはれる。

役者。（續ける）ぢぢい……聞けよ。

　太陽、明日

　地に光を塗るを忘れなば、

　世は挙つて、赤金（しやくきん）に輝く

　うつけ者の夢を稱へむ。

ナタアシヤ。（笑ふ）まるで樂出（がい）子だわ。又醉つて來たんだよ。

役者。（女の方を振り向く）ああ、おめえか。ぢぢいはどこにゐるんだ。あの、可愛い、親切な、おぢいちやんは……おや、だあれもゐねえな……ナタアシヤ、あばよ、あばよ。

ナタアシヤ。（役者の側へ歩み寄る）まだ入らつしやいとも言はないのに、もう然樣ならなの。

役者。（女の前に立ちはだかる）おれはもう行くんだ……旅へ出かけるんだ……春が來ると一緒に、おれは遠くへ行つてしまふんだ。

ナタアシヤ。おどきよ……一體、どこへ旅に出かけるの。

役者。或町を探しに行くのよ……そこへ行くと、おれの病（やまひ）が直るんだ……おめえもここは出る方がいいぜ……オフイイリアどの……尼寺へ行きやれさ……好いか、そこへ行くとオルガニイズムの病院があるんだ……聞け、大酒飲みの爲に出來た病院があるんだ……素敵な病院だぜ……どこもかも大

理石よ……大理石で張りつめてあるんだ……明かるいぜ……綺麗だぜ……うまい物が食へるんだぜ――それで、ただよ。ほんとに大理石で張り詰めてあるんだ。おれはきつとその町を見つけ出してもとの體にして貰ふんだ……新しい生活を始めるんだぜ……わしはこれから生れ變るのぢや……キング・リイアの臺詞のやうによ。ナタアシヤ、おめえは……おれの藝名を知るまい。スエルチコフ・サヲルスヂユスキイてんだ……ここにゐる奴等あ、誰も知つちやゐねえ、だあれもよ。ここにゐちやあ、おれも名なしだ……名をなくすといふことが……どんなに恥辱なことだか、おめえなんかにや、とても分かるめえ。犬でさへ、名は持つてらあ。

ナタアシヤ、靜に役者のうしろを廻りて、錠前屋の妻の寢臺の側に立ち、死人をぢつと見る。

役者。名のなきところ――人なしだ。

ナタアシヤ。御覽よ……まあ、可哀さうに……たうとう死んぢまつたんだよ。

役者。（首を振りて）そんなことあるめえ。

ナタアシヤ。（脇へどく）でも、確にさうだもの……來て御覽なね。

帽子屋。（入り來る）何を見てるんだい。

ナタアシヤ。アンナが死んぢまつたんだよ。

帽子屋。ぢやあ、もう咳もおしまひになつたね。（アンナの寢臺に歩み寄りて、一寸死人を見詰め、すぐ自

牢の監督へ行く）クレシチに知らしてやらなきやいけねえ……あいつが始末をしなきやならねえことだ。

役者。おれが行かう……おれがあいつに知らして來てやらう……アンナもたうとう名もなくなしてしまつたなあ。（退場）

ナタアシヤ。（部屋の眞ん中に立ちて、なかば獨語のやうに）あたしも……いつか……こんなになつて死んでしまふんだらう。

帽子屋。（寢床の上にごろごろになりたる古き毛布を廣げる）どうしたんだ……何をぶつぶつ言つてるんだ。

ナタアシヤ。なんでもないんだよ……ちよいと今、獨言を言つたのさ。

帽子屋。ワシリを待つてるんだな……氣をつけろよ……あいつは今におめえの頭を擲るから。

ナタアシヤ。誰にぶたれるのもおんなじさ。同じぶたれるなら、あたしやあの人にぶたれたいよ。

帽子屋。（横になる）御勝手になさいましだ……おれの知つたことぢやねえ。

ナタアシヤ。でも、アンナにとつちや……死ぬのが一番よかつたんだよ……だけど、可哀さうだねえ

——ああ、神樣……人間は何の爲に生きてゐるんでせう。

帽子屋。誰だつて何の爲に生きてるんだか分からねえ……だが、やつぱり生きてゐるんだ、人間は、生れて、暫く生きてゐて、そして死ぬんだ。おれだつて死ぬんだ……おめえだつて死ぬんだ……何

も可哀さうなわけはねえ。

巡禮、韃靼人、人足、錠前屋など入り來る。錠前屋は沈み返りて、皆々のうしろに從ふ。

ナタアシヤ。しいつ……アンナが。

人足。もう聞いた……神樣、かの女を憐れみ給へ。

韃靼人。（錠前屋に）擔ぎ出さなくちやいけねえな。玄關へ運び出さなくちやいけねえな。ここは死人を置くところぢやねえ。生きた人間の寢るところだ。

錠前屋。（小聲に）擔ぎ出さうよ。

皆々、舞臺の廻りに立つ。錠前屋、人の肩越しに妻の死骸を見守る。

人足。（韃靼人に）匂ふと思つてるんだな。大丈夫だよ……もう生きてる內にすつかり乾き切つちまつてらあ。

ナタアシヤ。まあ……だあれも可哀さうだと思つてやらないんだよ……おくやみの一言ぐらゐ誰か言つても好いぢやないの。

巡禮。怒るんぢやないよ……なあに、なんでもないことだ。死んだ人間なんかを誰が可哀さうだなどと思ふもんか。生きてる人をさへ可哀さうだとは思はないんだ……自分自身をさへ可哀さうだとは思はないんだ。どうだい。

帽子屋。（欠伸）何か言つたつて、しやうがねえぢやねえか……もう死んでしまつたんだ……なんと言つたところで助かりつこはねえんだ……病氣の間なら役にも立たうが、死んでしまつちやなんにもならねえ。

韃靼人。（脇へどく）警察へ届けなけりやいけめえ。

人足。さうよ――そりや規則だ。クレシチ、もう届けて來たのか。

錠前屋。いや。まだだ……さて、埋葬だが、おれの懐には四錢しきやねえ。

人足。届けりやあ好い……でなけりや、みんなで出し合つてやらう……五錢でも、十錢でも、身分相應に出すさ……だが、警察へは早く届けねえといけねえぜ、でねえと、撲り殺しでもしたやうに取られるぜ……でなくとも何とか又因縁をつけられちや詰まらねえ。（韃靼人の傍に横になりある寢床の方へ行き、その側へ寢る支度をする）

ナタアシヤ。（帽子屋の寢床へ行く）あたしは、きつとアンナの夢を見るよ……あたしはいつでも死んだ人の夢を見るんだもの……あら、玄關は眞つ暗よ……ひとりぢや恐いねえ。

俳優。（後より目を放さず）生きた人間を恐がるが好い。

ナタアシヤ。一緒に來ておくれよ。おぢいさん。

俳優。よし……よし……ぢやあ一緒に行つてやらう。（兩人退場。稍長き間）

人足。（欠す）ああ、ああ。（韃靼人に）もう直ぐ春が來るなあ、ハッサン……さうすりやあお互に又ちつとはお天道様が拜めるぜ。もう百姓が犁や耙をつくろつてゐる……もうぢき野らへ出かけるんだ……ふむ。ところで、おれ達は……なあ、ハッサン、もう鼾をかいてやがる。モ、ハメットめ。

帽子屋。韃靼人といふ者はよく寢るものだ。

錠前屋。（部屋の眞ん中に立つて、ぼんやり自分の前を見つめてゐる）さて、これからどうすりや好いんだ。

人足。横になつて寢るさ……それつきりの話だ。

錠前屋。（小聲に）そして……かかあは。かかあはどうすりや好いんだ。

答ふる者なし、サチンと役者、入り來る。

役者。（どなる）いよう、ぢいさん。忠節無比のケント殿。

サチン。ミクルハ・マクライの御入來だぞ……は、は。

役者。もうすつかり極めつちまつたんだ。ぢいさん、町といふのはどこにあるんだ……おめえはどこにゐるんだ。

サチン。やい、ファアタ、モルガアナ、ファンタスマゴリイ。ぢぢいはおめえを欺したんだぞ……そんな町がどこへ行つたつてあるものか。町もねえ、人間もねえ……全體、なんにもねえんだ。

役者。嘘をつけ。

韃靼人。（飛び上がる）亭主はどこにゐるんだ。亭主に會はう。寝られなきやあ、錢を取られるわけはねえんだ……死人だの……酔つぱらひだの。（急ぎ退場。サチン、うしろより口笛を吹く）

錠前屋。（寝ぼけた聲をして）みんな寝ろよ。騒いでくれるなよ……夜は寝るもんだ。

役者。ほんとだ——屍骸、ここに……死んでる奴があらあ。（頭をこする）「わが網は死人をかけぬ」つてのがあるな……ベエランジエエルの……歌の中によ。

サチン。（叫ぶ）死人にやあ聞こえねえんだ。死人にや分からねえんだ。構はねえから吠えろ、どなつてえ……だけどしかし……死人にやあ聞こえねえんだ。（戸口に巡査あらはる）

第三幕

家の間に挾まれたる明き地。ぼろ屑散らばり、雑草生ひ茂る。後景に高き煉瓦の防火壁あり、天を蔽ふ。その下に接骨木の叢。上手に角材を組み合せたる暗色の壁、庭に建てたる附屬家屋、納屋か廐の一部なるべし。下手に木賃宿の灰色の壁、そこここに漆喰僅に殘りゐる。この壁は斜になりゐて、後部の角は殆ど舞臺の中央まで突き出してゐる。この壁と防火壁との間に——狭き路次。灰色の壁に窓二つ、一は地面と同じ高さに、他はこれより凡そ四五尺高く、防火壁寄りにあり。灰色の壁に添ひて、覆へされたる大なる橇と一丈程の長き角材。上手の壁際には、古き板と鉋をかけたる角材とを積み重ねたり。夕暮。太陽は西に傾きて

防火壁の面に赤光を投ぐ。やうやう春となりしばかりにて、接骨木の黒き小枝も未だ芽を吹かず、雪尚そこここに殘りゐる。下手の角材に、ナタアシヤとナスチヤ列びて坐す。上段の板には、巡禮ルカと男爵。上手の壁の側なる角材の上には、錠前屋クレシチ坐す。低き方の窓より帽子屋ブブノフ覗きゐる。

ナスチヤ。(眼を閉ぢ、首にて話にタクトをとりつつ、唄ふが如き調子にて物語る)それで、その晩になるとその人が約束通り庭の東屋へ來て下さる……あたしは、恐いのと悲しいので慄へながら長い間待つてゐたのだよ。その人も、體中がぶるぶる慄へてゐて、顔にはもう血の氣がない。でも、手にはピストルを持つてゐたのだよ。

ナタアシヤ。(向日葵の種を嚙みゐる)まあ、なんだつて、學生さんてものは、みんな氣違ひだねえ。

ナスチヤ。そして、恐ろしい聲をして言ふには、わが最愛なる戀人よ。

帽子屋。は、は。「最愛なる」と言つたかい。

男爵。靜にしろ。默つて嘘をつかせろよ――聞きたくなきや聞くに及ばねえんだ……それからどうしたい。

ナスチヤ。わが心の限り愛するものよ、わが黄金の寶よ、とその人が言ふのだよ。僕の兩親は僕が君と結婚することを許して呉れない……そして、僕が君と手を切らなければ呪ふと言つて嚇かすのだ。だから僕は死ぬより外はない。かうその人は言ふのだよ……その人のピストルは大變大きなので、

だが十も入つてゐたのだよ……然様なら、わが親愛なる心の友よ。僕の決心は曲げることが出来ない……僕は君といふ者なしには、生きてゐられない。とその人は又言ふのだよ。そこで、あたしはかう返事をしたのだよ。忘れ難なの友よ……ラウウリよ。

帽子屋。（驚きて）なんだと……クラウルぢやねえか。

男爵。（笑ふ）ナスチャ、間違つたぜ。こなひだはガストンて言つたぞ。

ナスチャ。（飛び上る）お黙り……ごろつき……宿なし。一體お前達に戀といふものがどんなものだか判つてるのかい……眞實な、純潔な戀がどんなものか……あたしは……あたしはその純潔な戀を味はつたのだよ。（男爵に）やい、泣蟲……それでもお前は教育のある人間かい……それでもむかし床の中で珈琲を飲んだ人かい。

巡禮。まあ辛抱して聞いてお遣り。女の子をおいぢめでない……何を話してゐるかといふことよりはなぜこんな話をするかといふところを見てやると好いんだ。さあ、ナスチャ、構はずに話した……構ふもんか。

帽子屋。構はずに羽根を伸めろ、鳥……さあ始めた。

男爵。やれ、やれ。

ナスチャ。あんな人達にお構ひでないよ……一體あの人達はなんだい。妬けるからだよ……なんに

も自分に話すことがないからだよ。

ナスチヤ。（また坐る）いや……もう話さない……みんながほんとにしないで……笑ふんなら。（突然調を切り、二三秒の間沈默して、再び眼を閉ぢ、手にて又話のタクトを取りつつ、聲高に、口早に、語り續ける。遠くに音樂聞こゆ）それから、あたしはかう返事をしたのだよ。わが生の歡びなる君よ。わが光り輝く星よ。あたし、とてもあなたが無くては生きてはゐられません……あたしは氣ちがひのやうにあなたを愛してゐます。この胸に心臟が鼓動を打つてゐる限りは、いつまでも、いつまでも、愛してゐます。併し、あなたのお若い命を絶つことは、どうぞやめて下さい……なぜと言へば、あなたの大事な御兩親は、あなたを唯一の樂にしておゐでなさるのです——御兩親にとつては、あなたは無くてはならぬお方なのです……どうぞあたしを捨てて下さい。あたしはあなたを戀ひ焦れて、死んでしまつた方が好いのです……あたしに寂しい……あたしは——獨りぼつちです……どうか、あたしに死なせて下さい……あたしが死んだつて、なんでもありません……あたしはなんにも出來ないんですもの……あたしは、なんにも取柄がないんですもの……ほんとに、なんにもないんですもの。

（手にて顏を蔽ひ、靜に泣く）

ナタアシヤ。（ナスチヤの側へ寄りて、靜に）泣かなくても好いわ。

巡禮、笑ひながらナスチヤの頭を撫づ。

帽子屋。（大聲にて笑ふ）馬鹿馬鹿しい……なんでえ。

男爵。（同じく笑ふ）おい、おいさん……おめえはそいつの話すことをほんとにするのかい。みんな、あの本に書いてあるんだぜ……「宿縁」て奴によ……くだらねえことばかり書いてあるんだ。ほつとくが好いや。

ナタアシヤ。お前さんの知つたことぢやないよ。默つといでよ。默つといでな。罰あたり。

ナスチヤ。（怒りて）馬鹿。お前の魂はどこにあるんだい。

巡禮。（ナスチヤの手を取りて）さあ、さあ、さう怒るもんぢやない……なんと言はれたつて、構ふものかな……わしにはよく分かつてゐる……わしはお前さんを信じてゐる……お前さんの方が、正しいんだよ。あの人達は間違つてるんだ……お前さんが自分でさうだと信じてゐれば、それでもう、さういふ……高尚な戀をしたに相違ないんだ……確だとも。それや、確だとも。お前さんの……好い人に、さうひどく當るものぢやない……あの人が笑つたのは、多分そのなんだよ、ただ……その……妬けたからだ……きつと、これまでに、自分が一度も、純潔な戀を味はつたことがないからさ……さうだよ。確にさうだえ。

ナスチヤ。（自分の手を胸におしつけて）おおいさん。全く……ほんとなのよ。みんな、ほんとなのよ……その書生さんは獨逸人だつたの……ガストンミヤつてね……可愛らしい黑い髭のある人でね

……いつでも塗り靴をはいてゐるんだよ……それが嘘なら、あたしの首をとつても好い。そして、まあ、どんなにあたしを可愛がつてくれたらう……まあ、どんなに可愛がつてくれたらう。

巡禮。さうだらうとも。もうなんにもお言ひでない。わしはお前さんを信じてゐる。で、成程、塗り靴をはいてゐたんだね。成程、成程、それで、無論お前さんもその人を愛してゐたんだ。

兩人、角を廻りて退場。

男爵。馬鹿な女だ。お人よしだが、馬鹿な奴だ……たまらねえ程馬鹿な奴だ。

帽子屋。どうしてあありべつに嘘がつけたもんだらう。豫審廷へでも出たやうによ。

ナタアシヤ。でも、嘘のことがほんとのことより面白いに違ひないわ……あたしだつて。

男爵。「あたしだつて。」どうたんだ。あとを言へ。

ナタアシヤ。あたしだつて、いろんなことを考へて見るわ……考へて見て……待つてゐるわ。

男爵。何をよ。

ナタアシヤ。(困つて笑ふ)それはねえ……まあ、かう思ふのさ……あしたになると、きつと誰か來る……誰か、知らない人が……でなければ、何かある……何か、今まで無かつたやうなことがある……わたしは、もう隨分永い間、それを待つてゐるのよ……今でもまだ、待つてゐるわ……でも、結局……

……それがはつきり見える段になると……當てにしてゐた程大きなものぢやないかも知れない。

稍長き間。

男爵。（笑ひながら）當てにすることの出來るものが、一つだつてあるものかな……少くともおれは——なんにも當てにしちやゐねえ。おれにとつちやあ……みんな一度宛あつたことだ。みんな過去よ……結局なあ……それがどうした。

ナタアシヤ。あたしは、また時々こんなことを考へるの。あした……あたしは不意に死んぢまふんぢやないかしらつて……するともう、恐ろしくてたまらなくなつて來るの……夏になると、よく人は死ぬことを考へるわねえ……そら、夕方が來る……いつ……雷樣に落ちて來られるか分かりやしないわ。

男爵。おめえの生活も樂ぢやねえな……姉があゝいふ惡魔だからな。

ナタアシヤ。だあれも樂な生活をしてゐる人はないわ、みんな苦しんでゐるわ。あたしの知つてゐるだけぢやあ。

錠前屋。（これまで、動かず、仲間に入らず、横になりゐたるが、急に飛び上がる）みんなだと。嘘をつけ。みんなぢやねえ。みんなが苦しいなら……それで好いんだ……少しも愚痴を言ふこたあねえんだ。

帽子屋。おい。氣でも違つたのかい。なんだつて急に吠え出すんだ。

錠前屋、再び横になり、空を見つめる。

男爵。だが、ナステニカ先生どうしてるか、ちよいと見て來なくちや……仲直りをしなくちやならねえからな……でねえと、酒代に差支へらあ。

帽子屋。人間といふ奴は、嘘をつかずにやゐられねえものと見える……おりやナスチヤですつかり分かつてしまつた。塗りたてるなあ、あいつの癖だ……そこで、魂までも塗り立てようとしやがるんだ……あの小さな魂を眞つ赤に塗らうとするんだ……だが、他の奴等までが——なぜ又嘘をつくんだらう。例へばルカぢぢいだ……あいつは何でも話にしてしまやあがる……それが何の役に立つんだ……なぜあいつはしよつちう嘘をつくんだらう……あの年をしてよ。

男爵。笑ひながら、角の方へ行く）おれ達は、みんな……灰色の魂を持つてゐるんだ……ちつとは赤く塗りたくなる奴よ。

巡禮。（角のうしろより現る）おい、男爵——なぜあの子をいぢめるんだ。うつちやつて置けよ。あの子は時間をつぶす爲に泣くんだ……樂しみに涙を流すんだ……それがお前さんの害になるのかい。

男爵、あいつは馬鹿なんだ、ぢいさん。とても我慢が出來ねえんだ……けふは、ラウゥリだ、あしたはガストンだ……それで話はいつまで立つても同じなんだ。だが、それはそれとして——仲直りをして來なくちやならねえ。（退場）

巡禮。早く行つて、あの子に親切にしてお遣りよ……誰にでも親切にしてお遣りよ——だあれもいぢめちやいけないよ。

ナタアシヤ。お前さんは好い人だねえ、おぢいさん……お前さんはどうしてさう好い人なの。

巡禮。わしが好い人だと言ふのかい……ほんとにさうならいいが。（赤き壁のうしろに俄しき唱歌と手風琴の曲聞ゆ）さあ、娘さん——あすこにも好い人が一人ゐるに違ひない……われわれは人類全體に對して、憐れみの心を持たなくてはならない。例へば基督だ、ね——基督は凡ての人を憐れみ給うた、そしてわれわれにもさうせよと仰せられた……人を憐んでやるには時がある——その時を外さないやうにするが好い。それに就いて、わしにかういふ話がある。わしは以前シベリアのトムスクから餘り離れてゐないところにある、或別莊の番人に雇はれてゐたことがあつた。それは西伯利の別莊だつたがな……素敵なところでの……森の眞ん中に建物があるんだ、どこへも交通のない、誠に寂しいところだつた……なんでも冬のことでの。人間といつたら、その寂しい別莊にわし一人だつた……素敵だつたなあ、あすこは……實に好いところだつた。ところが或日のこと……誰だか外から這ひ登つて來る奴がある。

ナタアシヤ。泥坊。

巡禮。さうだ。段々近くへ這ひ登つて來るやうだから、わしは鐵砲を持つて表へ出た……見ると二人

の男だ……丁度窓をこぢあけてゐるところだつたが、もうそれに夢中で、すぐ側にわしが來てゐるのに、一向氣が附かない。そこで、わしはどなりつけてやつた。やい、うしやあがれ、とね……すると、二人は手斧を振りかざして、わしに掛かつて來た。それから、わしは轉かしてやつた。よせ。よさないと、撃ち殺すぞ……さう言ひながら一人一人狙つて見せたものだから、二人は直ぐ跪いてしまつた。どうか御勘辨をと、もうぶるぶるしてゐるんだ。ところが、その時、わしは餘つ程癪に障つたんだな……その、手斧の一件でさ。で、わしはかうどなつてやつた。森の悪魔め！ おれがうしやあがれと言つたのに――てめえ達は逃げて行かねえんだ……さあ、てめえ達の內、どつちか一人、あすこの叢へ行つて、何か笞になりさうなものを取つて來い。すると一人が取つて來た。そこで、わしは又命令したもんだ。さあ、一人橫になれ、も一人はそれを打て。そこで二人はわしの命令通りに、その笞で打ちつこをした。お互に散々ぶたれてしまふと、わしに向つてから言ふんだ。おぢいさん、どうぞ助けると思つてパンを一片おくんなさい。これつぽちもお腹ん中にはひつてゐないんですから、と、かうだ。どうだらう、娘さん、これが泥坊なんだぜ。（笑ふ）手斧を振りかざして人に掛かつて來た泥坊なんだぜ。さうさ……なかなか立派な奴等だつたよ。それから、わしは二人にそいつて遣つた。やい、悪魔め。パンが欲しいなら、なぜ初めからパンをくれと言つて來ねえんだ。すると、その返事がかうだ。わつちどもはもう散々それをやつたのです……おくんなさ

い、おくんなさいつて、幾度方々で頼んだか知れやしません。でも、誰もなんにも呉れないんです……もう我慢しきれなくなつたんです……な、まあそんなわけで、二人はその冬中わしのところになることになつた。一人はステパンといふ奴だつたが、よく鐵砲を擔いぢやあ森の中へ行つたよ……もう一人はヤコブといふ奴だつたが、この方はしよつちう體が悪くて咳ばかりしてゐたつけ……つまり、それからは、二人で別荘番をしてゐたわけさ。やがて春になると、然樣なら、おぢいさんと言つてな、二人は露西亞の方へ行つてしまつた。

ナタアシヤ。懲役人の逃げ出したのかも知れなかつたねえ。

巡禮。うむ……逃亡者には違ひない……いづれ自分の植民地を逃げ出して來たのだ……なかなか立派な奴だつたよ……ほんとに、わしが情れんでやらなかつたら――どんなことになつたか知れたもんぢやない。きつと、わしを叩き殺して……また法廷へ引張り出されて、牢屋へぶち込まれて、やがてシベリアへ送られたに違ひない……さうなつたつて、それが何になる。牢屋へはひつたつて、決して好いことを覺えやしない、シベリアだつて同じことだ……併し、人間なら――きつと何か教へてくれる。人間なら――きつと何か好いことを教へてくれる……至極やさしくな。

稍長き間。

帽子屋。ふむ――成程。だが、おれは……どうしても嘘がつけねえ。いつでも眞實をさらけ出す。こ

れがおれの考へだ。お氣に召さうと召すまいと、それはおれの知つたことぢやねえ。なんの遠慮が入るものか。

錠前屋。(何かに刺されたやうに、突然飛び上がつて、どなる) 眞實とは何だ。どこに眞實がある。(ぼろぼろになりたる衣服を手にて叩く) 眞實はここにあるんだ――ここによ。爲事がねえ……手にも足にも力がねえ――これが眞實だ。賴るべがねえ、落ちつくところがねえ……もう死ななきやならねえ――これがおめえの言ふ呪ふべき眞實だ。それが……それが何になるんだ。そんな――眞實がよ。ちよつとでも好いから、樂に息をさせてくれ……息をさせてくれ。一體おれが何を惡いことをしたんだ……眞實が何の役に立つ。畜生め。おれは生きてゐられねえんだ……生きてゐられねえんだ……これが眞實だ。

帽子屋。見ろ……あいつは胸が一ぱいなんだ。

巡禮。おう……おう……それで。

錠前屋。(眞蒼して慄へゐる) おめえ達は口さへ明きやあ、眞實、眞實と言ふ。なあ、ぢいさん――おめえは誰でも可愛がる……ところがおれは誰でも憎い。これも眞實だ。眞實は呪ふべきものだ。分かつたかい。眞實は呪ふべきものだよ。(見返り見返り、角を廻りて、急ぎ退場)

巡禮。おや、おや。たうとうあいつ氣が違つてしまつた……あんなに急いで、どこへ行つたんだらう。

ナタアシヤ。氣違ひのやうにあばれて行つたよ。

帽子屋。うまくやるぜ。まるで芝居だ。よくある奴よ……まだ世間れねえ人間にはな。

ペペル。（扉に所の陰より出で來る）こんちは。よう、おいさん――まだおしやべりか。

巡禮。今ここで恐ろしくどなつてゐた奴があるんだ、それを見せたかつたな。

ペペル。クレシチの奴だらう。一體どうしたんだ。あいつは、火傷でもしたやうに、人の側を驅け拔けて行きやあがつた。

巡禮。お前さんだつて、ああ思ひつめりやあ……ああなるさ。

ペペル。（坐る）あいつ位嫌な奴はねえ……意地の悪い奴だ。高慢な奴だ。（クレシチの眞似をする）「おれは働いてる人間だ」自分より他の奴は、みんな自分より劣等だと言はねえばかりだ……面白けりや、自分ひとりで働くがいいや……何もそれを自慢するには當らねえ。働くか働かねえかで、人間の相場がきまるもんなら……馬にかなふ人間はねえ……馬は荷車を引かあ――それで愚痴一つこぼしやしねえや。ナタアシヤ、内の奴等はゐるのかい。

ナタアシヤ。みんな墓地へ行つたよ……それからお寺へ廻るんだつて。

ペペル。ぢやあおめえ閑（ひま）なんだな……珍しいこつた。

巡禮。（靜に、思ふところあるらしく帽子屋に）お前さんは眞實といふことをよく言ふが……眞實といふも

のは、決して何の病氣にでも利くといふ藥ぢやない……眞實さへ持つて行けば、いつでも魂の療治が出來るわけのものぢやない。例へて言ふと、かういふ場合だ。わしの知つてる人に正義の國を信じてゐる人があつたが。

帽子屋。なにを。

巡禮。正義の國さ。その男の言ふには、この世の中には、きつとどこかに正義の國がある……その國には特別な人間が住んでゐる……尊敬し合ひ、助け合ふ、立派な人間が住んでゐる……その國へ行くと、何でも好い、何でも美しい。そこで、この男は、この正義の國を探しに行かうと、しよつちうさう思つてゐた……ところが、この男は貧乏で、とかく不仕合せだつた……しまひにはもう、寢ころんで死を待つより外しやうがないといふまで困つて來た――それでも奴さん、まだ勇氣を失はなかつた。時々獨笑をしちやあ獨語を言つてゐる。なあに何でもない――おれは堪へて見せる。もう少うし待てば好いんだ――さうすりや、もうこんな生活はうつちやつてしまつて、正義の國へ行けるんだ……これがその男の唯一の樂しみだつたんだ――その正義の國が。

ペーペル。成程、それで。たうとうそこへ行つたかい。

帽子屋。どこへよ。は、は、は。

巡禮。すると、丁度その時、その土地へ――一體これはシベリアであつた話だ――或男が追放されて

來た。それが學者でね……本だの、地圖だの、いろんな道具だのを擔いで來た……すると今の病人は、早速その學者の所へ出かけて行つて、一體正義の國はどこにあるのです、どうしたらそこへ行けるのです。どうか教へて下さいましと言つたもんだ。そこで學者先生、早速本を開いた、地圖を廣げた……それから、探したわ、探したわ……だが、正義の國はどこにもない。他のことはみんな正確に出てゐる。どこの國でもみんな書いてある――ただ正義の國だけがどうしても見えない。

ペペル。（やさしく）無かつたかい。本當に無かつたかい。

帽子屋。（聲高に笑ふ）

ナタアシャ。お前さん何を笑ふの。さあ、おぢいさん、それからどうして。

巡禮。ところが、その男は――學者の言ふことを信じない……なあに、きつとそこに出てゐるに違ひありません……何でも好いから、もつと見て下さいましと、かう言ふんだ。若し正義の國が出てゐないのなら、あなたの本や地圖は一文の値打もないのです、とかう言ふぢやないか。これには學者先生も少しは侮辱を感じたんだね。わしの地圖はどこまでも正確だ。全體正義の國などといふものはどこにも無いのだと、かう言つたものだ――さあ、片つぽはすつかり怒つてしまつた。なんだと……今までおれが、永い、永い、永い間、辛抱に辛抱を重ねて生きて來たのも、畢竟どこかにさういふ國があると信じてゐたからだ。ところが貴樣の地圖によると、全然そんなところはないんだ。そり

やあ泥坊も同じこつた……かう言ふかと思ふと又、やい、ろくでなしめ。貴樣は詐欺だ。學者ぢやねえ。かうどなりつけて、學者の頭をがあんと一つ食はした。やがて又があんと一つな。（暫時沈默）そして家へ歸ると首を縊つてしまつた。

一同沈默。巡禮、默つてペペルとナタアシヤとを見つめる。

ペペル。（小聲に）なんだ、つまらねえ……面白くもなんともねえ話だ。

ナタアシヤ。迷を解かれて……それに勝つことが出來なかつたんだね。

帽子屋。（意地惡く）みんな、作り話よ。

ペペル。ふむ――成程……そこでたうとう正義の國へ行けたわけだな……この世ぢやちよいと見つかりさうもねえからな。

ナタアシヤ。でも可哀さうだわ……氣の毒な人ねえ。

帽子屋。みんな。こしらへ事よ……へ、へ。正義の國か……なんだつてそんなとこへ行きたがりやあがるんだ。へ、へ、へ。（窓より消える）

巡禮。（窓の方を見て、頷く）笑つてるな。ははあ。（稍長き間）ぢやあ、皆さん、御機嫌よう。わしはもうぢきここを立つ。

ペペル。どつちの方へ旅をするんだ。

巡礼。小露西亜の方へさ……あすこでは、新しい信仰が興つたといふ話だ……どういふものだか、まあ見て来ようと思つてな……さうさ……人間といふ者は、少しでも好いものを好いものをと、しよつちゆう求めてゐるものだ……神よ、人間に忍耐を與へ給へ。

ハヽヽ。だが、どうだ……見つかるかな。

巡礼。遂に——人間にかい。確に見つかるね。求める者にはきつと見つかる——熱心に求める者にはきつと見つかるさ。

ナタアシヤ。さういふ人には、何か見つかるやうにしてやりたいねえ……何か好いものゝ見つかるやうにしてやりたいねえ。

巡礼。きつと見つかるには見つかるよ。だが力を貸してやらなくちやいけない……ね、嬢さん……さういふ人達を尊敬してやらなくちやいけない。

ナタアシヤ。あたしや、とても力なんか貸せやしないわ……あたしは自分が……力を貸して貰ひたい身の上なんだもの。

ペペル。（しつかりした調子にて）おい、ナタアシヤ……おれはおめえに話すことがある……ぢいさんのゐる前で……ぢいさんは何もかも知つてるんだ……おいらと一緒においでよ。

ナタアシヤ。どこへ。監獄へかい。

ペペル。おいらが泥坊をよすつて話は、もう疾うからおめえにしてあるぢやねえか。神に誓つて——おれは廢す——おれが一度言つた以上は、けつして間違ひはねえ。これでも讀み書き一通りは習つたんだから……暮らし位は樂に立てて見せらあ。（巡禮の方へ首を動かして）ぢいさんは、シベリアでそれを遣つて見ろと言ふんだ……喜んで行けさうなもんだと言ふんだ……おめえどう思ふ——行かうか。おりやもうつくづく今の生活が厭になつたんだ。なあ、ナタアシヤ。世間には、おいらより餘計に盜つとをする奴が澤山ゐるんだ——しかも、そいつ等は世間から尊敬されてゐるんだ……おいらはそれを考へて、今まではまあ自分を慰めて來たんだが……結局、それが何になる。なんにもなりやしねえ。おいらは後悔なんかはしねえ……良心なんてものも信じねえ……だが、唯一つ感じてることがある。それは生活を變へなきやならねえといふことだ。もつと好い生活をしなけりやいけねえ。自分で自分の尊敬出來るやうな……さういふ生活をしなけりやいけねえ。

巡禮。その通りだ。神よ共にゐませ……主よ、守りたまへ。お前さんの言ふ通りだ。人間は、自分で自分を尊敬しなくちやならない。

ペペル。おいらは餓鬼の時分から、泥坊、泥坊で育つて來たんだ……いつでも呼ばれるのが、掏摸のワシカだ。泥坊の子ワシカだ。ようし、世間がさう註文するなら構はねえ……世間の註文通り泥坊になつてやる……おいらが泥坊になつたのは、世間に對する恨みからだ……誰もおいらを泥坊と言

けねえでくれる人がなかつたからだ……ナタアシャ、おめえはもうおれのことを、泥坊とは言ふめえな……ええ。

ナタアシャ。（沈んで）どうだか、まだほんとには出来ないわ……詞は詞だもの……それに……どうしたんだか……けふは胸がどきどきして……気が沈んでしやうがないの……何か悪いことがありさうなんだよ。ワシカ、なんだつて、けふはそんなことを言ひ出してくれたの。

ペペル。おやあ、いつ話せばいいんだ。この話はけふ始めてしたわけぢやねえよ。

ナタアシャ。なぜ、あたし、お前さんと一緒に行かなきやならないの。あたしはお前さんが好きだけれど——好きで好きでたまらないといふ程ぢやないわ……そりや時々は、ほんとにお前さんが好きになるけれど——またお前さんの顔を見るのさへ厭になることもあるわ。いつでも——好きだと思つてるわけぢやないわ……ほんとの戀なら、相手の傷なんか見えなくなる筈だけれど……あたしには、お前さんの傷がわかるんだもの。

ペペル。なあに、ぢきおいらが好きになるよ、ちつとも心配はねえ。ぢきおいらに馴れて来るから……まあ、うん、と言ひねえ。一年以上も、おれはおめえを見てゐたんだ、そして、おめえがしつかりした娘だ……正直な、人情のある女だといふことがわかつたんだ……そこで心底（しんそこ）から、おれはおめえに惚れたんだ。

主婦リシリイサ、餘所行の儘にて、高き方の窓に現れ、窓の柱に體を押しつけて凝視す。

ナタアシヤ。そんなに……お前さんはあたしを可愛がつてくれるの、ぢやあ姉さんは。

ペペル。(狼狽して)あんな女はどうだつて好いんだ。あんな奴等は何でもねえ。

巡禮。構ふもんか、娘さん。パンのない時や……蕪でも食べるよ。

ペペル。(陰鬱に)おれを可哀さうだと思つてくれ。おれが今までやつてゐた生活は、決して暢氣なものぢやねえ――何一つ樂はなしよ、狼のやうに追ひこくられ通しでよ……沼へでも落つこちた人のやうに……手に掴む物といつたら、みんな腐つたものばかりで……頼りになる物はなんにもねえんだ……前にはおめえの姉さんがあんなでなければと思つた……あいつがあんなに貪慾でなければ――おいらはあいつの爲に……どんな危險でも冒したらうと思ふ。おれをほんとに信じてくれるんならなあ……だが、あいつの心は他のものへ向いてゐるんだ……ただ大事なのは金なんだ……自由なんだ……自由に焦れるのも、もつと道樂がしたいからだ。あれぢやあ、おいらの助けにやあならねえ……だが、おめえは――若い樅の木だ、刺はあるが頼りにはなる。

巡禮。娘さん、承知してお遣り、承知してお遣り。好い人間だぜ。かういふ男には、自分が好い人間だといふことを、しよつちう思はせるやうにしてやらなけりやいけない……決してそれを忘れないやうにな。すると、ぢきにお前さんの言ふことを信じて來る。時々唯かう言や好いのだ。「ワアシヤ。お

前さんは善人なんだよ……それをお忘れでない。」とね。まあ、考へて御覧――お前さんには外にとるべき道はないぢやないか。お前さんの姉さん――あれは獣だ。あれの亭主だつて――どつちも褒めたところのない人間だ。何と言つて好いか分からない程劣等な奴だ……それから、ここ全體の生活……どこにお前さんの進める道があるんだ……だが、ワシカは……立派な男だ。

ナタアシヤ　進める道のないことは……あたしだつて知つてるわ……自分でも、もう疾うから考へてゐたんだもの……でも、あたし……誰も信用しないわ……進める道はないわ。

ペペル　たつた一つあるんだ……おらあおめえにそれより外の道を取らせたくねえんだ……その位なら、おれはおめえを殺してしまはあ。

ナタアシヤ　まあ、ワーシヤ……あたしはまだお前さんのお上さんぢやないんだよ、それだのに、もう殺すのなんのつて。

ペペル　おれを抱きな、「うん。」と言ひな、ナタアシヤ、もううまい工合になるんだ

ナタアシヤ　（ペペルに縋りつつ）でもねえ……たつた一つ言つとくことがあるわ……一度でもあたしをぶつたり――あたしを馬鹿にしたら……もうおしまひだよ……あたしや首を縊つてしまふか、てなきやあ。

ペペル　ちよいとでも、おめえに觸つて見ねえ、この手は腐つてしまはあ。

巡禮。大丈夫だよ、娘さん、この男の言ふことは本當なんだよ。お前さんにとつてこの男がなくちやならない人だといふより、この男にとつて、お前さんはなくちやならない人なんだ。

主婦。（窓より）さあ、それで約束が出來た。神樣、あの二人(ふたり)に和合と愛とを授けて下さいまし。

ナタアシヤ。あら、もう歸つて來てゐたの……まあ、お前さんは見てゐたの……ああ、ワシカ。

ペーペル　何もびくつくことはねえ。もうおめえに指一つささしやしねえから。

主婦。安心しといで、ナタアシヤ。その人は決してぶつたりなんかしやしないから……ぶちもしなきや可愛がりもしないから……あたしや知つてるよ。

巡禮。（小聲に）ああ、何といふ女だらう……まるで毒蛇だ。

主婦。その人は口先ばかり達者なんだよ。

亭主。（入り來る）ナタアシヤ。こんなところで何をしてるんだ、怠け者め。又おしやべりか。大方(おほかた)、身内(みうち)の惡口でもきいてやがつたんだらう。サマワルはほつたらかしでよ、テエブルは散らかしつぱなしでよ。

ナタアシヤ。（行きながら）お前さん達はお寺へ廻つたぢやないの。

亭主。おれ達がどこへ行かうと、てめえの世話にやならねえ。てめえは自分の役目をしてりや好いんだ……言ひつけられたことをしてりや好いんだ。

ペペル。黙れ。この女はもうてめえんとこの女中ぢやねえ……ナタアシャ、動くな……指一本だつて動かすんぢやねえぞ。

ナタアシャ。そんな口をお利きでないよ……まだそんな口を利くのは早いわ。（退場）

ペペル。（亭主に）もう沢山だ。てめえ達はもう散々あの可哀さうな娘をいぢめ抜きやがつたんだ。あいつはもうおれのものだ。

亭主。てめえのものだと。いつ買つたんだ。いくら払つた。

　主婦、窓際に笑ふ。

巡査。ワアシヤ。あつちへ行けよ。

ペペル。てめえおれの言ふことを冗談にするな。泣かねえ用心をしろ。

主婦。なんだつて。おう恐い。（笑ふ）

巡査。あつちへ行けよ、ワシカ。あいつはお前を嘲けてゐるんだ……喰つついてゐるんだ——分からないのかい。ええ。

ペペル。おまあ……さうか。（主婦に）大丈夫だ。てめえの思ふやうにやならねえんだから。

主婦。だが又、あたしの思はないやうにもならないのさ。

ペペル。（拳にて女を嚇す）見ろ。（退場）

主婦。（窓より姿を隠しながら）今に立派な婚禮をさせてあげるよ。
亭主。（巡禮の方へ進む）よう、何をしてるな。
巡禮。なんにもしちやゐない。
亭主。ふむ……おめえもう出かけるさうだな。
巡禮。愈出かけるよ。
亭主。どこへね。
巡禮。眼の向いた方へ。
亭主。また方々うろつくのか……おめえは餘つ程尻の落ちつかねえ男と見える。
巡禮。石動かざれば水流れずといふ諺があるて。
亭主。石ならさうかも知れねえ。だが、人間といふものは、一つ所にぢつとしてゐるもんだ。人間といふものは、臺所の油蟲のやうに、さうやたらに歩き廻れるもんぢやねえ……今ここにゐるかと思ふと、直ぐあつちへ行つてしまふといふ風にな……人間といふものは家と名のつけられる場所を持つてなくちやならねえもんだ……さう當てもなしに地面の上を匍ひ廻れるもんぢやねえ。
巡禮。おやあ、若し——どこへ行つても落ちつく人間があるとしたら。
亭主。さうすりや、そいつは浮浪人だ……ろくでなしだ……人間といふものは、何かの役に立たなく

ちやならねえ……他がなくちやならねえ。

巡禮。なんだつて。

亭主。さうとも。でなくて、どうするものか……おめえは自分で、旅の者だ、巡禮だとよく言ふが……巡禮に義理も何だ。巡禮たあ、自分獨特の道を歩く人間だ——人とは違つたところのある人間だ……例へ——若し本當の巡禮なら……別に人の爲にならねえことを何か知つたとしても……よしそれが眞實であつても……眞實といふ奴は一向人の爲にならねえものだから……その眞實を自分で默つといて——默つてゐてくれる筈だ、ほんとの巡禮なら——きつと默つてゐる。でなけりや、誰にも分からねえやうに話す……さういふ巡禮は惡といふものを持つてゐねえ。人のことに決して首を突つ込まねえ。人に氣を揉ませるやうなこともしねえ……人がどんな生活をしてゐようと——そんなことはちつとも構はねえんだ——さういふ巡禮は少しもやましくねえ、眞つ當な生活をする——人も人のゐないやうな森や荒野を指して行く。誰の邪魔もしねえ、誰を咎めもしねえ……そして、みんなの爲に祈る……この世のあらゆる罪人の爲に祈る……おれの爲にも、おめえの爲にも……あらゆる人の爲によ。つまり人生の空虚な喧噪に避けるんだな。さうだ。（稍長き間）そこで、おめえは——どういふ巡禮なんだ——おめえは旅行券を持つてゐねえ——普通の人間なら、旅行券を持つてゐなくちやならねえ……まともな人間なら旅行券を持つてゐるからね……ほんとにさ。

巡禮　人民といふものもあれば――人間といふものもある。

亭主。冗談は廢しにしてくれ。謎なんか掛けるない……おれはおめえの太鼓持ぢやねえ……なんのこつた、おめえの言ふ――人民だの人間だのといふなあ。

巡禮。何が謎なもんか。わしはかう言ふんだ――種を蒔く値打のねえ、石ばかりの畠もあれば……又よく肥えた畠もある……肥えた畠には何を蒔いても――きつとよく實るんだ……さうなんだ。

亭主。ふうむ。それがどうしたんだ。

巡禮。例へばお前だ……たとへ神樣御自身がお前に、ミハイロ、人間になれ、とおつしやつたところで……それはなんにもならない、それは、何の役にも立たない……お前さんは、いつまで立つても今の儘で、けつして變りつこはない。

亭主。言つたな……おめえはおれの嬶の伯父さんが、警察へ出てゐることを知つてゐるか。若し、おれが。

主婦。（入り來る）ミハイロ・イワニッチ、お茶を飲みにおいでよ。

亭主。（巡禮に）やい――うしやあがれ。おれの内を出て行け。

主婦。さうだ、背護をしよやがれ、ぢぢい……一體お前の舌は長過ぎるよ……大方逃亡でもして來た懲役人なんだらう……何だか分かつたものぢやありやしない。

亭主。けふにもここから消えうせろ。でなけりや……見ろ。

巡禮。でなけりや、伯父を呼ぶだらう。呼ぶが好い。言ふがいい。伯父さん、あすこに御役人がゐるから、お捕へなすつてね。すると伯父さんが褒美にありつかあ……大枚三錢といふ。

帽子屋。(低い方の寢床より) どんな仕事があるんだ。なんだい――三錢といふなあ。

巡禮。おれを賣らうと言ふのよ。

主婦。(亭主に) さあ、もう行かうよ。

帽子屋。([illegible]) 氣をつけるよ、おいさん……惡くすると一錢で賣られるぜ。

亭主。(帽子屋に) 窓の下の聖像の樣に……何をそんなところから覗いてゐやがるんだ。(主婦と共に、出て行きさうにする)

主婦。世の中にはまあ、どの位ころつきだの、嘘つきだのがゐるんだらう。

巡禮。宜しう召し上がれ。

主婦。(巡禮の方を振り向きて) 默つてゐ……毒茸め。(亭主と共に、角をまがりて退場)

巡禮。今晩――わしは立つ。

帽子屋。それが好い。人間はうまい時に出かけるのが一番だ。

巡禮。ほんとうにさうだね。

帽子屋。おれは經驗があつて言ふんだ。おれも一度うまい時に逃げ出したことがある。お蔭で牢屋へはひらないで濟んだ。

巡査。なんだつて。

帽子屋。本當だよ。全體かういふ譯だ。おれの嬶(かかあ)が內の職人と乳くりやがつたんだ……そいつが又、職人の中でも、中々腕のある野郎でね……犬の皮から綺麗な白熊の皮をこしらへるんだ……猫の皮を染めて、カンガルウの皮にするんだ……麝香鼠にするんだ……何にでもお好み次第なものにするんだ。中々器用な奴だつたよ。そいつと、おれの嬶がくつつきやあがつたんだ……あんまりな夢中になりやうだつたから、若しやおれに毒でも食はせやしめえか、それともどうかしておれを無い者にしやあしめえかと思つて、一刻も氣の安まる時はなかつたよ。おれは、幾度も嬶をなぐつた……するとその職人の野郎が又おれをなぐるんだ……隨分ひどい撲(なぐ)りやうをしやあがつた。或時なんかは、おれの髭を半分から毟(むし)り取りやあがつた、そして肋骨(あばらぼね)を一本折りやあがつた。なぐり返されて見ると、おれもおとなしくちやゐられねえ……鐵の尺度(ものさし)で嬶の頭をがんと一つ食(くら)はしてやつた……まあ、始終夫婦で戰爭をしてゐたんだね。たうとうおれは考へた。これぢやあとても駄目だ……おれの方が負けるばかりだ、とね。そこで、おれは嬶を遣つつける謀(はかりごと)をめぐらした……それともうすつかり決心をつけた。ところが、うまい時に不圖おれは自分に歸つた——そして、逃げ出した。

男爵。その方がよかつた。二人の奴にやあ、相變らず、犬から白燕をこしらへさせて置くさ。

帽子屋。つまらねえことには、工場が嬶の名義になつてゐたんだ……おらあ着のみ着の儘さ。尤も正直な話、よし工場を持つてゐたところで、いづれ飲み潰してしまつたに相違ねえんだ……おれは素的な飲み助だからな。

男爵。素敵な飲み助だつて。

帽子屋。さうよ、素的な飲み助だ。おれが本式に飲み出したら、すつ裸になるまで、何でもかでも飲みつくしまふんだ……そして、それから怠け出すんだ……おらあ働く程恐ろしいことはねえ。

（サチンと役者、爭ひながら登場。）

サチン。馬鹿言へ。どこへ行けるものか……馬鹿々々しいことばかり言つてやがる。おい、おらい——おめえこの泣蟲にどんな火をつけたんだ。

役者。馬鹿言へ。ぢいさん。そいつて違つてくれ、馬鹿言ふなつて。おれは本當に行くんだ。おれはけふ働いたぞ、道路掃除をしたんだ……しかも、ウオツカを一杯も飲まねえ。どうだい。見ろ——十五錢が二つよ。それで、おれは白面なんだ。

サチン。悪い量見だ。それをこつちへ寄越せ、おれが飲んでやる……でなきや、骨牌へ賭けてやる。

役者。よせよ。これは旅費だ。

巡禮。（サチンに）おい、お前は――なんだつて折角決心してるものを、ひつくり返さうとするんだ。

サチン。「語れ、巫女、神のいとし子、わが前途いかなるべき。」おれは一文なしだ、兄弟――みんな負けちまつた。だが、世の中にはまだ望があるぜ、ぢいさん……世の中にはまだおれより上手なずるがゐるぜ。

巡禮。お前さんは面白い男だ。コンスタンチン……可愛い男だ。

帽子屋。おい、役者――まあ、ここへ來い。

役者、窓に近寄り、その前に蹲まりて、靜に帽子屋と語る。

サチン。おれも若い時分には――陽氣な人間だつた。思ひ出すと愉快だね……その時分は、おれも人間の魂を持つてゐた……踊もうまかつたし、芝居もやつた、おれは交際社會で有名な男だつた……素晴らしいもんだつた。

巡禮。それがどうしてそんなに落ちぶれたんだ。え。

サチン。ぢいさん、おめえは好奇心が強いな。なんでも聞きたがるぢやねえか……そんなことを聞いて、どうするんだい。

巡禮。人間の運命といふものが知りたいのさ……どうも分からない。お前さんのやうに度胸の好い……
……お前さんのやうな利口な人間が……急に。

サチン。監獄よ。四年と七ヶ月の年期を濟まして、出獄人として出て來た時には——もうおれの行く道は塞がつてしまつてゐた。

巡禮。おや、おや。一體まあどうして、監獄などへ入れられたんだ。

サチン。ある畜生のお蔭よ……かつとしたことがあつて、おれがそいつを殺したんだ……骨牌の極意は監獄で覺えたのよ。

巡禮。どうして又殺したりなんぞしたんだ。女の爲かい。

サチン。おれの妹のことでよ……だが、もう勘辨してくれ——さう聞かれると、苦しくてたまらねえから……もう……昔の話よ……おれの妹も、もう死んでしまつた……死んでからもう九年にもなる……可愛らしい女だつたよ、おれの妹は。

巡禮。あんたはまだ[illegible]若いなだよ。世間にはもつともつと苦しいのがある……偶へには、さつきここでどなつてゐた錠前屋だ。

サチン。クレシチかい。

巡禮。さうだ。仕事がないつて、どなつてたんだ……まるでないつて。

サチン。さうなきや仕事が無えのにも馴れて來るだらうよ……おいらだつて仕事はねえんだ。

巡禮。（小聲で）御覽。やつて來た。

錠前屋、首を垂れて、のろのろと入り來る。

サチン。よう、男やもめ。何だつてさう首を垂れてるんだ。何を考へ込んでるんだ。

錠前屋。頭が割れさうなんだ……これからどうしたら好いんだらうと思つてよ。道具は飛んでしまつたし……何もかもみんな葬式に食はれてしまつた。

サチン。おれが好いことを教へてやらう。なんにもするな。地球のお荷物になつてやれ――わけのねえこつた。

錠前屋。成程そいつは好い量見だ……だが、おれは――まだ世間が恥つかしい。

サチン。よせ。てめえが犬より劣つた暮しをしたところで、なんで世間が恥ぢるもんか。まあ考へて見ろ……てめえが働かねえ、おれが働かねえ……まだ何百人も何千人も働かねえ奴がゐるとしろ……終にはあらゆる人間が――分かつたかい――あらゆる人間が爲事をうつちやつてしまつて、もう誰もなんにもしなくなつたとして見ろ――さうしたら、まあどうなると思ふい。

錠前屋。みんな饑ゑて死ぬだらう。

巡禮。(サチンに)さういふ宗派があるね。「隱遁宗」といつてな……あの連中は、丁度お前さんの言つたやうなことを言つてる。

サチン。おれも知つてらあ……だがあの連中は馬鹿ぢやねえぜ。

コスチリヨフの室より、ナタアシヤの叫ぶ聲聞こゆ。「何なするのよ。およしつたら……何なあたしがしたつてば。」

巡禮。（不安に）誰だな、泣いてるのは。ナタアシヤぢやないか。さうだ。

コスチリヨフの住居より、高き物音、器具の壊れる響など聞こゆ。その合間に、亭主コスチリヨフの叫ぶ聲。

「ええい……猫め……ばいため。」

主婦。（臺所のうしろにて）お、こいつと……まあ、お待ちよ……こいつはあたしが……かう……かう。

ナタアシヤ。助けて。人殺し。

サチン。（窓の内へ向つて叫ぶ）おうい。どうしたんだ。

巡禮。（心配してあちらこちらと驅せ廻る）ワシカを……呼んで來なくちや……ワシカを……ああ……どうしよう、皆さん。

役者。（駈け去る）おれが連れて來る……おれが連れて來る。

帽子屋。この頃はやたらにあの子をいぢめるやうだ。

サチン。おいで、ぢいさん……行つて證人になつてやらう。

巡禮。（サチンのうしろに續きて退場）證人なんぞにならなくたつて好い。わしはもう證人になり過ぎてゐるんだ。ワシカさへ來てくれれば……ああ、困つたものだ。

ナタアシヤ。(舞臺のうしろにて) ねえさん……ワア……ワ……ア。

帽子屋。 そら、口を塞がれた……おれも行つて見て來よう。

コスチリヨソの住居の物音、少し弱くなる。亭主は明かに部屋を出でて、玄關の方へ行きたり。「待て。」と呼ぶ亭主の聲。戸の閉ぢる音。それにより物音は斧にて切りたるやうに、ぱつたり聞こえずなる。舞臺靜寂。

薄暮迫り來る。

錠前屋。(材木を重ねたるに、知らず顏して坐し、烈しく手を擦りゐる。やがて何か獨語を言ひ始む。初めは聞こえず、段々聲高になる) ぢや、どうすりや好いんだ……生きてゐなくちやならねえ。(高く) せめて宿だけでも……だが駄目だ、それも駄目だ……ほんの横になるだけの場所もねえんだ……からだ一つの外には、なんにもねえんだ……もうどこにも賴るところはねえ――まるで捨てられてしまつた。

頭垂れて、のろのろと出て行く。二三分間、不安なる靜寂。やがて上手の方に、錯綜せる物音、混沌たる人聲起る。人聲はやうやう高く、やうやう近くなる。間もなく一人一人の聲聞こゆ。

主婦。(舞臺のうしろにて) あたしは姉だよ。うつちやつといておくれよ。

亭主。(舞臺のうしろにて) おめえが口を出すところぢやねえよ。

主婦。(舞臺のうしろにて) 懲役人め。

サチン。(舞臺のうしろにて) ワシカを連れて來い……早く……ゾオブ、なぐれ。

巡査の呼子鳴る。

韃靼人。(舞臺へ突進し來る。右手は繃帶したり) 何といふことだ――眞つ晝間人殺しをやるたあ。

人足ゾオブ、急ぎ出づ。うしろに巡査。

人足。うんとなぐつて來てやつた。

巡査。なぜお前はあの男をなぐつたんだ。

韃靼人。ぢやあ――お前さんは自分の職務を知つてるかい。

巡査。(人足のあとを追ひたて退場) 待て。おれの呼子を返せ。

亭主。(舞臺へ突進し來る) アブラム。そいつを縛つて呉れ……しつかり捕まへて呉れ。そいつはおれを酷い目にあはしやがつたんだ。

角のうしろより、饅頭賣の女とナスチヤ現る。二人はナタアシヤを抱くやうにして連れて來る。ナタアシヤは惡く衣服を引き裂かれ、泥まみれになりゐる。うしろより主婦、手を振り上げて妹を打たむとす。サチン、後すさりして、主婦に突き當る。靴屋、その廻りを狐つきのやうに跳ね廻り、ワシリイサの耳へ口笛を吹き、どなり吠える。なほ三四の襤褸を着たる男女現る。

サチン。(主婦に) どこへ行くんだ、罰あたりめ。

主婦。どきやあがれ、懲役人。あたしや殺されたつて構やしない――あいつをずたずたにしてやるん

だ。

饅頭賣。（ナタアシヤを脇の方へ連れて行く）まあ。およしつたら、カルボウナ……外聞が惡いぢやないか。どうしてそんな無茶なことが出來るんだらう。

巡査。（又入り來り、サチンの襟を掴む）さあ、つかまへたぞ。

サチン。ゾオブ。なぐれ……ワシカ……ワシカ。

皆々重なりあひて、赤き壁の側なる路次口に集まる。ナタアシヤは上手へ連れ行かれ、積み重ねし材木の上へ置かる。

ペペル。（路次口より飛び出し、默つて群衆を押しのける）ナタアシヤはどこだ。ナタアシヤは。

亭主。（角のうしろに隱れる）アブラム。ワシカを縛れ……みんなも手傳へ。泥坊……強盜。

ペペル。やい古狸。（力を籠めて、亭主を打つ。亭主、角のうしろより上半身のみが見えるやうに、倒れる。ペペルは急いでナタアシヤの方へ行く）

主婦。ワシカを撲つておくれよ。みんな……泥坊をなぐつておくれよ。

巡査。（サチンに）お前が口を出すべき場合ぢやない……これは內輪のことだ。あの人達は親類同志なんだ……お前はなんだ。

ペペル。（ナタアシヤに）どうしたんだ。突きでもしたか。

饅頭賣。まあ、なんといふ獸(けだもの)だらう。煮えくり返つたお湯を足の上へ浴(あび)せかけたんだよ。

ナスチヤ。サマヷルを引つくり返したんだよ。

韃靼人。そりや偶然(たまさか)でしたことかも知れねえ……はつきり分かりもしねえことを、うつかりしやべるものぢやねえ。

ナタアシヤ。(半、無意識に)ワシカ……どこかへ連れて行つて……隱しておくれよ。

主婦。みんな御覽よ。ここへ來て。死んぢまつたぢやないか……たうとう叩(たた)き殺してしまやあがつた。

皆々、路次口に倒れたるコスチリヨフの周りに集まる。帽子屋、群集より離れて、ペペルの方へ歩み寄る。

帽子屋。(小聲に)ワシカ、親爺はもう……駄目だぜ。

ペペル。(その聲が耳に入らぬらしく、帽子屋の顏をぢつと見る)馬車を雇つて來い……ナタアシヤを病院へ入れるんだ……なあに、かかりはおれが持つ。

帽子屋。おれの言つてることをよく聞けよ、親爺が誰かに殺されてしまつたんだ。

煉瓦の上の物音は、火に水をかけたるやうに、はたと止む。低き聲、切れ切れに聞こゆ。「ほんたうかい。」「そら見ろ。」「なるほど。」「兄弟、逃げた方が好いぜ。」「べらぼうめ。」「しつかりしろ。」「巡査の來ねえ内に逃げろ。」群集少くなる。帽子屋、韃靼人、遠くのナスチヤと饅頭賣の女、亭主の死骸に驅け寄る。

主婦。(うち上がり、勝ち誇りたる調子にて、聲高に呼ぶ)たうとうあたしの亭主を殺してしまつた。誰が

殺したんだ。そこにゐるそいつだ。ワシカが殺したんだ。あたしはちやんと見てゐました。皆さん。あたしはちやんと見てゐたんですよ。さうだらう。ワシカ。警察へそいつて來て遣るから。

ペペル。（ナタアシヤを離れる）おれに見せろ……どけ。（死骸を凝視す。主婦に）どうだ。これでおめえも嬉しいだらう。（死骸を蹴る）たうとうほんとにくたばつてしまやあがつた……老ぼれ犬め。さあ。これでおめえの望も叶つたといふもんだ…… 序にてめえの首根つこも……ひねり上げて呉れようか。（主婦の方へ突き進む。サチンとゾォブ、素早くペペルを捕まへる。主婦、路次の中へ隱れる）

サチン。まあ氣を落ちつけろよ。

人足。ぶるるる。一體まあ、どこへ飛びつくつもりなんだ。

主婦。（再び現る）さあ、ワシカ、お友達。運の盡きだよ。警察は逃げられないよ。アブラム……呼子をお吹き。

巡査。ところが呼子は取られてしまつた。忌々しい。

靴屋。そら、ここにあらあ。（呼子を吹く。巡査、あとを追ひかける）

サチン。（ペペルをナタアシヤの方へ連れ戻る）心配するな、ワシカ。喧嘩をして人を殺す……小さなこつた。何でもねえこつた。

主婦　あいつをしつかり捕まへておくれよ。ワシカは親爺を殺したんだ……あたしはちやんと見てゐる

たんだ。

サチン。おれだつて少しや撲つてやつた……あんな老ぼれが死んだつて、誰が困るもんか。おれを證人に呼び出せよ、ワシカ。

ペペル。なあに……おれは少しも自分を辯解する必要はねえ……だが、ワシリイサだ……あいつはきつと抱き込んでやるから。あいつは亭主の殺されるのを待つてゐたんだ……亭主を殺せつて焚きつけたんだ……さうだ、あいつは教唆人だ。

ナタアシヤ。（俄に叫ぶ）ああ……それで分かつた……さうなんだね、ワシカ。まあ、みんな、聞いておくれ。みんな手管がきめてあつたんだ……あの人と姉さんと……二人して考へ出したことなんだ。もくろんだことなんだ。ねえ、ワシカ。それで、お前さん、さつきあたしにあんなことを言つたんだね……わざと姉さんに聞こえるやうなところで。みんな、姉さんはあの人の色女なんだよ……知つてるだらう……誰だつて知つてる……二人は同じ腹なんだ。姉さんが……姉さんが人殺しを勸めたんだ……亭主が邪魔になるんだ……あたしも邪魔になるんだ……それで、あたしをあんなにいぢめたんだ。

ペペル。（ナタアシヤに）何を言つてるんだ。何を言つてるんだ。

サチン。馬鹿馬鹿しい。

主婦。嘘だ。みんな嘘だ……あたしはなんにも知りやしない……ワシカが殺したんだ……あいつがひとりで殺したんだ。

ナタアシヤ。いいえ、二人がしめし合はしたこつた。呪はれるが好い……二人とも。

サチン。さあ、むづかしくなつて來た……しつかりしろよ、ワシカ。でないと、醋い目にあふぞ。

人足。分からねえな……まるで話だ。

ペペル。ナタアシヤ。おめえは……眞面目に言つてるのかい。本當におめえは、おれが……あいつと。

サチン。おい、ナタアシヤ……氣を落ちつけなよ。

主婦。（姿見えず、路次の内にて）あたしの亭主を殺したんでございます……お役人樣……ワシカ・ペペルといふ泥坊が……撲り殺したんでございます、警部さん。あたしはちやんと見てゐました。みんなもちやんと見てゐました。

ナタアシヤ。（なかば無意識に、轉輾す）皆さん……あたしの姉さんとワシカが……二人して殺したんです。お廻りさん……どうぞ聞いて下さい……そこにゐるあたしの姉さんがあの人を唆かしたんです……自分の色男なんです……それを焚きつけたんです……そら、その呪はれた男はそこにゐます――みんな二人でしたことです。早くお捕まへなさい……裁判所へお連れなさい……あたしも一緒に捕まへて下さい。あたしも一緒に牢屋へ入れて下さい。あたしも一緒に……牢屋へ。

第四幕

第一幕の舞臺面。ペペルの部屋は最早見られず、中じきりも取りのけらる。錠前屋の坐りゐたる所に鐵砧（かなとこ）もなし。ペペルの部屋にありたる隅には、寢床あり。韃靼人これに臥しをり、絶えず寢返りなしつつ、苦しげに唸る。錠前屋は、大机の側に坐し、手風琴の繕（つくろ）ひをなしつつ、時々調音を試みゐる。机の他の端（はし）には、サチン、男爵、ナスチヤ坐す。その前にはウオツカ一本、ビイル三本、黒パンの大なる塊、暖爐の上には役者、あちこちと絶えず身を動かして、咳す。夜。舞臺は机の中央に置かれたるランプにて照らさる。戸外には風吠ゆ。

錠前屋。さうだ……あの喧嘩の最中にゐなくなつたんだ。

男爵。お巡りが來たんで逃げたんだな……煙のやうに消えてしまつたんだな。

サチン。罪人（つみびと）は正義の前に立つと、大抵さういふ風に逃げ出すものだ。

ナスチヤ。でも、好いおぢいさんだつたわ。お前さん達なんかは……人間ぢやないわ……パチルスだわ。

男爵。（飲む）レディ、健康を祝す。

サチン。ほんとに面白いおぢいさ。うちのナスチニカはをか惚れしてゐたな。

ナスチヤ。さうとも……あたしやおぢいさんに惚れてゐたよ。どんなことにでも眼が利いてゐて……なんでも分かるんだもの。

サチン。（笑ひつつ）そこで、まあ大抵の人にとつては……歯のない人に柔いお粥といふ所だつた。

男爵。（笑ひつつ）それとも、瘡に膏薬といふところかな。

錠前屋。なかなか思ひ遣りのあるぢいさんだつた……おめえ達は……思ひ遣りがねえ。

サチン。思ひ遣りを見せると、それがおめえの役に立つかい。

錠前屋。思ひ遣りには及ばねえが……せめておれを……いぢめねえでくれ。

韃靼人。（寝床の上に起き上がり、病める手を前後に揺り動かす、赤子を守するやうに）あのぢいさんはかい人間だつた……腹ん中に、ちやんと掟があつた。腹ん中に掟のある人間は……きつと、好い人間だ。腹ん中に掟を持つてねえやうな者は――もう駄目だ。

男爵。どういふ掟だい、殿下。

韃靼人。まあ……掟はやつぱり……掟だあな……それはその……分かつてるぢやねえか。

男爵。それから。

韃靼人。人をいぢめるな――と、かう言へば、もう掟だ。

サチン。露西亜ではかうよ。「処罰懲戒例。」

男爵。外に附則として、「示談裁判處罰條例。」

韃靼人。コオランの中にはかう書いてあらあ……コオランは掟たるべし……魂はコォランたるべしつて。

錠前屋。(手風琴をためす) 獸め、まだしゆうしゆう言つてやがる……殿下の言ふのは本當だ……人間は掟に從つて生きて行かなきやならねえ……福音書に從つてな。

サチン。ぢやあ、さうなさいまし。

男爵。まあ、やつて御覽なさいまし。

韃靼人。モハメットが、おれ達にコォランをくれて言ふには、それ、そこにお前達の掟がある。その中に書いてあることをしろ。やがて――コォランも役に立たなくなる時が來る……そのやうな時には、又新しい掟が出來る……あらゆる時代は、それぞれの時代の掟を持つてをる。

サチン。聞くもだ……おれ達の時代には處罰例がある。なかなか持ちのよささうな掟だ……容易に役に立たなくなりさうもねえ。

ナスチヤ。(コップにて机を叩く) 一體なぜあたしは……こんなところで、お前さん達なんかと一緒に生きてゐるんだらう。あたしはここを出て行くから……きつと、どこかへ行つてしまふから……世界の果へでもどこへでも。

男爵。靴も穿かずにかい、レヂイ。
ナスチヤ。はだしでも構はないよ。四つん匍ひになつても好いよ。
男爵。そいつは好い圖だ、レヂイ……四つん匍ひたあ。
ナスチヤ。きつとやるよ、やるともさ、お前さんの間抜け面を見ないでも濟むやうになるんなら……ああ、なんだつてかう何もかも厭になつたんだらう。もう生きてるのも厭になつた……人間がみんな厭になつた。
サチン。出かけるんなら――役者も一緒に連れて行つて貰ひたいな……あいつはいつでも出かけるよ……奴さん、かういふことを知つたんだ。世界の果から丁度半道先にオルガアノンの病院があるといふことをね。
役者。（暖爐の端より頭を突き出し）オルガアニィズムだい、馬鹿。
サチン。アルコホル中毒にかかつてるオルガアノンのね。
役者。さうだ。奴は直ぐ立つよ。もう直ぐ立つよ……きつと立たあ。
男爵。その「奴」といふのは誰だ、閣下。
役者。おれさ。
男爵。メルシ、わが親愛なる女神の僕よ……ええ、なんとか言つたな、芝居の女神は、悲劇の女神は

……何とか言つたな。

役者。ミユウズよ、馬鹿野郎。女神ぢやねえ、ミユウズだ。

サチン。ラヘシス……ヘラ……アフロヂイテ……アトロポス……そんなものの區別が分かるものか。ぢやあ、なんだね……わが親愛なるミユウズの子は、愈（いよいよ）ここを出て行くんだね……ぢぢいが耳の中へ蚤を入れやがつたんだ。

男爵。あのぢぢいは馬鹿だ。

役者。ぢやあ、おめえ達は野蠻人だ。無學文盲だ。メルポメネエだ。ぐうたら野郎。今に見ろ！――奴はきつと出て行くよ。「哀れの友よ、飲めよかし。」といふのが……ベランジェルの歌にあらあ……ほんとだ……奴はきつとそこを見つけ出さあ……そのなんにもねえところをよ……まるでなんにもねえところをよ。

男爵。まるでなんにもねえところをか、閣下。

役者。さうよ。まるでなんにもねえところだ。「この塚穴こそ……予が墳墓……臓腑も死ぬのぢや、萎（しぼ）むのぢや、力を失ふのぢや。」だが、おめえ達は……なぜ生きてるるんだ。なぜ。

男爵。おい、おい――キインだか天才だか熱情だか知らねえが、さう吠えるなよ。

役者。黙れ……おれは吠える、ああ吠えるよ。

ナスチヤ。（机より頭を擡げ、手を高く振り廻す）いつまでもどなつてお遣り。構ふもんか。

男爵。どういふ譯だ。レヂイ。

サチン。しやべらせて置けよ、男爵。べらぼうな奴等だ……どなるが好い……頭を叩きつけるが好い……いくらでも遣るが好い。何をやつても意味はあらあ。ただ人の邪魔をするな、ぢぢいの言つたやうによ……ぢぢいめ、みんなの心を引つくり返しやあがつた。

錠前屋。みんなをどつかへ……おびき出さうとしやがつたんだ……その癖自分は行先を知らねえんだ。

男爵。あのぢぢいは山師だ。

ナスチヤ。嘘だ。山師はお前さんだ。

男爵。お默り、レヂイ。

錠前屋。あのぢぢいは眞實の友ぢやなかつた――一生懸命に眞實に反對してゐた……そこがぢぢいの正しいところだ……なんにも食ふ物がない時、眞實がなんの足しになる。そら、殿下を見るが好い。（韃靼人を指す）爲事をしてゐて手を挫いた……愈切らなきやならねえつて話だ……これが眞實だ。

サチン。（拳にて机を打つ）靜にしろ。馬鹿野郎ども。ぢいさんのことを惡く言ふない。（少し靜に）おい、男爵、てめえが一番馬鹿だぜ……なんにも知らねえ癖に――しよつちう何かしやべつてやがる。

ぢいさんが山師だと？眞實がどうしたと。眞實とは人間その者のことだ。ぢいさんはそれを心得てゐた……てめえ達はそれを知らねえ。煉瓦にも劣つた奴等だ。おれにはちやあんとぢいさんが分かつてゐる……そりやあ成程あいつは嘘を言つた……だが、それは思ひ遣りから出た嘘だ、分かりきつてらあな。思ひ遣りから嘘をつく人間は、世間に澤山あらあ……おれはさういふことを、澤山讀んで知つてゐる。その嘘が又、實に精靈で、精神が籠つてゐて、驚くべきものなんだ。あんなに慰めになる、あんなに穏やかな嘘があるんだからなあ……ああいふ嘘だと、職人の手を挫いた殘酷な奴を許すことも出來るし……腹の減つた奴を罪に落すことも出來るんだ……おれはさういふ嘘を知つてゐる。氣の弱い奴や……人の汁を吸つて生きてる奴には——嘘が入るんだ……嘘はさういふ奴に、勇氣をつけてくれる、マントなんか着せてくれる……だが、自分で自分の支配の出來る奴や……人の額の汗をあてにしねえで、獨立の出來る奴には……嘘は入らねえ。嘘は奴隷と君主の宗教だ……眞實は——自由な人間の神だ。

男爵。ひやひや。謹聽、謹聽、おれも全然同感だ。おめえはまともな人間のやうな口を利くな。

サチン。まともな人間が泥坊のやうな口を利く世の中だ——泥坊がまともな人間のやうな口を利いて惡い道理はねえ。さうよ……おれはもう大抵のことは忘れつちまつた、だが、少しはまだ覺えてることがある。ぢいさんか。あいつは利口な奴だ。あいつは古い錢へ硫酸でもかけたやうに、おれ

旗を屋根の上に掲げた或韃靼人の旗亭がある。店先に出た看板には、チョオクで「歡迎亭」と書いてある。この店はケルバライといふ韃靼人が持つてゐるのだ。垣根で仕切つた小さな庭があつて、その庭に食卓やベンチが据ゑつけてある、深々と生ひ繁るに委せた灌木の中から、唯一本こんもりと美しい糸杉が聳え出てゐる。

　氣の利いた小男の韃靼人ケルバライは、青シャツを着て、白の前掛をして、往來へ出てゐて、馬車の一行が通りかかると、兩手を腹に當てて低い御辭儀をした。彼が笑つた時白い綺麗な齒が見えた。

『どうした、ケルバライか。』と、サモイレンコオは叫る。『今日は少し先へ行くんだ。貴樣は後から直ぐサモワルと椅子を五六脚持つて來い。直ぐだぞ。』

　ケルバライは、短かく刈り込んだ頭で、二三度頷いて、何か言つたが、それは最後の馬車に乘つてる人にしか分からなかつた。

『鱒がございます、閣下。』

『持つて來い、持つて來い。』と、フォン・コオレンが叫つた。

　馬車は旗亭から殆ど五百ヤアドも來た所で止まつた。サモイレンコオは小さな草原を見つけた。そこには飛び飛びに岩があつて、丁度都合の好い腰掛になつてゐた。嵐で吹き倒された樹が一本、根を出して倒れてゐた、その刺は悉く黄いろく枯れてゐる。粗末な木の橋が小さな流れに懸かつてゐる、

その向う岸には四本の低い杭で支へられた小さな割屋がある、これは玉蜀黍を乾す小屋だ。

劇場會の一行に與へた第一印象は、宇宙へ這入つたやうな感じであつた。右にも左にも前にも後にも山がある、轉亭とこんもりした森影との見える方角から、夜の影は刻一刻と這ひ寄つて來て、狭い、曲折のある、黒河の谷々、尚一層暗く見せて、高い山々を尚一層高く見せた。河は暗く、蟬は喧閙なく泣く。

「まあ好いことね。」と、マリア・コンスタンチノウナは言ふ、うつとりと空氣を深く吸ひ入れながら、「寂寥、靜寂、とても靜謐だこと、とても綺麗だこと。」

「さう、全く壯觀ですね。」と、オブニコフスキイは調子を合せた。「さう、壯觀です。」と、彼は又繰返して言ふ。

「とても描寫は出來ませんねえ。」と、マリアは泣くやうに言つた。

「なぜそんな事を言ふのです。」と、オブニコフスキイは尋ねる「印象は如何なる描寫にも從つて好いものです。印象といふ方法に依つて自然から受けるこの豐富な色彩と音響とを、文學者といふ者が拙劣な解し難い形式に依つて下らなくして了ふのです。」

「さうかしら。」マリア・コンスタンは一番大きな石を選んで、それを腰掛にしながら、冷淡にかう尋ねた。

『さうかしら。』と、ラアエウスキイを睨みつけながら、彼は又繰り返して言ふ。『では「ロメオ、エンド、ジユリエツト」はどうなのだ。例へばプシキンの「ウクラヰンの夜」はどうなのだ。自然はこれらの作の前へ來て、その膝を屈しなけりやならんぢやないか。』

『そりやさうさね。』と、ラアエウスキイは同意した、彼はもう氣が怠けて、考へたり議論したりする勇氣が無くなつて了つたのである。『だが併し。』と、暫く默つてゐた後に、又言葉を續けて、『要するに「ロメオ、エンド、ジユリエツト」が何である。美しい、詩的な、神聖な戀愛――即ち腐れを匿した薔薇ぢやないか。ロメオだつて、有らゆる他の人間に同じく、一箇の野獸たるに過ぎないのだ。』

『何の會話をしても、君は直ぐ問題を……』と言ひかけて、フオン・コオレンはカアチヤの方を振り向くと、默つて了つた。

『問題を何に轉ずると言ふのだ。』と、ラアエウスキイは尋ねる。

『うむ、或人が君に向つて（薔薇の房は綺麗なものですね。）と言ふとするね。すると君はきつとかう言ふだらう、（成程綺麗です、併しながらちうちう吸はれて胃の腑の中で消化される時は餘り綺麗なものぢやありません。）て。なぜ君はさういふ議論の爲方をするのだ。少しも新らしい所は無いぢやないか。それに……何れにしても可笑しな論法だ。』

ラアエウスキイはフオン・コオレンが自分を嫌つてゐる事を知つてゐる、そして、それを知つてゐるが

間に、彼はイワン・コオレンを忘れてゐた。彼は自分の目の前に大勢の人がゐるやうな氣がした、誰か自分の背の直ぐ後に喰つ附いて立つてゐるやうな氣がした。彼はなんにも答へずにそこを離れて、そして、ああ來なければよかつたと思つた。

「諸君、枯枝を捜して來て呉れ給へ、焚火をするのだから。」と、サモイレンコは號令をかける。

連中はみんな言つた方向へ散つた。キリーリンとアチユミアノフとニコヂンだけ跡へ殘つた。ケルバライが椅子を持つて來た。そして地べたに絨毯を敷いて、酒の瓶を少し並べた。キリーリンは丈の高い堂々たる男だ、雨でも天氣でもリンネルのスモツク、フロツクの上に帶無し外套を着て踵丈に揃へた靴は、どうしても田舍の警察署長だ。彼は實際警察署長とほぼ同じやうに頑固だ、それに髯に癖があつて、少し寢が足りてゐる。酒の瓶と皆の食卓を一目見ると、彼はいつもの癖で何か嚴ましく言ひ出した。

「一體、貴樣の持つて來たのは、こりや何だ。」彼はケルバライの方を振り向いた。「俺に葡萄酒を持つて來いと言うたなれぞ——貴樣が持つて來たなこりや何か、韃靼人、え、こりや何かよ。」

「内から持つて來たのが理由あるから好いぢやないか、キリーリン君。」と、ニコヂンは柔和かに言ふ。

「持つて來た酒？何か？俺は俺で自分の酒が入るんだ。この野營者の一員として這入つて來た以上は、俺にも酒代を拂ふ充分な權利があると思つてゐる。葡萄酒を十本持つて來い。」

「なぜそんなに理由？」と、ニコヂンは驚いて聞いた。彼にはキリーリンが一文無しで來てゐる事を知つて

ゐるのだ。
『いんや。二十本持つて來い。』と、キリリンは叫つた。
『構はんさ、好いよ。』と、アチユミアノフはニコヂンに囁く。『僕が拂ふから。』
ナヂエダは陽氣な浮々した氣持であつた。駈け出したい、笑ひたい、大きな聲が出したい、ふざけたい、浮氣がしたいといふやうな氣持だつた。青い星を散らした輕いモスリンの着物を着て、小さな赤い上靴を穿いた所は、可愛く、身輕に活潑で、恰も蝶のやうに見えた。彼女は危ない橋を駈けて通つて、目の廻るまで水を眺めた。それから、笑ひながら、向う岸へ駈けて行つた。彼女はキリリンの大きな聲を耳にして、また醉つぱらつて何か言つてるんだよと、ちよいとの間そんな事を思つたが、直ぐ、なあに誰もあの人を信ずる人は無いから好い、といふやうな事を考へて、安心した。彼女は營小屋の處まで歩いて行つたが、急に淋しくなつたのに驚いて、橋の所まで、駈け戻つた。この瞬間に、彼女は總ての男子が戀しくなつた。
刻々と迫つて來る闇黑の内に、樹は山に融けて消え、馬は馬車から見分けが附かなくなつて了つた。唯旗亭の窓から小さな明かりが洩れて見える。彼女は石や叢の間を蛇のやうにうねうねしてゐる道を横切つて、山へ登ると、一つの石に腰を掛けた。
下には焚火が燃えてゐる。助祭が袖をからげて、火の近くを立ち廻つてゐるのがよく見える、彼の

鬪と――その外にはなんにも無いのだ、しかも何といふ好い景色だ。」

河の向う岸の乾小屋の側に、幾人か見馴れぬ人が現はれた。ちらちらする火の光と煙とで、どういふ人達だか確くは分からぬ。が、時々、毛皮の帽子だの、灰色をした髯だの、青いシャツだの、肩から垂らした襤褸だの、帯に束ねた匕首だの、木炭で書いたやうな黒い眉毛をした錆びた長い顔だのが見えた。何でも十人位の人數に違ひない、なぜといへば地べたに坐つてゐるのがゐて、外に五人乾小屋の中へ這入つて行つたのがあつたから。入口の處に、焚火に背中を向けて一人立つてゐる。話をしてゐるのがよく聞える。サモイレンコさんが枯枝を足したので、火がぱツと明るくなると、戸の中から外を覗いてゐる顔が二つ見えた――誰かが話してる物語を、さも面白さうに聽いてゐるといふ顔つきだつた。暫く立つと、靜かな、調子の好い歌が、柔かな聲で聞えて來た。丁度讃美歌を聽くやうである……助祭はこれを聽くと、ふと自分の十年後を考へ出した、自分が探檢から歸つた時の青年等へ出した。彼はきつと本當の傳道僧になつてゐるだらう、立派な經歷を持つた有名な普道家になつてゐるだらう。彼は僧院長と崇められるやうになるだらう、それから――僧正になるだらう。彼は黄金の僧冠を戴いて、中央寺院の彌撒を營むだらう。彼は、耶蘇の像を胸に飾つて、二つか三つ手の出てゐる燭臺を捧げて、祭壇に進んで、そして、人民に祝福を與へてゐる自分の姿を見た。

(おお天にましますまよ、吾等を護り給へ。願はくは爾の葡萄畑を屢々訪ひ見給へ、願はくは、爾の

キリリンとアチユミアノフとは間道を通つて山へ登つた。アチユミアノフが少し遅れてゐると、その間にキリリンはナヂエダの側へ寄つた。

『今晩は……』と、彼は軍隊式の敬禮をしながら言つた。

『今晩は。』

『さうだ……』と、キリリンは空を眺めて考へながら言ふ。『さうだ。』

立派な外套や気取り切つた威厳にも拘らず、彼は少なからず狼狽してゐる。

『何が……さうなんです。』と、ナヂエダは、アチユミアノフが自分達二人を見てゐるのに目を留めながら言つた。

『どうもさうらしい。』と、士官はゆつくり言つた。『吾々の戀はまだ花の咲かない内に凋んで了つたのですね。どう解釋したら好いんでせう。コケツトリイですかな、婦人の外交手腕ですかな、それとも又……』

『それは間違ひです。どうぞあちらへ入らして下さい。』と、突慳貪に言つて、ナヂエダは彼の顔を胸悪げに眺めた、さうして、どうしてこんな人にこんな事を言はれるやうにしたものだらうと、自分で自分を怪しんだ。

『ほう。』と、彼は暫く黙つて立つてゐたが、やがて又口を開いて、『宜しい、まあ御機嫌の直るまで待

もとどう、御機嫌が直れば、そんなに恐い顔もなさるまい……さうやつて入らつしやれば、まあ段々に直りませう……左様なら。」

彼は帽子の縁へ手を上げた。そして叢を分け分け、何處かへ行つて了つた。

暫くすると、今度はアチュミアノフがおづおづと彼女の側へ寄つて來た。

「美しい晩ですなあ。」と、彼は言つた、アルメニアの訛りが少し有る。

彼は見てくれの好い青年である、着附にも意氣な趣味である。併し、ナヂェヂダはこの男の親父に三百ルウブルの借りがあるので、何となくこの男を見ると慚めしくなる。おまけに彼女は、今夜この一座[illegible]の仲間でない男が、野遊會に招かれてゐるのが、少なからず不快に思つてゐるのだ。

「今日の野遊會は成功でしたな、さうぢやないですか。」と、暫く默つてゐた跡で、彼はかう言つた。

「左様です。」と、彼女は同じた。さうして、ふと借金の事を思ひ出したといふ風に、疎忽にもかう言つた、「お父様の所へお歸りなさいましたら、さう仰しやつて下さいまし、一兩日内にはラアエウスキイが三百……でしたか、お幾らでしたか、しつかりした高は覺えてをりませんが……きつとお拂ひに上りますからつて。」

「あなたがわたしの顏を見る度にそれを仰しやつて下さらなければ、もう三百差し上げても宜しいんです。なぜあなたはさう散文的なのです。」

『へえ。あなたは詩がお好きで入らつしやいますの。』

『詩が好きでなければ、こんな、あなたの入らつしやる所へなぞ參りはせんです。』

ナヂエダは思はず吹き出した。と、或妙な考へが彼女の心中に閃いた。これを實行さへすれば、借金も總て濟しにする事が出來ると思つた。彼女は段々彼を引つ張り廻して、その揚句に捨てて了ひたいやうな氣がした。

『わたしは失禮ながらあなたに少々御忠告申し上げたい事があるのです……』と、アチュミアノフは恐る恐る言ひ出した。『わたしはキリリンに敵對してあなたの保護者となりたいのです。あの男はあなたの事に就いて實に怪しからん噂をして歩いてをります。』

『馬鹿が何を言つて歩かうと、あたしは少しも構ひません。』と、ナヂエダは冷やかに言つた。この青年と遊ばうとした一昨の考へも、急に何處へか行つて了つた。

『もう降りませう……』と、女は言葉を續けて、『きつと探してゐるでせうよ。』

何れも魚のスウプは旨いと言つた。みんなは互に酒の杯を打ち合せた。この時ずに、ナヂエダもキリリンの事はすつかり忘れて了つた。

『喜ばしい野遊會だ、好い晩だ。』と、ほろ醉ひ機嫌のラアエウスキイが言ふ。『けれども、僕はこれらの總てにも增して、冬を取るね。(霜の細末は彼が海狸皮の襟に燦爛たり。)か。』

「それは趣味の問題だ。」と、フォン・コオレンが口を出す。

ラアエフスキイは氣持が悪くなつて来た。彼の後からは火の熱が来る、前にはフォン・コオレンの憎悪がある。教育のある、頭の進んだ人間に憎まれる事は、少なからず彼の心を傷つけた。殊にフォン・コオレンの憎悪に充分の根據有つて在する事には、彼自身と雖も認めない譯には行かなかつたので、猶と堪へられなかつた。そこで、わざと妥協的な態度を取つて、かう言つた——

「僕は自然を愛する。僕は自分の博物學者でないのを悲む。僕は君が羨ましい。」

「あたしにはわかりませんわ。」と、ナアヂヤは口を開いた。「人間自身が苦しんでゐるのに、なぜ人が甲蟲の事で氣を揉まなきやならないんだか、それが分かりませんわ。」

ラアエフスキイは女に同意した。併しながら、又女の言葉に不見識な所のあるのを見附けたといふ風で、かう答へた。「甲蟲ぢやない。自然界だ。」

七

十一時少し前に、馬車に歸りの用意をした。

ナイユダとアチコミアノフとを除いて、總ての者はもう馬車に乗つて了つた。然るにこの二人は、と河の上側で、大聲に笑ひながら、追ひ駈けつくらをしてゐる。

『さ、諸君、急ぎませうぜ。』と、サモイレンコオは叫る。
『女に酒を飲ませるんぢやなかつた。』と、物靜かにフオン・コオレンは言ふ。
ラアエウスキイは、疲れて氣を惱みつつ、ナヂエダを呼びに行つた。
ナヂエダは、男が自分の方へ來るのを見ると、身輕に走り寄つて、その頭を男の胸に靠せかけた。
男は身を離して、突慳貪に、『さ、確りしなくちやいかんぢやないか。』
女は男の怒つた顏に憎惡を讀みとつた、そして氣が沈んだ。女は自分が餘りに奔放な振舞をした事に直ぐと氣が附いた。と、女の心は憂愁の氣に蔽はれて來た、一部は酒からである、そして一部は精神狀態からである。彼女は自分の前へ來た第一の馬車に乘つた。アチユミアノフも亦これに乘つた。
ラアエウスキイはキリリンと同車した。動物學者はサモイレンコオと一緒に乘つた、そして助祭は婦人達と一緒に。
『どうだ、猿共の言ふ事を聞いたかい……』と、フオン・コオレンは眼を塞いで、外套に身を搾みながら口を開いた。『聞いたかい、彼等の言ふ事を。彼女は人間が苦しんでゐるのに、甲蟲の世話は焼きたくないと言ふ。猿共が科學者を批判する形式はいつでもこれだ。これらの動物に自由を與へて見給へ、きつと彼等は自分達の全く知らない事に就いて、或は罵り、或は情に激し、或は批評するだらう。彼等は君と提手して、君のした事業に就いて君に感謝しようなどとは、夢にも思つた事がないんだ。』

『何をそんなに激してゐるんだ？』と、欠伸をしながら、サモイレンコは尋ねる。『あの憫むべき婦人は、單に何か利口さうな事が言ひたかつたんだ、然るに君は今、それから在りと在らゆる結論を引き出して來る。君は一體あの男に就いて怒つてゐたんだ、處が今度はあの男の爲に、あの女に就いてまで怒つて了つた。あれでも、あの女は立派な婦人だよ。』

『もう澤山、澤山！　あの女は普通の女さ、ただ腐敗してゐるだけだ、下劣なだけだ。アレクサンデル君、君にして若し亭主を拵へてふらつき廻つてる唯の女に出會つたなら、(家へ歸つてお働きなさい。)と、きつと君はさう言ふだらう。なぜ君はこの問題に就いては、いつもの勇氣を出して見れないのだ。』

『彼女等に何の罪があるのだ。』と、サモイレンコは怒つて言ふ。『君は僕に彼女を打てと言ふのか。』

『いや單に惡徳を助長し給ふなと言ふのだ。僕は科學者だ、君は醫者だ。社會は吾人を信じてゐる。ナヂェジダ・イヷノヺナの如き婦人の存在に依つて起るべき危險を社會に指摘して遣るのは吾人の義務だ。』

『フェドロヺナだよ。』と、サモイレンコは誤りを正した。『さうして社會はどうすれば好いのだ。』

『それは社會の手續になるさ。僕の意見に依ると、最も強い最も確かな手段は暴力だ、先づ彼女を亭主の許へ軍隊の手で歸らせるんだ、若し亭主が彼女を受け取らなかつたら、懲役に遣るか、さもなくば懲治院へ送るんだ。』

『ふう。』と、サモイレンコォは溜息をついた。彼は一寸の間默つてゐたが、やがて物靜かにかう言ふ。『二三日前に君はラアエウスキイの如き人間は絶やして了はなければいかんと言つたね……若し……政府なり社會なりが、君に彼を滅ぼせと委任したら、君は實際遣る積りか。』

『ああ、僕の腕は決して震へないね。』

八

ラアエウスキイとナヂエダは、自分の家の、暗い、狹い、陰氣な部屋へ這入つた。二人とも默つてゐる。ラアエウスキイは蠟燭を附けた。ナヂエダは帽子も外套も取らずに腰を卸して、悲しげにおどおどした目を上げて、ラアエウスキイを見た。

彼は彼女が說明を求めてゐるのだといふ事を知つてゐる。併しそれを與へるのは面倒でもあり且無益でもある。尤も野遊會の會場に於ける自分の荒い爲打ちに就ては、彼自らも竊かに悔んでゐるのだ。彼はふと上着の衣兜に手を突つ込んだ、すると手紙が手に觸つた、ナヂエダの亭主の死を知らせて來た手紙だ。彼はもうそれを見せて了はうと思つた。

『愈々問題を一掃すべき時が來た。』と、彼は考へる。『儘よ、見せて了へ。』

彼は手紙を引つ張り出して、それを女に渡した。

『それをお讀み。』と、彼は言ふ。『御前に關係した事だ。』

手帳と女を殘して、彼は自分の書齋へ引つ込んだ、そして長椅子の上へ横になつた。

ナデエヂは手紙に目を通した、讀み終ると、天井が落ちて來るやうな氣がした、壁が四方から押し寄せて來るやうな氣がした。

總ての物が、俄に狹く、暗く、恐ろしくなつた。彼女は忙しく三度十字を切つた、そして聞えるか聞えないか位の聲で念じた。『神よ、彼の靈魂を休らはせ給へ……神よ、彼の靈魂を休らはせ給へ……』

それから泣き出した。

『ワアニヤ。』と、女は呼んだ。『イワン・アンドレヰッチ。』

返事が無い。けれども、ラアエウスキイはきつと歸つて來て呉れた事と信じて、彼女は子供のやうにしやくり泣きをし始めた。

『なぜあの人が死んだなら死んだで早くさう言つて下さらなかつたの？あたしそれを知つてれば、野遊會なんぞへ行くんぢやなかつた。あたしあんなに騷ぐんぢやなかつた……男の方つたら、みんなあたしに亂暴な事を爲しやるんですもの……ああ罪だわ、罪だわ。あたしを救つて、ワアニャ、どうぞあたしを救つて……あたしもう死にさうだわ……あたしもう……』

ラアエウスキイは女のしやくり泣きを耳にした。彼は恐ろしい頭痛を感じた、彼の心臟は激烈に鼓

物賣女。それはあたしが敎へて上げるよ……何が「ぬかるし」だよ……もう好い加減にしてお寢よ。

巡査。（臺所の方へ步きながら）寢ろつて。好いよ……寢るよ……もう寢る時刻だ。（退場）

サチン。どうしておめえ……さうあいつに酷く當るんだ。

饅頭賣。ああするのが一番好いんだよ、お前さん。ああいふ男はなんでも嚴しくしてやるに限るよ。あたしや冗談で一緒になつたんぢやないんだよ。あの人は、あれで軍人形氣なんだよ……お前さん達のやうに唯亂暴なのとは違ふよ……あたしは女だからね、とてもお前さん達の相手にはなれないよ……だのに、あの人はもう飮み始めるんだ……しやうがないねえ。

サチン。そりや助手の選み方が惡かつたんだ。

饅頭賣。さうぢやない——あれで、あの人はなかなか好いんだよ……第一お前さんなら、あたしと一緒になりやしまい。よしまあ、それを納得したところで——とても八日た續きやしまい……あたしの身の皮から髮の毛まで、骨牌で取られてしまふだらう。

サチン。（聲高に笑ふ）ちげえねえ。おれはおめえまで取られてしまふだらう。

饅頭賣。それはさうと、アリヨシカ。

靴屋。あいよ。

饅頭賣。おい——お前はあたしのことを何と言つてしやべつて歩いてるんだ。

靴屋。おれかい。色々によ、返事の出来ることなら、何でも彼でもしやべつた。あいつは女だつて。恐ろしい女だつて。肉と骨と油とで――三十貫以上もあるんだつて。そして膽味噌は――一匁もねえんだつて。

饅頭賣。嘘をおつきよ、お前。あたしは立派な膽味噌を持つてるるよ……だが、そんなことぢやないよ――なんだつてお前は、あたしが巡査をぶつなんて言つて歩くんだい。

靴屋。おめえはあの男の髪の毛を毟つたりなんかするから……ぶつのも同じだと思つたんだ。

饅頭賣。(笑ふ)馬鹿野郎。なんだつて内輪の恥をさらけ出すんだ……そんなことを言はれりやあ、あのんだつて、好い氣持はしやしない…………あの人が飲み出したのも、お前のおしやべりが癪に障つたからだ。

靴屋。そら。そこで、牝鷄までが酒を飲むといふ譯がほんとになつて來るんだ。

サチンと錠前屋笑ふ。

饅頭賣。お前はなかなかしやれ者だねえ。一體お前は何の木に生つた實だい。

靴屋。おいらは世間に持てはやされる人間だ。飛切り上等の人間だ。目が向く方へ――氣が向くなら

帽子屋。(讀書人の寝床の上にて)さあ、みんな寝かしやあしねえぞ。けふは歌ふんだ……夜つぴて歌ふんだ。どうだ、ゾオブ。

人足。歌ふよ。

靴屋。おれは彈いてやらあ。

サチン。したら、おれは聞いてやらあ。

韃靼人。（にやにや笑ふ）ぢやあ、惡魔ブブナ……一杯ついでくれ。『食ふべし、飮むべし――死の迫るまで』か。

帽子屋。ついでやれよ、サチン。ゾオブ、坐れよ。あはは、兄弟。人間仕合せになるにや幾らも入らねえもんだ。例へばおれだ――たつた二三杯やつつけたばかりで……この通りな浮かれやうだ。ゾオブ。始めろ……おれの一番好きな歌を。おれも歌はあ……さうして泣かあ。

人足。（唄ふ）

　　夜でも晝でも。

帽子屋。（唄に加はりて）

　　牢屋は暗い。

　戸烈しく突きあけらる。

男爵。（閾に立ちて叫ぶ）おい……みんな、早く來い……早く出て來い。明き地で……役者が……首を縊つたぞ。

沈黙。一同、男爵を凝視す。男爵のうしろより、ナスチヤ現れ、眼を大きく見張りながら、そろりそろりと机の方へ歩む

サチン。（小聲に）馬鹿め……折角の歌をだいなしにしてしまやがつた。

群盲

人物

僧。

生れつきの男盲三人。

ひどく年をとつた男盲。

第五の男盲。（聾でもある）

第六の男盲。（明暗の區別だけはつく）

祈をしてゐる年とつた女盲三人。

ひどく年をとつた女盲。

若い盲の娘。

盲の狂女。

赤子　狂女の子供。

犬。

深く沈んだ星の下に、永遠の姿をなした古い北方の森――中央、夜の深みに大きな黒い外套に包まれた、ひどく年をとつた僧が坐つてゐる。胸と頭をしづかに後(うしろ)へそらして、死人のやうに動かない。巨大な洞(うろ)な樹の幹に寄りかかつてゐる。その顔は恐ろしく青白くて、動かない蠟のやうな鉛色をしてゐて、紫色の唇が微に明いてゐる。無言の見詰めた目は、永遠の目に見える側から覗いてゐない。古い悲しみと涙で血を流してゐるやうに見える。壮厳な白さを持つた髪の毛は、陰鬱な森の寂寞の内に、それを取巻いてゐる總てのものより光輝を持つた、そして窶れた顔の上にこはばつた房になつて僅に垂れ下がつてゐる。ひどく痩せた手が股(もも)の上で固く組合されてゐる――右手にみんな盲である六人の老人が、石や切株や落葉の上に坐つてゐる――左手には、根こぎにされた一本の木と、岩のかけらを隔にして、やはり盲の六人の女が、老人達と向ひ合つて坐つてゐる。その内の三人は包まれたやうな聲で、休みなしに祈り且歎いてゐる。一人は極めて年をとつてゐる。第五の女は、物を言はぬ氣ちがひらしく、膝の上に眠つてゐる赤子を載せてゐる。第六の女は、不思議に若くて、美しい髪の毛が、體の全體を包んでゐる。女達も老人達も、みんなおんなじゆつたりした鼠色の着物を着てゐる。彼等の多くは、肱を膝の上に載せ、顔を手の上に載せて待つてゐる。總て無用な動作の習慣を失つたもののやうで、この島の息の詰まるやうな不安な物音にも顔を向けない。丈の高い葬の木――水松、枝垂柳、糸杉などが、彼等を護るやうに、影で彼等を包んでゐる。僧の坐つてゐるところから、さほ

ど離れてゐないところに、丈の高い弱々しい水仙の一群が花をつけてゐる。月の光が木の葉の陰鬱さを破らうとするにも係らず、あたりは常ならず暗い。

第一の男盲。(生れつきの盲である)まだお歸りにならないか。

第二の男盲。(これも生れつきの盲である)ああ、起されてしまつた。

第一の男盲。おれも寢てゐたのだ。

第三の男盲。(やはり生れつきの盲である)おれも寢てゐたのだ。

第一の男盲。まだ歸らないのか。

第二の男盲。なんにも來たやうな樣子はない。

第三の男盲。もう院へ歸る時刻だ。

第一の男盲。一體ここはどこだらう。それを知らなくちやいけない。

第二の男盲。お出かけになつてから、ひどく寒くなつた。

第一の男盲。一體ここはどこだらう。

ひどく年をとつた男盲。誰かここがどこか知つてゐるか。

ひどく年をとつた女盲。隨分長く歩いたから、院からよつぽど來てゐるに違ひありませんよ。

第二の男盲。女達は向ひにゐるのか。

ひどく年をとつた女盲。ええ、あなた方のお向うに坐つてゐるんですよ。

第一の男盲。待て、お前達のゐるところへ行つて見よう。（立ち上がつて暗闇を手探りする）――どこにゐるのだ――何か言つて御覧。さうするとゐるところが分かるから。

ひどく年をとつた女盲。ここだよ。わたし達は石の上に坐つてゐるんだよ。

第一の男盲。（進む、倒れてゐる木や岩に躓く）何か間にあるな。

第二の男盲。離れない方が好いぞ。

第一の男盲。お前達はどこに坐つてゐるんだ――こつちへ来るか。

ひどく年をとつた女盲。立ち上がるのも恐いよ。

第三の男盲。なぜ吾々を別にしたんだらう。

第一の男盲。女達の方に祈の聲が聞えるな。

第二の男盲。うむ。婆さんが三人祈つてゐるんだ。

第一の男盲。今は祈をする時ではない。

第二の男盲。院へ帰ればすぐに祈が出来るのに。（三人の老女、祈を續ける）

第三の男盲。おれの側にゐるのは誰だか知りたいもんだ。

第二の男盲。おれがお前の隣りにゐるのだと思ふが。（二人は互に身の廻りを探る）

第三の男盲。どうも手が屆かないな。

第一の男盲。だが、お互にそれほど離れてゐるのではない。（自分の廻りを手で探る。杖で第五の男盲を打つ。第五の男盲鈍い唸り聲を立てる）聾がおれ達の側にゐるんだな。

第二の男盲。おれには、みんなの聲が聞えない。おれ達はたつた今、六人ゐた筈だが。

第一の男盲。やつと分かりかけて來た。女達にも聞いて見よう。何か賴りになることを知らなければならない。婆さんが三人始終祈つてゐるやうだな。あの人達は一緒にゐるのか。

ひどく年をとつた女盲。みんなわたしの側に坐つてゐるんだよ、岩の上に。

第一の男盲。おれは落葉の上に坐つてゐるんだ。

第三の男盲。それからあの別嬪の盲の娘はどこにゐるね。

ひどく年をとつた女盲。祈をしてゐる連中のすぐ側にゐるよ。

第二の男盲。氣ちがひの女と、あれの子供はどこにゐるね。

若い盲の娘。赤ん坊は寢てゐるよ。起しちやいけないよ。

第一の男盲。おや、大層遠くにゐるんだな。おれはお前が、おれのすぐ向うにゐると思つてゐた。

第三の男盲。さあ、それで——大抵——おれ達の知りたいと思ふことだけは、すつかり分かつた。坊

さんが歸つて來るのを待つてゐる間、少しおしやべりをしようさ。

ひどく年をとつた女盲。でも、坊さんは、默つて待つてゐろと仰しやつたよ。

第三の男盲。ここはお寺ではない。

ひどく年をとつた女盲。どこだか分かるもんか。

第一の男盲。話をしてゐないと恐くつていけないよ。

第二の男盲。坊さんはどこへ行つたのだ。

第三の男盲。おれ達を置きざりにして行つてから隨分長い時が立つたやうに思ふな。

第一の男盲。年をとり過ぎたよ。もうこなひだ内から目が見えないやうな樣子だつた。でも、他のものに來られて自分の役をとられるのが厭なので、決して目が見えないなどとは言はなかつた。だがおれはたしかに、もうなんにも見えなくなつたのだと思ふ。おれ達は他の案内者を持たなければならない。あの人はもうおれ達の言ふことは聞かない。おれ達は、數が多くなりすぎた。あの院で物の見えるのは、あの人と三人の尼さんだけだ。しかも、あの人達は、みんなおれ達より年をとつてゐるのだ——きつとおれ達を變なところへ連れて來てしまつたに違ひない。それで道を探してゐるのだ。一體どこへ行つたんだ——おれ達を置きざりにして行くといふ法があるもんか。

ひどく年をとつた男盲。どこか遠くへ行つたんだ。女達にそんなことを言つてゐたやうだつた。

第一の男盲。この頃は、女にばかり話しかけて、おれ達には一向話をしない――おれ達はもう生きてはゐないのか――今に一苦情言つてやらなけりやあ。

ひどく年をとつた男盲。誰に苦情を言ふのだ。

第一の男盲。まだ分からない、だが、今に分かる、今に分かる――だが、一體どこへ行つたんだらう――女達は知つてゐないか。

ひどく年をとつた女盲。あんなに長い間歩いたんで、隨分疲れていらしつた。わたし達の中にちよつとの間お坐りになつたと思ふがね。一體この頃ひどく悲しさうで、ひどく元氣がなかつたんだよ。お醫者さんが死んでから、ひどく恐がつていらしつた。何しろ一人きりだからね。一言も口をお利きにならないのだ。一體どうしたんだかまるで分からないのだ。ところがけふはどうしても外へ出ると仰しやるんだよ。冬の來る前に、日の光に照されてゐる島を、最後に一度見て置きたいと仰しやつてね。冬はひどく長くて寒いらしいね。氷はもう北の方からやつて來てゐるらしいよ。あの方もひどく落ちつかない御樣子だつた。なんでも噂に依ると、この二三日の嵐が川をすつかり溢れさせて、堤防といふ堤防はみんな切れてしまつたといふことだよ。それからあの方は、海が恐いといふことも言つてらしつた。別にわけはないんだが、ひどく氣になるらしいんだね。それにこの島の海岸は、あんまり高くないんだからね。あの方はひどく見たがつていらしつた。だが、何を見たか、

お歸りにはならなかつた――今は、あの氣ちがひの女の爲に、パンと水をとりにいらつしたのだらうと思ふ。夜中に眠ると、遠くへ行かなければならないかも知れないなどと言つていらつしたからね。待つてゐなければ悪いよ。

若い盲の娘。お出かけになる時、わたしの手をおとりになつた。あの方の手は、何かを恐れてゐるやうに震へてゐたの。それからわたしにキスをなすつた。

第一の男盲。おや。おや。

若い盲の娘。どうしたんですつて訊いたらね、どうなるか分からないつて仰しやつたわ。老人の世の中は、もうおしまひになりさうだなどと仰しやつてよ……

第一の男盲。それはどういふ意味だ。

若い盲の娘。わたしには分からなかつたわ。なんでも大きな燈臺の側を通つて行くんだつて、さう言つていらしたわ。

第一の男盲。ここに燈臺があるかい。

若い盲の娘。ええ、島の北の方に。ここからそんなに遠くはないと思つてよ。ここにゐても木の葉の間から燈臺の光が見えると仰しやつていらしたもの。ほんとにけふぐらゐ悲しさうな様子に見えたことはないわ。きつともう幾日も幾日も泣いていらしたに違ひないわ。わたしなぜだか分からな

いけれど、自分まで泣いてしまつたわ。あの方が見えもしないのに。わたしあの方がお出かけになる時、ちつとも氣がつかないでゐたわ。だから、もうなんにも訊かなかつたわ。でも、まじめな顏をしてお笑ひになつたことは分かつたわ。口をつぶつて、もうなんにも言ふまいとしていらしたことは分かつたわ……

第一の男盲。おれ達には、そんなことはまるで仰しやらなかつた。

若い盲の娘。仰しやつた時、聞かなかつたのよ。

ひどく年をとつた女盲。あの方が物を言つてらした時、お前さん達が、がやがやしてゐたのだよ。

第二の男盲。出かける時、「おやすみ」と仰しやつただけだ。

第三の男盲。もうよつぽど遲いに違ひない。

第一の男盲。お出かけになる時、二三度「おやすみ」とさう仰しやつた。寢にでも行く時のやうにね。その「おやすみ、おやすみ」と仰しやつた時、おれの顏を御覽になつたことだけは分かつた。人の顏をぢつと見詰める時は、聲の調子が違ふものだからな。

第五の男盲。可哀さうなのは盲でござい。

第一の男盲。誰だ、そんなばかなことを言ふのは。

第二の男盲。聾だと思ふよ。

第一の男盲。しづかにしろ——今は乞食をする時ではない。

第三の男盲。パンや水をとりにどこまで行つたのだ。

ひどく年をとつた女盲。海の方へお出かけになつたのだよ。

第三の男盲。あの年をして、海の方へ行くものはない。

第二の男盲。ここは海に近いのか。

ひどく年をとつた女盲。うむ。少ししづかにしてゐて御覧、聞えるから。（近くさうしてしづかに岸を打つ海の囁きが聞える）

第二の男盲。祈をしてゐる三人のお婆さんの聲が聞えるだけだ。

ひどく年をとつた女盲。よくお聞き。祈の外に聞えるから。

第二の男盲。うむ。なんだか、そんなに遠くないところから聞える。

ひどく年をとつた女盲。眠つてゐたのだ。それが目を覺したのだと言へるだらう。

第一の男盲。おれ達をこんなところへ連れて來たのが間違つてゐたのだ。おれはあんな音は聞きたくない。

ひどく年をとつた女盲。島が大きくないといふことは、お前さん達だつて知つてゐる。院を出さへすれば、海の音はすぐ側に聞えるのだ。

第二の男盲。おれはまだ一度も聞いたことはなかつた。

第三の男盲。けふはおれ達のすぐ側に來てゐるやうな氣がする。おれはこんなに近くで聞くのは厭だ。

第二の男盲。おれもさうだ。それにおれ達は院を出してくれなどとは頼まなかつたのだ。

第三の男盲。こんなに遠くへ來たことはなかつた。こんなに遠くへ連れて來る必要はなかつたのだ。

ひどく年をとつた女盲。けさは天氣がひどく好かつた。冬になると院の中に閉ぢ籠つてゐなければならないので、その前に最後の暖い日を樂しませてやらうといふ考へでわたし達を連れてお出になつたのだ。

第一の男盲。だが、おれは院にゐる方がよかつた。

ひどく年をとつた女盲。あの方は又かうも仰しやつた。吾々は吾々の住んでゐるこの小さい島について、何かを知らなければならないと仰しやつていらした。御自分もまだ島中お歩きになつたことはないさうだ。この島にはまだ誰も登つたことのない山もあり、人の降りて行くのを恐れる谷もあり、まだ誰もはひつて見たことのない洞穴もある。最後にあの方は、かう仰しやるのだよ。吾々は院の丸天井の下で太陽を待つてばかりゐてはならないつて。あの方はわたし達を海岸まで連れて行きたいと言つていらしつたのだよ。きつとそこへ一人でお出かけになつたのだよ。

ひどく年をとつた男盲。その通りだ。吾々は生きることを考へなければならない。

第一の男盲。だが、見えるものはなんにもありやしない。

第二の男盲。おれ達は今日向にゐるのか。

第三の男盲。太陽はまだ光つてゐるのか。

第六の男盲。さうは思はない。もう大分遅いらしい。

第二の男盲。何時だ。

他のもの達。分からない――誰にも分からない。

第二の男盲。まだ明かるいのか。（第六の男盲に）――お前はどこにゐるのだ――お前は少しは見えるのだ。どうだ、どうだ。

第六の男盲。ひどく暗いやうだな。日の光があれば瞼の下に青い筋が見えるんだ。もう随分さつきから、まるでそれが見えなくなつた。だが、もう今はなんにも見えない。

第一の男盲。おれに言はせると、腹がへつて来れば遅いに違ひないのだ。さうしておれは腹がへつてゐるんだ。

第三の男盲。空を見ろ。きつと何か見えるだらう。

一同頭を空の方へ上げる。生れつきの盲三人だけは、やはり地面を見詰めてゐる。

第六の男盲。おれ達は空の下にゐるのか知ら。それも分からない。

第一の男盲。聲の響く樣子では、洞穴の中にゐるやうだね。

ひどく年をとつた女盲。夕方だから聲が響くんだと思ふよ。

若い盲の娘。月の光が手の上へさしてゐるやうな氣がする。

ひどく年をとつた女盲。星も出てゐるに違ひないよ。わたしには聞えるもの。

若い盲の娘。わたしも聞えてよ。

第一の男盲。おれにはなんにも聞えない。

第二の男盲。おれにはお達の息をする音が聞えるばかりだ。

ひどく年をとつた男盲。女達の言ふことに間違ひはないよ。

第一の男盲。おれは決して星を聞いたことはない。

生れつきの盲である他の二人。おれ達もさうだ。

夜鳥の一群が突然木の葉の茂みに下りる。

第二の男盲。お聞き。お聞き、あれはなんだらう——聞いたか。

ひどく年をとつた男盲。おれ達と空(そら)の間を何かが通つたのだ。

第六の男盲。おれ達の頭の上で、何かがさがさ言つたが、とてもおれ達の手の屆くところではない。

第一の男盲。おれにはそんな音は聞えなかつた——おれは陸へ歸りたい。

第二の男盲。一體ここはどこだらう。

第六の男盲。おれは立たうとして見たが、そこら中刺だらけだ。手を伸ばすことも出來ない。

第三の男盲。一體ここはどこだらう。

ひどく年をとつた男盲。それは到底分かるまい。

第六の男盲。院から餘程遠くへ來てゐるに違ひない。なんの音を聞いても一向に分からないからね。

第三の男盲。おれにはさつきから落葉の匂がする――

第六の男盲。誰か昔この島を見たものはないか。さうして、ここはどこだか分かるものはないか。

ひどく年をとつた女盲。わたし達はこの島へ來た時、もうみんな盲だつた。

第一の男盲。おれ達は生れてから物を見たことはない。

第二の男盲。つまらないことを言つて、騒いだつて爲方がない。あの方はもうぢき歸つて來るに違ひない。もう少し待つて見よう。だが、これからはもうあの人と一緒には外へ出ないことにしよう。

ひどく年をとつた男盲。だが、おれ達は一人で出かけることは出來ない。

第一の男盲。まるつきり出かけないのさ。おれは外へ出ない方が好いと思つてゐる。

第二の男盲。おれ達は外へ出たくなかつたのだ。誰も外へ出してくれなどとは頼まなかつたのだ。

ひどく年をとつた女盲。けふは島のお祭だつたのだ。お祭にはいつでも外へ出るものだ。

第三の男盲。おれがまだ寢てゐる時、おれの肩を輕く叩いて、「さあ、お起き、お起き。もう時間だよ。太陽も出てゐるよ」とかう仰しやつた――ほんとにさうだつたか知ら。おれは太陽を見なかつた。
　生れてからまだ一度も見たことはないのだ。
ひどく年をとつた男盲。おれはずつと若い時分に太陽を見たことがある。
ひどく年をとつた女盲。わたしもさうだ。よつぼど前だ。子供の時分だつた。もうなんにも覺えては
　しない。
第三の男盲。なんだつてあの人は、太陽が出るたんびに、おれ達を外へ連れて出ようとするのだらう。
おれ達にはどつちだつて同じことだ。おれは晝間散歩をしてゐるのか、夜中に散歩をしてゐるのか
　分かつたことは一度もない。
第六の男盲。おれは晝間外へ出る方が好いな。ぼんやりでも大きな白い光があるやうな氣がして、お
　れの目は一所懸命に明かうとするのだ。
第三の男盲。おれは食堂にゐた方が好い。火の側に、けさの火は好い火だつたな――
第二の男盲。あの人はおれ達を庭の日のあたるところへ連れ出せばよかつたのだ。あすこなら、塀が
　あるし、門が締つてゐれば、外へ出ることは出來ないんだ――おれはいつでも、あの戸を締めて置
　くのだ――なぜ、お前はおれの左の肱に觸るのだ。

第一の男盲。おれは觸りはしない。おれの手はお前のところまで屆きはしない。

第二の男盲。でも、誰がおれの肱に觸つたのだ。

第一の男盲。誰も觸りやしないよ。

第二の男盲。おれはもうどこかへ行きたくなつた。

ひどく年をとつた女盲。情ない。情ない。一體ここはどこなんだらう。

第一の男盲。おれ達は永遠に待つてゐることは出來ない。

　　非常に遠くで、時計がしづかに十二時を打つ。

ひどく年をとつた女盲。まあ、隨分院から遠いんだね。

ひどく年をとつた男盲。夜中だ。

第三の男盲。お晝だ――誰か知つてゐるか――教へてくれ。

第六の男盲。おれは知らない。だが、おれ達は暗闇にゐるやうな氣がする。

第一の男盲。もうどこにゐるのか分からない。おれ達は寢過ぎた――

第三の男盲。おれは腹がへつた。

他のもの達。おれ達も腹がへつた。喉が渇いた。

第二の男盲。もうここへ來てからよつぽどになるのか知ら。

ひどく年をとつた女盲。もう何世紀もゐやたうな氣がするよ。
第六の男盲。ここがどこだか分かつて來たぞ。
第三の男盲。時計が十二時を打つた方へ行かなければならない……

突然夜鳥が暗闇で叫び狂ふ。

第一の男盲。お聞き――お聞き。
第二の男盲。誰か他に人がゐるぞ。
第三の男盲。おれはさつきから何かゐると思つてゐた。おれ達の話してゐることを聞かれたぞ――あの人が歸つて來たのか。
第一の男盲。なんだか分からない。おれ達の上にゐるのだ。
第二の男盲。他のものはなんにも聞かないのか――いつでも默つてゐるんだな。
ひどく年をとつた男盲。おれ達だつて聞いてゐるんだ。
若い盲の娘。わたしは羽根の音を聞いたよ。
ひどく年をとつた女盲。ああ。ああ。一體ここはどこだらう。
第六の男盲。どこにゐるんだかやつと分かつて來た……院はあの大きな川の向う側にあるんだ。おれ達は、古い橋を渡つた。あの人はおれ達を島の北の方へ連れて來たのだ。おれ達は川の側にゐるん

だ。ちよいと耳をすませば、川の音が聞えるに違ひない……どうしてもあの人が歸つて來なかつたら、せめて水の側まで行かなければならない……夜も晝も大きな船があすこを通つてゐる……船頭達は、おれ達が岸に立つてゐるのを見つけるだらう。おれ達は燈臺を圍んでゐる森の中にゐるらしい。だが、出口が分からない……誰かおれについて來るか。

第一の男盲。ここにぢつと坐つてゐようよ――待つてゐようよ、待つてゐようよ。大きい川だつて、どつちの方角にあるんだか分かりやしない。それに院の廻りは沼だらけだ。待つてゐようよ、待つてゐようよ……あの人はきつと歸つて來るよ……歸つて來なけりやならないよ。

第六の男盲。どの道を通つて來たんだか、誰か知つてゐるものはないか。ここへやつて來る道々、あの人は說明をしてくれたんだ。

第一の男盲。おれは聞いてゐなかつた。

第六の男盲。誰か聞いたものはないか。

第二の男盲。これからは聞かなきやならないよ。

第六の男盲。誰かこの島で生れたものはあるか。

ひどく年をとつた男盲。おれ達がよそから來たものだといふことを、お前よく知つてゐる筈だ。

ひどく年をとつた女盲。わたし達は、海の向う側から來たのだよ。

第一の男盲。おれは船で死ぬかと思つた。
第二の男盲。おれもさうだ。おれ達は一緒に來たんだ。
第三の男盲。おれ達三人は、おんなじ教區のものだ。
第一の男盲。天氣の好い日には、ここから見えるといふことだ――北の方に。あすこには鐘樓がない。
第三の男盲。おれ達は偶然ここへやつて來たんだ。
ひどく年をとつた女盲。わしは外の方から來たのだよ……
第二の男盲。どこから。
ひどく年をとつた女盲。もう夢にも見ないよ……その話をしたつてなんにも思ひ出しはしないよ……
　もうずつと前のことさ……ここよりはそこの方が寒かつた……
若い盲の娘。わたしは。ずつと遠くから來たんだよ……
第一の男盲。ふうむ、どこから。
若い盲の娘。それは言へないわ。どうしてそんなことが聞きたいの――ここからずつと離れたところよ。海の向うよ。わたしは大きな國から來たんだわ……わたし手つきでなら話すことが出來るけれど、わたし達はもう目が見えないでせう……わたし隨分長い間うろついたわ。でも、わたし太陽の光も、水も、火も、山も、人の顔も、珍しい花も見たわ……この島にはそんなものは一つもないわ。

陰氣過ぎるわ、寒過ぎるわ……わたし一番しまひに、花を見た時から、もう何も分からなくなつてしまつたわ……わたしは兩親も見たし姉妹も見たわ……わたしその時分あんまり小さかつたんで、自分のゐるところが分からなかつたわ……わたしまだ海岸で遊んでゐたのよ……でも、見たことはみんな覺えてゐるわ……或日わたし山の上に雪のあるのを見たわ……わたしふしあはせな人が、分かり始めたわ……

第一の男盲。それはどういふ意味だ。

若い盲の娘。でも、聲で分かるわ……その人達のことを考へてゐないと、却つて前のことがはつきり思ひ出されるわ。

第一の男盲。おれは思ひ出すことなどはなんにもない。

大きな渡り鳥の群が、森の上を騒がしく通り過ぎる。

ひどく年をとつた男盲。また何か空を通つたぞ。

第二の男盲。なぜ、お前はこんなところへ来たんだ。

ひどく年をとつた男盲。誰に訊くのだ。

第二の男盲。若い妹に訊いたのだ。

若い盲の娘。あの人はわたしの目を治してやるつて言つたんだよ。今に見えるやうになるつて言つた

だよ。さうなれば、この島を出ることが出來るんだ……

第一の男盲。おれ達は、みんなこの島を出たいと思つてゐるんだ。

第二の男盲。おれ達は、いつまでもここにゐなければならないだらうよ。

第三の男盲。あの人はもう年をとり過ぎてゐる。もうおれ達を治すまでは生きてゐまい。

若い盲の娘。わたしの瞼は塞がつてゐるけれども、わたしの目は生きてゐるやうな氣がするよ……

第一の男盲。おれの瞼は明いてゐる。

第二の男盲。おれは目の明いた儘眠るんだ。

第三の男盲。目の話はよさうよ。

第四の男盲。お前はここへ來てから、まだそんなに經たないね。さうだらう。

ひどく年をとつた男盲。或晩祈をしてゐると、女の組の方に今まで聞いたことのない聲がした。聲で、お前の若いことが分かつた……おれはお前を見たいと思つた。お前の聲を聞きたいと思つた……

第一の男盲。おれはそんなことには氣がつかなかつた。

第二の男盲。あの人はなんにも話さなかつた。

第六の男盲。人の話に依ると、お前は遠くから來る女のやうに美しいといふことだ。

若い盲の娘。わたしはまだ自分の姿を見たことがない。

ひどく年をとつた男盲。おれ達はお互に顔を見たことはないんだ。おれ達は尋ねたり答へたり、一緒にゐたりしてゐるが、お互に何者だか知らないのだ。兩手で觸つて見たつて分かるものではない。手よりは目の方がずつとよく分かるのだ。

第六の男盲。お前達が日向にゐると、おれには時々お前達の影が見える。

ひどく年をとつた男盲。おれ達は自分達の住んでゐる家をさへ見たことがないのだ。壁や窓に觸つて見たつて、なんにもなりやしない。どんなところに住んでゐるんだか分かりやしない。

ひどく年をとつた女盲。なんでも古いお城だといふことだよ。大層陰氣で、荒れてゐて、坊さんのお部屋にある塔の外には、日がささないといふことだ。

第一の男盲。目の見えないものに光はいらない。

第六の男盲。おれが院の側で羊の番をしてゐるとな、夕方になつて、塔に燈がついたのを見ると、羊は自分で歸つて來るのだ……羊はおれを一度も道に迷はしたことがない。

ひどく年をとつた男盲。何年も何年も、おれ達は一緒にゐるが、お互に顔は知らないのだ。おれ達は永久に孤獨だと言つて好い……人を愛するには目が見えなければならない。

ひどく年をとつた女盲。わたしは時々、目の見える夢を見る。

ひどく年をとつた男盲。おれは夢でだけものを見る……

第一の男盲。おれは夜なかの外には夢を見ない。
第二の男盲。手が働かないでゐる時に、どんな夢が見られるのだらう。

　一陣の風が森を震ふ。木の葉が落ちる。雨のやうに。

第五の男盲。誰だ、おれの手に觸るのは。
第一の男盲。何か落ちて來たぞ。
ひどく年をとつた男盲。上から落ちて來るんだ。なんだか分からない。
第五の男盲。誰だ、おれの手に觸るのは――おれは寢てゐたんだ。寢かして置いてくれ。
ひどく年をとつた男盲。誰もお前の手などに觸りはしない。
第五の男盲。誰だ、おれの手をとつたのは。大きな聲で返事をしてくれ、おれは耳が遠いんだから……
ひどく年をとつた男盲。おれ達にも分からないんだよ。
第五の男盲。誰かが何か知らせに來たのかい。
第一の男盲。返事をしたつてむだだ。なんにも聞えはしないんだから。
第三の男盲。なるほど聾といふものはふしあはせなもんだな。
ひどく年をとつた男盲。おれはもう坐つてゐるのが厭になつた。
第六の男盲。おれもここにゐるのが厭になつた。

第二の男盲。大層みんな離れてゐるやうだぞ……もつと側へ寄らうぢやないか――寒くなつて來た。
第三の男盲。おれは立つのが厭だ、ゐるところにゐる方が好い。
ひどく年をとつた男盲。おれ達の中に何があるんか分からない。
第六の男盲。おれの手は兩方とも血が出てゐるやうな氣がする。おれは立ち上がりたい。
第三の男盲。お前はおれに寄つかかつてゐるんだ――音で分かるよ。

　盲の狂女、烈しく目をこする。泣きながら不動の僧の方へぢつと顔を向ける。

第一の男盲。何か他の音がするぞ……
ひどく年をとつた女盲。あの氣の毒な娘が、目をこすつてゐるんだらう。
第二の男盲。あの子は他のことは決してしないのだ。おれは毎晩聞いてゐる。
第三の男盲。あの子は氣ちがひだ。決して口を利いたことがない。
ひどく年をとつた女盲。子供が出來てからまるつきり、口を利かなくなつてしまつたのだ……しよつちう何か恐がつてゐるやうな様子だよ。
ひどく年をとつた男盲。では、お前は、ここにゐて恐くないのか。
第一の男盲。誰が。
ひどく年をとつた男盲。みんなさ。

ひどく年をとつた女盲。さうだとも、さうだとも。わたし達は、みんな恐いんだ。
若い盲の娘。わたし達は、随分長い間恐いめをした。
第一の男盲。なぜ、お前はそんなことを訊いたのだ。
ひどく年をとつた男盲。なぜ、訊いたのだかおれにも分からない……ここにはなんだかおれに分からないものがある。誰かおれ達の中で、急に泣き出したものがあるやうな氣がする。
第一の男盲。心配することはない。氣ちがひの女だらう。
ひどく年をとつた男盲。いや、何か他にある……何か別のものがあるに違ひない…… おれ達がこんなに恐ろしいのはそればかりではない。
ひどく年をとつた女盲。あの女は、子供に乳をやる時、きまつて泣くのだよ。
第一の男盲。あんなに泣くのは、あの女ばかりだ。
ひどく年をとつた女盲。人の話だと、あの女は今でも時時物が見えるさうだ。
第一の男盲。誰も他のものの泣くのを聞いたことはない。
ひどく年をとつた男盲。物が見えなければ、泣けるものではないからな。
若い盲の娘。あら、花の匂がするわ。
第一の男男。おれには地面の匂がするだけだ。

若い盲の娘。花があるんだよ――近所に花があるんだよ。

第二の男盲。おれには、地面の匂がするだけだ。

ひどく年をとつた女盲。わたしは、風の中に花の匂を嗅いだよ。

第三の男盲。おれには、地面の匂がするばかりだ。

第六の男盲。どこにあるんだ。女のいふことがほんとらしい。

若い盲の娘。あなたの右よ。立つて御覧なさい。

第六の男盲、しづかに立ち上がり、手探りなしながら進む。叢や木につまづきながら水仙の方へ進んで行つて、それを踏み折つてしまふ。

若い盲の娘。あら、葉を折つてしまつたやうよ。お待ちなさい。お待ちなさい。

第一の男盲。花のことなんどで氣をもむな。それより早く家へ歸ることを考へろ。

第六の男盲。おれはもう、元ゐたところへ歸れない。

若い盲の娘。歸らないでも好いわ――お待ちなさい――(立ち上がる)まあ、地面の冷たいこと。もう凍りかけてるわ――(躊躇せずに不思議な青白い水仙の方へ進んで行く。併し、花のすぐ側で根こそぎにされた木と、岩の斷片で遮ぎられる)ここにあるんだけれど――あたし、手が屆かないわ。あなたの側にあ

るのよ。

第六の男盲。おれにはとれさうだ。（そこらに散つてゐる花をとつて、探りながら盲の娘に渡す。夜の鳥が飛び去る）

若い盲の娘。あたしこんな花を昔見たやうな氣がするわ……もう名前は知らないけれど……大層弱々しい花だ。まあ、莖のやはらかいこと。あたしもう、これがどんな花だか分からないわ……これはきつと死人の花だわ。

水仙を髮の毛に挿す。

ひどく年をとつた男盲。髮の毛の音がする。

若い盲の娘。花よ。

ひどく年をとつた男盲。おれ達はお前を見ることが出來ない……

若い盲の娘。わたしもう自分で自分も見られないんだわ……おう、寒い。

この時、森の内に風起り、俄にそして激しく海が、すぐ側の斷崖に打つかつて吠える。

第一の男盲。雷だ。

第二の男盲。嵐ぢやないか。

ひどく年をとつた女盲。わたしは海だと想ふよ。

第三の男盲。海だと――これが海だと――だが、ここからつい二足くらゐのところに聞えるぢやないか――すぐ足下だ、そこら中に聞える――何か他のものに違ひない。

若い盲の娘。あたしの足下にも波の音が聞えるわ。

第一の男盲。風が落葉を吹く。

ひどく年をとつた男盲。女達の言ふ通りらしい。

第三の男盲。今ここへ來るだらう。

第一の男盲。風はこつちから吹いてゐるんだ。

第二の男盲。海から吹いてゐるんだ。

ひどく年をとつた男盲。風はいつでも海から吹いて來るんだ。海はおれ達をすつかり取りまいてゐるんだ。外から風の吹いて來よう道理がないのだ……

第一の男盲。もう海のことを考へるのはよさうよ。

第二の男盲。いや、考へなければならない。ぢきに海はおれ達のところへ來るんだ。

第一の男盲。海だかなんだか分かつたものぢやない。

第二の男盲。おれは兩手を水に漬けられるくらゐ近くに波の音が聞えるんだ。ここにぢつとしてはゐられない。もうきつと海がおれ達を取りまいてしまつたんだ。

ひどく年をとつた男盲。どこへ行かうと言ふのだ。

第二の男盲。どこだつて構はない。どこだつて構はない。おれはもうこの水の音を聞いてゐるのが厭だ。行かう。行かう。

第三の男盲。おや、何か他の音が聞えるぞ――お聞き。

遠くから落葉を踏んで、急いで來る足音がする。

第一の男盲。何かこつちへ來るぞ。

第二の男盲。あの人だ、あの人だ。あの人が歸つて來たんだ。

第三の男盲。子供のやうに小さな足音をさせて急いでやつて來るな。

第二の男盲。けふはなんにも苦情は言はないことにしようぜ。

ひどく年をとつた女盲。人間の足音ぢやないやうだ。

一疋の大きな犬が森の中へはひつて來て、盲人達の前を通り過ぎる――沈默。

第一の男盲。どなたです――どなたです。助けて下さい。隨分長い間待つてゐたんです……（犬立ち留まり、盲人の側へ來て、前脚をその膝の上に置く）おや、おや、あなたはわたしの膝の上に何を置いたのです。これはなんだ……動物だな――犬らしいぞ……おや、おや、犬だ、院の犬だ。さあ、お出で、ここへお出で、おれ達を助けに來たのだ。さあ、お出で。

他の盲人達。お出で。お出で。

第一の男盲。おれ達が助けに來たんだ。おれ達の歩いて來たところを、つけて來たんだ。何百年目かに會つたやうに、おれの手を甞めて、喜んで吠えてゐる。嬉しくつてたまらないのだ。お聞き、お聞き。

他の盲人達。來い。來い。

ひどく年をとつた男盲。きつと誰かの先に立つて駈けて來たんだ……

第一の男盲。いや、いや、ひとりで來たんだ――他に誰も來る音はしない――他に案内者はいらない。
　こんな好い案内者はない。こいつはおれ達の行きたいところへ連れてつてくれるに違ひない。これはおれ達の言ふことを聞くだらう。

ひどく年をとつた女盲。わたしはこの犬の跡について行くのはいやだ……

若い盲の娘。わたしもさうよ。

第一の男盲。なぜだ。この犬の目の方が、おれ達の目よりたしかなのに。

第二の男盲。女達の言ふことなど聞くな。

第三の男盲。空模様が變つたやうだ。息が樂に出來るやうになつた。空氣が澄んで來た……

ひどく年をとつた女盲。海の風がこつちへ吹いて來るんだよ。

第六の男盲。なんだか明るくなつて來たやうな氣がする。きつと太陽が昇るんだらう……

ひどく年をとつた女盲。寒くなつて來たやうな氣がする……

第一の男盲。また道が分かりさうになつて來た。こいつがおれを引つぱつて行く……おれは引つぱつて行く。喜んで醉つぱらつたやうになつてゐる——もう捕まへてゐることが出來ない——ついてお出で、ついてお出で、おれ達は家へ歸るんだ……

犬に引つぱられて立ち上がり、不動の僧のところまで連れて行かれる。さうしてそこで立留る。

他の盲人達。どこだ。どこだ。どこへ行くんだ。どこへ行くんだ——氣をつけろ。

第一の男盲。待て、待て。まだついて來てはいけない。今そつちへ歸るから……犬が立ち留まつた——どうしたんだらう——おや、ひどく冷たいものに觸つたぞ。

第二の男盲。お前、なにを言つてるんだ——もうお前の聲は聞えやしない。

第一の男盲。觸つたんだ——人の顏に觸つたやうな氣がするんだ。

第三の男盲。何を言つてるんだ——もうお前の言ふことは分かりやしない。どうしたんだ——どこにゐるんだ——もうそんなに遠くへ行つてしまつたのか。

第一の男盲。おう、おう、おう——おれはまだなんだか分からずにゐる——おれ達の眞ん中に死人が一人ゐるんだ。

皆　盲人達。おれ達の眞ん中に死人がゐると——どこだ。どこだ。

第一の男盲。おれ達の中に死人が一人ゐるんだ。おれは死人の顏に觸つたのだ——お前達は死人の側に坐つてゐるんだ。おれ達の中の誰かが、急に死んだに違ひない。なぜ、默つてゐるんだ。物を言へば誰が生きてゐるか分かるのに。さあ、お前達はどこにゐるんだ——返事をしてくれ、みんな返事をしてくれ。

狂女と聾を除いて、盲人達順々に答へる。三人の老女、聲を上げる。

第一の男盲。もうおれには、お前達の聲が分からない……みんなおんなじやうな聲だ……聲がみんな顫へてゐる。

第三の男盲。返事をしなかつたものが二人ある……どこにゐるのだ。

杖で第五の盲に觸る。

第五の男盲。ああ、おれは寢てゐたんだ。どうぞ寢かしてくれ。

第六の男盲。あいつではないと——おやあ氣ちがひかな。

ひどく年をとつた女盲。あの子は、わしの側に坐つてゐるよ。あの子の生きてゐることは、音で分かるよ……

第一の男盲。きつと……坊さんだ——あの人が立つてゐるんだ。お出で、お出で、お出で。

第二の男盲。立つてゐるのか。

第三の男盲。ぢやあ死んでゐんぢやない。

ひどく年をとつた男盲。どこにいらつしやるのだ。

第六の男盲。見に行かうよ。

　狂女と第五の男盲を除いて、一同、立ち上がり、手探りなしながら死人の方へ進む。

第二の男盲。ここにゐるのか――これがあの人か。

第三の男盲。さうだ、さうだ。たしかにあの人だ。

第一の男盲。ああ。ああ。おれ達はどうなるんだらう。

ひどく年をとつた女盲。神父様。神父様。あなたですか。どうしたんです――どうなすつたんです……
――お返事を願ひます。――みんなお側へ参つてをります。まあ。まあ。

ひどく年をとつた男盲。水を持つて来い。まだ息があるに違ひないから。

第二の男盲。やつて見よう……おれ達を院へ連れて歸ることくらゐは出来るだらう。

第三の男盲。もうだめだ。心臓の音がしない――冷たくなつてゐる。

第一の男盲。一言も言はずに死んでしまつたんだね。

第三の男盲。なんとか一言言つてくれればよかつたのに。

第二の男盲。随分年をとつてゐたんだな……おれは始めて顔へ觸つて見たが……

第三の男盲。（死骸に觸りながら）　おれ達より丈が高いんだね。

第二の男盲。目は大きく明いてゐるよ。兩手を組んで死んでゐるよ。

第一の男盲。そんな風で死ぬといふのは分からない。

第二の男盲。立つてゐるんぢやないよ。石の上に坐つてゐるんだ。

ひどく年をとつた女盲。ああ。ああ。こんなことがあらうとは夢にも思はなかつた……こんなことがあらうとは……ずつと前から御病氣だつたんだ……けふはよつぽど苦しかつたに違ひない。ああ、ああ——でも、一度も苦しいと仰しやつたことはなかつたんだ。唯わたし達の手をお握りになるだけだつた……それでは分からない……決して分かりはしない……さあ、あの方の前でお祈をしよう。膝を突いて……

女達、跪いて泣く。

第一の男盲。おれは跪くのは厭だ。

第二の男盲。なんの上に跪くか分からないからな。

第三の男盲。あの人は病氣だつたのか……おれ達にはなんとも言はなかつた……

第二の男盲。おれはあの人が出かける時、小さい聲で、何かごとごと言つてるのを聞いた。おれはあ

の若い妹に何か話をしてゐるのだと思つた。何を言つたのだ。

第一の男盲。返事をするものか。

第二の男盲。返事をしないつて――お前、どこにゐるんだ――言つて御覽。

ひどく年をとつた女盲。お前達があんまりあの人を苦しめたのだ。お前達があの人を殺したんだ……もう進むのは厭だと言つて道端の石に腰をかけて、何か食べたいと言つたり、一日ぶつぶつ言ひ通しだつた……わたしはあの方が溜息をおつきになるのを聞いた……あの方はがつかりしておしまひなすつたんだ。

第一の男盲。あの人は病氣だつたんだ。お前はそれを知つてゐたのか。

ひどく年をとつた男盲。おれ達はなんにも知らなかつた……おれ達はあの人を見たこともなかつた……おれ達はこの哀れな死んだ目の向うにあるものを、一つだつて知つたことがあらうか……あの人は少しも苦しみを訴へなかつた。もうおそい……おれは人の死ぬのを三人見たが……こんなのは始めてだ……今度はおれ達の番だ。

第一の男盲。あの人を苦しめたのはおれぢやない――おれはなんにも言はなかつた。

第二の男盲。おれもなんにも言はなかつた。おれ達はなんにも言はずに、あの人について來たのだ。

第三の男盲。あの人は氣ちがひの爲に水をとりに行つて死んだのだ。

第一の男盲。そこでおれ達はどうするのだ。どこへ行くんだ。
第三の男盲。犬はどこにゐる。
第一の男盲。ここにゐる。こいつは死人を離れまい。
第三の男盲。引つぱるが好い。無理に放すんだ、無理に。
第一の男盲。こいつは死人を離れまい。
第二の男盲。死人の側で待つてはゐられない。おれ達はこんな暗闇で死ぬのは厭だ。
第三の男盲。さあ、一緒にならう。散つてはいけない。みんな手を繋がう。みんなこの岩の上に坐ら
う。　他のものはどこにゐるんだ……お出で、お出で、お出で。
ひどく年をとつた男盲。お前はどこにゐるんだ。
第三の男盲。ここだ。ここにゐるんだ。みんな一緒になつたか――もつとおれの側へ來い――どこに
　お前の手があるんだ、お前の手はどこにあるんだ――ひどく冷たいな。
若い盲の娘。まあ、あなたの手の冷たいこと。
第三の男盲。お前、何をしてるんだ。
若い盲の娘。手を目の上に置いてゐたのよ。急に見えて來さうな氣がしたもんだから……
第一の男盲。誰だ、あんなに泣いてゐるのは。

ひどく年をとつた女盲。氣ちがひが泣いてゐるんだ。
第一の男盲。でも、あれはなんにも知らないんだらう。
ひどく年をとつた男盲。おれ達はここで死ぬのらしいな。
ひどく年をとつた女盲。誰か來るだらう……
ひどく年をとつた男盲。誰か來るんだ……
ひどく年をとつた女盲。それは分からない。
第一の男盲。おれは尼さん達が院から出て來るだらうと思ふ……
ひどく年をとつた女盲。あの人達は、日が暮れてから外へ出やしない。
若い盲の娘。あの人達は、一度も外へ出やしない。
第二の男盲。大きな燈臺の人達が、おれ達を見つけるだらうと思ふよ。
ひどく年をとつた男盲。あの人達は、一度も塔から降りて來たことはない。
第三の男盲。だが、きつとおれ達の姿を見るだらう……
ひどく年をとつた女盲。あの人達は、しよつちう海の方ばかり見てゐるんだよ。
第三の男盲。寒い。
ひどく年をとつた男盲。落葉の音をお聞き。もう凍つてゐるらしいよ。

若い盲の娘。まあ、この地べたの堅いこと。
第三の男盲。おれの左の方になんだか分からない音がする。
ひどく年をとつた男盲。海が岩に打つかつて鳴る音だよ。
第三の男盲。おれは女の聲かと思つた。
ひどく年をとつた女盲。わたしには氷が波の下で割れる音が聞えるよ。
第一の男盲。誰だ、そんなに震へるのは。岩の上に坐つてゐるものが、みんな震へるぢやないか。
第二の男盲。おれはもう手を開くことが出來ない。
ひどく年をとつた男盲。又なんだか分からない音がするぞ。
第一の男盲。誰だ、そんなに震へるのは。岩が震へるぢやないか。
ひどく年をとつた男盲。女らしいな。
ひどく年をとつた女盲。一番震へてゐるのは、氣ちがひのやうだよ。
第三の男盲。子供の聲が聞えないな。
ひどく年をとつた女盲。まだ乳を飮んでゐるんだらう。
ひどく年をとつた男盲。おれ達がどこにゐるのか、それが見えるのはあの子だけだ。
第一の男盲。北風の音がする。

第六の男盲。もう星は出てゐないやうだな。雪が降つて來さうだ。
第二の男盲。もうだめだ。
第三の男盲。誰か寢たら起さなくてはいけないよ。
ひどく年をとつた男盲。だが、おれは眠い。
ふいに風が吹いて來て、落葉をつむじに卷き上げる。
若い盲の娘。落葉の音を聞いて――誰かこつちへ來るやうよ。
第二の男盲。風だ。お聞き。
第三の男盲。誰も來やしない。
ひどく年をとつた男盲。今にひどく寒くなつて來るぞ……
若い盲の娘。誰かが遠くで歩いてゐるやうよ。
第一の男盲。落葉の音が聞えるだけだ。
若い盲の娘。誰かずつと遠くで歩いてゐるやうよ。
第二の男盲。北風が聞えるだけだ。
若い盲の娘。誰かこつちへやつて來るのよ。
ひどく年をとつた女盲。ひどくしづかな足音が聞える。

ひどく年をとつた男盲。女達の言ふ通りらしい。

　雪が團々と降つて來る。

第一の男盲。おや、おや、おれの手の上へ落ちた冷たいものはなんだらう。

第六の男盲。雪が降つて來たんだ。

第一の男盲。もつとみんな側へ寄らうよ。

若い盲の娘。お聞きなさい。足音が聞えるわ。

ひどく年をとつた女盲。お願ひだから、ちよつとしづかにしておくれ。

若い盲の娘。だんだんこつちへやつて來る。だんだんこつちへやつて來る。お聞き。

　とたんに盲の狂女の子供が、暗闇で泣き出す。

ひどく年をとつた男盲。赤ん坊が泣いてゐる。

若い盲の娘。見えるのよ。見えるのよ、何か見えるから泣くんだわ。（赤子を自分の腕にとつて、足音が近づいて來るらしい方向へ進む。他の女達、心配しながら、彼女を取り卷いて、ついて行く）あたし會ひに行くわ。

ひどく年をとつた男盲。氣をつけろよ。

若い盲の娘。まあ、どうしてこんなに泣くんだらう――どうしたんだらう――そんなにお泣きでない

——恐いことはないよ。なんにも恐ろしいことはないよ。みんなここにゐるんだから、みんなお前の廻りにゐるんだから——何が見えるんだい——恐がらないでも好いよ——そんなに泣いてはいけないよ——何が見えるんだい——何が見えるか言つて御覽。

ひどく年をとつた女盲。足音がだんだん、だんだん近くなつて來る。お聞き、お聞き。

ひどく年をとつた男盲。落葉に觸る着物の音が聞える。

第六の男盲。女か。

ひどく年をとつた男盲。たしかに足音か。

第一の男盲。海の水が落葉のところへ上がつて來たのだらう。

何い盲の娘。いいえ、いいえ。足音よ、足音よ、足音よ。

ひどく年をとつた女盲。今すぐ分かるよ。落葉の音をお聞き。

若い盲の娘。聞えるわ、もうすぐそこに聞えるわ。お聞きなさい、お聞きなさい——何が見えて。何が見えて。

ひどく年をとつた女盲。どつちの方を見てゐるい。

若い盲の娘。足音のする方ばかり追つかけてゐるのよ——ほら、ほら。外へ向けても、すぐ又そつちを向いてしまふのよ……見えるんだわ、見えるんだわ、見えるんだわ——何か不思議なものが見え

るに違ひないわ。

ひどく年をとつた女盲。（前へ出る）その子をずつと上へお上げよ。さうすると猶よく見えるから。

若い盲の娘。おどき、おどき。（赤子を盲人の群の上へ差上げる）――足音がわたし達の中で留つた。

ひどく年をとつた女盲。ここだよ。このわたし達の眞ん中のところだよ。

若い盲の娘。あなたはどなた。

沈默。

ひどく年をとつた女盲。助けて下さい。

沈默――赤子、更に激しく泣く。

――幕――

牧歌

第一幕

貧しき畫家、畫室の寢椅子に横たはる。雄々しく猛々しき天使、畫室を劃する帷帳より歩み出づ。

畫家。何か用か。

天使。なぜ君は日がな一日寢床にぐづぐつ寢たつきりでゐるのだ。なぜ、少しも動かないのだ。

畫家。ひもじいからだ。弱つてゐるからだ。

天使。起き給へ。外へ出給へ。さうして麵麭を求め給へ。

畫家。厭だ。

天使。神が生業として定めたところのものに餘りに懶惰な者は……

畫家。町の埃の中にある麵麭は見るのも厭だ。それを拾ひたいと思ふ者は勝手に身を屈めるが好い。神はなぜもつと清い食物を與へては吳れないのだ。僕は神の食卓を拒む者だ。

天使。君は罪を犯すものだ。

畫家。いや。神こそ罪を犯すものだ。僕は決してさうではない。

天使。君は神明を瀆すものだ。

畫家。いや。神こそ神明を瀆すものだ。僕は決してさうではない。僕のやうに忠實に神に仕へた者が何處にあらう。僕は神に對して淨い火を淨く持ち續けて來た。何が故に、神は僕に聖い油を拒むのだらう。豚の油でこの火を養ふ事は出來ない。

天使。神が清淨にしたところのものを不淨にしてはならない。

畫家。一體、何の用があるのだ。君は誰だ。

天使。僕は君の天使だ。

畫家。僕の心正しい天使か。

天使。さうだ。

畫家。ほんとか。

天使。頭の頂きから足の爪先まで仔細に檢閲するが好い。何處に虚僞がある。何處に缺點がある。

畫家。君は幽靈だ。幽靈以上のものぢやない。見給へ。僕は飢餓と暗黒に震へて、唯一人塵埃の中に投げ捨てられてゐる。爲に、僕の哀れな頭腦は無の空間に君の姿を描いたのだ。

天使。僕の手を握つて見給へ。
畫家。なぜ。君の手は強さうに見える。併し、手ではない。
天使。君は知らないのだ。
畫家。君は僕を嘲弄するな。僕が疲れ衰へてここに倒れてゐる時に、君の手が、天使の手が、弱く空でさへなかつたら。いや。いや。行つてしまへ。汝空なる幻像、汝……
天使。僕は幻像ではない。
畫家。君は紛糾する沸騰から、泡沫から、瘴氣から生れた大バベルだ。よく分かつてゐる。聞き給へ。僕を葬むる、僕の淨い光を葬むる町の物音を。
天使。いや。友達、君は間違へてゐる。
畫家。幽靈。行つてしまへ。貴樣のメネ、メネ、テケルが書きたいなら何處の壁にでも書け。おれはちつとも怖くはないぞ
天使。起き給へ。春は來た。
畫家。貴樣はおれを笑はせるのか。
天使。笑はせたいと思つてゐる。
畫家。君は僕に苦笑をさせ得るだけだ。君は自分が力であり榮であるやうに口を利くね。僕の空想の

道を借りた權威よ。陛下萬歲だ。

天使。君は川べりに躍る花の香のやうに僕の翼から流れ出る句に氣がつかないのか。牧場の泉が滑らかな小石を越えて細い流れになるのが見えないか。あすこの菫を見給へ。雛菊を見給へ。あの乾いた土手に身を横にし給へ。なかば醉ひ、なかば醒めた白い蝶は、日の光に照り映えて、身を輕々と飛び廻つてゐる。

畫家。ああ遠い故鄕。白い蝶。ああ春。青年の國。自由の國。

天使。何をぐづぐづしてゐるのだ。起きて、僕について來給へ。

畫家。墓へ行くのか。

天使。君の故鄕へ行くのだ。

畫家。おう、ガブリエル。僕は思はず君をさう呼んでしまつた。それは君の詞が豫言のやうに僕の心を導くからだ……しかも僕は君が何者でもない事、君が噓の外何事をも語らぬ事を知つてゐるのだ……おうガブリエル、おう幻像、僕に僕の巡禮しなければならない道を君よりよく知つてゐる。嘗て僕は自分の暗い部屋からその道へ歩いて出たのだ。市街を遠く逃れて、惡酒の臭高い穴倉へ這ひ込まなければならないのだ。見ても嘔氣を催しさうな食物を鵜呑にしなければならないのだ。物の腐つた意見を嗅がなければならないのだ。罪業の惡疫が永遠に浸蝕する所、自暴自棄が神を辱か

しむる所、人間が畜生のおどけ絵のやうに泥の中に轉がつてゐる所、そこが僕の住家だ。僕の道は
そこへ行くのだ。

天使。君は間違へてゐる。

畫家。如何にも間違へてゐる。この町は僕を圍むに一の迷路を以てしてゐる。その迷路を二十年の辛い空しい月日僕は迷つてゐる。その道は刺すやうな濃霧で滿たされてゐる。ここは夜が晝のやうだ、そして晝が夜のやうだ。ここには苦痛の叫びがあると同時に歡樂の叫びがある。この二つの叫びは兄弟だ。雙生兒（ふたご）だ。否、それよりももつと親しい。二つは全く一つのものだ。引き割く事の出來ない一つのものだ。さうして、嗾かけられた動物の一つの鋭い叫び聲が常に響き渡つてゐるのだ。睡眠が睡眠でない。覺醒が覺醒でない。平和それ自身がもう行はれぬ古い死んだ詞だ。おう天使ガブリエルよ。どうか平和を求めて、それを僕に持つて來て呉れ。君の出現は無益だ。君は市場にも道にも寺にも宮殿にも、君の求める白い鳩を見出す事は出來ないだらう。

天使。僕に信を置き給へ。町には門がある。來給へ。

畫家。手を呉れ給へ。それは力のある詞だつた。さあ、僕を僕の門へ連れて行つて呉れ。汝親愛なる平和の君よ……今はじめて僕は君を知つた。靜にその門を開いて、穩に僕を逃がして呉れ。おう、僕は君に賴る。見給へ、僕は今滔々たる大河に浮ぶ木の栓か何ぞのやうに、ひたすら身を任せてゐ

る。僕には多くの人が見出だすやうな勇氣を見出だす事が出來ないのだ。最後の勇氣を戶の外に見出だす事が出來ないのだ。それ故、僕は屢さあ出ようと戶口の握りを手にしながら、いつも後じさりをしてしまふのだ。

天使。だから來給へと言ふのだ。僕に信賴し給へと言ふのだ。

畫家。いや、それは駄目だ。行つて吳れ。

天使。何が君を引き留めるのだ。

畫家。僕の爲事がだ。

天使。その爲事といふのは何だ。

畫家。その爲に僕が生きてゐる、その爲事だ。

天使。君は常にその爲事の爲にのみ生きて來たか。

畫家。無論だ。僕の爲事でなくて、何が僕の生活を義としよう。

天使。誰の前に義とせられるのだ。

畫家。僕の兄弟の前にだ。

天使。君が苦痛の街に見棄てるところのものは決して君の安否を問ふ者ではない。君の爲事の安否を訊問ふ者はない。彼等が去るが好い。嘗て彼等から來たやうに。彼等は君に就いて、君の罪に就

いて、何事も知つてはゐないのだ。さあ來給へ。

畫家。いや、まだ行く事は出來ない。おう幽靈、何處かへ行つてしまへ。君の入用な時には君の名を呼ぶ。君は早く來過ぎた、長くゐ過ぎた。さあ、行つて吳れ。僕は僕が白墨でかいた線を黑板から拭きとる。まだ立つてゐるのか。君は君以上の者になりたいのか。神の天使が吾々人間になる時間は、もう過ぎてしまつたぞ。

天使。また君は間違つた事を言ふ。

畫家。(立つて、夢見心地に、畫架に近づく)さあ。どうしても歸らないと言ふのなら、立つてをれ、まぼろし。おれの筆で貴樣の姿をこのカンワスの上に留めてやるから。靜に立つてをれ。

天使。その繪は何だ。

畫家。井戸の側のラケルだ。

天使。可哀さうな、可哀さうな男だ。君の見た事もないものを、君はどうして描かうとするのだ。君はイスラエルの園の若い强い葡萄の木に就いて何を知つてゐるのだ。君はその若い葡萄の房に、無駄に手を延ばすものだ。君の魂は天の歡樂を渴望してゐる。燃えるやうにそれを求めてゐる。しかも、君の魂はそれが何であるかをまるで知らないのだ。ラケルは美しかつた……

畫家。知つてゐる。

天使。何を知つてゐるのだ。なんにも知つてゐはしない。彼女は祈りながら訥りながら傷み悲しんで神の前に身をひれ伏した。彼女は女であつた……

畫家。おれは夢で一度彼女を見た。

天使。ラケルは美しかつた……君の夢は彼女の影で光つたに違ひないと思ふ程美しかつた。その影の影でも君の畫布に乗れば結構だ。それすら君にはかけまい。

畫家。あゝラケル。ラケル。

天使。溜息をついてゐるな。ヤコブはラケルの爲に七年働いたのだ。だが、その七年も男にとつては七日のやうにしか思はれなかつた。それ程、男は女を愛してゐたのだ。主なる神は、その七年の間にヤコブに與へ給うた惠みより、より深い惠みを人の子に與へ給うた事は未だ嘗てない。

畫家。ラケル、ラケル。お前の影の影の爲に、ヤコブが働いた時の三倍もおれは働いた。だが、それは無駄だつた。

天使。ラケルの爲には一生涯働いても好い筈だ。さうだ。ラケルの爲に――この時代の奮闘と激戰とは、ラケルの爲の奮鬪と激戰だ。しかも、戰ひの間にラケルの影は逃げる。永遠に逃げる。欺かれたる者よ。僕に附いて來るが好い。君は何の爲に、ここに無いものを、いつまでも待つてゐるのだ。僕は夢の國へ、五彩の雲の棚びく國へ君を連れて行くのだ。吾人が渇望するところのものを吾人に

與へて呉れる所は、そこより外にはないのだ。

畫家。あゝ、ガブリエルよ。夢ならもう十分に惠まれてゐる。色樣々な雲霧は僕の心臟と腦髓とを惱まし、僕の頭を窒息させるのだ。僕を導かうとするなら、光の中へ導いて呉れ。若き日の鮮かな日光の中へ導いて呉れ。夢は御免だ。力強い朝に、總ての夢の雲を吹き拂はせて呉れ。夢の無用な全實在を僕に與へて呉れ。

天使。馬鹿だ、君は。夢の無用な實在は死だ。まあ、あれを見ろ。

暗黑。場面漸く變化す。

畫家。ここは何處だ。ガブリエル、君はまだ僕の側にゐるのか。まだどれ程さまよはなければならないのだ。

天使と畫家、二人の漂泊者の如く、時々姿を現す。天使は先導なり。

天使。見給へ。東の方の遠くの小山の上に、細い雲が光つてゐる。あすこから今直ぐ偉大な光が出て來るのだ。それから吾々に或新しい日が生れるのだ。

畫家。咽喉が渇いた。くたびれた。休ませて呉れ。夜は長かつた。道は石だらけだつた。荒れ果てた峽谷や、寂しい峠や、氷の山を這ひ登つては越えた。岩を破つて迸る冷たい川を泳いで渡つた。僕の齒は寒さでがたがた鳴つた。すると又急に熱い波が來て、僕の體は焔の中に浸された。僕はもう

それでくたくたにされてしまつた。僕はここにゐる。もう一歩も進むのは厭だ。

天使。宜しい。では、向うの丘の苔の生へてゐる石まで行つて休まう。何千年かあの場所を空くして來た泉の水を掬んで飲ませてやらう。あの泉は天地の漂泊者を何人生き歸らせたか分からない。泉は今君を生き歸らせるのだ。さうして――ヤコブよ。お前の手を擴げるが好い。お前の上に無花果の實はお前を待つてゐる。お前が取つて食べて呉れれば好いと。

　場面變化す。漸う明け初むる曙光の内に、若い泉のほとりに座せる畫家と天使の姿見らる。逞しき無花果の一樹、岩より生ひ出でて、二人を蔽ふ。牧場と傾斜ゆるやかなる小山の遠景、ところどころに太古の木い

　（間。）

畫家。君、ここが好い――僕は君がこんな場所に住んでる人だとは知らなかつた――おう、ガブリエル。お友達。中人。感謝する。僕はここへ來て救はれた。救はれたやうな氣がする。大慈大悲の直ぐ側へ來て。僕は故郷へ歸つたのだ。父の井戸へ歸つたのだ。父はその永遠に豊富な手で、僕に盃を渡すのだ。燃えるやうな生命にたわわ満ちた果物を僕に呉れるのだ。僕は今彼等に接吻する。果物に接吻する。君に接吻する。さうして、悔いて、顔を伏せる。

　曙光。

天使。ただ、僕は今、神の園に高く翼を擧げる。それが天使の火に燃えてこの若き者の額の印となる

やうに。兄弟よ。この劍がもう吾々に燃えなくなれば、そこには盲人の空な眼瞼があるのみだ——
それは吾人の目が潰れたも同じ事だ——光だ。光の泉だ。富だ。天福だ。天惠だ。聞き給へ、牧の
鈴の音を。

畫家。——なんにも聞こえやしない。僕の耳には、君の聲と僕の聲とが聞こえるばかりだ。他になん
にも音はしない。こんな靜な所があらうとは、僕いまだ曾て知らなかつた。寂しい牧場が綠色に廣
がつてゐる。巨人のやうな幹の上には、大きな木の葉の群がある。微風が若葉の雲を動かすと森が
震へて、きらきら光る——僕はここに庵が結びたい。君は何處を見てゐるのだ。

天使。あの獸の群を見てゐるのだ。ゆつくりゆつくり草を食べながら、ゆるやかな傾斜を上へ上へと
段々この井戸の方へ近づいて來る。

畫家。何處に。

天使。あすこに。そら、鈴の音が聞こえるだらう。

畫家。ああ、やつと鈴の音が聞こえ出した。牡牛が褐色の牡牛に連れられて、あすこをぶらついてゐ
る。牡牛は黑い首を低く垂れて、喘ぎ喘ぎ草を食べながら登つて來る——下の方に牛飼の姿も見え
る。敎へて呉れ。一體、ここは何といふ國だ。誰が住んでゐるのだ。

天使。(手を筒にして呼ぶ)おうい、牛飼。ここにゐるお方が、この土地に暗いのでお尋ねになるのだが、

お前達は誰だ。何處から來たのだ、お前達の牧畜する所は何といふ國だ。

畫家。笑つてゐるやうだな。

天使。なぜ笑ふのだ。返事をしないか――おれは天の使だ。そのおれが聞くのだぞ。もう僅の辛抱だ
――もう獸の鼻を鳴らす音がつひそこに聞こえて來た……（二人の牧人來る）落ちついて詞をかけて
見るが好い。

畫家。お前達は何者だ。

第一の牧者。ラバンの牧者だ。

畫家。この國の名は何と言ふのだ。

第一の牧者。メソポタミア。

天使。お前は怪訝な顔をしておれを見ながら、大層當惑してゐるやうだが、この人達の言ふ事は信じ
ても好いのだ。時に、ラバンはどうしてゐる。お前の御主人は。

第一の牧者。達者だ。

天使。して、ラケルは。

第一の牧者。ラケルだと、おうさ、ラバンの獸の中にも、あれ程野育ちな、あれ程丈夫な仔馬はをり
はせぬ。

第二の牧者。もう少し待つてゐれば、おれ達のあとから、あの娘は小羊を連れて、井戸へ水を飲ませに來る筈だ。

天使。待つてゐる事は出來ない。もう時間が來た。左樣なら――ヤコブ。もうこれから案内者は入らない。ここにゐる若い獸の子供でも迷ふ事はない。僕はこれからこの庭園の父の許へ急いで行かなければならない。強い心で君を愛し、力ある手で君を護り、獸の群をもその保護の下に養ふ、父の許へ。

畫家。（消え行く天使の姿を見送りて）あの人は空間へ飛び込んで行く。翼を帆のやうに廣げて、谷を越え、川を越え、高い高い梢を越えて、靜に飛んで行く。さうして、地面にうつるあの人の影が、急いであの人の後を追つて行く。

第一の牧者。君は見た事もない人だが、一體どこから遣つて來た。

畫家。僕に訊くのか。

第二の牧者。何處の人だか知りたいのだ。

畫家。君等は夢といふものを知つてゐるか。知らぬと見えて、二人とも褐色の頭を振つてゐるな。では、夢の國から來たと言つても分かるまいな。

第一の牧者。これから何處へ旅するのだ。

畫家。もう目的地へ着いたのだ。や、誰か歌つてゐるな……

第二の牧者。ラケルだ。ラケルが父の子羊を連れて井戸へ來るのだ。入らつしやい、ラバンのお孃樣。

畫家。ラケルさん、あなた來たのですか。

ラケル、姿を現す。

ラケル。アナとマグチエル。あたしはお前達を探してゐたのだよ。お前達は何といふ番のしやうをするのだい。お前達の獸は散り散りばらばらになつて、水を探してゐるぢやないか。飲ませてお遣りな。

第一の牧者。わし等はお前さんの兄弟を待つてゐるのだ。わし等も決して弱い方ではないが、二人の力ではこの井戸に蓋をしてある石を動かす事が出來ないのだ。

ラケル。決して弱い方ではないかも知れないが、やつぱり弱いんだわ。でも、どうしたら好いだらう。こんなに子羊が水を飲みたがつて、泣いてゐるのに。

畫家。（[illegible]心して）ラバンのお孃さん、羊をお呼びなさい。わたしが井戸から石をどけて上げませう。――牛飼達、お前達も獸を狩り集めるが好い。大急ぎで水の方へ、ラケルの羊の方へ、さうすると、猛しい獸も、遠くから水を飲みに來るだらう。急ぐのだぞ。急がないと、牡牛が子羊を踏み潰し、羊同志で押し合ひへし合ひして命を失ふやうな騒ぎが起るぞ、急いで行くが好い。

第一の牧者。神様の使にさへ出來なかつた事を、どうしてお前が遣つてのけるか、先つそれを見せるが好い。

畫家。宜しい。（石を井戸より轉ばす）さあ行け。おれの命令通りにするのだ。

牧者等、驚き恐れて去る。

ラケル。まあ、何といふ強いお方だらう。あなたはあたし共にとつて親切なお方らしいから、御挨拶を申さなければなるまい。あなた、若しお望みなら、父の天幕へ御案内いたしますよ。天幕はここからそんなに遠くない谷の蔭に立つてゐるのですわ。

畫家。あなたは天幕に住んでゐるのですか。

ラケル。（尊大に）ラバンは無限の富を持つてゐますわ。あなたが三十日旅をするだけの土地は、みんな父のものです。數知れぬ駱駝や羊や驢馬や牛や山羊が、何里もある土地に一ぱいゐるのですよ。それを養ふ爲にあたし達は始終あつちこつちと旅をして歩くのです――あたしは、そのラバンの娘なのですよ。

畫家。その富がなくても、あなたは富者です。だが、野の花のお孃さん、どうぞ言つて下さい。その富者である、あなたのお父さんが、このわたしを――この貧乏の外なんにも持つてゐない男を――あなたのやうに歡迎して吳れませうか。

ラケル。あなたの目は、長い眠りの後のやうに、おびえ切つてゐますね。おや、レアの聲が聞こえる。

レアや、妹や。ここにお父様の傷を癒す薬草が生えてゐるよ。お父様はいつまでも傷が癒らないと言つて、むれて入らつしやるのだよ。あたし、今それを摘んで、お父様のところへ持つて行かうとしてゐるのだよ。

レアの聲。誰が井戸の石をどけて呉れたの。

ラケル。（躊躇して）あたし知らないよ。

畫家。ラケルさん、なぜそんな事を言ふのです。

ラケル。あの子があなたを見に来ると厭ですもの。あたし今思ひついた事があるのです。あなたをラバンの家へ連れて行くと、父の妻達があなたを取り巻きます。子供達があなたの着物にぶらさがります……食べさせられますわ、飲ませられますわ、話をさせられますわ。だから、その前に、この静なところで、あたし一人にお話をして下さらなければいけませんわ。

畫家。何が聞きたいのです。何でもお尋ねなさい。

ラケル。あなたのお聲が聞きたいのです。それだけなのです。なんでもあなたのお好きな事を仰しやい。何處から来たとか、何處へ行かなければならないとか、何處の國の人だとか……あなたのあたしに打ち明けられる事を。

畫家。では、僕の靈が清くなつて、清い泉から清い水を掬む事が出來るやうになるまで待つて下さい。あなたが見える前に、暗い道を案內して來た天の使が行つてしまつたのです。あの道は一體どこから出發してゐるのだらう。どうか、それだけ知りたいものだ。この無花果の木から、僕は果物をとつて食べました。それを食べると、一時に過去が消えてなくなりました。多くの辛苦と慘ましい漂泊のあとで、僕がこの泉の側に腰をおろすと、忽ち故鄕が僕の周圍に群がつて來て、僕の肩から放浪の荷がおりました。世に棄てられた寂しい僕が、もう寂しくなくなりました。僕は父のそばにゐるのです。愛と護りのそばにゐるのです。

ラケル。カナアンといふ遠い國にゐる父の妹のところから、あたし達と同じ漂泊の牧者の言傳がありました。息子のヤコブを遣はした、それはあたしの父の娘の中から自分で妻を選ぶ爲だと。どうも、あなたがそれらしい。あなたが大族長イサクとあたしの父の妹レベカとの間に出來た息子のヤコブに相違ない……あなたが若しその前觸のあつた人なら、早くさう言つて下さい。さうすればもう他の人は待たないのですから。

畫家。僕がそれです――いや、さうぢやありません。

ラケル。いいえ、確にさうです。

畫家。どうして、それが分かります。

ラケル。空の晴れた眞晝時に、あたしは羊達と寂しく火の側に横になつてゐました。すると、どうしたのか、あたしは、自分の締めてゐた帶を自分で解いて、火の中へ投げ込みました。帶は直ぐと火に呑まれてしまひました。煙が高く空へ立ち登るのを見ると、あたしは神樣に向つて、かう言ひました。主よ、神よ。一人の男がひとりで來て、あたしの爲に大井戸の石を——しかも、賴まれずに——どけて呉れたら——それはヤコブです。

若衆。では、あなたの思ふところの人となりませう。たとひ王でも、僕のやうに迎へられた者はありますまい。おうラケル。あなたの神は僕をここまで連れて來て呉れました。それ故、僕も神がわたしに負はせようとする名を拒みますまい。僕はそれです。僕はヤコブです。

——第一幕終——

ニユウ

人物

ニユウ(ニユウラ)。
夫。
彼。
マリイ、兒守。
コスチヤ。
父。
母。
花屋の番頭。
學生。
舞踏會の客。

門番。

その他の客。召仕など。

場所

或大きな町。

時代

現代。

第一部

（一）

舞踏室の一隅。昼間。時々二人宛組んだ舞踏客が姿を現はす。「Grand rond」「à droite」「à gauche」その他音楽の間を[illegible]舞踏の後見の聲が聞こえる。二三の老婦人がくたびれたやうな顔をして、壁の側に坐つてゐる。

ニユウはクリイム色の踊りの衣裳を着てゐる。丁度一踊り踊つた後らしい。その側に「役人」が立つてゐる。

ニユウ。暑いこと。（扇を使ふ）わたくし、いつか一度、芝居であなたにお目に掛つた事がございましたわ。

彼。芝居で。

ニユウ。丁度あなたの所から三列後に坐つてをりましたのよ。

彼。ほんとに。

ニユウ。そして、あなたがわたくしの方を振り向いて御覽なされば好いのにと思ひましたのよ。おや
あ分かりませんでしたの。

彼。芝居で。いつの事です。

ニユウ。でも、あなた、とうとう振り向いて、わたくしの方を御覽遊ばしましたわ。

彼。もう覺えてゐませんなあ。(笑ふ) 覺えてゐないといふのは失禮に當りさうですが。どうも覺えて
ゐませんなあ。だが、實際あなたを見たのなら、確に覺えて居る筈ですがなあ。

ニユウ。ですから、確に覺えて入らつしやる筈です。

彼。いや、わたくしまだ一度もあなたにお目に掛かつた事はありません。

ニユウ。そして、わたくしは、自分がさう願つたから、あなたがわたくしの方を振り向いて下すつた
のだと思ひましたわ。

彼。何ですつて。

ニユウ。わたくし、あなたのお頭(つむり)の後をぢつと見詰めながら、お腹(なか)の中でかう申しましたのよ。あな

たや、こつちをお向きなさい、あなたや、こつちをお向きなさいつて。

彼。『あなたや』ですつて。

ニユウ。さう、まだお近附きにはなつてゐなかつたのでしたつけねえ。

彼。勿論です。嘸わたくしが馬鹿に見えた事でせうね。人間といふ奴は誰でも後から見ると馬鹿に見えるものです。

ニユウ。すると、あなたがお振り向き遊ばしたのです。どうして覺えて入らつしやらないんでせう。丁度わたくしの側に…………

ニユウ。（彼に）肩をお預けしましてよ。

　青年現はれ、ニユウの前に立ち、身を屈めて挨拶をする。ニユウ、立ち上つて、着物の褄を取る。

　二人の姿見えなくなる。彼、女の跡を見送る。ニユウ、歸つて來る。勞れたやうに笑ふ。青年、ニユウを椅子の所へ連れて行き、身を屈めて挨拶をし、それからどこかへ行つて了ふ。

彼。あなたの側に誰が坐つてゐたのです。

ニユウ。何でございますつて。

彼。今仰しやつたでせう。芝居で、あなたの側に……誰が坐つてゐたのです。

ニユウ。ああ、その事ですか。わたくしの……

丁度この時、一人の男の舞踏客が、バルケツトを滑つて、ニユウの所へ駈けつけて來て、身を屈めて挨拶をするかと思ふと、その腰を抱いて、二人でどこかへゐなくなつて了ふ。彼、びつくりしてそれを見送つてゐる。と、一人の學生が息を切らして、駈けて來て、ニユウの椅子を掴んで、持つて行きさうにする。

彼。この椅子は塞がつてゐるのです。

學生。女の方(かた)に持つて行つて上げるのです。

彼。塞がつてゐるのです。

學生。女の方が椅子が欲しいと仰しやるのです。

彼。でも、これは塞がつてゐるのです。

學生。妙だなあ。（行つて了ふ）

　ニユウと相手の舞踏客、歸つて來る。

舞踏客。どうも飛んだ失禮を致しました。

ニユウ。（着物の綻び目の端を手に持つてゐる）あなたの踊は維納ワルツぢやありませんわ。

舞踏客。六足の維納ワルツなのですがな——確に。どうも。

ニユウ。留針を持つてらして。

舞踏客。留針ですか。いいえ……

彼、留針を女に渡す。

ニユウ。有難う。さあ、これからあなたと仲が悪くなりますよ。(ほころびた着物の端を留針で留める)

舞踏客。(それを手傳はうとして、釦を摘む) もう分かりません。どうもほんとに飛んだ失禮を致しました。(また何だか分からない事を口の中で言つて、女の手を握る) 實際・六足の維納ワルツなのですがた。

實際。(お辭儀をしようとして、後にゐる人に背中をぶつける、そして慌てて振り向く) いやどうも。何とも相濟みません。(消える)

彼。で、あなたの側に誰が坐つてゐたのです。

ニユウ。あんな奴がゐるんですものねえ。え、芝居でですか。わたくしの連れ合ひがゐたのです。

彼。おやあ、あなたはもう結婚して入らつしやるのですね。

ニユウ。(眉毛を上げる) ええ、勿論ですわ。

舞踏止む。ニユウと彼、目をつぶる。音樂も止む。それで、二人の沈默が傳頭められる。

ニユウ。おやあ、あなた、わたくしをまだ娘だと思つて入らしたの。

彼。いいえ、娘だとは思やしません。それは直ぐ分かります。わたしは唯あなたを自由な身體だと思つたのです。

ニユウ。ぢやあ、わたくし自由な身體(からだ)ぢやないでせうか。

彼。でも、旦那様は。
ニユウ。それが何です。
彼。ほんとにさう思つてゐるのですか。(稍長き間)
ニユウ。あなた何か御自分のお話を遊ばせよ。
彼。でも、それはもう分かつてゐるのでせう。
ニユウ。でも、それが果してさうなのだか、どうだか分かりませんもの。
彼。何の話をしたら好いでせう。ええ、或女がわたしを捨てて行つてから、丁度一週間になります。(女ぢつと見る)そら。實に奇態ですねえ。女の方は誰でもこの言葉を聞くと、きつと下を見ます。
ニユウ。何ですつて。わたくし……
彼。いいえ、それは確です。あなた方御婦人は、吾々男子に對して秘密に黨を組んで入らつしやるのです。
ニユウ。でも、あなた、わたくしは下を見たりなどは致しませんでした。
彼。それから、あなたはその事なら知つてゐたとお思ひでせう。
ニユウ。何をですの。
彼。女が逃げた事をです、女が逃げるだらうといふ事をです。あなたはそれを知つて入らしたのです。

唯、あなたの良心がそれを口に出すことを禁じてゐるただけの事です。さうだと仰しやい。

ニユウ。まあ、あなたは面白い方ですわねえ。

彼。ははあ、飽くまで秘密になさるのですね。

ニユウ。あなた、お口惜しいのでせう。

彼。ええ、悲しうございます。でも、わたしはこの悲しみを愛します。わたしは時が過ぎて行くのをはつきり聞いてゐるやうな氣がします。

ニユウ。時が。

彼。時です。Le temps です。わたしはこの悲しみを愛します。わたしは常に或事件の側を通り過ぎて歩いて行きます。わたしは旅のやうに、或事件をどんどん通り過ぎて行きます。前へ、前へと。これは誰もしない事です。ところが、わたしはいつでも唯通り過ぎて行くのです。それが丁度好いのです。さうなければならないのです。

ニユウ。ぢやあ、あなたは死んでから後の生活といふものを信じて入らつしやるのですね。わたくし、それは信じません。どうして、死んでから後……

彼。けど、それは思つたより遙に複雜なものです。わたしは宇宙的の人生といふものを信じます。

ニユウは彼の言ふ所を理解しないのだけれども、それを色にも出さない。と、コンフエッチが何處からか飛

んで来る。紙のリボンがニユウの前に落ちる。ニユウ、その一部をちぎつて、それを彼に渡す。

ニユウ。それに何かお話を書いて下さいましな。

彼。ようございます。

ニユウ。それで足りますか。

彼。十分です。大丈夫、五メエトルはありますから。

ニユウ。お話を書いて、それを今日お目に掛かつた記念に、わたしに下さいましな。

彼。(鉛筆で紙の上に何か書きながら)ええ。

ニユウ。(覗き込んで、讀む)『それは二月の事であつた……』

彼。見ちやいけません。氣になつて書けませんから。

ニユウ。それを後で印刷させてもようございますか。

彼。ええ。

ニユウ。まあ、面白い。丁度紙のなくなる所でお終ひになりますか。

彼。さうする事にしませう。

ニユウ。(笑ふ)まあ、ほんとに面白い。

彼。女の方はいつでもさういふ風に詩人を取り扱ふのですねえ。無理に詩人を強ひて、總ての考へを

集中させて、餘計な事を捨てさせて、肝心な事だけ書かせようとするのです。卽ち、かういふ風に言ふのです。『ここに、わたくしの生涯の五メエトルがあります――これをあなたに差し上げますから――その上にお話を書いて、それをわたくしに下さいまし。』さうして、女の生涯のたつた五メエトルの間を、詩人はその有する總てを以て充たさなければならないのです。しかも、丁度紙がなくなる時分に、うまくお終ひにしなければならないのです。そこへ丁度旦那樣が現はれるといふわけです。

ニユウ。旦那樣が。

彼。でなければ、誰か外の人が。さあ、もう宜しうございます。

ニユウ。（起上がる）まあ。あなたでしたの。（彼に）あなた、わたくしの連れ合ひを御紹介致します。

（二）

（舞臺）此の家の一室。夜、もう朝に近い。ニユウ、chaise longue に半分横になつてゐる。踊りの衣裳がだらしなくなつてゐる。舞踏の外套と帽子が足元の床の上に落ちてゐる。舞臺の後で、若い聲が聞こえる。「ニユウや、可愛いニユウや。」――ニユウ、返事をしない。目をつぶつてゐる。――もう一寸、「目を開けやないか、ニユウ。」――情夫の聲――「お前は綺麗だねえ。僕はお前が可愛くて堪

らない……何か仕度がしてあるかい。』——ニュウ、何か分からない事を小さな聲で獨語のやうに言ふ——夫の聲。『何か仕度がしてあるかい。』

ニュウ。あなた、お腹が減つてらつしやるの。

夫。(戸口に現れる)お前は。

ニュウ。あたしはくたびれてゐますの。

夫。お前は隨分踊つたからな。(時計を仰ぎ見る)實を言ふと、俺は茶が一杯飲みたいのだ。

ニュウ。(氣なしで)誰かゐますか。

夫。ゐない、だが、それは當り前だ。寒いからな。お前なぜ着物を脱がないのだ。

ニュウ。お出掛けになる前に、女中に言ひつけて入らつしやりやあ好かつたのに。

夫。俺はなぜ着物を脱がないのだと聞いてゐるのだ。

ニュウ。あたしくたびれてゐますの。

夫 お前は綺麗だねえ。白い着物はお前によく似合ふねえ、お前……

ニュウ。白ぢやありませんわ。

夫。ぢやあ、何だい。

ニュウ。クリイムですわ。

夫。おやあ、クリイムか。この可愛い小さな手。俺はお前が可愛くて堪らないのだ。お前は踊ると、若い娘のやうに見えるよ。

ニユウ。家へ歸ると、もう若い娘でなくなるんでせう。

夫。(笑ふ)そんな事はない。お前はやつぱり可愛い。

ニユウ。あなた、今まで何處に入らしたの。

夫。俺はお前の踊るのを見物してゐたのだ。(笑ふ)

ニユウ。何を笑ふのです。

夫。それはさうだよ。余程可笑しいのだ。

ニユウ。着物が切れますよ。

夫。また綻びかい。御免よ。俺はお前を遠くから見てゐたのだ。そしてかう考へたのだ。ここにゐる人達はみんな俺の傍に骨を折つてゐるのだとね……分かるかい。

ニユウ。分かりませんわ。

夫。あのお世辭も、あの花束も……あの握手も……

ニユウ。馬鹿な事を仰しやい。握手つて、どういふ握手です。

夫。おやあ——あの夜會の空氣が神經に障ると言つたらどうだ……障らないか。

ニユウ。障りますわ、それがどうしたのです……

夫。妻君が興奮する、目が光つて來る、運動が活潑になつて來る、人を恍惚とさせるやうになつて來る。ところで、舞踏がお終ひになる。男達が女達の手にキスをして、女達の目をぢつと見て、さて引き下がる。その瞬間に亭主が舞臺の上に現れる。すると……

ニユウ。すると……

夫。すると、その總ての興奮が贈物となつて亭主の前へ現れる。實際、そこにゐる總ての人の所へ行つて、禮が言ひたい位のものだ。(冗談ぢやない、茶は飲めるのかしら。(欠伸をする)

ニユウ。どうしてそんなにお茶が飲みたいのです。家へ這入るか這入らないに、直ぐと私に無理を仰しやるのねえ。少し打つちやつといて下さい。いつでも、いつでもさうなのよ。

夫。お前の綺麗なのは俺の罪だらうか。

ニユウ。いつでもそんな事を仰しやるのね。あたしは家へ歸つて、一晩中空想に耽らうと思つてゐましたのよ。戸を締めて、自分の部屋にたつた一人で坐つてゐたかつたのですよ。着物を着た儘で。

夫。馬鹿な子だね。

ニユウ。ええ、馬鹿な子ですとも。それから、あたし手紙を一本書かうと思つてゐたのですよ。誰に宛ててだか、それはあたし自分でも知りませんのよ。多分あなたに宛ててでせう。あたしは自分一

人に隠れてゐたかつたのですわ、あなたに知れてはいけなかつたのですわ。

夫。おやあ、もう書けないのかい。俺が邪魔をして了つたのかい。

ニユウ。もうみんなお終ひになつて了ひましたわ。もうみんな何處かへ、何處か遠くへ飛んでつて了ひましたわ。あたし、くたびれてゐますの、もうなんにも考へられませんわ、もう唯寢たい許りですわ。あたし、もう萎びて了ひましたの。なぜあなたあたしをこんなにしておしまひなすつたの。

夫。でも、俺はお前が可愛いんだもの。

ニユウ。泥坊、あなたは泥坊です、あなたは人の物を盗むのです。

夫。それは、あの、詩人の事かい。お前の……今夜知り合ひになつた。

ニユウ。あの方の關係した事ぢやありません。ほんとにあなたは冷めたい水のやうな方ですねえ、あたしの身體の中で燃えるどんな火花でもみんな消しておしまひなさるのねえ。

夫。それでお前は……お前はどうしたいと言ふのだ。

ニユウ。あつちへ行つて下さい。あたし寢たいんですから。

夫。(部屋の内を、前へ來たり奥へ行つたりする)分からないなあ。若し……

ニユウ。行つて下さい。お休みなさい。

夫、去る。

ニユウ。（立ち上がる、外がもう明るくなつてゐるので、電燈を消す。それからゆつくり着物を脱ぎ始める。衣兜から或品物を取り出して、窓の側へ行く。手の中に小さく卷いた紙のリボンのあるのが分かる。女はそれをゆつくりと廣げて、初めは小さい聲で獨語のやうに讀む、段々聲が大きくなる。きらきらする聲で明るい窓の背景から顏を放す。讀む『それは二月の事であつた。春の細いリボンが地面の上に現れた。誰もそれを知る者はなかつた。唯女だけにそれが分かつた。冬が吹雪と雜踏をしてゐる最中、女はぢつと立つてゐた、女は目の前を飛んで行く紙のリボンから五メエトルの長さを裂いて取つた。そして詩人にかう言つた。何かお話を書いて下さい。目の前を飛んで行く青春から、女は五メエトルの長さのリボンを裂き取つて、手を延ばして、それを詩人に渡して、かう言つた。それへお話を書いて、あたしに下さい……（止める。紙のリボンを摑んでゐた手が、だらりと下がる。女は頭か何かで縛られたやうな形になる）

夫が部屋へ這入つて來る。

夫。ニユウラ。（暫く默つてゐる。それから深い悲哀の調子で、同時に豫言でもするやうな調子で言ふ）ニユウラ、俺は何かあつたやうな氣がしてならない。何だか分からないが……何か事件があつたに相違ない。

ニユウ、頭を夫の方へ向けないで、ぢつと動かずに立つてゐる。紙のリボンが床へ落ちて、廣がる。　幕。

（三）

夫の家の一室。

彼。ほんとにお宅は居心が好いですな。

夫。（彼に刺繍を見せる）これはあれが刺繍をしたのです。

彼。どなたが。

夫。あれがです、ニユウが。これはお前が刺繍をしたんだねえ。

彼。これは面白い。

ニユウ。およし遊ばせよ。くだらない。

夫。あれは鉛筆畫もやります。

彼。へえ、あなた繪もやるのですか。

ニユウ。ほんとに、どうしてそんな事が面白いのです。

彼。面白いぢやありませんか、なぜ面白くないのです。

夫。どういふ不思議な手段で吾々二人が知り合ひになつたか、あなたそれを御存じですか。もうあれ

があなたに話しましたか。お前、まだお話をしなかつたか。
ニユウ。致しません。
夫。簡單に言へばかうです。或溫泉場であつた事です、わたしが或音樂會へ出たのです、そして、ふとあれが母と一緒にゐるのを見たのです。わたしはあれが何者だか知りませんでした。併し、わたしは心の中でかう言ひました。あれにしよう、でなけりや誰も貰ふまい。
彼。それは羨ましいですな。
夫。なぜですか。
彼。一目見て直ぐ『あれにしよう、でなけりや誰も貰ふまい。』と言へるのは幸福です。
夫。さうですな。そこで、吾々は半年以上手紙の遣り取りをしました、一度も會はずに。ここに二人の手紙がみんなあります。(立派な小箱を見せる)
彼。どういふ手紙です。
夫。吾々二人の手紙です。わたしのと、あれのと。
ニユウ。四ポンド以上あります。
夫。どうしてそんな事が分かる。
ニユウ。あたし秤にかけて見ましたの。

夫。いつそんな事をしたのだ。

ニユウ。あたし秤にかけて見ましたの。

夫。何といふ冗談をするのだ。何の爲にそんな事をするのだ。

彼。珍しい事ですな。

夫。（小箱を取る）無論です。併し、どういふ量見でそんな事をするのでせう、わたしには分かりませ
ん。冗談事ぢやありませんからな。

彼。いいえ、その事ぢやありません。わたしが珍しいと言つたのは、かういふ手紙がかうやつて無事に
竝んでゐるのと、あなたがそれに就いて平氣で話をして入らつしやるのを指して言つたのです。わ
たしは、かういふ事があり得ようとは今まで少しも思つてゐませんでした。況やそれが實現される
に於いてをやです。わたしは、かういふ手紙は決して再び會ふ事はない……決して一緒に列ぶ事は
ないと信じてゐました。

ニユウ。どうしてですの。

彼。それは分りません。わたしはこの問題に就いてまだ一度も書いて見た事がございません。

ニユウ。ぢやあ、かういふ手紙はどうしたら宜しいのでせう、あなたのお考へに依ると。

彼。分かりません。まあ大概、裂くか燒くかして了ふやうですねえ。こんな風になつてゐるのはわた

し初めて見ました。

ニユウ。四ポンド以上ありますのよ。

夫。いや、吾々はこれを保存して置きます。コスチヤが大きくなつたら、あれに遣るつもりです。

（机の上に一山の手紙があるのが見える）

彼。（間を置いて）な……成程……息子さんに……

ニユウ。この手紙に觸ると、ほんとに不思議な氣持がしますのねえ。（手紙を調べて、時々讀む）あなた、あたしの手蹟はすつかり變つて了ひましたのね。

彼。手蹟は髪の毛の色と一緒に變つて來るものです。

ニユウ。（顔を赧めて）いつ、あたし、こんな事をあなたに書いて上げたでせう。あたし、こんな事をあなたに書いて上げたでせうか。

夫。お見せ。（妻君の手から冷淡に無頓着に手紙を取る。それで誰でもしなければ、自分の無頓着ぶりに氣もつかない。手紙を讀んで、笑ふ）さうとも。

ニユウ。いいえ、そんな事はないでせう。

夫。ぢやあ、何か、俺がこんな物を拵へて入れて置いたとでも言ふのか。

ニユウ。だつて、そんな事、あたしに書けるわけがありませんわ。馬鹿らしい。

夫。この手紙はみんな、子供が大きくなつたら遣る事に極めてあるぢやないか。

彼。かういふ手紙をいつまでもいつまでも繰り返して讀むといふ事は、悲しむべき事ぢやないでせうか。

夫。こんな事はありません。なぜですか。わたしは時々あれに聞くのです、この文章を書いた時はどういふ氣持だつたとか、あの文章を書いた時はどういふ事を考へてゐたとか。さうして、夜わたしは繰り返し繰り返しこの手紙を讀むのです。

ニユウ。もうこの手紙はみんな死んで了つてゐますわ。

夫。そりやさうさ、併し、その代りに何か外の、新しい物が遣つて來て……

ニユウ。一度讀んだ手紙は死んで了つてゐます。

夫。さうさ、その代りに何か外の物が遣つて來るのだ。

甞。手紙は復活するものです。

夫。どうして手紙が復活しませう。手紙の代りに何か新しい物が、更に好い物が遣つて來るのです。
結婚なして御覽なさい、さうすればそれが分かりますから。

ニユウ、獨語のやうに讀む、そして急いで手紙を隱す。

夫。どうしたのだ。

ニユウ。あの……音樂會の時のです。
夫。どの音樂會。
ニユウ。あの音樂會――秋の。
夫。うむ、俺も覺えてゐる。だが、どうして手紙が復活するでせう。
ニユウ。(手紙をちらと見る)ほんとに、これは好い。(聲を上げて讀む)「あたしはあたしの青春をあなたのお手の内に置きます。どうか大事に納つて置いて下さい。いつか返して頂く時がございますから。」ほんとにさうですわねえ、好いぢやありませんか。
彼。好いですな。それはどちらがお書きになつたのです、あなたの旦那樣ですか、或は……
ニユウ。勿論、わたくしですの。でも、もう今はこんな事は書けませんわ。
夫。あれは時々繪も書いて寄越しました。その内に二つ三つひどく氣に入つたのがあります。御覽に入れませう。(戸口へ行く)
ニユウ。お廢しなさいよ、厭ですよ、あたし破いて了ひますよ。
夫。でも、ひどく氣に入つてゐるのだからな。(去る)
ニユウ。(後から呼びかける)勝手になさい――でも、あたし厭ですよ。
彼。わたくしはもうお暇します。お午からずうつとあなたの側に坐つてゐるのです、もう……(自分

の時計を見る、金の鐘を彈く）大變だ……

ニユウ。いいえ、宵がもう一遍來るまでお待ち遊ばせ。面白うございますから。今度はいつお目に掛かれますの。明日ですか。

彼。明日はちと……

ニユウ。でも、わたくし明日お目に掛かりたうございますの。

彼。宜しい、ぢやあ明日。

ニユウ。まあ、わたくしの我儘なこと。

彼。それで好いのです。

ニユウ。誰の爲に、何の爲に。

彼。それで好いのです。吾々はそれに從はなければなりません。

ニユウ。そんな事を考へるのは廢しませう。あなた御存じ、わたくし始終ハルチナチオンに苦しめられてゐますのよ。始終耳の側で手風琴が鳴つてるやうな氣がして、しやうがないんですの。

彼。……ほんとに鳴つてゐるのでせう。

ニユウ。いいえ、わたくしが何か考へ始めると、きつと手風琴が鳴り出しますの。

彼。それは神經です。

長き間。

ニユウ。（小さい聲で、特別な表情を以て、或手紙を讀む、讀みながらちらつと彼の顏を見詰める）「あたしは我儘者です。浮氣者です。あたしは總ての人から注意を要求します。あたしは男の愛なしには一日も生きてゐられない女です。」

夫、戸口に現はれる、手に走り書いた鉛筆書を持つてゐる。微笑する、立ち留まる、そして聞いてゐる。

ニユウ。（讀む）「あたしはあたしの青春をあなたのお手の内に置きます。どうか大事に納つて置いて下さい。いつか返して頂く時がございますから。」

夫。（箱を落す、顏をしかめる。女の手から手紙を奪ふ。聲の調子が段々鋭くなつて、怒りを帶びて來る）もう讀むのは廢せ。

長き間。今まで聞こえなかつた時計のチック、タックがはつきりと聞こえて來る。夫、手紙をみんな小箱の中へ入れ、それを元の場所へ置く。

夫。（小聲に）もう讀むのは廢せ。

ニユウ。（慌てて、誰にも知れるやうな僞りを言ふ）ああ、頭が痛い。

總てが沈默する。時計がチック、タックと言ふ。

夫。（彼の方を振り向いて、その顏をまともにちらつと見る）さうですね、手紙は復活しますね。——幕。

ピエレットの面紗

――默劇――

人物

ピエロオ。
ピエレット。
ピエレットの父。
ピエレットの母。
アアレヒイノオ、ピエレットの婿。
フレッド
フロレスタン ｝ピエロオの友人
アンネツト。
アリユメツト。
ギゴロオ、若い紳士。

肥つたピアノ弾き。

第二のピアノ弾き。

ワイオリン彈き。

クラリネツト吹き。

ピエロオの家僕。

老紳士數名、老夫人數名
若い紳士數名、若い夫人數名｝婚禮の客として。

場所と時代

前世紀の初めの維納。

第一景。ピエロオの部屋。

第二景。ピエレツトの親の家なる大廣間。

第三景。ピエロオの部屋。

（左右は見物席より言ふ）

第一景

ピエロオの部屋。つつましやかなる裝飾。中央より少し右に、書物机(かきものづくゑ)。その前に、倚り掛かりある椅子。右奥に土耳古風の長椅子。それより前の壁に寄せて、燭臺附きのスピネット。なほ前に煖爐。その上の壁に繪の額。煖爐の上に書物。ずつと前の右に入口の戸。左の前の方に壁鏡、その下に置戸棚、その上に燭臺二つと、小さき室の花瓶、乘りゐる。左奥に食器棚。前の方に、小卓、倚り掛かりのある土耳古椅子、肱掛椅子二つ。右手前に書架、その上にピエレットの畫像。部屋の奥は、大(おほい)なる窓もて外へ突き出でたるやうの建築。市街の鋒頭堡、塔など見ゆ。戸口の側なる着物掛けの鉤にピエロオの外套、帽など掛かりゐる。黄昏。

第一齣

ピエロオ。（衣裳。傳說上のピエロオの衣裳と、古維納(アルト・ホイン)の風俗との混合）書物机(かきものづくゑ)の前に坐り、兩手で頭を支へてゐる。立ち上がつて、部屋を行つたり來たりする。書架の前に立ち留まる。ピエレットの肖像に憫れみを乞ふ、迫る、拒むがごとく遠ざかる、又戻つて來る、畫像の前に跪いて啜り泣く。立ち上がつて、書物机の側へ行き、引き出しを開けて、萎んだ花や、手紙や、リボンなどを引き摺り出し、それらを机の上に撒き散らして、記念の品々を引つ攫き廻す。それから、窓の側へ行つて、顔を向ける、暫くそこに立つた儘でゐる。やがて窓の右にある土耳古風の長椅子に倒れ、身をいけ

反つて、横になつてゐる。

第二節

殆ど全く暗くなる。右手の戸が明いて、玄關の方から、可なり大きな明かりが床の上にさして來る。

家僕が戸口に現れる。手つきで、ピエロテの男の友達や女の友達を、部屋の中へ招ずる。

フレッド、フロレスタン、アンネツト、アリユメツトなどが這入つて來る。これらの人々のうしろに、一人の小さな肥つたピアノ彈きが附いてゐる。

フレッドとフロレスタンが、家僕に御主人は何處にゐるのだと聞く。

アンネツトとアリユメツトは、珍らしさうに部屋の内を見廻す。

家僕。（書物机の前の椅子を指さす）旦那樣はここに坐つて入らしたのです。（本文中、斯く對話風に書かれたる件り、勿論對話劇風にのみ表現せらるべきなり。）

フレッドとフロレスタン。でも、そこには入らつしやらないぢやないか。明かりを持つてお出で。

家僕。玄關から蠟燭に火のついた燭臺を持つて來る、書物机の方へ行く。

フレッドとフロレスタン、これに從ふ。

アリユメット、蠟燭の火を吹き消す。

フロレスタン、女を叱る。

家僕、又火をつける。

家僕。（書物机の前で）でも、つい今しがたここに坐つて入らしたのですがな。

同時五人燭臺を持つた家僕が先きに立てて、部屋の内を一廻り丸く廻る、最後に土耳古風の長椅子の前へ來る、その上にピエロオの寢てゐるのを見つける。

フレッド。僕が揺り起して見よう。

フロレスタン。（フレッドを留めて、家僕に）どうしたのだ、君の所の旦那は。

家僕、肩を竦かす。

フレッド、さてはと思ふ所あり、ピエレットの畫像の乘つてゐる書架を指さして、フロレスタンに、あれを見ろと言ふ。

フロレスタン、合點が行く。

アンネツトとアリユメットは、土耳古風の長椅子の前に立つて、ピエロオに見惚れてゐる。

フレッドとフロレスタンは、第二の明かりをつけて、ピエレットの畫像の前に立つ。

アリユメット。（アンネツトに）ピエロオを起こしてやらうよ。（ピエロオの髮の毛を引つ張らうとする）

アンネツト、それを留める。
アリユメツト、膝をついて、ピエロオに接吻しようとする。
アンネツト、それを留める。
フレツドとフロレスタン、畫像を離れて、二人の女の側へやつて來る。
フレツド、肥つたピアノ彈きに、坐つて彈き出せと合圖をする。
肥つたピアノ彈きは、今まで、笑ひながら、ぼんやりして、戸口の所に突つ立つてゐたのである。
ピエロオは、まだ身動きもせずに、横になつてゐる。
フレツドとフロレスタン、家僕に下がつても好いと言ふ。
家僕、部屋を出る。

第三節

肥つたピアノ彈き、スピネツトの前に坐り、或ワルツを彈き始める。
フロレスタンとアリユメツト、フレツドとアンネツト、手を組んで踊り始める。
ピエロオ、目が覺める。あたりを見廻す。何が始まつたのか合點が行かない、目をこする。飛び上がる、前の方へ來る。

二組の踊り手は、猶ほ踊りを續ける。

フロレスタンとアリュメットは、終に小卓の左の小さい土耳古風の椅子に倒れる。

フレッドとアンネットは、スピネットの側に佇む。

ピエロオは書物机に倚り掛かる。

フレッドとフロレスタンとアンネットとアリュメットは、ピエロオを見て、笑ふ。おのおの一對になつて、ピエロオの前へ出る、身を屈めて挨拶をする。

フレッドとフロレスタン、自分自分の女を引き合はす。

アンネットとアリュメット、しとやかに膝をまげて挨拶をする。

ピエロオ、丁寧に身を屈めて挨拶をする。

フレッド。大層意氣な事をしてゐたね。どうしたのだ。

ピエロオ。聞かないで呉れ給へ。

フロレスタン（心から）何だか言ひ給へな、力を貸さうぢやないか。

ピエロオ。棄てて置いて呉れ給へ、別に力を借りる事もないのだから。

フレッド。當てて見ようか。ピエレットの事だらう。

ピエロオ。どうか、棄てて置いて呉れ給へ。

アンネツトとアリユメツト、急いで畫像へ駈け寄り、畫像を畫架から取り外さうとする。

ピエロオ、その跡を追つて、畫像に手を觸れさせまいとする。兩手を廣げて、畫架の前に立つ。

フレツド。神經が高ぶつてゐるのだ。どうする事も出來やしない。

フロレスタン、ピエロオの手を掴んで、ゆつくり畫像から放し、書物机の所まで連れて來る。

フレツド。ピエロオ、そんな事は頭から叩き出して了へ、ピエレツトの爲に苦しむ値打はない。僕達と一緒に來給へ。

フロレスタン。さう、僕達と一緒に來給へ。

アンネツトとアリユメツト。(ピエロオに迫る)あたし達と一緒に入らつしやい。

ピエロオ、嫌惡の情を身振りに現し、四人の側を逃げて、書物机の前の椅子に腰を掛ける。

フレツドとフロレスタン。(なほピエロオに勸める)僕達と一緒に來給へ。面白く遊ばうぢやないか。好い晩だ。外へ出ようぢやないか。飲まうぢやないか、踊らうぢやあないか、接吻をしようぢやないか。

ピエロオ、坐つた儘で、頭を振る。

フレツド、フロレスタン、益々迫つて來る。

アンネツト、アリユメツト。一緒になつて、拜んだり、媚びを呈したりする。

フレッド、フロレスタン、アンネット、アリユメット、ピエロオの廻りに輪を作つて、ピエロオの廻りを踊り廻る。

肥つたピアノ弾き、スピネットで踊りの地を弾く。

ピエロオ。（起き上がり、腹立たしげに）うつちやつといて呉れ給へ。もう僕は迚も堪へられない。僕はそんな音樂などを聞いてはゐられないのだ。行つて呉れ給へ。（スピネットへ走り寄り、激しくその蓋を閉ぢる。そして、奥の方へ、窓の側へ行つて了ふ）

肥つたピアノ弾き、びつくりしてゐる。

フレッド、アンネット、フロレスタン、アリユメット、訝かしげに、疑はしげに、腹立たしげに、互に顔を見合ふ。

フロレスタン。もう、うつちやつとかう。

フレッド、勝手にさしとかう。

アンネット、アリユメット。しようがないわねえ。

ピエロオ、窓の所に腕を組んで立つてゐる。一組の男女は、ピエロオの前に ironisch（イロオニッシュ） に腰を屈め、さて踊りながら部屋を出て行く。

肥つたピアノ弾き、その跡に附いて行く。

第四節

ピエロォ、冷淡によそを見てゐる。
家僕、這入つて來る。
ピエロォ、直ぐにはそれに氣が附かない。
家僕、もつと側に寄つて來る。
ピエロオ。（一二歩、家僕の方へ進む）何か用か。
家僕。旦那様、ちよつと外へやつて頂きたいと存じますが。
ピエロオ。どうして。
家僕。實はわたくし或女に可愛がられてゐますので、其女の所へ會ひに參りたいと存じますのですが。
ピエロォ、氣を惡くして、横を向く。
家僕、立つた儘、無駄に返事を待つてゐる。
もう一度、頼むやうにピエロォに近づく。
ピエロォ。（また家僕の方へ向く）どこへでも行きたいところへ行くが好い。
家僕、力を入れて禮を言ふ。

ピエロオ。（肝癪を起して）もう好いからなにも言はずに行け、なんにも言はずに。

第五節

ピエロオ。（一人になる。書物机に行く。花と手紙を床に投げる。部屋を行つたり來たりする。着物掛けの釣から、外套と帽子を取る）おれも何處かへ行かう。自由な所へ、寂しい所へ――恐らくは死の國へ。（窓の所へ行く。下の方を見る。ふと何かに氣が附く。胸壁を越えて、身を乘り出す。窓を離れる）さうかしら。いや、おれは夢を見てゐるのだ。（また、窓の外へ身を屈める、明らかに窓の下を、この家の壁に沿うて動いて來る或人の姿を目で追ふ樣子である。ピエロオは、更に身を乘り出す。人の姿はこの家の門の中へ這入つたので、見えなくなつて了つたらしい。ピエロオは疑ひと驚きの表情で、窓から部屋の眞ん中へ戻つて來る。耳を傾ける。もう疑ひはない、階子段に足音がする。ピエロオは玄關の方へ飛んで行く、姿が見えなくなる）

第六節

ピエロオ、まだ外套を着た儘で、併し帽子は無しで、ピエレットの兩手を掴んで、部屋へ這入つて來る、高度の驚愕、顏面に表はる。

ピエレット（ピエレットの衣裳の包ある古維納の花嫁の衣裳。ミユルテの冠。首から肩へ掛けて面紗（ヱエル）、足が利かなくでもなつたやうに突つ立つてゐる、餘りの嬉しさにおどおどした眼つきで、ピエロオを見てゐる。

ピエロオ。おれは夢を見てゐるのかしら、目が覺めてゐるのかしら。そこにゐるのはお前かしら。ここにゐるのは俺かしら。お前がここにゐるといふやうな事が、どうしてあり得よう。

ピエレット。（少し頭を動がす）あたしを正氣に歸らして下さい。さうです、あたしはここにゐるのです。あなたの所にゐるのです。（よろめく）

ピエロオ、女の腕をしつかりつかまへて、小卓の側の左前にある肱掛椅子の一つへ連れて來る。

ピエレット、肱掛椅子に沈む。

ピエロオ。（ピエレットの前にくづ折れ、女の手を幾度も接吻する）もうこれで又總てが好くなつた、わたしはお前を自分の物にすることが出來さへすれば好いのだから、だが、一體どうして……

ピエレット、物言はぬ目で、ぢつと男を見る。

ピエロオ。（立ち上がり、外套を肩から振り落とす）さあ、お言ひ。お願ひだから。お前は何處から來たのだ。わたしにはまだちつとも様子が分からない。

ピエロオ、默つてゐる。何か物音でも聞いたやうに、心配して窓の方を見る。

ピエロオ。女の顔を眺めさせ、急いで窓へ駆け寄り、下の方を見て、窓を閉ぢる。それから戸口の方へ急いで行き、外を覗いて、そこを又閉ぢる。急いで又ピエレットの所へ戻つて来る。

　ピエレット。立ち上がり、ピエロオに向つて、両手を廣げる。

ピエロオ。(女の傍に倒れるやうに戻つて来て、ミユルテの冠に指をさし、面紗に指をさす)わけをお話し。一體どうしたのだ。

ピエレット。(両手を廣げる)入らつしやい。(面紗、肩からずり落ちて、前の方の床に横たはる)

ピエロオ。いや、僕はまた心配だ。お前は何處から来たのだ。

ピエレット。何故そんなに心配なのです。あたしはかうやつてあなたの所にゐるのぢやありませんか。

ピエロオ。(女の手を離す)だが、今までお前は、あの外の世界で、何をしてゐたのだ。

ピエレット。なんにも聞いてはいけません。それはもう済んだことです、あたしは今あなたの所にゐるのです。そしてこの儘あなたの所にずつとゐるのです。(帯から小さい緑の瓶を取り出す。まあ、あたしが何を持つて来たか御覧なさい。)

ピエロオ。それは何だ。

ピエレット。毒薬です。二人で一緒に死にませうね。

ピエロオ。(女の手から瓶を取る)なんだつて。これを二人で飲まなきやならないのかい。

ピエレツト。ええ。

ピエロオ。なぜ死ななきやならないのだ。一緒に逃げよう。その方が好いぢやないか。

　ピエレツト、首を振る。

ピエロオ。（女を窓の所へ連れて來る）御覧、世界は美しいぢやないか。これがみんなわたし達二人のものなのだよ。さ、一緒に逃げよう。

ピエレツト。逃げようですつて。いいえ。何處へ逃げるのです。逃げてどうするのです。二人とも一文もお金を持つてゐないぢやありませんか。一緒に死ぬより外にしようはありません。

　ピエロオ、首を振る。

ピエレツト。どうしても厭なら、あたしあなたをここへ置いて、又出て行きます。左様なら。（行きさうにする）

ピエロオ。お待ち、お待ち。

ピエレツト。待つてどうするのです。

ピエロオ。好いよ……毒薬を飲まうよ。そして一緒に死なうよ。（女を抱いて、一緒に左手にある土耳古風の長椅子へ行く）

　ピエロオとピエレツト、腰をおろす。

ピエロオ、烈しくピエレットを抱く。

ピエロオ、不意に立ち上がる。

ピエレット、坐つた儘で、大きな目をして、ぢつとピエロオを見詰めてゐる。

ピエロオ、左側の食器棚へ行き、それを開いて、葡萄酒の壜を二つと盃を一つ二つ取り出だす。總てを前の方へ運んで來て、机の上に置く。

ピエレットも同じやうに立ち上がり、食器棚へ行つて、饅頭、果物、食卓布、皿、食器などを取り出す。見る間に卓を飾り終る。

ピエロオ、手拍ふ。

二人とも無理に陽氣らしく立ち働く。

ピエレットは、自分の帯から花を取り、置戸棚の方へ急いで行つて、花を小さい花瓶にさす、そして花の活かつた花瓶を卓の上へ持つて來る。

ピエロオとピエレット、手に手を取つて、部屋中を踊り歩く、部屋の明かりを、賑かに附ける。

書物机の上の蠟燭にも、置戸棚の上の蠟燭にも、スピネットの上の蠟燭にも、みんな火を附ける。

ピエロオ、冗談らしく威儀を正して、ピエレットに腕を貸し、女を食卓に案内する。

二人、土耳古風の長椅子に列んで坐り、飲んだり食べたりする。

ピエロオ、ピエレツトに摺り寄る。

ピエレツト、ピエロオに縋りつく。

長い間の抱擁。

ピエロオ。(不意に立ち上がる) さあ、もう好い——

ピエレツト、躊躇する。

ピエロオ、壜を取り、まだ半分葡萄酒の殘つてゐる二つの盃の一つ一つに毒藥を半分宛注ぎ入れる。やがて、盃を擧げ、ピエレツトに盃を打ち合せようと促す。

ピエロオとピエレツト、盃を打ち合はす。

ピエレツト、盃を下に置く。

ピエロオも同じやうにする。

ピエレツト、ゆつくり奥の方へ歩いて行く。

ピエロオ、その跡に從ふ。

窓の側で、二人、もう一度抱き合ふ。

抱き合つた儘で、二人、ゆつくり小卓へ戻つて來る。

ピエロオ。もう好いかい。

ピエレット。ええ。

　ピエロオ、盃を取る。

　ピエレット、躊躇する。

ピエロオ（さげすむやうに笑ふ）勇氣がないのだね。そんな事だらうと思つた。

ピエレット。いいえ、そんな事はありません。あたし勇氣はありますのよ。唯、もう一度キスをして頂戴。ね、さうすればもう好いのですから。

　二人、熱烈に抱き合ふ。

　二人、一緒に盃を唇の所へ持つて行き、長い間、目と目を見合ふ。

　二人、頭を後へ反らす。

　ピエロオ、一息に盃を飲み干す。

　ピエレット、一滴の毒をも唇の内へ注がない。

　ピエロオ、それを見て驚き、氣を失ひ倒れる。

　ピエレット、一度唇から少し放した盃を、又口の側へ持つて來る。

　ピエロオ、嘲けるやうに女の手から盃を叩き落とす。そして、書架の後に、身をのけ反つて倒れる（そこで、ちよつと部屋へ這入つて來たばかりの人には姿が見えなくなる）。

ピエレット。(身をすくめて佇む。ピエロォの前に身を投げ伏し、男の體を掴んで、搖ぶる。接吻する。答がない。再び床から盃を取り上げ、それをピエロォに見せる) 御覽なさい。あたし飲みますわ。(盃を唇へ持つて行く。盃が旣に空になつてゐて、毀れてゐるのに氣が附く。立ち上がる、部屋の中を駈け廻る、困惑して頭を掴む、ミコルテの冠に觸る、身震ひをする。と、何か物音を聞くやうな氣がする、急いで窓の側へ行き、土耳古風の長椅子の上へ恐れ伏す。又前の方へ。ピエロォの側へ來る。心配さうに男を見下ろす) あなた生きてゐるんでせう、さうぢやありませんか。何とか仰しやいよ、ピエロォさん。(段々ピエロォの側へ跪く、男をぢつと見ながら段々に恐怖の色を增して來る。終に男の死んでゐるのに氣が附く。驚きに捕へられて、戸口へ走り寄る、戸を押し開く、戸から外へ走り出る)

幕

音樂、止まずに第二景へ續く。

第二景

大廣間。奧に部屋の內なる廣き階段、前より人の登るが見ゆ。畫の如き燈火。前の廣間の左奧に準備卓子。右にピアノと譜面臺。第一の廣間と第二の廣間との間の右左に上へあがる螺旋階。

第一節

婚禮の宴會。

一對一對になつた客、ワルツを踊る。

老夫人老紳士達は左右の壁に喰つ附いて坐つてゐる。

二人の下男は準備卓子の後に立つてゐて、客に葡萄酒を注いだり、饅頭を分けたりするのに忙しい。

ピアノ彈きと、ヴイオリン彈きとクラリネツト吹きとは舞踏の音樂に骨を折つてゐる。

ピエレツトの父とピエレツトの母と（小さい愉快さうな人達）は準備卓子の側に立つて、客にお世辭を言つてゐる。

アルレキイノー（ピエレツトの婿、丈（たけ）の高い、痩せた、もう左程若くない男で、まつ黒な古維納風の着物を着てゐる、釦鈕の穴に大きな白い花を挿してゐる）不機嫌な顏をして、いらいらしながら腕を組んで、右隅に立ち、舞踏を見てゐる。

ワルツ終る。

一對一對になつた客が、座敷を丸く連（つな）がつて歩き始める。

父と母、廣間の眞ん中へ歩いて出る。

若い紳士達が母と話をする。

若い夫人達が父と話をする。

ギゴロオ、ひどく年の若い舞踏の後見、素敵に立派な着物を着て、廣間の内を忙しさうにあつちへ行つたりこつちへ來たりしてゐる。今準備卓子の側にゐたかと思ふと、直ぐ音樂者の側に來てゐる、さうかと思ふと、いつの間にか又一人一人の女の踊り手だの男の踊り手だのの側に來てゐる。

二三の踊りの組、準備卓子へ行く。

父は上機嫌で、二人の若い夫人を準備卓子へ案内する。

二人の若い娘、アアレヒイノオの側へ行つて、笑ひながら彼と話をしてゐる。

アアレヒイノオの顔はやはり不機嫌である。

二三の客、父及び母と盃を打ち合せる。

父、酒を注いだ盃を二つ持つて、アアレヒイノオのゐる所へ行き、その一つを婿に渡す。

父、アアレヒイノオと盃を打ち合はし、それから婿を抱く。

廻りに立つてゐる人々、喝采する（但し手を叩くのではない）。

ギゴロオ、紳士達に指図をし、夫人達と次ぎの踊りの約束をさせようとして、忙しさうに廣間の内を行つたり來たりする。

一對一對になつた客、カドリイルを踊る用意をして列ぶ。

ギゴロオ。（アアレヒイノオに）あなたも一緒に踊らなければいけません、あなたはあなたの花嫁さんと組におなりなさい。

アアレヒイノオ、眞面目に頷き、廣間の内を見廻す。

カドリイル始まる。

ギゴロオ、アアレヒイノオのまだ一人で立つてゐるのを見て、音樂に中止を命ずる。

アアレヒイノオ。（ギゴロオに）ピエレット嬢はまだ出て來ないのだ。きつと、上の自分の部屋でぐずぐずしてゐるのだらう。構はずにカドリイルを續け給へ。

ギゴロオ。いいえ、それはいけません。（母の側へ走り寄る）アアレヒノオさんはお相手の御婦人なしで入らつしやいます。ピエレット嬢が入らつしやらないのです。

母。（驚いて、廣間の内を見廻す）ピエレットがゐませんで」ああ、分かりました。自分の部屋にゐるのです、着物を着換へて、旅へ出掛ける仕度をしてゐるのです。

父。（そこへやつて來る）ぢやあ、上へ行つて、連れてお出で。

母、右の方へ急いで去る。

ギゴロオ、音樂者に合圖をする。

音樂者、メヌエットを奏し始める。

カドリイルを踊る筈で列んだ舞踏客、メヌエットを踊る。アアレヒイノオ、その間に、ずつと奥の方へ下がつて廣間の階段を昇つたり降りたりしてゐる。

母。（歸つて來る、急いで父の側へ行く、父を前の方へ引張つて來る）ピエレットは上にゐないのですよ。

父。お前忙ててゐるのだ。

母。いいえ、たしかにゐないのですよ。

父。そんな筈がないぢやないか。

アアレヒイノオ。（不意に二人の側へ現れる）ピエレットは何處にゐるのです。

母。（狼狽して）今、直ぐ來るでせうよ。

アアレヒイノオ。（迫るやうに）ピエレットは何處にゐるのです。

母。（愈々まごついて）それは、わたし知りません。

アアレヒイノオ、母の腕を摑む。

父、二人の間へ割つて這入る。

アアレヒイノオ。（床を踏む）ピエレットは何處にゐるのです。

舞踏の客、何か事件の起つたのに氣が附く。

舞踏の音樂、止む。

アアレヒイノオと父と母との團りの側にゐる一對の舞踏客、直ぐと悟つて、それを次の一對の舞踏客に知らせる。

それからそれと、話が傳はる。

騷ぎが大きくなる、總ての人が、アアレヒイノオと父と母との周圍に集まる。三人は今廣間の眞ん中に立つてゐる。

アアレヒイノオ。威嚇する）わたしは恐ろしい復讐をしてやる。この家を燒いてやる。みんなを殺してやる。

ギコロオ。（そこへ來る）まだ家中すつかり探し切らないのでせう。（娘達に）どうか皆さんで探して下さい、方々落ちなく探して下さい。

若い娘達、方々へ分かれて這入る、二三の娘は階段を越えて、あちらこちらに走る。

若い紳士達は一團まりに固まつて立つてゐる。

アアレヒイノオは、前の方で大股に部屋の内を行つたり來たりしてゐる。

父と母とは、右の稍奧の方で、お互に叱り合つてゐる。

若い娘達。（段々に歸つて來る）ピエレットは何處にもゐません。

アアレヒイノオ、憤怒の餘り、物狂ほしくなる。準備卓子の側へ行つて、二三の盃、壜などを叩きつけて毀す。父と母とに肉薄するやうな態度をする。ピアノの側へ行つて、調律鍵をぶち毀す、音樂者のワイオリンを折る、クラリネツトを音樂者の手からもぎ取り、それを叩き毀して床の上へ投げ出す。さて、階段を越えて、奧の方へ驅けて行く。

第二節

アアレヒイノオがずつと奧の方へ行つたかと思ふと、向うからピエレツトがやつて來る。

アアレヒイノオ、ピエレツトの手を掴んで、前の方へ引き摺つて來る、部屋の眞ん中に突つ立つ。

他の人々、びつくりする。

一二の人、その側へ寄らうとする。

アアレヒイノオ、彼等を押しのける。

父と母とが側へ寄らうとする。

アアレヒイノオ、これをも押しのける。

アアレヒイノオとピエレット、廣間の眞ん中に立つ。

他の人々、離れて二人を遠くから取り卷いてゐる。

アアレヒイノオ。（ピエレットに）お前は何處にゐるのだ。

ピエレット。あたしの部屋にゐました。

アアレヒイノオ。それは嘘だ。

ピエレット。庭へ散歩に行つてゐたのです。

アアレヒイノオ。俺達はお前を探したのだ。お前は家にもゐなかつたし、庭にもゐなかつたのだ。

ピエレット。あたしはそれより外に御返事は出來ません。さあ、一緒に踊りませう。

アアレヒイノオ。いいや、先づお前は俺に返答しなければならない。

ピエレット。踊りませう。

アアレヒイノオ。先づ返答をおし。

父、母、ギゴロオ、若き紳士達、その側へ寄つて、アアレヒイノオを宥めようとする。

アアレヒイノオ、みんなの言ふ事を聞かない。

ギゴロオ、音樂者に合圖をする。

音樂者、困惑して、毀れた樂器を指さす。

ギゴロオ。構はないから、やつて見れ給へ、それでもやれるよ。

音樂者、樂を奏し始める。急調のポルカ。樂器、氣味の惡い音を出す。

ギゴロオ。(廣間の眞ん中へ歩み出て)舞踏、舞踏。

ピエレツト、やけ氣味な、醉つてゐる人のやうな手つきをして、アアレヒイノオの側へ寄つて來て、これにしなだれる。

アアレヒイノオ、暫くの間、ぢつと女を見詰めてゐる、と、女を抱いて踊り始める。

總てが又、秩序を回復したやうに見える。

不意に、奥の方から死んだピエロオの、極めて緩く歩いて來る姿が見える。これはピエレツトだけに見えるのである。

ピエレツト、驚いて舞踏をやめ、自分の側へ歩いて來る。ピエロオを指さす。

他の人々にはピエレツトがどうしたのだか分からない。

ピエロオは、廣間に通つて、眞ん中まで來ると、ピエレツトの前に立ち留まり、消えてなくなる。

ピエレツト、幽靈を自分の幻想として退け、勇氣を回復する。

他の人々、又舞踏を始める。

ピエレット、アアレヒイノオと一緒に準備卓子の側へ行く。下男に何か飲む物を命ずる。

突然、下男の代りに、死んだピエロオが、準備卓子の後に立つ。ピエレットに一盃の葡萄酒を注ぐ。

ピエレット、よろめき倒れる計りに驚き、追はれる者のやうに、ピアノの方へ逃げて行く。

アアレヒイノオ、その跡を追ふ。

死んだピエロオ、消える。

アアレヒイノオ。どうしたのだ、どうしたのだ。

ピエレット。何でもありません、何でもありません。もう済んで了つたのです。(慄へながら、面紗で顔を隠さうとする。)

アアレヒイノオ。(ふと氣がついて)こら……

舞踏の音樂、止む。

アアレヒイノオ。お前は面紗を何處へやつた。

ピエレット、自分の首と肩を摑む。

アアレヒイノオ。面紗を何處へやつた。

ピエレット。知りません。

アアレヒイノオ。外へ出てゐた間に、面紗を無くしたのだな。何處へ面紗をやつた。何處にお前はゐたのだ。

ピエレツト。放して下さい。

アアレヒイノオ。面紗を持つて來なけりや承知しないぞ。

ピエレツト。でも、何處にあるのだか知らないんですもの。

途端に、死んだピエロオ、手に面紗を持つて、舞臺の奥の方に現はれる、そしてほんの少し前の方へ出て來て、廣間の端に立ち留まる。

ピエレツト、死んだピエロオに駈け寄る。

アアレヒイノオ、その跡を追ひ、女の手をつかまへる。

死んだピエロオ、面紗を持つた儘、遠ざかる。

ピエレツト、面紗を掴まうとする。

アアレヒイノオ、寸時も女の手を放さない。

ピエロオ、面紗を持つた儘、消える。

ピエレツト、幽靈の跡を追ふ。

アアレヒイノオ、女を離れない。

二三の若い紳士、その跡を追はうとする。

アアレヒイノオ、振り向いて、誰れも附いて來てはならぬと云ふ。

幕

音樂、止まずに第三景へ續く。

第　三　景

第一景と同じ部屋。

第　一　篇

ピエロオ、書架の後の床の上に、身をのけ反つて、死んで倒れてゐる。

面紗、暗い部屋の薄明の中に、白く光つて落ちてゐる。蠟燭はみんな根元近くまで燃え下がつてゐる、二三の蠟燭はもう燃え盡きて了つてゐる。

部屋は一二瞬間全く空虚である。

戸口の戸が明く。

アアレヒイノオとピエレットが這入つて來る。

アアレヒイノオは、しつかりピエレットの手をつかまへてゐる。

ピエレット。(面紗の落ちてゐる所へ駆け寄り、身を屈めて、それを拾ひ上げる)さあ、ありました。行きませう。

アアレヒイノオ。いや、待て。一體ここは何處なのだ。(部屋の中を行つたり來たりする。と、ピエロオの前に立ち留まり、驚いて身を引く。)でも、まだピエロオが死人だとは思はない、醉つぱらひだと思つてゐる。ピエレットの方へ振り向く)成程、さうだつたのか。この男と一緒にゐたのか。(食事の殘りに目をつける)ここでお前達は一緒に食つたり飲んだりしたのか。ここであいつはお前を抱いたのだな。待て。(又、ピエロオのの方へ行かうとする。)

ピエレット、男に飛びついて、それを留めようとする。

アアレヒイノオ、女を振り拂ふ。

ピエレット、窓の方へ逃げて行く。

アアレヒイノオ。(ピエロオの前に膝を突いて)畜生め、犬め。お前は誰だ。返事をしろ。返事をしろ。立て。(ピエロオの肩を摑んで、ピエロオをゆすぶる)

死んだピエロオ、ばつたり床の上へ倒れる。

アアレヒイノオ、驚いて、身を引く。

アアレヒイノオ。（壁の側に手足を竦めて立つてゐるピエレットの所へ行く）お前知つてゐるのか。

ピエレット。ええ。

アアレヒイノオ（思ひに沈んで、部屋の内を、奥へ行つたり、前へ来たりする。やがて又、ピエレットの側へ戻つて行つて、長い間、ぢつと女の顔を見る）どうして呉れよう。（或考へが浮ぶ。嘲けるやうに高く笑ふ。再び、死んだピエロオの側へ戻つて行つて、これを抱き上げようとする。）

ピエレット、驚いて、前の方へ避けて出る。

アアレヒイノオ、女を押しのけ、ピエロオの死骸を掴んで、土耳古風の長椅子まで引き摺つて来ると、それを椅子の前の方の端に倚り掛からせる。

ピエレット、驚いて、部屋の隅へ逃げ込み、そこからアアレヒイノオのする事を見てゐる。

アアレヒイノオ、ピエロオに對した机の上に腰を掛ける。二つの盃に酒を注ぐ。その一つを手に捧げて、ピエロオの爲に飲む。それから、悪魔のやうに薄笑をしながら女を目交ぜで呼ぶ。

ピエレット、手足を竦めて、突つ立つた切りでゐる。

アアレヒイノオ、床の上へ降り、命令するやうにピエレットを目交ぜで呼ぶ。

ピエレット、のろのろとやつて来る。

アアレヒイノオ、それを出迎へ、部屋の眞ん中で腕を貸してやり、机の側の肱掛椅子へ女を案内

し、酒の注いである盃の一つを女の手に持たせ、これと盃を打ち合はす。

ピエレット、飲めない。

アアレヒイノオ。飲まないか。

ピエレット、飲む。

アアレヒイノオ、ピエレットの側へ坐り、女に摺り寄り、女を抱いて自分の方へ引き寄せようとする。

ピエレット、戦慄する。

アアレヒイノオ、やさしくなる。

ピエレット、飛び上がる。肱掛椅子が倒れる。ピエレット、奥の方へ、窓の隅まで飛ぶやうに逃げて行く。

アアレヒイノオ。(その跡を追つて行き、戀男の真似をする)可愛なる嬢よ、僕は君を崇拝します。(言いて、女を自分の方へ引き寄せようとする)

ピエレット、逃げ廻つた揚句、丁度死んだピエロオの後の左へ立つ事になる。

アアレヒイノオ。(立ち上がつて、ピエロオの側へ行き、その前に身を屈める、それからピエレットの前に身を屈める)お楽しみでございます。(と言ふかと思ふと、戸口の方へ行く。

ピエレット、段々に驚いて來る樣子で、男の運動に從ふ。

アアレヒイノオ、戸口の所で、もう一遍振り向いて、嘲けるやうに身を屈める。

ピエレット、男の側へ走り寄つて、その前に跪く。

アアレヒイノオ、女を拂ひのけ、戸の外へ出て、外から戸に鍵をおろして了ふ。

第　二　篇

ピエレット、戸を叩く。窓の方へ驅けて行つて、窓を明ける。アアレヒイノオの出て行くのを見て、それを呼び戻さうとする。男の姿が見えなくなつて了ふ。又、戸口へ戻つて來て、戸を押して見ても、ゆすぶつて見ても、一向效がない。部屋中を走り廻つて、何處かに出口はないかと探す。何處にも出口はない。とうとう又、死んだピエロオに向ひ合つて立つ事になる。長い間、ぢつと死んだ男の顏を見る。やがてそこを逃げる。又、戻つて來る。ピエロオに向つて何か領く。更に恐怖に襲はれる樣子で、壁に喰つ附いて、部屋中あつちこちと逃げ廻る。その運動、段々[illegible]狂氣に陷つて來る。又、ピエロオの後へ來る。土耳古風の長椅子の後から、のろのろと死んだ男の前へ忍び寄る。半分跪くやうな姿勢で、男の顏をぢつと見る。男の前に身を屈める。それから踊り始める。初めは死體の前だけで、それから段々弓を大きく書いて、しまひには部屋中一ぱい

に踊り廻る。と、踊りを止める。更に新らしい力で又踊り續ける爲に。戸を叩く音。

ピエレット、息も切れ切れに、力も拔け果て、目に陰鬱な光を持つて、死んだ男の側に近寄る。

更に強く戸を叩く音。

ピエレット、床の上に倒れて死ぬ。死んだピエロオの足元に。

戸が推し開かれる。

第三節

フレツド、フロレスタン、アンネツト、アリユメツト、這入つて來る。

曙(あけぼの)の光がさして來る。やがて日の出。

フレツド、とフロレスタン、笑ひながら娘達の方を振り向く。二對の男女、手に手を取つて、ピエロオとピエレツトの直ぐ側まで踊つて來る。出來事に氣が附くと、驚愕して逃げ去る。　幕

譯者附記。これは、シユニツツラアが書いた初めての Pantomime で、一九一三年の四月、伯林シヤアロツテンブルクの Deutsches Opernhaus で、初めて演ぜられたものである。初演の晩には、シユニツツラアが維納から來て、舞臺の上で挨拶をした。自分はスカンヂナヰアの旅行から歸つて來て、初演の晩から一二回遅れ

てこれを見た。同じ作者の有名な戯曲『ベアトリイチエの面紗』を書き代へた物には相違ないが、自分には全く別な感じがして面白かつた。言葉の詩人と言はれるこの作者が、初めて言葉なしの詩を書いたといふので、當時は中々の評判だつた。曲は伯林王立音樂院の教授で『伯母シモオナ』といふ一幕のオペラを書いた事のある Ernst von Dohnányi が附けたものだが、二幕目の樂器の毀れた後、三幕目の終の狂舞のあたりなどが中々好かつた。言ふまでもなく默劇は音樂なしには演ぜられない。默劇のテクストは詩人の落想に過ぎない。舞臺に上つた默劇は、全く音樂家と振附との作品である。ピエロオに扮した Einar Linden も、ピエレツトに扮した Eva Galafrés も自分には氣に入つた。音樂の指揮は作曲家が自らした。自分は全體、この默劇の見物記が書きたかつたのだが、音樂の曲譜が手に入らないし、筋を間違へたりなどしても作者に申譯がないと思つて、見物した時芝居の中で買つた臺帳をその儘譯して紹介する事にしたのである。默劇の臺帳はどういふ風にして書くものかといふ事を知らせるのも無駄ではないと思つたから。

近頃、露西亞から來た雜誌を見ると、このセエヅンには、この默劇がモスコオの自由劇場（私の行つた時にはまだ無かつた、この冬初めて開場した新式オペラの劇場である）の舞臺に上つてゐる。ここでピエレツトを勤めてゐるエオネンといふ女優は去年まで美術座にゐた人で、私は『ペエア、ギュント』のアニトラの踊りだの、『青い鳥』のミチルだの、『生ける屍』のチエエガニの娘だのを見て、ひどく感心した人である。まだ年は若いが、藝は中々巧い。どうして、美術座を出てオペラの劇場へ這入つたのであらうか。

オセロオ

人物

ヱニスの公爵。
ブラバンシオ　元老院議官。
他の元老議官達。
グラシアノオ ┐
ロドヰコオ　┘ブラバンシオの近親。
オセロオ　ムウア人、將軍。
キヤシオ　オセロオの副官。
イヤゴオ　オセロオの旗手。
ロデリゴオ　若きヱニス人。
モンタノオ　サイプラス島の總督。

道化役　オセロオの臣下。
傳令。
デスデモオナ　ブラバンシオの娘。
エミリア　イヤゴオの妻。
ビアンカ　娼婦。
其の他士官、紳士、使者、樂士、水夫、從者など。

舞臺

第一幕はヹニス。後の幕は總てサイプラス。

第一幕

第一場　ヹニス。街上

ロデリゴオとイヤゴオ、登場。

ロデリゴオ。いや、もうなんにも言はないでくれ——おれの財布を自分のもののやうに使つてゐた君が——この事件を知つてゐたがら、默つてゐたのは怨めしい。
イヤゴオ。飛んでもないことだ。君は僕の言ふことを聞かうとしないからいけないのだ——そんなこと

とのあるのを夢にでも僕が知つてゐたら、僕を排斥するが好い。
ロデリゴオ。君はあの男を憎んでゐると、始終僕にさう言つた。
イヤゴオ。憎んでゐなかつたら、僕を唾棄し給へ。この町の勢力家が三人、僕をあいつの副官にしようとして、わざわざ自分で出かけて行つて、あいつに頭を下げてくれたのだ。勿論、僕は自分の價値を知つてゐる。あれより下の地位を僕は動かさない。ところが、あいつは、一旦自分でかうと思つた以上、人に口を利かれるのが厭なので、兵語澤山に廻り諄い言訣をして、中へはひつた人達の要求を逃げ廻り、揚句の果に「實はもう副官はきめました」とさう言ふのだ。しかもその副官は誰だと思ふ。算術の大家だ。フロオレンス生れのマイケル・キヤシオといふ奴で、汚らはしい女の爲に地獄へ落ちかかつてゐる奴だ。嘗て戰場で軍隊を指揮したこともなければ、戰術と言つたら娘つ子ほどにも知つてゐない。机上の空論はするかも知れぬが、それはトオガを着た議員でもすることだ　あいつの戰術は唯口先ばかりで、實際の力量は少しもないのだ　ところが、そいつが用ひられて、ロオヅでもサイプラスでも、その外の基督教國や異教國でも、現に大將の目の前で功績を見せたこのおれが、あんな貸借の名人に風を奪はれて、帆を縮めてゐなければならないのだ。あの算術家は首尾よく副官に御出世で、このおれは　有難くもない――ムウアどのの旗持だ。
ロデリゴオ。ほんとに、おれはあいつの首縊役になりたい。

イヤゴオ。だが、どうも爲方がない。すまじきものは宮仕へだ。當今、出世は縁故や贔屓で出來るのだ。二番目のものは、きつと一番目のものの後をつぐと言ふ、昔のやうな順では行かないのだ。まあ一つ考へてくれ。それでもおれは、あのムウアに忠義を盡さなければならん義務があるかどうかを。

ロデリゴオ。おれなら、あんな奴の家來にはなつてゐないが。

イヤゴオ。まあ、落ちついてくれ。おれはあいつを利用する爲に、家來になつてゐるのだ。人間はみんながみんな主人になることも出來なければ、又主人といふものが、みんながみんな忠實な家來を持つことが出來るものでもない。君も知つてる通り、世の中には随分膝を屈めて、御無理御尤で主人に従ふばかりな奴等もある。さういふ手合は主人の驢馬も同じやうに、喜んで奴隷のやうな軛をかけられ、飼葉の外はなんにも貰はないで、年を取ると追ひ出されてしまふのだ。おれはさういふ正直な人間に鞭がくれて遣りたい。中には又　態度や目つきだけを忠義らしく飾り立てて、内心は自分のことばかり考へ、殿様には上べの忠義だけを差上げて、絞り取れるだけ絞り取り、懐がたんまりすると、自分で自分を殿様にする奴もある。さういふ手合には、まだ性根といふものがある。實はおれもさういつた一人だ。なぜと言へ、おれがムウアなら、おれがイヤゴオでないことは、君がロデリゴオであると同様に確なことだ。おれがあいつの家來になるのは、おれがおれ自身の家來

になる爲だ。神樣は御存じだ。忠義や義務の爲ではない。唯さう見えるだけで、實は自分の目的があつて家來になるのだ。なぜと言へ、おれの外部の行爲が、おれの心の姿や形を現すやうなら、寧ろおれはおれの心臟を腕の上に載せて、小鳥に突つつかせてやるわ。おれは見かけ通りの男ではない。

ロデリゴオ。あの厚脣はなんといふしあはせものだ。若し、これで濟むものなら。

イヤゴオ。女の親父を叩き起すが好い。あいつを追つかけて、あいつの喜びに毒を注ぎ、町中を觸れて步き、女の親類を煽り立てて、あいつがどんな物柔かな天の下に住んでゐようとも、蚊や蠅で苦しめてやれ。たとひその喜びは喜びの儘でも、うんと苦しめてやつて、色でも失ふやうにしてやりたい。

ロデリゴオ。これがあの女の親父の家だ。大きな聲で呼んで見よう。

イヤゴオ。うむ、さも大變が起つたやうに、恐ろしい聲をしてどなるが好い。人の多い町で、夜中に粗相火でも見つけたやうに。

ロデリゴオ。大變だ、ブラバンシオ。ブラバンシオ樣。大變です、大變です。

イヤゴオ。お起きなさい。大變だ、ブラバンシオ。泥坊だ。泥坊だ。泥坊だ。お屋敷は大丈夫か。お孃樣は。財布は。泥坊だ。泥坊だ。

ブラバンシオ、上の窓のところに現れる。

ブラバンシオ。どうしてそんな騒ぎをするのだ。何事だ。

ロデリゴオ。閣下、お家族はみんなお内ですか。

イヤゴオ。戸締りは大丈夫ですか。

ブラバンシオ。なぜ、そんなことを訊くのだ。

イヤゴオ。でも、閣下。あなたは泥坊にはひられたのです。まあ、上着をお着なさい。あなたの心臓は破れ、あなたの魂は半分かたくなつたのです。さあ、さあ、かういふ内にも、こうをへた黒羊があなたの白い子羊に乗りかかつてゐるのです　さあ、お起きなさい、お起きなさい。鐘を鳴らして眠りこけてゐる町の者をお起しなさい。さもないと、悪魔があなたをおぢい様にしてしまひますぞ。早く出ていらつしやい。出ていらつしやい。

ブラバンシオ。どうしたのだ。お前達は気でも違つたのか。

ロデリゴオ。閣下、わたくしの声がお分かりになりますか。

ブラバンシオ。いいや、分からん。お前は誰だ。

ロデリゴオ。ロデリゴオでございます。

ブラバンシオ。それなら猶いかん。わしはお前にこの家の周りをうろついてはならんと命令した。そ

れに、娘はお前のものではないとはつきり返事をして置いた筈だ。それだのに、お前は又夜食に腹をふくらせ、酒に食ひ醉つて氣でも違つたか、惡意に驅られて、おれの平和を亂しに來たのだな。

ロデリゴオ。閣下、閣下、閣下。

ブラバンシオ。だが、おれの權力と地位とには、お前にこれを後悔させるだけの力があるぞ。

ロデリゴオ。まあ、お待ち下さい、閣下。

ブラバンシオ。なぜ泥坊だなどと言ふのだ、ここはヱニスだ。わしの屋敷は明き地ではない。

ロデリゴオ。ブラバンシオ樣、わたくしは清淨無垢な心で參つたのです。

イヤゴオ。困つたものだ。閣下は惡魔の言ひつけとあれば、神樣にも仕へまいとするお方だ。お役に立たうと思つて參つた吾々を惡者だとお思ひになるのですか。あなたはお孃樣をバアバリイ馬の自由にさせてをしまひになるおつもりですか。ぴんぴん嘶く孫がお持ちになりたいのですか。いとこやはとこに馬の子がお持ちになりたいのですか。

ブラバンシオ。何といふ汚らはしいことをいふ奴だ。

イヤゴオ。わたくしはあなたのお孃樣とムウアとが背中の二つある獸を拵へてゐるのをお知らせに參つたのです。

ブラバンシオ。貴樣は惡黨だ。

イヤゴオ。あなたは——元老院議官様だ。

ブラバンシオ。お前が悪いのだ。覚えてをれ。ロデリゴオ。

ロデリゴオ。わたくしはどんな責任をも負ひます。併し、若しこれがあなたの思召であり、又萬々御承知の上のことであるなら——どうやらさうらしい點もありますが。この暗い眞夜中にお美しいお嬢様を、賃で雇つた船頭の外に供一人つけずに——淫亂なムウア人の荒くれた手にお渡しなすつたことが、若し御承知の上のことであれば、わたくしどもは飛んだ失禮なことを申したのでございます。併し、若し御存じのないことなら、お怒りになるのは間違つてゐるかと存じます。わたくしは決して禮儀を忘れて閣下を弄ぶのではございません。もう一度申し上げますが——若しお許しのないことなら、お嬢様は實に宜しからぬことを遊ばしたのでございます。ここにもどこにも家のない異國人に、義務をも、美しさをも、智慧をも、運をも、みんな譲つておしまひになつたのです。すぐとお調べ下さい。若しお嬢様が、お居間になり、このお屋敷の内になり、おいで遊ばしましたら、わたくしは閣下を欺いたのですから、どんな國法に處せられても決して恨みません。

ブラバンシオ。燧をつけろ。蝋燭を持つて来い。家中のものを起せ。どうも夢見が悪いと思つた。どうやら本當らしい氣がして来た。燈だ。おい、燈だ——（退場）

イヤゴオ。さやうなら。おれは行かなければならん。ここにゐればどうしてもさういふことになるが、

ムウアにとつて不利益な證人になるのは、おれの地位にとつて餘り有難くない。なぜと言へば、このことでどんなにあの男が嚴しい譴責に會はうとも、政府は決してあの男を捨てることは出來ないのだ。と言ふのは、丁度今始まつたサイプラスの戰爭へ司令官として送るに足る人間は外にないのだから。だから、おれは地獄の苛責を憎むやうにあの男を憎んでゐるのだが、現在の生活の安定の爲に、おれは忠義の旗印を掲げてゐなければならないのだ。尤も、それはほんの看板だ。ところで、たしかにあいつを見つける爲に、追手はサジタリイへ案内するが好い。あすこでおれはあいつと一緒にゐる。では、さやうなら。（退場）

ブラバンシオ、寢卷の儘、炬火を持つた下部達を連れて出る。

ブラバンシオ。如何にも本當だ。娘はをらん。この不愉快な時に續いて來るものは、苦い涙より外のものではない――そこで、ロデリゴオ、お前はどこで娘を見たのだ。ああ、不幸な娘よ――ムウアと一緒だと言つたな――父親になどなるものではない――どうして娘だといふことが分かつたのだ――かうまでおれを騙さうとは思ひもよらなかつた――娘はお前に何と言つた――もつと炬火を持つて來い。親類をみんな起せ――もう結婚してしまつたのか。

ロデリゴオ。さうに違ひありません。

ブラバンシオ。なんといふことだ。どうして脱け出しをつたか。現在血を分けたものが、そんなこと

とするとは――親達よ、どうぞ、これからは上辺の行を見て、娘達の心を信じてはなりませんぞ。無垢の娘の心を迷はせるやうな魔業でもあるのではあるまいか。ロデリゴオ、お前そんなことを何かで読んだことはないか。

ロデリゴオ。はい、読んだことがございます。

ブラバンショオ。弟を起して来い――ほんとに娘はお前に遣ればよかつた――貴様達はあつちへ、貴様達はこつちへ。娘とムウアを捕まへるにはどこへ行つたらよからう。

ロデリゴオ。よい番人をおつけになつて、わたしと一緒にお出でになれば、必ずあの男を見つけることが出来ると思ひます。

ブラバンショオ。どうぞ案内をしてくれ、一軒一軒呼んで見よう。大抵の家ならおれの命令を聞く筈だ。武器を持つて来い。宿直の役人達を起せ――ロデリゴオ殿、きつとお前の骨折には報をするぞ。

（一同退場）

第二場　他の街上

オセロオ、イヤゴオ、松火を持つた従者等、登場。

イヤゴオ。戦争といふ商売では随分人を殺しましたが、謀殺といふやつは良心が承知をしません。と

うもゐたくしは惡心が足りないので、時々損をいたします。實はもう九遍も十遍もあいつの肋下を突いてやらうと思つたのですが。

オセロオ。いや、突かないでよかつた。

イヤゴオ。でも、あいつは閣下の御名譽に關するやうなことを口汚なく申しました。わたくしは聖人ではございませんから、やつとのことで堪へてゐることが出來たのです。ですが、閣下。もう御婚禮はお濟ませになりましたか。あの元老院議官殿は人望もありますし、實際は公侍の倍も勢力があるのですから、あなたを逼ひ出すか、さもなければ、ありつたけの權力を振るつて、法律が許す限りの抑壓と呵責をあなたに加へるでせう。

オセロオ。どんな意地惡でもさせるが好い、おれがこの國の爲に盡した功績は、あのやうなものの訴訟ぐらゐ打消してしまふだらう。それに、いづれ分かることではあるが――自慢が名譽だといふことを知つたら、自分でも公言するつもりでゐるが――一體おれは王族の出であるから、おれの地位は今度得た幸福ぐらゐは少しも遠慮せずに要求して好いのだ。それに、イヤゴオ、お前にも言つて貰ひたいが、若しもおれがあの優しいデスデモオナを愛してゐなければ、この係累のない氣樂な境遇を決して束縛や制限の内に押し込めてしまひはしない。深い海の寶に替へてもそんなことをする筈はない。だが、見ろ。誰か炬火を持つてやつて來た。

イヤゴオ。あれは腹を立てた父親が眷族を連れて參つたのです――お家へおはひりなさる方が宜しうございませう。

オセロオ。いや、はひらん。正々堂々と會はう。おれの才能や地位や潔白な精神をおれの證人に立てなければならん――奴あいつらか。

イヤゴオ。いや、さうではないやうです。

キャシオオと役人達、松火を持つて登場。

オセロオ。大將のお家來達、それに副官も來たか――御機嫌宜しう。何か起りましたか。

キャシオオ。將軍、大將の仰せでございます。即刻唯今御出頭をとの御命令でございます。

オセロオ。何事が起つたのだ。お前には分からんか。

キャシオオ。サイプラスから何か知らせがあつたのだと思ひます。何か緊急なことが起つたらしいのです。既に軍艦から今夜十二度も使の者が後から後から參りました。議官達も大抵は起きて來られて、もう公爵の館に集つておられます。閣下をも急うお召しでありましたが、丁度御不在だつたので、元老院は閣下お行方を尋ねに三方へ使者をお立てになりました。

オセロオ。お前に見つけられて好いことをした。一言この家に言つて置くことがある。それから、お前と一緒に行かう――（退場）

キヤシオ。旗手殿、閣下はここに何の用があるのだ。

イヤゴオ。うむ。閣下は今夜陸荷船をお手に入れなすつたのだ。若しこれが分捕物として許されれば、一生のしあはせになるのだ。

キヤシオ。分からん。

イヤゴオ。婚禮をなすつたのだ。

キヤシオ。誰と。

（オセロオ、再び登場。）

イヤゴオ。それは――さ、將軍、お伴いたしませう。

オセロオ。行かう。

キヤシオ。あすこへ他の組が閣下を尋ねて參りました。

イヤゴオ。ブラバンシオだ――御用心なさい、將軍――あれは悪意を持つて參つたのです。

（ブラバンシオ、ロデリゴオ及び役人達、炬火と武器を携へて登場。）

オセロオ。こら。待て。

ロデリゴオ。閣下、ムウアです。

ブラバンシオ。泥坊め、斬つてしまへ。

双方、劍を拔く。

イヤゴオ。ロデリゴオ。さあ來い。おれが相手になつてやる。

オセロオ。劍を納めろ。露がかかると錆びるぞ――御老人、あなたのお年は、あなたの刀剣より人に頭を下げさせることが出來ませうに。

ブラバンショオ。穢らはしい盜賊め、貴樣はあれの娘をどこへ連れて行つた。人非人め、貴樣は娘に魔術をかけたに相違ない。おれは少しでも理性ある者に訴へて言ふが、昔し魔術の鎖にでも縛られなければ、あんなに優しい、あんなに美しい、あんなに幸福な娘が、自分の生れた國の金のある貴公子をも嫌つて結婚に反對をした娘が、世間の物笑ひをも恐れずに、家庭の幸福を遁れて、恐ろしいばかりで、どこに愛すべき點もない貴樣のやうな者の眞つ黒な胸に走るといふことがあり得ようか。誰か人にも判斷して貰ひたい。貴樣が穢らはしい魔法を用ひて、魔藥で知覺を失はせ、かよわい娘を騙したことは火を見るよりも明かだ――きつと糺問せずには置かん。どうもさうに違ひない。どう考へてもさう思はれる。それゆゑ、世を欺くものとして、國法が禁ずる邪法の術者として、おれは貴樣を逮捕して裁を出す　それ捕まへろ。反抗したら命はないぞ。

オセロオ。待て、おれの味方も、さうでない方も待て。これが戦はなければならん切つかけたら、後見の指圖がなくても戦ふわ。どこへ行つたら好いのです。あなたの訴に答へる爲に。

ブラバンシオ。牢へ行くのだ。法定の手續を踏んで、時と形式とが貴樣を辯論に呼び出すまで。

オセロオ。わたくしがそれに從つたらどうなりませう。公爵はそれに滿足をなさいませうか。公爵は今國家にとつて緊急な問題があるといふことで、わたくしの所へ使者をお立てになつたのです。

役人の一人。その通りです、閣下。公爵は既に會議をお開きになつてゐるのです。閣下のところへも多分もうお使が參つてをりませう。

ブラバンシオ。なに。公爵が會議を開かれたと。この眞夜中に――この男を連れて行け。おれの事件は重大だ。公爵は勿論、同僚達も決してこの惡事を決して人ごととは思ふまい。若しこのやうな惡事が不問に附されたら、奴隷や異教徒がこの國で政治をとるやうになるだらう。(一同退場)

第三場　會議堂

公爵達に元老院議官、一つの卓を圍む。役人達、侍す。

公爵。この報告には一致せぬ點がある。それゆゑ、わしには信ぜられん。

第一の議官。如何にも一つ一つ違つてをります。わたくしのところへ參つた手紙には百七艘の軍艦としてあります。

公爵。わしのところへ來たのには、百四十艘としてある。

第二の議官。わたくしのには二百艘としてあります。併し、數は正確に合ひませぬが——推測をして報告した場合には、かうした相違はありがちなものです　兎に角土耳古の艦隊がサイプラスへ向つて來てゐることだけは、どの報告も一致してをります。

公爵。如何にもそれはありさうなことだ。報告に間違ひがあるからと言つて、安心はしてをられん。重大な點は確實らしい。うつかりは出來ぬ。

水夫。（舞臺の奧で）おうい。おうい。おうい。

第一の役人。軍艦から使が參つたのです。

　水夫、登場。

公爵。何用だ。

水夫。土耳古人はロオヅに向つて進んで參ります。さやう御報告をせいとアンジェロ殿の御命令で參りました。

公爵。諸君はどう思はれる。この變化を。

第一の議官。さういふ言理はありません。それは吾々の目を瞞ます爲の謀だと思ひます。サイプラスは土耳古にとつては大事な場所であるのに、ロオヅが持つてゐるほどの設備を缺いてをりますから、攻め落すには一層たやすいと思ひます。さう考へると、土耳古人が自分にとつて最も重大な場所で

わけなく占領の出來るものを捨てて、利益もない危險を冒すやうな無謀を企てようとは思はれません。

公爵。いや、たしかに土耳古人はロオヅへ向ふのではあるまい。

第一の役人。又使者が參りました。

使者、登場。

使者。閣下、土耳古人はまつすぐにロオヅ島へ向つて梶をとつて參りましたが、そこであとから來た艦隊と一つになりました。

第一の議官。わしもさう思つた――船は何艘ぐらゐある。

使者。三十艘ほどでございます。唯今進路を變へて後戻りをしてをります。明かにサイプラスを目ざしてゐるのです。國家の忠臣モンタノオ殿の御報告でございます。どうぞ御信用下さいますやうに。

公爵。では、たしかにサイプラスへ押し寄せるに違ひない。マアカス・ラツキコスはヱニスにをるか。

第一の議官。あれはフロオレンスへ參りました。

公爵。では、手紙をやつてくれ。大急ぎで、一刻の猶豫もせずに。

第一の議官。ブラバンシオと、勇敢なムウアが參りました。

ブラバンシオ、オセロオ、イヤゴオ、ロデリゴオ並に役人達、登場。

公爵。勇敢なオセロオ、国敵土耳古人征討の為に即刻出発して貰はなければならん。（ブラバンシオに）あなたの御出でには気がつかなかつた。よくお出で下すつた。丁度あなたの御意見と御助力とを乞ひたいと思つてゐたところだつた。

ブラバンシオ。わたくしも閣下の御意見が承りたいのです。どうぞお許しを願ひます。わたくしが寝床から起きて参りましたのは役目からでもなく、又御用を承つたからでもありません。又国家の憂がわたくしを揺り動かしたからでもありません。わたくし一箇人の悲しみが水門を越えて氾濫し、他の悲しみを捲きこみ呑み尽して、唯それのみで流れてゐるのです。

公爵。どうしたのだ。何事が起つたのだ。

ブラバンシオ。娘が。娘が。

公爵と議官。死んだか。

ブラバンシオ。わたくしにとりましては、死んだも同じです。娘は辱められたのです。盗まれたのです。妖術と魔術者が作つた魔薬とで穢されたのです。魔法ででもなければ、こんな自然の理法に背いたことが行はれる筈はありません。娘は愚鈍でもなければ、盲でもなし、又瘋癲でもないのです。

公爵。そんな卑しむべき手段を用ひて、あなたの娘の理性を奪ひ、又あなたから娘を奪つたものがあるなら、たとひそれが何者であつても、国家の法律に照らして、あなた御自身があなた御自身の考に

依つて嚴重に處罰されるが好い。若しそいつがわしの息子であつても躊躇するには及ばん。

ブラバンシオ。有難う存じます。實はこれがその犯人なのです。このムウアがさうなのです。唯今國家の御用で急のお使を立てられたとか申す、このムウアがその當人なのです。

公爵と議官。それは意外だ。

公爵。（オセロオに）あなたの方にも言ひ分があるだらう。その言ひ分を述べるが好い

ブラバンシオ。なんにもない筈です。それが事實だといふ以外には。

オセロオ。謹んで元老院の諸賢に申し上げます。わたくしがこの老人の娘を奪ひ去りましたことは如何にも事實でございます。結婚をいたしましたことも事實でございます。わたくしの罪の大きさも目方もそれ以下ではございません。わたくしは上品な詞を知りません。柔かな平和な詞つかひを存じません。なぜなら、わたくしのこの兩の腕は、七つの年から今日まで、僅九ケ月ほどを除きまして、絶えず戰場で働いて參りました。それゆゑ、戰に關係したことの外はこの大きな世の中のことを何一つ存じません。從つて、自分の爲に辯じましたところで、少しもわたくしの利益にはなりますまい。併し、御免を蒙つて、わたくしの情事の徑路を少しも飾らずに申し上げませう――さういふ手段を用ひたとの仰せでございますから――どんな藥を以て、どんな妖術を以て、どんな呪文を以て、どんな魔法を使つて、この方の娘を手に入れましたか、お話をいたしませう。

ブラバンシオ。內氣で、靜で、優しくて、自分の心の動きにさへ顏を赤めるやうな娘が、生れつきにも、年にも、國にも、世間の聞えにも、あらゆるものに背いて、顏を見るのも恐れてゐたやうなものに戀をするとは。あんなに何もかも備つた女が、自然の法則に背いて、そんな間違つたことをすると思つたら、それは間違つた片輪な判斷です。果してそんなことがあるなら、それは惡魔のしたことです。わたくしはもう一度誓ひます。何か血を攪すやうな强い藥か、同じやうな利目のある魔藥を使つたに相違ありません。

公爵。誓ふことが證據にはならん。單にさうらしいといつたやうな淺い根據より、もつとはつきりした證據がなければならん。

第一の議官。然し答をして下さい、オセロオ殿、あなたは何か怪しからぬ手段を用ひて、あの娘の理性を瞞ましたのですか。それとも、申し込んで、話し合つて、魂と魂とが相許したのですか。

オセロオ。お願ひでございます。サジタリイへ娘を呼びにお遣はしになつて、父の面前でわたくしの話をお聞き下さい。若し娘の詞に依つて、わたくしが惡いと思召したら、わたくしの戴いてをります役目をも信用をもお取り上げの上、わたくしの命を御要求になつても差支はありません。

公爵。デスデモオナを連れて來い。

オセロオ。旗手、御案內をしろ、お前はあすこをよく知つてゐる筈だ。（イヤゴオ及び從者等。退場）さ

て、女の參るまでに、天に對するが如く誠實に、わたくしの熱情が犯した罪を告白いたしませう。どうしてわたくしがあの美しい婦人の愛を得ることが出來たか、又どうしてあの婦人がわたくしの愛を得ることが出來たか、正直に皆さんに申し上げませう。

公爵。お話しなさい。

オセロオ。女の父がわたくしを愛したのです。度々わたくしを招きました。わたくしの經歷を事細かに尋ねました。年から年を追つて、わたくしの經驗して來た戰や城攻や勝敗などを。わたくしはそれを洩れなく話しました。子供時代のことから、それを話せと言はれたその時までのことを。わたくしは多くの困難な場合、海や陸での恐ろしい危險、危機一髮で死を免れた話、暴虐な敵に捕まつて奴隷に賣られたこと、それから買ひ戻されて不思議な旅をして歩いたこと、大きな洞穴、荒れ果てた野原、石山や岩にそそり立つ山、さういふ話をしたのが切つかけでありました——さうした順序でありました。それから、互に肉を食ひ合ふカニバルのこと、食人種のこと、肩の下に首の生えてゐる人種のこと。さういふ話をデスデモオナは熱心に聞きたがるのです。家庭の用事は絕えず彼女を呼び立てます。併し、女は急いでそれを濟まして、いつでもすぐに又歸つて參ります。そして貪るやうに耳を立てて、わたくしの話を聞くのです。その樣子を見て、わたくしは好い機會を見計らひ、わたくしの總ての經歷を聞きたいと、熱心に望ませるやうな手段をとりました。それについ

て、女は斷片的には知つてゐましたが、一續きの話としてはまだ知つてゐなかつたのです。そこで、わたくしはそれを承知して、わたくしが小さい時に受けた苦しみを話しますと、女は度々涙を流しました。わたくしの話が濟むと、その禮に女は溜息を澤山にしました。それから、かう申すのです——ほんたうに珍しい話だ、實に珍らしい話だ。可哀さうな話だ。ほんとに可哀さうな話だ。こんな話なら聞かなければよかつたと。さう言ひながら、しかも天が自分にかういふお方を夫として下すつたならなどと言ふのです。女はわたくしに禮を申しました。さうして、若しわたくしに彼女を想ひ慕ふ友人があつたら、その友人にわたくしの話をさういふ風に話せと教へてやれ、さうすればすぐと貴女を手に入れることが出來るだらうなどと申すのです。これが切つかけで、わたくしは意中を述べました。女はわたくしが冒した危險の爲にわたくしを愛したのです。わたくしは女がそれに感じてくれたから、女を愛したのです。わたくしの用ひました妖術はこの外にはありません——女が參りました。女自身の話をお聞き下さい。

デスデモオナ、イヤゴオ並に從者等、登場。

公爵　さういふ話なら、わしの娘も心を動かすに違ひない。ブラバンシオ、もうかうなつたら亂暴の始末をとるより外方があるまい。折れた刀でも無手よりは役に立つ。

ブラバンシオ　どうぞ娘の申すことをお聞き下さい。若し娘の方からも半分言ひ寄つたと申しました

ら、しかも、わたくしがあの男に罪を著せましたら、この頭上に破滅が降つても構ひません――ここへお出で、可愛い娘。お前はこの高貴の方々の御列席の場所で、誰に一番服從しなければならないと思ふか。

デスデモオナ。お父樣。この場合、義務は二つに分かれてゐると思ひます。わたくしはあなたに對して生みの恩、育ての恩を感じてゐます。わたくしの生涯と教育とは、あなたを尊敬しなければならないと教へます。あなたはわたくしの義務の支配者です。わたくしは今まであなたの娘でした。併し、もうここにわたくしの夫が立つてゐます。そこで、お母樣がお母樣のお父樣より、あなたに對してお盡しになつたその義務と同じものを、わたくしもわたくしの夫たるムウア殿に盡さなければなりません。

ブラバンシオ。もうだめだ。もうおしまひです。どうぞ閣下、國家の御用をお續け下さい。わたくしは自分で子供を作るより、子供を貰つた方がようございました――ここへお出でなさい、ムウア殿。心を籠めて娘をあなたに差し上げます。若し、まだあなたが手に入れてゐなかつたら、決してあなたに差し上げるのではなかつたが――娘よ、お前の爲におれは心から喜んでゐる。おれに他の子供のないことを。なぜと言へば、お前の逃げたことがおれを暴君にして、これから子供達に足枷をさせようから――もう濟みました、閣下。

は、お前の方を深く信頼してゐる。それゆゑ、暫くお前の新しい幸福の輝きを殺伐な遠征で暗くして貰はねばならない。

オセロオ。議官の方々に申し上げます。荒い習慣が戦場の鋼や石の寝床をわたくしの一番柔かい羽根蒲團にいたしました。困難な爲事と聞けば、すぐにも飛んで參りたい生れつきですから、土耳古人の征討はきつと承知いたしました。就いては、折り入つてお願ひするわけではありますが、どうか妻の爲に然るべきお手配をお願ひ申し上げます。妻の身分に相應した待遇、手當、居住、附人などを下さるやうお願ひ申し上げます。

公爵。父親のもとへ預けてはどうだな。

ブラバンシオ。それは御免を蒙ります。

オセロオ。わたくしも、それは。

デスデモオナ。わたくしもお斷り申します。始終父の目の前にゐて、厭な思ひをさせたいとは思ひません　公爵樣、どうぞわたくしの申すことにお耳をお貸し下さいまして、不束な願をお汲みとり下さいまし。

公爵。どういふ願だ、デスデモオナ。

デスデモオナ。わたくしがムウア殿を愛して、どこまでも一緒にゐたいと思つてゐますことは、わ

たくしの思ひ切つた行や嵐のやうに襲つて来た運命で、もう世間に知れ渡つてをります。わたくしの心は夫の性質にさへ征服されてゐるのです。わたくしはオセロオ殿の心の内に、オセロオ殿の容貌を見て、その名誉にも、その勇敢な生れつきにも、わたくしの魂と運命とを捧げたのです。それゆゑ、皆様、夫が戦場へ参りますのに、自分ひとりお呑氣な蛾のやうにあとへ残されましたら、誓つた心もあだになつて、悲しい留守居をさせおかしつらく暮らすことでございませう。どうぞ一緒にやつて下さいまし。

オセロオ　どうぞ妻の願をお聞き届け下さいまし。神明に誓つて、肉欲を満足させる為に願ふのではありません。熱情の猛さもありません——青年の情欲はもう持つてをりません——我欲の為でもありません。唯妻の思ふ儘にさせてやりたいからです。妻が一緒にゐる為に重大な役目を怠るだらうといふことは断じてありません。羽根の生えた戀の神の軽々しい戯れでこの両眼が曇り、道徳に心を奪はれて役目を疎ずるやうなことがありましたら、わたくしの兜は鍋となつて、台所の女中に使はれても構ひません。あらゆる汚名、あらゆる誹謗がわたくしの上に落ちかかつて来ても構ひません。

公爵　それは留守をさせるとも、連れて行くとも、お前の心に任せたら好い。国家の危急は切迫してゐるから、急いで支度をしなければならん。

第一の議官　今夜すぐに出發なさい。

オセロオ　畏りました。

公爵。明朝九時にもう一度議會を開かう。オセロオ、誰か部下の者を一人殘して行つて貰ひたい。正式な訓令はそのものに託して、お前のところへ送り屆けることにしよう。それから、お前に關係した官位や資格などのことも、一緒に傳へることにしよう。

オセロオ。それでは、旗手を殘して參りませう。正直な信實な男です。妻もこの男に頼んで參ります。又どんなことでも、必要な御命令がありましたら、このものにお命じ下さいまし。

公爵。では、さうしよう。諸君、おやすみなさい。（ブラバンシオに）ブラバンシオ殿、徳あれば必ず美あると言ふではないか。あなたの婿は黒いどころか、飛んだ美男子だ。

第一議官。さやうなら、勇敢なムウア殿。デスデモオナ殿を大切になさい。

ブラバンシオ。ムウア殿、目があるなら用心なさい。父を騙した女だ。君だつて騙されぬとは限らん。

公爵、議官達、役人等、退場。

オセロオ。あの女の貞節なことは、この命をも賭けよう。　これ、イヤゴオ、デスデモオナはきつとお前に預けたぞ。どうぞお前の妻を附添にしてくれ。さうして、便宜のあり次第、あとから連れて來てくれ　さあ、デスデモオナ。もうお前と愛を語り、俗事の相談をする時間も、一時間あるかなしだ。時が來たら、すぐに出かけなければならん。

オセロオとデスデモオナ、退場。

ロデリゴオ。イヤゴオ

イヤゴオ。なんでございますな。

ロデリゴオ。どうしたら好いだらう。

イヤゴオ。さあ、床へはひつて寢るのですな。

ロデリゴオ。この儘身を投げて死んでしまひたい。

イヤゴオ。そんなことをしたら、もう絶交だ。なんといふばかな人だ。

ロデリゴオ。生きてゐるのが苦痛なら、生きてゐるのはばからしい。死神が醫者なら、死ねといふのが處方だ。

イヤゴオ。情ない。おれは四七の二十八年世の中を見て來たが、損徳の見境がつくやうになつてから、眞に自分を可愛がる法を知つた男に出會つたことがない。若しおれだら、あまつちよの可愛さに身を投げる位なら、人間をやめて狒々になつてしまふ。

ロデリゴオ。どうしたら好いだらう。こんなに夢中になるのは恥だとは知つてゐるが、どうもそれを癒すだけの徳がない。

イヤゴオ。徳だと。無花果の蔕だ。吾々がかうするのも、ああするのも、みんな自分の心からだ。吾々の肉體は花園で、吾々の意志は庭作りだ。だから、蕁麻を植ゑようと、萵苣を播かうとヒソツ

ップを生やさうと、麝香草を引つこ抜かうと、唯一色の草を茂らさうと、いろいろな草を交ぜて植ゑようと、怠けて荒地にしてしまはうと、丹精して土地を太らせようと、花園を左右する力は、吾々の自由意志にあるのだ。若し、吾々の生活の秤に情欲の血に釣り合ふだけの理性の血がなかつたら生れついた血と劣情が、吾々を駆り立てて、飛んでもない穴へ突きおとすだらう。併し、吾々には理性といふものがあるので、荒れ狂ふ情熱や、肉欲の刺戟や、無拘束な淫欲をも冷ますことが出来るのだ。お前が恋と呼んでゐる代物も、多分そんなものの片割れか、小枝だらう。

ロデリゴオ。いや、そんなものではない。

イヤゴオ。なあに、意志の足りない血の気のかたまりだ。さあ、男らしくすることだ。身を投げると、猫か盲の小犬ぢやあるまいし。一旦君の友達になると言つた以上、切つても切れない縄で、この身を君に結びつけたからは、僕が君の為に骨を折るのに、今より好い時はない。さあ、金の用意をし給へ。戦争へついて来給へ。附髭で顔を変へ給へ。好いか。財布に金を詰め込むのだぞ。デスデモオナがいつまでもムウアのことを思つてゐるものか――財布に金を詰め込むのだぞ――ムウアだつていつまでも女のことを思つてゐるものか。始まつたのが突然なら、別れるのも突然に違ひない――好いから、財布に金を詰め込むのだ。ムウア人といふものは気の変り易いものだ――財布に金をたんまり詰め込むのだ。今ロオカストほどに甘がつてゐる食物も、忽ちコロキンチダほどに苦いものに

さるに違ひない。女の方でもきつと若いのが欲しくなる。男の肉に飽きが来れば選んだ選み方をしたと気がつくだらう。きつと相手を變へたくなる。きつと變へたくなる。だから、財布に金を詰め込んで来るのだ。どうしても地獄に落ちたいなら、土左衛門より氣の利いたことをするが好い。出來るだけの金をこしらへるのだ。宿なしの野蠻人と狡猾なヹニス女とが勿體らしく結んだ薄紙のやうな約束が、おれの智慧と地獄の眷族の力で破れるものなら、お前はきつとあの女を手に入れることが出來る。だから、金を持つて來い。土左衛門などはやめだ、やめだ。そんなことは何の役にも立たぬ。女も手に入れずに土左衛門になるくらゐなら、望みを叶へて首を絞められる方がまだ增しだ。

ロダリイゴ。若しお前の言ふ通りにすれば、きつとおれの望みを叶へてくれるか。

イヤゴオ。おれは大丈夫だ――さあ、行つて金をこしらへて來い――今まで幾度も言つたことだが、また改めて言ふぞ。おれはムウアが大嫌ひだ。そのわけは心の底にある。お前の憎みも同じことだ。だから、二人で力を合せて、あいつに復讐をしてやらう。あいつの額に角を生やしてやれば、お前にとつてはお樂しみ、おれにとつては好い慰みだ。時といふ胎内からは、次ぎ次ぎといろいろな事が生れるものだ――進め。金の用意をして來い。あしたまた相談しよう。さやうなら。

ロダリイゴ。あしたの朝はどこで會はう。

イヤゴオ。おれの家で。
ロデリゴオ。では、早く行くぞ。
イヤゴオ。では、さやうなら――ぢつと待つた、ロデリゴオ。
ロデリゴオ。なんだ。
イヤゴオ。もう土左衛門はやめだぞ。好いか。
ロデリゴオ。もうそんなことは考へてゐない。おれはありつたけの地所を賣るつもりだ。

ロデリゴオ、退場。

イヤゴオ。かうやつて、おれはいつでも莫迦者を、おれの財布にするのだ。なぜと言へ、慰みにも儲けにもならないのに、あんなたはけた相手に暇をつぶしては、おれの鍛へ上げた智慧様に申譯がないからだ――おれはムウアが嫌ひだ。噂によれば、あいつはおれの寢床で、おれの役目をしたといふことだ――受けとれぬ話だが、よし嫌疑にもせよ、おれはそれを確なこととして仇討をしてくれよう。あいつはおれを買つてゐるから、尙と爲事がし好いのだ。キヤシオは好い男だ。そこでと。あいつの地位を奪つて、日頃の望みを叶へることが出來れば、それでこそ兩天秤だ――さて、どうしたら好いか――待てよ――さうだ。好い折を見て、あいつがあいつの嬶と懇にしてゐると、オセロオの耳に毒を刺すのだ。あいつは人柄といひ、柔かな氣立といひ、女たらしに出來た男だから、嫌

譽を受けるには十分だ。ムウアは莫迦正直な生れつきで、人が正直に見えれば、ほんとに正直だと思つてしまふ男だから、驢馬のやうに、鼻面でどうにも引き廻すことが出來る。さうだ、もう芽は生えた。この化物を浮世の明かるみへ持ち出すには、地獄の夜の力を借りずばなるまい。

イヤゴオ、退場。

第二幕

第一場　サイプラス島の港埠頭近き廣場

モンタノオと二人の紳士、登場。

モンタノオ。岬から何か見えるか。

第一の紳士。何も見えません。波が高いだけです。空と海との境にも帆一つ見えません。

モンタノオ。陸は大荒れだつた。あんなに強い風が城壁を搖り動かしたことは曾てあるまい。若し海も同じやうな荒れであつたら、いかな樫の木の肋骨でも榫穴を外れずにはゐまい。どんなことになつたらう。

第二の紳士。土耳古の艦隊はちりぢりばらばらでせう。まあ、このしぶきを上げてゐる岸に立つて御覽なさい。しきた波が雲を打つやうです。風に追はれた大浪は、恐ろしい鬣を振るつて、燃えてゐる

小熊星に水を注ぎかけ、ぢつと動かぬ北斗星の護衛を消してしまはうとしてゐるやうです。こんなに海の荒れるのを見たことは嘗てありません。

モンタノオ。土耳古の艦隊も、どこぞの港へ逃げ込まずにゐたら、きつと沈没したに違ひない。とてもこの風では溜まるまい。

第三の紳士、登場。

第三の紳士。報告です。戦争は済みました。この恐ろしい嵐が土耳古人をやつつけたので、あいつらの計畫もすつかりだめになつてしまひました。やつらの艦隊の大部分が、さんざんに難破するのを或ヱニスの船が見て参つたのです。

モンタノオ。ほう。それは事實か。

第三の紳士。その船が今ここへはひつたのです。ヱロニサ號と申す船です。勇ましいムウア殿、即ち將軍オセロオの副官マイケル・キヤシオが上陸いたしました。將軍はまだ海上にをられるさうですが、今度このサイプラスの全權を委任されたさうです。

モンタノオ。それは結構だ。あの人なら立派な總督だ。

第三の紳士。併し、そのキヤシオは、土耳古の艦隊の敗北したのを喜びながら、ムウア殿の身の上を心配して、鬱ぎ切つてをられます。このひどい嵐で、船と船とが離れ離れになつたとかいふことで、

モンタノオ。どうか無事でゐて貰ひたいものだ。わしも曾てあの人の部下にゐたことがあつたが、あの人は名將だ。さあ、海岸へ行かう。はひつて來た船をも見、勇敢なオセロオの到着をも待たう。海と青空とが一つになるまで目を見張つて。

第三の紳士。參りませう。かういふ内にも、あとの船がはひつて來さうです。

キャシオ、登場

キャシオ。お禮を申します、この島の勇士モンタノオ殿、ムウア殿をお褒め下すつたのは有難い。わたくしは、危險な海上であの人を見失ひましたが、どうぞうまく、この風浪を凌いでくれれば好いと思つてゐます。

モンタノオ。船は大丈夫ですか。

キャシオ。船はしつかりしてゐます。水先案内も人の許す達人です。それ故心配はしてゐますが、十分望に繋いでゐます。

奥の方で「船だ、船だ、船だ」と叫ぶ聲がする。

第四の紳士、登場。

キャシオ。なんだ。あの騒ぎは。

第四の紳士。町はからつぽです。上の者も下の者もみんな海岸へ出て、船だ船だと叫んでゐます。

キヤシオ。きつと總督に違ひない。

大砲の音が聞える。

第二の紳士。禮砲を打つてゐます。味方に相違ありません。

キヤシオ。誰が着いたのか見て來て下さい。どうぞ。

第三の紳士。畏りました。

第三の紳士、退場。

モンタノオ。時に副官どの。將軍は奥樣をお迎へになりましたか。

キヤシオ。この上もない好い奥樣をお迎へになりました。どんな物語にある美人の描寫にも立ち勝つた婦人をお貰ひになりました。繪かきも詩人も一目見ただけで筆をなげうつやうな美人です。（第二の紳士、登場）どうしました。誰が著いたのです。

第二の紳士。イヤゴオとやらです。將軍の旗手だといふことです。

キヤシオ。それはしあはせと早く著きました。嵐も、高い波も、吠える風も、罪もない船を捕まへようと待伏をしてゐる謀殺人の暗礁や淺瀨も、美といふことは分かるかして、殘忍な天性を忘れて、あの神々しいデスデモオナを無事に通らせたものと見えます。

モンタノオ。デスデモオナとは誰のことです。

キャシオォ。今お話した將軍のまた將軍とでも申すべき味方です。勇敢なイヤゴォが警護をして來つたのです。豫期したよりは一週間も早く著きました――大ジョオヴ神よ、オセロオを護り給へ。あなたの力強い息で彼の帆を孕ませ、あの大船の姿を以てこの港に祝福を授けしめ給へ。デスデモォナの腕の内に戀の喘ぎを抱かしめ、吾々一同の沈んだ勇氣に新しい火を點じ、サイプラス全島に喜びを齎し給へ。

（デスデモォナ、エミリア、イヤゴォ、ロデリゴォ並に從者達、登場）

御覧なさい。船の寶が上がりました。サイプラスの諸君、御挨拶をなさい。奥様、おめでたうございます。どうぞ天の恵みが奥様の前をも後をも右をも左をも取り卷いてゐますやうに。

デスデモォナ。有難うよ、キャシオォ。殿様はどうなすつただらう。

キャシオォ。まだ御到著になりません。併し、必ず御無事で、程なくお著きに相違ありません。

デスデモォナ。でも、わたくしは心配です――あなたはどうして別れたのです。

キャシオォ。あの海と空の荒れで船が別れ別れになつてしまつたのです――だが、お聞きなさい。船です。

（奥の方で「船だ、船だ」と叫ぶ聲。大砲の音。）

第二の紳士。城に向つて挨拶をしてゐます。これもやつぱり味方です。

キャシオ。見て來て下さい。（第二の紳士。退場） 旗手どの。おめでたう。（エミリアに） おめでたう。奥さん。（エミリアに接吻する） イヤゴオ、怒つてはいけない。小さい時からの習慣で、かうした不作法をするのが僕の禮儀だ。

イヤゴオ。いや、僕に對してはよく舌を動かす女だが、その舌ほどに唇を君にくれたら、君も滿足をするだらう。

デスデモオナ。そんなことを。エミリアはまるでものを言はないのに。

イヤゴオ。どう仕りまして。しやべり通しでございます。わたくしが眠くつてたまらない時でも、用捨なくしやべります。尤も、奥樣の前などでは、少しばかり舌を胸の中へしまつて、心でぶつぶつ言つてゐるやうではありますが。

エミリア。そんなことを言はれる覺えはありません。

イヤゴオ。まあ、待て。お前は外へ出れば繪にかいたお孃樣、客間へ出れば鈴のやうな作り聲、臺所ではどら猫で、惡いことをしながら菩薩のやうな顏をしてゐて、腹を立てればすぐ夜叉になり、用事をさせれば怠けもので、床へはひればよく稼ぐ。

デスデモオナ。まあ、なんといふ口の惡い。

イヤゴオ。いえ、これは本當のことです。これが噓なら、わたくしは土耳古人です　お前は遊ぶ爲

に起きて、働くために床へはひるのだ。

エミリア。あたしの讃はお前さんにはさせませんよ。

イヤゴオ。さぞさせたくないだらう。

デスデモオナ。若し、あたしに讃をするなら、どんなことをお書きだえ。

イヤゴオ。奥様、それは御免蒙ります。悪口の外はなんにも知らぬ男ですから。

デスデモオナ。構はないから言つて御覧——誰か波止場へ行つたかい。

イヤゴオ。参りました。

デスデモオナ。(傍白)あたしはちつとも面白いことはないのだけれど、面白さうに見せかけて、自分で自分の心を紛らしてゐるのだ——さあ、わたしの讃は。

イヤゴオ。唯今考へてゐる最中です、情ないことにわたくしの思ひつきは、荒布から黐をとるやうにしなければ、頭の皿を離れて参りません、脳味噌も何もみんなとれてしまふのです。併し、ミユウズ陣痛づいて参りました。それ、もう生れました——女が色が白くて利口なら、色の白いのが役に立ち、利口が色の白い顔を役に立てます。

デスデモオナ。うまいこと。では、若し女が黒くて利口だつたら。

イヤゴオ。色が黒くて利口だつたら、その色の黒いのに相当するやうな白いものを見つけるでせう。

デスデモオナ。だんだん悪くなる。
エミリア。では、色が白くて莫迦だつたら。
イヤゴオ。色が白ければ莫迦になる筈がない。莫迦なことをしても、きつと後継が生れるから。
デスデモオナ。それは居酒屋で莫迦者を笑はす古いこじつけだ。若し器量が悪くて莫迦だつたら、お前はどんなまづい讃をする。
イヤゴオ。いや、どんなに器量が悪くて、その上に莫迦な女でも、器量がよくて利口な女がするやうな穢らはしいいたづらをしないものはありません。
デスデモオナ。まあ、なんといふ物知らずだらう。お前は一番悪いことを一番好いことのやうに言ふのだね。そんなら本當に立派な女で、自分の徳を肩書にして、どんな悪口でも言つて見るが好いといふやうな人がゐたら、お前はどういふ讃をする。
イヤゴオ。さやう、器量がよくて決して高ぶらず、辯舌が巧みでおしやべりでなく、金に不足はしないで、しかもでこでこに飾らず、自分に出來ることがあつても欲を抑へ、恥を受けて、その爲返しをすることの出來る時が來ても、怒を抑へ、恨を忘れ、鮭の尻尾を鱈の頭と取替つこにするやうな莫迦でなく、分別が十分にありながら、それを決してあらはには見せないで、追つかけて來る男を決して振返つて見ないといふやうな、若しそんな女があつたら。

デスデモオナ。その女は。

イヤゴオ。赤ん坊に乳を吞ませて、小遣帳を附けさせるのが一番です。

デスデモオナ。まあ、なんといふ片端な結論だらう。――エミリア、この人はお前の夫だけれど、もうあんたに聞かないが好いよ。ねえ、キャシオさん。ほんとにこの人は陰險な亂暴な人ね。

キャシオ。ほんとに下品な明言でございます。學問の話より軍職の話でもお聞きなすつた方がお氣に入るでせう。

イヤゴオ。（傍白）ふん、あんなことを云ひながら、奥方の手をいぢつてゐるな。さうだ、耳こすりをするが好い。おれはこんな小さい蜘蛛の巣で、今にキャシオといふ大きな蠅を捕まへて見せるぞ。さうだ、さうだ。奥方の顏を見て、にやにや笑ふが好い。貴樣のその得意な樣子で、貴樣の手足を縛つて見せるぞ。ほんとに貴樣の言ふ通りだ、その通りだ。そんないたづらをして、副官の地位を奪はれたら、さう度々三つ指の接吻などをしなけりやよかつたと後悔をする時が來るだらう。さういふ内にも、又貴樣は指の先で接吻をする。よし。よし。うまいぞ。見事な接吻だ。さうだ、その通りだ。又指を脣へ持つて行くか。いつそそれが灌腸管であつたら好い。（奥の方で喇叭の音が聞える）

イヤゴオ。ムウアどのだ。あの喇叭は。

キャシオ。ほんとにさうだ。

デスデモオナ。お出迎ひに行かう。
キャシオ。もう、そこへお見えになりました。

オセロオ、從者達を連れて登場。

オセロオ。おう、美しい女丈夫どの。
デスデモオナ。懐しいオセロオどの。
オセロオ。わしより早く着いてゐようとは思ひもかけなかつたし、又嬉しくもある。ああ、可愛いやつ。嵐のあとに必ずかうした凪が來るなら、死人の目を覺すまで、風も吹くが好い。また船もオリンパスのやうに高い波の山に登つては、天から地獄へ落ちるやうに、再び深く水を潜るが好い。今死んだら、この上の幸福はあるまい。このやうな喜びを計り難い運命が又と持つて來ようとは思はれぬからな。
デスデモオナ。そんなことを仰しやつてはなりません。二人の愛と喜が、月日と共に増すやうに神様にお願をしなければなりません。
オセロオ。どうぞさうして戴きたいものだ。この滿足はとても口には言はれん。これ、ここに支へてゐる。喜が多過ぎるのだ。さうして、この後二人の上に起る一番の不和がこれであつて欲しい。これであつて。（デスデモオナに接吻する）

イヤゴオ。（傍白）大分調子がよく合ふな。だが、今にその音締を弛めてやるぞ。おれは正直な男だからな。

オセロオ。さあ、城へはひらう――諸君、聞いて下さい。戦争はすみました。土耳古人は溺れて死にました。――この島の古馴染ども、御機嫌は如何です――（デスデモオナに）お前もサイプラスで大事にされるだらう。おれもこの島では大層可愛がられた。おう、可愛い人、おれは嬉しさのあまりつい取り乱してしやべり過ぎた――（イヤゴオに）イヤゴオ、御苦労だが、港へ行つておれの荷物を上げてくれ。それから船長を城内へ案内してくれ。あれは立派な男だ。丁寧に扱うてやれ。さあ、デスデモオナ、もう一度言ふが、サイプラスで会つたのは嬉しい。

（オセロオ、デスデモオナ、従者達、退場）

イヤゴオ。（一人の従者に）港へ行つて待つてをれ。（ロデリゴオに）まあ、こつちへ来るが好い。若し君が男なら、僕の言ふことを聞き給へ。女に惚れれば、どんな卑怯な男でも、生れつき以上に気高くなるといふからな。副官は今夜番所で夜勤をする――そこで、先づ第一に言つて置かなければならないが――デスデモオナは、あいつに惚れてゐる。

ロデリゴオ。あいつに。ばかな、そんなことがあるものか。

イヤゴオ。まあ、指を口にかう当てて、おれの言ふことをよく聞くが好い。最初あの女がムウアに夢

中になつたのは、自慢話や法螺話に釣られたからだ。いつまでそんなものに釣られてゐるものか。利口な君にそれが分からぬ道理はない。女だつて、目の保養といふものが入る。鬼のやうな面ばかり見てゐたつて、なんの面白いものか。楽しみが済んで血が鈍ると、それに又火をつけて新しい情慾を催させる爲に、容貌のよさとか、年頃の似合はしさとか、とりなしのよさとか、美しさとかが必要になつて來るが、それさういつたものがムウアには全然ない。そこで、その必要なものの缺乏から、何か優しい自分が欺されたやうに感じて來る。そこで厭な氣持になつて、ムウアを嫌ふやうになる。これは自然の人情がさせる業で、きつと二度目の男を搜すやうになる。さあそこで、さうだとすると――これは何かな、爭ふべからざる議論だが――そのしあはせな地位に登るものはキヤシオの外にはない。性悪男で、内證で猥な情欲を滿たさうとする爲に、形ばかりの禮儀や親切を見せてゐるが、その外には良心らしいものの少しもない奴だ――あいつの外には誰もない、誰もない――靈つきの、狡猾な奴、折さへあればと狙つてゐる奴で、機會が來なければ自分で機會を作り出さうといふ惡魔だ。その上、あいつ、男はよし、年は若し、量見のきまらぬ莫迦女が、好きさうなものは悉く備へてゐる。何一つ缺點のない道樂者だ。しかも、あの女は、もうあいつに目をつけた。

ロデリゴオ。おれは信じない。あんな德の高い人に、そんなことがあつてたまるものか。

イヤゴオ。德の高い無花果の蔕かい。あの女が飲む酒だつて葡萄から出來てゐるのだ、果してほんと

に品が高いなら、ムウアにも惚れなかつた筈だ。品の高いプデングか。君はさつきあの女があの男の手をいぢるのを見なかつたか。あれに気がつかなかつたか。

ロデリゴオ。うん、それは見た。だが、あれは禮儀といふものだ。

イヤゴオ。いや、この手にかけて、あれは色事だ。猥な物語のぼんやりした序の口だ。両方の息が搦み合ふほどに唇と唇が側へ寄つたではないか。いゝいゝ、だいそれた卑猥だ。あの馴々しさが道を拂つて、やがて人目が押し寄せて來る。それからが肉欲の實行だ。たまらない——まあ、兎も角もおれに任した。おれは今ヱニスから君を連れて來たのだ。今夜は君も夜番をし給へ。その指圖は僕がする。キャシオは君を知らない。僕は君のつい近くにゐるから、どうかしてキャシオを怒らせるのだ。大きな聲を出すなり、あいつの職務を傷つけるなり、なんでも好いから臨機應變の所置を取るのだ。

ロデリゴオ。さうして。

イヤゴオ。あいつは短氣で怒りつぽいから、いきなり君をぶつかも知れない。わざとぶつやうに爲向けるのだ。すると僕がそれを利用して、サイプラスの奴等に暴動を起させる。その結果、キャシオを免職させるより外に和解の道がないやうにするのだ。さうすれば僕の工夫次第で、すぐと君の望は叶ふのだ。それで君の邪魔が首尾よく取り除けられるのだ。さうしなければ、到底吾々に好い日は來ない。

ロデリゴオ。やつて見よう。やれさうなことなら。

イヤゴオ。それは大丈夫だ。いづれあとで城で會はう。僕は將軍の荷物を取つて來なければならん。さやうなら。

ロデリゴオ。さやうなら。

ロデリゴオ、退場。

イヤゴオ。キヤシオがあの女に惚れてゐるのは確だ。あの女がキヤシオに惚れてゐるといふのもさうありさうなことだ。おれは嫌ひだが、ムウアはしつかりした變らない、立派な性質のある男だ。デスデモオナに對しても、きつとよい親切な夫に違ひない。ところで、おれもあの女には氣がある。ただ、おれのは情欲ばかりではない――尤も、さうした罪を全然免されるとは言はないが――寧ろ復讐からだ。あの色好みのムウアめ、どうもおれの夜着の中へもぐり込んだ形跡がある。それを思ふと、毒藥で五臟六腑を嚙まれるやうな心持だ。女房と女房を取り替つこにして、奴と相對になるまでは、氣が濟まん。若しそれが出來ずば、ムウアめにひどい嫉妬を起させて、分別の力では直らぬやうにしてやらう。それをするには、あの、ヱニスから連れて來た貧乏犬だ、あいつの逸りすぎるのをけしかけて、マイケル・キヤシオめをムウアに讒言してくれよう――一體キヤシオもおれの寢床へはひつたことがあるらしい――さうして、ムウアには禮を言はせ、おれを可愛がらせ、その上ずつし

り褒賞を出させる。あいつを思ふ儘莫迦に仕立てて、安穏でゐられる身を氣違ひにしてやるのだ――(自分の額を指して)萬事はここにあるのだが、まだごちやごちやで何も分からん。惡だくみの正體は實行に現れるまでは分からない。

イヤゴオ、退場。

第二場　街上

傳令、布告を持つて登場、島民、從ふ。

傳令。將軍オセロオの仰せだ。唯今土耳古艦隊全滅の報告が參つたによつて、いづれも凱旋の祝に、踊るなり、花火を揚げるなり、競技宴會何なりと勝手だ。今夜はこの吉報の外に、將軍御婚禮の祝宴もある筈だ。以上將軍の仰せだ。城内は出入勝手で、五時から十一時の鐘の鳴るまでは飲食各人の隨意である。神よ、サイプラスの島にも、オセロオ將軍にも御惠みを垂れ給へ。

一同、退場。

第三場　城内の廣間

オセロオ、デスデモオナ、キャシオ並に從者達、登場。

オセロオ。マイケル、今夜警護のものを取締つて貰ひたい。いかに祝でも、餘り度を過ごさぬやうにしたいものだ。

キャシオ。萬事イヤゴオが心得てゐます。併し、わたくしはわたくしで又取締りませう。

オセロオ。イヤゴオは正直な男だ――では、マイケル、おやすみ。あしたの朝、早く會はう。（デスデモオナに）さあ、お出で。買物は濟んだ。收入はこれからだ。お前とおれとの儲けはこれからだ――おやすみ。

オセロオ、デスデモオナ並に從者達、退場。

イヤゴオ、登場。

キャシオ、やあ、イヤゴオ。夜警をしなければならんな。

イヤゴオ。まだ早い、副官。まだ十時にもならん。將軍はデスデモオナが可愛いからこんなに早く退席されたのだ。だが、それも無理はない。まだ一晩も樂しんだことがないのだ。奥方はジョオウ神の色女にしても好いほどの美人だからな。

キャシオ。全く素敵もない美人だ。

イヤゴオ。それに、おれは保證するが、手管も十分にある。

キャシオ。いかにも若々しいきやしやな婦人だ。

イヤゴオ。だが、あの目つきはどうだ。挑發的ではないか。

キヤシオ。人の氣を引く目だ。だが、いかにもつつましやかだ。

イヤゴオ。ものを言ふのを聞いてゐると、男に向つて惚れろと命令するやうだ。

キヤシオ。實に完全無缺な婦人だ。

イヤゴオ。二人の閨の首尾でも祈るか……さあ、副官どの。ここに酒が一本ある。外ではキイプラスの色男連が黒奴將軍オセロオのために祝盃を擧げようとして待つてゐる。

キヤシオ。今夜は止めた、イヤゴオ。僕は酒を飲むと、すぐに酔つてしまふ。何か外に禮の仕方がありさうなものだな。

イヤゴオ。いや、あいつらは吾々の親友だ。ほんの一杯で好いから飲み給へ。あとは僕が助太刀する。

キヤシオ。今夜僕はたつた一杯飲んだだけだ。しかも巧みに水を割つて置いたのに、見給へ、もうこんなになつてしまつた。僕は酒に弱いのだから、もういぢめないでくれ給へ。

イヤゴオ。どうしたといふことだ。今夜は飲み明かしだ。この島の若い者達もそれを望んでゐるのだ。

キヤシオ。その連中はどこにゐるのだ。

イヤゴオ。ついその戸口の前に。頼むから、君、案内してくれ給へ。

キヤシオ。よし。あまり贊成ではないが。

キヤシオ、退場。

イヤゴオ。もう大分參つてゐる樣子だ。もうほんの一杯無理に飮ませれば、若い妻君の飼犬のやうに、すぐに誰にでも吠えついたり噛みついたりするだらう。そこへ持つて來て、あの莫迦者のロデリゴオは戀に性根を失つて、今夜もデスデモオナの爲だとばかり、一升酒をあふり立つた。ところで、あいつも夜警をする。それからサイプラスの若い者三人、氣位の高い息張つた奴等で、恐ろしく武士の名譽を重んずるこの島の選り拔きだが、おれはあいつらにも波々と注いで　ませた。ところであいつらも夜警をする。さて、さういふ醉どれの中へキヤシオを投り込んで、何かこの島の人間を怒らせるやうなことをさせる　　やつて來たな。うまくおれの空想通りに行けば、おれの船は、風もよし、汐も上々といふやつだ。

キヤシオ、再び登場。モンタノオ並に他の紳士達も入り來る。召使達、酒を持つて從ふ。

キヤシオ。果してあいつらは大杯で飮ませをつた。

モンタノオ。いや、ほんの小さいので、たつた一杯だ。三合とはひりはせぬ。わしは軍人だ、嘘は言はぬ。

イヤゴオ。こら、酒だ、酒だ。(歌ふ)

盃鳴らせ、ちんから、ちんから。」

盃鳴らせ、ちんからと。
いくさ人ぢやて人間だ。
人間僅五十年。
そんなら飲みやれいくさ人。

子供、酒だ、酒だ。

キヤシオ。好い歌だ。

イヤゴオ。これは英吉利で覚えた歌だ。英吉利人は酒が強いな。丁抹人だつて、日耳曼人だつて、布袋腹の和蘭人だつて――さあ、飲んだ、飲んだ――英吉利人にはとてもかなはない。

キヤシオ。英吉利人はそんなに飲むことが上手なのか。

イヤゴオ。さうとも、丁抹人なぞは忽ち酔ひつぶしてしまふな。日耳曼人を倒すのに汗一つかかない。和蘭人なぞは次の酒がない内に小間物店を出さしてしまふ。

キヤシオ。将軍の健康を祝さう。

モンタアノ。お相手をいたさう、副官どの。さあ、頂戴いたさう。

イヤゴオ。ああ、英吉利は好い国だ。

スチブン王はえらい方。

ずぼんの値段が一クラウン。
それでも六ペンス高いとて、
仕立屋ばかめとお小言だ。
立派な方でも、それだもの、
お前は身分が低いのだ。
國の亡ぶは奢りから。
古い外套で我慢しろ。
さあ、酒だ、酒だ。

キヤシオ。それは前のより又一段と好い歌だ。

イヤゴオ。もう一度歌はうか。

キヤシオ。いや、いや。さういふことをする奴は、自分を顧みぬ奴だ。はて、神は萬人の上にある。必ず救はれる魂もあれば、到底救はれる望のない魂もある。

イヤゴオ。仰せの通りだ。副官。

キヤシオ。そこで、この吾輩はと申すと――將軍に對しても、又目上のどなたに對しても、失禮の段は御用捨だが――吾輩は、その、救はれるつもりだ。

イヤゴオ。いや、僕だつてやつぱりそのつもりだ。副官。

キャシオ。だが、失敬だが、君は僕より後だ。副官は旗手より先に救はれなければならん。だが、もうそんなことはやめだ。それよりは任務にかからう——神よ吾等の罪を赦し給へ——諸君、任務にかかりませう。決して僕は醉つてはゐませんぞ。これは旗手どの、これは僕の右の手、これは僕の左の手だ。僕は醉つちやゐない。この通り、ちやんと立つてゐることも出來れば、ちやんとものを言ふことも出來る。

一同。如何にもさうだ。

キャシオ。そんなら宜しい。僕が醉つてゐるなどと思つてはいかんぞ。（退場）

モンタノオ。では、諸君、露臺へ行つて夜警にかかりませう。

イヤゴオ。今行つた男を御覽になりましたか。シイザアの側に立つて命令を出しても耻かしくない軍人です。唯一つ惡い癖があつて、それがあの男の美德と五分五分なのが氣の毒です。わたくしはオセロオが、あんまりあの男を信用してゐますので、ひよつとあの男のいつもの癖から、この島に騷動が起らなければ好いと思つてゐます。

モンタノオ。度々そんなことがあるのですか。

イヤゴオ。眠りこける前には、きつとあゝした序の幕があるのです。あの男は飲み過ぎてふらつきさ

へしなければ、時計の二廻りも夜警をする奴です。

モンタノオ。将軍に注意をしたら好いでせう。恐らく氣がつかずにゐるのでせう。或はあの通りの好人物なので、キヤシオの好いところばかり見えるのでせう。悪い點には目がつかないのでせう。さうではないのですか。

ロデリゴオ、登場。

イヤゴオ。（ロデリゴオに）どうしたのだ。ロデリゴオ。早く副官のあとを。さあ。

ロデリゴオ、退場。

モンタノオ。だが、お氣の毒なことだ。ムウアどのが、そんな悪癖のある男に、重要な地位を任して置くとは。これはムウアどのに、さう言つた方が親切ではなからうか。

イヤゴオ。いや、この美しい島にかけても、それはわたくしには出來ません。わたくしはこの上もなくキヤシオを愛してをります。それゆゑ、どうかしてあの癖を直してやりたいと思つてゐるのです――や、あの騒ぎは。

奥で「助けてくれ、助けてくれ」と叫ぶ。

キヤシオ、ロデリゴオを追つて登場。

キヤシオ。やい、悪黨。この野郎。

モンタノオ。どうしたのだ、副官。

キヤシオ。あいつ、おれに命令を下しをる。おのれ藁をかぶせた酒の瓶の様に叩き割つてくれるぞ。

ロデリゴオ。なに、叩き割ると。

キヤシオ。畜生、まだほざくか。（ロデリゴオに打つてかかる）

モンタノオ。それはいかん、副官。（キヤシオを留めて）まあ、待ち給へ。

キヤシオ。放してくれ。放さぬと貴様の頭も叩き割るぞ。

モンタノオ。まあ、君は酔つてゐる。

キヤシオ。なんだ。酔つてゐると。

　キヤシオとモンタノオが喧嘩になる。

イヤゴオ。（ロデリゴオに）さあ、あつちへ行つて、騒動だ騒動だとどなつて来い。（ロデリゴオ、退場）これ、副官――いや、両君――副官どの――モンタノオどの――誰か来てくれ――とんだ好い夜警だ。（鐘鳴る）誰が鐘を鳴らすのだ――ええ、畜生。町中が起きてしまふ。まあ、待て、副官。取り返しのつかぬことになるぞ。

　オセロオ、従者を連れて登場。

オセロオ。どうした。

モンタノオ。畜生。まだ血が止まらぬ。えらい傷を負うた。
オセロオ。待て。よさぬと命がないぞ。
イヤゴオ。待て、待て、副官——モンタノオどの——兩君——場所も任務も忘れたのか。待て。將軍の命令だ。待てと言つたら待たぬか。
オセロオ。一體どうしたのだ。どうしてこんなことになつたのだ。おれ達は土耳古人になつたのか。天があの野蠻人にさへさせぬことを、おれ達にさせるのか。野蠻な喧嘩は止めにしろ。基督信者の恥辱だ。それで尚、自分の怒を恣にしようとするものは、自分の魂を輕んずるものだ。ちつとでも動いたら命がないぞ——あのやかましい鐘を止めぬか。島の者をびつくりさせるわ。一體、二人とも、どうしたのだ——正直なイヤゴオ、お前はひどく悲しさうな顔をしてゐるが、一體誰が始めたのだ。包まず答へてくれ。
イヤゴオ。わたくしは存じません。たつた今まで仲よく夜警をして、花嫁花婿のやうに睦まじくしてをりましたのに、急に星の祟りで氣でも違つたやうに——いきなり劍を拔いて、互の胸を突き合ひ、終に双方とも血を流したのです。この子供らしい喧嘩が、どうして始まつたのか、わたくしには分かりません。こんなところへわたくしを運んで來たこのやくざな二本の脛はいつそ名譽の戰爭でなくしてしまへばよかつたと思ひます。

オセロオ。どうしたことだ、マイケル。お前がこんなに前後を忘れるとは。

キャシオ。どうかお赦し下さい。わたくしには何も分かりません。

オセロオ。モンタノオどの、あなたは日頃から行儀の正しいお方だ。若い時分から謹厳で沈着であられたことは、賢い世間が知つてをる。あなたのお名は賢明な人々の口に乗つてをる。そのあなたが、その立派な名誉をかなぐり捨てて、折角の好い評判を夜中の喧嘩といふ名に代へておしまひになつたのは、どういふわけです。御返事をお聞かせ下さい。

モンタノオ。オセロオどの。わしはひどい傷を負うた。イヤゴオどのがお傍で御承知です。わしは苦しくて、わしの口は利きません——わしが今夜申したことも、いたしたことも、少しも悪いとは思ひません。自分を愛することが罪悪でなければ。また乱暴者が襲うて来た場合に、自分を衛ることが罪でなければ。

オセロオ。わしの熱血は今理性を圧しはじめた。激情が判断の色を暗くして、道案内をしようとしてゐる。若しわしが少しでも動いたら、この腕がちつとでも上がつたら、誰も彼も用捨はないぞ。誰か申せ。どうしてこの怪しからん喧嘩が始まつたのか、誰が始めたのだ、この罪を犯したものは、たとひそれが一度に生れたわしの双子の兄弟であつても赦しはせぬ。何事だ。戦時の都会で、しかも人の心が戦々恟々としてゐる時に、内輪の、私の争ひをするとは。しかも夜、詰所で、警固

の任に當つてゐる者が。怪しからんことだ。イヤゴオ。誰が始めたのだ。

モンタノオ。（イヤゴオに）私情に捕へられたり、役目に縛られたりして、少しでも事實を枉げたら、
君は軍人ではないぞ。

イヤゴオ。まあ、さうわたしを苦しめないで下さい。マイケル・キヤシオを誹謗するくらゐなら、寧
この舌をこの口から切りとつてしまひたい。だが、事實を述べて、それがあの男の害になる筈はある
まい――將軍、實はかやうです。モンタノオどのとわたくしとが、話をしてをりますと、そこへ或
男が助けてくれと叫びながら驅けこんで參りました。すると、すぐそのあとから、キヤシオが拔劍
をして、今にも相手を斬り殺しさうな勢で追つかけて參りました。そこで、このお方が仲へはひつ
て、キヤシオをお留になつたのです。わたくしは、その大聲を出してどなる奴を追ひかけましたが
若しその聲で町中が騷ぎになつてはならないと思ひまして――果して騷ぎになりました――ど
うも足の早い奴で、とても追つつけないのです。その内に劍の打合ふ音や、キヤシオの聲高に罵る
聲が聞えましたので――そんなことは今晩までついぞなかつたことですが――すぐ引返して見ます
と――その間はほんの僅でしたが――二人は取組み合つて、打つたり突いたりの最中です。閣下が
お引き分けになつた時は、丁度二度目を始めたところでした。もうこれ以上申しあげることは出來
ません。ですが、人間はやつぱり人間です。どんな利口な人間でも、時としては自分を忘れます。

キヤシオはあの方に對して少しは無禮を働きましたが、人間といふものは、腹を立てると、親しい友達にさへ打つてかかることがあるものです。それにキヤシオは、あの逃げていつた奴から、とても堪へられないやうな侮辱を受けたに相違ありません。

オセロオ。イヤゴオ、お前は正直で友愛の情が深いから、事件を小さく言ひ繕つて、キヤシオの罪を輕くしようとするのだらう　キヤシオ、わしはお前を愛しはするが、もうわしの部下としては用ひぬぞ。

デズデモオナ、侍女に導かれて登場。

見ろ、妻まで起してしまつた。（キヤシオに）他の者への見せしめにも、きつと罰しなければならん。

デズデモオナ　どうしたのでございます。

オセロオ　いや、もう濟んでしまつた。寝床へ歸るが好い――モンタノどの、あなたのお怪我はわたくしが御介抱しませう――さあ、お連れ申せ。

モンタノオ、侍者に連れられて退場。

イヤゴオ、お前は町中をよく見廻つて、この騒ぎで驚かされた人心を取り鎭めるが好い――さあ、デズデモオナ。刀の音で甘い眠りを破られるのが軍人の常だ。

イヤゴオとキヤシオとの外、一同退場。

イヤゴオ。どうした副官。怪我をしたか。
キヤシオ。うむ。もうどうにも療治の法はない。
イヤゴオ。ばかな、そんなことがあるもんか。
キヤシオ。名誉、名誉。名誉、ああ、おれは名誉をなくしてしまつた。この一身の不滅の部分をなくしてしまつた。殘つてゐるのは、獣のやうな部分ばかりだ。おれの名誉。おれの名誉。
イヤゴオ。おれは正直だから、どこか體に疵を受けたのかと思つた。名誉に疵を受けるよりは、體に疵を受ける方がずつと痛いからな。名誉などといふものは、役に立たぬ食はせものだ。手柄がなくても屢〻手に入り、罪もないのになくなるものだ。君が自分で名誉をなくしたと思ひさへしなければ、決して名誉はなくなりはしない。はて、どうしたものだ 將軍の機嫌を直す手段はいくらでもある。一時の怒に觸れたのだ。憎んで罰したのではない。政略上罰しなければならなかつたのだ。恐ろしい獅子を嚇す爲に罪のない犬を打つやうなものだ。あやまりさへすれば、すぐと又元の通りになる。
キヤシオ。こんなやくざな、こんな醉つ拂ひの、こんな分別のない部下の身を以て、あんな善良な司令官を欺くよりは、寧排斥された方が好い。酒に醉ふ。管を卷く。口論する。大言を吐く。悪口をつく。自分の影を相手にして大きなことを言ふ。やい、貴様、目に見えぬ酒の精、若し貴様に名がないなら、以後貴様を悪魔と呼ぶぞ。

イヤゴオ。君が剣を抜いて追つかけた、あいつは何者だ。あいつは君に何をしたのだ。
キヤシオ。知らん。
イヤゴオ。知らんことがあるものか。
キヤシオ。ぼんやりは覚えてゐるが、なんにもはつきりは覚えてをらん、喧嘩をしたことは覚えてゐるか、なぜ喧嘩をしたかは覚えてをらん。おう、神よ、自分の性根を奪ひ去るやうな仇敵を自分で自分の口へ入れるとは。喜んで、浮れて、騒いで、手を拍ちながら、自分で自分を獣にするとは。
イヤゴオ。だが、もう大丈夫だ、だが、どうしてそんなに早く正気づいたのだ。
キヤシオ。怒といふ悪魔が来ると、酔ひどれといふ悪魔が喜んで逃げて行つてしまつたのだ。一つの缺點を指示してくれたのだ。それは自分で自分に愛想が盡きた。
イヤゴオ。いや、君はあんまり堅過ぎる。時も時、場所も場所、この国の事情も事情だから、こんなことの起らぬ方が重々よかつたとは思ふが、もう出来てしまつた以上は、どうにかして君の身の安全を計るが好い。
キヤシオ。そんなら復職を願ふとして、若し将軍に、お前は酒亂だと言はれたらどうする。おれにヒドラ程の口があつても、さう言はれたら一言も返事は出来ない。たつた今思慮分別のあつた男が、忽ち馬鹿者になり、立ちどころに獣となるとは。實に不思議だ。度をはづした盃は禍なるかな。

酒は悪魔なるかなだ。
イヤゴオ。まあ、さう言つたものでもない。好い酒は、用ひ方さへよければ、可愛い相手だ。もう酒の悪口はよせ。ところで、副官、おれが君を愛してゐることは、君、知つてゐるだらうな。
キヤシオ。それはよく知つてゐる――おれがこんなに飲んだくれるとは。
イヤゴオ。君だつて、どんな人間だつて、時には飲んだくれるものだ――どうしたら好いか教へて上げよう。将軍の奥方が今では将軍だ。といふわけは、この頃の将軍は、奥方のなさることや奥方の美しさを眺めたり考へたりすることに、身も魂も捧げてをられるからだ。奥方のところへ行つて、何もかも打ち明けるが好い。どうぞ、元の地位へ戻られるやうにと頼んで見るが好い。奥方は寛大な、親切な、動かされ易い、優しい性質で、頼まれたことは、頼まれた以上にしなければ気の済まぬお方だ。君とあの婦人の御亭主との骨折は、あの婦人に板を当てて貰ふことだ。さうすれば必ず愛の決裂は、前よりも一層二人の関係を堅くするだらう。
キヤシオ。成程、それはさうだらう。
イヤゴオ。僕は誠心誠意君の為を思つて言ふのだ。
キヤシオ。確にさうに違ひない。あしたの朝、早速奥様のデスデモオナにお詫を願つて見よう。若しそれが出来ぬやうなら、僕の運命ももうおしまひだ。

イヤゴオ。如何にも。では、おやすみ、副官。僕は夜警しなければならん。

キャシオ。おやすみ、イヤゴオ。

キャシオ、退場。

イヤゴオ。これでもおれを悪黨だと言ふ奴があるか。今の忠告は好意から出た正直な考で、誰が見てもまことらしく、實際ムウァの機嫌を取り戻す手段なのだ。なぞと言へば、人情のあるデスデモオナに正直な願ひごとをするのが、一番やさしいことだからだ。あの女の心は萬物を造る原素のやうに自由だからだ。それにあの女にとつて、ムウァの心を動かすことは——たとひ洗禮を、贖罪のしるしを、みんな捨てさせることとでも　あの男の魂はあの女の愛に縛りつけられてゐるから——活かさうと殺さうと心の儘なのだ。あの男の弱い心にとつては、あの女の慾までが神託のやうに見えるのだ——それでも、おれは悪黨か。すぐとキャシオの爲になるやうな、この平坦な道を教へてやつたおれが悪黨か——ふん、これが地獄の神意といふ奴だ。悪黨が大きな罪惡を播かうとするには今おれがやつたやうに、先づ神様めかした顔をして誘惑するのだ。あの正直な莫迦がデスデモオナに運命を頼み込み、女が又あいつの爲に一所懸命ムウァに言訳をしてゐる間に、おれはこの言葉をムウァの耳へ注ぎ入れるのだ。即ち女がキャシオを元の位置に戻さうとするのは自分の肉慾の爲だと、かう言ふのだ。さうすれば、女がキャシオの爲に盡せば盡すほどムウァの疑を受けるやうになる。

そこで、おれは女の淑徳を松脂にして、女の美點で[illegible]を作り、あいつらを一網にしてしまふのだ。

（ロデリゴオ、登場。）

どうした、ロデリゴオ。

ロデリゴオ。おれがこんなところまで、ついて來たのは、獵をするのが目的だつたのに、獵犬のやうな爲事は一向させられないで、後の方で吠えさせられてゐるばかりだ。金は殆どなくなつてしまつた。今夜はひどい目にあつた。この樣子では、結局むだ骨を折つて、金をなくして、莫迦になつて、またヱニスへ歸るぐらゐが落ちだらう。

イヤゴオ。忍耐のない人間といふものは爲方がないものだ、どんな疵だつて、さう急には癒らぬものだ。好いか。おれ達が智慧で爲事をする。魔術を使ふのではない。智慧がものを爲上げるには時間がかかる。これでうまく行つてゐないといふのか。キヤシオが君に斬つてかかつた。君はたつたそれつぱかりの疵で、キヤシオを片づけてしまつた。他のことも日光のお蔭で追々よくはなつて來るが、初めに花の咲いた實から熟すのが順だ。まあ、落ちついてゐるが好い。おや、もう朝だ。愉快に働いてゐると、時の立つのが早い。さあ、宿所へ引きとるが好い。さあ、おいで。またあとで話さう。さあ、行けと言つたら。（ロデリゴオ、退場。）そこで、おれは二つのことをしなければならん。先づ女房に言ひつけて、キヤシオの爲に奥方に取りなしをさせなければならん。うむ、さうさせよ

う。おれはその間に、ムウアを外へ連れ出して、キヤシオが奥方に頼んでゐる最中に連れて戻ることにする。さうだ、それが好い、計略は冷めぬ内に急いで打たぬと鈍くなる。（退場）

第三幕

第一場　城の前

キヤシオ並に樂師數名、登場。

キヤシオ。さあ、みんな、ここで一曲やつてくれ。禮はする。何か短いものを。將軍への朝の御挨拶に。

音樂。

道化、登場

道化。どうしたんだ、師匠達。その樂器はネエプルス仕込か。ひどく鼻にかかるやうだぜ。

第一の樂師。なんと仰しやいます。

道化。それは吹いて鳴らす樂器か。

第一の樂師。勿論、さやうで。

道化。ふん、そこで尻尾が下がつてゐるのだな。

第一の樂師。どこに物が下がつてをりますので。

道化。はて、おれの知つてゐる吹いて鳴らす樂器には、大抵物が下がつてゐるのだ。だが、それはさうと、これが禮の金だ。大將樣はお前達の音樂がひどくお氣に入つたので、お願だから、どうかもうやめてくれとの仰せだ。

第一の樂師。そんなら、やめにいたしませう。

道化。尤も、聞えないやうな音樂があるなら、もう一度やつても好い。だが、噂によると大將樣は餘り音樂をお好きにならぬといふことだ。

第一の樂師。吾々もさういふ樂器は持ちません。

道化。そんなら、その笛を袋の中へしまふが好い。おれは向うへ行くから。さあ、空中へ消えてなくなれ。それ。

樂師達、退場。

キヤシオ。おい、おい。

道化。追々には聞きませぬ。すぐと聞きませう。

キヤシオ。洒落はよしてくれ。少しばかりだが、ここに金がある。大將の奥方についてゐる婦人がもう起きてゐるなら、キヤシオといふものが、ちよつとお目にかかりたいと言つてゐたと傳へてくれ

[illegible]かつたさうだ。

道化。もう起きておらつしやいます。こつちの方へ起きていらつしやるなら、さう申しませう。

キャシオ。どうかしてくれ。

　道化、退場。

　イヤゴオ、登場。

好いところへ來た、イヤゴオ。

イヤゴオ。では、たうとう寝なかつたのだな。

キャシオ。[illegible]寝るものか。君と別れる前に夜が明けてしまつた。實はイヤゴオ、失禮だが、君の細君を呼びにやつたところだ。細君に頼んで、デスデモオナ様にお目にかからせて貰はうと思つてな。

イヤゴオ。すぐ女房をよこさう、僕はどうにかしてムウアを外へ引つぱり出さう。自由に君達が話の出來るやうに。

キャシオ。それは有難い。（イヤゴオ、退場。）あんなに親切で正直なフロオレンス人をおれは見たことがない。

　エミリア、登場。

エミリア。お早うございます、副官様。飛んだことでございましたね、殿様の御不興をお受け遊ばして。でも、ぢきにお歸參が叶ひませう。殿様と奥様が、そのことを話してゐらつしやいましたが、奥様は大層あなたの肩を持つてゐらつしやいました。すると、ムウア様が仰しやるのには、あなたが傷をおつけになつたあのお方は、サイプラスでも名高いお方で、それに高貴なお方とも縁故の深いお人ゆゑ、世渡りの上で、どうにもあなたを許すわけには行かない。併し、決してあなたを憎んでゐらつしやるのではありませんから、人からの頼みはなくても、安全な折が來さへすれば、御自分であなたを呼び戻すと、さう仰しやつてでございました。

キャシオ。それはさうだらうが、若し出來るなら、デスデモオナ様と差向ひで、ちよつとお話が出來るやうに計つてはくれまいか。

エミリア。そんなら、こちらへおはひりなさいまし。御遠慮なく、お胸の内をお話し遊ばすことの出來るやうな場所へ御案内いたしませう。

キャシオ。それは有難い。

兩人、退場。

第二場　城内の一室

オセロオ、イヤゴオ、並に紳士達、登場。

オセロオ。イヤゴオ、この手紙を水先案内に渡して、あの男から元老院へ宜しく申し傳へさせてくれ。それが濟んだら、おれは城壁を散歩してゐるから、そこへ來い。

イヤゴオ。畏りました。仰せの通りいたします。

オセロオ。それでは皆さん、城砦を一廻りいたしませうか。

紳士達。御案内いたしませう。

一同、退場。

第三場　城内の庭園

デスデモオナ、キヤシオ、エミリア、登場。

デスデモオナ。安心しておいで、キヤシオ。出來るだけのことはして上げるから。

エミリア。どうぞ。奧樣、さうしてお上げ遊ばして。宿も自分のことのやうに心配してゐるのでございますから。

デスデモオナ。ほんとにお前の御亭主は感心な人ね。安心しておいで、キヤシオ。きつと殿樣とお前を元のやうな仲よしにして見せるから。

キヤシオ。有難うございます。奥樣、マイケル・キヤシオの身はどうなりましても、あなた樣の御恩は決して忘れません。

デスデモオナ。有難うよ。お前は殿樣を愛してゐるのだし、それに隨分長い間の知合なのだから、きつと大丈夫だよ。世間の手前は兎も角も、決してお前を粗略にはさせないよ。

キヤシオ。ですが、奥樣、その世間の手前といふのが、餘り長く續きますと、つい水のやうな實のない食物にも養はれ、詰まらぬ情實にも力を得て、わたくしがをりませぬ内に、役でも取り上げられてしまふことになりますと、將軍はわたくしの愛をも忠義をも忘れておしまひになるでせう。

デスデモオナ。そんな心配はないよ。ここにゐるこのエミリアの前で、お前の役目はきつと取り戻してあげると請合つても好い。安心しておいで、一旦友達になつた以上は、どこまでも友達でゐたいのだから。わたしは決して夫を休ませはしない。言ふことを聞くまで起して置いて、相手が辛抱し切れぬまで責めよう。寢床を學校にもし、食卓を懺悔臺にもしよう。あの方が何をなさる時にも、キヤシオのお詫を言ふことにしよう、だから、安心しておいで、お前の代理人は、この訴訟を反古にする位なら、いつそ死んでしまつた方が好いと思つてゐるのだよ。

エミリア。奥樣、殿樣がお見えになりました。

キヤシオ。奥樣、では、失禮いたします。

デスデモオナ。まあ、お待ち。お前も側で聞いておいで。

キヤシオ。いや、唯今はいけません。氣が落ちつきませんので、とても自分のことを願ふことは出來ません。

デスデモオナ。では、好いやうにおし。

キヤシオ、退場。

オセロオ、イヤゴオ、登場。

イヤゴオ。や——厭なものを見た。

オセロオ。なんだと。

イヤゴオ。いや、なんでもありません。だが、若し——わたくしには分りません。

オセロオ。今妻のところを出て行つたのは、キヤシオではなかつたか。

イヤゴオ。キヤシオですと、閣下。そんな筈はありません。キヤシオなら、あなたのお出でになるのを見て、何か惡いことでもしたやうに、こそこそ逃げて行く道理はありません。

オセロオ。いや、たしかにさうだつた。

デスデモオナ。殿様、御機嫌は如何でございます。たつた今、或訴訟人が參つたので、それと話をしてゐたところでございます。あなたの御不興を蒙つて萎れ返つてゐる男でございます。

オセロオ。さう言ふのは誰のことだ。

デスデモオナ。申さないでも分つてゐませう。副官のキャシオです。ねえ、あなた、若しわたくしに、あなたを動かす德や力があるのなら、すぐにあの人を赦して上げて下さい。あの人は眞實あなたを思つてゐる人です。間違ひをしたのは、知らずにしたので、たくんでしたのではありません。若しこれが違つたら、わたくしには、人の善惡の見別がつかないのです。どうぞあの人を呼び返して下さい。

オセロオ。今出て行つたのはあの男だつたのか。

デスデモオナ。はい、あんなに首を垂れて。いまだにあの悲しさうな姿が目先に殘つて、こつちまでが悲しくなる。ねえ。あなたどうぞ呼び返して下さい。

オセロオ。今はいかん。いづれあとで。

デスデモオナ。でも、それはちきでせうか。

オセロオ。出來るだけ早く。お前の爲に。

デスデモオナ。では、夜食までに。

オセロオ。いや、けふはいかん。

デスデモオナ。では、あすのお午に。

オセロオ。あすの午は内では食はん。城で將校達に會ふことになつてゐる。

デスデモオナ。では、あすの晩。でなければ、火曜日の朝。火曜日の午か夜。水曜日の朝。お願ですから、時を極めて下さい。でも、三日を過ぎないやうに。ほんとにあの人は後悔してゐるのです。それにあの落度は、普通なら――戰の時は身分のある人でも、嚴しくしなければならぬといふことは聞いてゐますが――何も絶交をなさらなければならない程の罪ではありません――いつ呼んで下さるのです。ねえ、あなた言つて下さい。あなたがわたくしにお頼み遊ばしたことを、わたくしが拒絶したり、そんなに躊躇したりしたことがありますか。マイケル・キヤシオはあなたと一緒に結婚の申込に來て、あなた――あなたのことを惡く言つた時分に、幾度もあなたの肩を持つた人ではありませんか――その人のとりなしをするのに、こんなに骨が折れるとは。これが若しわたしなら

オセロオ。どうかもうなんにも言はないでくれ。いつでも來たい時に來させるが好い。おれは決してお前の願を斥けはしない。

デスデモオナ。こんなことは、なんでもありやしません。手袋をお嵌め遊ばせとか、滋養になる食物を上がれとか、風を引かぬやうに遊ばせとか、あなたの爲になることを、あなたにお願ひするのと同じことです。若し、ほんとにあなたの愛を試さうとするなら、もつとむづかしい、もつと重い、許すのが恐ろしいやうなことをお願ひいたします。

オセロオ。どんなことでも決して厭とは言はん。だから、どうぞ頼むから、暫くあつちへ行つてくれ。

デスデモオナ。決して厭とは申しません。では、御機嫌宜しう、殿様。

オセロオ。御機嫌よう、デスデモオナ。すぐに行くぞ。

デスデモオナ。エミリア、おいで。(オセロオに) あなたの思ふ通りに遊ばせ。どんなことでもわたしは從ひます。

デスデモオナとエミリア、退場。

オセロオ。可愛いやつだ。若しおれがお前を愛さないなら、おれの魂は亡びてしまふが好い。おれがお前を愛さなくなつたら、再びこの世に混沌が來るだらう。

イヤゴオ。閣下――

オセロオ。なんだ、イヤゴオ。

イヤゴオ。閣下が奥樣にお結婚の申込をなすつた時分、マイケル・キヤシオは、お二人の仲を存じてをりましたか。

オセロオ。あれは初からしまひまで知つてゐた。なぜ、そんなことを訊くのだ。

イヤゴオ。いゝえ、なに、ちよつとそれを伺つておきたいと思ひましたので。別に心配なことではないのです。

オセロオ。なぜ、そんなことを訊いて見たくなつたのだ。

イヤゴオ。あの男が奧樣を知つてゐようとは夢にも思ひませんでした。

オセロオ。知つてゐたとも。あの男は屢〻二人の仲立になつたのだ。

イヤゴオ。それはほんとですか。

オセロオ。ほんとかと聞くのか。うむ、ほんとだとも　それがどうしたのか。あれは正直な男ではないか。

イヤゴオ。正直ですと。閣下。

オセロオ。正直だ。如何にも正直だ。

イヤゴオ。わたくしの存じてをります限りでは。

オセロオ。どうだと言ふのだ。

イヤゴオ。どうだと言ふのです。

オセロオ。どうだと言ふのだ　（傍白）怪しからん。おれの口眞似をしてをる。人に打ち明けるのが恐ろしいやうな、何か厭なことをでも考へてゐるやうに――（イヤゴオに）何かわけがあるのだらう。つい今しがた、キャシオが奧のところを出て行つた時に「厭なものを見た」とお前が言ふのを聞いた。何が厭なものなのだ。それから、結婚の申込をしてゐる間、あの男がおれの相談相手だつたと

言ふと「それはほんとですか」と言つて、何か恐ろしい考を頭の中に閉ぢ籠めてでもゐるやうに、額に皺をよせたな——お前、おれを愛してゐるなら、お前の考へてゐることを言つてくれぬか。

イヤゴオ。わたくしが閣下をお慕ひ申してをることは、閣下御存じの筈です。

オセロオ。それは知つてをる。お前は愛と誠實に溢れてゐて、何事でも口に出して言ふ前には、先づよく考へる男だと思つてゐるから、それでお前のそんなに躊躇するのが氣にかかるのだ。これが腹の黒い不忠な手合なら、慣用手段の奸策とも思はれようが、正しい者がそんなことをするのは、何か憤慨に堪へぬやうな秘密を抱いてゐて、それが迸り出るのに違ひない。

イヤゴオ。マイケル・キャシオは——神に誓つても宜しうございます——正直な男だと思ひます。

オセロオ。おれもさう思ふ。

イヤゴオ。人間は見えてゐる通りに違ひありません。若し、さうでなければ、さう見えないやうにいたしたいものです。

オセロオ。たしかに人間に見えてゐる通りに違ひない。

イヤゴオ。果してさうなら、キャシオは正直な男だと思ひます。

オセロオ。いや、どうもお前はまだ外に考へてゐることがあるやうだ。頼むからお前の考へてゐる通りを言つてくれ。お前の思つてゐる通りをすつかり言つてくれ。どんな悪いことでも構はぬ。どん

な悪い詞を使つても好い。

イヤゴオ。閣下、それは御勘辨を願ひます。義務とあれば、どんなことでもいたさなければなりませんが、奴隷にさへ許されてゐることで、わたくしが縛られる道理はありません。わたくしの考を言へと仰しやいますか。どんな意地の悪い、どんなによからぬことを考へてゐるか知れませんぞ。決して穢いことのはひり込まぬ宮殿といふものがございませうか。どんな綺麗な胸の中でも穢い疑惑が正しい考と席を同じうして、裁判沙汰いたすものです。

オセロオ。イヤゴオ。お前にはお前の友達に背くものだぞ。若し、その友達が侮辱されてゐると思ひながら、それをその友達の耳に入れなければ。

イヤゴオ。どうか御勘辨を願ひます。多分わたくしの當推量は間違つてをりませうが、正直わたくしは他人の罪悪を探り出す悪い性質がございますので、わたくし疑惑は何もないところから、履罪を作り出しますので――どうか、さうした、ぢぐはぐな臆測などを氣にかけなさらぬやうに。不確な漠然とした話がでて、御心配なさりませんやうに、たとひわたくしの考を申し上げましても、それは閣下の御安心にもならなければ、閣下のお爲にもなりません。わたくしの名や言質や智慧の爲にもなりません。

オセロオ。それはどういふわけだ。

イヤゴオ。閣下。男にとつても女にとつても、名譽は魂の一番大切な寶物でございます。わたくしの財布を盗む奴は、一向詰まらぬものを盗むのです。それは何物かには違ひないのですが、實は無一物なのです、わたくしの物だつたものが、今はそいつのものになる。しかも、それはこれまでに何千人の手に使はれたか分らないものなのです。ところが、名譽を盗む奴は、盗む奴を金持にもしないで、取られたわたくしをほんたうに貧乏にしてしまふのです。

オセロオ。どうしても、俺はお前の考を聞かねばならん。

イヤゴオ。いや、それはだめです。たとひわたくしの心が閣下のお手にありましても。況やそれはまだわたくしが保存してゐるのですから。

オセロオ。なに。

イヤゴオ、閣下。どうぞ嫉妬心をお起しにならないで下さいまし。嫉妬は取つて食ふ餌食をおもちやにする目玉の青い化物です。不義をされても、自分の運命を知つて、不貞な妻を愛さぬ男はしあはせです。女を愛してゐながら、疑ぐつたり、氣を揉んだり、しかも尙憎めずにゐる男には、なんといふみじめな月日を送ることでございませう。

オセロオ。おう、なんといふみじめな。

イヤゴオ。貧乏でも、それに滿足してゐれば、金持も金持、大金持も同じことですが、如何に無限な

富の持主でも、始終貧乏になりはせぬかと心配ばかりしてゐたら、冬枯のやうに貧しいのも同然です。ああ、神よ、總ての人類の魂を、嫉妬より逃れしめ給へ。

オセロオ。どうしたのだ。なぜ、そんなことをいふのだ。お前はおれが月の形の變る度に、新しい疑惑を起すやうな嫉妬の生涯を送るとでも思つてゐるのか。いや、いや。おれは忽ち疑ひ、忽ち解決してしまふ。お前が想像するやうな、吹けば飛ぶやうな空な疑惑に、この心を勞する位なら、おれは山羊になつてしまふ。おれの妻が美しくて、よくものを食べて、交際が好きで、辯舌がなめらかで、よう歌つて、よう彈いて、よう踊るといつたところで、おれは決して嫉妬を起しはせぬ。淑徳さへ伴うてゐれば、さうしたことは却つて女の美徳になるのだ。又おれは自分に弱點があるからと言つて、それが為に妻が背かうなどとは、聊か恐れもせねば疑ひもせぬ。妻は目があつたからおれを選んだのだ。いや、イヤゴオ。おれは疑ふ前に先づ見る。疑つたら證據を求める。そして、證據が上がつた以上は、唯この一事あるのみだ——愛を捨てるか嫉妬を捨てるかだ。

イヤゴオ。さう承つて安心しました。それでわたくしの閣下に對する愛と義務とを忌憚なく披瀝することが出來ます。さういふ己むを得ずして申すのですから、そのつもりでお聞き下さい。勿論、まだ證據などを擧げることは出來ません。唯奧樣に御注意をなさい。奧樣とキャシオとの關係によく目をおつけなさい。疑ふでもなく、油斷するでもなく、目をはつきりとさせてゐるのです。わたくし

は閣下の磊落な高貴な御氣質が、兎角悪用されるのが殘念です。御注意なさいまし。わたくしは國のものの性質をよく知つてゐます。ヱニスでは夫には見せようとしない不都合を、天には平氣で見せるのです。あいつらの最上の道徳は、悪いことをしないのではなくて、それを人に隱すことです。

オセロオ。果してさうか。

イヤゴオ。奥樣は閣下と御一緒にならうとして、お父樣をお騙しになつたのです。閣下のお顔を見て、恐れをののいてゐるやうに見えた時、實は一番閣下を慕つてをられたのです。

オセロオ。如何にもそれはさうだつた。

イヤゴオ。さあ、そこです。あの若さで、あんなにうまく面を被つて、お父樣に目隱しをして、それを魔術だと思はせるほどの腕のあるお方です――いや、これは失禮。どうぞ御勘辨を。あまり閣下の事ばかり思ひますので、つい。

オセロオ。いや、お前の志は忘れない。

イヤゴオ。さぞお氣に障りましたでせう。

オセロオ。そんなことはない、そんなことはない。

イヤゴオ。でも、どうもそんな氣がいたします。尤も、唯今申上げたことは、總て閣下を思ふのあまり申し上げたので、どうかその點は御諒解を願ひます――だが、どうもお氣に障つたやうだ。どう

か、わたくしの申し上げたことを疑惑以上に誇張してお考へにならぬやうに。

オセロオ。いや、そんなことはしない。

イヤゴオ。若しそんなことをなさると、お爲を思つて申したことが、思ひもよらぬ悪い結果を生ずることになりませう、キャシオはわたくしの大事なお友達です――どうもお氣に障つたやうだ。

オセロオ。いや、おれはなんとも思つてはをらん。おれはデスデモオナが不貞だなどとは思はん。

イヤゴオ。どうぞ、いつまでも奥樣がさうであるやうに、どうぞ、いつまでも閣下がさう信じておゐでになるやうに。

オセロオ。だが、どうして――自然の人情に背いて

イヤゴオ。さあ。その點でございます　あけすけに申せば　同じ國の人間で、顏の色も同じなら、身分もよく釣合つた手合に從ふのが人情の自然であるのに、さういつた方面の申込に、てんで目をくれないといふのは、さうしたさもしい根性の内には、何か、から底の知れぬ悪だくみ、怪しからん下心があるやうに思はれます――併し、御免下さい。わたくしは何もかもはつきり奥樣のことを指して申すのではありません。唯わたくしの恐れてをりますのは、いつか又自然の人情に立戻つて、國の者の容貌と閣下のそれとをお比べになつて、後悔をなさるやうなことがあつてはと思ふのです。

オセロオ。もう行つてくれ、行つてくれ。また氣のついたことがあつたら、知らせてくれ。お前の家

内に見張をさせてくれ――あつちへ行つてくれ、イヤゴオ。

イヤゴオ。（行きながら）では、失禮いたします。

オセロオ。なぜ、おれは結婚したのだらう。あの正直な奴、きつと今話した以上に見たり聞いたりしたことがあるに相違ない。まだまだあるに相違ない。

イヤゴオ。（戻つて來る）閣下、このことはどうぞもうこの上御穿鑿なさらぬやうに願ひます。暫くこの儘にして置いて御覽なさいまし。なるほど、キャシオは立派に任務を果す才能のある男ですから、復職をさせるのが當然ではありませうが、思召次第で、暫く遠ざけて御覽になれば、あの男の本心も知れ、あの男の態度も分かつて參るでせう。さうして置いて、奥樣があの男の復職をどんなに手強く、どんなに熱心にお願ひなさるか、氣をつけてゐて御覽なさいまし。さうすれば、また分かつて來ることもございませう。先づそれまでは、わたくしの申すことは、取越苦勞だとお思ひを願ひます――實際また取越苦勞だと思つてをりますので――どうか先づそれまでは奥樣を潔白だと思つていらして下さいまし。

オセロオ。その心配には及ばん。

イヤゴオ。では、もう一度お別れをいたします。（退場）

オセロオ。あいつは極めて正直な奴で、世智に長けてゐて、人間の行のあらゆる機微に通じてをる。

若しおれが手飼の鷹に手を噛まれたのであつたら、その足につけた革紐が、よしおれの心に結びつけられてゐたにしても、それを切つて風下へ放ちやり、運命の餌食を漁らせてやらう。恐らくおれの顔の色が黒いので、女官どもが持つてゐるやうな物優しい交際術に長けてをらぬので、或はおれの歳がもう下り坂だといふので——だが、それはまだそれほどでもないが——それでおれを捨てたのだ。若しさうなら、おれは侮辱されたのだ。侮辱されたとすれば、それを慰める手段は、あの女を憎むより外にない。ああ、呪はしき結婚だ、あの美しいものを、我がものだといふことは出来ながら、その情欲を占有することが出来ぬとは。ああ、愛するものの情の片隅を我がものにして、他人の慰みに供へさせるよりは、いつそ蝦蟇になつて、穴の中の悪氣を喰つてゐる方が増しだ。だが、併し、これが身分のあるものの禍だ。そこへ行くと、下賤のものの方がよつぽどしあはせだ。これは死のやうに免れ難い運命だ。この角の禍は生れ落ちた時から、もうついて廻つてゐるのだ——デスデモオナが来た。

　デスデモオナとエミリア、登場。

あの女が不貞なら、天は自ら欺いてゐるのだ。おれは信じない。

デスデモオナ。殿様、どう遊ばしたのです。もう食事の御用意も出来てゐれば、御招待遊ばした島の紳士達も、あなたのお出でを待つてをられます。

オセロオ。それは惡いことをした。

デスデモオナ。どうしてそんなに元氣のない物の言ひやうをなさるのです。お加減でも惡いのですか。

オセロオ。この、額のところが痛いのだ。

デスデモオナ。それはきつとおやすみにならなかつたからです。すぐに癒つてしまひます。そこのところを緊く縛つて差し上げませう。すぐ癒ります。

オセロオ。そのハンケチは小さ過ぎる。（デスデモオナ、ハンケチを落す）うつちやつて置いてくれ。さあ、一緒に内へはひらう。

デスデモオナ。ほんとに、お加減が惡くては、いけませんわねえ。

オセロオとデスデモオナ、退場。

エミリア。好いあんばいに、このハンケチが手にはひつた。これは奥樣がムウア樣からお貰ひ遊ばした最初の記念品だ。いたづらな内の人は、これを盗んでくれと百遍もわたくしに賴んだ。でも、これは殿樣が決して放してはならぬぞとお言ひつけになつたものだから――奥樣も大層大事に遊ばして、しよつちうお手から放さずに、キツスをしたり、物を言ひかけたりしてゐらした。この模樣を寫して、イヤゴオどのに渡して上げよう。一體こんなものを何にするのか、わたしには分からない。わたしは内の人の氣に入るやうにすれば、それで好いのだ。（イヤゴオ再び登場）

イヤゴオ。どうした、どうして一人でこんなところにゐるのだ。

エミリア。そんなにがみがみ言はないでもよござんす。あなたに上げるものがあるのです。

イヤゴオ。おれにくれるもの。どうせ碌なものではあるまい。

エミリア。まあ、見て御覧なさい。

イヤゴオ。ばかな女房を持つた男は

エミリア。まあ、それつきりですの。あのハンケチのお禮は、もうそれつきりですか。

イヤゴオ。どのハンケチ。

エミリア。どのハンケチですつて。分かつてゐるぢやありませんか。ムウア様が一番最初にデスデモオナ様にお上げになつた、あの度々あなたがわたしに盗めと仰しやつた、あのハンケチですわ。

イヤゴオ。では、盗んでくれたのか。

エミリア。いいえ、盗んでもない。うつかりお落しなすつたのを、運よくここに居合したので、つい拾つて置いたのです。そら、ここにあります。

イヤゴオ。感心。よこせ。

エミリア。こんなものを何になさるんです。なんだつて、あんなに盗め盗めと仰しやつたのです。

イヤゴオ。（ハンケチを引つたくる）それを聞いて何にする。

エミリア。たいした用のないものなら、返して下さい。可哀さうに奥樣は、それをなくしたら、氣違ひのやうにおなりだらう。

イヤゴオ。知らん顏をしてゐれば好い。立派に入用があるのだ。さあ、もう彼方へ行け。あつちへ。

エミリア、退場。

キヤシオの住ひにこのハンケチを落して置いて、あいつに拾はせよう。空氣のやうな輕いことでも、嫉妬の目には聖書の文句ほどたしかな證據に見えるものだ。これも何かの役に立たう。ムウアめはおれが盛つた毒藥で、もう變りかけてゐる。嫉妬といふものは元來毒藥だ。はじめは大して苦いものではないが、少しでも血に混ると、忽ち硫黃の山のやうに燃え上がる――そら見ろ、もうやつて來た。

オセロオ、再び登場。

たとひ罌粟でも、曼陀羅華でも、この世界にあるどんな眠り藥でも、もうきのふまでのやうにお前に安眠はさせまい。

オセロオ。はあ。不貞だなどと。おれに對して不貞だなどと――

イヤゴオ。どうなさいました、將軍。もうあのことは、お忘れなさい。

オセロオ。下がれ。行つてしまへ。貴樣はおれを拷問臺にかけをつた。ちつとばかり知るよりは、う

んと侮辱された方が增した。

イヤゴオ。どうなさいました、閣下。

オセロオ。おれはあの女が内證で情欲に耽つてゐようなどとは夢にも思はなかつた。おれは見もしなければ、考へもしなかつたし、不快に思ふやうなこともなかつた。あの明くる晩にも、おれはよく寝た。なんの心配もせず、愉快に寝た。女の唇にキヤシオのキッスのあとなどは見かけもしなかつた。物を盗まれても、盗まれた當人がそれを知らずにゐるなら、默つて言はずに置く方がよい。さうすれば盗まれなかつたも同じことだから。

イヤゴオ。飛んだことを仰しやいます。

オセロオ。たとひ全軍が、工兵その他總てのものまでが、あれの美しい體をむさぼりをつたにしても、おれさへそれを知らなかつたら、おれは幸福でゐられたらう。ああ、もう永遠に平和な心とはお別れだ。滿足ともお別れだ。兜の羽根の風にゆらぐ軍隊とも、野心を美徳とする大戰争とも、もうお別れだ、もうお別れだ。嘶く軍馬とも、胆を裂く喇叭とも、胸を躍らす太鼓とも、耳を貫く軍樂の笛とも、あの堂々たる旗印とも、もうお別れだ。名譽の戰争が持つてゐるあらゆる光輝、誇り、飾り装ひとも、もうお別れだ。おう、汝、むごたらしい喉を以て、死ぬことのないジョオウの雷のやうな叫聲を擬する殺人機よ。お前とも、もうお別れだ。オセロオの日課は濟んでしまつた。

イヤゴオ。そんなことが、閣下。

オセロオ。やい、惡黨。おれの妻は果して淫婦か。きつと淫婦か。目に見える證據を見せろ。若し、それが出來ずば、不滅の靈魂を誓にかけて、貴様はおれの怒に會はうより、犬に生れた方がよかつたと言はう。

イヤゴオ。何もそれほどまでにお思ひ詰めなさらないでも。

オセロオ。證據を見せてくれ。それが出來ずば、せめてその證據が疑をかける隙も手がかりもないことを皆證據立てろ。さもないと命はないぞ。

イヤゴオ。まあ、閣下。

オセロオ。若しあの女を讒謗して、妄におれを苦しめるなら、もう祈禱などは決してするな。後悔の心などは微塵も殘さず捨ててしまへ。惡業の頂に更に惡業を積み重ねろ。天を泣かせ、地を震はせるやうな惡事を行へ。これ以上の大きな呪を貴様に加へるものはないのだから。

イヤゴオ。おう、神様。どうぞお赦し下さい ―― それでもあなたは男なのですか。魂があるのですか。思慮があるのですか ―― では、御機嫌よろしう。わたくしはもう軍職を退きます　ええ、ばかな奴だ。誠實を惡德にするために生きてゐるとは。ああ、恐ろしい世の中だ。皆さん、御用心、御用心。人間、正直にするのは危いことだ。（オセロオに）お蔭で學問をいたしました。これからは決し

——友達の爲などは思ひますまい。爲を思へば、却つて恨みを買ふのですから。

オセロオ。いや、待て。これからも正直にしなければならん。

イヤゴオ。いや、わたくしはこれから利口になります。正直は莫迦の異名で、それが何かすれば、きつとしくじるのですから。

オセロオ。怪しからん。おれは妻が正直であるやうにも思はれれば、ないやうにも思はれる。お前が正しいやうにも思はれれば、さうでないやうにも思はれる。おれは證據が見たい。月の神の顔のやうに清淨無垢であつたあれの名が、おれの顔のやうに、汚れて黒くなつた。縄か、刃か、毒か、火か、人を溺らすやうな、川があるなら、おれは決して赦しはせん。おれは證據が見たい。早く證據を見て滿足したい。

イヤゴオ。ひどい御苦勞でございますな。悔んだことを申し上げてしまつた——證據が見たいと仰しやいますか。

オセロオ。おう、見たい。いや、見ずには置かん。

イヤゴオ。それは御覽にもなれませう。だが、どうして。どういふ風なところを御覽になるおつもりでございます。上官たる閣下があんぐり口を開いて——二人が一緒に寢てゐるところを御覽になるおつもりですか。

オセロオ。ええ、畜生、畜生。

イヤゴオ。さういふところを御覽に入れるのは、ちつとむつかしい爲事です。あれは當人同志の目の外に入れるべきものではございません。そこで、どうしたら好いだらう。どういふ風にしたら。どうしたらお氣が濟みます。それを御覽にならうといふのは無理です。たとひ二人が山羊のやうに多淫で、猿のやうに夢中で、さかりのついた狼のやうにみだらで、醉つぱらつた阿房のやうに淫亂でありましても。併し、眞實の戸口へすぐ行けるやうな有力な事實で滿足をなさるなら、すぐとお話しいたしませう。

オセロオ。不義をしてゐるといふ生きた事實を話してくれ。

イヤゴオ。いや、實に厭な役目だ。だが莫迦正直な心に騙られて、もうここまで乘りかけたからには、飽くまで申し上げてしまひませう。實はついこないだ、キヤシオと一緒に寢てをりますと、ひどく齒が痛んで、とても寢られないのです。世の中には寢ると何もかもしやべつてしまふといふ、心に締りのない輩があります。キヤシオもその種の人間で、寢言でこんなことを申すのです。「デスデモオナさん、用心をしませうねえ。二人の仲を悟られぬやうに」。それから、あなた、わたくしの手を掴んで、握り締めて、「可愛い人」と言ひながら、力一ぱいキツスをするのです。まるでわたくしの唇に生えてゐるキツスを、根元から引つこ拔きでもするやうに。それから、向うの足をわた

しの股の上へ載せて、溜息をついたり、キッスをしたりして、「あなたをムウアに與へた運命を呪ひます」などと申すのです。

オセロオ。怪しからん。怪しからん。

イヤゴオ。いや、併し、これはあいつの夢に過ぎないのです。

オセロオ。だが、夢は過去の事實を見せるものだ。夢ではあるが、嫌疑は深い。

イヤゴオ。なるほど、力の弱い他の證據を強くする役には立ちませう。

オセロオ。あいつ、八つ裂にしても飽き足らん。

イヤゴオ。いや、併し、さう御熱しになつてはいけません。まだ何も見たのではありません。まだ奥樣は貞實かも知れないのです。唯ちよつと伺ひますが、閣下は苺の實の繡がしてあるハンケチを奥樣が持つていらつしやるのを御覧になつたことがありますか。

オセロオ。それはおれがあれに遣つたのだ。おれの最初の贈物だ。

イヤゴオ。それは一向存じませんでしたが、そんな風なハンケチで―― たしかに奥樣のに相違ありませんが、そんなハンケチで、けふキャシオが鬚を拭いてゐるのを見ました。

オセロオ。若しさうなら――

イヤゴオ。若しさうなら、而も何もそれが奥樣のだつたら、他の證據と一緒にして考へて、大分奥樣

の不利になりました。

オセロオ。おう、あのキヤシオめの命の數が四萬もあれば好い。たつた一つをとつただけでは、おれの恨は晴されん。もうそれまで聞けば事實に相違ない。見ろ、イヤゴオ、おれの愚しい戀愛の情は、もうこの通り天へ吹き飛ばしてしまつた。もう消えてしまつた。恐ろしい復讐の神よ、貴樣の洞穴から起きて出て來い。おう、戀愛よ。貴樣の冠をも、心の王座をも、憎みの暴君に渡してしまへ。おう、この胸よ、膨れ上がれ。貴樣は蝮の舌に刺されたのだぞ。

イヤゴオ。まあ、どうぞ氣を落ちつけて。

オセロオ。血だ、血だ、血だ。

イヤゴオ。どうぞ御辛抱を。又お氣持の變ることでもございませうから。

オセロオ。いいや、決して變らん。あのポンチツク海の氷のやうな潮流は、ひた押しに押し進んで、決してあとへ引くことなく、プロポンチツクとヘレスポントへ、飽くまでも注ぎ入ると言ふが、血生臭いおれの心も、一旦地響きをさせて歩き出した以上は、決して後は見返らん。決してさもしい戀愛などへ潮を戻しはせん。海のやうな復讐が總てを呑み盡すまでは。あの天の大理石にかけて、（跪く）神聖な誓にかけて、おれの詞をここにつがへる。

イヤゴオ。お立ちなさいますな。（自分も跪く）永遠に燃える天の光も、吾々を取り圍む四大原素も

照覧あれ、ここにイヤゴオは、その智慧の限り、腕の限り、心のありたけを、辱しめられたオセロオさまの足下に捧げ献じます。あの方の御命令なら、どんな血生臭い所行をでも、喜んでいたします。

二人、立ち上がる。

オセロオ。有難い。その好意を無にもしたくないし、心から感謝の意をも表してみるしるしに、すぐさまそれに取りかかつて貰はう。三日の内にキャシオめが最早生きてをらぬといふ報告を聞かせい。

イヤゴオ。わたくしの親友はもう死にました。御命令通りにいたします。だが、どうぞ奥様のお命だけは。

オセロオ。呪はれたを女、おのれ淫婦。呪はれてをれ。さあ、行かう、別々に。おれは内へはひつてあの美しい悪魔を手早に殺す工夫をしよう。さあ、けふからお前はおれの副官だぞ。

イヤゴオ。わたくしは永久に閣下の家臣でございます。

両人、退場。

第四場　城の前

デスデモオナ、エミリア並に道化、登場。

デスデモオナ。副官のキャシオはどこにゐるか知つてゐるかい。

道化。それは申し上げられません。

デスデモオナ。なぜだい。

道化。キヤシオ様は軍人です。軍人の居所ははつきり言つたりなどしたら、殺されてしまひます。

デスデモオナ。まあ、厭だ。宿はどこだと言ふのだよ。

道化。それを申し上げるのは、嘘をつくやうなものでございます。

デスデモオナ。それはなんの謎だい。

道化。わたくしはあの方のお宿を存じません。それだのに好い加減な思ひつきで、ここだのあすこだのと申しましたら、嘘をつくことになるではございませんか。

デスデモオナ。そんなら誰かに聞いて、教へておくれ。

道化。そんなら、この問題について、世間と一問答いたしませう。即ち問をかけて、答を貰つて参りませう。

デスデモオナ。分かつたらここへ来るやうに言つておくれ。殿様へは好いやうに執りなして置いたから、多分元通りになるだらうと言つてね。

道化。その位のことなら人間の智慧で出来ませうから、やつて見ませう。

道化、退場。

デスデモオナ。エミリア、あのハンケチをどこでなくしたらう。

エミリア。一向に存じませんが、奥様。

デスデモオナ。お金の澤山はひつてゐる財布をなくした方がまだよかつた。ムウアどのは、實意のあるお方で、嫉妬深い人間のやうな卑しいところは少しもないから好いやうなものの、若しさもなければ、どんなことをお考へになるかも知れないわ。

エミリア。そんなら、殿様は嫉妬深いお方ではないのですか。

デスデモオナ。誰が、あのお方が。そんなもやもやしたものは、あの方のお生れなすつた國の太陽が、みんな吸ひとつてしまつたらしいよ。

エミリア。ああ、向うからいらつしやいましたよ。

デスデモオナ。今度はわたし、キヤシオを呼び返すと仰しやるまでは、お側を離れやしないから。

（オセロオ、登場）

デスデモオナ。よう遊ばしました、殿様。

オセロオ。有難う、健在だ。ああ、つくらふのは辛い――お前はどうだ、デスデモオナ。

デスデモオナ。無事でございます。

オセロオ。手を貸して御覧。大層じめじめしてゐるな。

デスデモオナ。まだ年も寄らず、浮世の苦勞も知らない手でございます。

オセロオ。これは情の豐な、心の廣い證據だ。おう、熱い、熱い。それに、じめじめしてゐる。かういふ手は、氣儘をさせないで、斷食や祈禱や難行苦行をさせなければいかん。かういふ手には、若い、燃えるやうな惡魔が住んでゐて、ぢきと謀叛をするものだ、これは柔かい手だ、情の深い手だ。

デスデモオナ。さう仰しやるのも宜しいでせう。わたしの心を差し上げた手ですから。

オセロオ。心の廣い手だ。昔は心が手をくれた。だが、この頃はやりの紋はみんな手だ。心ではない。

デスデモオナ。なんのことだか、わたくしには分かりません。それよりはあなた、あのお約束のことを。

オセロオ。なんの約束だ。

デスデモオナ。今キヤシオのところへ、あなたにお目にかかつてお願をしろと申して遣りました。

オセロオ。どうも鼻風を引きとつて、不快でならん。ハンケチを貸してくれ。

デスデモオナ。はい、どうぞ。

オセロオ。おれが遣つたハンケチはどうした。

デスデモオナ。唯今は持つてをりません。

オセロオ。持つてゐない。

デスデモオナ。はい、持つてをりません。

オセロオ。それはいかん。あのハンケチは埃及の女がおれの母にくれたものだ。その女は魔法つかひで、人の心でも大抵は讀みをつた。その女が母に言うたには、このハンケチを持つてゐる間は、目の美しさは衰へないで、父の愛情を縛りつけて置くことが出來るが、若しなくしたり、人に遣つたりしたら父の目は母を避けるやうになつて、外に女を求めるやうになる――と、かう言つた。母は死ぬる間際に、あれをおれにくれて、若しおれに妻を持つやうな時が來たら、妻にこれを遣るが好いと言はれた。そこで、おれはお前にあれを遣つたのだ。だから、お前はあれを自分の大事な目のやうに愛撫しなければならん。あれをなくしたり、人に遣つたりすれば、この上もない不幸が來る。

デスデモオナ。まあ、そんなことが。

オセロオ。いや、ほんたうだ、あの織物には魔力があるのだ。太陽が二百度地球を巡る間生きてゐたといふ魔女が神がかりになつて縫つたものだ。あの絹を生んだのは、神聖な蠶だ。あの絹を染めたのは、遺骸物の名人が少女の心臓から絞りとつた木乃伊の汁だ。

デスデモオナ。まあ。それはほんたうですか。

オセロオ。たしかな事實だ。だから大切にするが好い。

デスデモオナ。まあ、それならあんなものは見なければよかつた。

オセロオ。な、なぜだ。

デスデモオナ。なぜ、そんなに、びつくりしたやうなものの言ひやうをなさるのです。

オセロオ。なくしたのか。なくなつたのか。どこにもないのか。

デスデモオナ。まあ、どうしたら好いだらう。

オセロオ。なんだと。

デスデモオナ。なくなつたのではございません　ですが、若しなくなりましたら。

オセロオ。なに。

デスデモオナ。いいえ、なくなりはいたしません。

オセロオ。そんなら取つて来て、おれに見せろ。

デスデモオナ。それはお目にかけますが。今はいけません。あなた、わたくしの願を反らしてしまふつもりで、そんなことを仰しやるのでせう。どうぞ、キヤシオを元の通りにして遣つて下さい。

オセロオ。ハンケチを持つて来い。おれは心配でならん。

デスデモオナ。どうぞお願ひですから　あんな立派な人はまたと得られはいたしません。

オセロオ。ハンケチを持つて来い。

デスデモオナ。どうぞ、キヤシオの話を。

オセロオ。ハンケチを持つて來い。

デスデモオナ。あの人は是までの幸福を、あなたの愛の上に築いて來た人です。あらゆる危険をあなたと一緒に冒して來た人です。

オセロオ。ハンケチを持つて來い。

デスデモオナ。ほんとに、なんといふことでせう。

オセロオ。行つてしまへ。（退場）

エミリア。あれでも、旦那は嫉妬深いお方ではないでせうか。

デスデモオナ。こんなことは始めてだよ。きつとあのハンケチに何か不思議があるに違ひない。そんなものをなくすなんて、とんでもないことをしてしまつた。

エミリア。男の心は一年や二年では分かりません。男といふものはみんな胃袋で、わたし達はみんな食物ですわ。お腹がへればあたし達を食べますが、お腹が張ると、直ぐにはき出してしまふのです――あら、キャシオと内の人が參りました。

キャシオとイヤゴオ、登場。

イヤゴオ。外に道はない。奥樣に頼むより外にしやうはない。見ろ、丁度好い。行つて早く奥樣に頼め。

デスデモオナ。どうおしだい。キヤシオ。變りはないかい。

キヤシオ。奥樣、例のお願でございます。どうぞ、あなた樣のお取持によりまして、再びこの世へ出られますやうに。そして、わたくしの心を傾けて尊敬してをります將軍の御愛顧を取返すことが出來ますやうに。もう一刻も猶豫をしてはをられません。萬一、わたくしの罪が、過去の功勞を以てしても、現在の悔恨を以てしても、未來に對する忠義の誓を以てしても、再び將軍の愛を取戻すことが出來ぬやうな重いものなら、さうだと承る方が、却つてわたくしの身の爲でございます。若しさうなら、諦めの衣を著て、生活の道を外に求め、運命の施しにあづかるでございませう。

デスデモオナ。まあ、お氣の毒な。頼むには頼んで見たのだけれど、どうも今は時が惡いのだよ。殿樣がまるでいつもの殿樣ではないから。若しお氣持通りにお顏が變つたら、とてもあの方とは分かるまいと思はれる程なのだよ。お前の爲にあんまり一所懸命になつたので、つい厚かましいことまで言つてしまつたのだよ。それでお怒を受けたに違ひない。暫く辛抱しておくれ。出來るだけのことはきつとするから、自分の爲には出來ないことでも、きつとして見せるから。それで滿足しておくれ。

イヤゴオ。殿樣が御立腹になつたのですか。

エミリア。たつた今、あつちへいらつしたのですよ。いつもにない御不機嫌で。

イヤゴオ。そんなことはあるまい。わたくしは敵の大砲がお旗下の兵を空中に打ち飛ばして、悪魔のやうに、将軍のすぐ側に立つていらしつた肉身の弟御を吹き倒したのを見たことがありますその将軍が御立腹になるとは――若しさうなら、何か餘程のことがあるに違ひない。お目にかかつて來よう。ほんとに御立腹になつたのなら、何か容易ならぬことがあるに違ひない。

デスデモオナ。どうぞ、さうしておくれ。（イヤゴオ、退場）きつとヴェニスから來た政府の御用か、このサイプラスで露顕をした祕密の悪だくみが殿様の清い心を亂したのだよ。さういふ時は、男といふものは、きつと目下のものをいぢめるものだから。相手はもつと大きなものなのに。きつとさうだ。人間は指一本痛くても、その痛みで丈夫な體中が痛むやうな氣がするものだ。それに男だつて神様ではなし、婚禮をした當座のやうな親切をいつまでも盡して貰へるものではない――エミリア、わたしは済まないことをした。わたしは心の醜い女丈夫なのだ、夫の不實を心で責めてゐたが、實は自分の考へ違ひで、あの方には何の罪もなかつたのだよ。

エミリア。どうぞあなたの仰しやる通りに、お上の御用であつてくれれば好いが。あなたのお身にかかはつた詰まらないお疑ひなどでなければ好いが。

デスデモオナ。ああ。わたしは何一つ疑はれるやうなことはしてゐないのに。

エミリア。でも、疑ひの深い人は、そんなことを聞いても満足はいたしますまい。わけがあるから疑

ふのではなくて、疑ひ深いから疑ふのです。嫉妬といふ化物は、ひとりで孕んで、ひとりで生れて來るものですわ。

デスデモオナ。どうぞ、そんな化物を、オセロオどのの心へ入れたくないものだ。

エミリア。どうぞ、さうしたいものでございます。

デスデモオナ。殿樣を探して來よう。キャシオ、お前はこの邊を歩いておゐで。御機嫌がよかつたら、お前の願ひごとを言ひ出して、是非ともそれの叶ふやうに骨を折つて見よう。

キャシオ。心からお禮を申し上げます、奥樣。

デスデモオナとエミリア、退場。

ビアンカ、登場。

ビアンカ。キャシオさん、今日は。

キャシオ。どうしてこんなところへ。機嫌はどうだい、可愛いビアンカ。實は今お前の家へ行かうと思つてゐたところだ。

ビアンカ。あたし又、あなたのお宿へ行くところでした。どうなすつたの、一週間もお顔をお見せにならないで。一週間と言へば七日七晩のことですよ。百六十八時間のことですよ。おまけに戀しい人の側にゐない時間は、日時計の百倍よりも長いやうな氣がしますわ。數へるのも厭になつてしま

ふ位ですわ。

キャシオ。許してくれ、ビアンカ。實はこの頃、ひどく心配なことがあつたのでだ。だが、その内ゆつくり閑をつくつて長く顔を見せなかつた詫をしよう。（デスデモォナのハンケチを出してビアンカに渡す）ビアンカ。この模様を寫しておいてくれ。

ビアンカ。まあ、キャシオ。どこでこんなものを手に入れたの、新しい好い人からの贈物でせう。ああ、それでちつとも來ないわけが分つた。もうそんなにまでなつてゐるんですの。よござんすわ。よござんすわ。

キャシオ。ばかなことを。悪魔からでも貰つたらしいそんな邪推は、悪魔の面へ叩き返してしまへ。よその女から貰つた愛のしるしだとでも思つてゐるのか。飛んでもないことだ。

ビアンカ。では、誰のです。

キャシオ。これは知らん。おれの部屋に落ちてゐたのだ。模様が氣に入つたから、取りに來られない内に――きつと誰か取りに來るに違ひない――寫して置きたいと思つたのだ。さあ、これを持つて、寫してくれ。兎に角、今は一人にして貰ひたい。

ビアンカ。一人にして置いて。それはどういふわけ。

キャシオ。ここには將軍がおゐでだ。女と一緒にゐるところを見られるのは、不面目でもあれば、又

好もしいことでもない。
ビアンカ。なぜ、どうして。
キヤシオ。お前を嫌ふわけではない。
ビアンカ。ただあたしが嫌ひなだけでせう。お願ひだから少し送つて來てね。そして今夜きつと會へると言つてね。
キヤシオ。それでは少し送つてやらう。おれはここに用があるのだから。いづれ、すぐ會ひに行くよ。
ビアンカ。いいわ――そんなら爲方がないわ。

兩人、退場。

第四幕

第一場　サイプラス。城の前

オセロオとイヤゴオ、登場。

イヤゴオ。どうお考へになります。
オセロオ。どう考へるかとは。
イヤゴオ。内證でキツスをしましたら。

オセロオ。それは不義だ。

イヤゴオ。裸で一時間も一つ寝をいたしましたら。たとひ猥な心は少しもなくても。

オセロオ。裸で一つ寝をして、それで猥な心がないと。それは悪魔をも欺かうとする偽善だ。如何に善い心でも、そんなことをしたら、忽ち悪魔に誘はれて、天の神をいふだらう。

イヤゴオ。でも、何もしないのなら、たいした罪ではないでせう――併し、若しわたくしが女房にハンケチを遣りましたら――。

オセロオ。したら、どうだ。

イヤゴオ。はて、さうすれば、それは女のものです。女のものであつて見れば、それを誰に遣りませうと構つたことはありません。

オセロオ。だが、女房といふものは、操といふものを持つてゐる。それを人に遣つても好いものか。

イヤゴオ。操は目に見えないものです。持つてゐない者の奴が、持つてゐることも度々あります。併し、ハンケチは――

オセロオ。おお、もうそのことは忘れたい　不吉な鴉が疫病のある家の廻りへ舞つて来るやうに、そいつがおれの記憶を離れないのだ　お前はあいつがハンケチを持つてゐたと言つたな。

イヤゴオ。はい。それがどうかいたしましたか。

オセロオ。それはどうも宜しくない。

イヤゴオ。萬一あいつが怪しからんことをしてゐるのを見たと申し上げたところで、又あいつがかう申してをりましたと申し上げたところで、それがなんでせう——さういふ奴は世間に澤山をります。思ふ女を口說き落すか、女の方から手を出されるかして、こつちから手に入れるか、向うに身を任せるかすると、それを吹聽せずにはゐられないのです。

オセロオ。あいつが何か言つたのか。

イヤゴオ。申しました。併し、人に訊かれれば、覺えはないと言ふに違ひありません。

オセロオ。どんなことを言つたのだ。

イヤゴオ。はい、かう申しました——あいつは——その、あいつは。

オセロオ。なんと言つたのだ。なんと。

イヤゴオ。寢たと

オセロオ。テスデモオナとか。

イヤゴオ。はい。そこはどうとも。

オセロオ。あれと寢たのか。あれと。穢らはしい——ハンケチ——白狀——ハンケチ——白狀をしろ、その手柄で首を絞められる　先づ首を絞められて、それから白狀をする——考へても身が震

へる、何かたしかなことがなければ、こんな暗い感情に襲はれる筈はない。おれをこんなに揺ぶるものは、決して詞ではない。ええ、二人の鼻と鼻、耳と耳、唇と唇——そんなことがあり得ようか。白状——ハンケチ——おのれ悪魔。（喪心して倒れる）

イヤゴオ。廻るわ、廻るわ、毒薬が廻るわ。かうして人の好い莫迦が捕まり、立派な貞女が罪もないのに泣きを見るのだ——どうなさいました、閣下——オセロオさま——閣下、閣下。（キャシオ登場）

おう、キャシオか。

キャシオ。どうしたのだ。

イヤゴオ。将軍が癲癇を起されたのだ。これで二度目だ。きのふも一度あつた。

キャシオ。顳顬を揉んで上げるが好い。

イヤゴオ。いや、うつちやつて置く方が好い。この発作に持続させて置かないと、口から泡を吹いて、やがて、とんだ乱暴をしないとも限らない。見ろ、動き出した。君は暫く引込んでゐ給へ。おさまりになつたら、将軍があつちへ行つてから、ちよつと話したい大事な用がある。（キャシオ、退場）閣下、如何でございます。お怪我はなさいませんでしたか。お頭に。

オセロオ。貴様、おれをばかにするのか。

イヤゴオ。わたくしが閣下をばかにする。飛んでもない。わたくしは唯、閣下が男らしく運命に忍従

なさるのを望むばかりです。
オセロオ。男も角が生えては化物だ、獸だ。
イヤゴオ。すると、繁華な町には隨分と、獸やまじめくさつた化物が澤山ゐるわけでございますな。
オセロオ。ほんとにあいつは白狀したのか。
イヤゴオ。まあ、閣下、男らしくなさいまし、軛をかけられた髯男は、大抵御同樣に何か曳いてをりませう。共同の寢床を自分だけのものだと思つて毎晩寢る男が何百萬人あることでございませう。それに比べれば、閣下のなどはまだ好いかたでございます。安全な寢床の中で淫婦の口を吸ひながら、それを貞女だと思つてゐるとは、なんといふ惡魔のいたづらでせう。いや、わたしなら知らずにはゐません。知つたからには腹のいえるやうにいたします。
オセロオ。ほんたうだ。その通りだ。
イヤゴオ。まあ、暫くここを離れて、辛抱をして隱れて入らつしやい。つい先程閣下が御心配の餘りに
　閣下にも似合はぬ御具合の餘りに――氣をお失ひになつた時、丁度あの時キヤシオがこれへ參りました。わたくしは、その場を取りつくろつて、話があるからやがて來いと申しましたら、必ず來ると言つてあちらへ參りました。どうぞ閣下、そこらに隱れてゐて、あいつの顏のあらゆる部分に現れる嘲弄や侮蔑や人の惡を喜ぶ樣子に御注意を願ひます。どこで、どうして、幾度、いつか

ら、いつ會つて、いつまた會ふことになつてゐるか、すつかり話をさせて御覽に入れますから。ようございますか、あいつの手つきに氣をつけてゐらつしやい。だが、御辛抱が肝心ですぞ。でないと、あなたは怒を抑へることの出來ない、男らしくないかただと申し上げなければなりません。

オセロオ。それは大丈夫だ。どんなにしても辛抱はする。だが　好いか　そのあとは飽くまでも殘酷に。

イヤゴオ。それは宜しうございます。ですが、間を外してはなりません　さあ、どうぞ、ここをおどき下さい。

オセロオ、後へ下がる。

さて、キャシオにはビアンカのことを訊いてやらう。あの情を賣つてパンと着物を買つてゐるばいため、あいつキャシオに惚れてゐる。大勢を欺して一人に欺されるのが賣女の病だ。キャシオもあの女のことを聞いたら笑が止まるまい。さあ、やつて來たぞ。

キャシオ、再び登場。

あいつが笑へば、オセロオは氣違ひのやうになるだらう。人情に通ぜぬ嫉妬の目で見れば、可哀さうにキャシオの微笑も、手つきも、輕快な動作も、そんな惡い意味にとれるだらう――どうした、副官どの。

キヤシオ。さう呼ばれるので、なほ苦しい。その名をなくしたので死ぬ思ひだ。

イヤゴオ。デスデモオナ様に縋りついてゐれば、大丈夫だ。（小聲で）若し、これがビアンカの力で出來ることなら、忽ち目的が達せるのだがな。

キヤシオ。ふむ。いや、あいつにも困るて。

オセロオ。見ろ。もう笑ひをる。

イヤゴオ。あれほど男を可愛がる女を、おれは見たことがない。

キヤシオ。しやうのない奴だ。だが、實際おれには惚れてゐるやうだ。

オセロオ。今度は笑に紛らしてゐるな。

イヤゴオ。なあ、キヤシオ君。

オセロオ。そろそろあの話を引き出さうとしてゐるのだな。うまいぞ。さうだ、さうだ。

イヤゴオ。女はもう若き奧様になるつもりでゐるが、君はほんとにさうしようと思つてゐるのか。

キヤシオ。は、は、は。

オセロオ。おのれ得意になつてゐるのか。得意になつて。

キヤシオ。おれがあいつを女房にする―あの賣女をか。頼むから、おれを、さう莫迦者扱ひにしないでくれ。おれをさう安く見てくれるな。は、は、は。

オセロオ。さうだ、さうだ、さうだ。勝つた奴は笑ふのだ。
イヤゴオ。だが、君があれを夫人に迎へるといふ評判は盛なものだぞ。
キヤシオ。嘘を言ふな。
イヤゴオ。それが嘘なら、おれは悪黨だ。
オセロオ。おれを侮辱しをつたな。よし。
キヤシオ。それはあの猿めが自分で言ひ觸らしたことだ。自惚一つで、おれの女房になれるものときめてゐるのだ。おれが約束をしたのではない。
オセロオ。イヤゴオが合圖をしてゐるな、これから話を始めるのだな。
キヤシオ。つい今もここへ來をつた。おれのゐるところへは、どこへでもついて來るのだ。この間も海岸で、威尼斯人と話をしてゐるとな、そこへあの莫迦が遣つて來て、嘘ぢやない、かういふ風におれの首へしなだれかかつて――
オセロオ。「おう可哀いキヤシオ」とでも言つたやうな素振をしてをる。
キヤシオ。ぶら下がつて、キツスをして、泣いたり、引つぱつたりするのだ。は、は、は。
オセロオ。うむ、ああして女があいつをおれの寝部屋へ引張り込んだと言ふのだな。ええ、その鼻を引きむしつて投げてやりたいが、生憎そこらに犬がをらん。

キヤシオ。實際もうあいつとは手を切らなければならん。
イヤゴオ。や。見ろ、遣つて來たぞ。
キヤシオ。あいつは猫だ。うむ、麝香猫だ。（ビアンカ、登場）どうしてお前はさうおれにつき纏ふのだ。
ビアンカ。悪魔にでもつき纏はれるが好いわ。どういふわけで、あなたさつきあんなハンケチをあたしに下すつたの。あたしは好いお莫迦さんね。あんなものを受けとつて。この模様を寫して置けですつて――如何にもあなたのお部屋に落ちてゐさうなものね。誰のものとも分からずに。いづれ好い人の贈物に違ひないわ。それだのに、この模様を寫して置けだなんて。さあ。こんなものは、あなたの好きな浮氣女に遣つておしまひなさい。誰に貰つたにしても、あたし、そんな模様を取るのは御免ですわ。
キヤシオ。どうしたんだ。ビンカア。どうした。どうしたんだ。
オセロオ。いや、あれはおれのハンケチに相違ない。
ビアンカ。今夜食事に來たいならいらつしやい。來たくなければ、又來たくなつた時にいらつしやい。（退場）
イヤゴオ。それ、あとを追つかけろ。あとを。

キャシオ。さうだ。あとを追つかけなければ、何を言ひ觸らして歩くか分からない。
イヤゴオ。君、あいつのところで、食事をするのか。
キャシオ。うむ、そのつもりだ。
イヤゴオ、よし。では、多分そこで會へるだらう。まだ實は君に話したい大事な用があるのだ。
キャシオ。どうか、來てくれ。來るか。
イヤゴオ。早く行け。もうなんにも言ふな。

キャシオ、退場。

オセロオ、前へ出る。

オセロオ。イヤゴオ。どうしてあいつを殺して遣らう。
イヤゴオ。御覽になりましたか。自分の惡事を平氣で笑つてゐる樣子を。
オセロオ。おう、イヤゴオ。
イヤゴオ。ハンケチを御覽になりましたか。
オセロオ。あれはおれのだつたか。
イヤゴオ。たしかに閣下のでした。それにあの奧樣に戴いたものを、あいつは醜業の女郎に遣つたのです。

オセロオ。九年の間も、おれはあいつを嬲り殺しにして遣りたい——あの綺麗な女を、あの美しい女を、あの可愛い女を。
イヤゴオ。だが、それはお忘れにならなければいけません。
オセロオ。さうだ。あいつは今夜の内に腐つて、ぼろぼろになつて地獄へ落ちてしまはなければならん。もう一刻も生かしては置かれん。おれの心は石になつた。打てばこの手に疵がつく。ああ、この世にあれほど可愛い女があらうか。あいつは帝王の側に寝て、帝王を奴隷のやうに使ふことの出來る奴だ。
イヤゴオ。いや、そんなお心では。
オセロオ。呪はれてをれ。おれは唯ありの儘を言ふのだ。針を持たせれば、あの手際だ。音樂は元より上手だ。あれが歌へば熊でさへ柔和になる　高尚な豐富な才、それに工夫——
イヤゴオ。ですから、猶宜しくないのでございます。
オセロオ。さうだ。千倍の又千倍も惡いのだ　それにあの優しい氣だて。
イヤゴオ。さやう。ちとお優し過ぎますて。
オセロオ。如何にもさうだ。それが情ない。イヤゴオ、それが情ない。
イヤゴオ。そんなに御未練があるなら、惡いことをなすつても好いことにお極めになつたら如何です。

閣下さへお構ひなければ、誰もなんとも申しはいたしません。

オセロオ。切れ切れに引き裂いてくれよう。おれの面に泥を塗りつけた女め。

イヤゴオ。全く怪しからんことでございます。

オセロオ。しかも、おれの部下のものと。

イヤゴオ。猶怪しからんことでございます。

オセロオ。イヤゴオ、どこかで毒薬を取つて来い。今夜だ――もう言ひわけなどは聞かん。あの姿や美しさが、おれの怒を鈍らすといかんから――今夜だ、イヤゴオ。

イヤゴオ。毒薬はいけません。寝床の中で首を絞めたがようございます。あのお方が穢した寝床で。

オセロオ。よし、よし。その裁きは気に入つた。至極好い。

イヤゴオ。キャシオはわたくしが手にかけませう。夜中までに、きつと何とか御報告を申し上げます。

オセロオ。極めて好い。（奥で喇叭が鳴る）あの喇叭はなんだ。

イヤゴオ。ヹニスから何か来たのでございませう、きつと。ロドヰコオ様が公爵のお使で見えたのです。御覧なさい。奥様も御一緒です。

ロドヰコオ、デスデモオナ並に從者達、登場。

ロドヰコオ。將軍、御機嫌宜しう。

オセロオ。有難う。

ロドヰコオ。ヱニスの公爵並に元老院から宜しくといふことでございます。（封書を渡す）

オセロオ。謹んで文書を拜受いたします。（開封して讀む）

デスデモオナ。お變りはありませんか、ロドヰコオ樣。

イヤゴオ。よくお出で下さいました。ようこそサイプラスへ。」

ロドヰコオ。有難う。副官キヤシオ君はどうしました。

イヤゴオ。健在でございます。

デスデモオナ。ねえ、ロドヰコオ樣。あの方と夫の間によくない隔てが出來ましたの。でも、あなたが口を利いて下されば、きつと直ると思ひますの。

オセロオ。たしかにさうか。

デスデモオナ。ええ。

オセロオ。（讀む）「右は貴殿に於いて必ず御履行これあるべく――」。

ロドヰコオ。あなたを呼んだのではない。文書を讀んでをられるのだ――將軍とキヤシオの間に何か

隔てが出來たと。

デスデモオナ。あゝ、ほんとに悲しい隔てが出來たのです。どうぞ元のやうにして上げたいと思つてゐますの。キヤシオが可哀さうですから。

オセロオ。畜生。

デスデモオナ。殿樣。

オセロオ。お前、そんなことを言つて好いのか。

デスデモオナ。まあ。怒つていらつしやるのですか。

ロドヰコオ。あの文書が氣に障つたのだらう。あれはキヤシオを代理にして、一旦歸國しろといふ文書の筈だから。

デスデモオナ。まあ、それは嬉しいこと。

オセロオ。ほんたうか。

デスデモオナ。ええ。

オセロオ。お前の氣が違つたのが嬉しいぞ。

デスデモオナ。まあ、どうして

オセロオ。（デスデモオナを打つ）畜生。

デスデモオナ。なぜ、こんなことをなさるのです。

ロドヰコオ。将軍、あなたにこんなことがあらうとは、ヱニスのものは信じますまい。たとひわたしが現に見たのだと申しましても。これはひど過ぎます。なんとか言つておあげなさい。奥様は泣いてをられます。

オセロオ。ええ、畜生、畜生。この地球が女の涙で孕むものなら、その一滴一滴から鰐が生れよう――行つてしまへ。

デスデモオナ。お氣に障るなら、あちらへ參ります。（行きかける）

ロドヰコオ。實に從順な御婦人だ。将軍、どうぞ呼返して上げて下さい。

オセロオ。奥。

デスデモオナ。はい。

オセロオ。（ロドヰコオに）何か御用ですか。

ロドヰコオ。誰が。わたしが。

オセロオ。さやう。あなたが呼返せと仰しやつたのです。いや、この女はよくかへります。かへります。幾度でもかへります。それに泣きます。誠によく泣きます。それに從順です。あなたの仰しやる通り從順です。極めて從順です――さあ、たんと涙を出せ　さて、この件について――いや、

泣顏をつくるのはうまいものだ——歸國しろと御命令ですな——あつちへ行け。すぐ呼びにやる——御命令通り、如何にもヱニスへ歸りませう——ええ、まだ行かぬのか。（デスデモォナ退場）わたくしの地位はキヤシオに讓ります。さて、今夜は御一緒に晩餐がいたしたい。ようこそサイプラスへ參出で下さいました——山羊め。猿め。（退場）

ロドヰコオ。あれが元老院を擧げて完全無缺だと褒め稱へてゐるムウアどのか。あれが如何なる情にも動かされぬといふ人か。あれが如何なる不慮の出來事にも、偶然の災禍にも射拔かれぬといふ堅固な德を持つた人か。

イヤゴオ。ひどくお變りになりました。

ロドヰコオ。頭はどうもないか。氣が觸れたのではないか。

イヤゴオ。御覧の通りです。わたくしの意見は申し上げかねます。唯若し、なるべき筈の體になつてをられないなら、いつそ早くさうおなりになればと思ひます。

ロドヰコオ。なんといふことだ、夫人を打つなどとは。

イヤゴオ。いや、全くあれはよくないことでした。でも、あれで濟めば宜しいと思ひます。

ロドヰコオ。いつもあんな風なのか。文書に腹を立てて、けふ始めてあんなことをしたのか。

イヤゴオ。それは困ります。見たことと知つたことを、みんな申し上げたら、不忠になります。氣をつ

けていらつしやれば、わたくしが申しませんでも、將軍御自身の擧動に現はれませう。まあ、どうぞ、ついにお出でになつて、これからの樣子を御覽なさいまし。

ロドヰコオ。今まで欺されてゐたのが殘念だ。

一同、退場。

第二場　城内の一室

オセロオとエミリア、登場。

オセロオ。では、お前はなんにも見なかつたのだな。

エミリア。聞いたことも、お疑ひ申したこともございません。

オセロオ。だが、キヤシオと奥とが一緒にゐたのを見たことはあつたのだな。

エミリア。はい。でも、その時は何事もございませんでしたし、それにお二人の間のお話は一言も洩れなく伺つてをりました。

オセロオ。内證話などはしなかつたか。

エミリア。いいえ、決して。

オセロオ。お前を外へ出しはしなかつたか。

エミリア。決して、そんなことは。

オセロオ。扇を持つて来いとか、手袋を持つて来いとか、マスクを持つて来いとか、何とかそんなことを言ひつけはしなかつたか。

エミリア。いいえ、決して。

オセロオ。それは不思議だ。

エミリア。殿様、奥様が御潔白だといふことは、魂を賭けても、このわたくしがお請合申します。若し、さうでない、と思ひなら、そのお考はお捨て遊ばしませ。それはお胸の穢れでございます。若し、誰か悪い奴があつて、そんなことを殿様のお頭の中に入れたのなら、そいつは蛇に咬まれて罰せられるのでございませう。若し、奥様が正直でもなく、潔白でもなく、貞節でもないのなら、世の中にしあはせな男は一人もありますまい。女の中で一番清いお方が、一番穢れてゐるのですから。

オセロオ。奥をここへ連れて来てくれ。さあ。

　　エミリア、退場。

あれも口がうまいことを言ひをるわ。併し、下賤の取持をする程の女なら、あの位のことは誰でも言ふだらう。あいつは油断のならない淫らな女で、恐ろしい秘密のしまつてある戸棚の鍵だ。しかも、

それでゐながら、神の前に跪いて、祈禱をすることもあるのだ。現におれはそれをこの目で見た。

デスデモオナ、エミリア登場。

デスデモオナ。殿様、なんの御用でございますの。

オセロオ。どうぞ、ここへ來てくれ。

デスデモオナ。なんでございます。

オセロオ。お前の目を見せてくれ。おれの顔を見ろ。

デスデモオナ。まあ、なんといふ恐いことをなさるのです。

オセロオ。(エミリアに) お前はいつものやうに見張をしてゐてくれ。戀人同士を二人ここへ殘しておいて、戸を締めてくれ。誰か來たら咳拂をするか、えへんと言ふのだ。好いか。いつもの爲事だ。いつもの爲事だ、さあ、早く行け。

エミリア、退場。

デスデモオナ。この通り膝をついて伺ひます。どういふわけでそんなことを仰しやるのです。お詞で怒つていらつしやることは分かりますが、お詞の意味は分かりません。

オセロオ。さあ、貴様は何者だ。

デスデモオナ　あなたの妻でございます。あなたの操正しい妻でございます。

オセロオ。よし、そんならそれを誓つて、地獄へ落ちろ。さもないと、天使のやうな顔をしてゐるから、悪魔も恐れて手を出さぬかも知れん。だから、二重に地獄へ落ちる宣告を受けるが好い。貞實だといふ誓を立てて。

デスデモオナ。それは天が好く知つてゐます。

オセロオ。天はお前が地獄のやうに不實だといふことをよく知つてゐる。

デスデモオナ。誰に不實だと仰しやるのです、旦那様。誰と。どうしてわたしが不實なのです。

オセロオ。ああ、デスデモオナ。あつちへ行け。あつちへ、あつちへ。

デスデモオナ。まあ、なんといふ悲い日だらう　まあ、なんだつて、あなた、お泣きなさるのでございます。わたくしがその涙のもとなのでございますか。若し、今度のお召還しを父のしたことだとお疑ひなら、それをわたくしのお責めにならないで下さいまし。あなたがお父を敵となさるなら、わたくしも父を敵とします。

オセロオ。若し天が艱難を以てこのおれを試みようとしたのなら、若し天がありとあらゆる苦痛や恥辱をおれの裸の頭の上に注ぎかけ、貧苦の淵に首までこの身を沈ませ、このおれの身をも、おれの一番大事な望をも、囚に繋いでしまつたのなら、まだおれの魂のどこかに一滴でもの忍耐は残つてゐるに違ひない。だが、なんといふ情ないことだ。いつまでも、いつまでも、指をさされる嘲りの

的となることは。だが、まあ、それも堪へることにしよう。出來るだけ立派に。併し、我が愛情を貯としてしまつて置く場所、生きるも死ぬるもそこ一つにあるといふ場所、おれの命の流れが湧いて出るのも、枯れてしまふのも、それ一箇所といふ泉、そこから追ひ出されるとは。或はそれをあの穢い蝦蟇がつるんで子を生む水溜にしてしまふとは。おう。忍耐よ、汝薔薇色の唇をした若い天の使よ。もうかうなつてはお前の皮膚の色を變へなければならんぞ。さうだ、惡魔のやうなむごたらしい顔になるのだ。

デスデモオナ。あなたはよもやわたくしの貞實を疑つていらつしやるのではありますまい。

オセロオ。さうとも、肉屋の店にたかつて、玉子をひるかと思ふと、もう又次ぎを孕んでゐる夏蠅のやうに貞實だ。おう、お前は毒草だ。可愛くて、美しくて、餘りに香が高くて、目鼻が痛くなるやうだ。いつそお前のやうなものは、この世に生れて來なかつたらよかつたらうに。

デスデモオナ。まあ、わたしは少しも覺えがありませんが、どんな罪を犯したのでせう。

オセロオ。ああ、この白い紙は、この立派な書物は、その表に「淫婦」といふ字をかくために作られたのか、どんな罪を犯したと。おう、犯したとも。おう、おのれ賣女め。貴樣の行を口にしただけでも、おれの頰が燃え上がつて、廉恥心を灰にしてしまふだらう。どんな罪を犯したと。天も鼻を蔽ひ、月も目をふさぎ、何にでも接吻をする多情な風でさへ洞穴へ逃げ隱れて、それを聞くまいと

する程の罪を。どんな罪を犯したと。鐵面皮な賣笑婦め。

デスデモオナ。まあ、なんといふひどいことを仰しやるのです。

オセロオ　では、きつと賣笑婦ではないか。

デスデモオナ　決してそんなものではございません。夫に捧げたこの體を穢らはしい仇し男に指一本でも觸らせぬやうに護るのが賣女でないのなら、わたしは決して賣女ではございません。

オセロオ。なに、賣女ではないと。

デスデモオナ。はい。神樣にきつとわたくしを救つて下さいます。

オセロオ。そんな筈はない。

デスデモオナ、おう、神樣、どうぞお赦し下さいまし。

オセロオ。では、あれがお前に赦しを乞はう。おれはお前をオセロオと結婚したあの狡猾な賣女と取り違へてゐた。（聲に向つて）おい、おい、ビイタア聖人とは反對な役目をする地獄の門番さん。

エミリア、再び登場。

さうだ、さうだ、お前さんだ。おれ達の用はもう濟んだ。さあ、これが骨折賃だ。では、どうか鍵を掛けて、口を拭いてゐてくれ。

オセロオ、退場。

エミリア。まあ、あのお方は何を考へていらつしやるのでせう――まあ、どうなさいました、奥様。
デスデモオナ。まるで夢のやうだ。
エミリア。奥様、殿様はどうなすつたのでございます。
デスデモオナ。誰が。
エミリア。あの、殿様でございます。
デスデモオナ。殿様とは。
エミリア。あなた様の殿様でございます。
デスデモオナ。わたしにはもうそんなものはない。もうなんにも言つておくれでない、エミリア。わたしは泣くことも出来ないけれど、何一つの返事をすることも出来ないのだよ。ただ涙が出るばかりだもの。どうぞ、今夜はわたしの寝床へ婚礼の時のあの上敷を敷いておくれ。忘れないでね。それからお前の夫をここへ呼んでおくれ。
エミリア。これはまあ、とんでもないことになつてしまつた。（退場）
デスデモオナ。わたしがこんな目に会ふのはあたりまへだわ。ほんとにあたりまへだと思ふわ。でも、わたしのしやうのどこが悪かつたのだらう。よし、わたしに少しばかり悪いことがあつたにしても、そんなことで少しでも御立腹なさるといふのは。

エミリア、イヤゴオを連れて、再び登場。

イヤゴオ。なんぞ御用でございますか、奥様。どうなすつたのでございます。

デスデモオナ。わたしには分からない。小さい子供を躾けるには、やさしいことから静に始めなければならないものだ。あの方もさういふ風にして、叱つて下されば好いのに、わたしは叱られるには、まだあんまり子供なんだもの。

イヤゴオ。一體どう遊ばしたのでございます、奥様。

エミリア。ひどいぢやないか、イヤゴオ。殿様は奥様を賣女扱ひになすつて、まともな人間にはとても聞いてゐられないやうな悪口雑言をお浴せになつたんだよ。

デスデモオナ。わたしがそんなものだらうか、イヤゴオ。

イヤゴオ。そんなものとは、奥様。

デスデモオナ。エミリアが今言つたやうに、殿様が仰しやつたやうな。

エミリア。殿様が奥様のことを賣女だと仰しやるのだよ。酒に酔つた乞食が、夜鷹を相手にしたつて、あんな詞は遣やしないわ。

イヤゴオ。どうして又將軍がそんなことを仰しやつたのでせう。

デスデモオナ。それはわたし知らないけれど、わたしは決してそんなものぢやありやしない。

イヤゴォ。まあ、お泣きなさいますな、お泣きなさいますな。一體まあどうしたといふことだ。

エミリア。あんなに澤山の立派な御縁談をも、お父樣をも、お國をも、お友達をもお棄てになつたのは、貴女と言はれるためだつたのでせうか。これが泣かずにゐられようか。

デスデモオナ。わたしの運が惡かつたのだよ。

イヤゴオ。なんといふ怪しからんこつた。どうしてそんな氣持におなりなすつたのだらう。

デスデモォナ。それが分かるのは神樣ばかりだわ。

エミリア。これはてつきり或腹からの惡者が、おべつかな、おせつかいな惡黨が、おしやべりな嘘つきが、何か自分の爲にしようと思つて、作りごとをしたに違ひない。若しさうでなかつたら、わたしは首を絞められても構はない。

イヤゴオ。ばかな、そんな人間があるものか。ある筈がない。

デスデモオナ。若しそんなものがあつたら、わたしは天に向つてお赦しを願つてやらう。

エミリア。そんな奴は首絞繩で赦された方がようございます。地獄に骨までかじられてしまふ方がようございます。なんだつて、あの方は奧樣のことを貴女だなどと仰しやつたんでせう。誰が奧樣を訪ねて來たといふのです。どこへ。いつ。どんな風に。どんな證據があるのです――きつとムウア樣は、誰か惡い奴にお騙されになつたのだ。横暴な惡者に、卑しい惡黨に。おう、神樣、どうぞさ

ういふ奴の面皮を剝いで、正直な人間の手に一人一人鞭を持たせ、裸にした悪者達を打つて打つて打ちのめして、東の果から西の果まで世界を追ひこくらせて下さいまし。

イヤゴオ。そんな大きな聲をするな。

エミリア。ええ、畜生め　お前の分別を裏返しにして、わたしがムウア様と怪しいなどと思はせたお方様も、きつとそんな奴に違ひない。

イヤゴオ。よせ。ばかなことを。

デスデモオナ。ねえ、イヤゴオ、どうしたら殿様の御機嫌を直すことが出來るだらう。お願ひだから殿様のところへ行つて伺つておくれ。わたしはどうして殿様の御機嫌を損じたのだか、まるで分からないのだよ　わたしはかうやつて跪いて神様に誓ふよ。若しわたしの心が夫の愛に背いて、若でなり、行でなり、間違つたことをしたのなら、又わたしの目なり、耳なり、との感覺なりが、夫でない人の姿を樂しんだのなら、また現在夫を心から愛してゐず、今までにも一度も愛したことがなく、又これからも　――たとひあの方が乞食のやうにわたしを棄てておしまひなすつても　愛さないさうなら、どんな苦難に陷つても構ひません。どんな危險な目に會つても構ひません。あの方の薄情はわたしの命を奪ふかも知れない。でも、決してわたしの愛を穢すことは出來ない。わたしはとても「賣女」とは言へない。その詞を口にしただけでもぞつとする。そんな罪を受ける

やうなことが、世界中の榮耀を一つにして持つて來られたつて、このわたしに出來るものか。

イヤゴオ。どうぞ、お氣をお鎭め下さいまし。ほんの一時の氣紛れです。お上の御命令がお氣に召さないで、それであなたにお當りなすつたのです。

デスデモオナ。ほんとに唯それだけのことであつてくれれば――

イヤゴオ。きつとさうです。わたしがお請合申します。

奥で喇叭が鳴る。

や、あれは晩餐の知らせだ。エニスのお使者達がお待兼でございませう。さあ、お出でなさいまし。もう、お泣きなさいますな。決して御心配には及びません。

デスデモオナとエミリア、退場。

ロデリゴオ、登場。

どうした、ロデリゴオ。

ロデリゴオ。君の爲方はあんまりひどいと思ふ。

イヤゴオ。何かひどいことをしたか。

ロデリゴオ。君は每日每日なんとか言拔をして、僕をごまかして來たが、どうも今になつて考へて見ると、君は僕に少しでも望の叶ふやうな機會を與へようとするよりは、寧ろあらゆる便宜を奪はる

としてゐるやうだ。もう僕は我慢が出來ない。これまでばかな目に會つて來たことも、唯では濟まさないつもりだ。

イヤゴオ。まあ、僕の言ふことを聞き給へ、ロデリゴオ。

ロデリゴオ。いや、もうそれは聞き過ぎた。君の詞と行とはまるで一致しないのだから。

イヤゴオ。それは君ひどいよ。

ロデリゴオ。ちつともひどいことはない、その通りだ。僕は僕の全財産を費つてしまつた。デスデモオナに遣るのだからと言つて、君が僕のところから持つてつた寶石の半分もあれば、尼さんでも墮すことが出來たらう。君はあの女がそれを受け取つて、すぐにも喜んで會ふやうな返事をしたやうに言つたが、いまだにそれはその儘だ。

イヤゴオ。まあ、よせ、好いぢやないか。

ロデリゴオ。好いぢやないかと。よせだと。おれにはよせない。ちつとも好いことはない。いや、これは怪しからん。さてはいよいよ騙されたのだな。

イヤゴオ。まあ、好いぢやないか。

ロデリゴオ。いや、決して好いことはない。僕はデスデモオナに會つて、自分で何もかもしやべつてしまふぞ。若し、あの女が寶石を返してくれたら、もうこれまでの申込は取消して、道ならぬ戀は

葉てもしよう。が若し、あれが返らなかつたら、その償は君がしなければならんが。
イヤゴオ。もうそれで文句はおしまひか。
ロデリゴオ。さうだとも。言つた以上は必ずさうするぞ。
イヤゴオ。いや、それでこそ男だ。この瞬間から、僕は君を、今までよりずつと尊敬するやうになつた。さあ、手をくれ給へ、ロデリゴオ。君の詰問は如何にも尤だ。が併し、僕は飽くまでも言ふが、實際はこのことに就いては、随分忠實に働いて來たのだ。
ロデリゴオ。だが、さうは見えなかつた。
イヤゴオ。なるほど、さう見えなかつたかも知れない。又君の疑念にも一理ないではない。だが、ねえ、ロデリゴオ、若し、君にこれがあるなら——前とは違つて今はきつとあるに違ひないが、それは決心と勇氣と膽力だ——それを今夜見せてくれ給へ。それでも若しあしたの晩、デスデモオナが君の手にはひらなかつたら、人を僞つた罪で僕にこの世の引導を渡してくれ給へ。どんなひどいことをして僕の命を取つてくれても構はない。
ロデリゴオ。だが、それはどんなことだ。理窟に合つたことか。やつて出來ることか。
イヤゴオ。實はヱニスから特使が來て、キヤシオがオセロオの地位に代ることになつたのだ。
ロデリゴオ。それはほんたうか。うむ、するとオセロオとデスデモオナはヱニスへ歸ることになるの

だた。

イヤゴオ。いや、さうではない。あいつはモオリタニアへ行くんだ。さうして、あの美しいデスデモオナをも一緒に連れて行くのだ。何か事件が起つて、出發が延期とならん以上は。ところで、その延期には、キャシオめを片づけるのが一番だ。

ロデリゴオ。それはどういふ意味だ――キャシオを片つけるといふのは。

イヤゴオ。はて、オセロオの地位に就け得やうにするのだ――あいつの脳天を叩き潰して。

ロデリゴオ。そして、それを君は、僕にさせようと言ふのか。

イヤゴオ。さうだとも。若し君に自分の利益になることを、又自分のする權利のあることをする勇氣があるならね。あいつは今夜賣笑婦の家で夜食をする。僕もそこへ行く筈だ。あいつはまだ自分の昇進したことを知らずにゐる。若し君があいつのそこから出て來るのを待伏してゐれば――僕はそれが丁度十二時と一時になるやうにしてやる――さうすれば、あいつは君の思ふ儘になるのだ。僕も君の近くにゐて助太刀をしてやらう。さうすれば、やつ挾撃(はさみうち)だ。さあ、そんなに呆れて立つてゐないで、僕と一緒に來給へ。どうしても奴を殺す必要があるわけを話して上げよう。君がどうしてもあいつを亡いものにしなければならないと思ふやうになるまで。さあ、もう夜食の時間が迫つて來た。夜が更ける。さあ、さあ。

ロデリゴオ。では、もつとその理由を話してくれ。

イヤゴオ。話せば、きつと合點が行くに違ひない。

兩人退場。

第三場　城内の他の一室

オセロオ、ロドヰコオ、デスデモオナ、エミリア並に從者達、登場。

ロドヰコオ。どうぞ、もうお構ひなく。

オセロオ。いや、失禮ですが、歩くのは體に宜しいので。

ロドヰコオ。奥さん、おやすみなさい。いろいろ有難うございました。

デスデモオナ。ほんとに、よくお出で下さいました。

オセロオ。さあ、參りませう　　おう　デスデモオナ――

デスデモオナ。はい。

オセロオ。すぐに寢るが好い。ぢきに戻つて來るから。側のものはさがらせるが好い。宜しいか。

デスデモオナ。宜しうございます。

オセロオ、ロドヰコオ並に從者達、退場。

エミリア。どう遊ばしました。先程よりは穏かな御様子でしたが。

デスデモオナ。すぐ歸つて來ると仰しやつてよ。お前をさがらせて、わたしに床へはひつてゐろといふ御命令よ。

エミリア。わたしをさがらせて。

デスデモオナ。さういふお言ひつけなんだよ。だから、わたしの寝卷を持つて來て置いて、お前はおやすみ。御機嫌を損じるといけないからね。

エミリア。ほんとに、いつそ初めから、あんな方にお會ひにならなければようございましたのにね。

デスデモオナ。わたし、さうは思はないわ。わたしは殿樣を愛してゐるせゐか、あの方の強情なのも、お叱りになるのも、恐い顏をなさるのも――どうぞ、ピンをはづしておくれ――みんな美しく見えるのだよ。

エミリア。あの、仰しやつた上敷(うはしき)は、お床(とこ)へ延べて置きました。

デスデモオナ。どうでも好いわ。ほんとに人間の心といふものは、どうしてこんなに莫迦なんだらう。若しわたしがお前より先に死んだら、この上敷の一つで包んでおくれ。

エミリア。まあ、まあ、そんなことを。

デスデモオナ。わたしのお母樣の腰元にバアバラといふ娘があつたんだよ。その娘が戀をすると、男

が氣違ひのやうになつて姉を棄てたんだよ。その娘がふだん歌つてゐた柳の歌といふのがこれだよ。隨分古い歌だけれど、その娘の身の上がよく出てゐると思ふよ。娘はその歌を歌ひながら死んだのだよ。今夜はどうしたんだか、頻とその歌が思ひ出されて爲方がない。なんだか、あの可哀さうなバアバラがしたやうに頭を片つ方へ垂れて、あの歌が歌つて見たくてならないのだよ。さあ、早くしておくれ。

エミリア。お寢卷を持つて參りませうか。

デスデモオナ。いいえ、このピンをはづしておくれ――あのロドヰコオ樣といふお方はお立派な方だねえ。

エミリア。ほんとにお美しい方でございます。

デスデモオナ。それにお話もお上手だね。

エミリア。ヱニスの或御婦人が、あの方の下脣に觸れるなら、パレスタインまで跣足參りをしても厭はないと言つていらつしやいました。

デスデモオナ。（歌ふ）

　木蔭に歎く哀れのをとめ

歌へよ、柳、綠の柳

頭を膝に手を胸に
歌へよ、柳、柳、柳

里の流れも共に咽びて
歌へよ、柳、柳、柳
涙に石の溶けもせぬ

これをそつちへやつておくれ——（歌ふ）
歌へよ、柳、柳、柳

早くしてお呉れ。もうお歸りになるだらうから——（歌ふ）
わが冠は緑の輪
咎めな人を、罪はこの身に

いや、これはもつと先だつた——おや、誰か戸を叩いてゐるね——

エミリア。風でございます。

デズデモオナ。（歌ふ）
つれなき君よと怨ずれば

歌へよ、柳、柳、柳
なれも男と寝よと言ふ

さあ、もうお出で、行つておやすみ　目が痒い。たくさん泣くといふ知らせだらうか。

エミリア。何もさういふわけではございますまい。

デスデモオナ。わたしはこんな話を聞いたことがある　男といふものは、男といふものは。お前——ほんとにさう思ふかい。ねえ、エミリア　世の中に、そんな道ならぬことをして、夫を辱しめる女があるだらうか。

エミリア。それはございませうとも、きつと。

デスデモオナ。全世界を貰つても、お前そんなことが出來るかい。

エミリア。では、奥樣はお出來になりませんか。

デスデモオナ。どうしてそんなことが出來るもんか、神樣の光にかけても。

エミリア。わたしだつて神樣の光の前ではそんなことは出來ません。でも、暗いところでなら、しないとも限りません。

デスデモオナ。全世界を貰つても、そんなことをするのは厭ぢやないか。

エミリア。世界といへば、大きなものでございます。少しばかり悪いことをしても、そんな大きなも

のが貰へるなら。

デスデモオナ。まさか、お前はそんなことをしやしまい。

エミリア、いいえ、いたしますとも。してしまつたら、すぐとやめます。それはわたしだつて、指輪の一つや、麻巾の一尺二尺や、上着や袴や帽子なんぞのやうなつまらないもので、そんなことはいたしません。でも、全世界を貰ふなら――自分の夫を王樣にすることが出來るなら、誰だつて間男ぐらゐなことはいたしますわ。それで地獄へ墮ちたつて、わたし、構やしませんわ。

デスデモオナ。わたしは全世界を貰つても、そんなことをするのは厭だわ。

エミリア。でも、悪事といふものは、唯この世界での悪事なんですわ。ですから、そのお禮に世界が貰へるなら、悪事だと言つても、それは自分の持つてゐる世界での悪事なので、すぐ自分でそれを好いことにすることが出來ますわ。

デスデモオナ。いいえ、わたしはそんな女がこの世にあらうとは思はない。

エミリア。いいえ、ございますとも、ございますとも、その賭けにした世界が一ぱいになる程でございます。でも、妻が悪いことをするのは、つまるところ夫の罪だと思ひますわ。たとへば、夫たるものが、その義務を怠つて、妻の寶をよそ外の前垂へ流し込む。又は根もない嫉妬にわめき立てて、わたし共を押へつけ、打ち打擲をしたり、面當に小遣を減らしたりしたら、なんぼ女だつて魂

はございます。いくら女がしとやかだといつて、爲返しをする意地ぐらゐは持つてゐます。女房だつて亭主と同じ感覺を持つてゐるといふことを、亭主も少しは知るが好いのです。女房だつて物を見もすれば嗅ぎもします。甘い苦いを嘗め分ける舌も、亭主とおんなじのを持つてゐます。なんだつて男といふものは、わたし達を他の女に見かへるのでせう。遊びでせうか、さうかも知れません。愛情が元でせうか、さうかも知れません。弱いからそんな間違ひをするのでせうか。それもさうかも知れません。でも、わたし達にだつて愛情はあります。遊びもして見たいと思ひます。弱いところもあります。それは男もおんなじぢやありませんか。そんなら男は、わたし達を大事にするが好いと思ひます。でなければ、女が惡いことをするのは、男の惡事を見習ふのだといふことを教へてやるが好いと思ひます。

デスデモオナ。おやすみ、おやすみ。神樣、どうぞ惡いものから惡いものを摘みとらないで、惡いものを見たら、それで自分を直すやうな習慣をおつけ下さいまし。

兩人、退場。

第五幕

第一場　サイプラス

イヤゴオとロデリゴオ、登場。

イヤゴオ。この柱の後に立つてゐ給へ。すぐにやつて來るから。君の細身の劍を拔いてゐて、來たら、一突に突くんだ。早く、早く。びくびくすることはない。おれがすぐ側についてゐてやるから。起きるも寢るもこれ一つだ。そこを考へて、しつかり度胸据ゑてやるんだ。

ロデリゴオ。すぐ側にゐてくれよ――やり損ふといけないから。

イヤゴオ。すぐ側にゐてやる。恐れずに構へてゐ給へ。

（イヤゴオ、後へ下がる。）

ロデリゴオ。おれはこんなことをするのは餘り好まない。だが、あいつの言ふことも尤だ。たかが人間一人殺す分のことだ。この劍が一つ觸れば、きやつの命は死んでしまふのだ。

イヤゴオ。あの青二才の腫物野郎を、思ふさまこすつてやつたら、やつと赤くなりをつた。さあ、もうかうなれば、あいつがキヤシオを殺さうと、キヤシオがあいつを殺さうと、兩方が殺し合はう

と、どの道おれの徳になるのだ。ロデリゴオめが生きてゐれば、デスデモオナにやると言つて、あいつから騙りとつた金銀寶石の夥しい賠償に迫られる――そんなことをされてはたまらない――若し、キヤシオめが生き殘れば、あいつの生活が美しいので、おれのすることが一々醜く見える。その上、ムウアめが、おれの言つたことを、あいつに打明けないとも限らない。こいつはあぶない、あいつも生かしては置かれん――だが、待てよ、あの足音はたしかにあいつだ。

キヤシオ、登場。

ロデリゴオ。あの歩きつきは、たしかにあいつだ――やい、くたばつてしまへ。（キヤシオを突く）

キヤシオ。その一突で危なく命を落すところだつた。だが、おれの著物は、貴樣が思つたよりは厚いぞ。貴樣のはどうだ。（劍を拔いて、ロデリゴオを突く）

ロデリゴオ。おう、やられた。

イヤゴオ。後からキヤシオの脛を刺して、すぐ逃げて行く。

キヤシオ。一生片輪になつてしまつた、助けてくれ。人殺し。人殺し。（倒れる）

オセロオ、登場。

オセロオ。キヤシオの聲だな。イヤゴオが約束通りやつたた。

ロデリゴオ。ああ、おれは惡いことをした。

オセロオ。果してさうだ。

キヤシオ。助けてくれ。明かりを。醫者を。

オセロオ。あいつだ——勇敢な、忠義なイヤゴオ。お前はこれ程までに、お前の友達の恥を思つてくれたのか。お前はおれの手本になつたぞ——おのれ賣女め、貴樣の好い人はもう死んだ。貴樣の終りも近づいたぞ。待つてをれ、淫婦め。貴樣の美しさも貴樣の目つきも、もうおれの心から消えてしまつたぞ。罪に穢した寢床を、罪の血で赤く染めてやるぞ。

オセロオ、退場。

ロドヰコオとグラシアノオ、登場。

キヤシオ。おーい。夜警はをらぬか。通りがかりの人はないか。人殺し、人殺し。

グラシアノオ。何事かあると見える。恐ろしい聲を立ててゐます。

キヤシオ。助けてくれ。

ロドヰコオ。お聞きなさい。

ロデリゴオ。われながら淺ましい。

ロドヰコオ。呻つてゐるのは、一人ではありません、厭な晩だ。これは罠かも知れませんぞ。二人つきりで、聲のする方へ近寄るのは危險です。

ロデリゴオ。誰も來てくれないのか。では、もう、おれは出血で死ぬより外はない。

ロドヰコオ。しつ、あれは。

イヤゴオ、松明を持つて、再び登場。

グラシアノオ。誰だか上著もつけぬ男がやつて參ります。松明と武器を持つて。

イヤゴオ。誰だ。人殺し、人殺し、とどなるのは。

ロドヰコオ。おれ達は知らん。

イヤゴオ。あなた方は、今の叫び聲をお聞きになりはしませんでしたか。

キヤシオ。ここだ、ここだ。賴むから、助けてくれ。

イヤゴオ。どうしたのだ。

グラシアノオ。あれはオセロオの旗手だと思ひます。

ロドヰコオ。如何にもさうです。あの勇敢な男です。

イヤゴオ。そんなに悲しさうな聲を立てるのは誰だ。

キヤシオ。イヤゴオか。やられた。惡者にやられた。助けてくれ。

イヤゴオ。や、副官どのか。どんな惡者がこんなことをしたのだ。

キヤシオ。一人はまだその邊にゐる筈だ。逃げられない筈だ。

イヤゴオ。怪しからん奴だ。（ロドヰコオとグラシアノオに）そこにゐるのはどなたです。ここへ來て手傳つて下さい。

ロデリゴオ。おれも助けてくれ。

キヤシオ。あいつが下手人の一人だ。

イヤゴオ。人殺しめ。惡黨め。（ロデリゴオを刺す）

ロデリゴオ。地獄へ落ちろ、イヤゴオ。犬畜生。

イヤゴオ。人を暗討にするとは——その泥棒達はどこへ行つた。どうしてこの町はこんなに靜なのだらう。人殺しだ。人殺しだ。（ロドヰコオに）あなた方はどなたです。善ですか、惡ですか。

ロドヰコオ。善か惡か、吾々の態度を見て判斷なさい。

イヤゴオ。これは、ロドヰコオ様でしたか。

ロドヰコオ。さうです。

イヤゴオ。とんだ失禮を申しました。キヤシオが惡者に傷つけられたのです。

グラシアノオ。キヤシオが。

イヤゴオ。どうした、きやうだい。

キヤシオ。片脚を眞二つにやられた。

イヤゴオ。やれやれ、とんだことだ。お二方、どうぞ明かりを。わたしの下著を裂いて、縛つてやりませう。

ビアンカ、登場。

ビアンカ。どうしたのです。今どなつたのはどなたです。

イヤゴオ。今どなつたのはどなたです。

ビアンカ。まあ、キヤシオさん。あたしの大事なキヤシオさん。おうキヤシオ、キヤシオ、キヤシオ。

イヤゴオ。これが評判の賣女だな　　キヤシオ君、誰が君にこんな傷を負はせたのだ。心當りがあるか。

キヤシオ。ない。

グラシアノオ。とんだところで合ひました。わたしはあなたを尋ねてゐたのです。

イヤゴオ。ガアタアを貸して下さい。それから轎が一つ欲しいものだ。そつと擔いで行けるやうに。

ビアンカ。まあ、倒れるわ。キヤシオ、キヤシオ、キヤシオ。

イヤゴオ。皆さん、わたしはあの女がこの悪事の同類ではないかと思ひます　　キヤシオ君、少し堪へてゐ給へ　　さあ、明かりを貸して下さい。この顔は知つた顔だらうか。おう、おれの友人、お

れの親しい同國人のロデリゴオだ。いや、さうぢやない――やつぱり、さうだ――これは大變だ。
ロデリゴオだ。

グラシアノオ。なに、それではあの、ヱニスの。

イヤゴオ。如何にもさやうで。あなたは御存じでございますか。

グラシアノオ。存じてゐる段ではない。

イヤゴオ。これは、グラシアノオ樣でございましたか。とんでもない失禮をいたしました。何分にも
この騒ぎで、ついお見それ申しました。失禮をお許し下さいまし。

グラシアノオ。お目にかかれて喜ばしい。

イヤゴオ。どうした、キヤシオ君、おい、轎だ、轎だ。

グラシアノオ。ロデリゴオだつたか。

イヤゴオ。あの人で、全くあの人で。（轎が運ばれる）よし、よし。轎が來たか。頼むから、靜に擔いで行つてくれ。おれは將軍の主治醫を呼んで來よう。（ビアンカに）もう世話を燒かないでくれ――キヤシオ君、ここに殺されてゐる男は僕の親友だが、一體、君とどういふ喧嘩をしたのだ。

キヤシオ。喧嘩などはしやしない。おれはこんな男に會つたこともない。

イヤゴオ。（ビアンカに）なんだ、その蒼い顏は――さあ、早くキヤシオ君を擔いで行つた。

キヤシオとロデリゴオ、運び去らる。

皆さん、少しお待ち下さい。(ビアンカに)眞つ蒼な顔をしてゐるな。(グラシアノオなどに)あの女の凄い目つきを御覽なさいましたか。(ビアンカに)だめだ、いくらそんな目をして睨んでも。すぐに事實を言はして見せるぞ。(グラシアノオなどに)まあ、あの女をよく御覽なさいまし。どうぞよく氣をつけて御覽なさいまし。如何でございます、お二方。惡事といふものは、舌を用ひなくても、自分でものを申しますて。

エミリア、登場。

エミリア。まあ、どうしたのでございますの。どうしたんですの、あなた。

イヤゴオ。キヤシオがここで、ロデリゴオとそれから逃げて行つてしまつた奴等に暗討をされたのだ。もう少しで殺されるところだつた。ロデリゴオは死んでしまつた。

エミリア。まあ、あの方が。まあ、キヤシオ樣が。

イヤゴオ。道樂をした罰だ。エミリア、お願ひだから、今夜どこで食事をしたか、キヤシオに聞いてくれ。(ビアンカに)なぜ、さう聞いて震へるのだ。

ビアンカ。あの方はあたしのところで食事をなさいました。でも、あたしそれで震へるんぢやありません。

イヤゴオ。お前のところで食べたか。では、お前も係り合ひだ。おれと一緒に来い。

エミリア。まあ、厭だ。淫賣婦。

ビアンカ。あたしは淫賣婦ではありません。そんなことを言つてあたしを侮辱するあなた方と、おんなじ正直な暮らしをしてゐるものです。

エミリア。わたし達とおんなじだつて。まあ、厭だ。

イヤゴオ。さあ、皆さん、あつちへ行つて、キヤシオ君の介抱をしませう。（ビアンカに）ねえさん、一緒に来てくれ。外に聞きたいこともあるから。エミリア、お前は城へ駈けて行つて、殿様や奥様にこの出来事を知らしてくれ――さあ、どうぞお出で下さい。（傍白）今夜が地獄極楽の界だ。

一同、退場。

第二場　城内の寝室

デスデモオナ、寝床の上に眠つてゐる。燈が一つ燃えてゐる。

オセロオ、登場。

オセロオ。理由はこれだ、理由はこれだ――だが、それをお前に言はせないでくれ、清浄無垢な星よ――理由はこれだ。だが、あれにあれの血は流すまい。雪よりも白い、アラバスタの石像よりも滑

かたあれの皮膚に疵はつけまい。だが、生かしては置かれん。生かして置いたら、又男を欺さう。この燈火を消して、それからお前の燈火を消すのだ。おう、そこに燃えてゐる火の奴よ、お前はおれが一度消してもまた元の火を取返すことが出來る、若しおれが後悔すれば。だが、お前の燈火は、一度消したら　汝造化の微妙な傑作よ　おれはお前の火を再び燃やすプロミシアスの火をどこに求めることが出來よう。一度摘みとつた薔薇の花に、二度と命を與へることは出來ん。これは必ず萎れてしまふ。さあ、枝についてゐる内に匂を嗅がう。

デスデモオナに接吻する。

ああ、なんといふ好い匂ひのする息だ。正義の神もこれには劍を折るだらう。もう一度、もう一度、たとひ死んでも、この儘でゐれば、お前を殺したあとでも、おれはお前を愛さずにはゐられまい――もう一度、さうしてこれが最後だ。かうも愛らしくて、かうも罪の深いものが、又とこの世にあらうか。おれは泣かずにはゐられない。だが、この涙は殘酷な涙だ。この苦しみは天の苦しみだ。愛すればこそ懲らすのだ――目を覺ましたな。

デスデモオナ。どなた。オセロオ樣。

オセロオ。さうだ、デスデモオナ。

デスデモオナ。おやすみになりますか。

オセロオ。デスデモオナ。今夜のお祈は済んだか。

デスデモオナ。はい、済みました。

オセロオ。まだ神様にお許しの願つてない罪があるなら、早く願ふが好い。

デスデモオナ。まあ、殿様、どうしてそんなことを仰しやるのです。

オセロオ。好いから早くしろ。おれはわきへどいてゐる。罪のある儘で、お前の心を殺したくはない。いや、神かけて、お前の魂は殺したくはない。

デスデモオナ。まあ、殺すのですつて。

オセロオ。さうだ。

デスデモオナ。神様、どうぞお助け下さいまし。

オセロオ。アアメン――おれも心から祈つてやる。

デスデモオナ。それほどのお心があるなら、お殺しにはなりますまい。

オセロオ。ふむ。

デスデモオナ。でも、わたしは、あなたが恐ろしい。さういふ風に目をぎよろぎよろなさると、恐ろしいお顔に見えます。なんにも悪いことをした覚えはございませんから、なぜ恐ろしいのか分りませんが、でも、わたしは、なんだか恐ろしくて。

オセロオ。お前の罪を考へて見ろ。
デスデモオナ。わたしの罪は、あなたをお慕ひ申してゐることより外にはございません。
オセロオ。さうだ。だから、お前は死ななければならないのだ。
デスデモオナ。慕うてゐるのを殺すのは無情だと思ひます。まあ、どうしてそんなに下唇をお噛みなさいますの。何か恐ろしいお考があなたの體を慄へさせるのですね。何かの前知らせに違ひない。でも、でも、わたしのことではないに違ひない。
オセロオ。しつ。靜にしろ。
デスデモオナ。靜にいたします。一體、どうしたのでございます。
オセロオ。おれがあんなに大事にしてゐて、お前に遣つたハンケチを、お前はキヤシオに遣つた。
デスデモオナ。まあ、そんなことが。魂にかけても、命にかけても、決してそんなことはありません。あの人を呼びに遣つて下さい。そして、あの人に訊いて下さい。
オセロオ。僞の誓をしてはいかん。お前は最後の床にゐるのだ。
デスデモオナ。はい。でも、まだ死ぬのではございません。
オセロオ。いいや、すぐに死ぬのだ。だから、自分の罪を殘らず白狀しなければならん。一つ一つに誓をかけて拒んでも、おれを惱み苦しませてゐるこの強い信念を除くことも出來なければ押潰すこと

とも出來ないのだ。お前は死なゝければならんのだ。

デスデモオナ。神樣、どうぞお助け下さいまし。

オセロオ。アアメン。

デスデモオナ。では、まだあなたにもお情はあるのですね。わたくしは決して今まであなたに對して、罪を犯したことはございません。決してキャシオ樣を愛したことはございません。神樣が誰にでもお許しになる愛以上に。物などを遣つた覺えは決してございません。

オセロオ。いや、おれはあいつがおれのハンケチを持つてゐるのを見た。貴樣は僞の誓をするのだな。貴樣はおれの心を石にして、おれが犧牲だと思つてゐることを唯の人殺しだと思はせる心だな。おれはハンケチを見たのだ。

デスデモオナ。では、あの人が拾つたのです。わたしは決して遣りはいたしません。あの人を呼びに遣つて、ほんたうのことを言はして下さい。

オセロオ。それはもう白狀してしまつた。

デスデモオナ。なんと申したのでございます。

オセロオ。お前と通じたと。

デスデモオナ。なんでございますと。そんな大それたことを。

オセロオ。さうだ。
デスデモオナ。そんなことを言ふ筈がありません。
オセロオ。もう言ひはせん。あいつの口は閉ぢてしまつた。忠義なイヤゴオが始末をしてしまつたのだ。
デスデモオナ。まあ、それでは、もう死んでしまつたのですか。
オセロオ。あいつの髮の毛が一本一本命を持つてゐても、おれの復讐はし足らんのだ。
デスデモオナ。まあ、あの人は讒言されたのです。あたしはもうおしまひです。
オセロオ。賣女め、おれの面前で、あいつのために泣くのか。
デスデモオナ。わたしを追ひ出して下さい。殿樣、でも、わたしを殺さないで。
オセロオ。下にをれ、賣女め。
デスデモオナ。あした殺して下さい。せめて今夜だけ生かして置いて下さい。
オセロオ。逆らふと聞かんぞ。
デスデモオナ。では、一時間でも。
オセロオ。きめた以上は、猶豫はならん。
デスデモオナ。では、せめてお祈をするまで。

オセロオ。もう遅い。

　デスデモオナを押潰す。

エミリア。（奥で）殿様、殿様。もし。殿様。

オセロオ。なんだ、あれは――まだ死なぬか。まだ死んでしまはんか――おれは如何にも残酷だ。だが、情はある。長く苦痛をさせたくはない。かう、かう。

エミリア。（奥で）もし、もし、殿様。

オセロオ。誰だ。

エミリア。（奥で）殿様、申し上げたいことがあるのです。

オセロオ。エミリアだな。今すぐ行く――死んでしまつた――キヤシオの死んだのを知らせに来たのだな――えらい音がしたやうだつた――や、もう動かんな。墓のやうにしづかだ――入れようか。入れて好いだらうか――また動いたやうだ――いや、さうではない――どうしたら好いだらう――はひつて来たら、きつと妻にものを言ひかけるだらう。妻。妻。妻とはなんだ。おれには妻はない――おお、苦しい。たまらない。けふは恐ろしい日食月食が一時に来て、それに驚いた地球が二つに裂けようとでもしてゐるのか。

エミリア。（奥で）お願ひでございます。申し上げたいことがございます、殿様、殿様。

オセロオ。おう、忘れてゐた。はひれ、エミリア——ちよつと待て。今すぐ明ける——ちよいとカアテンを引くから——どこにゐるのだ。（錠を外す）

エミリア、登場。

今頃どうしたのだ。

エミリア。おう、殿樣、あすこでむごたらしい人殺しがありました。

オセロオ。人殺しが。今か。

エミリア。はい、たつた今でございます。

オセロオ。それは月が軌道をあやまつたからだ。月がいつもよりずつと地球へ近いところへ來たので、人間が氣違ひになつたのだ。

エミリア。キヤシオ樣がロデリゴオといふ若いヱニス人をお殺しになつたのです。

オセロオ。ロデリゴオが殺されたと。して、キヤシオも殺されたか。

エミリア。いいえ、キヤシオ樣は殺されはしません。

オセロオ。キヤシオは殺されん。さては人殺しの調子が外れたな。氣持の好い復讐の音樂が、がさがさな音に變つてしまつた。

テスデモオナ。罪もないのに殺されたのだ。罪もないのに。

エミリア。おや、あの泣き聲はなんでございます。

オセロオ。あのとは。何だ。

エミリア。まあ、あれは奥樣のお聲だ。まあ、大變だ。誰か來て下さい。誰か來て下さい。奥樣、もう一度なんとか仰しやいまし。デスデモオナ樣。おいとしい奥樣。なんとか物を仰しやいまし。

デスデモオナ。わたしは罪もないのに死ぬのだよ。

エミリア。まあ、誰がこんなことをしたのだらう。

デスデモオナ。誰でもない。わたしが自分でしたのだよ。さやうなら。殿樣に宜しく言つておくれ。さやうなら。（死す）

オセロオ。どうして殺されたのだらう。

エミリア。分かるものですか。

オセロオ。おれではないと言つたやうだな。

エミリア。さう仰しやいました。わたくしはその通りを人に申さなければなりません。

オセロオ。あいつは嘘つきだ。焦熱地獄へ落ちなければならん。殺したのはおれだ。

エミリア。では、奥樣は眞の天使で、あなたは眞の惡魔です。

オセロオ。あいつは罪を犯したのだ。賣婦だ。

エミリア。いいえ、それは嘘です。あなたは悪魔です。

オセロオ。あいつは水のやうな浮氣者だ。

エミリア。あなたは火のやうな短慮なお方です。あの神々しいほど貞實な奥樣を浮氣者だなどと仰しやるのは。

オセロオ。若しおれが正しい根據もなしに、こんなひどいことをしたのなら、地獄の底へまつ逆さまに落ちても構はん。萬事はお前の夫が知つてをる。

エミリア。わたくしの夫が。

オセロオ。お前の夫が。

エミリア。奥樣が不義をなすつたと申しましたか。

オセロオ。さうだ、キヤシオと。いや、若しあれが貞女であつたら、完全無缺な橄欖石で築かれた別天地が、おれの目の前に湧き出ようとも、それと妻を取替つこにはせん。

エミリア。まあ、わたくしの夫が。

オセロオ。さうだ、誰よりも先に知らせてくれたのだ。お前の夫は正直な男だから、穢れた行にくつついてゐる泥をさへ憎むのだ。

エミリア。まあ、わたくしの夫が。

オセロオ　どうして、そんなに幾度も聞くのだ。如何にもお前の夫がさう言つたのだ。

エミリア。おう、奥様。惡魔が戀をおもちやにしたのです。わたくしの夫が奥様のことを不義だなどと申すとは。

オセロオ。さうだ。如何にもお前の夫がさう言つたのだ。分かつたか。おれの友達の、お前の夫の、正直な、正直なイヤゴオが。

エミリア。若しさうなら、あの人の極惡な魂は、日に一分づつ腐るが好い。底の底まで嘘だ。奥様はこの穢ならしい男を慕ひ過ぎるほど慕つておいで遊ばしたのだ。

オセロオ。や！

エミリア。もつと、もつと惡いことをするが好い。お前の僞方はまだ足らぬ。お前が奥様の夫であるに足らぬやうに。

オセロオ。默れ。默らぬと爲にならぬぞ。

エミリア。お前はわたしを痛い目にあはせる力を、わたしが堪へる力の半分も持つてゐやしない。ばか　阿房——泥のやうな物知らず。こんなことをするとは——劍などが恐いものか。二十度命を落したつて、このことを言ひ觸らさずには置かないから——誰か來て下さい。誰か來て下さい。ムウア樣が奥樣を殺したのです。人殺しだ。人殺しだ。

モンタノオ、グラシアノオ、イヤゴオ、その他登場。

モンタノオ。どうしたのだ。どうしたのです。將軍。

エミリア。まあ。イヤゴオ。よく來てね。お前さんは利口な人だ。人のした人殺しの罪を自分の身にしよふなんて。

グラシアノオ。どうしたのだ。

エミリア。お前さん、男ならこの悪黨の言ふことは嘘だと言つておくれ。この人はお前さんが、この人の奥さんが、不義をしたと言つたと言ふのよ。わたしはお前がそんなことを言ふ筈はないと思ふわ。お前はそんな悪黨ぢやない。言つておくれよ。わたしの胸は一ぱいだわ。

イヤゴオ。おれはさうと思つたからさう言つたのだ。あの人が自分でさうだと信じてゐただけのことを言つたのだ。

エミリア。でも、奥様が不義をしたと言つたことがあるのかい。

イヤゴオ。言つた。

エミリア。嘘だ。穢らはしい、恐ろしい嘘だ。嘘も嘘、むごたらしい嘘だ。奥様がキヤシオ様と不義をなすつたなどと　　お前、キヤシオ様とさうだと言つたのかい。

イヤゴオ。キヤシオとさうだと言つたのだ。もう默れ。なんにも言ふな。

エミリア。いいえ、言ふ。言はずにはゐられない。奥様はあの寝床の中で殺されてゐらつしやるのだ――

一同。おう。

エミリア。それもみんなお前の言つたことが元なのだ。

オセロオ。いや、諸君、そんなにわしの顔を睨まんでも好い。事實さうなのだ。

グラシアノオ。事實とすれば、實に不思議な事實だ。

モンタノオ。奇怪至極なことだ。

エミリア。悪だくみだ、悪だくみだ、悪だくみだ――あの事を思ふと、あれを考へると。きつとさうだ。悪だくみだ――あの時さう思つたのだ――もういつそ死んでしまひたい――悪だくみだ。

イヤゴオ。ばか、氣でも違つたのか。好いから、家へ歸れ。

エミリア。皆さん、どうぞわたしに、ものを言はして下さい。夫に從ふのがあたりまへですが、けふはどうしても聞きません。イヤゴオさん。わたしはもう決して家へは歸りますまい。

オセロオ。おう、おう、おう。（寝臺の上に倒れ伏す）

エミリア。さうだ。さうやつて、唸つてゐるが好い。お前にこの世に生れた一番罪のない可愛い人を

殺したのだ。

オセロオ。（起き上がりて）あいつは不義をしたのだ　叔父上、あなただとは知りませんでした。あなたの姪御は、わたくしのこの兩手で、たつた今息の根を留められて、あのやうにあすこに死んでゐます。この爲業がどんなに恐ろしく、どんなにむごたらしく見えるか、それはわたくしも知つてゐます。

グラシアノオ。可哀さうなデスデモオナ。お父樣のお亡くなりになつたのが却つてしあはせでした。あなたの結婚は、お父樣にとつての致命傷でした。その悲しみが老人の玉の緒を眞つ二つに切つてしまつたのです。若し、今まで生きてをられたら、この有樣を見られたら、氣違ひのやうになられて、善の天使を呪ひ退け、墮獄の罪に陷られたかも知れません。

オセロオ。痛ましいことです。併し、妻がキヤシオと幾度となく不倫な行をしたことは、イヤゴオがよく知つてゐます。キヤシオ自身も白状いたしました。妻はわたしがあれにやつた最初の愛の印を贈つて、男の愛に報いたのです。わたくしは現に男がそれを手にしてゐるのを見たのです。それはハンケチです。わたくしの父が母に與へた昔の愛の印です。

エミリア。まあ、なんといふことだらう。

イヤゴオ。しつ、默れ。

エミリア。いいえ、言ひます、言ひます、北風のやうに思ふ儘言ひます。天と人間と惡魔とが一緒になつて叫つても、言はずには置きません。

イヤゴオ。ばかを言はずに早く歸れ。

エミリア。いいえ、歸りません。

イヤゴオ、エミリアを刺さうとする。

グラシアノオ。なんといふことだ。女に刃を向けるとは。

エミリア。ムウアのばかめ。お前が言つたハンケチはな、わたしが計らず拾つて、内の亭主に遣つたのだ。あんなものを、どうしてそんなに欲しいかと思ふほど、盗め盗めと頼むのだ。

イヤゴオ。うぬ、穢女め。

エミリア。奥樣があれをキヤシオ樣にお上げ遊ばしたつて。飛んでもないことだ。わたしが拾つて、内の亭主に遣つたのだ。

イヤゴオ。畜生、嘘をつけ。

エミリア。いいえ、嘘ぢやない。皆さん、嘘ではございません――人殺しの莫迦め。あゝ、こんな莫迦に、あんな好い奥樣を持たせるとは。

オセロオ。天に石はないか。雷の石の外に――極惡人め。

オセロオ、イヤゴオに走りかかる、

イヤゴオ、後からエミリアを刺して、退場。

グラシアノオ。や。女が倒れる。あいつが自分の女房を殺したのだ。

エミリア。さうです、さうです。どうかわたしを奥様の傍に寝かして下さい。

グラシアノオ。女房を殺して、逃げをつたか。

モンタノオ。恐ろしい悪党だ　この剣をとつて下さい。唯今ムウア殿から取り上げたのです、さあ、皆さん。戸を閉めて下さい。決してこの人を出してはいけません、無理に出ようとしたら殺しても構ひません。わたしはあの悪党を追つかけます。あの恐ろしい奴隷めを。

モンタノオとグラシアノオ、退場。

オセロオ。もうおれは勇気さへ失つたのか。あんな青二才に剣まで奪はれるとは。だが、既に名誉のなくなつたものに、名誉などが何になる。もうどうでも好いわ。

エミリア。奥様、さつきのお歌は、なんの知らせでございましたらう。まだわたくしが申すことがお聞えになりますか。わたくしは白鳥の真似をして歌を歌ひながら死にませう。（歌ふ）柳、柳、柳

ムウア様、奥様は貞女でいらつしやいました。あなたを愛していらつしやいました。わたしは嘘は申しません。わたしの魂は天国へ昇りませう。わたしの思ふ通りを申しながら、わたしは死に

ます、わたしは死にます。（死す）

オセロオ　またこの部屋には劍が一ふりある筈だ。氷河できたへた西班牙の劍だ――おう、ここにある。　叔父上、外へ出して下さい。

グラシアノオ　（奥で）出たら命はありませんぞ。あなたは武器を持つてゐないのだから、とてもかなひはしませんぞ。

オセロオ　それでは、中へはひつて話をして下さい。でないと、素手でもお相手になりますぞ。

グラシアノオ、再び登場。

グラシアノオ　どうしたのです。

オセロオ　御覧なさい、わたしは武器を持つてゐます。これに優る武器が軍人の腰に結ばれたことは決してありません。わたくしは、この痩腕とこの業物一つで、あなた如きの二十倍三十倍の障碍をも切り開いて通つた事もありましたが――いや、そんな高言を吐いたところで何になる――運命にはかなはぬ――もう駄目だ――武器を持つてゐても、恐れることはありません。もうこれが浮世の旅の行き留りです。わたしの航海の最後の歸着です。驚いて尻込をなさるのですか。御心配は無用です。もうかうなつたら、たつた一本の葦でオセロオの胸を突かれても、オセロオはたぢたぢです。ああ、オセロオはどこへ行つたら好いのだ――どんな顔をしてゐる。おう、不運な女。肌著の

やうに蒼白い顏をしてゐるな。審きの日に二人會つたら、お前のこの顏はおれの魂を天から奈落へ突き落して、悪魔がそれを摑むだらう。冷たい、冷たい。お前の操のやうに――おう、極悪人め、――おう、悪鬼よ、この神神しい姿を拜ませぬやうに、おれを鞭で叩き出せ。業風でおれを吹き卷け。硫黄の火でおれを炒り炒り焼け。火の海の底でおれを洗へ。おう、デスデモオナ。デスデモオナ。お前は死んでしまつた。おう、おう、おう。

ロドキコオ、モンタノオ、登場。

キャシオ、椅で擔がれて來る。役人達、イヤゴオを捕縛して、連れて出る。

ロドヰコオ。不幸な短慮な男はどこにゐます。

オセロオ。それは嘗てオセロオと申した男です。ここにをります。

ロドヰコオ。毒蛇はどこにをる。悪者を引き出せ。

オセロオ。こいつの足には蹄がない。鬼には蹄があると聞いたが、それは作り話か。若し貴樣が悪魔なら、殺すことは出來ない筈だ。

イヤゴオに斬りつける。

ロドヰコオ。劍をもぎ取れ。

イヤゴオ。血は出たが、命に別條はない。

オセロオ。それで好いのだ。おれはお前を生かして置きたいのだ。死ぬ方がしあはせだと思ふから。

ロドヰコオ。一時は立派なお方であつたオセロオどのだが、かやうな奴の悪だくみにかかつたと今となつては、なんと申しやうもない。

オセロオ。どうなりと仰しやつて下さい。唯出来るなら、名誉を重んじての殺人だとお傳へ下さい。私の憎みでしたことではありません。何もかも名誉のためにいたしたことです。

ロドヰコオ。こいつは、その悪だくみをあらかた白状しました、あなたはこの男と相談してキヤシオを殺さうとなすつたのですか。

オセロオ。さうです。

キヤシオ。閣下、わたしはお恨を受けるやうな覚えはございません。

オセロオ。もう疑ひません。赦してくれ――どうかこの悪魔に聞いて下さい。なぜ、そいつは、わたしの魂をも肉體をも陥れようとしたのかを。

イヤアゴオ。なんにもお聞きなさいますな。御存じだけのことは御存じなのです。もうわたくしは一言も口を利きません。

ロドヰコオ。では、もう祈禱もしないつもりか。

グラシアアノ。拷問にかけても口をあかせて見せる。

オセロオ。なるほど、それがお前には一番よからう。
ロドヰコオ。オセロオどの、恐らくあなたは御存じあるまいが、事の顚末をお話しいたさう――ここに殺されたロデリゴオの衣兜から出た手紙が一通ります。まだここにも一通あります。その一つに依ると、キヤシオの暗殺は、ロデリゴオに依つて行はるべきことが認めてあります。
オセロオ。うぬ、悪黨め。
キヤシオ。極悪非道な。
ロドヰコオ。又ここには、愚痴だらけの手紙があります。これもロデリゴオの衣兜から出たのです。多分これはロデリゴオが、この悪人に送らうとして書いて置いたものでせう。ところが、それを出さない内に、イヤゴオが參つて話をつけたものと見えます。
オセロオ。憎むべき奴だ――それにしても、キヤシオ、どうして妻のハンケチが、お前の手にはひつたのだ。
キヤシオ。それはわたくしの部屋で拾つたのです。つい今しがた、あいつの白狀したところに依ると、自分の非望を遂げる爲に、わざと落して置いたのだといふことです。
オセロオ。ああ、ばかだつた。ばかだつた。ばかだつた。
キヤシオ、猶ロデリゴオの手紙の內には、彼がイヤゴオを責めた文句があります。それに依れば、あ

の夜警の晩にロデリゴオをけしかけて、わたしに喧嘩をしかけさせたのも、あいつの謀策です。そして、その傷にわたくしは職を奪はれたのです。つい今もロデリゴオは、息を吹返して、イヤゴオが彼を刺したのだといふこと、イヤゴオが彼を煽動したのだといふことを申しました。

ロドヰコオ。では、この部屋を出で、わたし達と同行なさらなければなりません。あなたの職権は剥奪されました。キャシオが代つてサイプラスを統治するのです。この悪者は出来るだけ多く出来るだけ長く苦痛をさせるやうな責罰を考へて、それに処することにします。あなたは獄に下らなければなりません。犯罪の性質をヹニスの政府へ報告するまでは。さあ、引つ立てい。

オセロオ。暫くお待ち下さい。お別れする前に、一言二言申したいことがあります。わたくしは国家に対して相当の功績を立てました。それは政府も御承知の筈です――だが、もうそのことは言つても為方がない――唯お願ひいたしたいのは、この不幸な顛末を報達せらるる文書に於いて、少しも飾はず、少しも蔽はず、ありの儘を御報告願ひたいのです。即ち、分別を缺くところはあつたが、深く妻を愛した男として。たやすくは人を疑はぬが、たばかられて極度に心の乱れた男として。あの無智な印度人のやうに、全種族にも換へ難い真珠を自ら棄つた男として。決して女々しく泣いたことのない目が、感受性もなく挽けて、アラビヤの木が薬用の汁を垂らすやうに、涙を流した男として。さて、かう書いて下すつたら、更に附記アレッポオに於いて、ツルバンを頭に巻いた悪人の

悪い土耳古人が、ヱニス人を打擲して、我國を誹つた時、その犬めの喉を掴んで、この通りに（短劍で自分の胸を刺す）突き殺したことがあるとお傳へ下さい。

ロドヰコオ。なんといふむごたらしい最後だ。

グラシアノオ。相談して置いたこともみんなむだになつてしまつた。

オセロオ。おれはお前を殺す前に接吻をした。そこで、かうするより外はない。自分を殺しながら、接吻をして死ぬのだ。

寢臺の上に倒れて死す。

キヤシオ。武器を持つてゐようとは思ひもかけなかつた。氣丈な人だから、こんなことになりはしないかと心配はしてゐたのだが。

ロドヰコオ。疫病よりも、飢よりも、海よりも、恐ろしいスパルタ犬め、あの寢床の悲慘な重荷を見るが好い。これはみんな貴樣のしたことだ。見るに堪へぬ。隱してしまへ――グラシアノオどの、あなたはこの屋敷を抑へて、ムウアどのの財産を相續なさい。それは當然あなたの權利です――さて總督殿には、この悪漢の審きをお頼み申します。時も、場所も、拷問の爲方も、お任せ申します――十分にお遣り下さい。わたし達は、すぐにこれから船に乘つて、この悲慘な顛末を元老院へ報告しませう。

一同退場。

——幕——

人間（五幕の表現派戯曲）

第一幕

第一場

墓地。

夕燒。或十字架が倒れる。

アレクサンダア。（墓の中から出て來る）

人殺し。（袋を持つて出て來る）

アレクサンダア。（驚く）

人殺し。おれは人を殺した。（袋をアレクサンダアに渡す）

アレクサンダア。（手を出す）

人殺し。首は袋の中にはひつてゐる（墓のところへ行つて、その中へはひる）

アレクサンダア。（その上へ土をかける）

第二場

廣間。

夜。布のかゝつた卓。うしろに幕。右と左に壁の囲んだ所がある。

廣間が明かるくなる。

年をとつた給仕人と客。

給仕人。（新聞を讀んでゐる）人殺しだ。

客。（熱心に）足か。

給仕人。首がないのです。

客。ビイルを一杯。

アレクサンダア。（袋を持つて、帷を潜つてはひつて來る）

客。強盗か。

給仕人。報酬です。

客。勘定。

給仕人。ロオストビイフが一つと。

客。やられた人間は一人か。
給仕人。三マアクと九十プヘニツヒ。」
客。（出て行く）
アレクサンダア。皆さん。
給仕人。アレクサンダア。
アレクサンダア。こゝは何處だ。
給仕人。行方が知れなかつたのだ。」

第三場

右手の壁の凹んだ所が明かるくなる。
ぼろ〳〵な裝をした人間が、酒の瓶が澤山載つてゐる卓の前に坐つてゐる。

酒飲み。あれは夢を見てゐる。
廣間が暗くなる。
アレクサンダア。（はひつて來る）
酒飲み。（アレクサンダアに杯を差す）

アレクサンダア。（飲む）

酒飲み。君は腹が減つてゐるな。

アレクサンダア。（見上げる）

酒飲み。兄弟。（アレクサンダアを抱く）

亭主。（はひつて來る）お金を頂きます。」

酒飲み。（上着の中を探す）

亭主。六本です。

アレクサンダア。おれが働から。

亭主。給仕人になつてか。（廣間を指さす。やがて出て行く）

リツシ。（はひつて來る）皆さん。

酒飲み。お前は病氣だ。

リツシ。讐をとつてやるから。（去る）

アレクサンダア。（腕を伸ばす）可愛い奴。」

第四場

左手の壁の凹んだ所が明かるくなる。

燕尾服を着た紳士達が一つの卓を圍んで立つ。

賭博場の首領。貸元。助手。

首領。（姿は見えない）　始めるぞ。

紳士達。（卓の上へ金を投げ出す）

右手の壁の凹んだ所が暗くなる。

アレクサンダア。（はひつて來る）

貸元。誰だ。

助手。新顔だ。

一同、叫び且笑ふ。

貸元。（アレクサンダアに金を與れる）　坐り給へ。」

アレクサンダア。（坐る）

首領。十三。

貸元。萬歲。

助手。うまくやつたな。

紳士達。うつちやつて置け。

聲。十三

貸元。畜生。

紳士達。爲方がないさ。

貸元。（卓の上に金を投げ出す）

聲。十三。

紳士達。商業參事員閣下。

貸元。これでみんなだ。（金を卓の上に投げ出す）

聲。十三。

首領。愈々銀行か。

貸元。やるぞ。

聲。十三。

騷擾。

貸元。（カラアを引きちぎる）

紳士達。破産だ。

貸元。時計だ。（時計を卓の上へ投げ出す）

紳士達。遺言狀だ。

　　靜寂。

貸元。（手を振る）

首領。（鐘を鳴らす）

覆面の人々。（はひつて來る）

貸元。（叫ぶ）もう、おしまひだ。

覆面の人々。（落し戸を開けて、その中へ貸元を押し入れる）

首領。これでやめにします。

　　卓が見えて來る。

アレクサンダア。（卓の前に立つ）

紳士達。（嚇すやうに）うつちやつて置け。

　　重く沈んだ銃聲。

助手。（十字を切る）

覆面の人々。（歸つて來る）

紳士達。(卓の上の金を分ける)

首領。始めた。

紳士達。(痙攣狀態になる)

聲。十三。

卓が引つくり返る。

覆面の人々。(紙幣を拾つて、アレクサンダアの衣兜へ押し込む)

アレクサンダア。(去る)

叫び聲。うまく行つたぞ。

紳士達。(ピストルを出す)

叫び聲。報酬の强要だ。

首領。(肩を聳かす)

紳士達。吾々は餓死する。

助手。(電燈を消す)

滿月。

助手。(月を指さす) 鑛山だ。

叫び聲。運河だ。
紳士達。緑青だ。
叫び聲。金だ。
助手。（電燈をつける）月の銀行だ。
首領。もう締まつてしまつた。
叫び聲。署名だ。
紳士達。（書く。紙が震ふ）
助手。取締役。（書類を首領に渡す）
叫び聲。萬歳だ。
紳士達。（首領を祝ふ）
リツシ。（はひつて來る）
紳士達。（卓を起す）
助手。（杯を擧げる）
聲。始めるぞ。
紳士達。（卓の上に書類を投げ出す）

左手の壁の凹んだ所が暗くなる。

第五場

廣間が明かるくなる。

朝。卓の上の布が取り除けられてゐる。幃が開かれてゐる。うしろに工場が影繪のやうに見える。

酒飲み。（ひとりで）おれは世界を愛す。

職工達。（はひつて來る）

酒飲み。朋輩。

職工達。賃銀値上げだ。

酒飲み。朝が來るよ。

職工達。朝の新聞か。

アレクサンダア。（給仕人になつて出て來る）

職工達。ストライキだ。

酒飲み。吾々は貧乏だ。

アレクサンダア。（珈琲を持つて來る）

酒飲み。六本だ。
アレクサンダア。（考へて、紙幣を取り出す）これは君のだ。（前掛を棄てゝ、出て行く）
職工達。金持になつたな。
酒飲み。地獄だ。
職工達。こつちへよこせ。
酒飲み。（紙幣を隠す）
職工達。よこさねえか。（酒飲みを血の出るまでなぐりつける）
酒飲み。（卒倒する。工場の汽笛が鳴る）
職工達。（仕事に出て行く）
リツン。（紳士達と出て來て、酒飲みに躓く）
年とつた給仕人。（酒飲みを抱き起す）
アレクサンダア。（袋を持つて出て來る）
給仕人。お前、生きてゐるのか。
アレクサンダア。おれは何だ。

第二幕

第一場

地下室。

地下室の上に部屋が一つある。うしろに窓、往來。

　地下室が明かるくなる。

酒飲み。（頭に繃帯をしてゐる）金だ。

乞食。（窓から手を出して）パンを下さい。

賭博場の助手。（はひつて來る）

乞食。（姿を消す）

酒飲み。まだ血が出る。

助手。署名をして下さい（書類を擴げる）

酒飲み。財産はもう一文もないのか。

助手。共有になりました。

酒飲み。もう戰爭はないのか。

テア。皇様に御挨拶をおしよ。

ギルグ。（酒飲みの上着を見て） ぼろ／＼だわ。

レナ。お前、糸を持つてゐるかい。

テア。（鏡の前で）あたしの帽子は似合ふかい。

酒飲み。おれは死にさうだ。

ギルダ。煙草をお呉れよ。

テア。藤色絹だよ。

レナ。金持の宮様。神様のお話をしてお呉れよ。（みんな酒飲みの廻りに横になる）

酒飲み。神様は何百萬も相續するのだ。

ギルダ。慾張りだね。

テア。中々細かいんだよ。

レナ。（酒飲みの上着を縫ふ）

酒飲み。それがおれ達を捩ぢ曲げるのだ（のけざまに倒れる。女達がその上に何か掛けてやる。それから、そつと立ち去る）

ギルグ。神様は何百萬も相續するのか。

酒飲み。（ひとりで）おれは死を待つてゐる。

地下室が暗くなる。

第二場

上の部屋が明かるくなる。

青年と少女。

少女。あたし心配だわ。

青年。（立ち上がる）

少女。段々近づいて來るわ。

青年。（戸口へ行く）

少女。何か始まつてよ。

青年。（戸口を開く）

少女。今よ。

下で椅子が一つ倒れる。

少女。（叫ぶ）誰か死んだんだわ。

青年。(下へ駈け降りる)
少女。(腰をぬかす)
青年。(歸つて來る。紙幣を手に持つてゐる) 金だ。
少女。(驚く)
青年。あいつは死んでゐた。
少女。あなた、震へてゐるのね。
青年。(窓を大きく明けて)生活だ。
少女。あなたはあたしを愛してゐないんだわ。

第三場

女ト者の家。
長椅子。その前に卓。三箇の椅子、卓を圍む。長椅子に女ト者。それに對して少女。その左手に青年。右手の椅子が一つ明いてゐる。

青年。(骨牌をまぜる)
女ト者。お孃さんは青い顏をしてゐるね。

女卜者。女が來る――お前は女を知らない――黒札だ――危險だ――病氣だ――

二人に當たつてゐる光が消える。

女卜者の聲。死だ。

青年とリツシが顏を見合ふ。

第四場

應接間

うしろに戸口。右と左に小さい部屋がある。

左の小さい部屋が明かるくなる。

青年。(はひつて來る)

聲。(外で)ドクトルは御在宅です。

青年。(繪の前に立つ)『カナの婚宴』か。(自分の襟に指を觸れて)腺が腫れてゐるのだ。(不安に歩き廻る。時計を出して見る)六時半だ。(震へる)おれは健康だ。(突然、胸を掴む)もう決して戀はしない――決して子供は作らない――

應接間が明かるくなる。

青年。危險だ――病氣だ――

醫者。（應接間へはひつて來る）

青年。死だ。

醫者。（左の小さい部屋を明ける）

青年。（胸をひろげる）

醫者。（プレパラートを取る）

青年。（壁を見詰める）

醫者。（顯微鏡の方へ行く）

青年。卵だ。子供だ。

醫者。いつ生れました。

青年。墳だ。

醫者。お父さんは健康ですか。

青年。（窓の方へよろめく）生活だ。

醫者。ちと疑はしい點がある

青年。僕は聲が出ません。

醫者。（立ち上がつて）十マアク。
青年。便が結します。
醫者。黴毒だ。
青年。（氣絶する）
醫者。（青年を左の小さい部屋へ擔いで行つて、長椅子に寢かす）
右の小さい部屋が明かるくなる。
少女。（はひつて來る）
醫者。（應接間へ歸つて來る。手を洗ふ。右の小さい部屋を明ける）
少女。（醫者の前に跪く）
醫者。姙娠だな。
少女。助けて下さい。
醫者。綺麗な娘さんだ。
少女。困つてゐるのです。
醫者。刑事問題だ。
少女。（立ち上がる）あたしを救つて下さい。

醫者。キスをさせろ。(少女を抱く)

少女。(前へ倒れる)　倒れます。

醫者。(少女を右の小さい部屋へ擔いで行く。燈を消す)

　右の小さい部屋が暗くなる。

青年。(長椅子の上で、息を吹っ返す)

　落日。

青年。(腕をひろげる)　朝日だ。

　左の小さい部屋が暗くなる。

少女。(髮の毛を振り亂して、右の小さい部屋から應接間へ飛び込んで來る。解剖刀を摑む。血管を切る。戸口が明く)

アレクサンダア。(袋を持つて、はひつて來る)

少女。(刀を落とす)

アレクサンダア。(少女の手を取つて、血を吸ふ)

　應接間が暗くなる。

アレクサンダア。(左の小さい部屋を明ける)

月光。

青年。(床の上に横たはる)

アレクサンダア。(青年に手を觸れる)

少女。(近寄る)

青年。(立ち上がる。骸骨である。髑髏である)

アレクサンダア。(青年の手を取る。一緒に出て行く)

第五場

オペラの劇場。

幕の中の棧敷。胸壁の帷が引いてある。右手の棧敷には人がゐない。アレクサンダアと青年と少女が安樂椅子にかけてゐる。

女給。お酒はお氣に召しましたか。

新聞賣子。號外――大强盜の號外。

青年。僕はもうさうぢやない。

聲。(下から) 幕だよ。

アレクサンダア。おれ達は室の中にゐるのだ。」

少女。（手で腹を押す）子供が動く。

聲。（下から）椅子を一つ。

青年。永遠だ。

アレクサンダア。門は開かれた。」

　　開幕を知らせる鐘が鳴る。

聲。（下から）大詰が明くよ。

青年。僕は世界を見るのだ。

　　傍に青年。

青年。最後の牧場だ。

醫者。（右の棧敷へはひつて來る。燕尾服。白手袋）トマアク。」

青年。（紙幣を投げつける）おれは迷つてゐるのだ。

醫者。（紙幣を摑む）

リツシ。（醫者の棧敷へはひつて來る。笑ふ。紙幣を盗む）

　テノルの獨唱。Donna é mobile.

醫者。（帷を締める）

右の棧敷が暗くなる。

青年。（立ち上がる）

アレクサンダア。君の外套だ。（自分の肩から引廻しの外套を取つて、それを青年に着せる）

青年。（胸壁の帷を裂いて取る。舞臺が明るい。音樂の間奏）

喇叭。

青年。（棧敷から轉げ落ちる。樂器が一齊に鳴る）

少女。こゝは何處です。

アレクサンダア。復活だ。

第三幕

第一場

街路。

奥に窓のある家。中段にバルコン。下にカフェエ。戸外に卓三つ。中央の卓はバルコンの下にある。左手に廣告塔――『殺人犯』といふ外題の書いてある赤いポスター。それに對して、右手に乞食。

給仕人。吾々人間は。

乞食。(手風琴を彈く)

啞達。(中央の卓へ來る)

給仕人。(その方へ行く)

啞達。(手眞似で話をする)

醫者。(呼ぶ)啞だ。

給仕人。(頷いて、家の中へはひる)

アガアテ。(裸足、十四歲、箱を持つて出て來る)マツチは入りませんか。」

助手。(追ひのける)

醫者。(笑ふ)

啞達。(金をやる)

アレクサンダア。(抱へてやる)

リツシ。(バルコンに現れる。啞達に目で合圖をする)お金はお金だよ。(消える)

助手。おれ達は借金で生きてゐるのだ。

アレクサンダア。お前の名は何と言ふのだい。

アガアテ。アガアテ。

助手。少年勞働か。

アガアテ。あたい達は食べられないんだ。

助手。紙だ。

醫者。（紙幣を出す）おれ達は財産を持つてゐる。

助手。（時計を出す）買つて吳れますか。

醫者。（紙幣を衣兜に突つ込む。時計を出す）出産だ。（立ち上がる）

乞食。（手風琴を彈く）

アガアテ。お母さんが死にかけてゐる。

醫者。（去る）

助手。（あとを追ふ）

アガアテ。助けて下さい。（アレクサンダアの手をとる。二人、出て行く）

啞達。（手眞似で話をする。「殺人犯」といふ外題の書いてあるポスタアを指さす）

第二場

屋根裏部屋。

右手に梯子段のある玄關。傾斜した天井。奥に窓一つ。窓の向ふに屋根が澤山見える。左手の寢臺に死にかけてゐる母。中央に卓一つ。椅子三脚。まん中の椅子に白髪の父。右手に旅行用の籠。

屋根裏部屋が明かるくなる。

母。(呻く)

父。(動かない)

玄關が明かるくなる。

アガアテとアレクサンダアが梯子段を上がつて來る。

玄關が暗くなる。

アレクサンダア(はひつて來る)

母。まあ、お前かい。

アガアテ。お母さんは熱があるんだよ。

母。せがれ。

アレクサンダア。(寢臺の側へ行く)

母。(その手を取る) あたしは旅に出かけるよ。

アガアテ。（机を向く）

母。汽車が出る。

アレクサンダア。（旅行用の籠の方へ行く）

母。荷作りをしてお呉れ。

アレクサンダア。（籠を開く）

母。婚禮なんだよ。

アレクサンダア。（戸棚へ行つて、襯衣を引つ張り出す、それを籠の中へ入れる）

母。襟留は。

アレクサンダア。（箪笥へ行つて、襟留を見つける）

母。樂書は。

アレクサンダア。（卓へ行つて、樂書を抽斗から出す）

母。お金は。（箪笥から紙幣を引つ張り出して、籠の中へ押し込む）

アガアテ。（合掌する）お母さんのお言ひ通りになりますやうに。

アレクサンダア。（籠の蓋をする）

母。切符は。（アガアテとアレクサンダア、卓の前に坐る）

母。(呻く)

アガアテ。お父さん。

母。(臨終の咽喉を鳴らす)

静寂。

窓が明く。

父。死だ。(三人、凝(ぢつ)と坐つてゐる)

玄關が明かるくなる。

人々、梯子段を上がつて來る。鍵穴から覗く。囁き合ふ。

玄關が闇くなる。

人々、はひつて來る。部屋が影で一ぱいになる。

黑衣の人。葬式だ。(一同、近くへ寄る。卓を押し圍む。父、アガアテ、アレクサンダア、手を伸ばす。人々の姿、消える。部屋が闇くなる。卓が明かるく見える)

父。お前は誰だ。

アレクサンダア。おれはおれを探してゐるのだ。

父。人間だ。

アレクサンダア。（父の前に頭を下げる）

アガアテ。（笑ふ。幕が闇くなる。屋根の上を鳥が飛ぶ）

第三場

病院。

中央に診察室。右手に手術室。左手に助産室。

手術室と診察室が明かるくなる。

看護婦。（診察室に坐つてゐる）

醫者。（手術室に立つてゐる。硝子の戸棚へ行つて、胎兒を取り出す。それを燈にかざして見る。それから手術臺の上に置く）

看護婦。（編物をしてゐる）

醫者。（扉を明ける）診察は。

看護婦。三人です。（帳面を繰る）九の月です。

醫者。（扉を閉ぢる）

手術室が闇くなる。

助産室が明かるくなる。

娼婦達。(三つの寢臺に寢てゐる。四番目の寢臺は明いてゐる)

テア。(化粧刷毛と懷中鏡を持つて)馬鹿。

ギルダ。チヨコレエトだよ。(食べる)

レナ。金持の宮樣は死んだよ。(花束の方へ手を伸ばす)

ギルダ(花を奪ふ)あたいの花だよ。

テア。(腹を叩く)ベルが鳴るよ。

ギルダ。おはひり。

一同くすくす笑ふ。

少女。(診察室へよろよろはひつて來る。壁につかまる。へたつてしまふ)

看護婦。(氣を喪つた少女を助産室へ引き摺つて行つて、四番目の寢臺に寢かす)

醫者。(診察室へはひつて來る)

看護婦。(歸つて來る)お產です。

ギルダ。(腕を伸ばす)踊らうよ。

テア。お醫者さんだ。(出してある物を隱す)

醫者。（はひつて來る。少女の側へ行く。面を見る）不潔な奴だ。

少女。（眼を開く。醫者を見る。叫ぶ）けだもの。

醫者。マスクだ。

看護婦。（器械をのせた患者運搬車を押してはひつて來る）

少女。（抵抗する）厭だ。

醫者。（少女をしつかり捕まへる）

看護婦。（クロロフォルムのマスクをかぶせる）

醫者。數へなさい。

少女。（段々力がなくなる。啜り泣く）二十一――二十二。

醫者。しめた。

看護婦。（クロロフォルムのかゝつた患者を運搬車にのせる）

醫者。（診察室を通つて、手術室へはひる）

看護婦。（その後から車を押してはひる。手術室の扉が締められる）

テブ。（唸る）

ギルダ。獅子だ。

レナ。あたし泣くよ。

テア。（吐瀉する）

ギルグ。あたしの體は。

レナ。（手を絞る）お母さん。

ギルダ。天の神樣。（布團の中へもぐり込む）

靜寂。

手術室で何かの器械がガチャンと落ちる。

テア。（躍り上がる）子供が生れたんだよ。

醫者。（手術室から血だらけの手で出て來る。手を洗ふ）穢い。

第四場

街路。

廣告塔に對して、乞食。中央の卓に啞達。他の二つの卓は明いてゐる。

啞達（手眞似で話をする。『殺人犯』といふ外題の書いてあるポスタアを指さす）

新聞賣子。號外。

年とつた給仕人。（戸口の前へ出て來る。掃除をする）

新聞賣子。人殺しの足がついた。

給仕人。（新聞を買ふ）

新聞賣子。（去る）

乞食。（手風琴を彈く）

右手から葬式の行列が出て來る。黑い着物を着た人夫が、屋根裏部屋にあつた卓を擔いで來る。卓の上には、僧衣を着た母が、むき出しの儘横になつてゐる。手が胸の上で十字に組まれてゐる。卓の後から牧師が來る。その後に父とアガアテとが從ふ。最後に、袋を持つたアレクサンダア。

左手から人が大勢出て來る。

買い道の中で、葬式の行列がその人々にぶつかる。人々は道を塞つて、拳を固め、勘定書を振り廻す。

人夫が卓を下に置く。

人々。勘定を呉れ。

ある男。麵包の代だ。

ある女。家賃だ。

人々。金だ。

一同、死骸に襲ひかゝる。死骸を引つ掻廻す。

牧師。（呪ふ）愛する教區民よ。

人々。（襤褸を地面の上に投げ出す。死骸が裸になる）

黒い着物を着た男一人。金がなければ、葬式もない。（人夫達、車を置き去りにする）

牧師。（嘆息する。父に向つて手を振る。死骸は寂しく路上に横たはつてゐる）

アレクサンダア。（前へ出る。一同、後へ下がる。自分の體から着物を裂きとつて死骸を蔽ふ）

牧師。（首を振る。去る）

アレクサンダア（死骸を抱き上げる）

人々。（車を擔いで逃げる）

唖達。（立ち上がる。往來の石などける。手で墓を掘る）

アレクサンダア。（死骸を土の中へ置く。人々が總ての窓から覗く。リツシがバルコンへ出て來る）

唖達。（墓の上に土をかける）

新聞賣子。（新聞を持つて、出て來る）人殺しの足がついた。

アレクサンダア。（袋を肩に擔ぐ）

新聞賣子。首は袋の中にある。

アガアテ。（アレクサンダアの前に跪き、その手に接吻する）

給仕人。（ちつとアレクサンダアを見る）

第五場

少女。

搖籃。

坊やは好い子だ。寝んねしな。

青い小さな目をつむれ。

どこも静だ、森のよに。

寝んねん蝿めは追つてやる。

可愛い天のお使が、

寝臺を囲んでは守つてる。

今が一番好い時だ。
あとぢや中々かういかぬ。

第四幕

第一場

倉庫。

寢臺．枕元の小卓の上に蠟燭。うしろに壁。

アガアテ。（着物をぬいで、髮を解く。書翰用の紙をとつて、書く）

聲。あしたは祭だ。

アガアテ。（手紙を摺む。笑ふ。それを寢床へ持つて行く。蠟燭が搖れる）

アガアテ。可愛い人。

戸口に音がする。

聲。靴を脱きます。

アガアテ。（びつくりする。上着をとる。近寄る。笑つて、手紙を唇に押しつける。物思はしげになる。泣く。蠟

燭が揺れる。上著が床へ落ちる)

アガアテ。(眠りに就く。燭が消える。ある景色が現れる。星の空。蠟燭が消える。太陽と月が昇る)

アレクサンダア。(景色の端に立つてゐる)

アガアテ。(腕をひろげる)入らつしやい。

アレクサンダア。(景色の眞ん中を通つて、寢臺の側まで來る)

アガアテ。(手紙を渡す)

アレクサンダア。(寢臺の側に坐る)お泣きでない。

アガアテ。[illegible]行くよ。

木に花が咲く。

アガアテ。風が吹く。

アレクサンダア。(アガアテを撫でる)蝶々。

時計が鳴る。

アレクサンダア。おれの運命が來た。

アガアテ。あたしはあなたに附いて行きます

アレクサンダア。(笑ふ)可愛い奴。(星が一つ日光に輝く景色の中を落ちる)

アレクサンダア。總てが變つた。(アガアテに接吻する。景色が消える。壁が現れる。アレクサンダア、ゐなくなる。蠟燭の火がつく)

アガアテ。(目を覺ます)

聲。起きるのだ。(蠟燭が搖れる)

アガアテ。(寢床から飛び出して、戸棚のところへ駈けて行つて、造花を取り出す。それを胸へ押しつける)春だ。

倉庫が闇くなる。

景色が又現れる。今度は灰色で、普通の景色である。

アレクサンダア。(ベンチの上で目を覺ます。袋を見つける。調べるやうに、袋を見る)

第二場

客間。

リツシが長椅子に橫になつてゐる。醫者が女の足を膝の上に載せてゐる。人形が安樂椅子に腰をかけてゐる。

リツシ。(扇子であふぐ)

醫者。(色靑ざめ、目が凹んでゐる)可愛い人。

リッシ。觸つちや厭。

醫者。（女に指を觸れる）

リッシ。（見て男を顧る）

醫者。（衣兜からモルヒネの注射器を出して、自分に注射をする）

リッシ。（欠伸をする）

醫者。白鼠。

助手。（はひつて來る）

醫者。（口の中へ手を突つ込んで、齒を摑み出す）

リッシ。疲れて來たわ。

助手。第三期だ。

醫者。（人形の上へ身を屈める。黒眼鏡をかける）姙娠だ。

リッシ。癌だ。

醫者。助産だ（衣兜からメスを出して、人形の頭部を切る）

助手。金だ。（注射器を醫者の頭に突き刺す）

醫者。（倒れる）

リツシ。（長椅子から醫者を突き落す）

助手。（醫者の上着に手を突っ込んで、紙幣をひつぱり出す）金鎖だ。

リツシ。（人形を膝の上に取る）

助手。（死骸から髮の毛を引つこ拔いて、その髮の毛を手に持つ）

リツシ。死は死だ。

助手。（死骸を窓から捨てる）

第三場

卓。椅子。

袋が卓の上にのつてゐる。アレクサンダアが椅子に腰かけてゐる。

アレクサンダア（袋を開く）

首。（轉げ出る）

アレクサンダア。（後じさりをする）おれの首だ。

首。おれの體だ。

アレクサンダア。おれは殺されたのか。

首。殺した奴は生きてゐる。

ブレクサングア。あいつはもう許された。」

風一陣。

ブレクサングア。あいつは墓の中にゐる。

首。罪を償へ。

ブレクサンダア。おれがあいつの代りに生きてるのだ。」

龕燈。

燈光の内に、年とつた給仕人、檢察官、巡査。

年とつた給仕人。（アレクサンダアを指さす）人殺し。」

檢察官。（アレクサンダアを捕縛する）

給仕人。（帽子を脱ぐ）報酬を。

檢察官。（首を見つける）首は袋の中にある。

第四場

「陪審裁判所。

左手に判事、裁判長。その前に檢事の坐つてゐる斜卓。奥の方に陪審官達。右手に傍聽席。亭主、客、紳士達、娼婦達、乞食・新聞賣子、女給。手摺の前にアガアテ。その前に證人の腰掛。年とつた給仕人。中央の卓の上に首。その側の椅子にアレクサンダア。

裁判長。（手に袋を持つて）首が證據だ。

判事達。（頷く）

裁判長。被告。

アレクサンダア。（顔を上げる）

裁判長。服罪するか。

叫び聲。人殺し。

アガアテ。いゝえ。

裁判長。靜に。

年とつた給仕人。（指を上げる）誓ひます。」

裁判長。『神ゐます如く眞なり。』

給仕人。アアメン。

裁判長。檢事。

検事。(起立する) 神聖なる判事諸君。

陪審官達。(見上げる)

検事。一人の人間が殺されたのだ。

アレクサンダア。(検事の顔をぢつと見る)

検事。目には目を償へ。

傍聴人。(頭を下げる)

検事。死刑。(坐る)

裁判長。陪審。

アレクサンダア。(黙つてゐる)

裁判長。審議。

(判事、陪審官など、退席する。法廷が空になる。アガアテとアレクサンダアと、二人だけ残る)

アレクサンダア(振向く。アガアテに目をつける)

アガアテ。(笑ふ) あたしはあなたに附いて行きます。

アレクサンダア(何も分からない。額を掴む)

アガアテ。あたしはあなたを愛してゐるのです。

法廷が又一ぱいになる。判検事、陪審官などが歸つて來る。

少女。（傍聽人の中へはひつて來る。仰へてゐる。子供を胸に抱へてゐる）

裁判長。國王の名に於いて。

一同、起立する。

陪審長。有罪だ。

少女。（子供を差し上げて）飢餓だ。

檢察官。（少女を突き出す）

裁判長。死刑を宣告する。

一同、着席する。

アレクサンダア。（立つ）

靜寂。

アレクサンダア。おれが殺されたのだ。

裁判長。冗談を言つてはいかん。

アレクサンダア。（首をとつて、高く差し上げる）これはおれの首だ。

叫喚と哄笑。

叫び聲。聽け。聽け。

アレクサンダア。おれは贖罪する。」

裁判長。公判を終ります。

アレクサンダア。人はみんな人殺しだ。」

　混亂。

叫び聲。癲狂院へ。

第五幕

第一場

　女卜者の家。

　椅子に女卜者。左に少女、右にリッシ。女卜者と向ひ合つた椅子が開くなつてゐる。

女卜者。（骨牌をまぜる）

リッシ。（骨牌を切る）

女卜者。（一方の手に半分宛骨牌をとる。開けて見る）憎みだ。（少女とリッシ、顔を見合ふ）

女卜者。（骨牌をリッシの方へ出す）

リツシ。（骨牌を一枚抜く）
女卜者。（それを明けて見　）誰か来た。
リツシ。（恐怖して、手を上げる）
少女。（ナイフを出す。女卜者が闇くなる）

椅子が明かるくなる。

二人、両方から掴みかゝる。リツシ、ナイフをもぎ取らうとする。女、リツシの胸にナイフを突き刺す。

リツシ、少女を絞め殺す。

椅子が闇くなる。

死の痙攣。

第二場

瘋狂院。

獣の形をした人間達。中央に助手。

狂人達。（徊徊す）
助手。（王座に登る）

聲。（外から）第二十號。

アレクサンダア。（はひつて來る）

助手。（王冠を戴く）

アレクサンダア。（倒れる。四つん這ひになる）

第三場

街路。

カフェエの前に、年とつた給仕人。

新聞賣子。死刑だ。

アレクサンダア。（引き出される）

年とつた給仕人。（驚いて死ぬ）

第四場

監獄。

夜。アレクサンダア、鎖につながれてゐる。奥に椅子。鈍く戸を叩く音。

アガアテ。（蠟燭を持つて、はひつて來る）あたし、あなたを助けに來てよ。（鎖をとつて、自分にかける）

静寂。

戸口が明く。

アレクサンダア。（外へ出て行く）

格子が明かるくなる。

燕尾服の紳士達、被告等の廻りに立つ、裁判長、檢事。

牧師。（出て來る）

アガアテ。（笑ふ、あたりが明くなる。天が現れる。塔から讃美歌）

第五場

墓地。

曙光。

アレクサンダア。（袋を持つて來る）

人殺し。（墓から出て來る）

アレクサンダア（袋を渡す）

人殺し。袋が空になつてゐる。

アレクサンダア。（墓へ行つて、その中へはひる）

太陽が昇る。

人殺し。（兩手をひろげて）　おれは愛す。

『人間』の解說

『朝から夜中まで』の銀行出納係が遍歴なら、『人間』のアレクサンダアは救世主である。

彼は墓の中から出て來て、自分を殺した者の罪を一身に負うて、その罪の償ひを果して、また墓の中へ歸るのである――これは基督である。

人が人を殺す。これは殺す者の罪か、殺される者の罪か。殺す者が殺されるのか、殺される者が殺すか――アレクサンダアは法廷で叫んで言ふ。人はみんな人殺しだ」と。

この戯曲の時代は「今日」である。舞臺は「世界」である。人物は今日の世界の代表者である。社會の抽象である。個性の集合ではない。民衆の蒸溜である。

自分の首のはひつた袋を――自分を殺した者の罪を――擔いて、アレクサンダアは「世界」へ出て行く……(第一幕第一場)

最初に彼の見たものは――また寺院を離れない内に彼の見たものは、恐怖の前に暴露した青年に對

する少女の戀の僞りであつた。（第二場）

カフエエへはひると、もう殺人事件が新聞を通して、給仕人と客との噂にのぼつてゐる。會話の交叉で、人間一人がロオストビイフ一つに比較せられる。しかも、それは三マアクと九十プヘニッヒである。給仕人は行方の知れなかつたアレクサンダアが、ひよつこり又現れて來たのを吃驚する。（第三場）

アレクサンダアは酒場へはひつて、或酒飲みの相手になる。酒飲みは金を持つてゐなかつた。そこで、彼は給仕人になつて、その金の償ひをする。アレクサンダアの人類愛的行爲の第一の現れである。娼婦リツシが現れる。酒飲みが女を侮辱する。女が復讐を誓ふ（第三場）

アレクサンダアが次ぎに現れるのは、賭博倶樂部である。貸元（Bankier）である。私は賭博用語と見て、假にかう譯して置いた。博徒の親分の詞である。併し、或は普通の用ひ方で、銀行員の意味であるかも知れぬ。がアレクサンダアに金を吳れる。そこで、彼も賭博の卓につく。初め「十三」といふ數で、貸元が勝つ。けれども、それからあとは立て續けにアレクサンダアが勝つ。いつも「十三」といふ數で勝つのである。氣味惡く「十三」といふ數ばかりが續くのである。貸元が終に破產して、ピストル自殺をする。他の紳士達もみんな無一文になる。紳士達が自暴になつて卓を覆すと、貸元に自殺を見た覿面の人達が、紙幣を摑つて、みんなアレクサンダアの衣兜へ押し込んでしまふ。アレ

クサンダアは、なんにも言はずに出て行つてしまふ。覆面團は倶樂部を脅迫して、紳士達から手形を卷き上げる。（私が假に「賭博場の首領」と譯して置いた Präsident は、後の法廷で「裁判長」に當る人と同一人物である。これは是非同じ譯語を使はなければならないのだが、いまだに妥當な詞が思ひ浮ばないので、暫くこの儘にして置く。假に「賭博場の助手」と譯して置いた人物も、原語は唯 Helfer とあるだけで、實は何の助手だか分からないのである）（第四場）

一日が過ぎた。明くる朝である。アレクサンダアは前のカフェエで、給仕人として働いてゐる。例の酒飲みが、金もないのに、平氣で飲んでゐる。近所の工場から職工達がはひつて來る。一緒に酒を飲みながらストライクを叫ぶ。酒の瓶が六本空になる。アレクサンダアと飲んだ時と同じ數である。勿論、酒飲みはその金を拂ふ事が出來ない。そこで、アレクサンダアがふと思ひついて、ゆうべ賭博場で衣兜に詰め込まれた金を、みんなそこへ出してしまふ。そして「それは君のだ」と言ふ。アレクサンダアは個人の所有權を認めないのである。

ところが、その結果はどうなつたらう。職工達はその金を奪はうとする。酒飲みはそれを取られまいとする。摑み合ひになつて、酒飲みが頭を割られる。工場の汽笛が鳴るので、職工達は目的を果さないで、出て行く。（第五場）

酒飲みの住む地下室である。酒飲みは頭に繃帶をしてゐる。酒飲みが金の事を考へてゐると、例の

助手がはひつて來て、もう世界に戰爭のなくなつた事や社會の共產組織になつた事などを說いて、手形を書かせる。酒飮みがハンケチを落す。助手は身を屈めてそのハンケチを拾ふと、いきなりそれで酒飮みの咽喉を絞める――酒飮みの持つてゐる金を奪はうとするのである。

三人の娼婦がどやどやはひつて來るので、助手は驚いて窓から飛び出してしまふ。酒飮みはアレクサンダアから貰つた金で、これらの娼婦から「金持の宮樣」と呼ばれてゐるのである。だが、もうその「金持の宮樣」も蟲の息である。（第二幕第一場）

地下室の上の部屋には、例の戀する青年と少女が住んでゐる。少女は或豫感に恐怖してゐる。地下室で椅子が倒れる音がする。酒飮みが死んだのである。階下へ驅け降りた青年は、やがて金を掴んで歸つて來る。金錢を得た青年は窓を開いて、廣い世界の生活を生きようとする。少女は青年の心が自分を離れて行くのを感ずる。（第二場）

女卜者の室である。青年と少女が各自の運命の豫知を求めてゐた。女卜者が骨牌を讀む――青年と少女の間に、一人の女がはひつて來る。青年がそれに心を奪はれる。その結果は涙だ……

妖婦リッシが現れて、少女の隣の明いた椅子に腰をかける。誰も氣づかない。

女卜者が「死だ」と叫ぶ時、青年とリッシが目を見合ふ。豫言はもう行はれ始めたのである。（第三場）

醫者の家の應接間である。青年がはひつて來る青年はもうリツシから病を獲たのである。醫者が出て來て、青年の血を取る。青年は目の前の壁を見詰めて、その壁に舟や子供や城などの幻影を見る……黴毒だといふ醫者の診斷を聞いて、青年が昏倒する。青年は左手の小部屋へ運ばれて、長椅子の上に寢かされる。

今度は、少女がはひつて來る。少女は青年の種を宿してゐるのである。そして、醫者に胎兒の始末をして呉れと賴むのである。

醫者は少女の美しいのを見て、少女の苦しい境遇を利用しようとする。少女は無理強ひに右手の小部屋へ運ばれる。燈が消される。

左の小部屋で息を吹き返した、青年はなんにも知らずに落日に向つて腕をひろげる。そして「朝日だ。」と叫ぶ。

醫者に凌辱せられた少女は、髪の毛を振り亂して、右手の小部屋から逃げて來る。解剖刀で血管を切る。死を決したのである。

そこへ、暫く顏を見せなかつたアレクサンダアが袋を擔いで現はれる。そして、少女と青年を救ひ出す――青年はもう骸骨になつてゐるのである。（第四場）

アレクサンダアが、青年と少女を連れて、或るオペラの棧敷へ來てゐる。少女が胎兒の蠢動を感ず

る。青年は永遠の近づくのを感ずる……

隣の棲敷へ醫者がはひつて來て、青年に診察料の十マアクを請求する。青年が醫者に紙幣を投げつける。リツシが醫者の棲敷へはひつて來て、紙幣を盜む。今度は醫者がリツシに迷はされてゐるのである。

激しく喇叭の音が響くと、青年が棲敷から轉げ落ちる。アレクサンダアが「復活だ」と呼ぶ。（第五場）

街路である。正面の奥に窓のある家がある。中段にバルコンがあつて、下がカフェエになつてゐる。バルコンのあるところは醫者と娼婦リツシの住居で、下のカフェエには例の年とつた給仕人が勤めてゐる。

廣告塔がある。それに赤いポスタアがはつてある。ポスタアには何の外題か知らぬが「殺人犯」と大きく書いてある。廣告塔に向つて、乞食が一人坐つてゐる。乞食は手風琴で、前のオペラで聞いた曲を彈いてゐる。

例の助手が右手の卓についてゐる。醫者が奥の家から出て來て、助手の隣に腰をかける。

アレクサンダアが鞄を抱いて出て來て、ポスタアを見上げて、それから左手の卓に腰をかける。

啞が四五人出て來て、中央の卓を圍む。

そこへアガアテといふ十四になる娘がマッチを賣りに來る。助手が追ひのける。醫者が笑ふ。ところが、晴達が金をやる。アレクサンダアがアガアテを憐んで抱く。

アガアテが自分達は食べられないと言ふと、醫者が紙幣を出して、「おれ達は財産を持つてゐる。」と言ふ。賭博場でアレクサンダアの衣兜に突つ込まれた紙幣である　それが酒飲みの手へ渡つて青年の手を經て　醫者の顔へ投げつけられたのである。

助手は透かさず手形を出して　多分、例の酒飲みに書かせた手形である　買つて貰れますか。」と言ふ。醫者は紙幣を衣兜へ突つ込んで、「もうお產の時間だ。」と言つて立ち上がる。醫者が去ると、助手があとを追ふ。

アガアテは家に病氣で寢てゐる母を思ひ出して、アレクサンダアに一緒に來て呉れと賴む。（第三幕第一場）

アガアテの住む屋根裏部屋である。アガアテの母が死にかけてゐる、母は臨終の幻覺で、遠く旅にでも行くつもりでゐる。アレクサンダアは、母の命令する通りに動く。まるで息子のやうである。母が息を引き取ると、突然アガアテの父がアレクサンダアに向つて叫ぶ　「お前は誰だ。」すると、アレクサンダアが答へる　「おれはおれを探してゐるのだ。」（第二場）

例の醫者が管理してゐる病院である。嘗て酒飲み の家で見た三人の娼婦（テアとヘルタとレナ）

がみんな姙娠で入院してゐる。

　然々産の近づいた少女が、蹌踉としてはひつて來る。醫者の顏を見ると、思はず怒りを發して「けだもの！」と叫ぶ。醫者は構はずクロロフォルムのマスクを冠せて、少女を魔醉に陷れると、運搬車で手術室へ運び入れる。やがて、手術室で鉗子か何かの床の上に落ちる音がする。醫者が出て來て、血だらけの手を洗ふ。（第三場）

　再び、以前の街路である。カフェエの中央の卓には、まだ啞達が坐つてゐる。乞食も相變らず手風琴を彈いてゐる。

　アガアテの母の葬式の行列が出て來る。死骸はむき出しの儘、屋根裏部屋にあつた卓の上に載せられて來るのである父とアガアテが附いて來る。そのあとから、アレクサンダアが例の袋を擔いで附いて來る。

　突然、借金取が大勢出て來て、葬列の道を遮ぎる「家賃を拂へ。」と叫び、「麵包の代を拂へ。」と罵りながら、死骸に襲ひかかつて、終に死人を裸にしてしまふ。

　アレクサンダアは自分の着物を脫いて、死骸を包み、そして、死骸を抱き上げる。啞達が往來に墓を掘つて、アガアテの母を埋める。アガアテが、アレキサンダアの前に跪いて、その手に接吻する。

　背嚢賣子が出て來て、「さあ、さあ、人殺しの足がついた――　首は袋の中にある。」と叫ぶ。（第四場）

既に子を生んだ少女が、搖籠をゆすりながら、氣味の惡い子守歌を唄つてゐる――「……今が一番好い時だ。あとぢや中々からいかぬ。」と。（第五場）

アガアテがアレクサンダアに對して、戀を感じ始める。アレクサンダアが、それを夢に見る。併し、目が覺めると直ぐ又彼は自分の背負つてゐる袋のことを思ひ出す。贖罪と戀との交錯。（第四幕第一場）

醫者の家の客間である。醫者の肉體はリツシの爲にもう崩れかけてゐる。自分で自分にモルヒネの注射をする。歯がこぼれ落ちる。リツシは醫者を足蹴にする程嫌つてゐる。

また助手がはひつて來る。いきなり注射器を醫者の頭に突き刺す。醫者の衣兜から紙幣を奪ひ取る。そして、死骸を窓から捨てる。（第二場）

アレクサンダアが袋の中から首を出して、その首と話をする。アレクサンダアが「お前はおれの首だ」と言ふと、首が「お前はおれの體だ。」と言ふ、首が「殺した奴は生きてゐる。」と言ふと、アレクサンダアが「あいつはもう許された。おれがあいつの代りに生きてるのだ。」と言ふ。

途端に、例の年とつた給仕人が巡査を連れて來る。アレクサンダアが捕縛される。（第三場）

陪審裁判所である。今まで現れた人物が、殆んど總て出てゐる――カフエの主人、賭博倶樂部の紳士達、三人の娼婦、乞食、新聞賣子、オペラの女給、アガアテ。證人として老給仕人。被告として

アレクサンダア。

持つて歩いてゐる首が證據である。アレクサンダアは簡單に死刑を宣告される。アレクサンダアは「おれが殺されたのだ。これはおれの首だ。」と言ふ。傍聽席に哄笑が起る。「だが、おれは贖罪する。」と言つて、アレクサンダアは潔く刑を受ける。みんな。アレクサンダアを狂人だと思ふ。（第四場）

貧げな卜者の家である。子供を抱へて飢餓に襲はれてゐる少女と、少女を不幸にした最初の敵であるリツシとが同時に來てゐる。

リツシが最初に切つた骨牌は「憎悪」を豫言する。つぎにリツシが一枚抜いた骨牌は或者の死に來てゐる事を告げる。途端に、少女がナイフを抜いて、リツシを刺す。リツシは少女を絞め殺す。（第五幕第一場）

瘋狂院である。入院患者は悉く獸の形をし、徘徊してゐる。金錢の奴隷であつた例の助手が王座に着いてゐる。アレクサンダアがはひつて來て、助手の前に伺候する。（第二場）

前の街路である。いつの間にかそこへ來てゐたアレクサンダアが監獄へ連れて行かれる。密告者の若給仕人が自ら縊れて死ぬ。（第三場）

アレクサンダアが監獄で鎖につながれてゐる。アカァテがそつとはひつて來て、アレクサンダアの鎖を解く。そして自分自身を縛る。

絞首臺の廻りに裁判長や檢事達の立つてゐるのが見える。マガアテが笑ふ。天國が現れて、塔の上から讃美歌が聞こえて來る。ファウスト第一部の最後の場面である。救ひと淨めの完成である。（第四場）

長い旅を終へてアレクサンダアが又自分の墓へ歸つて來る。袋の中にはもう首がない。罪は償はれたのである。

人殺しが兩手をひろげて、「おれは愛す。」と叫ぶ。太陽が昇る。（第五場）

この戯曲が行爲の戯曲であつて、言語の戯曲でないことは、本文を一目見れば、誰にも分かることである。「戯曲は行爲なり」といふ定義が若し眞なら、この戯曲は實に戯曲の頂點を盡したものである。この戯曲に於いては、「ト」書が臺詞より大きな字で組まれなければならないのである。

作者ハアゼンクレエフエルは現今の獨逸で最も能辯な詩人の一人である。彼は自分の詩集の一つに、「政治的詩人」といふ題をつけてゐる。或寫眞は彼が演壇に立つて熱辯を振つてゐるところを見せてゐる。彼の最初の戯曲『息子』は獨白的にも、對話的にも能辯過ぎる程能辯である。

それ程能辯な詩人が、なぜこの戯曲では、こんなに言語を儉約したのであらうか。多くは唯一語の名詞が動詞である。長くても、助動詞を合せて、三四語を出ないのが多い。例外は唯女卜者の四行の

踊子と少女の子守歌とのみである。作者は徒に奇を好んだのであらうか。

私はさうは思はない。作者の創作動機が必然的にこの戯曲にこの形式を取らせたのである。作者は永遠の問題を永遠の詞のみで書かうとしたのである。永遠の詞に「冗漫」は許されない。許されるのは唯「要約」のみである。賭博者は「銀行」と叫ぶ。職工が「ストライク。」と言ふ。娼婦が「薔薇色絹」と言ふ。裁判官が「死刑。」と言ふ「金貨」といふ詞、「資本」といふ詞、「奴隷」といふ詞、悉くこれ原始語「Urlaut」である。憎悪する者が手を擧げて、「愛する。」と言ふ。疑ふ者が、「おれは誰だ。」と言ふ。求める者が、「おれはおれを求めてゐるのだ。」と言ふ。萬人の罪を負うた者が、「おれは贖罪する。」と言ふ。悉くこれ永遠の詞である。

戯曲『人間』は永遠の詞を持つた書き物である。Bilderserie である。場景の急速な變化は表現派詩人の特色ではあるが、この戯曲の作者にあつては、殊にそれが著しい。『人間』の前に『アンチゴオネ』がある。併し、『アンチゴオネ』にはまだ人間の詞らしい詞が澤山にある。だが、「民衆」の詞に希臘のコオラスを乗り越えた永遠の詞が既に讀まれる。『人間』の後に出た『黒死病』に至つては、もう詞が全然ない。Ein Film である。映畫劇の臺本である。ベルンハルト、デエボルトがハアゼンクレエフエルの爲に「映畫劇への道程」Weg zum Kino を説いたのも決して偶然ではない。

戯曲『人間』が吾人に展開する世界は、實に血腥い世界である。先づ最初に鳴り響くモチイフが人

間の首である。酒飲みが金を持つてゐる爲に殺される。アガアテの母は金がない爲に病死する。醫者も金の爲に注射器で頭を刺される。青年は金を得た爲に黴毒で身を滅ぼす。リツシと少女は借金の爲に殺し合ふ。老給仕人は金が欲しさに罪人ならぬ罪人を密告して自ら縊れ死ぬ——いづれも金錢の爲である。金錢の爲に總てが殺し合ふのである。併し、これが世界である。實際、世界はこれなのである。誰がそれを否定出來よう。

では、この世界に救ひはないのだらうか。作者ハアゼンクレエフエルは自らそれを救はうとするのである。それが偉大な名の持主アレクサンダアである。萬人の罪の賠償者である。

だが、アレクサンダアは既に現世の人ではない。そこでアレクサンダアの贖罪を更に現世で擔はうとする者が現れて來る。それが少女アガアテである。アガアテは超グレエトヒェンである，超マリア・マグダレナである。作者は正しくアガアテを求めてゐるのである。仰望してゐるのである。憬慕してゐるのである。

皇帝とガリラア人（二部十幕）

第一部　皇帝の背教――五幕の劇曲

人物

皇帝コンスタンチオス
皇后エセビア
ヘレナ　皇妹
ガロス　皇帝の従弟
ユリアン　ガロスの異母弟
メムノン　エチオピヤ人、皇帝に従ふ奴隷
ポタモン　金工
フオキオン　染工
ユナピオス　理髪師

木の實賣
衛兵の隊長
兵　士
化粧した女
中風を病む男
盲の乞食
アガトン　カパトキヤから來た葡萄園主の息子
リバニオス　哲學者
ナジアンツのグレゴリ
カイザリアのバシリオス
ペルシヤのサルスト　律法者
ヘケボリオス　神學者
マクシモス　密教信者
ユテリオス　ユリアンの侍從
レオンテス　出納官

ミ　ラ　女奴隷

デセンチウス　保民官

シンツラ　主馬頭

フロレンチウス ⎫
セベルス ⎭ 將　軍

オリバゼス　侍　醫

ライプソ ⎫
ワルロ ⎭ 副司令官

マウロス　旗　手

兵士達、寺へ參詣する人、異教徒の見物人、近臣、僧侶、學生、舞姫、召使、出納官の從者、ガリヤの兵士達。

幻影及聲。

第一幕はコンスタンチノペル、第二幕はアテネ、第三幕はエペソ、第四幕はルテチヤ、第五幕はガリヤのヰンナにて。劇は西暦三百五十一年より三百六十一年に亙る。

第一幕

コンスタンチノペルに於ける復活祭の夜。舞臺は、宮城に近き或廣場、樹木、叢、壞れたる彫像などあり。正面奥に、宮廷の寺院が煌々と燈をつけてゐる。右手に欄干、そこから階段を降りると水際へ出られる、松の木と糸杉の間からボスポラスの海峽やアジヤの海岸が見える――禮拜式が行はれてゐる。寺院の階段に皇帝の衛兵達が立つてゐる。信徒の大衆が寺院の中へ流れ入る。乞食、跛者、盲人などが入口の所にゐる。異教徒の見物人、木の實賣、水を賣る商人などが舞臺を一杯にする。

讃美歌（寺院の中で）

とこしなへに
十字架をほめただへまつれ。
くちなはは
いと深き谷に、ひそみて
仔羊は、世に勝てり
地に光來りぬ

金工ポタモン。（左手から、提灯を下げて出て來る。一人の兵士の肩を叩いて、呼ばれる）おい、君――皇帝の

お出では何時だ。

兵士。知らん。

染工フォキオン。（群集の中で顔を振向ける）皇帝だと。今確かに誰か皇帝のことを尋ねたな。皇帝は眞夜中のちよつと前にいらつしやるのだ――十二時ちよつと前に。おれはメムノンからぢかに聞いたのだ。

理髪師ユナピオス。（急いで駈けて來て、木の實賣を衝きのける）邪魔だ、異教徒め。

木の實賣。檀那、どうぞおしづかに。

ボタモン。静かにしろ、豚め。

ユナピオス。犬め、犬め。

フォキオン。こいつ、ちやんとした身なりをした基督教徒に向つて――皇帝御自身と同じ信仰を持つてゐる人間に向つて、口答をしをるな。

ユナピオス。（木の實賣を地上へ投げ倒して）泥を食へ。

ボタモン。さうだ。そこで、手前の神々様のやうに、匍ひ廻るんだ。

フォキオン。（拳で打つ）さあ、かうだぞ――かうだぞ――かうだぞ。

ユナピオス。（足で蹴る）それから、かうだ。も一つかうだ。神様に呪はれた貴様の皮を剝してやるん

だぞ。

木の實賣逃げ去る。

フオキオン。（わざと衛兵の隊長の耳にはひるやうに）誰かこの始末を皇帝のお耳に入れてくれるといいのだがなあ。皇帝は、近頃おれ達基督教徒の市民が分け隔てなく異教徒とつき合つてゐるのを不快に思つていらつしやるのだ――

ポタモン。お前はあの市場の張り出しのことを言つてゐるのか。あれならおれも讀んだ。そして、おれはかう思つた。世の中には本當の金もあれば贋物の金もある――

ユナピオス。一つ鋏で、誰の髮の毛でも剪るといふ法はない――これがおれの考へ方だ。だが、有難いことに、まだおれ達の中には燃えるやうな信仰がある。

フオキオン。いや、おれ達の信仰はもう隨分長い間冷たくなつてゐた。まあ、見ろ。神をあざける奴等があの通り平氣で首を上げてゐる樣子を。それともお前はこのくだらない奴等の内に十字架のしるしか魚のしるしを腕につけてゐる奴が、澤山ゐるとでも思つてゐるのか。

ポタモン。なんのさう思ふものか――それだのに、こいつらはこの皇帝の禮拜堂の前に雜沓して――

フオキオン。――こんな神聖な晩に

ユナピオス――本當の信者の邪魔をしやあがるのだ――

化粧をした女。(群集に揉まれながら)ドナチストは本當の信者かい。

フオキオン。なに。ドナチストだと。お前はドナチストか。

ユナピオス　だつたら、どうだと言ふのだ。お前だつて、その一人ぢやないか。

フオキオン。おれが。おれがだと。稲妻がお前の舌を爛らすが好い。

ポタモン。(十字を切つて)　疫病にとりつかれるが好い——

フオキオン。ドナチストだと。この腐れ肉め。この腐れ材木め。

ポタモン。さうだ。さうだ。

フオキオン。地獄の餌食め。

ポタモン。さうだ。もつとやれ、もつとやれ、兄弟。

フオキオン。(拳にて突きのけて)黙つてろ——引つ込んでろ。離れてろ。貴様の素性がやつと今わかつたぞ　貴様、亞歴山府教徒のポタモンだな。

ユナピオス。亞歴山府教徒だと。鼻持のならねえ邪宗徒だらう。臭え、うう臭え。

ポタモン。(棍棒で相手の頭を叩いて)や。貴様はアンチオケの薬物屋フオキオンだな。カイニトめ。

ユナピオス。ああ、おれは邪徒と同類になつてゐたのだ。

フオキオン。ああ、おれは悪魔の息子の味方をしてゐたのだ。

ユナピオス。（フオキオンの耳の後を一撃して）これがその禮だぞ。

フオキオン。（打ち返して）恥知らずの犬め。

ボタモン。呪はれてをれ、二人とも。

全般に亙る爭鬪。見物人の中に嘲罵哄笑。

衞兵の隊長。（兵士を呼ぶ）皇帝のお出ましだ。（爭ふ者引きわけられ、他の信者と共に禮拜堂の中へ連れ込まれる）

讃　美　歌（祭壇から）

くちなはは
いと深き谷にひそみて
仔羊は世に勝てり
地に光來りぬ

鹵簿の長い列が左手から來る。先頭に香爐を持つた僧。護衛兵、炬火持、近臣、侍從、これに續く。中程に、皇帝コンスタンチオス。容貌の立派な人、三十四歳、鬚なし、黄色の捲毛。その眼に暗き兇惡の表情を示し、その足どり並に總ての態度は不安と虚弱とを暴露してゐる。彼の左手に、皇后ユセビア、青白いほつそりした女、皇帝と同年配。二人の後にユリアンが續く。まだ成熟し切れない十九歳の青年。黒髮、疎な鬚、激しく

鋭く青色の大きい眼。宮廷服が身についてゐない。その態度はぎごちなく、愛嬌があり、粗野である。續いて、皇妹ヘレナ、二十五歳の熟し切つた美人、それをとりまく老若の婦人。近臣と護衛兵が行列の殿を勤めてゐる。皇帝の奴隷で、立派な体格をしたエチオピア人メムノンが、美々しく着飾つて、行列の中にゐる。

コンスタンチオス。（突然立止つて、ユリアンの方を振返り、語氣鋭く尋ねる）ガロスはどこにゐる。

ユリアン。（蒼くなつて）ガロス。ガロスに何の用があるのです。

コンスタンチオス。それ、わしはお身をつかまへたぞ。

ユリアン。陛下――

皇后ユセビア。（皇帝の手を捉へて）參りませう――參りませう。

コンスタンチオス。良心の叫びだ。お身達二人は何をたくらんでゐるのだ。

ユリアン。わたし達が。

コンスタンチオス。お身とあれとだ。

ユセビア。さあ、參りませう、參りませう、コンスタンチオス。

コンスタンチオス。何といふ後暗い行ひだ。神託は何と答へた。

ユリアン。神託ですと。私の尊き救ひ主の御名にかけて

コンスタンチオス。お身を中傷するものがあれば、その者は、火あぶりにせられて、その償ひをしな

ければならぬ。（ユリアンをわきへ連れて行つて）ユリアン、二人は離れまい。忠實な從弟よ、二人は飽くまで一緒に行かう。

ユリアン　あらゆるものがあなたのお手の内にあるのです。愛する陛下よ。

コンスタンチオス。わしの手の内に――

ユリアン。おう、そのお手を伸ばして、わたし達の上にお惠みをお垂れ下さい。

コンスタンチオス。わしの手の内に。わしの手のことを、お身はどう思つてゐた。

ユリアン。（皇帝の兩手を掴んで、これに接吻し）陛下のお手は白くて冷たい。

コンスタンチオス。外に爲方がないではないか。お身はどう思つてゐたのだ。それ、又わしはお身をつかまへたぞ。

ユリアン。（もう一度皇帝の手に接吻して）陛下のお手は、この月夜に輝く、薔薇の花びらのやうです。

コンスタンチオス。さう、さう、さう。

ユセビア。參りませう――もう時刻でございます。

コンスタンチオス。主のみ前に出ねばならんか。このわしが、このわしが。おう、わしの爲に禱つてくれ、ユリアン。聖い酒がわしに注がれるだらう。ああ、ありありと見える。酒が黄金の盞の中で、蛇の眼のやうに輝いてゐる――（叫ぶ）おう、あの殘忍な眼、――おう、イエス、クリストよ、

わしの爲に禱つてくれ。
ユセビア。陛下は御氣分が惡いのだ。侍醫を、侍醫を——侍醫を呼んでおいで。」
ヘレナ。セザリオスは何處にゐる。侍醫を、侍醫を——侍醫を呼んでおいで。
ユセビア。（目くばせして）メムノン、メムノン。（奴隸と小聲に語る）
ユリアン。（小聲に）陛下、お慈悲です。わたしを遠くへやつて下さい。
コンスタンチオス。どこへ行きたいと言ふのだ。
ユリアン。エジプトへ。若し、お許しが出れば、わたしはどこよりもあすこへ行きたいのです。澤山の人が、あすこへ參ります——あの大きな寂寞の中へ。
コンスタンチオス。寂寞の中へ。成程。寂寞の中で、人は冥想する。わしはお身に冥想を禁ずる。
ユリアン。行かして下されば、決して冥想などはいたしません——ここにゐると、わたしの魂の苦痛は、日に日に募るばかりです。惡念が、わたしを十重二十重に取卷くのです。九日の間、わたしは馬の毛で出來た肌着を身につけてをりました。——それでも防ぐことが出來ませんでした。九日の晩も續けて、わたしは、自分で自分を笞ちました——けれども、妄念を追ひ出すことが出來ませんでした。
コンスタンチオス。しつかりしてゐなくてはならん。ユリアン。惡魔は、吾々の總ての内に活動して

ゐる。ヘケボリオスに話して見るが好い——

奴隷メムノン。(皇帝に)もう時刻でございます。

コンスタンチオス。いや、いや、わしは——

メムノン。(皇帝の手首を摑んで)お出でなさいませ、陛下——さあ、お出でなさいませ。

コンスタンチオス。(威儀を正して、靜に)では、主の住み給ふところへ。

メムノン。(低く)他の御用は後刻また

コンスタンチオス。(ユリアンに)わしはガロスに會はなければならん。

ユリアン、皇帝の後で、皇后に向ひ、嘆願するやうに手を合せる。

ユセビア。(口速に低く)心配することはありません。

コンスタンチオス。外に待つてをれ。そのやうな悪念を持つて寺の中へはひつてはならん。お寺が祭壇の前で祈れば、わしの身に禍が來る——そのやうな罪を犯してはならん、愛する從弟よ。

行列、寺院の方へ進む。階段の上で、乞食、跛者、盲人等、皇帝を取卷く。

中風を病む男。この世をお治めなさる一番偉いお方樣、お召物の裾に觸はらせて下さりませ。手前の病が癒りますやうに。

盲人。手前の爲にお祈り下さいませ、主に油灌がれしお方樣、手前の眼がもう一度あきますやうに。

コンスタンチオス。元氣を出せ、我が子よ。メムノン、みんなに銀貨を撒いてやれ。さあ、はひらう、はひらう。

商隊が寺の中へはひる。扉が閉される。群集がだんだんに散る。ユリアンひとり並木路に殘る。

ユリアン。（寺の方を見て）ガロスに何の用があるのだらう。この神聖な晩にも、あの人はまた氣がつかないでゐる——いや、誰にも分かることではない——（振向いて、歸らうとしてゐる盲目人に突き當る）氣をつけ給へ。

盲人。手前は盲でございます、檀那樣。

ユリアン。やつぱりさうか。本當に、お前にはあすこに輝いてゐる星が見えないのか。信仰の薄い男だ。神に油を灌がれた者は、お前の眼の爲に祈つてやらうと約束をしたではないか。

盲人。目の見えない兄弟を助けるお前さんは誰だ。

ユリアン。空想と盲目の兄弟だ。（ユリアン、行かうとする）

聲。（うしろの茂みから小聲に）ユリアン、ユリアン。

ユリアン。（叫ぶ）ええ。

聲。（低音で）ユリアン。

ユリアン。退かれ、退かれ——おれは武器を持つてゐるぞ。あぶないぞ。

若い男。（粗末なる身なりにて、杖を持ち、樹の間から現はれる）しつ。わたしです。

ユリアン。動くな。側へ寄るな。

若い男。あなたはアガトンをお忘れになつたのですか

ユリアン　アガトン。何を言ふ。アガトンはまだ子供だつた

アガトン　六年前にはわたしは直ぐとあなたが分かりました。（近寄る）

ユリアン。アガトン――聖十字にかけて、お前は本當にアガトンか。

アガトン。わたしを御覽下さい――よく御覽下さい

ユリアン。（抱いて接吻する）おう、わたしの幼馴染。わたしの竹馬の友。あの時分の友達の中で、一番わたしが好きだつたのはお前だ。そのお前がここにゐるのか。何といふ驚異だ。お前は、あの遠い道を、山を越え海を渡つてやつて來たのだね――カパドキヤからの長い道を。

アガトン、わたしは二日前に著きました――エペソから船で來たのです。わたしは二日の間、あなたを探しました。だが、むだでした。衞兵がお城の門に立つてゐて、わたしを入れてくれないのです。それで――

ユリアン。誰かに、わたしの名を言はなかつたのか。わたしを探してゐるのだとは言はなかつたのか。

アガトン。いいえ、そんなことは言ひませんでした。なぜと言へば――

ユリアン。いや、それで好いのだ。どうしても必要なことの外、誰にもなんにも言はん方が好いのだ
――ここへ來るが好い、アガトン――この月の光の十分當つてゐるところへ。さうすれば、お前を
見ることが出來る。――お前だ、やつぱりお前だ。大きくなつたな、アガトン――如何にも强さう
になつたな。

アガトン　さうして、あなたは以前よりお顏の色が惡くおなりです。

ユリアン。わたしは宮中の空氣がたまらないのだ。ここは不健康極まるところだ。――マケロンとは
まるで違ふのだ。マケロンは高いところにある。カパドキヤの中でも、あんな高いところにある町
はない。ああ、あのタウロスから吹いて來る風の新鮮だつたことは！　お前、疲れてゐるのでは
ないか、アガトン。

アガトン。いいえ、決して。

ユリアン。然うではないか。ここは靜かで寂しい。もつと側へ身をよせて。さうだ。（暫くの間の眼
で無言にアガトンを見守る）「カパドキヤより何のよきもの來らざらむ」といふことがあるね。ああ、
來るとも、――友達が來るのだ。これよりよきもの此世の中にあらうか。（長い間、アガトンを見詰め
る）どうして、すぐお前が分からなかつたのだらう。愛するお前よ、子供の時と何が違ふのだらう。

アガトン。（突然前に跪いて）わたしは、以前のやうにあなたの足もとにひれ伏します。

ユリアン。いけない、いけない、いけない——

アガトン。どうぞ跪かせて下さい。

ユリアン。いや、アガトン、わたしの前に跪くのは罪悪だ、傲慢だ。どんなにわたしが罪の深い人間になつたか、それをお前が知れば。わたしの愛する先生ヘケボリオスは、私の為にひどく悲んでゐる。あの人に聞いて見るが好い——それに、お前の髪の毛は大層濃くなつて艶が出て来たね——だがマルドニオスは——あの先生はどうしたらう。もう白毛になつたらうね。

アガトン。すつかり白くおなりになりました。

ユリアン。マルドニオス先生は、ホオマアの講釋が實にうまかつた。ホオマアの講義で當代先生に及ぶものがあらうとは思はれない。英雄が英雄と闘ふ——神々が双方を激勵する。實に目に見るやうだつた。

アガトン。あの時分、あなたの理想は武運赫々たる偉大な軍人になることでした。

ユリアン。カパドキヤで送つたあの六年は、幸福な時代だつた。あの時分の月日は、今よりも長かつた。あの時代にあつた總ての事を考へると、どうもさう思はれる——さうだ、あれは幸福な時代だつた。わたし達は書物を讀んだ。ガロスはペルシヤ馬を乗り廻した。雲の影のやうに、ガロスは野原を疾驅した——それはさうと、訊きたいことが一つある……あの寺はどうした。

アガトン。寺ですと。あの聖ママスの墓の上の寺ですか。

ユリアン。（嘲に笑つて）ガロスとわたしとで建てた奴だ。ガロスは側堂まで造り上げたが、わたしは――私の方はどうしてもうまく行かなかつた――あれから後どうなつたらう。

アガトン。どうにもなりませんでした。大工達の詞に依ると、あの設計では不可能だと言ふのです。

ユリアン。（瞑想深げに）さうだらう、さうだらう。あの人達に手腕がないと思つたのは、わたしが悪かつたのだ。今になつてわたしはなぜあれが不可能だつたかが分かつた。アガトン、お前にはそれが言ひたい――ママスは偽の聖者だつたのだ。

アガトン。あの聖ママスが。

ユリアン。あのママスは決して殉教者ではなかつたのだ。彼に關する總ての傳説は、奇怪な妄想に過ぎなかつたのだ。ヘケボリオス先生はあの驚くべき博學を以て、正しい事實を探り當てたのだ。そして、わたしも最近に、この問題に關する小さい論文を書いた。私のアガトンよ。實に不思議なこと乍ら、二三の哲學者が、それを講堂で讀めたといふ話だ――主よ、わたしの心を虚榮からお護り下さい――鄙賤な讀者は數知れぬ好意を持つてゐる。それは誰にも分からない――だが、ガロスが成功して、わたしが成功しなかつたことだけは確だ。ああ、アガトン、あの寺の建築のことを思ふと、わたしはカインの祭壇を見るやうな氣がする。

アガトン。ユリアン。

ユリアン。神はわたしのことなどは何とも思つて下さらないのだ。

アガトン。そんなことを仰しやつてはなりません。異端の暗黒からわたしを救ひ出して、その後のわたしの生涯に光明を與へて下すつたあなたの内に、神が強く生きてゐなかつた道理はありません。——しかも、あの當時あなたはまだほんの子供だつたのです。

ユリアン。ああ、總てはまるで夢のやうだ。

アガトン。しかも、それは祝福せられた眞實なのです。

ユリアン。（悲しげに）今があの時のやうであつたらなあ。わたしは始の詞をどこで見つけたか。空には讃美歌があつた　天と地との間には囁きが——（前を凝視して）見たか。

アガトン。何をです。

ユリアン。星の落ちるのを——あの二本の糸杉のうしろへ。（一瞬間、沈黙する。やがて、急に調子を變へて）——わたしの母が、わたしを産む前の晩にどんな夢を見たか、お前に話したことがあつたか。

アガトン。私記憶がありません。

ユリアン。さうだ、さうだ、　あれはわたし達が別れてから聞いた話だ。

アガトン。どんな夢を御覧になつたのです。

ユリアン。アキレスを見る夢を見たのだ。

アガトン。（熱心に）あなたは相變らず夢をお信じになるのですか。

ユリアン。なぜ、そんなことを訊くのだ。

アガトン。申し上げませう、わたしが海を越えてやつて參つたのも、實はその爲なのです。

ユリアン。何か特別な用事でもあつて來たのか。訊くのをすつかり忘れてゐた。

アガトン。不思議な用事なのです――あまり不思議なことなので、わたしは疑惑と不安に惱まされてゐるのです。第一にわたしは澤山のことが知りたいのです――この町の生活について――あなた御自身のことについて――それから、皇帝のことについて――

ユリアン。（輕く相手を見つめ）本當のことを言つてくれ、アガトン――わたしに會ふ前に、お前は誰と會つた。

アガトン。誰にも會ひません。

ユリアン。着いたのはいつだ。

アガトン。もう申し上げました――二日前です。

ユリアン。それだのに、もうお前は知りたいと言ふのか――皇帝について何が知りたいと言ふのだ。誰かに賴まれたのか――（アガトンを抱いて）話してくれ、アガトン。

アガトン。何をです。なぜです。

ユリアン。（立ち上がつて、耳を澄ます）しつ――いや、なんでもなかつた――藪の中で鳥が騒いだのだ――わたしは今ひどく幸福だ。お前はそれを信じないのか。なぜ幸福でないと言ふのだ。わたしはわたしの血族を全部ここに集めてゐるではないか、――少くとも慈悲深い救世主がお手を置いてゐて下さる總ての者を。

アガトン。さうして、皇帝はあなたに對して父としてお臨みになりますか。

ユリアン。皇帝は無限に賢明で且善良だ。

アガトン。（同じやうに立ち上がつて）ユリアン、あなたが皇帝のお世嗣に立たれるといふ噂は事實ですか。

ユリアン。（急いで）めつたなことを言つてはならん。わたしはどんな莫迦な噂が流布されてゐるか知らない――なぜお前はそんなにいろいろなことを訊くのだ。わたしはお前が何の用でコンスタンチノオペルへ來たか、それを言ふまでは、一言も返事はしないぞ。

アガトン。わたしは、神のみ名、主のみ名に於いて參つたのです。

ユリアン。お前が救ひ主或は救ひを愛するなら、もう一度故鄕へ歸るが好い。（欄干に凭れて）しつかに。小舟がやつて來た――（他の側へアガトンを連れて行く）何の用があつて來たのだ。十字架の端に

接吻する爲にか　　もう一度故郷へ歸り給へ。この五ケ月の間にコンスタンチノオペルがどんな風になつたか、お前は知つてゐるか。冒瀆の都バビロンだ　　お前は聞かないか　　リバニオスがここにゐることを知らないか。

アガトン。いゝえ、ユリアン、わたしはリバニオスを知りません。

ユリアン。孤獨のカパドキヤ人よ。あの男の聲やあの男の教義を知らないところは、幸福な天地だ。

アガトン。では、その男は異端の僞教師の一人なのですね。

ユリアン。中でも一番危險な奴なのだ。

アガトン。それでも、ベルカモンのエデシオス程ではありますまい。

ユリアン。ああ、誰がもうベルカモンのエデシオスのことなどを考へよう。エデシオスは、もう老耄れてゐる―

アガトン。あの謎のやうなアクシモスよりも危險なのですか。

ユリアン。アクシモスだと。あんな山師の話はしてくれるな。アクシモスの正體を知つてゐるものは一人もありはしない。

アガトン。あの人はコルダン川の向うの洞穴の中に三年の間眠つてゐたと稱してゐます。

ユリアン。ヘケボリオス先生はあの男を詐欺師だと言はれたが、どうもそれは當つてゐるらしい

いや、いや、アガトン――最も危險なのはリバニオスだ。罪の深い現世は、謂はばその祟りで呻いてゐるのだ。あの男の來ることは前兆で分かつてゐた。疫病が數限りもなく市民を殺した。それがやんで、十一月になると、毎晩のやうに天から火の雨が降つた。いや、疑つてはいけない、アガトン。わたしはこの目で、星が軌道を外れて、地球の方へ落ちて來ながら、途中で燃えてしまふのを見たのだ――それ以來、あの男は、哲學者として、雄辯家としてここで講義をした。總ての者があの男を雄辯術の王だと言ふ。成程、さう言ふのに無理はない。だが、わたしはお前に言ふ、あの男は怖ろしい男だ。子供も大人もあの男を取卷いてゐる。あの男はみんなの魂を一つに縛つて、否でも應でも自分のあとについて來させるのだ。あの男の唇からは神を否定する詞が誘惑するやうに流れて出るのだ――ちやうどトロヤ人やギリシヤ人についての歌か傳說のやうに――

アガトン。(驚いて)や、あなたもあの人をお訪ねになつたのですね。

ユリアン。(たじろいで)わたしが――神よ、どうぞそんな罪をわたしに犯させないで下さい。どんな噂がお前の耳へはひつても、決して信じてくれるな。わたしが夜、姿をやつして、リバニオスを訪ねたといふのは、嘘だ。少しでもあの男に接近するといふことは、わたしにとつては恐怖だ。その上、皇帝からも禁められてゐる。ヘケボリオスは、なほ嚴ましいあの狡猾な男に接近する信者達は、みんな教に背いて、神を嘲る者になるのだ。彼等ばかりではない。あの男の詞は、口から口へと傳

はつてもう宮中へまで侵入して来てゐる。あの男のほしいままな嘲罵や、争ふことの出来ない議論や、諷刺の詩歌に、わたしの祈禱にさへ肉薄して来てゐる――わたしには、總てが昔敬虔な流浪の勇士の食物を食ひ荒らした鳥の姿をした怪物のやうに思はれる。時々わたしは、信仰や神の詞が、嘔吐を催させるやうなことがあるのを恐ろしく感ずる　（思はず激して）若し、わたしに皇帝の權力があつたら、リバニオスの首を銀の盆に載せてお前にやるのだが。

アガトン。併し、どうして皇帝がそれを默つて見てをられるのです。どうして、敬虔な、信仰の篤い吾々の皇帝が

ユリアン。皇帝。君よ、成程、皇帝の信仰と敬神とは立派なものだ。併し、皇帝は今恵まれないペルシヤ戦争のことの外何も考へてをられない。みんなの心は今それで一杯になつてゐる。マルコクの王に對して開かれてゐる戦争に意を注ぐものは一人もない。ああ、アガトン、二年前と今とでは、まるで世の中が變つてしまつた。二年前には宗教信者アクシモスの二人の兄弟が、死を以てその帰依を贖はなければならなかつた。リバニオスがどんな力強い味方を持つてゐるか、お前は知るまい。勢力のない哲學者達に、時々一人二人と、町を追はれる。だが、あの男には誰も手を觸れないのだ。わたしは、ヘケボリオス先生にも頼んだ、皇后にも嘆願した、あの男の追放が行はれるやうにと、たが、だめだ、だめだ――他のものを追つたところで、それが何の役に立たう。あの男一人が吾々總て

の空氣を毒してゐるのだ。おう、わたしの救ひ主よ、どうぞこの憎むべき異端の手から逃れること
が出來ますやうに。こんなところに住んでゐるのは、獅子の洞穴に住んでゐるのと同じことだ――

アガトン。（熱心に）ユリアン――何を仰しやるのです。

ユリアン。さうだ、さうだ、吾々を救ひ得るものは唯奇蹟だけだ。

アガトン。そんならお聞き下さい。その奇蹟は既に起つたのです。

ユリアン。なんだと。

アガトン。お聞き下さい、ユリアン、それがあなたに關係したことであるのを、最早わたしは疑ふこ
とが出來ません。このコンスタンチノオペルへわたしを來させたのは、一つの幻影でした――

ユリアン。幻影だと。

アガトン。神の默示です――

ユリアン。神の慈悲にかけて賴む、どうか話してくれ――しつ――默つて――しつ――誰かやつて來
た　ぢつと立つてゐるのだ　知らん顏をして　何氣ない樣子で。

二人は欄干の側に立つ。

哲學者風の着物に短い外套を着た、中年の丈の高い美しい男が、左手の並木路からやつて來る。一團の青年
がそのあとについて來る。いづれも端折つた着物を著て、常春藤の冠を頂き、書物、書類、羊皮紙を携へて

ゐる。聲高に笑ひ且語りつゝ近づき來る。

哲學者。水の中へなんにも落してはならん。元氣なグレゴリ。あなたの持つてゐるものは黄金よりも貴いものであることを忘れてはならん。

ユリアン。（哲學者のすぐ側に立つてゐて）御免下さい　黄金よりも貴い物質がこの世の中にあるのですか。

哲學者。あなたは、自分の生命の果實を、黄金で買ひ戻すことが出來ますか。

ユリアン。出來ません、それは本當です。併し、それではなぜあなたは信頼の出來ない水を信頼なさるのです。

哲學者。人間の好意はそれ以上信頼が出來ません。

ユリアン。それは賢明なお詞です。そして、あなたはあなたの財寶を持つて、どこへお渡りになるのです。

哲學者。アテネへ。（行かうとする）

ユリアン。（袖を抑へて）アテネへ。それでは、あなたの富もあなたのものにはなりますまい。

哲學者。（立留つて）どうして。

ユリアン。寶をアテネへ連れて行くのが賢者のすることでせうか。

哲學者。わたしの梟は、この帝都の寺院の光に耐へることが出來ないのです。（一人の青年に）手を借して下さい、ザルスト。（階段を降りかける）

弟子ザルスト。（階段の中程で、小聲に）神にかけて、あれがあの方です。

哲學者。あの方が――

ザルスト。命にかけて。わたしはあの方を識つてゐます――わたしは、あの方がヘケボリオスと一緒にをられるのを見ました。

哲學者。おう。（しげしげとユリアンを見る。それから、二三歩近寄つて言ふ）貴方は今お笑ひになつた。何がをかしかつたのです。

ユリアン。あなたは寺院の光がどうのかうのと言はれたが、實はあなたの眼を眩ましたのは、學問所に於ける王者の光ではなかつたかと思つたのです。

哲學者。この短かい著物の下に妬みの隱れる場所はありません。

ユリアン。隱れる場所のないものは、現はれて來ます。

哲學者。痩せたガリラヤ人よ。あなたの舌鋒はなかなか鋭い。

ユリアン。どうして、わたしがガリラヤ人なのです。わたしのどこがガリラヤ人なのです。

哲學者。あなたの、その宮廷の服裝が。

ユリアン。でも、この著物の下では、わたしは哲學の友人です。わたしは粗末な肌衣を著てゐるのです——併し、話して下さい。あなたはアテネで何をお求めになるのです。

哲學者。ポンチオ、ピラトは何を求めました。

ユリアン。いや、いや。リバニオスのゐるこの土地には眞理がないのですか。

哲學者。（ユリアンをぢつと見て）ふむ——リバニオス。リバニオスはぢきに沈默してしまふでせう。リバニオスはもう論爭に疲れてゐます。

ユリアン。疲れてゐますと。あの男が——あの不死身の、常に勝ち誇つてゐる男が——

哲學者。自分と同等の者の出て來るのを、待つのに疲れたのです。

ユリアン。あなたは冗談を言ふのですか。リバニオスがどこで自分と同等の者を見つけることが出來ませう。

哲學者。ところが、あの男と同等の者が一人ゐるのです。

ユリアン。誰です。どこにゐるのです。名を聞かして下さい。

哲學者。それを言ふのは危險です。

ユリアン。なぜです。

哲學者。あなたは宮廷の人ではありませんか。

ユリアン。さうだとすると――
哲學者。（小聲に）あなたは皇帝の世繼を責めるやうな向う見ずなことが出來ますか。
ユリアン。（ひどく驚いて）ああ。
哲學者。（口早に）あなたがわたしを裏切れば、わたしは總てを否定します。
ユリアン。わたしは誰をも裏切りません。それは大丈夫です、大丈夫です――皇帝の世繼だと言ひましたね。誰のことを言ふのだかわたしには分かりません――皇帝はまだ誰を世嗣とも定めてをられません――だが、なぜあんな冗談を言ふのです。なぜ、リバニオスと同等の者がゐるなどといふ話をなすつたのです。
哲學者。それは言ふまい――それよりこの宮廷に、權力や嚴命や懇願や、說得に依つて、學問所の光から遠ざけられてゐる青年がゐるといふ話ですが
ユリアン。（急き込んで）それはその青年の信仰の純潔を保つ爲にしたことです。
哲學者。（微笑んで）その青年はそれ程自分の信仰に信を置いてゐないのですか。その青年が自分の信仰について、何を知ることが出來るでせう。軍人は戰場へ出るまで自分の精についてなんにも知つてはゐないのです。
ユリアン。それはさうです、――併し、さうしたのは、愛すべき血族の者や先生達なのです――

哲學者。それは同だけのことです。まあ、わたしの言ふことをお聞きなさい。その皇帝の若い身族か哲學者達から遁ざけられたのは、皇帝自身の爲なのです。皇帝は無益の者を持つてゐられない。勿論、皇帝は偉大なお方です。併し、御自分の世評が帝國全土に輝き渡るのを默つて見てゐることは出來ないのです。

ユリアン。（同意して）それでは、あなたは、――

哲學者。分つてゐます。あなたはあなたの御主人の爲に立腹してゐられるのです。だが――

ユリアン。決してそんなことはありません。その反對です――實を申すと――お聞き下さい、わたしはその若いお方の輸送いところにゐるのです、――わたしは喜んで聞きます――（振り返つて）アガトン、少し向うへ行つてゐてくれ、わたしはこの人と二人きりで話をしなければならないから。（見送の哲人等に）同志諸君からつであなたは「輝き渡る」と言ひましたね――帝國全土に輝き渡ると。あなたでも、あなた方の内どなたでも、王子ユリアンについて、何か知つてゐられることがあるのですか。

哲學者。ヘリオスは雲に隱れないでせうか。絶間なく吹く風は雲に切れ目を作らないでせうか。ですから――

ユリアン。もつとはつきり言つて下さい。お願です。

哲學者。宮廷と寺院とは、王子が捕へられてゐる二重の鳥籠のやうなものです。だが、その鳥籠には隙があります。時々、囚人の不思議な詞が漏れて來ます。宮廷の俗人どもは――これは失禮、宮廷の方々は、それを言ひ觸らして嘲弄の種とするのです。その詞が持つ深い意味などはあの御連中には――いや、失禮――大部分の方にはお分かりにならないのです。

ユリアン。誰にも分からないのです。誰にもと仰しやつて構ひません。

哲學者。あなたには確に分かる。そして少くとも私達には分かります――さうです、あの方はきつと國外へまで名を輝かすでせう。かういふ言ひ傳へさへあります、少年時代にカパドキヤにをられた時、兄上がロスと論爭をなすつた時、あの方は、神々の味方になつて、ガリラヤ人に向つて、神々を辯護なすつたさうではありませんか。

ユリアン。あれは冗談です――唯、議論の練習にしたことです――

哲學者。マルドニオスがあの方に就いてなんにも記錄してゐないでせうか。ヘケボリオスもなんにも書いてゐないでせうか。あの少年の詩論にさへ既にどんな技術があつたでせう。あの方の思想の稚い戲れの内にも、どんな美やどんな雅致があつたでせう。

ユリアン。あなたはさう考へますか。

哲學者。さうです――あの方は吾々の恐るべき、しかも敬慕すべき論敵になり得る人です。名聲ある

高い資位へ登るのに、あの方に何が缺けてゐませう。あの方は唯パウロが通つたのと同じ學園を通りさへすればそれで好いのです。パウロは何の傷も受けずに、その學園を通りました。それは後年ガリラヤ人の仲間にはひつて、總ての他の使徒を一つにしたものより、もつと輝やかしい光を放つた譯です。それは、パウロに叡智と雄辯があつたからです。ヘケボリオスは自分の弟子の信仰に懼れを抱いてゐます。おう、わたしにはよく分つてゐる。怖れてゐるのは彼です。併し、彼の如き優しい良心を持つた男が、今自分の弟子に阻まうとしてゐる泉が、青年時代に自分の喉を潤したものであることを忘れてゐるのでせうか。それとも、彼が今吾々に對して賞讃すべき熟練さを以て振りまはしてゐる所の辯論の武器は吾々から學んだものだとはお思ひになりませんか。

ユリアン。さうです、明にさうです。

哲學者。しかも、あのヘケボリオスは、あの貴公子に現れた驚くべき天才に較べて、果してどれだけの天才を持つてゐませう。あの王子はカパドキヤで、殺されたガリラヤ人の墓の上で、或教義を説いたと言ひます。わたしはその教義には間違ひがあると思つてゐる。それ故、實行は一層困難であるが、それにも關らず、あの方は非常な熱を以てその教義を述べられた——噂に依れば——あの方と同じ年恰好の少年達が多數動かされて、弟子としてあの方に從つたといふことではありませんか。ああ、ヘケボリオスはあなた方と同じ人間です　あの人は嫉妬深いといふよりは利己的なので

す。だから、リバニオスの期待もむだになつたのです。

ユリアン。（哲學者の腕をつかまへて）リバニオスは何と言ひました。お願ひです、どうかそれを話して下さい。

哲學者。今あなたの聞いたことをみんな言つたのです。いや、まだある。あの男はかう言ひました。「あのガリラヤ人の貴公子を御覽。あれは靈魂のアキレスだ。」

ユリアン。アキレス。（小聲で）お母樣の夢。

哲學者。あちらの公開講堂では戰ひが始まつてゐます。光明と歡喜が、論爭と論爭者との上にあります。詞の箭が空を切つて飛びます。機智の鋭い刃が一時計で音を立てます。聖き神々は、笑ひながら雲の中に坐つてゐます。

ユリアン。おう、そんな異端は言はないで下さい——

哲學者。——さうして、勇士達は各自分の陣營へ歸つて行きます。腕と腕とを組み合つて、何の怨みを抱かず、燃えるやうな頰をして　あらゆる血管に血を溢れさせて　認識の捷利を抱へて、額に月桂冠を戴いて。ああ、アキレスはどこにゐるのだ。わたしには見えない。アキレスは怒つてゐるのだ——

ユリアン。アキレスは不仕合せなのです　だが、本當ですか。どうか言つて下さい　わたしは眼

お前、さうです――リバニオスはほんとにそんなことを言つたのですか。

哲學者。どうしてリバニオスはコンスタンチノオペルへやつて來たのでせう。或青年に名譽ある友誼を求めるより外に何の目的があつたのでせう。

ユリアン。默つて、ほんとのことを言つて下さい。いえ、いえ、そんなことは嘘です。それはあの僞言と眞實と符合しません――吾々は友達になりたいとおもつてゐる人を、決して嘲弄はしません。

哲學者。それは二人の間との間に情熱と憤怒の障壁を築かうとするガリラヤ人の奸計なのです。

ユリアン。でも、それがリバニオスであるといふことをあなたは否定なさらないでせう。

哲學者。わたしは全然否定します――最初の言から最後の言まで否定します。

ユリアン。では、あの嘲弄の詩はあの人が書いたのではないと言ふのですか。

哲學者。一つとしてあの人の書いたものはないのです。どれもこれも、みんな宮中で作られて、あの人の名で撒き散らされたのです――

ユリアン。あなたは何と仰しやるのです――

哲學者。誰に對してでも斷言の出來ることです。あなたの耳は鈍いが――もしや、あなた自身が――

ユリアン。私が――否、そんなことがどうして私に信じられませう。リバニオスはあの詩を書いたは

しなかつたのですね。一つも書かなかつたのですね。

哲學者。書かない。決して書かなかつた。

ユリアン。肩のまがつたアトラスに就いてのあの恥づべき書もあの人が書いたのではないのですね。

哲學者。決して、さうではありません。

ユリアン。宮廷服を着た猿を歌つたあの莫迦げた恥を知らない韻文もですか。

哲學者。は、は。あれはわから出たので、學問所から出たのではありません。あなたにはそれが信じられんか。では、話して聞かせるが、あれはヘケボリオスが

ユリアン。ヘケボリオス。

哲學者。さうです。ヘケボリオスです。ヘケボリオスが自分の首と自分の地位とを同じ信者の怒を措かうとして

ユリアン。（拳を握つて）ああ、果してさうだつたら―

哲學者。若しあの欺かれて目を眩まされた青年が吾々哲學者を知つてゐたなら、後になるまで虐待はしなかつたらう。

ユリアン。それは何のことですか。

哲學者。もう遅い。さやうなら、あなた。（行きかける）

ユリアン。（相手の手を執つて）友達、兄弟――あなたはどなたですか。

哲學者。神の生んだものが滅びに會ふのを見て嘆くものの一人です。

ユリアン。神の生んだものとは――

哲學者。無常の世界では作り得られぬものです。

ユリアン。やつぱり分かりません。

哲學者。この世の中には、あなた方ガリラヤ人の目にはひらない一つの輝かしい世界があるのです。そこでは、吾々の一生が一つの長い祭なのです。吾々は絶えず群僧と合唱に取り圍まれ、泡立つ盞を手にし、薔薇の花で髮の毛を飾られてゐるのです。そこでは目のくるめくやうな懸橋が靈と靈との間をつないで、空間の最も遠い天體にまで及んでゐるのです――私はこの偉大な光明の國の王となり得る人を識つてゐます。

ユリアン。（恐れて）ああ、その人の救ひにかけて。

哲學者。救ひとは何です。原始との再會ではありませんか。

ユリアン。さうです、意識された生活に於いてでは、在るが儘の私としての私自身との再會です。

哲學者。雨の雫と海との再會です。枯れた木の葉とそれを養うた土との再會です。

ユリアン。ああ、私に學問があつたら。あなたに刃向へる武器があつたら。

哲學者。武器をおとりなさい。學問所は思想と天才の道場です。

ユリアン。（長歎して）ああ。

哲學者。御覽なさい。あの陽氣な青年達を。あの中にはガリラヤ人もゐるのです。神の事に關する訣は吾々の間ではなんの不和をも起さないのです——さやうなら。あなた方ガリラヤ人は眞理を流し者にしたのです。どんなに吾々が運命の管に堪へてゐるかを御覽なさい。吾々の高く上げた額を木の葉の冠で飾つてゐるのを御覽なさい。かうして吾々はここを去るのです——歌で夜を短くしながら、そしてヘリオスの出現を待ちながら。

（哲學者、弟子達の待つてゐた階段を降りる。やがて小舟の漕ぎ去られる音が聞える）

ユリアン。（長い間水の上を見詰めてゐる）あの不思議な男は誰だらう。

アガトン。（近づきつつ）もし、ユリアン様——

親王。（興奮して）あの男はおれを理解した。そしてリバニオス自身が。あの偉大な、並ぶもののないリバニオスが。考へても御覽、アガトン、リバニオスがかう言つたと言ふのだ——異教徒の目はどうしてあんなに鋭いのだ。

アガトン。今の會合はたしかに誘惑者の爲事でした。

ユリアン。（相手の詞に耳を借さずに）おれはもうかういふ人達の中に住んでゐることは出來ない。あの

アガトン。それゆゑ皇帝は大に怒りました。有司はその寺院を打ち毀せと命じました。吾々は憎むべき偶像を粉々に打ち砕きました。中にも熱狂した人達は主の精神に導かれて猶々激しいことをいたしました。私達は讃美歌を歌ひながら、神の旗を先頭に翳して町を行き進み、神の無い徒のやうに、不信の徒を襲ひました。私達は彼等の財寶を奪ひました。多くの家が焼かれました、そして、少からぬ異教徒が火の中で焼死にました。逃げようとするのを道端で殺した人數はそれに寄りませんでした。ああ、それは神の榮の爲に輝かしい時でした。

ユリアン。して、して、幻は。

アガトン。三日三晩の間は復讐の神が私達の心の中で荒れ廻りましたが、終に弱い肉體は憤つた魂と歩調を合すことが出來なくなつて、私達は追撃を止めました――私は寢床に横になりました。私は眠ることも醒めることも出來ませんでした。私は自分の體がうつろになつたやうに感じました。魂が自分を去つてしまつたやうに感じました。私は熱に浮かされて寢てゐました。髪の毛を搔きむしりました。泣きました――誓ひました、歌ひました――どうしてそんなことをしたのか、それはいまだに分かりません――ふと、私は目の前の壁の側に白いぎらぎらした光を見ました。そして、その光の中に足まで屆くやうな長い外套を着た一人の人が立つてゐるのを見ました。その人の頭からは後光がさしてゐました。その人は手の内に草を持つて、私の方を優しい目で見ました。

ユリアン。君はそれを見たのか。

アガトン。見ました。やがて、その人は口を開いてから言ひました。「立て、アガトンよ、帝國を繼ぐべき人を尋ね出だせよ。彼を獅子の洞へ送りて、獅子と戰はしめよ。」

ユリアン。なに、獅子と戰はしめよだと。不思議だ、不思議だ。若しそれが誠なら――今の哲學者との會合は――默示だ――おれのところへ來た使だ――おれは選ばれた者なのか。

アガトン。たしかにさうです。

ユリアン。獅子と戰へと言ふのか――分かつた――それはさうだ、アガトン。おれがリバニオスを求めるのは神の意志なのだ――

アガトン。いえ、いえ。まあ、しまひまでお聞き下さい。

ユリアン。――總ての彼の技術と彼の學問とを、彼から聞き知り、彼自身の武器を以て不信の徒を粉碎し、パウロのやうに――パウロのやうに戰へ、戰へ、――パウロのやうに主の道に勝てと言ふのか。

アガトン。いえ、いえ。さうではありません。

ユリアン。君はそれを疑ふのか。リバニオスは――あの男は山の獅子のやうに強くはないか。そして學問所は――

アガトン。いいえ。それは違ひます。幻は詞を續けてから申したのです。「選まれたる者に告げよ。その足より帝都の塵を拂へ、再び都の門に入るなと。」

ユリアン。それは確か。

アガトン。全く確です。

ユリアン。では、ここではないのか。獅子と戰へと言ふのは。どこだ、どこだ。どこで戰へと言ふのだ。

（親王ガロス、美しき、逞しき明色の縮れた髮の毛を持てる二十五歳の男子、武裝して左手の並木道より入り來る）

ユリアン。（その方へ走り寄る）ガロス。

ガロス。どうした。（アガトンの方を指さす）あれは誰だ。

ユリアン。アガトンだ。

ガロス。どのアガトンだ。お前は色々變つた友達を持つてゐるから――や、うむ、あのカパドキヤ人であつたか。見違へるほど大きくなつたな。

ユリアン。知つてゐるか、ガロス――皇帝が君を尋ねてをられたぞ。

ガロス。（緊張して）今か。今夜か。

のだ。

ガロス。アビドスのオシリスに仕へる僧侶に伺を立てたのだ。――

ユリアン。ああ。神託か。あの異教徒の神託か

ガロス。異教徒の神託は赦されもしよう。だが――これは話しても構ふまい――おれはペルシャ僧侶の結果を尋ねたのだ――

ユリアン。なんといふ気違じみたことだ――ガロス――君の顔で分かるぞ。君はまだ外に訊いたことがあるだらう。

ガロス。それだけだ――外にはなんにも訊かなかつた

ユリアン。いや、いや、君は或権力ある人の生死に就いて尋ねたらう。

ガロス。若し尋ねたらどうだと言ふのだ。それ以上に吾々二人にとつて大事な問題はないではないか。

ユリアン。(兄の腕を握る) お黙り、兄さんは気が違つてゐる。

ガロス。行つてくれ。お前は皇帝の前に子犬のやうに竦んでゐるがいゝ――おれにはもうそれは堪へられぬ。おれはあらゆる市場に立つてその事を大声に叫はう。(アガトンに向つて言ふ)――カパドキヤ人よ、お前はあいつを見たか。あの人殺しを見たか。

ユリアン。ガロス。兄さん。

アガトン。なに、人殺し。

ガロス。紫の袍を著た人殺しだ。おれの父を殺した奴だ。おれの繼母を殺した奴だ。おれの一番上の兄を殺した奴だ。

ユリアン。ああ、兄さんは吾々の上へ破滅を呼んでゐる。

ガロス。たつた一晩に十一の首を――十一の死骸を――吾々の一家悉くを。だが、確に良心は彼を苦しめてゐる。良心は蛆蟲のやうに彼の骨髄にまで食ひ入つてゐる。

ユリアン。もう聽くのは厭だ。行つてくれ、行つてくれ。

ガロス。帝王の目を掠めて待て。お前はひどく蒼い顔をしてゐる、そして、慄へてゐる――おれを裏切つたのは、もしやお前ではないか。

ユリアン。僕が。あなたのたつた一人の兄弟が――

ガロス。兄弟がなんだ。吾々の一家で兄弟がなんの頼りにならう。お前はそつとおれの跡をつけてゐたのだらう。それならさうと言つてしまへ。お前でなくて誰がそんな事をするものか。人がそんな事を囁き合つてゐるか、それをおれが知らぬと思つてゐるのか。皇帝はお前を世間に立てようとしてゐるのだ。

ユリアン。いや、決してそんな事はない。僕は兄さんに誓つても好い。そんな事は決してない。第一僕が厭だ。皇帝よりはもつと強いものが僕を選んだのだ。どうか信じてくれ、ガロス――僕の道は既に示された。僕はよりその道を乗り越えようとは思はない、それは確だ。軍神にかけても――僕が帝位に卽くやうな事はない――決して、決して、決してない。

ガロス。は、は、うまいな、役者め。

ユリアン。嘲けられても爲方がない。兄さんは今どんな事があつたか知らないのだから。それは僕自身にもまだよく分からないことなのだ。おう、アガトン――おれのこの頭に油が注がれるのであらうか。それが背信にはならないであらうか――死罪にはならないであらうか。主の聖い油が溶けた鉛のやうにおれを燃やしはしないだらうか。

ガロス。さうなれば吾々の嚴めしい親類殿はユリウス・ケエザルより餘計に頭が禿げるばかりだ。

ユリアン。うつかりしたことを言ふな――皇帝の物は皇帝に返せ――

ガロス。おれの父の血は――お前の父の血は、そして、お前の母の血は――

ユリアン。あの時の恐ろしさをどうして僕達が知らう。僕等はあの時分まだ子供だつた。一番悪かつたのは軍人達だ――あいつ等が謀叛を起したのだ――あいつ等が奸策を立てたのだ――

ガロス。(笑ふ)皇帝の世嗣が役の稽古をしてゐるな。

ユリアン。（泣きながら）ガロス、僕はあなたの爲には死んでも好い、國を追はれても好い。ここにゐると僕は僕の魂を滅すばかりだ。僕は赦さなければならん——しかも僕は赦すことが出來ない。邪念が募つて來る——憎惡と復讐とが囁き合ふ——

ガロス。（宮殿の方を見ながら、口早に）それ、皇帝が來た。

ユリアン。おちついて、兄さん——ああ、ヘケボリオスだ。

（その間に宮殿の戸口開く。會衆溢れ出づ。或者は直ちにその場を退き、或者は皇帝の行列を見むとて立ち殘る。出で來れるものの内に猶太の神學者ヘケボリオスあり。僧服を纏ふ）

ヘケボリオス。（右の方へ過ぎ去らうとして）あなたでしたか、ユリアン樣。私は又あなたのお蔭で苦しい時を過ごしました。

ユリアン。お氣の毒な——あなたは私の爲に苦しい時を過ごし過ぎたことでせう。

ヘケボリオス。あなたは基督の恩を受けてをられますぞ。あなたの強情な心が基督を怒らせたのです。あなたの愛情のない思想や、世間的な虚榮が——

ユリアン。それは間違つてゐます。あなたは幾度も私にさう仰しやつた。

ヘケボリオス。たつた今も、私はあなたの心を直さうとして祈禱に我が魂を勵ましたのです。併し、神の耳には最も深い敬虔も、この耳には聞いて下さらないやうでした——耳さへ借して下さらない

やうでした――救世主は私の心を虚栄の方へ向けておしまひになりました――

ユリアン。あなたは私の為に祈つてくれたのですか。おう、敬愛するヘケボリオス先生。あなたは私達のやうな無知な動物の為にも祈つてくれるのです――宮廷の服さへ著てゐれば。

ヘケボリオス。それはなんのことです。

ユリアン。ヘケボリオス先生。あなたはよくもあんな穢れた詩をお書きなさいましたね。

ヘケボリオス。私が。私は高く清いあらゆるものに誓つて――

ユリアン。あなたが譃(うそ)をついて入らつしやることは、あなたの目でよく分かります。あなたがあれを書いたといふ證據は十分上がつてゐます。どうしてあんな事が出来るのです――しかもリバニオスの名で。

ヘケボリオス。まあ、お待ちなさい、親愛な青年よ。そこまであなたが知つてをられるなら、私は、

ユリアン。ああ、ヘケボリオス。欺僞だ、誓言だ、裏切りだ――

ヘケボリオス。親愛な友達よ。私はどんなに深くあなたを愛してゐるでせう。私はいつか上に油灌がれる筈の人の魂の為にどんな事でもしようと思ひます。若し私があなたの身の上を気遣ふ為に人を欺いたり譃をついたりしたとしても、恵み深い神は必ず私の為事を満足して見てくれ、同意の手をその上に差し伸べてくれたと信じます。

ユリアン。私は盲でした。どうかこの誓に背いた手を握らせて下さい――

ヘケボリオス。皇帝のお出でです。

（皇帝コンスタンチオス、廷臣を從へて寺院より出で來る。アガトンは前の出來事の間に、既に右手の叢の中へ退いてゐる）

皇帝。おお。なよやかな天國の平和は今わしの上におりた。

皇后。力を得たやうにお思ひなさいますか。

皇帝。うむ、おれはおれの方へ生々と飛んで來る鳩を見た。鳩はおれの總ての罪の重荷を持つて行つてくれた　メムノンよ、もうおれはどんな事でも出來るぞ。

奴隷。メムノン。（小聲に）では、直ぐに御決行なさいまし陛下。

皇帝。うむ。あすこに二人立つてをるな。（兄弟の方へ向つて行く）

ガロス。（思はず劍を探り、恐怖して叫ぶ）どうぞ凶事のないやうに。

皇帝。（両手を擴げて）ガロス。（ガロスを抱きて接吻する）御覧、復活祭の星の光の下で、わしはわしの心に最も近くゐるものを選ぶ――皆の者、地にひれ伏せ。ケエザル、ガロスに挨拶を申せ。（臣下皆々驚く。思はず叫ぶものもあり）

皇后。（叫ぶやうに）コンスタンチオス。

ガロス。（茫然として）ケエザル。

ユリアン。ああ。（歡喜に堪へざるが如く皇帝の手を摑む）

皇帝。（ユリアンを拂ひのける）わしの側へ寄るな。何をしようと言ふのだ。ガロスは年上ではないか。
お前はどんな望を持つてゐるのだ。盲になつたお前の高慢でどんな噂を――行け、行け。

ガロス。私が――私がケエザル。

皇帝。わしの世嗣だ。相續人だ。三日の内に、お前は亞細亞の軍隊へ赴かなければならない。ペルシヤの戰爭は深くお前の心に掛かつてゐる筈だ。

ガロス。おう、慈悲深い陛下よ――

皇帝。禮を言ふなら行で禮を言つてくれ、愛するガロスよ。ザボレス王はエウフラテスの西に陣を敷いてゐる。お前がどれほどわしの生命を氣遣つてくれてゐるか、わしはよく知つてゐる。彼を滅ぼすのをお前の任務とするが好い。（振り向いて、親王ユリアンの頭を兩手の間に挾み、それに接吻する）そこで、ユリアン、信仰深い友達――わしはかうするより爲方がなかつたのだ。

ユリアン、皇帝の意志に祝福あれ。

皇帝。祝福などしてくれるな。それよりは、聞いてくれ――わしはお前の事をも思つたのだ。どうだ、ユリアン、もうコンスタンチノオペルにゐても自由に息が出來るぞ――

ユリアン。はい、基督は讃むべきかな、皇帝は讃むべきかな。

皇帝。お前はもう知つてゐるのか。誰がそれをお前に知らせた。

ユリアン。何をです、陛下。

皇帝。リバニオスが追放されたことを。

ユリアン。なに。リバニオスが――追放。

皇帝。わしはあの男をアテンへ追放した。

ユリアン。ああ。

皇帝。あすこに船がある。あの男に今夜立つのだ。

ユリアン。（傍白）では、あれがさうだつたのだ、あれがさうだつたのだ。

皇帝。お前は長い間それを望んでゐた。わしはこれまでお前の願を容れる事が出來なかつた――併し今――これを小さな報酬として受けてくれ、なあ、ユリアン。

ユリアン。（急に皇帝の手を掴む）陛下、どうかもう一つお恵みをお與へ下さい。

皇帝。なんでも言ふが好い。

ユリアン。私をペルガモンへ遣つて下さい。あすこでは年とつたエデシオスが教へてゐます――

皇帝。不思議な願だ。お前は基督教徒の中へ行かうといふのか――

ユリアン。エデシオスは危險な人物ではありません。思想の高い老人です。それにもう餘命も長くはないのです――

皇帝。そして、お前はあの男から何を學ばうといふのだ。

ユリアン。獅子と戰ふ術を學びたいと思ふのです。

皇帝。お前の信心深い考はわしによく分る。だが、お前は恐れてはゐないのか――十分强いと信じてゐるのか。

ユリアン。主なる神は崇高に私をお招きになりました。私はダニエルのやうに、靜に、笑つて獅子の洞へ參らうとしてゐるのです。

皇帝。ユリアン。

ユリアン。今夜陛下は御存じなしに神の道具におなりになつたのです。どうぞ世界を淸める爲に私をお遣し下さいまし。

ガロス。(皇帝に向ひ小聲に) 陛下、弟の申す事を許しておやり下さいまし。さうすれば、もつと大きな望を起さずにも濟みませうから。

皇后。私もあなたにお願ひいたします――あの熱心な請を容れて遣つて下さいませ。

ヘケボリオス。(小聲に) 皇帝陛下よ、どうぞあのお方をペルガモンへおやり下さい、あの方はもう私

の自由にはなりません——それにもうさして重大な事でもなくなりましたから

皇帝。かやうな喜ばしい時に、何をわしは否むことが出來よう。神と共に行くが好い、ユリアン。

ユリアン。（皇帝の手に接吻す）感謝いたします——感謝いたします。

皇帝。さあ、祝宴の席へ參らう。カプアの料理人が新しい鮒の料理を考へ出した。ピオスの酒に漬けた鯉の頭や、それから——さあ——ケエザル、ガロス、お前はわしの次に來るのだ。（行列進み始める）

ガロス（小聲に）ヘレナ、なんと言ふ運命の變化だらう。

ヘレナ。おう、ガロス。私達の希望の上にやつと光が見えて來ました。

ガロス。私はまたほんとだと思ふことが出來ない。一體、これは誰のしたことだ。

ヘレナ。しつ。

ガロス。あなたか。それとも誰だ——誰ぢや。

ヘレナ。メムノンのスパルタ犬よ。

ガロス。「と言ふと」。

ヘレナ。メムノンの犬です。ユリアンが蹴つたので、その敵を討たれたのです。

皇帝。エウセビア、あなたはなぜさう默つてゐるのだ。

皇后。(涙にくれながら、小聲に)おう、コンスタンチオス——あなたはどうしてこんな進み方をなすつたのです。
皇帝。十一の幽靈が要求したのだ。
皇后。まあ——幽靈がどうしてそんなことを要求しませう。
皇帝。(叫ぶ)笛吹よ、なぜ貴樣達は默つてゐるのだ。吹け、吹け。
(ユリアンを除くの外、總て左へはひる。アガトン、木の間より出て來る)
ユリアン。ガロスが世嗣となつた——そして、おれは——自由だ、自由だ、自由だ。
アガトン。神の意志の現れは驚くべきものです。
ユリアン。ここで何があつたか、君は聞いたか。
アガトン。はい、殘らず承りました。
ユリアン。あすこそは、アガトン、あすこそはアテンへ行くのだ。
アガトン。アテンへ。あなたはペルガモンへお出でになる筈ではありませんか。
ユリアン。しつ。君には分からない——吾々は蛇のやうに上手にやらなければならん。先づペルガモンへ行くのだ——そしてそれからアテンへ行くのだ。
アガトン。では、さやうなら、殿下。

ユリアン。一緒に行つてはくれないか。

アガトン。それは出來ません。私は家へ歸らなければなりません。小さい弟を見てやらなければなりません。

ユリアン（欄干に倚りて）ああ。あの人達は今錨を揚げてゐる――汝翼ある獅子に幸福なる航海あれ。アキレスがその船底について行くぞ。（後に叫ぶ）ああ。

アガトン。どうしたのです。

ユリアン。星が隕ちたのだ。

解説

島崎藤村

小山内薫全集八卷が成つた。

何よりも先づこの八卷にこもる熱情と愛とは尊い。

小山内君が生きてゐたら。君が去つた今日になつて見て、一層その感を深くするものは私一人ではあるまい。近頃の文壇と劇壇とで、君ほど惜まれた人もない。おそらく君の著作を讀み、君の講演を聽き、君の劇場に臨んだほどのものは、君が墓畔を逍遙するの思ひでこの全集を手にするであらうと思ふ。

まことの才能を有するものはいかに勇氣を有するか、またその才能はいかに人を導いて獨自の道を開拓せしむるか、それを見ようと思ふものはこの全集を開くがいゝ。こゝには近代劇の精神を感得して吾國の舞臺の上にそれをうち建てた第一の人の強い喜びがある。

劇の研究にはその人も多いとは言ひながら、あれほど死生を托した熱情と愛との人が君以前にあつ

たらうか。

ある特別な使命をその時代に齎した人の情熱ほど暗示的なものはない。

私の見るところによると、劇場人としての小山内君は歩けば歩くほど文學者氣質を警戒するやうになつて、成るべく舞臺の上から文學的なものを驅除しようとした人である。これは一見不思議なやうであるが、その實さうでない。文學者氣質なるものは屢々藝術家をして本道を自然の研究から遠ざからしめ、煙のごとき迷信と抽象の言葉を弄することに時を空費せしめると言つた畫家の歩いた道とその歸趨を同じくする。不思議にも、私達は文學的な繪畫を好まないで、反つて繪畫の領分から成るべく文學的なものを驅除しようとした畫家の作品の方を愛するやうに、丁度それと同じことが劇場人としての小山内君の仕事なり著作なりにも言へると思ふ。畫家が文學者から遠ざかれば遠ざかるほど、その色彩と素描とで畫家らしい感覺や認識を固めれば固めるほど、全く文學者の取扱ふことの出來ない方法で自然の姿が實現されゝばされるほど、私達はその畫家を尊敬するやうになる。私達が小山内君を重く視るやうになつたのも、この畫家の場合と同じだ。文學者でありながら文學者氣質を警戒し、文學者でありながら成るべく舞臺の上から文學的なものを驅除しようとしたからである。

過ぐる年月の間、私は小山内君の變らない讀者の一人であつた。もし最近に讀むべき良書は何かと人に問はれるなら、私はこの八巻の全集をその中に數へたい。劇文學の研究者、愛好者が小山内君の

書き遺したものから開發するところが多からうことはこゝに言ふまでもないが、それほど專門的でない多くの讀者に取つてもこの全集から開發するところは實に多からう。私が讀むべき良書として薦める理由も全くそこにある。それほど暗示的なものを私達のところへ遺し置いて行つたのが小山内薰君だ。

不思議な緣故から、私は青年時代からの小山内君と相識り、今また遺稿編輯の一員として君の生涯を弔ふ身となつた。細い柳、新しい蒲、誰のために綠なるぞ。この全集八卷をひらくものは、故園に殘つた春を見得るの感を深くするであらうと信ずる。

げた。
「群盲」("Maurice Maeterlinck. "Les Aveugles") は先生にとつて誠に忘るべからざる業績で、戯曲翻譯に手を染められた最初のものであると共に、所謂出世作ともなつたからである。——鷗外先生の主宰する「萬年草」へ「小さな飜譯を寄稿して採用されたのが動機で、千駄木の鷗外先生のところへも出入するやうになつた」と自傳にある。その小さい飜譯とは、卽ちこの「群盲」なのである。そして譯者はまだ文科大學の學生だつた。しかもこの業績に依つて鷗外先生に認められたことが機緣となつて、その令弟で「歌舞伎」をやつてゐた三木竹二氏の知遇を得、更にそれから伊井蓉峰と相識つて劇場生活をするやうにまでなつたのである。——本卷の收載は當時の原形でなく補修加筆を經たものであるが、とにかく群盲は先生の生涯を通じてのよき紀念品たるを失はない。これは自由劇場築地小劇場で上演され、またJ・O・A・Kで放送もされた。

「牧歌」(Gerhart Hauptmann: "Das Hirtenlied") が「人間」に發表された時、どうしてかういふ斷篇を譯されたかと先生に訊ねたら、「どういふものか、僕はこの作が好きでね」と答へられた。雜誌には次の如き前書きが附せられてある。——「ゲルハルト・ハウプトマンに戯曲の斷篇二あり。一を「エルガ」と「沈鐘」との間に作れる「へりオス」とし、一を「沈鐘」と「馬子ヘンシェル」との間に作れる「牧歌」とす。「牧歌」は舊約創世記第廿九章以下なるラケル、レアの物語に採る。作者第一幕を了へ、第二幕ラバンの天幕の中にして筆を棄てたり。この曲貧しき美術家の夢に舊約時代に遊ぶさまを描けり。全篇、恐らくは今の世より昔の夢に入り、昔の夢より今の世に歸る趣向なりしならむか。」——そして先生の譯筆は一幕の終りで止つてゐるのである。

「ニュウ」（"Ossip Dymow. "Nju"）大正初頭に早くもこの新體の戯曲を移植して、第一部だけながら「文藝復興」誌上に發表された。當時本國露西亞は云ふに及ばず歐米各地で上演された作品であるから、先生は獨佛いづれかの譯本に據つて飜譯されたものであらう。すでに出てゐた英譯本とは多少の相違が見出されるからである。

「ピエレットの面紗」（Arthur Schnitzler. "Der Schleier der Pierrette"）はパントマイムの臺本で、歐羅巴の看劇旅行中親しく見物されたものを「三田文學」で紹介された。後年の童話劇「遠くの羊飼」とこれと、先生は二つの默劇を移植されたわけである。

「オセロオ」（Shakespeare. "Othello"）先生は若き眞砂座時代すでに「ロメオとジュリエット」の飜案的移植を殘してゐるが、晩年新に沙翁劇現代語譯の計畫を樹て參考文獻等もしきりに涉獵されたが、遂にこの作と「ヹニスの商人」の完成を見ただけに終つたのは殘念である。二曲共單行本として出版され、「オセロオ」は左團次幸四郎等が歌舞伎座で、「ヹニスの商人」は築地小劇場で上演された。

「人間」（Walter Hasenclever "Die Menschen"）は、先生が多くの表現主義戯曲を紹介された中でも代表的な收穫と云つてよからう。「劇と評論」に發表されたが、更に同誌にこの解説の一文を寄せて讀者の理解と鑑賞に資せられてゐる。——この作は後に築地小劇場で上演された。

Henrik Ibsen の「皇帝とガリラア人」は Georg Brandes, Julius Elias, Paul Schlenther 等の獨逸譯全集中の"Kaiser und Galiläer"から重譯されたものである。先生はその口譯を鈴木春浦氏に筆記せしめ、二部十幕の全部を譯了されてゐる。そして嚴密な訂正を施した上で公にする豫定で改めて補修の筆を執られたが、漸く第一部第二

幕の初頭に及んだまま永久の未定稿となつて了つた。「世界戯曲全集」に豫告されながら收載されなかつた所以である。ここにはその第一幕を收めたが、口譯を基にしたとはいへ殆んど書き直しと云つていい程度の推敲添削が加へられてゐる。——別にこの二部第四幕第三場だけは、怱遽の加筆を經てJ・O・A・Kから放送されたことがあるが、その時先生は放送指揮のかたはら貴族ホルミダスの役で親しく出演された。

最後に先生には小說の飜譯も數々あるが、その方面の代表的なものとして本卷には「決鬪」（Anton Chekhov: "The Duel"）を收めた。自由劇場を興す前に於ける、先生の輝かしき業績の一として推すべきものだからである。これははじめをその主宰する「新思潮」に載せ後半を「讀賣新聞」に發表して、文壇嘖々の好評を博し完結後纏めて單行本として上梓した。出版に際して先生はこの譯書を中澤重雄（臨川）氏にデヂケエトしてゐる。なほ卷頭に附せられた「小引」には、先生がこの飜譯に當つての苦心と用意とを次の如く語つてゐる。——「一、この飜譯は露西亞の原書からしたものではない。逸名氏の英吉利譯に、アンリ・シロル氏の佛蘭西譯を參照して、自家の取捨を加へた重譯である。一、英吉利譯よりは詳しい、佛蘭西譯よりは粗である。英吉利譯に無くて、佛蘭西譯に有る部分も、悉くは取入れなかつた。許すべからざる脫漏のみ補ふ事にして、英吉利譯の省略に意味のある部分は、總てその儘にして置いた。一、章の切り方も英吉利譯は十八、佛蘭西譯は廿一である。私は自分の考で、二十に分けた。節の切り方、點線の使ひ方は、殆ど總て、佛蘭西譯に從つた。一、地名は總て態と英吉利讀みにした。人名は出來得る限り露西亞讀みにした。一、英吉利譯に誤譯らしい個所もあつた。佛蘭西譯に誤譯らしい個所もあつた。然ういふ場合には、自分の常識と理性とに訴へて、正しいと思へる方に從つた。私の譯にも隨分誤があらう。原來、誤譯など

といふものは一々原書と對照しないでも、大抵譯その者だけを讀んで見れば、分るものだ。讀過の際、變だと思つた個所があつたら、遠慮なく指摘して貰ひたい。一、この譯書は、露西亞の原作に比べたら、元より不完全極まる物であらう。併し、英吉利譯なり佛蘭西譯なりからした日本譯として、少しでも意味のある物を得たいと私は終始望んで來た。私はこの小さな仕事を終へるのにも足掛四年の日子を費した。

明治四十三年二月十八日夜箱根塔の澤にて最後の訂正を了へたる時。　　譯者。

昭和六年八月二十八日印刷
昭和六年八月三十一日發行

非賣品

小山内薫全集第四卷

第六回配本

著作者　小山内薫
東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　妹尾堅吉
東京市小石川區諏訪町五六番地
印刷所　常磐印刷所

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
振替東京一六一一七
電話日本橋三五一一・六六四八・三七八一